竹堂（たけだう）　儒者【姓名】齋藤馨。字は子德、通稱は順治【生歿】文化十二年十月生れ、嘉永五年（一八五二）閏二月十一日江戸に歿す。享年三十八【閲歴】仙臺の人。世々伊達氏に仕へた。幼時江戸に出でて增島蘭園に學び、後、昌平黌に入り、業大に進んだ。ついで關西地方を遊歴して鄕に歸り、再び江戸に出で、塾舍を下谷相生町に置き、徒を聚めて教授した。藩侯その名を聞き、擢んでて儒員となさうとしたが、竹堂時に病床に在り、竟に起たなかつた。【著作】竹堂游記二卷○讀史贅議二卷○竹堂文鈔六卷（正續に分れ各三册、竹堂の文集である）。　〔佐久〕

竹柏會（ちくはくくわい）　歌人の團體【成立】佐佐木弘綱、その庭に竹柏樹（なぎ）を植ゑて、竹柏園と號した。子信綱その號を襲ひ、明治二十四年弘綱の歿後、多くの門人を指導し、團體を作つて竹柏會と稱した。【解說】明治二十九年同人の機關雜誌「いさゝ川」を出した。同三十一年同誌を廢して「心の花」（別項）を發行し、出版部・通信部を設け、現今に至つてゐる。各地に支部を有し、奈良支部は雜誌「奈良文化」を出してゐる。また同人の歌集「心の華叢書」を刊行し、昭和五年三月までに四十四卷に達した。同人の數は二千を超えるが、中にも出版部を主宰せる石榑千亦を初め、小花清泉・川田順・齋藤瀏・下村宏・印東昌綱・山下陸奥・前田福太郎・兒山敬一・片山廣子・白蓮・栗原潔子・津輕照子・小金井素子等現に世に聞えてゐる。明治二十七八年の交、新詩社（別項）及び根岸派（根岸短歌會參照）と並んで、新派和歌の勃興に方つて結ばれたのであつて、その歌風は清新といふことを標榜してゐる。又一つの歌風で會全體を拘束することをせず、作者それぞれが獨自の歌風を持つことを重んじてゐるので、會員の中から多くの個性的な歌人を出してゐる。　〔佐佐木〕

竹生島（ちくぶじま）「龍神物の謠曲」を見よ。

竹婦人（ちくふじん）　淨瑠璃作者・俳諧師【本名】未詳。通稱天滿屋仁左衞門【別號】俳號岩本乾什。外に吳丈・滿足庵・千歲庵・鷹一叟等。竹婦人は淨瑠璃小唄等の作名。【歿年】寶曆九年（一七五九）二月十七日歿、享年八十。【墓所】淺草寺地中人丸堂前【閲歴】壯時は吉原江戸町一丁目の娼家天滿屋の主人で、土佐節に長じ、且つ俳諧を山本子英や貴志沾洲等に師事してこれを能くし、通人として知られてゐたといふ。また半太夫節を以て初代十寸見河東（藤十郎）とも親交があつたらしく、河東が半太夫から分離獨立した際に盡力し、文才に富んでゐたところから、その詞作をも約したと傳へる。彼が初代河東のために始めて作つた曲は「提灯紋盡」（享保四・五年か）かと思はれる。享保五・六年頃と覺しき「禿萬歲」なども古い。かくて五十歲に近き頃（一說に破產して）に、剃髮隱居して淺草北馬道和泉院（俗に箱地藏）地內（一說に、始め淺草竹門に住すといふ）に住み、趣味生活に入り、俳諧の點者を業とし、傍ら淨瑠璃・小唄等の詞章を作つた。河東節の詞章は、二代河東のために作つたものが多く、當時連續的に秀作を著はした。「水調子」「ぬれ扇」「いの字扇」等は、絕唱とまで稱美された。彼は又土佐節や半太夫節にも通じ、作詞者として最適任者といふべく、ために河東節は一段の光彩を放つた。かくて河東興隆の機運を助長し、遂に師流を遙かに凌駕せしめた功勞者の一人として記憶さるべきである。「雪解や八十年のつくりもの」の辭世がある。

門下では後に竹婦人の號を讓られたと傳へる竹島正朔（吉原名主仁右衞門）が知られてゐる。【作品】二十餘曲と數へられる中、主なるものを擧げる。○禿萬歲（享保五六年頃）○江の島（同八年前後か）○飛東瀨川（「一瀨川」とも書く。同十一年七月）○舜は一流の江戸紫露は門出の武藏鐙追善花がたみ（同十二年七月）○傾情水調子（河東節參照）○浮ぶ瀨（同十六年七月か）○ぬれ扇（同十七年か）○いの字扇（同十九年七月）○夜の錦（通說、竹婦人作。元文二年七月か）。

【參考】劇代集二代櫻田左交○中古戲場說（無石十種第二）○江戸節根元記愚性庵可柳（同上）○嬉遊笑覽○日本歌謠集成卷十一　〔秋葉〕

竹豐故事（ちくほうこじ）　淨瑠璃　三卷三册【著者】序に浪速散人一樂とある。「外題年鑑」（別項）の著者一樂子と同人であらう。傳未詳。【刊行】寶曆六年【諸本】新群書類從卷六・近松世話淨瑠璃集附錄（昭和版帝國文庫）所收。【解說】「今昔操年代記」（別項）を增訂しようといふ意圖に成つたものらしく、淨瑠璃好きの筑越翁といふ老人が東（豐竹）西（竹本）兩座贔屓の若者たちの望みに應じて物語るといふ形式で、淨瑠璃の發生・展開から兩座の發達を述べてゐる。上卷は「芝居濫觴並薪之能付櫓木戸等之事」（平城天皇の御代、南都興福寺南大門前說を採る）、「淨瑠璃操之來由並太夫受領之事」「三ケ津淨瑠璃流布並古流盛衰之事」「井上播磨掾並淸水理兵衞之事」「竹本筑後掾來歷並同播磨掾之事」の五章、中卷は「豐竹越前掾來歷並江戸肥前掾之事」「竹豐東西之流芝居繁昌之事」「名人上手下手三品評判之事」「名人之太夫達弟子中へ敎訓之事」「淨瑠璃語り萬心得之事」「五段續語り場役柄之事」「音曲狂言綺語並呂律五音十二調子之事」の七章、下卷は「淨瑠璃作者並近松氏之事」「三味線來由並寸法三筋糸調澤之字苗字に付る事」「操人形之故事並名人遣手附古今達人事」「淨瑠璃古今之序並當時之太夫名人之評」「兩座繁榮並逃助之字義事」の五章に分れてゐる。全體として「今昔操年代記」よりは系統的組織的になつて居り、中卷所收の藝談類や、下卷所收の當時の太夫の評言なども注目すべきものであらう。義太夫節及び人形劇隆昌期研究の資料として、「今昔操年代記」「淨瑠璃譜」「外題年鑑」（各別項）と共に必ず併せ見るべき書である。　〔增田〕

千曲川スケッチ（ちくさがはすけつち）　小品集【作者】島崎藤村【刊行】大正元年十二月、佐久良書房。後、藤村全集第二卷に收む。岩波文庫その他所收。【解說】千曲川にのぞむ信州小諸地方の、自然と人間生活を觀察した小品を集めてゐる。言葉通りペンとノートをもつて、自然の移り變りを一木一草の末までも描寫し、或は農村の社會生活の色々な斷面を寫生したものである。作者がその地方に在住した當時、それまでの浪漫的傾向から、現實主義の最初の自覺に到達しかけた頃の產物である。その或る部分は「破戒」（別項）の中に素描として用ひられ、全體の筋立に再構成されてゐる。簡素の美を愛し、勞働する下層社會の人々に接觸して、自らその一人として生きるべき覺悟を得たのも、この著作の成つた前後であると、後に作者自ら書いてゐる。全體を通じて十二章に分れ、各章とも數篇づつの小品及び感想を收めてゐる。この小品集の書かれたのは、ずつと以前、明治三十三年頃からのものであつたが、發表及び刊行は遲れて、大正元年冬、恩人吉村氏の息に贈るはしがきを附して單行本として出版した。發表以來、

長となり、子弟を敎授した。大正元年二月從四位を贈られた。【著作】逸史十二卷○草茅危言八卷○詩律兆四卷○非徵七卷　〔佐久〕

畜生腹（ちくしやうばら）　小說【作者】廣津柳浪【發表】明治三十年十月號「太陽」【刊行】柳浪叢書前編。現代日本文學全集（廣津柳浪集）所收。

【梗概】某火災保險會社員の重三郎は、戀女房といふ程でもないが、見染めて一緒になつたおもよと新世帶を樂しんでゐたが、四五日に迫つた妻の初產を前にして突然名古屋へ出張お近は、急に變つた圖々しい態度になつて、酒を呷るやら主人に言葉を返すやら、雇人としてあるまじい所作を見せるのだつた。重三郎は不快に堪へかねておもよに解雇するやうに迫つたが、おもよは「お產の時世話になつたから」とて、夫を宥めては涙ぐむばかりだつた。いつも泣顏ばかり見せる妻と、太々しく振舞ふ惡婆との間に、何か祕密な關係がなければならないと、重三郎は妻の不義といふやうな暗い想像をさへした。しかしおもよが夫にも打ち明けずお近の脅迫のまゝに忍從してゐるを中にした夫婦の氣持が、だん〳〵隔つて行く徑路の方が、無理がなくわれ〳〵の胸に感じられる部分となつてゐる。山男のやうな異常人の力造を用意して、おもよの苦悶を解決させてゐるのは、作者の趣味的反覆とのみ見られて、反つてこの作の眞實感を減ずるものではあるまいか。

【上演】花房柳外によつて五幕十一場に脚色され、明治三十一年四月東京川上座に、川上音次郎・佐藤蔵三等によつて上演され、後四十年四月東京眞砂座に再演された。　〔水木〕

んだが、その志にあらざる故を以て、藩主特に命じて儒員とした。時に二十三歲。即ち江戸に出で、古屋昔陽・岳東海に就いて學び、傍ら谷文晁に畫を學んだ。又京都に往き村瀨栲亭に就いて經學を修めた。三十八歲、多病の故を以て致仕、專ら風流に遊んだ。賴山陽・篠崎小竹・雲華上人等と交情最も厚かつた。竹田は才藝に秀で、詩文書畫はもとより、茶道・香道にも通じ、就中、畫技に長じ、一家の風を成した。【著書】「塡詞圖譜」。外に田能村竹田全集（圖書刊行會）一卷がある。　〔佐久〕

版を重ねて廣く讀まれてゐる。或る意味で、作者の代表的な著作の一つである。〔武藤〕

竹林抄　連歌集　十卷　【撰者】飯尾宗祇【名義】竹林七賢に象つて、優れた連歌の作者七人を選んだ集なるによる。【成立】文明八年　【諸本】京都帝國大學國語研究室本・内閣本・續群書類從本がある。【内容】高山宗砌・杉原賢盛（宗伊）。權大僧都心敬・法印行助・法眼專順・蜷川智蘊（親當）・能阿法師、以上七人の附句發句を選び、附句は四季・戀・雜の六部に部立して九卷までに收め、十卷に發句を部立なしに、四季の順で收めたものである。附句千八百十八句、發句二百八十三句ある。初めに一條兼良の序があり、末に宗祇の文明十八年臘月晦日一校し終つた由の識語がある。【價値】宗祇は、連歌の風調に於ける時代分けとしては、二條良基（別項）の頃を上古とし、梵灯庵（別項）の頃を中古とし、宗砌（別項）以下を當世とし、當世の作を最も進んだ庶幾すべきものとするので、その當世に於ける先輩中の最も優れた作者として以上の七人を選定し、その七人の佳作を選集したのが本集である。されば本集によつて、これ等七人の佳作と、同時に宗祇の庶幾する種類の作を窺ひ得る。宗祇は文明十一年の「老のすさみ」（別項）に於ても、更にこれ等七人の作中模範とすべき作、模範とし難い作を示してゐる。宗祇のこの選定によつてこれ等の七人が後世から連歌の七賢と呼ばれる。〔福井〕

竹冷　俳人　【姓名】角田眞平【別號】聽雨窓・頓々房・神田閑人・閑々人・半閑人・未閑人等【生歿】安政三年五月二日、駿河富士郡加島村柚木に生れ、大正八年三月二十日病歿。享年六十四【閲歴】明治五年東京に出で、沼間守一の門に在つて政治生活に入つた。區會・市會・府會・衆議院の各議員に列した外、東京市區改正局長として業績を殘し、又本業の辯護士以外、東京株式取引所理事を初め、幾多の會社の重役を勤めた。明治十三年、丈六庵一草と共に報知新聞に俳句を載せ、新聞紙上に俳句を掲載するの例を開き、沈滯せる當時の俳壇に何物かを齎す所があつた。爾來劇職の傍ら俳道に精進し、明治二十八年には、自ら主盟となつて尾崎紅葉・巖谷小波・岡野知十等と共に秋聲會（別項）を結社し、二十九年には、機關雜誌「秋の聲」（別項）を創刊した。かくて或は古俳諧の研究を發表し、或は新聞雜誌に執筆し、又は選者となり、講演會に蘊蓄を傾けたりした。竹冷は作句者としてよりも寧ろ史料の探究や俳諧の講說の方により多く勝れ、又松宇・洒竹と共に古俳書蒐集家として知られ、古俳書の散逸を防ぐと共に、これを善用して、斯道に貢獻するところがあつた。その文庫は竹冷文庫として次男竹凉に傳へ、現在は東大圖書館に收められてゐる。【編著】俳諧句合集○聽雨窓俳話○俳遊記○芭蕉句集講義○竹冷句鈔（竹冷會編）等。〔伊藤〕

智月　俳人　【姓】川井氏【生歿】未詳、但し千那の「白馬蹄」によつて寶永五年三月にはなほ存命であつたことが知られ、路通の「芭蕉翁行狀記」によつて推算して當年七十餘歲であつたことが知れる。【俳系】松尾芭蕉門【閲歴】近江大津の荷問屋川井某（佐右衞門と傳へる）の妻で、乙州（別項）の母である。「蕉門諸生全傳」には「生國山城宇佐の產、若年の頃何れの御所にか御局に宮仕す、歌路と云へり」とあるが詳かでない。元祿五年の「該林一字幽蘭集」に亡夫七回忌の追悼句があり、貞享四年の「ひとつ松」に、「獨寢や夜わたる男蚊の聲佗し」の句があるので、貞享三年頃に夫に死別し尼となつたらしく、又この頃までに芭蕉に入門したと思はれる。元祿三年には、芭蕉を幻住庵に訪ね、同年芭蕉は智月・乙州の新宅に越年したが（續蓑・勸進帳）、その翌年であらう、芭蕉が智月の家に立ち寄つた時、智月が形見を望んだところ、芭蕉が「六そぢの霜にむかふ人に形見を乞はれていと力なし、我先にしねとや」など興じ、幻住庵記を書いて與へた（芭蕉翁行狀記）。芭蕉病歿の時は、三七日に乙州の催しで宅に信仰の輩を迎へ、智月が形見を乞うた時芭蕉が乙州に與へた自畫像を懸けて追悼の句會を營み、毎七日盡七日に至るまで智月親子が各所の追悼俳筵に列席してゐる（同上）。「俳家奇人談」に引く許六の智月宛の手紙によると、芭蕉歿後、許六が五老井の芭蕉遺愛の古木を伐つて芭蕉像を刻んで智月に贈つてゐる。女流ながら近江蕉門中重きを置かれる人で、一家皆句に遊び、家も豐かな方で、惟然・路通の如きをも扶助したらしく、性質も慈愛に富む人であつたらしい。著作の知られたるものなく「近江人物志」には、「三道論の著あり」とあるが詳かでない。作風に就いては、許六は「智月は一筋見えたり。乙州より遙かに勝れたり。然れども仕習の朝より終焉の曉までの誹諧五色の中、ただ一色を染出だせり。これは女の風雅なればなり。彼が風雅の美をいはば生涯の句ひたすら智月と言ふ尼の句にして、女の形を能く顯はせり」（誹諧問答）と云つてゐるが、ほぼ當れる評と云つてよく、なほ理智に落ちる傾きがあると云へよう。【著作】

智月自畫讃

智月尼句集　大野洒竹編（俳諧文庫元祿名家句集）○智月尼俳句集　永井孤秋編（女流俳家全集）○蕉門名家句集（第三輯）安井小洒編

【參考】芭蕉翁行狀記　八十村路通○誹諧問答　森川許六○蕉門頭陀物語　建部涼袞○誹諧世說　高桑闌更○芭蕉翁反古文　文曉○俳家奇人談　竹内玄々一○蕉門諸生全傳　遠藤曰人○俳人百家撰　水谷川柳○俳林小傳　中村光久○俳諧人物便覽　三浦若海○近江人物志　滋賀縣教育會

稚兒觀音緣起　繪卷　【解說】蜂須賀侯爵所藏殘缺一卷。昔大和國の一老僧が長谷の觀音に參詣して、おのが後を繼ぐべき年若きもの一人を賜へと乞うた効があつて、遂に詩歌管絃にも秀でた一美少年を得たが、これ即ち奈良興福寺なる菩提院の十一面觀音の化身であつたといふ物語を描いたものである。繪は土佐吉光筆、詞は經朝卿筆と傳へられてゐるが、素より確かでない。その畫致から見れば鎌倉末に大成した土佐派の樣式を見るべきもので、製作の年代は遲くも南北朝を下るまい。この外になほ住吉豐後法橋の畫と傳ふる一卷もあるらしいが、前者との異同のほどは詳かでない。觀音の利生應化譚

も揃いた綺麗として、「地藏菩薩霊驗記」等と相并んで、時代信仰の所産としても興味あるものである。〔田中（一）〕

千里（ちさと）　歌人（中古三十六歌仙の一）【姓】大江【家系】音人の子、一説に玉淵の子。音人は、「本朝皇胤紹運錄」に阿保親王の子とし、大江氏系圖には本主の子、親王の孫とし、「公卿補任」には本主の子、母は中臣氏（阿保親王侍女）とある。【閲歴】元慶七年備中大丞、延喜元年中務少丞、二年兵部少丞、三年大丞に任じた。寛平年中自ら作る所の新舊の歌を奉るべき勅を承つたが、魂神安んぜず遂に病に臥した。身は儒門にあつて和歌を習はず、やむなく古句を捜つて歌を作り、別に自ら詠ずる所（十首）を加へ、百二十首の歌を奉つた。即ち「句題和歌」である。【作品】勅撰集に入る歌は古今十、後撰二、その他凡そ十三首、合計凡そ二十五首、一體に線が太く硬直な歌が多い。○句題和歌一卷。群書類從一七九所載本は文保二年六月參議藤の奥書と補遺の歌三十五首とがある。圖書寮所藏本（一册寫）は、大江千里集とあつて匡衡集を附してゐる。部類を春・夏・秋・冬・風月・遊覽・雜（圖書寮本雜別）・述懷の八に分ちて古句に和した歌百十四首（圖書寮本百十六首）があり、終に詠懷として十一首（圖書寮本十首）がある。初めに寛平六年四月二十五日散位從五位上大江朝臣千里（圖書寮本寛平九年、從六位上）とした眞名の序があり、二月十日勅を承つたとある。類從本にある補遺の内には、「罪なかりしかども人の事につきて暫く籠居すべき由ありし頃」弟の千古（式部大輔）に贈つた歌、伊豫の任にあつた時の歌、小野美材の許にて詠んだ歌等がある。〔西下〕

【參考】古今集目錄○中古歌仙傳○大日本史

二百十六番人の條○百人一首一夕話

綿屋新助（わたやしんすけ）「八幡祭小望月賑」を見よ。

知十（ちじふ）　俳人【本名】岡野敬胤【別號】正味【生歿】萬延元年北海道日高國様似に生れ、昭和七年八月十三日東京に歿す。享年七十三【閲歴】函館毎日新聞を振出しに、長く記者生活をした。この間俳句に趣味を持ち、明治二十八年九月、毎日新聞に「俳諧風聞記」を掲げ、俳壇に認められた。同年角田竹冷等と共に秋聲會（別項）を創立し、後これを脱退して雀會を起し、三十四年俳誌「半面」を發刊し、半面派と稱する一團を組織した。知十の俳諧に對する考は、子規が俳句も生活であるとしたのに反して、飽くまで俳句は趣味に生きるものであるとして其角の風を慕つた。後年江戸座の研究から小唄に興味を持ち、角丸商會の取締役たる傍ら、時々小唄に筆を染めてゐた。又酒井抱一の研究に造詣深く、野口米次郎氏の「抱一論」など、彼に負ふところが尠くない。【編著】也有全集（俳諧文庫）○一茶大江丸全集（別項）○晋其角○雨華抱一○俳趣畫趣○蕪村その他。〔伊藤〕

地上（ちじやう）　小説【著者】島田清次郎【成立】第一部は大正七年七月脱稿、翌八年六月新潮社より出版。第二部は大正九年二月、第三部は同十年一月、第四部は同十一年一月、何れも新潮社。後第一部は現代長篇小説全集（新潮社）第二十四卷に收む。

【梗概】〔第一部〕少年大河平一郎は正義を尚ぶ純心と、不合理を憎む熱情とを抱いて、何時かは世と人とを救はうと期してゐる。彼はもとは大河村きつての豪家であつた北野家の外孫であつたが、北野家は彼の叔父――母の兄の代で亡びて了ひ、彼の父大河俊太郎も彼が三歳の時死んで了つたので、今では母のお光と二人金澤の或る藝者周旋業者の二階借りをしながら、中學校に通つてゐた。當時の彼には吉倉和歌子といふ愛人があつた。其處へ突然冬子といふ女が現れたのが機緣となつて、彼等は春風樓に移り住むことになつたが、冬子は間もなく東京の有力な實業家天野榮介の妾となつて連れて行かれて了つた。さうして彼女は平一郎を引き取つて天野に世話をさせようとした。天野は元來お光と双生の同胞綾子の一生を狂はせた仇敵であつたが、冬子は素より何も知らなかつたのである。平一郎も何も知らなかつたし、和歌子との交際を變に不純視する學校に嫌氣がさしてゐた上に、和歌子は强ひられて他に嫁いで了つた時であつたので、寧ろ進んで上京した。が、天野の邸での生活と觀察とは、彼に虐げられた萬人の悲しみのために鬪はうといふ悲壯な決心を愈々强く振り起させた。〔第二部〕（本篇の主人公赤倉清造は、第一部の主人公平一郎の分身のやうな男になつてゐる）東京で羽振りのよかつた實業家三崎の世話になつてゐた赤倉清造は、正義觀と爆發的な激情とのために、自らその境遇を破壞して金澤に歸り、叔父の家からその市の商業學校に通學する事になつたが、辯論大會の演説が學校の忌諱に觸れて停學に處せられ、更に落第を餘儀なくされた爲め、再び上京して母が再緣してゐる小さな鼻緒職人の家に厄介になり、鼻緒製造の手傳ひから洋品屋の小僧、出版社外交員の下働きと轉々した後創作に志したが、全然認められないのに憤激して自殺を企て、そのためその家にゐられなくなつた母を擁して、一時鐵工場の職工となつたが、罷業を煽つたので其處も追はれて又金澤に歸つた。場面は三幕の戯話になる以前からの知り合ひであつた藝者小菊と自分の母とを殺して死刑に處せられた。彼はこの汚濁醜穢な人生は潔きもの正しきものの生きるに値しないところだと觀じ、自分も死ぬつもりで、この兇行を行つたのであつた。〔第三部〕（主人公は再び大河平一郎になつてゐる）彼は天野の邸を出た後半ば放浪的な生活を送つてゐたが、郷里の母が病に犯されて重態に陷つた爲め歸郷して看護に努める傍ら、土地の新聞社に入つて發送係を勤めた。その頃金澤の町には人間力に對する絶望と、それ故に徹底的な現實への信順を意圖する異端者の宗教が、市民の間に指彈されながら勢力を張つて醜態の限りを盡してゐた。さういふ行き詰つた地上生活の陰に勞働大衆の擡頭が靜かなる暴風の如く渦卷き起りつつあり、更にそれに對抗すべき資本家の大同團結を、天野榮介などが畫策してゐた。平一郎は母の病氣の漸く怠つた頃、たま〳〵金澤に歸つてゐた和歌子と能登方面に旅行して、社會主義者で長い間支那に行つてゐた明智豐之助と會ひ、その紹介で京都の某新聞に寄稿の約束が出來た爲め新聞社の發送係を罷め、次いでその新聞社から招聘されて京都に移つた。擡頭する社會主義的風潮にも必ずしも滿幅の賛同は感じられなかつたし、能登への旅行中もう一度彼の胸に歸りかけた和歌子も結局歸つては來なかつたし、更に彼の戀した緑といふ女も、彼女の暗い過去を卑下して彼の熱情を完全には受け容れなかつた。彼は勢ひ孤獨を感じずにはゐられなかつたけれども、やがてそれも萬人のために生き、萬人のために死ぬる覺悟の自分の運命と達觀した。〔第四部〕（主

俳作と　同時に宗祇の庶幾する種類の作を窺ひ得る。宗祇は文明十一年の「老のすさみ」（別項）に於ても、更にこれ等七人の作中模範とすべき作、模範とし難い作を示してゐる。宗祇のこの選定によつてこれ等の七人が後世から連歌の七賢と呼ばれる。〔福井〕

竹冷（ちくれい）　俳人【姓名】角田眞平【別號】聽雨窓・頓々房・神田閑人・閑々人・半閑人・未閑人等【生歿】安政三年五月二日、駿河富士郡加島村柚木に生れ、大正八年三月二十日病歿。享年六十四【閲歴】明治五年東京に

智月（ちづき）　俳人【姓】川井氏【生歿】未詳、但し千那の「白馬蹄」によつて寶永五年三月にはなほ存命であつたことが知られ、路通の「芭蕉翁行狀記」によつて推寡して當年七十餘歳であつたことが知れる。【俳系】松尾芭蕉門【閲歴】近江大津の荷問屋川井某（佐右衞門と傳へる）の妻で、乙州（別項）の母である。「蕉門諸生全傳」には「生國山城宇佐の産、若年の頃何れの御所にか御局に宮仕す、歌路と云へり」とあるが詳かでない。元祿五年の「詠林一字幽蘭集」に亡夫七回忌の追悼句があり、貞享（同上）。「俳家奇人談」に引く許六の智月宛の手紙によると、芭蕉歿後、許六が五老井の芭蕉遺愛の古木を伐つて芭蕉像を刻んで智月に贈つてゐる。女流ながら近江蕉門中重きを置かれる人で、一家皆句に遊び、家も豐かな方で、惟然・路通の如きをも扶助したらしく、性質も慈愛に富む人であつたらしい。著作の知られたるものなく「近江人物志」には、「三道論の著あり」とあるが詳かでない。作風に就いては、許六は「智月は一筋見えたり。乙州より遙かに勝れたり。然れども仕習の朝より終焉の曉まぐべき年若きもの一人を賜へと乞うた効があつて、遂に詩歌管絃にも秀でた一美少年を得たが、これ即ち奈良興福寺なる菩提院の十一面觀音の化身であつたといふ物語を描いたものである。繪は土佐吉光筆、詞は經朝卿筆と傳へられてゐるが、素より確かでない。その畫致から見れば鎌倉末に大成した土佐派の様式を見るべきもので、製作の年代は遲くも南北朝を下るまい。この外になほ住吉豐後法橋の畫と傳ふる一卷もあるらしいが、前者との異同のほどは詳かでない。觀音の利生應化譚

人公は、野島民造といふ名前になつてゐる）「新しい世界への道」といふ作品によつて、一躍文藝界思想界の若き明星となつた彼は、以前友人の中谷と一緒に暮してゐた頃親しくしてゐた中谷の妹艷子が、兄の破滅と妹の病氣とを救ふために藝者となつてゐるのと逢つてゐた所へ、飯坂榮子に斬り込まれた。併し彼女がその場で自殺して了つた爲めに、危く殺人の嫌疑をかけられようとしたのを、艷子の小菊が身を以ての證言によつて僅かに免れることが出來たけれども、その事件のためそのまゝ日本に止まることは、やがて彼自身の破滅でなければならないやうになつたので、獨り淋しく外遊の途につくことになつた。小菊は横濱埠頭まで彼を見送つて別れ難い別れを別れた。かういふ事件の直接の動機となつた飯坂榮子といふ女は、古くからの社會主義運動の闘士飯坂利助の娘で、矢張り當時の日本の思想界に非常な勢力を有つてゐた吉川博士の令孃眞珠と、猛烈に戀を奪ひ合つた結果、一度は民造と約婚の間柄にまでなつたのであつたのに、父の一存からその許婚を破棄された女なのであつた。

【批評】「地上」といふ題名が示してゐる通り、この書は地上に於ける人間生活のあらゆる斷面を描き盡して、其處に澱んでゐる卑陋と醜惡と虚僞と弱小と淺薄と不合理とを剔出し、それ等を拭拂し去つた後の、崇嚴と高貴と輝かしさと博大な愛との世界を髣髴させようとする意圖の上に打ち樹てられてゐる。理想主義的傾向小説の一つであるが、其處に示された著者の理想への火のやうな情熱と、現代社會惡乃至人間惡に對する燃えるやうな反抗と輕蔑と、露骨大膽を極めた戀愛愛慾の描寫とに最も著しい特色を示してゐる。筆力も強いし、作品の局面も廣いし、その廣い局面のいろいろな部分に優れた描寫の見られるところも少くはないが、全體にラフな感じと餘りに放埒を極めた材料の無整理と、それにも拘らず矢張り材料の不足から來る同一題材の繰り返しとが目に着き過ぎる。人物の傀儡化も如何に傾向的なものとしても著し過ぎるし、作品の構造も餘りに通俗小説的な型と奔放さとに流れ過ぎながら、四部それぞれの間には類似點共通點が多過ぎ、且つ四部相互の關係が、即き過ぎた部分を多く有ちながら、必ずしも有機的になりきつてゐない。殊に作品全體を貫く著者の理想主義が、人道主義と社會主義とをつきまぜたやうな、一種特異な形貌は有ちながら、それが餘りに空想的であり過ぎる上に、主人公がさうした理想を屢々口にし、さうした理想への激しい情熱に燃えてゐる割合に、生活的實質的には何もしてゐないために、ただ空疎な大言壯語と理想主義的感傷とを感じさせるだけのものになつて了つてゐることと、作品全體に抽象的な思念や概念的な議論の多過ぎることとは、一番大きな缺點になつてゐる。併し二十歳前後の青年の作であることを考慮に入れるならば、この作の持つ缺點は十分に首肯されるであらう。而してブルジョア的理想主義が行き詰りかゝつて、當然新しい屈折が必要とされた大正後半期初頭に、上記の如きやゝ進歩的な理想主義を、通俗味の多い形式に結びつけて、且つは俚耳に入り易い抽象的談理を情熱的に强調したことが成功の因であつたのであらう。この書はその第二・三部の如き、當時としては滅多に見られない初版に、それぞれ二萬部づつを刷つたといふ程の賣行きを示した。それだけ同じ傾向形式の作品を多く作り出させる機運を作つた譯で、この書はその作品としての價値よりも、寧ろさうした歴史的價値に、より多くのものを有つたものと云ふことが出來る。【附記】この小説は、初め五六百枚で完結の豫定であつたが、後、豫定を變へ、三部作とする考で第一部を完成出版したが、第二・三部とも壓倒的な好評を得たので、更に稿を繼いだが、第四部は未完成に終つた。作品としても第一部が最も勝れてゐる。なほ本書の出版に就いては生田長江の力に負ふ所が多い。

【參考】大正文學十四講 宮島新三郎 〔片岡〕

痴人の愛（ちじんのあい） 小説 【作者】谷崎潤一郎【發表】大正十三年三月から同十四年七月までの間に、大阪朝日新聞及び雜誌「女性」所載。【刊行】大正十四年、改造社。谷崎潤一郎全集第二卷所收。

【梗概】河合譲治は、眞面目ではあるが情痴に脆い而も金に不自由のない人物である。彼はナオミ（奈緒美）といふ少女のあどけなさと異國的な軀つきに興味を覺え、やがては妻にする心組みで、理想的な女に育て上げようとして、贅澤に、思ひ切つてハイカラに育てていつた。かうして彼女は近代型の娘に成熟するに伴れ、その日本人離れのした肉體の美しさに譲治は益々魅力を感じ、彼女の言ひなりに唯々として從つていつた。同時にナオミの周圍には、多くの異性が集つて來た。が、譲治は彼女を束縛するやうな事はなく、女優か混血兒かと人から言はれたりするのを寧ろ得意に感じさへした。ナオミは彼女に近づいて來る若い男達の間で思ひのまゝに振舞つた。其處には不良少年がゐた。外國人がゐた。彼女はその身内に眠つてゐた娼婦性が、活々と眼覺めて來ると共に、譲治に對するヒステリックな强情も劇しくなつて來た。やがてナオミは彼女の父であり兄であり、そして夫である譲治を眼中に置かなくなり、いつか彼の眼を盗んで淫蕩な生活に浸るやうになつた。そこで彼女を取卷く青年達との不倫な關係が知れて、一悶着あつたのを機會に、譲治は從來の放縱な生活を建て直さうとしたが、それも彼女の反對で崩れてしまつた。ところが丁度その前後に彼女の不行跡が暴（あば）れて、譲治と衝突したことから、ナオミは家を飛び出してしまつた。譲治は、すべてを犠牲にして狂氣の如く女の跡を追ひ求めた。勝ち誇つた彼女は間もなく彼の前に再び姿を現はし、全身から發散する官能の薫りによつて彼を誘惑した。彼女の言葉は、彼にとつて命令的であつた。その厭倒的な媚態の下に彼は無條件に跪かせられた。そしてそれから後の譲治は、全くナオミに征服され切つた生活を送つてゐる。

【批評】これは、一種の私小説とも言ふべきもので、筋は割合に單純であるが、着想に作者獨特の趣があつて、愛慾の奴隷としての主人公の病的なまでに異常な情念が、妖麗な女性の肉體の總てから放射されるリズミカルな肉感的芳香の下に惱まされながらも、なほそれから脱し得ずに引摺られてゆく有樣が歴々と描き出されてゐる。殊に譲治がナオミに引き付けられて次第に深みに陷つてゆく過程が、微細な局所にまで觸れつつなだらかに述べられてゐる。同時に又、それだけナオミといふ性的方面に解放された近代女性の一典型としての風姿が明かに物語られてゐる。彼女は無思想な代り、感覚的に濃厚な魅惑を持つ明朗

な現代女性の日本文學上に現はれた顯著な先驅である。其處には彼女を中心に、全篇に亙つて、性的・感覺的な近代味が盛り込まれてゐる。この作品の特色は、さうした雰圍氣から釀成されてゐる官能の薫りが、強く漂つてゐることであり、生活遊戯としての主人公等の生活の中に、單なる遊戯以上の切實さを感じさせること、即ち彼等自身、生活の藝術化を具現してゐることであり、これを具體的に言へば、女主人公の肉體を通して官能の美しさを歌つてゐることである。〔湯地〕

遲塚麗水（ちづかれいすい）　小說家・紀行家・新聞記者　【本名】金太郎　【別號】紫波仙・踏破仙、俳號松白　【閲歷】明治元年十二月二十九日駿河沼津町小諏訪に生る。父鎰三（後に保）は、幕臣であつた。明治八年上京、湯島學校・櫻池學校に學ぶ。この頃から幸田露伴と相知つた。十六年父の死と共に具に貧苦を味ひ、一時新聞賣子となつた事もある。その間漢詩文英書を獨學した。十七年菊池松軒の塾に入つた（夜學）。翌年教員試驗に及第して小學教員となつたが、更に遞信省雇員に轉じ、二十二年に及んだ。この年「風流佛」の發刊が緣となつて露伴と舊交を溫めたが、露伴から勸められて初めて小說を書いた。「新佐世姫」（讀賣新聞所載）がこれである。二十三年露伴を介して森田思軒と知り、思軒の紹介で報知新聞社に入つた。同年「歸省」（別項）の一篇を發表して名聲を得た。二十七年日淸戰役には從軍記者として渡鮮。同年十二月都新聞社に入り、社會部長・理事を歷て現に同社の編輯顧問である。大正三年冬支那山東に遊び、十五年三月再び渡支、揚子江岸を上り、三峽を經、重慶から成都に入り七月歸朝。昭和二年三月より七月まで南洋諸島に遊歷、同四年四月から七月にわたり滿鮮蒙古を巡遊した。【著作】〔小說〕青板碑○餓鬼○巨人石○蝦夷大王○南蠻大王○半月城○照日の松○大和武士○さんざ時雨○月夜鴉○名馬小輝○白菊御殿○紅蓮白蓮○金蘭簿○氷柱越○書眉樓。外數十篇〔紀行〕歸省（別項）○不二の高根○露分衣○ふところ硯○陣中日記○日本道中記○山水供養○山東遍路○新入蜀記○南洋に遊びて等。【批評】麗水の小說は、その傑れた作に至ると紅・露に迫るものがあり、文章の美と浪漫的雰圍氣で讀む者を魅する。だが虛心に見ると、その小說は終にその紀行文に及ばない。明治の紀行文學は麗水の筆によつて詩の域にまで達した。彼はその先驅者であり大成者の一人であつた。麗水の文學史上の地位は、小說家としてよりも紀行文學家として定まるであらう。〔柳田（泉）〕

千瀨川一代記（ちせがはいちだいき）　合卷　六册　合二册前後二卷【作者】柳亭種彥【畫工】前卷歌川國貞、後卷歌川貞鑿【刊行】文政二年、丸文板。成稿は前々年、文化十四年春の由、序文に見ゆ。【題材】安永七年刊の洒落本、田螺金魚作の「契情買虎之卷」（別項）を原據としてゐる。序文に、「何もさまの御存のかの虎の卷の威をかりて」と見えてゐる。柱も「とらの卷」となつてゐる。

【梗概】〔前卷〕武藏の國に雌雄の白鹿がゐたのを、獵師柴作が銃殺する事を發端とする。その鹿の怨念が當時武家奉公してゐた柴作の娘八重咲及びその戀人小姓花澤鳳次郎に憑りうつり、共に手を携へて主家を出奔させる。二人が柴作の家に往く途中、賊紫髭の巾子藏等に襲はれ、鳳次郎と別れ別れになつた八重咲は、偶然父に救はれる。その時、柴作が巾子藏の手下を銃殺したが、その銃聲に驚いて、鳳次郎の體内に宿つてゐた鹿の怨念が離れ去つたので、鳳次郎は正氣に復り、前非を悔いて直ちに主家に歸參した。さうと知らない八重咲は、鳳次郎は死んだものとのみ思つてゐる。間もなく柴作が病氣となる。その療養のために、八重咲は身賣りして、鎌倉化粧坂伏見屋の千瀨川太夫となる。しかし鳳次郎と、また病死した父の菩提のために、ただ座敷のみを勤める。或る夜、自害しようとするのを遊客五曉のために止められ、さうすることが却つて鳳次郎の靈に背く理を意見される。二人はいつか深い仲となる。これも鹿の怨念のなすところであつた。五曉とは、鎌倉の絹商人五大屋實右衞門の一子曉之助のことであるが、これ以來實直な性質が一變して、遊蕩三昧に身を持ち崩し、つひに勘當となる。その借金やら、またもとの賊巾子藏、今は遊客として通ひつづけてゐる桐自滿軍次が、千瀨川に振りつけられてゐる妬みやらで、五曉は桶伏の刑に處せられることになつた。五曉には許嫁があつた。浪人澤瀨丹太夫の娘小梅である。これは五曉に知らせずに、父實右衞門が懇望してゐたのである。丹太夫は實右衞門を桶伏の前に伴ひ來て、中にゐる五曉のために金を貸して呉れと賴む。實右衞門は外の事ならともかく、勘當した伜のためには貸す譯にはゆかぬと斷る。丹太夫は義理のために、必ず五曉を救はうと言ひ切る。その下心には、娘小梅に身賣りをさせる覺悟がある。それを對手に告げなかつた。實右衞門が貸金を拒絕したのにも深い理由があつた。もと實右衞門は前主實右衞門に事へた番頭であつた。前主は一子貫太郎の放蕩を怒つて勘當し、番頭の錢助を妹に添はせ、跡目に据ゑて實右衞門の名を名乘らせたのである。かういふ次第であるから、實右衞門はわが實子をして主家に疵つけさせては濟まぬと、棄てて顧みないのである。しかも、その本心を丹太夫に語らなかつた。〔後卷〕丹太夫は小梅を大磯の藝子に賣つて、その金で五曉の借金を償ふ。遊女屋の亭主の俠氣ゆゑに、その金も必要でなかつたが、丹太夫は義理を重んじて、無理にも請取らせる。しかも、救はれた五曉は、その金の出所を知らないだけに、却つて手代丁助が武家に金を奪はれたことから邪推して、丁助もろとも丹太夫を疑つてゐる。千瀨川もまた五曉を救ふために大磯に住みかへて、今虎御前と呼ばれて嬌名が高かつた。そこへ、五曉が來て逢つた時、また桐自滿の手にかゝつて難儀する。それを虎の馴染客夢蝶が助ける。夢蝶とは夢野屋蝶兵衞であるが、實は勘當後奮發して、京で身代を立てた貫太郎のことである。こゝで、五曉はもとの千代見屋の仲居、今は大磯に住みかへてゐる歌仙の計らひで、はじめて、許婚の小梅、即ち藝子かほるに逢つて、丹太夫の金の出所を知つた。この歌仙は、もと丹太夫の家に奉公して小梅のお附となつてゐた女であつた。そこへ、丹太夫が丁助を伴つて來る。五曉は丁助とともに、丹太夫を疑つたことを陳謝する。また實右衞門も來合はせて、丹太夫に本心を語る。貫太郎は實右衞門に對面して、五曉の勘當赦免の計らひをする。さういふところへ、鳳次郎も來て、桐自滿に繩をかける。桐自滿は巾子藏時代の舊惡の外に、丁助の金をも奪つたのである。千瀨川は鳳次郎の生存を知つて宿運を悟り、また小梅に對する義理を思つて剃髮する。鹿

の怨念全く離れ去つて、靜かに念佛三昧に日を暮らすこととなつた。

【構想】この作は田螺金然の洒落本「契情買虎之卷」（別項）の輪廓を藉りて筋を立ててゐる。その薄倖の太夫瀨川を千瀨川とし、瀨川の馴染客五郷を五曉とした。尤も瀨川を無理から身請けした桐山と、瀨川を欺いて拉れ出して慘殺した桐山の僕軍次とを、一人のうへに合せて、桐自滿軍次としたのである。その「虎之卷」は、もと鳥山檢校が松葉屋の太夫を身請けしたといふ有名な事實を脚色したものであるが、種彥は殆どその原事實に介意することなく、或る意圖の下にこの作の飜案を試みたのである。種彥の一つの意圖は、原作に見る欺瞞または殺人の醜さ、瀨川の一念が幽靈となつて出現するいたましさを避けることにあつた。故にこの作では、わづかに鹿の怨念といふ事とし、また事件の葛藤も、たとへば丹太夫に對する金の出所の疑ひも、實右衞門に對する父の愛を缺くとの憎しみも、皆本心を知らぬ誤解から出づることであつて、篇中桐自滿以外一人の姦惡がなく、また桐自滿の手下の死以外殺人の一事項がないのは、種彥の用意であつた。この事は篇中に於ても、作者の言葉として聊か言ひ漏してゐる。その結果夢蝶といふ捌役を設けて原作と全く違つためでたい結末を告げさせたのである。種彥の第二の意圖は、原作にない義理を加味する事であつた。即ち丹太夫が武士として守る義理、實右衞門が故主に對する義理である。事件としては、稲伏の前の二人の對談の一節が、その焦點をなしてゐる。種彥は、この一節の大略を近松の作「山崎與次兵衞壽門松」の將棊の段から轉用してゐる。しかし、種彥はその原作以上に、義理を重く書き現はしてゐる。この作では、吉原を化粧坂とし、深川を大磯としてゐるが、これはその頃の戲作の常であるが、千瀨川を大磯に住みかへさせて、虎といふ名で呼ばせることに於て、原作「虎之卷」との緣を重ねさせるほどの事は、必ずしも種彥の意圖の主要なものでない。彼一流の細かい技巧の一つと數へて置けばよい。〔山口〕

知足（ちそく）　俳人　【姓名】下里吉親（男蝶羽の時より下郷（しもさと）と改む）。通稱、初め三五郎、後勘兵衞。商號千代倉【號】寂照庵・蝸廬亭【生歿】寛永十七年生れ、寶永元年（一三六四）四月十三日歿。享年六十五【法名】知足庵寂照湛然居士【墓所】鳴海驛東細根山墓地【系譜】男蝶羽は通稱二郎太夫、習習軒順宗風和居士と云ひ、寛保元年十一月十二日（六十五）歿。二男龜世は通稱次郎八、三代目を繼ぎ、藏六岡鐵叟道肝居士と云ひ、明和元年九月十八日（七十七）歿。四代目如羽（後常和）は、天明五年二月二日（七十一）歿。弟の蝶羅は分家し、安永五年五月六日（五十四）歿。五代目學海、六代目傳芳、七代目葆光、八代目咫尺以下連綿として今日に及んでゐる。【俳系】松尾芭蕉門。【閲歷】尾張鳴海の酒造家である。延寶五年頃既に談林俳諧に入つてゐたが、貞享四年冬「芳野紀行」の旅の芭蕉を、その家に留めて親しく教を受けた。芭蕉は、この旅行に出る時の吟「旅人と我名よばれん初時雨」の句に、謠曲「梅ケ枝」の一節を節附のまゝ附して、後から知足へ送つてゐる（千鳥掛・赤册子）。かくて知足は鳴海の中心俳人となり、尾張蕉風の開拓に與つて力あつた。母永參、子辰之助、女つね、孫女しゅん、蝶羽妻等一家揃つて句に遊んだ。芭蕉も「此所は名古屋・熱田に近く、桑名・大垣へもまた遠からず、千鳥がけに行通ひて殘生を送らん」（千鳥掛序）と云つた位、この地方に蕉風を弘通させるに好都合の足だまりで、上方への往返には屢々立ち寄つた。こんな關係から、鳴海には知足を中心として蕉門俳人が多く、その中、知足と言（ぎゃくげん）・安信・自笑・如風・重辰が鳴海六俳仙と稱せられる。著作に、「千鳥掛」（別項）がある。

【參考】いらこの雪（知足五十回忌、蝶羽十三回忌集）下郷鐵叟○合歡のいびき下郷蝶羅○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤曰人○俳林小傳中村光久○芭蕉庵春秋中島素蓮○俳諧人物便覽三浦若海○蕉門名家句集（第拾貳）○千代倉一族の俳諧無麿庵主（ひむろ三七・八・九和露莊雜話）〔萩原・志田〕

千楯（ちたて）　國學者　【姓】城戸（きど）【通稱】蛭子屋市右衞門・城戸市・範次・萬治郎【號】紙魚室・蠹室【生歿】安永七年に生れ、弘化二年（一五〇五）九月二十一日歿す。享年六十八。【墓所】京都黑谷【閲歷】京都の人で、室町錦小路で書肆を營んでゐた。蛭子屋市右衞門・城戸市等は商人としての通稱である。業務の傍ら久老及び宣長について和歌を學び、後、歌學者として一家を成し、子弟に教授してゐた。【著書】和歌布留の山ぶみ四卷四册（大江廣海の序は文政七年十二月刊。詠歌の參考書で、先づ題を擧げ、用語を蒐集し作例を示してある）○雅言通載抄四卷四册（文久元年九月刊。榎並隆璉の「雅言通載」を拔萃したもので雅言の辭書である）○紙魚室雜記二卷（日本隨筆大成第一期卷一に收む。隨筆で、著者の考說、諸家の談話の筆記、諸書の拔萃等であるが、歌學に關するもの最も多く、中には國語に關するものもある）○萬那備能廣道一册（文化十三年十一月本居大平の序。藤井高尙の序もある。刊。初學者のために國學の大要を記したもの）○勅撰和歌初句類聚四卷（天保十一年成る。勅撰歌集の簡單な索引）○記紀萬葉類語集二十卷（記紀萬葉の語の詳しい索引）〔龜田〕

父歸る（ちちかへる）　戲曲　一幕　【作者】菊池寛【發表】大正六年一月、「新思潮」。【刊行】戲曲集「父歸る」、菊池寛戲曲集。その他多くの選集に收められてゐる。【初演】大正九年十月東京新富座。市川猿之助等。

【梗概】黑田賢一郎の父親は、二十年前、三人の子と母とを捨てて情婦と共に出奔して了つた。元々彼は入婿で、母方に相當あつた小金も、その道樂のために消費して了つてゐたので、母子は途方にくれ、築港に身を投げたのを救はれると云つた始末であつた。その後長男賢一郎のあらゆる苦勞と努力のお蔭で、一家は細々ながらも安らかに暮してゐた。次男と妹も中等學校を卒業させてゐた。一日、賢一郎が役所から歸つてくると、續いて歸つて來た小學教員をしてゐる弟が、父の舊友であつた校長が町でどうも彼等の父親らしい人を見かけたといふ噂をする。妹は、見慣れぬ老人が家の前で覗いてゐたなどといふので、怪訝に思ふ間もなく、表の戸があいて入つて來たのは、矢張り父親その人であつた。母親は流石に喜びをかくし切れず父親を迎へる。弟や妹も挨拶する。父親も今はいかにもうらぶれた姿で、賢一郎に歸つて來たから賴むといふ。が、その時見向きもしなかつた賢一郎は語氣荒く、自分達に父親はない。一家が今生きてゐるのは皆自分の力だ。父親は既に二十年父親としての權利を放棄して了つたのだと言つてはねつける。母や弟妹達が宥めたり哀願したりしても斷乎としてきかない。これを

きいた父母は思はず、昔の親の威光をもつて怒りはするが、一々胸に響く言葉に、遂に悄然として立ち去つて了ふ。が、流石に肉親の愛とうらぶれて泊りの金さへもたぬ父を思うて、弟と共に跡を追ふ。

【批評】作者の最も初期の一幕物であるが、戯曲形式の緊密さ、臺詞の切實さ、一絲のゆるみもなく、嵒々と人の肺腑を剔るの感があり、彼の作中でも代表的の傑作である。初演の時の感銘は異常なもので、ために日本創作劇勃興の最初の機運を作つたといはれる歴史的のものである。その後澤田等によつて、幾回となく演じられた。

〔關口〕

竹居清事（ちくきよ せいじ）　詩文集　【著者】翺之惠鳳（號竹居子）【成立】元は「竹居清事」と「竹居西游集」との二部があつたのであるが、文化の頃に、僧蕙周が「竹居清事」の名のもとに、二本を合併分類したもので、もと「竹居清事」は文が多くして詩が少く、「西游集」は詩が多くして文が少かつた。蕙周は二書を合併し、詩は詩、文は文と分類して、閲覽の便を期したと云つてゐる。「竹居清事」はその自序によれば、「前來詩文爲レ不レ少也、然而只以レ恐二其不一可レ足レ取レ之、遂且不二實停一舊章一焉、雖二間有一之、或出二於朋故識游覆瓿之餘一」と云つてゐる。これによれば、なほ多くの詩文のあつた事が想像される。本書を編したのは晩年になり自ら感ずる所があつたものらしく、末に乙亥孟夏日、竹居子とある。乙亥は康正元年であらう。守黑子即ち明の前監察御史張式之の跋がある。即ち「繫公偶帶二竹居集一、添得樓船萬丈光、示レ我猶同二劍出一匣一」といつてゐる。それは著者の友人蘭隱繫が、寶德三年遣明使の船に乘りて渡明した時に、この書を携へて行き、張式之に見せたものである。「西游集」は、著者が寛正五年に細川勝元の意を承けて、周防に游んだ時のものである。九淵龍睨・村庵靈彥・一條兼良等の寛正六年の序があり、景徐周麟の跋がある。一條兼良の序に、保壽寺の惟參が、大に翺之を崇敬し、この集を明人に紹介せんと欲したと云つてゐる。【解説】この集は五言古詩・七言律詩・五言絶句・七言絶句・賛・附載・序・論・記・說・題跋・對・銘・祭文・行狀・書を順次に分類收載してゐる。それで友人知人との交遊を見るもの多く、蘭隱が渡明する時に和した七言律詩、これを送つた序、保壽寺の惟參に寄せた詩等も見られる。論には、德政論一篇が收められてゐる。この論は嘉吉元年九月、將軍足利義政が天下に德政を布いた時に草したものである。行狀には東福寺聖一國師の行實等が收められてゐる。守黑子の「竹居清事」の跋、村庵靈彥・一條兼良の「西游集」の序を見ても、この集の眞價が窺はれる。

〔鷲尾〕

秩都紀南子（ちつとき なんし）「平秩東作」を見よ。

池亭記（ちてい のき）　漢文隨筆　【作者】慶滋保胤【成立】末に、「天元五載孟冬十月、家主保胤自作自書」とある。【諸本】本朝文粹卷十二所收。【解説】外に、前中書王兼平親王の「池亭記」もあるが、短文で、從來注目せられなかつた。保胤の「池亭記」が注意せられて來たのは、「方丈記」との關係を云々せられてからである。即ち「方丈記」の結構は本書の摸倣であるといふ（方丈記參照）。保胤の池亭は「拾芥抄」の諸名所部に據ると、「六條坊門南、町尻東隅、保胤宅云々」と見えてゐる。内容を見るに、二十餘年間東西兩京を見るに西京の荒廢は天爲であつて人爲ではない。東京の四條より北は來北も西北も人口は稠密である。貧富の者、共に住んでゐる。併し卑者にして富家の傍にゐる者は高笑もならず、進退常に懼れ、烏雀が鷲鷹に近づいたやうなものである。又勢家に壓倒せられて居宅を離れる者もある。鴨川は水害が多くて、その邊には耕作には不適當の田畑がある。京内は次第に荒れて、四條・坊城以南は畑となつてゐる、誠に怪しむべきである。余はもと居所がない。土地は高價で買へないが、六條以北に荒地を求めて宅とした。そこに小池を掘り、池西に小堂を建てて阿彌陀佛を安んじ、池東に小書庫を建て、池北の低い家に妻子を住ませた。四季各々趣がある。五十にならうとして初めて小宅を求めたのである。官位は天に任せ、心は山中に在つて佛に歸依してゐる。念佛し讀書し古人を友とし獨り自ら樂しむ。村上帝の應和以來、世人は好んで宏大の邸を建てる。高樓に住み奢侈を盡すとも人生それ幾時か。聖賢は仁義禮法を以て家を造る。故に燒けない。盜賊も犯さない。子孫以て愼めよと言つてゐる。

【附記】兼明親王の「池亭記」（本朝文粹卷十二所載）は、やはり、老後、池のほとりに小亭を營んで、悠々自適する心境を、その亭の内壁に記したといふ小篇である。文末に、「己未之年（天德三年）十二月二日記之」とある。

〔山岸〕

知得齋雜考（ちとくさい ざつかう）　隨筆　一卷　寫　【著者】村田幸政【解説】國學上の雜考七篇を收めたもので、（一）皇國御傳之事、（二）聖廟嘗家之事、（三）古今三鳥三木之傳之事、（四）鵲歌之事、（五）禮節之事、（六）旌旗之事、（七）掛軸之事等これである。末の二篇には挿圖を以て說明に便してゐる。序跋はない。

【著者小傳】村田幸政。號は知得齋、又は芙蓉軒、通稱喜右衛門。信濃の人。國學者で家に多くの圖書を藏した。弘化四年の震災に壓死したといふ。享年不詳。著述に「芙蓉樓漫抄」「今人錄」「書字雜纂」等があるが、今散逸して傳はらぬ。

〔和田〕

千鳥掛（ちどり がけ）　俳諧集　二冊　【編者】千代倉知足遺稿、同蝶羽補正【本名】俳諧千鳥掛。内題には上卷に「俳諧千鳥掛集」、下卷に「俳諧知登利懸」とある。【名義】素堂序によると、鳴海の知足亭に芭蕉が泊つてゐた時、芭蕉が「此所は名護屋・熱田に近く、桑名・大垣へもまた遠からず、千鳥がけに行通ひて殘生を送らん」と云つた言葉を知足が覺えてゐて、本書の題號としたのである。【刊行】正德二年か。【諸本】享和三年の「俳諧續七部集」に收められた。元祿名家句集（俳諧文庫）・蕉門俳諧前集（俳書大系）所收。【内容】知足が編輯を完成せずに歿し、男蝶羽が追補完成して出版したもので、正德二年六月素堂の序があつて、この事情を述べ、末尾に蝶羽の「笈銘」があつてその中にもこの事情が述べられてゐる。連句二十四卷（歌仙・歌仙表・三ツ物・附句等）、發句四百三十三、外に「笈銘」一篇を收めてゐる。上卷は冬の連句發句、春の發句連句の順に集め、下卷は夏の連句發句、秋の連句發句の順に集めてあつて、連句は凡て知足生前のもので凡てに知足が加はつて居り、發句には芭蕉歿後の作と思はれるのが少くなく、これ等には蝶羽の追補したものが多いかと思はれる。連句の作者は鳴海俳人が多く、又芭蕉の加はつてゐるものが十一卷ある。發句の作者は貞門談林の人もあつて、廣く新古に亙つてゐる。

【價値】貞享頃の芭蕉との交會の作を中心として、知足一代の風交上に得た作を集めたもの

の言葉として聊か言ひ漏してゐる。その結果夢蝶といふ捌役を設けて原作と全く違つためでたい結末を告げさせたのである。種彥の第二の意圖は、原作にない義理を加味する事であつた。即ち丹太夫が武士として守る義理、實右衛門が故主に對する義理である。事件としては、稲伏の前の二人の對談の一節が、その焦點をなしてゐる。種彥は、この一節の大略を近松の作「山崎與次兵衛壽門松」の將棊の段から轉用してゐる。しかし、種彥はその原

既に談林俳諧に入つてゐたが、貞享四年冬「芳野紀行」の旅の芭蕉を、その家に留めて親しく敎を受けた。芭蕉は、この旅行に出る時の吟「旅人と我名よばれん初時雨」の句に、謠曲「梅ケ枝」の一節を節附のまゝ附して、後から知足へ送つてゐる（千鳥掛・赤册子）。かくて知足は鳴海の中心俳人となり、尾張蕉風の開拓に與つて力あつた。母永參、子辰之助、女つね、孫女しゆん、蝶羽妻等一家揃つて句に遊んだ。芭蕉も「此所は名古屋・熱田に近く、桑名・大垣へ

學者として一家を成し、子弟に敎授してゐた。

【著書】和歌布留の山ぶみ　四卷四冊（大江廣海の序は文政七年十二月刊。詠歌の參考書で、先づ題を擧げ、用語を蒐集し作例を示してある）○雅言通載抄四卷四冊（文久元年九月刊。榎並隆璉の「雅言通載」を拔萃したもので雅言の辭書である）○紙魚室雜記二卷（日本隨筆大成第一期卷一に收む。隨筆で、著者の考說、諸家の談話の筆記、諸書の拔萃等であるが、歌學に關するもの最も多く、中には國語に關するものもある）○萬那備能廣道一冊（文化十三年十一月本居大平の序。藤井高尙の序もある。刊。

訝に思ふ間もなく、表の戸があいて入つて來たのは、矢張り父親その人であつた。母親は流石に喜びをかくし切れず父親を迎へる。弟や妹も挨拶する。父親も今はいかにもうらぶれた姿で、賢一郎に歸つて來たから賴むといふ。が、その時見向きもしなかつた賢一郎は語氣荒く、自分達に父親はない。一家が今生きてゐるのは皆自分の力だ。父親は既に二十年父親としての權利を放棄して了つたのだと言つてはねつける。母や弟妹達が宥めたり哀願したりしても斷乎としてきかない。これを

のと思はれるので、宛ら知足一代の風交俳諧集の觀がある。一面からは鳴海を中心として尾張に於ける芭蕉を知るに重要なものであると共に、蝶羽の追補と相俟つて尾張蕉門を窺ひ得るものである。冬の發句の初めに新古諸家の千鳥の句六十七句を集めてゐるのも、一部千鳥句集の如き面目を持つ。以上の點から蕉門俳諧集の中でも、特色あり價値あるものの一と云へる。〔萩原・志田〕

茅野蕭々（ちのせうせう）　詩人　【本名】儀太郎　【閲歴】明治十六年三月、長野縣上諏訪町に生る。同四十一年、東京帝國大學文科大學獨逸文學科卒業。第三高等學校教授に任じ、轉じて慶應義塾大學文學部獨逸文學科主任教授を勤む。初め茅野暮雨と號して「明星」に短歌を掲げ、同派歌人中の尤であつた。詩人としても同派の立場に立ち、詩風の獨自的なるものに到らなかつたが、その作風は概して内觀的で、餘りに小心にして自己内訌的であつたが故に、儕輩の詩人北原白秋や木下杢太郎のやうに一派の鮮かな詩風を特立するに及ばず、その詩集は一册も存せず、僅に「リルケ詩抄」一卷の譯集があるのみである。獨逸文學研究家としては、戯曲小説及び詩歌の鑑賞に於て卓れ、戯曲小説類の飜譯もあり、文學史的述作もあるが、最もその特長とする處は抒情詩の鑑賞、リルケ、ショルツ論等にある。〔日夏〕

千葉龜雄（ちばかめを）　評論家　【閲歴】明治十一年九月、山形縣酒田町に生れた。仙臺第一中學、早稲田大學史學科、外國語學校等をいづれも中途退學し、國民英學會を卒業した。「文庫」「新聲」「日本及日本人」の記者を經て、日本新聞・國民新聞・時事新報・讀賣新聞等の社會部長、讀賣新聞編輯局長、東京日日新聞の學藝部長、編輯顧問を經て、現在、同新聞の學藝課長である。著書は「惱みの近代藝術」「歐洲文藝十二講」等であるが、文學評論は頗る多く、常に歐米の近代文學に親しむと同時に、日本の文學にも眼をはなさないので、すぐれた外國文學の紹介者であると同時に、常に時代の思潮に對して、博大な理解と妥當な見識とをもつて、文藝批評界の指導的地位を保持しつつある。婦人問題に對しても關心淺からず、この方面に於ても多くの評論がある。その他、ジャーナリストとしての長い經驗は、彼の興味と關心を、現代社會のあらゆる問題に注がしめてゐる。又驚くべき多讀家を以て知られてゐる。〔平林〕

千葉群記（ちばぐんき）　讀本　五卷　【作者】爲永春水　【畫工】歌川國安　【名稱】詳しくは「星月光輝千葉群記」といふ。千葉氏の内亂が忠臣名士群集して星月つひに光輝する、めでたい結末を告げるといふ謂ひである。【刊行】文久元年。

【梗概】享德の頃、その昔兩總に君臨した千葉介常胤十世の孫滿胤は、故あつて家督を弟胤直に讓つて市河に隱棲したが、間もなく胤直その子宣胤相次いで病歿したので、長臣圓城寺胤尙は滿胤の子實胤、惟胤に後を繼がせようとし、一族佐原時連は下總馬加の城主馬加輝胤の子康胤を推さうと圖り、こゝに兩派の爭亂が起つた。併し時連は巧に滸我公方の加勢を請うたので、勝は馬加方に歸し、市河は落城して滿胤は自刄し、實胤兄弟は胤尙と武石忠著に護られ、河鯉の巨田持助を賴つて城を脫れ、馬加の義臣大須賀高寧の家來奈平によつて武藏多加谷の里に伴はれたが、その夜時連の手先紫尼といふ妖術使に攻められ、實胤は忠著と惟胤は胤尙と別々に逃れた。やがて馬加輝胤は滸我公方に申し請ひ、その子康胤の名を孝胤と改めて家督に定め、千葉の城に據つて威を振つたが、その歿後奸臣時連は孝胤の妹隻貝姫に想を寄せ、孝胤を押し込めて主家を奪はんと企み、紫尼の計を容れて先づ澁川列厚を用ひて忠臣高寧を殺させ、藪坂四淮次、圓留市父子に高寧の子乙女助、小文二を擊たせた。併し二人は能く難を遁れて、小文二は老僕以智助を奈平の許に遣し、乙女助は高寧の靈によつて時連の謀を知つた孝胤の手に救はれ、その内命を受けて武藏に實胤兄弟を尋ねゆく途中、弟に再會したが互に知らず、拜領の鎧櫃の中から實胤の許婚隻貝姫が現はれた。

【解説】安政五年十月の漢文の序がある。「鎌倉大雙紙」「關東古戰錄」、その他の舊記に見える、享德・康正の頃、北總の千葉氏が兩家に分れて爭うた史實に名を藉りて、架空な孝子節婦の物語を作り上げたといふのであるが、構想は寧ろ「南總里見八犬傳」（別項）に倣ひ、それを縮小した觀がある。讀本として本格的な表現を持ち、趣向の變化に隨つて相當な興味を繫いでゐる。初め數輯を重ねて大成する企てであつたが、初輯で未完に終つた。〔笹野〕

千葉胤明（ちばたねあき）　歌人　【號】有明子・春翠　【出生】元治元年六月十一日佐賀縣久保田に生る。【家系】父は千葉元祐といひ、桂園派の歌人、母は仲子といふ。【閲歴】三歲の時父に死別し、爾後母の下に嚴格な教育を受け、佐賀中學・長崎師範等に學んだが、卒業せずして上京、藩主鍋島邸に寄寓し、佐野常民の紹介にて高崎正風の門に入り和歌を學ぶ。明治二十五年、判任官見習として初めて御歌所に出仕し、次いで錄事となり、同三十七年、參候となり奉行を仰せ付けられ、次いで寄人となり現在に至る。藏書中「大鏡」「伊勢物語」の古寫本は著名である。その歌には、「ありあけの月かげふみて田に畑にゆく人おくる庭鳥のこゑ」の如き優雅の作が多い。〔相原〕

千引（ちびき）　國學者　【姓名】大石氏。初名貞見。通稱傳兵衞・源左衞門。字道和　【家號】星廬・野廼舍　【生歿】明和七年江戸本所横堀に生れ、天保五年（一八三四）九月十三日歿した。享年六十五　【法名】千引信士　【墓所】芝西應寺町光明山法泉寺　【閲歴】父田隣は下野烏山藩士であつたが、故あつて致仕し、江戸に來り本所に住した。千引は幼より歌を好んで冷泉風を慕ひ、又博く古書を讀んで獨習に努めた。後千蔭の門に遊んで名を千引と改め、專ら萬葉の古調に心を委ね、氣韻高い歌を詠んだ。人物穩雅、人と爲り謙退辭讓の風があつた。【著書】日中行事略解一卷（文政三年刊。增訂故實叢書所收。禁中日々の行事を書いた「日中行事」（後醍醐天皇御撰）に舊記を引いて註解を加へたもの）、○大鏡觀短抄　○水鏡觀短抄　○元言梯　○榮華物語抄　○榮華物語考難註等。〔石村〕

千尋日本織（ちひろやまとおり）　浮世草子　六册　【作者】卷頭にある團粹（團水）の序には、「此全篇をなすものは東武の神秀法師なりとぞ」とあり、卷末の書肆起牛なるものの跋には、「爰に花洛の隱士湖十高散人集むる六卷」と見えてゐる。神秀法師と湖十高散人は同人かと思ふと、東武と花洛と居住地が違つてゐる。神秀も湖十高散人も、如何なる人か知り難い。【刊行】寶永四年　【諸本】近世文藝叢書第五所收　【解説】卷一は六章、その他は各八章より成る。各章悉く讀み切りの端物で、計四十

六の說話から出來てゐる。說話の種類は定まらない。古い傳說には小栗判官傳說がある。多くは實際の事實又は巷說を材としたものと思はれる。說話の地域は京都を中心とした近畿地方と、江戸を中心とした東國地方が大多數であり、欺僞盜みに關する話、狐狸の怪に關するものが多く、義理又情事に關するものもある。要するに、諸國咄(別項)の系統に屬するものである。叙述描寫は强ち拙とはいへないが、取立つべき秀でた點もない。〔藤村〕

道俣神（ちまたのかみ）　神話　【名稱】衢神とも書く。「ちまた」は道股（ちまた）で岐路の義であり、從つて「ちまたのかみ」は、岐路・衢を守護する神を意味する。【本質】岩石崇拜の系統を引いた民間信仰に基く神で、本來、岩石に偉大な力を認め、これに邪靈の侵入を阻止する靈力があるとしたところに、この神の發生本質があるとなす說（次田潤氏「古事記新講」）がある。しかしそれでは何故にこの神が特に岐路を守るとせられるかの理由が分明でない。恐らく船戸神・來那斗神と同じく、自然民族が他者（よそもの）即ち自己が形成してゐる社會集團以外の者共（異民族でも死界の者でも）を、呪力・魔氣の濃厚な存在とし、それ等の侵入し來る要路を、或る超自然的存在の力で守りたいといふ欲求から生れた神であらう。船戸神・來那斗神は、邪靈を阻止する作用力をおのれの名とし、道俣神はこれを阻止する場所を名としてゐるといふ差別はあるが。そしてその超自然的存在をいかなるものに觀ずるかに至つて、或は岩石崇拜が拉し來られ、或は石によつて神の所在を標識する觀念信仰が誘導せられ、或はまた生殖器崇拜が物を言ふのであると思ふ。道饗祭の祝詞に現れる八衢比古（やちまたひこ）・八衢比賣は、民間に信仰せられた道俣神が、公事としての道饗祭に於て、男女對立の二神格に分化したものであらう（この點に關しては「古事記傳」に詳しい）。

【神話梗概】「古事記」に、伊邪那岐命が黃泉國から歸つたあと、穢い國に行つた身の汚れを潔めるために、筑紫の日向の橘小門（たちばなのおど）で禊祓をしたとき、投げ棄てた褌（はなま）から道俣神が化生したとあり、また若し岐神を「ちまたのかみ」と訓むとするなら、「日本書紀」一書に、伊弉諾尊が、伊弉册尊によつて遣はされた八つの雷を桃の實で追ひ退けた後、杖を授じて、「自」此以還雷不敢來（これかたにえにじ）」と揚言したその杖が、ちまたの神であるとなしてゐる。

【解說】褌から道俣神が化生したといふ觀想は、これが股引のやうに左右に岐れてゐるからであり、杖がこの神とせられたのは、旅行と杖との關係から來てゐるのであらう。一體岐路・衢は、旅人にとつて大切な場所ゆゑ、そこを守る神は、その職能の分化過程に於て、屢々旅行を掌る神、旅人を守る神となる。希臘宗教に於ける岐路神ヘルメス（Hermes）の如き、メキシコ宗教に於ける岐路神ヤカテクトリ（Yacatecutli）の如き、みな一面に於ては旅行を掌る神、旅人を守る神である。そして旅行に杖は附物ゆゑ、ヘルメス及びヤカテクトリは杖を主要な標徵とし、メキシコ人は、野山に宿を定めると、携へ來つた杖を積み上げて、これに血を灌ぎ、花を捧げ香を焚いて道中の安全を祈つた。日本神話に於て、杖が「ちまた」の神とされたのは、かうした事情から來てゐるのであつて、或る學徒が解したやうに、單に旅行者が杖を岐路に立て、その倒れる方向によつて進路を定めた風習だけに由來してゐるのではあるまい。〔松村〕

【參考】Keightley, T.: *Classical Mythology*. ‖ Révill, A.: *The Native Religions of Mexico and Peru*. ‖ Spence, L.: *Myths of Mexico and Peru*. ○神代史の研究津田左右吉○日本古語大辭典松岡靜雄

地名字音轉用例（ちめいじおんてんようれい）　語學書　一卷一册【著者】本居宣長【刊行】寬政十二年【諸本】本居宣長全集卷四・增補本居全集卷九所收【內容】地名に宛てた漢字に普通の字音と異なるものを集めて、その轉用した例を類別して擧げたものである。即ち(一)ウの韻を加行の音に轉じたもの、相模・相樂等。(二)ンの韻をマ行の音に通用したもの、伊參・安曇・南佐等。(三)ンの韻を奈行に通用したもの、信濃・丹波・讃岐等。(四)ンの韻を羅行に轉じたもの、播磨・駿河等。(五)入聲フの韻を同行の音に通用したもの、愛甲、揖保等。(六)入聲ツの韻を同行に通用したもの、秩父・伊達等。(七)入聲キの韻を同行の音に通用したもの、色麻・安直。(八)入聲クの韻を同行の音に通用したもの、美作・信樂等。(九)イの韻をヤ行に通用、拜師・愛智等。(一〇)ア行の音を同行に通用、英虞・愛智等。(一一)カ行音を同行に通用、菊池・感口等。(一二)サ行音を同行に通用、設樂・宿久等。(一三)タ行音を同行に通用、筑紫・安曇。(一四)ナ行音を同行に通用、寧樂。(一五)ハ行音を同行に通用、阿拜・多配等。(一六)マ行音を同行に通用、各務・高目等。(一七)ヤ行音を同行に通用、鹽冶・勇禮等。(一八)ラ行音を同行に通用、等力。(一九)雜の轉用、伯耆・對馬等。(二〇)韻の字を添へたもの、紀伊・由宇等。(二一)字を省けるもの、武藏□、但□馬等。【價値】右の如き例は、後世に字音を訛つたやうに考へられてゐた故、さうでなく初めから字音を轉用したものであることを明かにし、その轉用にも法則がある事を示したものである。これは全然事實に即したものであるが故に、この調査の結果は、後に著者が豫期しなかつた方面――字音の研究に頗る貴重な資料を與へた。義門の「男信」（別項）、白井寬蔭の「音韻假字用例」（別項）の如き、本書に負ふところ甚だ大なるものがある（尤も、これ等の書は、宣長の音韻に關する論と相反する結論に到達したのであるけれども）。〔龜田〕

茶をつくる家（ちやをつくるいへ）　戲曲　二幕【作者】松居松葉（松翁）【發表】大正二年十月「演藝書報」【刊行】後、松葉脚本集に採錄。現代戲曲全集・日本戲曲全集現代篇所收。【初演】大正二年十月、河合武雄一派の公衆劇團によつて帝國劇場に上演。

【梗概】〔序幕〕茶師、春日井家の臺所。春日井の老父友右衞門は小學校教師上野良造にすすめられて次男博造、三男春男、四男友次郎の三人をそれ〴〵家を出してやつた。長女お花までが七年前に家を出てしまつたが、それも上野の感化であつた。家には長男守之助が父を扶けて茶をつくる家業に勵んでゐる。併し不景氣のためもあつて不振續きである。老父は他所に出てゐる息子達の扶けを求めず、獨力でその恢復に努めてゐる。遂に思案に餘つたか、保險金目當てに焙爐場に火を放つて燒き拂つて了つた。次男博造は名古屋に女學校を建てる計畫をして、妻三代子を伴つて久し振りで父の家に歸つた。家出してから行方の知れなかつたお花までがふらりと歸つてきた。彼女は東京でタイピストをして成功してゐるといふ。友右衞門は自分で火を放つたこ

卓れ、戲曲小說類の飜譯もあり、文學史的述作もあるが、最もその特長とする處は抒情詩の鑑賞、リルケ、ショルツ論等にある。〔日夏〕

千葉龜雄（ちばかめを）　評論家　【閱歷】明治十一年九月、山形縣酒田町に生れた。仙臺第一中學、早稻田大學史學科、外國語學校等をいづれも中途退學し、國民英學會を卒業した。「文庫」「新聲」「日本及日本人」の記者を經て、日本新聞・國民新聞・時事新報・讀賣新聞等の社會部長、讀賣新聞編輯局長、東京日日新聞

寺胤尙は滿胤の子實胤、惟胤に後を繼がせようとし、一族佐原時連は下總馬加の城主馬加輝胤の子康胤を推さうと圖り、こゝに兩派の爭亂が起つた。併し時連は巧に濟我公方の加勢を請うたので、勝は馬加方に歸し、市河は落城して滿胤は自刄し、實胤兄弟は胤尙と武石忠著に護られ、河鯉の巨田持助を賴つて城を脫れ、馬加の義臣大須賀高寧の家來奈平によつて武藏多加谷の里に伴はれたが、その夜時連の手先紫尼といふ妖術使に攻められ、實胤

繫いでゐる。初め數輯を重ねて大成する企てであつたが、初輯で未完に終つた。〔笹野〕

千葉胤明（ちばたねあき）　歌人　【號】有明子・春翠【出生】元治元年六月十一日佐賀縣久保田に生る。【家系】父は千葉元祐といひ、桂園派の歌人、母は仲子といふ。【閱歷】三歲の時父に死別し、爾後母の下に嚴格な敎育を受け、佐賀中學・長崎師範等に學んだが、卒業せずして上京、藩主鍋島邸に寄寓し、佐野常民の紹介にて高崎正風の門に入り和歌を學ぶ。明治二十五年、判任官見習として初めて御歌所に

千尋日本織（ちひろやまとおり）　浮世草子　六册【作者】卷頭にある團粹（團水）の序には、「此全篇をなすものは東武の神秀法師なりとぞ」とあり、卷末の書肆起牛なるものの跋には、「爰に花洛の隱士湖十高散人集むる六卷」と見えてゐる。神秀法師と湖十高散人は同人かと思ふと、東武と花洛と居住地が違つてゐる。神秀も湖十高散人も、如何なる人か知り難い。【刊行】寶永四年【諸本】近世文藝叢書第五所收【解說】卷一は六章、その他は各八章より成る。各章悉く讀み切りの端物で、計四十

とを押し隱し、あくまで放火されたものと言ひ張つて保險金を下げて貰はうとしてゐる。博造はその不心得を諫め、自火として屆けて父の放火の嫌疑を免れさせようと努める。その道理ある勸めをも友右衞門は理解しない。博造は父に賴む金策のあての外れたのは勿論で、自分の持つてゐる資產を一切賣り拂つて沒落する父の家を救はうと決心する。〔二幕〕春日井家の外庭。博造は妻三代子と一緒に父の家に踏み止まつて、田園生活にかへらうとしたが、その空想が破れかける。三代子は夫に話さず、もとの都會の知人に、新しい職業を夫のために求めた。今まで默つてゐたお花は、自分が友次郎兄に賴んでやつたものと僞はつて、東京の舊主人から二千圓を前借して父の家を救ふ。彼女は實は新橋から藝妓に出てゐたので、今までの生活を嫌うて父の家に歸つたものの、再び身を捨てて父の家を出て行くのである。友次郎は妹の不心得を責めて行かせまいとするが、お花は父や長兄達が事情を知らずに喜んでゐる顏を見返りながら、悄然と出て行つてしまふ。

【批評】この作の書かれた當時の、婦人解放の問題に關する作者の見解がうかがはれる。教育者の博造夫婦にも出來ない犧牲的行爲を、無知な賤業婦お花が平氣でやつてのける。而も人にその功を誇る氣もない。弱い無知な女性の强さと犧牲的精神を暗に訴へかけようとしてゐる。舞臺技巧はリアリズムに終始して、一脈の田園情調を漂はせてゐる。お花の性格は河合武雄の藝風にあてて書いたものである。作者の代表作であり、又當時に於ける異色ある作品の一つであつた。〔武藤〕

茶鼎座頭（ちやかぎざとう）　能狂言　【解說】惣檢校の所で、妙音講があると云ふので、大勢の檢校、勾當が集つて來る。やがて酒宴が開かれ、惣檢校は平家を語り、菊市は舞を舞ふ。そのうち世上で流行る茶の湯に倣ひ鼈ぎ茶をして鼈ぎ當てようとて菊市に茶を運ばせる。これを見た通りがかりの者が茶の中へ懷中の胡椒を混ぜる。とは知らず皆々鼈ぎ廻し、茶でないとて怒り出す。通りがかりの者は、一層面白がつて檢校たちを打擲するので、盲人共はお互に打合つて喧嘩になるといふ筋。驚流の外に見當らぬ。盲人虐めの惡戲を種にしたもので、狂言としてはやゝ惡落ちに類するものであるが、盲人虐めの事は月見座頭（つきみざとう）にも作られてゐる。月見座頭の方は、下京に住む或る勾當が、世上の月見の晩に野へ出て蟲の音を聞いてゐると、上京の者が來あはせ、勾當を相手に酒を酌み交した上、わざと突き當つて散々に引廻して嬲り物にすると云ふのである。月見座頭の方は比較的新しい作のやうで、驚流のみの狂言ではないが、驚流では傳右衞門派のみの狂言になつて居り、また「薩州侯ノ御狂言」となつてゐた。「茶鼈座頭」の方は、早く寛正五年の糺河原勸進能にも演ぜられた古い狂言である。その番組には、「茶カギザトウ」と記されてある。〔龍田〕

著到狀（ちやくたうじやう）　古文書　【解說】軍勢の催促に應じて馳せ參じたる時、大將に差出す文書。裏判のことが多い。然る時は、大將がその奧か端或は裏に證判（別項）を加へて下附する。後證のためである。なほ著到狀は公武の諸番等にもある。〔伊木〕

長井出羽彈正藏人貞頼、今月七日馳參于御方候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言
元弘三年五月八日　貞頼（眞判）

御奉行所
承候了（花押）足利尊氏

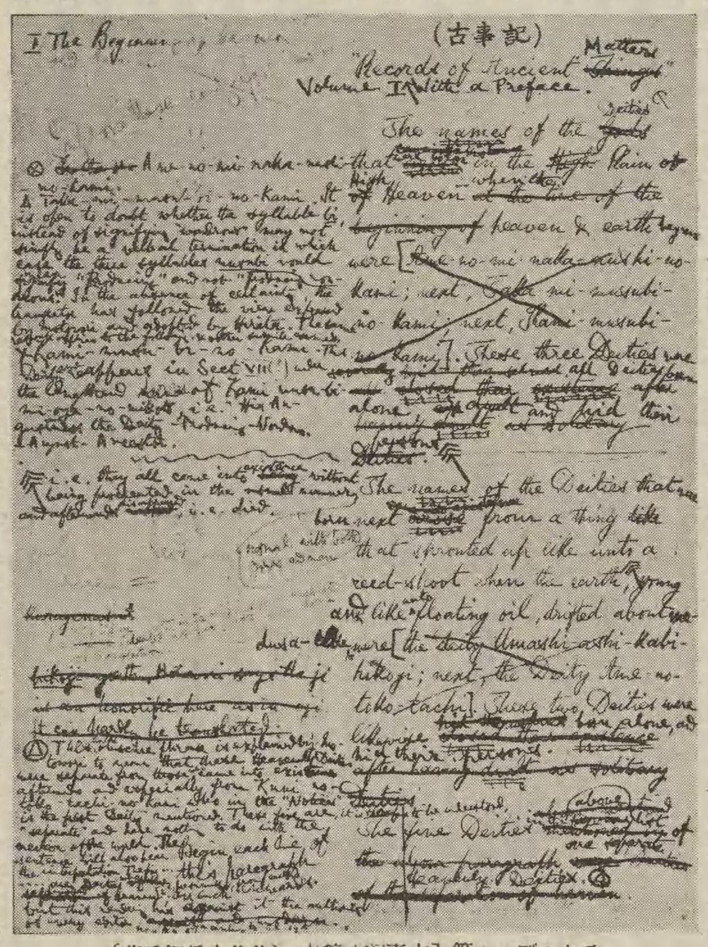
茶傾腹立顏（ちやけいひぞりがほ）　浮世草子　四册　【作者】西澤一鳳、書中の署名には西澤與志とあり、又本文中には朝義・朝與志・與志など見ゆる。【刊行】寶永五年。寶永二年六月二十五日と書出しにあれば、成立はその頃か。【解說】廓と茶屋、傾城と茶屋女に關する所謂諸分を書いた書である。地女と遊女との心中不心中の論、起請文のこと、色里詞・紋日・年中行事・流行唄などの諸件が記されてあり、また不繁昌の茶屋女に騙されて通ひ、多くの金銀を失ひたるもの、金銀を盜みて宥されたと、事實ありもせぬことを記させた一札を取り置きたる客などの說話もある。文學としては見るに足らないが、諸分の記述には參考すべきことがある。〔藤村〕

茶壺（ちやつぼ）　能狂言　【內容】中國のさる法師の下人が、毎年の如く栂尾へ茶を購ひに上り、その歸路昆陽野の宿で酒に醉ひ、街道の眞中に寢てゐると、洛中に住む水破が見つけて茶壺を奪ふ。やがて下人が眼を覺し互に爭ふ。そこへ目代が出て來て仔細を尋ねる。下人も水破も同じことを物語る。目代は困つてその茶の緣所を問ふ。下人は舞で答へると、水破も亦見習つて同じやうに舞ふ。目代は二人に連舞を命じ、昔から論ずる物は中からとれと云ふから、身共が取るとて持つて行くので、二人は橫着者やるまいぞと追ひ入る。【影響】水破物の典型で、近年にも、岡村柿紅によつて歌舞伎の所作事に應用されてゐるが、寶永の「落葉集」、丹前出端の中の大和屋甚兵衞が「難波津壺論」などもこれに據つたものらしく、「昆陽野の宿の遊女が、袖をしづ〳〵〳〵ともひかへて、今樣は朗詠しほり萩を歌うて、押へて酒を强ひられた」などと見えてゐる。しほり萩の名は、この狂言によつて、世に聞えてゐるが、「白石紳書」に、「催馬樂のふし世に傳はらず。それを臺德院殿、持明院殿へ御所望有しに、今は、ふし奏（かなで）に傳はらぬ由を申されしを、何とぞ詮議して御うたひなされとありしに、しほりはぎといふ狂言の謠ひ物は、催馬樂を似せたる由なれば、その節奏に斟酌して謠ひ候由を、子息の持明院申されしなり」などとあつても、狂言小歌の中に未だ見當らないのは不審である。一曲の結末、爭ふものは中から取るの俗諺も、昔からの諺であつたらうが、例證は見付からぬ。いづれ戰國策に、所謂鷸蚌の爭漁夫の利となるの類と同じく、古くからの俚諺であらう。〔龍田〕

茶の子餅（ちやのこもち）　噺本　一册　【作者】唐邊僕とある。【名稱】明和九年刊の山風の「話稿鹿の子餅」（別項）や、安永二年刊の江岳庵の「再來餅」や、同年刊の宇津山人菖蒲房の「興話飛談語」（別項）に因んで、餅の緣語による名稱である。【刊行】安永三年【解說】七十七話より成るが、殆ど新しいもののみである。漸く實演との關係が密接となつて、落語としての體裁を具へて來た。從つて今日寄席で上演する落語の枕に、落ちに用ひられるものが多い。例へば、麁相醫者が脇差と摺子木とを取り違へて佩き、患家で恥を搔いて我が家へ駈けつける積りで、隣家に入つて隣の女房を叱るのは、「堀の內」にやゝ趣向を變へてはゐるが語られてゐる。また「異見」の、親仁が惣領の値踏み癖と、次男の地口癖とを矯正しようと異見をすれば、惣領は早速、「世話にも御異見五兩堪忍十兩と申せども、此御異見はど

う安く積つても三百兩が物はございます」と述べ、次男も、「兄貴、三百兩とはいけんの鐘か」といふ話も、今日なほ聞く所である。かうした落語に言語上の洒落の多いことが氣附かれるが、深川萬年町の老人なるが故に、聖德太子の千百五十回忌を、昨日今日のやうに言はせるなど、理窟臭いものもあらはれてゐる。併し一般には新作である所に興味も引かれる。噺本としては注目さるべきものであらう。なほ後編として「いちのもり」が安永四年に出版せられてゐる。〔小柴〕

チャムブレン (Ba.il Hall Chamberlain) 言語學者【號】王堂 (Basil Hall を譯したもの)【生歿】西暦一八五〇年(嘉永三年)十月十八日、英國ポーツマウス (Portmouth) に生る。昭和七年八十三歳。【閲歴】父は海軍中將であつた。チャムブレンは、七歳のとき、彼を教育するために自らギリシヤ語・ラテン語を學んだといふ賢明にして慈愛深き母を失ひ、八歳から十六歳まで、佛國ヴェルサイユ (Versaille) なる祖母の許に養はれ、こゝの學校に入つて種々の國語を學び、長ずるに及んで文學に志したが、父の希望に從つて十八歳の時、英國の銀行に勤務した。然るに過度の勉强により眼病と神經痛とを得たので、彼は醫師の勸告に從つて遠洋航海の途に上つた。即ち支那茶を積むべき帆船に乘り、喜望峯を經てオーストラリヤ (Australia) に着き、ついで上海に到り、更に米國船に乘つて長崎に來り、次いで横濱に上陸した。これは西暦一八七三年(明治六年)五月のことで、彼二十四歳の時である。かくて彼は東京に來り、芝西久保廣町の靑龍寺に住し、濱松藩士荒木氏に就いて和歌・物語の講義を聽き、次いで鈴木庸正に就いて萬葉・枕草子より始めて謠曲・狂言を聽き、橘東世子(橘守部の嗣子多照の室)に從つて作歌を學ぶなど、日本文學の研究に精進した。明治七年七月築地海軍兵學寮の教授となり、十三年九月病氣の故を以て辭任歸國した。併し幾ばくもなく來朝し、翌十四年四月再び兵學寮教授となつたが、翌十五年六月辭任退職、その翌年十二月勳五等に叙せられた。十九年、時の文部大臣森有禮によつて文部省に招聘せられ、次いで同年四月。外山正一博士の推薦によつて帝國大學文科大學の教師となり、日本語及び博言學の教授を擔當した。明治二十三年三月許可を得て健康保全のため歸歐した。その歸國に際して、大學から「歐洲に於ける極東殊に日本語學の現況及び將來」に關する調査を囑託せられた。然るに同年九月に至り、病氣の故を以て解傭を願ひ出で、同年九月許可せられ、前に囑託せられた調査も終に果すことが出來なかつた。翌二十四年三月七日、東京帝國大學名譽教師の稱號を贈られた。その後も屢々來朝したが、復又四十三年六月來朝して最後の研究旅行を試み、自己の藏書を日本に留むべき處置をなして、前後四十年に近き日本生活の精算をした。翌四十四年三月、彼が多年の功績により勳三等に陞叙せられ、瑞寶章を賜はつた。かくてその月、彼は思ひ出多き日本を永久に去つて、瑞西國ゼネヴァ湖畔に幽栖を求め、こゝに餘生を送り今日に至つてゐる。



チヤンブレン筆「古事記」稿本 (佐佐木信綱氏藏)

【人物】彼はその滯在中常に我が國の各地を旅行し、その足跡は千島の涯から琉球にまで及び、北海道の如き三度も渡り、その都度彼の研究は深さと廣さとを增した。又屢々歐洲に歸り、その都度各地を巡遊して見聞を廣め、殊に明治二十五年(1892)の歸國の際にはマニラの寺院に數十日滯在して、古く我が國に渡來した伴天連の遺書につき調査したこともあつた。彼は又旅行と共に絶えず讀書して、その研究を深めることを怠らなかつた。併しながら彼が壯年の頃害した健康は、再び恢復せず、二六時中病と戰つてゐた。彼は獨・佛・伊・西・露・日・鮮・支・ヘブリウ・希・拉等十餘ケ國語に達し、殊に日本語はその古典的修養から して最も典雅に美しく、歌語中屢々古語・雅語が交へ用ひられた程であつた。その日本の古典に關する理解力は、我が國の專門家に比して毫も遜色なく、よく我が古典を消化してゐた。彼は溫厚篤實な好學者で、眞に英國紳士の典型と云ふべきである。彼はその歸國に際し、多年蒐集した王堂文庫の和漢の珍籍祕書一萬一千卷は、これを利用する人稀なる歐洲に持ち歸ることは、學者としてなすべきことにあらずとし、藏書の全部をあげて上田萬年博士に讓り渡した如き、彼の人格を雄辯に物語るものである。健康のために專ら書齋にのみ籠つてゐたので、交友はあまり多くはなかつた。

【業績】彼は二十四歳にして來朝し、六十二歳最後に歸國するまで約四十年間、人世として最も盛んに活動し得る時代を我が國に過し、その間、讀書と研究旅行とにのみ沒頭したので、その業績には見るべきものが多い。〔日本特に國文學の研究とその紹介〕彼の日本文學の研究は、上代より近世に及び、その範圍極めて廣く、殊に「古事記」の英譯最も優れ、アストン(別項)の「日本書紀」、サトウ(別項)の祝詞の飜譯と並び稱され、日本上代文化を歐洲に紹介した最初の權威となつた。殊にその序論の部分には、古代日本の宗教思想に關して述ぶる所多く、神道復興の運動、夢に關する記述、神に關する傳說の評論等、幾多興味ある問題を提出してゐ

育者の博造夫婦にも出來ない犧牲的行爲を、無知な賤業婦お花が平氣でやつてのける。而も人にその功を誇る氣もない。弱い無知な女性の强さと犧牲的精神を暗に訴へかけようとしてゐる。舞臺技巧はリアリズムに終始して、一脈の田園情調を漂はせてゐる。お花の性格は河合武雄の藝風にあてて書いたものである。作者の代表作であり、又當時に於ける異色ある作品の一つであつた。〔武藤〕

茶襲座頭(ちやかざとう) 能狂言【解說】惣ウ」と記されてある。〔龜田〕

著到狀(ちやくたうじやう) 古文書【解說】軍勢の催促に應じて馳せ參じたる時、大將に差出す文書。裏判のことが多い。然る時は、大將がその奥か端或は裏に證判(別項)を加へて下附する。後證のためである。なほ著到狀は公武の諸番等にもある。〔伊木〕

長井出羽彈正藏人貞頼、今月七日馳參于御方候畢、以此旨可有御披露候、恐惶謹言

元弘三年五月八日　貞頼(御判)

人も水破も同じことを物語る。目代は困つてその茶の緣所を問ふ。下人は舞で答へると、水破も亦見習つて同じやうに舞ふ。目代は二人に連舞を命じ、昔から論ずる物は中からと云ふから、身共が取るとて持つて行くので、二人は横着者やるまいぞと追ひ入る。【影響】水破物の典型で、近年にも、岡村柿紅によつて歌舞伎の所作事に應用されてゐるが、寶永の「落葉集」、丹前出端の中の大和屋甚兵衞が「難波津壺論」などもこれに據つたものらしく、「昆陽野の宿の遊女が、袖をしづ〳〵〳〵漸く實演との關係が密接となつて、落語としての體裁を具へて來た。從つて今日寄席で上演する落語の枕に、落ちに用ひられるものが多い。例へば、龜相醫者が脇差と摺子木とを取り違へて佩き、患家で恥を掻いて我が家へ駈けつける積りで、隣家に入つて隣の女房を叱るのは、「堀の內」にやゝ趣向を變へてはゐるが語られてゐる。また「異見」の、親仁が惣領の値踏み癖と、次男の地口癖とを矯正しようと異見をすれば、物嶺は早速、「世話にも御異見五兩堪忍十兩と申せども、此御異見はど

る。後この序論の飜譯が、栗田寛・木村正辭・小中村清矩・飯田武鄕・黑川眞頼・井上頼庸等の批評を加へて、「日本上代史評論」(永山英夫譯)と題して刊行せられ(明治二十一年)、國文學の新研究の興る機運を促進する一原因となつた。その他、萬葉・古今・謠曲等を英譯した「日本上代の詩歌」(明治十三年)、日本に關する百般の記述をなした「日本事情」(明治二十三年)などもあつて、外人にして彼ほど日本語と日本文學に精通し、よく日本を世界に紹介したものは、恐らく他にないであらう。〔日本語學の研究〕彼は初め文部省に招聘せられた時、我が國語の辭書を編纂しようと志したが、故あつて果さなかつた。併し、文部省の命によつて「日本小文典」を編み、明治二十年四月、文部省から刊行した。この書はその前年ロンドン刊行の A Simplified Grammar of the Japanese Language, modern written style. とほぼ同一內容のもので、品詞論・文章論・音韻並に文字論から成り、最後の部分は、當時のローマ字國字論者の主張に從つて、その所說を假名交り書とローマ字書と相對照させてある。その他、前のロンドン版の文典を補訂して理論の部とし、これに會話に必要な語彙・句集・對譯付きの小話集等から成る實用の部を加へ、A Handbook of colloquial Japanese. と題して明治二十一年ロンドンで刊行した。これ等の文典は、主として英文典に摸したもので、文典の組織としては必ずしも成功したものでなかつたが、西洋人に日本語の組織を知らせるには便宜なものであつた。文部省刊行の「日本小文典」(別項)は國學者にも讀まれ、ために當時の國學者を刺戟し、殊に文部省が外國人に日本語の文典を編せしめたことは、國學者、延いては國家に對する侮辱なりとし、木村正辭は、「日本人日本文法講ずべし」と叫び、谷千生(ちなり)は二十年九月「ビー・エッチ・チャムブレン日本小文典批評」を刊行し、內容はもとより一々の措辭に至るまで、最も嚴重に批評した。彼は東京大學の教師となつてから、間もなく命を受けて北海道及び琉球に到り、その熱心なる研究の結果は、「文科大學紀要」として刊行された「アイノ語研究上より見たる言語・神話・地理」、日本亞細亞協會雜誌に掲載せられた「琉球語文典及び字彙」となつた。而して、前者にあつては、日本內地殊に關東・東北の地名にして、アイヌ語によつて說明せられるもの多きことを論證し、後者にあつては、國語と琉球語との比較研究を試み、兩者は同一母語より出たる姉妹語で、その差異的距離は國語的といふよりも方言的であるとし、兩國語の母韻については短母韻の a・i・u を原始的のものとし、動詞の活用の種類に就いては奈行變格を根源とするなど幾多の創見を示した。以上の外、「枕詞の研究」「文字のしるべ」、方言研究、文體の研究等多方面にわたり、その功績顯著なものがある。〔講義及び指導〕彼は日本の大學に於て、日本語及び博言學の講義を始めて開き、一般言語及び日本語の學術的研究の興るべき基礎を築いた。その薫陶を受けたものには、上田萬年博士・芳賀矢一博士などがあり、明治・大正の國語學・國文學研究は、その一源泉を彼に發してゐると云つてもよい。

【參考】王堂チャムブレン先生を送る 佐佐木信綱(帝國文學一七ノ三)○明治文化に寄與せる歐米人の略歷(明治文化發祥記念誌又明大觀六)○明治初年の英語教育(磯部彌一郎(同上)○我が記憶をたどりて(ジョン・バチラー自敍傳)

Fr. von Wenckstern : *Bibliography of Japan.* vol I 1477—1893 ed. 1895. = Nachod, Oskar : *Bibliography of Japan* 1906—1926 vols II. 1928. *Who's who* 1922.

〔寛〕

中央學術雜誌 (ちゆうあうがくじゆつざつし)

【刊行】明治十八年三月創刊(月二回)、二十一年廢刊、號數未詳。東京專門學校(早稻田大學の前身)の講師・得業生・學生、その他同校に緣故ある人々より成る同攻會の機關雜誌、卽ち上の同攻會員の研磨した法・理・文三科に亙る論說及び記事を集錄するを主とする。なほ創刊者たる人々が、東京大學の機關誌「東洋學藝雜誌」(別項)を摸倣し、乃至これに對抗する意識のあつたことは事實であらう。小野梓・高田早苗・天野爲之・坪內雄藏の諸氏が主なる寄稿家であつた。內容は政治・經濟・法制等に關するものが過半を占め、理學・文學(哲學・宗敎を含む)は從屬的地位に置かれてゐた。從つて全體的には時代の一般文學界と緊密に連絡しても居らず、又目立つてさう大きな影響を與へたとも考へられぬが、今日明治文學を歷史的に見るとき、その發展に對して可なり重要な役割を演じたと思はるゝ文獻を若干含んでゐる。例へば、坪內逍遙の「假作物語の變遷」(第二號以下)、「小說神髓拾遺」(第六號)、「班烈多物語」(第九號以下)、「稗史家略傳並に批評」(第二十一號以下)、「文章新論」(第二十八號以下)、「美術論」(第四十五號)、「批評の標準」(第五十八號)の如き、高田早苗の「當世書生氣質の批評」(第二十一號以下)、「佳人之奇遇の批評」(第二十五號以下)の如き、冷々亭主人(二葉亭四迷)の「小說總論」(第二十六號)、「カートコフ氏美術俗解」(第二十八號以下)、島田三郎の「小說談」(第五十號)の如きものを擧げることが出來る。その他、チョーサア、エドマンド・スペンサア、シェークスピヤ等泰西文豪の傳記、アンソニイトロロープの「小說論」の紹介、トマス・カーライルの「歷史論」の譯なども注目すべきである。【附記】同名の雜誌が明治二十五年五月に東京專門學校內中央學術雜誌社から發刊されてゐるが、これは右の十八年創刊のものを續刊したのでも再興したのでもなく、二十四年創刊の「同攻會雜誌」を改題したものである。これにも「文苑」欄の如き文藝的分子はあるが、それはほんの附錄で、本體は純然たる政治經濟の學術雜誌であり、從つて文學史的には何の意義も認められない。〔柳田(泉)〕

中央公論 (ちゆうあうこうろん) 雜誌

【解說】初めは「反省會雜誌」と稱し、明治二十年八月、京都から佛敎徒の手によつて創刊。後、東京に移され「反省雜誌」と改め、本鄕駒込西片町から發行せられてゐたが、更に三十二年以降「中央公論」と改題した。初めは、禁酒宣傳などをなし、宗敎的な傾向を持つてゐたが、後には主として社會評論、學術思潮方面の雜誌として四十有餘年續刊され、今日に及んでゐる。「反省雜誌」時代から、「中央公論」と改題後の四五年間は、「文藝小觀」「詞藻」の項目の下に詩歌俳句乃至一二の極めて短篇の小說を紹介してゐたに過ぎなかつたが、年一回時に二回の增大號を出して、文藝創作繪畫の類を附錄として紹介した。これが自然派擡頭前後からは每號必ず創作三四篇を加へるに及び、評論雜誌として許りでなく、文藝紹介の雜誌としても重要な雜誌となり、勢ひ文壇の登龍門を以て目さるゝに至つた。明治の末期から、大正・昭

句集・對譯付きの小話集等から成る實用の部を加へ、A Handbook of colloquial Japanese. と題して明治二十一年ロンドンで刊行した。これ等の文典は、主として英文典に摸したもので、文典の組織としては必ずしも成功したものでなかつたが、西洋人に日本語の組織を知らせるには便宜なものであつた。文部省刊行の「日本小文典」(別項)は國學者にも讀まれ、ために當時の國學者を刺戟し、殊に文部省が外國人に日本語の文典を編せしめたことは、日本語及び日本語の學術的研究の興るべき基礎を築いた。その薫陶を受けたものには、上田萬年博士・芳賀矢一博士などがあり、明治・大正の國語學・國文學研究は、その一源泉を彼に發してゐると云つてもよい。

【參考】王堂チャムブレン先生を送る 佐佐木信綱(帝國文學一七ノ三) ○明治文化に寄與せる歐米人の略歴(明治文化發祥記念誌文明大觀六) ○明治初年の英語教育礎那强一郎(同上)○我が記憶をたどりて(ジョン・バチラー自叙傳)

中巖圓月 ちゆうがんえんげつ 「圓月」を見よ。

忠義太平記大全 ちゆうぎたいへいきたいぜん 浮世草子 十二卷 【作者】未詳 【書工】吉川盛信【名稱】角書に近士とある。【刊行】享保二年【諸本】德川文藝類聚第一事實小說所收。【解說】正德元年版「忠義武道播磨石」(別項)を摸作したもので、赤穗四十七士仇討の次第を小說的に記述した浮世草子の一つである。筋は「忠義武道播磨石」と大同小異である。最後に尾花殿屋形之圖(吉良邸圖)、尾花殿隣館之圖、泉成寺圖(泉岳寺圖)、必死一連之衆を記載してあるのも同樣である。 〔小泉〕

忠義武道播磨石 ちゆうぎぶだうはりまいし 浮世草子 六卷 【作者】未詳 【別名】武道忠義太平記 【刊行】正德元年 【諸本】赤穗復讐全集(帝國文庫)所收 【解說】赤穗義士復仇の事件を實錄風に綴つたもの。書中の記述は事實と殆ど大差なく、ただ鎌倉幕府を背景とし、吉良上野介は尾花右門、淺野内匠頭は印南野丹下、大石良雄は大岸由良之介、大野九郎兵衞は相野屋九兵衞等となつてゐる。事件の發端は尾花右門が印南野丹下に駿馬一匹小姓三人の借用を申込み、小姓の一人瀧井杉之丞の容色に迷ひ、これを讓り受けんとして拒絶せられたのを遺恨に思ひ、使節饗應の席上、丹下に恥辱を與へたのに始まる。それより丹下の双傷沙汰となり、由良之助一味が主人の仇を討ち、遂に切腹を賜はるまでを叙し、布置詳細を極めてゐる。事件後九年の作である。行文優雅にして構成に不自然なる痕跡少く、後世義士物の範となつてゐるものが多い。卷末には、尾花屋敷そなへ圖(吉良邸圖)、必死一連之衆(四十七士の名乘・役柄・年齡・特性)、泉成寺圖(泉岳寺四十七士墓所圖)等を附してある。「忠義太平記大全」(別項)は本書を摸倣した作。 〔小泉〕

中古歌仙三十六人傳 ちゆうこかせんさんじふろくにん 歌人傳 一卷 【著者】未詳 【成立】未詳「後六々撰」(刑部卿範兼撰)に、和泉式部以下三十六人の歌人の作十首づつを選抄した以後のもので、一本に「寶治二年五月二十三日寫之。大外記師光借送此本者也」とあるから、寶治以前のものに相違ない。【諸本】群書類從卷六五所收。寫本では宮内省圖書寮藏本その他がある。【解說】和泉式部・相模・惠慶法師・赤染衞門・能因法師・伊勢大輔・曾根好忠・道命阿闍梨・藤原實方・藤原道信・平定文・清原深養父・大江嘉言・源道濟・道雅卿・壱基法師・在原元方・大江千里・公任卿・輔親卿・高遠卿・馬内侍・藤原義孝・紫式部・道綱母・藤原長能・定賴卿・上東門院中將・兼覽王・在原棟梁・文屋康秀・藤原忠房・輔正卿・大江匡衡・安法法師・清少納言の三十六人の歌人の家系・官歴・歿年等を漢文體を主として記したものである。先祖不レ見等のものもいくつかあり、又單に父の名前だけしか擧げてないのもある。歿年等も明記してないのが多く、所々に逸話も挾まれてゐる。かゝる傳記の性質として、どれほど信をおく事が出來るかは問題であるが、また一資料として見るべきもので、「三十六人歌仙傳」(別項)につづく歌人傳として注目される。 〔藤川〕

中古甲冑製作辨 ちゆうこかつちうせいさくべん 故實 三卷 【著者】楠原長俊 【刊行】寛政十二年 【解說】天文から慶長に至る所謂戰國時代の甲冑の製作を詳かに圖說したもので、上卷には、大意、新調製作心得七箇條。中卷には、兜之品目、兜鉢之大意、鉢之表十一箇條、鉢之裏八箇條、鞠之事。下卷には、面具頬當之事、草摺之部、籠手之部、脛當之部、佩楯之部、身甲之事、威毛色目之事、袖之部、喉輪之事等が記されてある。 〔石村〕

中古戲場說 ちゆうこぎぢやうせつ 演劇書 二卷 【著者】計魯里觀主人。傳未詳。但し劇場内部の者でなく、相當身分のあつた者であらう。【成立】文化二年か 【諸本】燕石十種(國書刊行會)所收。【解說】上卷は、文化元年中村座壽狂言興行口上寫を卷頭に掲げ、以下、柏莚(二代市川團十郎)・訥子(初代澤村宗十郎)・十町(初代大谷廣次)・薪水(初代坂東彦三郎)・市紅(初代市川團藏)・海丸(四代市川團十郎)・二代十町(二代大谷廣次)・魚樂(初代中村助五郎)・路考(初代瀨川菊之丞)・仙魚(瀨川菊次郎)・盛府(二代佐野川市松)等の傳記・逸話等を記述してゐるが、他書に見えないものも散見する。下卷は附錄として「耳塵集」「あやめ草」「訥子口傳」中を抄出し(印刻に洩れたのも出すとある)、次に、「雜劇古今名簿錄」として、元祿末年以降の俳優の名を列ね、また「伎藝名家系譜」及び淨瑠璃の系譜、最後に淨瑠璃作者の名簿を掲げてゐる。謂はゆる寶曆期の俳優傳記資料としては有力な價値を有つもの。 〔塩田〕

中古雜唱集 ちゆうこざつしやうしふ 歌謠集 一卷 【編者】伴信友 【成立】天保十四年 【諸本】古謠集・近世文藝叢書第十一所收 【内容】「土佐日記」「枕草子」等の古典に見えた舟歌・田歌の類や、神社に傳へ來つた神事歌の類、隨筆雜著に見える田植歌・神樂歌の類を、見聞に從つて集め記したもので、自ら聞書したものや知友より寄せられた報告も二三ある。多く歌詞の傳來や註解に就いて考說を書き加へてゐるのが有益である。天保六年閏七月十五日の信友の自序があり、天保十四年九月の黑川春村の跋文がある。それによると、春村も別に謠ひ物を見聞に從つて書き集めて置いたものがあつたので、信友にその話をすると、信友も自分の編纂したものがあるから、それに增訂して貰ひたいと云ふ事で、この一卷を託された。併し春村の集めて置いたものは、別冊として續集にでもする積り故こゝには一つも加へず、ただ信友の稿本を整理したに止まるとある。即ち天保六年に成つたのを、後、同十四年に春村が整理を加へたものである事が明かである。なほ集中、鎭花祭歌に詳しい信友の考證が附してあり、これは天保六年本書成立以前に成つたものであるが、その後に天保十三年五月の日附を有する書き加へがあり、天保六年以後にも信友は增補を忘らなかつたと見える。【價値】脫漏が多いが、蜀山人の「麓廼塵」卷四十一に次いで、この種の書の先鞭をつけたものとして價値がある。殊に信友の自註に多くの價値を見出す。これに「麓廼塵」卷四十一や、春村の集めて置いたもの等を增補すれば、明治以前の歌謠集としては、内容の可なり豐富なものが出來るであらう。【類書】田澤仲舒編「雜篋」の卷一と卷二は、唱歌部であつて、信友の稿本に材料を取り、神樂催馬樂や、八丈島歌曲、甲斐臼挽田植歌、信濃神事歌等を增補し、また仲舒の私案をも書き加へたもので、彼此參照すれば、本文校訂

るとき、その發展に對して可なり重要な役割を演じたと思はるゝ文獻を若干含んでゐる。例へば、坪内逍遙の「假作物語の變遷」(第二號以下)、「小說神髓拾遺」(第六號)、「班烈多物語」(第九號以下)、「稗史家略傳並に批評」(第二十一號以下)、「文章新論」(第二十八號以下)、「美術論」(第四十五號)、「批評の標準」(第五十八號)の如き、高田早苗の「當世書生氣質の批評」(第二十一號以下)、「佳人之奇遇の批評」(第二十五號以下)の如き、冷々亭主人(二葉亭四迷)の「小說總論」(第二十六號)、「カートコフ氏美術俗解」(第四十有餘年續刊され、今日に及んでゐる。「反省雜誌」時代から、「中央公論」と改題後の四五年間は、「文藝小觀」「詞藻」の項目の下に詩歌俳句乃至一二の極めて短篇の小說を紹介してゐたに過ぎなかつたが、年一回時に二回の增大號を出して、文藝創作繪畫の類を附錄として紹介した。これが自然派擡頭前後からは每號必ず創作三四篇を加へるに及び、評論雜誌として許りでなく、文藝紹介の雜誌としても重要な雜誌となり、勢ひ文壇の登龍門を以て目さるゝに至つた。明治の末期から、大正・昭

の上に得る所が多い。　〔藤田〕

中古三十六歌仙　「平安時代文學」「歌仙」を見よ。

中古文學　儒者【姓名】大鹽後素。字は子起、通稱平八郎【生歿】寛政六年阿波國美馬郡脇新町に生れ、天保八年（一四九八）三月二十六日自殺した。享年四十六【閲歴】祖先は駿河今川氏の臣、平八郎は大阪に出でて大鹽氏の養子となつた。少時より學を好み、尤も王陽明の人と爲りを慕ひ、專らその學を修め、又よく吏務に熟達した。大阪の與力となり、町奉行高井某を輔けて功を立つること多く、その名が一時に聞えたが、後、職を辭して專ら諸生を教授した。天保八年、米價騰貴して餓死する者が多く、これを町奉行に訴へたけれども聽かれず、因つて自らその財を散じて貧民を救恤し、攝津・河内・和泉・播磨等に檄し、貧民を煽動して亂を爲さうとし、事成らずして自殺した。【批評】王陽明はその拔本塞源論に於て一箇の理想的國家を構成し、現實の社會を改造してこの理想的國家に至らしめん事を志した。中齋も亦陽明とその志を同じうしたのである。故に彼をば直に一種の共産主義の實行者となすのは當らない。【著作】洗心洞劄記三卷○洗心洞詩文二卷。　〔佐久〕

中洲　漢學者【姓名】三島毅。字は遠叔【別號】桐南・繪莊【生歿】天保元年十二月九日、備中窪屋郡中島村に生れ、大正八年五月十二日東京麹町區一番町に歿した。享年九十。【閲歴】年十四にして藩儒山田方谷に學び、これに事ふること九年、學業大に進んだ。去つて伊勢の津藩に遊び、齋藤拙堂の塾に居ること五年、安政四年江戸に遊んで昌平黌に入り、六年初めて板倉侯の聘に應じて松山藩校（有終館）の督學となり、維新の後、司法省判事・大學教授・大審院檢事・同判事・東宮侍講となり、文學博士を授けられ、宮中顧問官に任ぜられた。明治十年二松學舍を一番町に開いて儒學を教授し、在官中と雖も教授を廢せず、四十年の久しきに亙つた。その文は奇趣横生で、構想を以て勝つてゐる。【著作】中洲講話一冊○老子講義一冊○論語講義一冊○中洲文稿十二卷。　〔佐久〕

抽象藝術　藝術論〔佛〕Art abstrait【解説】藝術的表現形式の無對象性を標識とする流派の人々が唱へるところによれば、過去の古典主義藝術をはじめ新印象主義藝術も、個人意識的叙述や具象化を行つたにすぎない。印象派以後のセザンヌ、マチスといへども、その主題は主知的な自己内部の構造を形象化したものである。併しこれに反して新塑像主義と名づくべきモンドリアン、デスブルグ等の主張によれば、藝術は吾々の中にある宇宙的なものの直接的表現である。意識内の個人的なもの、變化するものの表現ではなく、非意識的なものの表現である。意識的相對的なものを通して絶對的なものを表現することであるといふ。かくしてそこに幾何學的形式を通して、宇宙的絶對的觀念を具象化する樣式が生じた。抽象的形式及びそれ等の相互形式の中に、美の基本形式があるとする。ロドチェンコ、ミトリッチュ、アルトマン、モホリ・ナギー、アルプ等この派に屬する。原始藝術の抽象的形式表現に關して美術史家ウオリンゲルは、その著「抽象と感情移入」の中に於て、「原始人は外界自然に對して、不安な感情を有した結果、この不安恐怖からまぬかれて、滿足安心を得るために「生なき」抽象形式、即ち幾何學的表現形式を求めたのである」といつてゐる。

【參考】Worringer : *Abstraktion u. Einfühlung.* ○世界藝術發達史 マーツァ（熊澤復六譯）　〔村田〕

中將姫京雛　脚本　四幕十一場（別に三場）【作者】中村清五郎【名稱】中將姫役者たる本作の主役嵐喜世三郎を上方下りときかせたものであらう。狂言本題簽には、肩書によつて「追善彼岸櫻」と記し、二月三日の中村七三郎命日を偲ばせた。【刊行】狂言本一册。刊記は見えぬが興行と同時であらう。江戸堺町中島屋版。【諸本】狂言本傳存。元祿歌舞伎傑作集上に所收。【興行】寶永五年三月、江戸中村座上演。

〔役割〕唐橋少將（水木きく三郎）、鏡の大臣（濱崎磯五郎）、梅ヶ枝の内侍（藤村半太夫）、秋山角右衞門（宮崎十四郎）、橘廣主（中島三郎四郎）、唐橋宰相（袖崎縫之助）、行基菩薩（仙石庄助）、藤原春時（村山十平次）、久米の八郎（中村傳九郎）、中將姫（嵐喜世三郎）、大膳太郎（富澤半三郎）、唐橋の大臣（山中平九郎）等。

【題材】中將姫に八百屋お七を加へたが、これは喜世三郎が寶永三年春、大阪嵐座で演じた時、初興行の切がお七であり、二の替りが中將姫であつたに據ると思はれる。從つて脚色の内容にも嵐座の上演が關係があらう。なほ四番目の切に七三郎の最期場を添へる。

【梗概】〔序幕〕（紫宸殿鷄合せの節會）聖武帝の御代、彌生初めの一日、梅ヶ枝内侍と櫻の内侍との鷄合せの場に、鏡の大臣は鷲の如き鷄を持出して、梅ヶ枝に勝負を挑み、わが戀を遂げようと謀つた。併し梅ヶ枝の傅、藤原春時と左近之介とが天に祈り、梅ヶ枝方が勝つて事なきを得た。（住吉社前）梅ヶ枝の汐干の催しに、唐橋の少將と橘の廣主が供奉を勤めた。廣主も薄暮に乘じて梅ヶ枝を奪ひ去らうとしたが、少將の家來角右衞門のために邪魔された。而も角右衞門は、兄の敵として廣主に對つたが、廣主は隙を見て逃げ去つた。（内裏歌合の會）行基は梅ヶ枝と唐橋宰相との仲を、春時は弟左近と櫻の内侍との仲を取りもたうと誓つた。この時、鏡の大臣は天子と名乘り、梅ヶ枝を口説き、神器を奪つたのを春時兄弟が危く取戻す。〔二幕〕（清水寺花見）宰相の弟少將が花見遊覽の折柄、久米の八郎が來て宰相への衆道の媒を頼む。嵯峨野に隱れてゐた中將姫も花を眺めに現はれ、人々を歸した後で自害を計つたのを八郎に留められる。姫は幼い頃、繼母のために雲雀山に害される所を、八郎と春時とに救はれたのであつた。（行基の寺）行基は梅ヶ枝を招き宰相と會はす所に、丑三つ頃中將姫の靈が現はれて、兩人は物狂ほしく見えた。（唐橋館）行基の奏上により、勅許をうけて宰相と梅ヶ枝の婚儀が執り行はれる。こゝへ八郎が姫を連れて人々を驚かせたが、姫はわれから宰相への戀を捨てて、仲に儲けた若を妹梅ヶ枝に託して立ち去る。姫の繼母たる後室は弟大膳と謀り、人々を逐ひ立て家を乘取つた。〔三幕〕（鏡の大臣館）大膳が梅ヶ枝を殺して後は、大臣は日野大納言の娘豐姫を慕ひ、これを奪つて來ると、大膳の眼には梅ヶ枝と見えたが、大膳が藥師信仰のため、梅ヶ枝の怨念は消え去る。（本郷妙圓寺）春時は亂を避けて、宰相を弟とし、小姓吉三郎と名乘らせて妙圓寺に置く中、本郷八百屋彌右衞門の娘お七とわりなき仲となつた。吉三郎が落した文が、八百屋の下人に拾はれて、お七は別家され、庵室に入れられる。（八百屋内）お七は、實は人買から買取られた中將姫であつて、彌右衞門が密に戀して口説いてゐたが、吉三郎との仲をせいた爲め、お七に刺された。駈付けたのは宰相と八郎で、一人の檢視は春時、他の一人は角右衞門であり、姫のお七は救はれたが、八百屋の下人實は大膳方の橘の廣主と名乘り、人々と斬り結

て、お七は別家られ、隠棲率に入れられる。（八百屋内）お七は、實は人買から買取られた中將姫であつて、彌右衞門が密に戀して口説いてゐたが、吉三郎との仲をせいた爲め、お七に刺された。駈付けたのは宰相と八郎で、一人の檢視は春時、他の一人は角右衞門であり、姫のお七は救はれたが、八百屋の下人實は大膳方の橘の廣主と名乘り、人々と斬り結ぶ。（墓所）大膳と鏡の大臣とは改心の上出家を遂げ、大膳が藥師を祈ると、息絶えてゐた春時とその弟左近は蘇り、その身は虛空に失せた。〔四幕〕（御堂）唐橋・横佩兩家も治まり、中將姫は遁世し、御堂建立の日、說法の場に歌舞伎役者が封じ文を捧げて回向を賴む。姫がこれをあけると、「心境院經實日榮俗名中村七三郎」とある。姫は高座から、これより七三郎追善と述べる。〔彼岸櫻〕（幾代餅舞臺面）曾我の十郎が出す幾世餅の店に、團三郎と朝比奈の女房とが來た。この時急に、十郎は目まひがして內に入り、芝居は中止になる。棧敷から、京で七三郎に會つた八百屋のたつが現はれた。（雜司ヶ谷鬼子母神）たつと七三郎女房熊と跣足參りの祈願。（七三郎宅）七三郎はたつに淺間を謠はせたが、病勢いよ〳〵重く、我が子七十郎と勘三郎とを傳九郎に賴んで瞑目した。

【解說】中將姫の件は寧ろ簡單で、その背景ともいはるべき唐橋家の騷動が重きをなした。唐橋宰相と相思の仲の、中將姫の妹梅ケ枝は、鏡の大臣や廣主にも想はれ、終に怨靈としても働き、宰相は又、久米八郎から衆道の戀を懸けられる等、頗る複雜な關係が取結ばれ、從つて事件は極めて錯綜して見える。そこに騷動物としての興を覗つたのではあらうが、主な題材たるべき中將姫と宰相との關係に至つては、雲雀山事件の後日談の形式ではあるが、殆ど筆が省略せられてをり、この點に無意識にではあつたらうが、作の破綻が見られる。併しお家騷動の脚色としては、大阪などに流行するものよりも遙かに潤ひがあり、上作と言へよう。お七二十七回忌を强ひて織り込んだために、お七實は中將姫、宰相實は吉三郎の如き、江戸狂言一流の時代錯誤を極端に示してゐるが、當年の江戸歌舞伎としては平然と認容せられ、寧ろそこに作者の一種の働きをさへ發見せられる。切に七三郎の最期場を事實の儘入れた事は、却つて七三郎の舞臺の最期を知つた觀衆には、追慕の情を深めたであらう。「中將姫」としては、津打治兵衞の「けいせい顧本尊」（別項）の方が整つてゐるが、本作の方が好評を博した。一に嵐喜世三郎に負ふ所大であると思はれる。後世のお七の紋所が封じ文になつたのも、本作による事を種彥も「還魂紙料」に說いてゐる。彼が寶永三年正月大阪嵐三右衞門座「お七歌祭文」に於て、お七役で當てたところから、寶永四年顏見世の江戸下りに際し、從來山村座で當てたお七の狂言を中村座で上演し、喜世三郎に配役して成功を收めたものであらう。かくして、本作は今後の江戸のお七狂言の典據たる位置を占めるに至つた。（けいせい顧本尊參照）

【參考】還魂紙料　柳亭種彥　〔守隨〕

中將姫古跡松（ちゅうじやうひめこせきのまつ）「鶴山姫捨松」（ちやうはつ）を見よ。

中書王物語（ちゅうしよわうものがたり）　物語一卷【作者】「太平記」に基づいて作つた由の奧書があつて、「沙彌御判」とあるにより一條兼良の作かと言はれるが詳かでない。【成立】文明十五年以前【諸本】古板本なし。兼良筆の本を文明十五年に書寫したとの奧書ある帝國圖書館藏本が室町時代小說集に收められてゐる。【解說】歷史小說。後醍醐天皇の一宮尊良親王と御息所今出川公顯の女との物語。秦武文怨靈傳說で、「太平記」卷十八「春宮還御の事附一宮御息所の事」の文を書き改めたもの。幸若舞曲「新曲」（別項）と同材。〔島津〕

【參考】近古小說解題○室町時代小說集解題

中津（ちゅうしん）　禪僧【俗姓】藤原氏【法諱】中津【法號】絕海【別號】蕉堅道人【生歿】延元元年一月十五日土佐津野に生れ、應永十二年（一〇六五）四月五日歿す。享年七十。【閱歷】中津の母は、惟宗氏の出である。彼は初め天龍寺に入り、當時西芳寺に老を養つてゐた夢窓疎石の下に至つて隨侍してゐた。疎石は深くその才學に感じて、他日必ず禦悔の器となるであらう、叢林に入つて大に學問修行せよと云つた。十五歲の時、得度して沙彌となる。後入室して朝夕疎石の膝下に侍して示敎を受けた。十六歲で具足戒を受け、天龍寺に在つて一夏百日の間風雨も厭はず、每日四更の一點坐禪の後、徒跣して法輪寺に詣で、燒香禮拜して專心業に勵んだ。十八歲の時、建仁寺に錫を掛け、義堂周信・龍山德見等に隨侍した。建仁寺東堂放牛光林に才識を認められたが、後間もなく東國に下向して大喜法忻の門を叩いた。東國を出發の時、石室善玖から詩を贈られた。彼が明に渡つたのは三十三歲の時であつた。中竺寺の季潭全室に師事してゐたが、太祖に召されて法要を說き、太祖の勅を受けて詩を獻じ、太祖は和を賜うた。この年歸朝。その後の彼は、天龍寺等に留まつて益々修行を勵んでゐた。この頃伊豫・土佐・讃岐・阿波の太守細川氏の請を容れ、讃岐に赴いて寶冠寺の開山となつた。やがて足利義滿の請を受けて京都に歸り優遇を受けた。幕府の命を受けて再び相國寺に住し、こゝで寂した。後小松天皇、勅して國師の號を賜ふ。【著作】四會語錄二卷○蕉堅稿（別項）二卷。

【參考】翊聖國師年譜○延寶傳燈錄○本朝高僧傳　〔鷲尾〕

忠臣藏（ちゅうしんぐら）　歌舞伎　淨瑠璃【名稱】義士劇・義士物ともいふ。「假名手本忠臣藏」（別項）の流行によつて、義士劇一般がその略稱によつて呼ばれるに至つた。【諸本】忠臣藏淨瑠璃集（帝國文庫）・赤穗義士集（日本戲曲全集）等所收。【沿革】（一）假名手本忠臣藏の發生まで。元祿十五年三月、江戸山村座の「東山榮華舞臺」で、吉良を橫山大膳（富澤半三郎）に、內匠頭を小栗判官（生島新五郎）に持込み、刃傷の一幕を演じたと傳へられるのが最初らしい。また同十六年二月同座（通說には中村座）「曙曾我夜討」も暗に義士討入を當込んだが、僅か三日で當局から停止されたといふ。併しこれ等は單に一部を當込んだものに過ぎないが、一篇の戲曲として脚色されたもので最も古いのは、寶永三年五月大阪竹本座上場、近松門左衞門作「兼好法師（あとおひ）碁盤太平記」（別項）であらう。歌舞伎では寶永五年正月京都龜屋座の「福引閏正月」が古い。同七年六月大阪篠塚座上場、吾妻三八作「鬼麿毛無佐志鎧」は非常に好評を博し、類作を盛んに生んだ。後の義士劇の結構はこの操の作による所が多い。更に並木宗輔等の合作「忠臣金短册」（別項）には、早野勘平や茶屋場が現れ、「大矢數四十七本」（布袋屋座所演）を經て、「假名手本忠臣藏」の一母胎をなした。（二）假名手本忠臣藏以後。義

洗心洞劄記三卷○洗心洞詩文二卷。　〔佐久〕

中洲（ちゅうしう）　漢學者【姓名】三島毅。字は遠叔【別號】桐南・繪莊【生歿】天保元年十二月九日、備中窪屋郡中島村に生れ、大正八年五月十二日東京麴町區一番町に歿した。享年九十。【閱歷】年十四にして藩儒山田方谷に學び、これに事ふること九年、學業大に進んだ。去つて伊勢の津藩に遊び、齋藤拙堂の塾に居ること五年、安政四年江戸に遊んで昌平黌に入り、六年初めて板倉侯の聘に應じて

何學的形式を通して、宇宙的絕對的觀念を具象化する樣式が生じた。抽象的形式及びそれ等の相互形式の中に、美の基本形式があるとする。ロドチェンコ、ミトリッチュ、アルトマン、モホリ・ナギー、アルプ等この派に屬する。原始藝術の抽象的形式表現に關して美術史家ウオリンゲルは、その著「抽象と感情移入」の中に於て、「原始人は外界自然に對して、不安な感情を有した結果、この不安恐怖からまぬかれて、滿足安心を得るために「生なき」抽象

は嘉世三郎が寶永三年春、大阪嵐座で演じた時、初興行の切がお七であり、二の替りが中將姫であつたに據ると思はれる。從つて脚色の內容にも嵐座の上演が關係があらう。なほ四番目の切に七三郎の最期場を添へる。

【梗概】〔序幕〕（紫宸殿鷄合せの節會）聖武帝の御代、彌五郎初めの一日、梅ケ枝內侍と櫻の內侍との鷄合せの場に、鏡の大臣は鷲の如き鷄を持出して、梅ケ枝に勝負を挑み、わが戀を遂げようと謀つた。併し梅ケ枝の傅、藤原春時と左近之介とが天に祈り、梅ケ枝方が勝つて

仲に儲けた若を妹梅ケ枝に託して立ち去る。姫の繼母たる後室は弟大膳と謀り、人々を逐ひ立て家を乘取つた。〔三幕〕（鏡の大臣館）大膳が梅ケ枝を殺して後は、大臣は日野大納言の娘豐姫を慕ひ、これを奪つて來ると、大膳の眼には梅ケ枝と見えたが、大膳が藥師信仰のため、梅ケ枝の怨念は消え去る。（本郷妙圓寺）春時は亂を避けて、宰相を弟とし、小姓吉三郎と名乘らせて妙圓寺に置く中、本郷八百屋彌右衞門の娘お七とわりなき仲となつた。吉三郎が落した文が、八百屋の下人に拾はれ

士劇は「假名手本忠臣藏」によつて確立され、それ以前の諸作は概ね忘れ去られたが、又その後の新作も本曲の影響を受けないものは殆どないといつてよい。それ等の主なる作を次に擧げる。

〔淨瑠璃〕難波丸金鷄（寶暦九年五月豐竹座、若竹笛躬等作。「淀鯉出世龍德」と忠臣藏の後日）○いろは歌義臣の鑒（明和元年閏十二月豐竹座、黑藏主・中邑阿契合作。「假名手本」と「金短冊」）○いろは藏三組盃（安永二年七月竹本座、近松半二作。在來の諸作に據る改作）○忠臣伊呂波實記（同四年七月江戸肥前座、福内鬼外。「假名手本」と「いろは軍記」）〔歌舞伎〕敵討最上民草船（寶暦九年閏七月江戸市村座、瓢越一三次。信田に女由良之助）○日本花赤穗鹽竈（明和六年十二月大阪角の芝居、並木五兵衞作。「假名手本」と「忠臣講釋」）○義臣傳讀切講釋（天明八年二月大阪大西芝居、竹本三郎兵衞作。染井植木屋の初演）。○いろは假名四十七訓（寛政三年九月角の芝居奈河七五三助作。「いろは行列」と「四十七本」）○江戸花赤穗鹽竈（同八年四月江戸桐座、並木五瓶。「赤穗鹽竈」の增補）○扇矢數四十七本（同九年三月大阪中の芝居、辰岡萬作作。百姓勘平の鎌腹、平右衞門の忠義）○繪本忠臣藏（享和三年七月大阪大西芝居、近松德三作。「嫁切」の初演）○いろは歌譽櫻花（文化三年正月大阪角の芝居、近松德三作。「赤穗鹽竈」と「扇矢數」等の義士銘々傳の增補）○新彫刻七いろは（文政九年六月市村座、二代櫻田治助作。九太夫の切腹、逆の七段目）○裏表忠臣藏（天保四年三月江戸河原崎座、三升屋二三治作。三段目裏のおかる勘平の道行。落人參照）○假名手本忠臣藏（弘化四年三月市村座、三代櫻田治助作。常磐津・清元・長唄・大薩摩の忠臣藏十一段返しの所作事）○假名手本忠臣藏（嘉永二年九月中村座、藤本吉兵衞（三代瀨川如皐）作。村松三之丞の薪割と兩國橋引揚と十八ケ條申開の江戸での初演）○假名手本硯高島（安政五年五月市村座、三代河竹新七（歌阿彌）作。赤垣源藏德利の別れ）○忠臣晴金雞（萬延元年五月江戸守田座、三代櫻田治助。小山田左衞門の變心）○稽古筆七いろは（慶應三年八月市村座、三代河竹新七作。「いろは四十七訓」の改訂、現行場の平右衞門の初演）○四十七刻忠義計（明治四年十月守田座、三代河竹新七作。忠臣藏十二時の初演）○忠臣藏年中行事（明治十年五月東京春木座、竹柴金作。十二ケ月の忠臣藏の初演）○實錄忠臣藏（同二十三年五月、東京歌舞伎座、福地櫻痴作。「土屋主税」が出來た）○芳哉義士譽（同三十四年十月同座、作者同上。討入後義士切腹まで）等。〔秋莵〕

「假名手本忠臣藏」辻繪番附（寶暦五年五月江戸森田座）

【參考】忠臣藏類聚大成（一鳳）○古今いろは評林（新群書類從第三）○古今四十七大家評註假名手本忠臣藏南茂樹編○「忠臣藏」以前の義士劇黑木（近世演劇考說）○近世邦樂年表（義太夫之部）○歌舞伎脚本解題（渥美（歌舞伎研究一―二）○忠臣藏後日のいろいろ同上（歌舞伎狂言往來）○歌舞伎細見○歌舞伎圖說○花菖蒲いろは連歌の話一鳳（新群書類從第一）○假名手本忠臣藏に就いて增田七郎（岩波講座日本文學）

忠臣藏岡目評判

【諸本】「忠臣藏心實論」と題する文政板の改題本がある。なほ、演劇文庫四・赤穗復讐全集（帝國文庫）にも收められてゐる。【內容】竹田出雲の不朽の傑作たる「假名手本忠臣藏」（別項）の、章句の微妙なる部分に對し、時には作者の心中を忖度し、或は批判し、なほ著者が聞き傳へた事項を加へ、評釋したものである。一例を擧ぐれば、初段の大序詞「嘉肴有といへども食せざれば其味を知らずとは云々」に對し、「よき肴も食はざれば、其味ひの美なるを知らずと、忠臣太平にあらはれざるの譬をひいて、星の晝見へずと、大星になぞらへたり。これまでを淨瑠璃作者の通言に、枕文句といふ。發語なる故、歌詞の枕詞といふによるならん」といふやうに說明し、なほ人形の遣ひ方、或は章句と演出との微妙なる關係にも言及し、淨瑠璃作者の指針としたものである。【價値】評釋としては、本書の價値は高いものではないが、こゝに入れられた淨瑠璃作家達の作に對する考へが知られる。なほ別な意味で、本書の意義を持つてゐることは、一九の傳記に一材料を與へてゐることである。一九が若年の頃、大阪で淨瑠璃作者であつたことは傳へられてゐるが、本書の序文に近松東南が誌した「なには江のあしの假寢に、七とせあまり漂泊して、予が近松の沛に遊びし一風士有」の文は、それを裏書してゐる。〔小柴〕

忠臣藏偏癡氣論

【諸本】滑稽本名作集（帝國文庫）所收。

【梗概】忠臣藏の滑稽化である。例へば高師直をば、芝居で見る程の嫌味ある顏貌でなく、鎌倉の執事職であるから、博達聰明の士であり、鹽谷判官とても師直がなければ座頭の杖を失つたものである。それに對して音物の少いのは、鹽谷判官が吝嗇であるからだといふ論法で評してゐる。さうして由良之助は純然たるお國侍であるから物事を知らず、かゝる大事の出來したるにも拘らず國にゐたり、殿の短慮を知りながら、この大役を辭退せしめなかつたり、密書を九太夫やおかるに見られたり、手負の九太夫に大事を明かしたり、殿の逮夜に遊興してゐたり、夜討の際雨戸を外す工夫の幼稚さや、天川義平を追從交りに褒めたり、或は義平を試したり、燒香順に不義者の勘平を第二番目にさせたり、七段目でおかるに刀を持たせて緣の下の九太夫を刺させたりなど何れも不始末だらけ、一國の家老の態度とは思はれない。その點から言へば、九太夫は遙に先見の明があり、驚坂伴內なども師直に對する第一の忠臣で終始一貫した態度である。加古川本藏も表裏ある武士であるが、由良之

劇より遙かに優れてゐる。又勘平も不始末だらけの男であり、腰元おかるを駈落したりする腰拔者であり、人を殺して金錢を奪つた大賊であり、死體を改めず切腹する粗忽者であり、主人拜領の紋付を平服にしてゐる不忠不敬の者であり、且つ縞の財布を何時までも持つてゐた馬鹿律儀者である。といふ風に、忠臣藏にあらはれたあらゆる人物についての評論である。甚だしきは五段目山崎街道に出る猪も前足二本はぶらさがつて居り、後足二本で駈出すのは不思議だなどと言つてゐる。

【構想】物は見方である。議論は如何やうにもつく。忠臣藏の諸人物も忠臣・奸物と、時代の常識から相場は決つてゐるものの、強ひて反對論をしようとすれば、理窟には事缺かない筈である。三馬はこゝに目をつけて、定論のある忠臣藏の諸人物の言動に、強ひて異論を持ち込んで、忠臣を非難し、奸臣を辯護して、これを滑稽化してゐるのである。川柳にもかうした史實などの茶化しがある。本書はさうした川柳風の茶化しを滑稽本に試みたものである。〔小柴〕

忠臣金短冊（ちゆうしんたんじやく）

淨瑠璃　五段　時代物　【作者】並木宗輔・小川文助・安田蛙文　【角書】小栗判官横山郡司　【名稱】討入の義士が各自姓名を記した金の短冊を背中に附けたと本文に見える。【初演】享保十七年十月朔日より豐竹座。（外題年鑑には同十八年とあるが、「忠臣金短冊繪盡」の序文によつて訂正する）。【諸本】忠臣藏淨瑠璃集（帝國文庫）・戲曲義士篇前篇（名著文庫）所收。【題材】赤穗義士の件を扱つた。同材の作品中淨瑠璃の先行作は、宇治加賀掾の正本「難波染八花形」（寶永元年か）、「碁盤太平記」（別項）、「鬼鹿毛無佐志鎧」（紀海晋作。正德三年十二月豐竹座初演）の三つであらうが、本作は世界を小栗・横山時代に採つたこと、その他「鬼鹿毛無佐志鎧」に負ふところ多く、又「碁盤太平記」の影響も著しい。（忠臣藏參照）

【梗概】〔初段〕足利政知より勅使饗應を命ぜられた横山郡司信久と、添人を命ぜられた小栗判官兼氏の香についての論爭。これに敗けた横山は、小栗の相役土川兵庫と共に進物の事で小栗を罵り、進物臺を折るので、小栗は怒つてこれに斬り付けたが、土川に抱き留められて果さず、切腹を命ぜられ、家臣原鄕右衞門に國家老大岸由良之助への傳言をなして自刄する。小栗の臣大鷲傳五は駈付けて來て横山の郎黨山縣兵衞を追ひ、名馬鬼鹿毛を組留め、原の命でこれに乘つて國元へ急使に立つ。〔二段〕元小栗の足輕寺澤七右衞門は女房の連れ子おやつが身を賣つた金を得て復仇の仲間入りに出立する。早野勘平は女房歌木を横山の腰元に入り込ませ、自身は肴屋となつて、共に横山に迫つたが、用意の鐵の網に包まれて危い所を奴樂内となつて奉公した寺澤の計で逃れる。歌木は深傷で絕命する。〔三段〕大岸由良之助以下の義士等が瑞祥院に集つて連判。その際大岸の伴力彌もこれに加はらうと父に願ふが許されず、義士等のとりなしや、母を思ひ切つた旨を明かにしたので許される。横山の臣太田武太夫は、實の娘おやつ（寺澤の繼子）が、遊女九重となつて島原の廓に勤めてゐるのを知り、又大岸力彌を戀してゐる旨を聞いて、それとなく大岸父子に横山の館の案内を敎へた上、九重の手にかゝつて死ぬ。〔四段〕「道行老の一つ書」由良之助の母千鳥と妻おやなが本國より山科への道行、由良之助は山科の閑居に妾おかよを置きながら島原で遊興してゐる。千鳥おやなが山科に辭れて來たが、原鄕右衞門からの啞の使者が、己が背に書かれた文字を鏡にうつして讀むのを見た力彌がこれを刺すと、手負は早野勘平なる旨を明かし忠誠の志を語るので、由良之助は連判狀に血判させる。大岸父子は母妻妾等と別れて仇討に出立する。〔五段〕討入より本懷。

【構想】大體は「鬼鹿毛無佐志鎧」に據り、「碁盤太平記」の山科閑居をもとりいれ、宗輔一流の趣向を加へてゐるのであるが、人物を多くとりいれて複雜化してある。【影響】「假名手本忠臣藏」（別項）への影響を隨一、寧ろ唯一のものとして認めなくてはならぬ。「假名手本」大序に、尊氏の弟直義を出したのも、「鬼鹿毛」及び本作で義政の弟政知を出したのからであらうし、三段目の加古川本藏が鹽冶判官を抱き留める件は、本作の土川兵庫の件の複雜化であり、早野勘平は本作によつて命名された人物であつて、そのおかるとの戀仲は、本作の勘平歌木の件と、太田武太夫の告白（三段）から來て居り、又鷺阪伴内は本作の山縣兵衞と似てゐる。更に「假名手本」四段目の判官の遺言は、本作の判官が原への傳言から來て居り、六段目おかるの身賣は、本作二段目おやつの身賣の改作と見られる。七段目は本作三段目の廓の場に負ふところが甚だ多いやうであるが、本作太田武太夫の最期は、「東鑑御狩卷」三段目を經て、「假名手本」九段目の本藏の最期に大なる影響を與へてゐる。本作の寺澤七右衞門は、「假名手本」の寺岡平右衞門となり、おやつとの繼父子關係は兄妹に變へられてゐる。由良之助・九重と武太夫・母親といふ横の排列は「假名手本」ではおかる・由良之助・九太夫といふ縱の排列となつて居り、おかるが鏡で文を讀む趣向は、「碁盤太平記」の鏡案なる本作四段目で啞の勘平が鏡によつて背の文字を讀む件の奪胎であらう。又「假名手本」八段目の母娘の道行も、直接には、「東鑑御狩卷」の母娘の道行から來てゐようが、本作の姑嫁の道行からも暗示を受けてゐよう。本作四段目は前述の如く「碁盤太平記」の飜案であるが、最期の勘平が大岸父子によつて連判狀に名を加へられるのは、「假名手本」六段目に影響してゐると思はれる。本作は元より傑作とすべきほどのものではなく、再演もされなかつたが、立作者宗輔が竹本座に轉じて出雲等と共に作つた名作「假名手本忠臣藏」に、かく多大な影響を及ぼした點に於て、その歷史的地位は忘るべからざるものがある。

【參考】「忠臣藏」以前の義士劇黑木勘藏（近世演劇考說）○「假名手本忠臣藏」に就て　增田七郎（岩波講座日本文學）○名著文庫「戲曲義士篇」前編解說。〔增田〕

忠臣水滸傳（ちゆうしんすいこでん）

讀本　十卷十册　【作者】山東京傳　【挿畫】北尾重政　【名稱】支那の「忠義水滸傳」の世界を翻して、「假名手本忠臣藏」（別項）のそれに移したもので、かく名づけたのである。【刊行】前編寛政十一年、後編享和元年、江戸蔦屋重三郎、鶴屋喜右衞門板　【諸本】繪入文庫・山東京傳集（近代日本文學大系）・京傳傑作集（帝國文庫）所收　【題材】「假名手本忠臣藏」の事件に基づき、水滸傳の結構を附會したもので、高階師直と鹽冶高貞との確執を高俠と林冲に比し、又四十七士を百八の將星に、大星由良を宋高に擬してゐる。

【梗概】〔前編〕北朝の光明帝の御時、洛中に屢々怪異があり、北陸に疫病が流行したので、

七本）○江戸花赤穗鹽竈（同八年四月江戸桐座、並木五瓶。「赤穗鹽竈」の增補）○扇矢數四十七本（同九年三月大阪中の芝居、辰岡萬作作。百姓勘平の鎌腹、平右衞門の忠義）○繪本忠臣藏（享和三年七月大阪大西芝居、近松德三作。「嫁切」の初演）○いろは歌譽櫻花（文化三年正月大阪角の芝居、近松德三作。「赤穗鹽竈」と「扇矢數」等の義士銘々傳の增補）○新彫刻七いろは（文政九年六月市村座、二代櫻田治助作。九太夫の切腹、逆の七段目）○裏表忠臣藏（天保四年三月江戸河原崎座、三升屋

七（藝阿彌）作。赤垣源藏德利の別れ）○忠臣晴金雞（萬延元年五月江戸守田座、三代櫻田治助。小山田左衞門の變心）○稚古筆七いろは（慶應三年八月市村座、三代河竹新七作。「いろは四十七訓」の改訂、現行縞の平右衞門の初演）○四十七刻忠義前計（明治四年十月守田座、三代河竹新七作。忠臣藏十二時の初

森田座）

一例を擧ぐれば、初段の大序詞「嘉肴有といへども食せざれば其味を知らずとは云々」に對し、「よき肴も食はざれば、其味ひの美なるを知らずと、忠臣太平にあらはれざるの譬をひいて、星の晝見へずと、大星になぞらへたり。これまでを淨瑠璃作者の通言に、枕文句といふ。發語なる故、歌詞の枕詞といふによるならん」といふやうに說明し、なほ人形の遣ひ方、或は章句と演出との微妙なる關係にも言及し、淨瑠璃作者の指針としたものである。

【價値】評釋としては、本書の價値は高いもの手負の九太夫に大事を明かしたり、殿の逮夜に遊興してゐたり、夜討の際雨戸を外す工夫の幼稚さや、天川義平を追從交りに褒めたり、或は義平を試したり、燒香順に不義者の勘平を第二番目にさせたり、七段目でおかるに刀を持たせて緣の下の九太夫を刺させたりなど何れも不始末だらけ、一國の家老の態度とは思はれない。その點から言へば、九太夫は遙に先見の明があり、鷺坂伴内なども師直に對する第一の忠臣で終始一貫した態度である。加古川本藏も表裏ある武士であるが、由良之

都の寺社に祈禱せしめ、特に新田義貞の兜を鎌倉に埋めて追善する事になつた。この命を受けた鎌倉の執事高階師直と雲州の刺史鹽冶高貞が、地を卜して穴を掘ると地中に盤石があつた。師直はこれを石室と推して强ひて掘り起すと、忽ち一道の白氣が昇つて四十餘條の金光が四散した。これ希代の珍事を起す兆であつた。師直一日鶴岡八幡宮に詣で、高貞の室貌好を見て戀慕し、高貞を失はんと計り、遂に陷れて自刃せしめた。貌好は家臣原鄕右衞門に護られて雲州に赴く途中、師直の伏兵に捉はれんとするが、桃井侯に救はれて遁れ、又天龍川で賊に遭うたが、鹽冶家の飛脚寺岡平右衞門の救ふ所となり、その神行の法で本國に走つた。雲州守護の家士大星由良は、貌好を迎へると直にこれを高貞の弟石堂縫殿助に預け、不忠の徒鈇九太夫父子を去らしめ、義を重んずる家士と復讐を圖り、黨を結んで京に向つた。こゝに桃井家の老臣賀古川本藏は足利尊氏へ禮物を獻ずる使者として京に上る途に、鈇九太夫の子貞九郎に襲はれ、使を果すことが出來ずして身を隱した。又高貞憤死の事に關して、不幸主家を追はれた速野勘平は、妻儚兒の實家に身を寄せ、計らず繼母のために儚兒を賣られたが、鹽冶家の臣千崎彌五郎と邂逅し、大星の義擧に投ずる傳手を得た。〔後編〕京に於ける大星は日夜花柳の巷に遊んで行跡を晦ましてゐた。こゝに名妓とうたはれてゐた儚兒は、或る夜大星の子力彌が齎した密書を奪ひ、力彌に刺されて夫勘平の苦衷を告げ、同志に加へられんことを切望し、身を殺して夫の本意を遂げさした。この時鈇九太夫は床下にあつてこれを窺つてゐたが、その場に殺された。彼は師直の間者となつて大星等の動靜を探つてゐたのであつた。さて賀古川本藏の妻戸難瀨は娘小波を伴ひ、大星を訪れて嘗て約せし力彌との結婚を迫るが、容易に許されない。本藏、虛無僧姿にて入り來り、鈇貞九郎の首を示し、その難に遭うたことを物語り、疑晴れて祝言の式を擧げる。又本藏は庭の雪佛を見て、師直の滅亡の近きを告げた。力彌が槍を取つてその雪佛を突くと、中から師直の館の圖面が出た。本藏の和歌の師兼好法師の好意によるものであつた。かくて遂に時節は到來した。大星由良は一夜石山寺に義士を糾合して鎌倉に向つた。時に兼好は草庵に在り、九天玄女が諸星を下界に下して大星以下の義臣に生れさせ、奸臣佞者を誅戮して道を行はしめたが、既に天數つきて諸星天に歸る時期が來たといふ奇夢をみて、大星等が故主の仇を報じたことを悟つたが、果して高階師直を討つたのであつた。

【構想】水滸傳飜案の風潮に從つて作つたもので、その主として據つた材は、忠臣藏であるが、俚俗の耳目に熟してゐるものであるから、その舊態を殘すまいと期し、ただそれの因果を藉り、水滸傳の結構を以て事件の葛藤を多くしてゐる。すべて支那風の發揮に努めたものである。【史的地位】京傳の讀本に於ける處女作であると共に、讀本作者として曲亭馬琴と對立の第一戰をなしたものである。既に建部綾足が「本朝水滸傳」（別項）を書いて以來、水滸傳の飜案が續出したが、「女水滸傳」（別項）を經て、馬琴の初作「高尾船字文」（別項）が現はれた。京傳は明かにこの風潮に誘發されたもので、馬琴が水滸傳に「伽羅先代萩」（別項）を撮合したのに對して、彼は忠臣藏を結合したのである。兩者共に失敗した點で似るところがあるが、その效果から見れば、京傳の方が傑れてゐる。【價値】內容の著しく異なつた說話を附會しようとしたのが失敗のもとである。遂に內面的にも外面的にも統一し得なかつた。何等效果を持たない挿話や附會の脚色に不自然さを增し、又物語の理想精神を不明にした。併し「近世物之本江戶作者部類」（別項）によると、當時の讀者には非常に歡迎されたさうである。歷史的意義を有する作品として注意されるものである。〔笹野〕

忠臣身替物語（ちゆうしんみがはりものがたり）　淨瑠璃五段　時代物　【成立・興行】寬政板「外題年鑑」の宇治加賀掾の語物中に、本作の名が見えて居り、繪入十七行十三丁半本の卷末に、元祿二年巳ノ八月吉日とある。竹本筑後掾の正本「今樣かしは木」「金平法問諍」は共に本作の外題替。「外題年鑑」は「今樣柏木」の興行を元祿二年八月としてある。【諸本】繪入十七行十三丁半本、元祿二年八月板。八行四十七丁本（義太夫正本「今樣かしは木」）、十行二十八丁本（筑後掾正本「今樣かしは木」）、十行三十丁本（筑後掾正本「金平法問諍」）武藏屋本（金平法問諍）、近松門左衞門全集第九卷（今樣かしは木）・近松全集第三卷（忠臣身替物語）等。【作者】十行二十八丁本「今樣かしは木」、十行三十丁本「金平法問諍」は共に竹本筑後掾、近松門左衞門連名の奥付があるが、俄に近松の作とは定め難い。【題材】上總少掾正信の正本「公平法問諍」（寬文三年板）の改作。「外題年鑑」の井上播磨掾の語物中にも「金平法問諍」があるが未見。

【梗概】〔初段〕（大序）源家四代の武將賴義は文月七日の酒宴の折、池の蓮葉に宿れる白露の散るを見て無常を觀じ、次男加茂次郎義綱に父の菩提のため出家せよと命ずる。義綱は出家を嫌ふが、賴義は三浦和田左衞門爲宗を召し、東山の滿要上人を請じて義綱を剃髮させよと命じて座を立つ。（中）義綱と妹脊の約束ある柏の前は、義綱が出家を强ひられてゐるといふ事を聞き、その夜坂田兵庫頭公平の許を訪ね、事情を打明けて圖る。其處へ義綱も密かにやつて來たので、公平は萬事を引受け、義綱を己が館に匿ひ、柏の前を歸らしめる。（切）翌朝賴義が滿要上人を請待し、義綱剃髮の準備をして待つ所に、義綱が行方不明との報があつたので、賴義は怒つて奧に入る。所へ公平が赤地の錦直垂の上に墨染の衣を着し、三枚鎖の兜の緒を締め、大太刀を横たへて出で來り、上人をとらへて法談を試み、論爭の末上人を遣り込め、念佛の力で受けて見よと太刀を拔けば、上人は驚いて逃げてしまふ。公平は驚き制する人々に向つて、上人は源氏の武力を碎く魔王だと苦言を呈して去る。〔二段〕（序）公平は賴義の討手を避け、手勢を引具し、義綱の供をして江州石山寺に落ちる。賴義聞いて大に立腹し、嫡子八幡太郎義家を討手の大將、三浦和田左衞門爲宗、鎌倉權五郎景政兩人を侍大將とし、その勢七千五百餘騎で押寄せる。（中）義綱が公平と共に寺の庭前で月見の宴を催してゐる所へ、和田左衞門爲宗が只一騎訪ね來つて公平に對面し、事を圓滿に解決するため義綱に出家を勸めて吳れと賴むが、公平肯んぜず、爲宗は空しく本陣に歸る（繪入本はこの月見宴の場を缺く）。かくして公平は出陣の用意をして義綱の前に出で、手勢と共に軍の門出の盃をする。（切）爲宗は本陣に歸り、義家に公平の所存を申上ぐれば、義家も思案にくれるが、父賴義から催促の使が頻りなので、已むを得ず出陣の

は、妻傳兒の實家に身を寄せ、計らず繼母のために傳兒を賣られたが、鹽冶家の臣千崎彌五郎と邂逅し、大星の義擧に投ずる傳手を得た。〔後編〕京に於ける大星は日夜花柳の巷に遊んで行跡を晦ましてゐた。こゝに名妓とうたはれてゐた傳兒は、或る夜大星の子力彌が齎した密書を奪ひ、力彌に刺されて夫勘平の苦衷を告げ、同志に加へられんことを切望し、身を殺して夫の本意を遂げさした。この時鈴丸太夫は床下にあつてこれを窺つてゐたが、その場に殺された。彼は師直の間者となつて傳兒に殺された。〔後編〕（別項）を經て、馬琴の初作「高尾船字文」（別項）が現はれた。京傳は明かにこの風潮に誘發されたもので、馬琴が水滸傳に「伽羅先代萩」（別項）を撮合したのに對して、彼は忠臣藏を結合したのである。兩者共に失敗した點で似ると

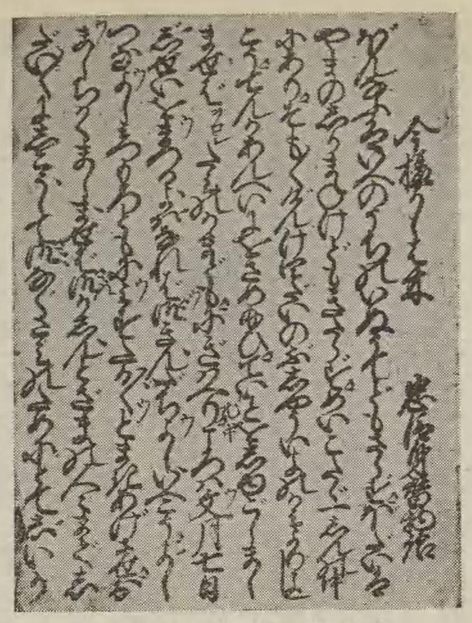
を多くしてゐる。すべて支那風の發揮に努めたものである。【史的地位】京傳の讀本に於ける處女作であると共に、讀本作者として曲亭馬琴と對立の第一戰をなしたものである。既に建部綾足が「本朝水滸傳」（別項）を書いて以來、水滸傳の飜案が續出したが、「女水滸傳」

三卷、忠臣身替物語）等。【作者】十行二十八丁本「今樣かしは木」、十行三十丁本「金平法問諍」は共に竹本筑後掾、近松門左衞門連名の奥付があるが、俄に近松の作とは定め難い。【題材】上總少掾正信の正本「公平法門諍」（寛文三年板）の改作。「外題年鑑」の井上播磨掾の語物中にも「金平法問諍」があるが未見。

【梗概】〔初段〕（大序）源家四代の武將頼義は文月七日の酒宴の折、池の蓮葉に宿れる白露の散るを見て無常を觀じ、次男加茂次郎義綱に父の菩提のため出家せよと命ずる。義綱は、妻傳兒の實家に身を寄せ、計らず繼母の

勢七千五百餘騎で押寄せる。（中）義綱が公平と共に寺の庭前で月見の宴を催してゐる所へ、和田左衞門爲宗が只一騎訪ね來つて公平に對面し、事を圓滿に解決するため義綱に出家を勸めて呉れと頼むが、公平肯んぜず、爲宗は空しく本陣に歸る（繪入本はこの月見宴の場を缺く）。かくして公平は出陣の用意をして義綱の前に出で、手勢と共に軍の門出の盃をする。（切）爲宗は本陣に歸り、義家に公平の所存を申上ぐれば、義家も思案にくれるが、父頼義から催促の使が頻りなので、已むを得ず出陣の

下知をする。公平方敗戰し、互に火攻を敵らす。中にも公平の養子秩父十郎頼平は鎌倉權五郎景政と渡り合ひ、敵も味方も手に汗握つて見物する。折しも北國より歸京の途にあつた渡部兄弟が急を聞いて馳せ來り、雙方を引分ける。かくて渡部國綱は公平に暫くの猶豫



を請ひ、味方の本陣に到り、爲宗に向ひこの際施すべき思慮はないかと謎をかける。〔三段〕（序）爲宗は今日の國綱が謎の意を悟つて一子竹若丸を近付け、義綱の身替に立つて呉れと頼めば竹若は潔く覺悟を決める。爲宗は喜んで竹若を伴ひ密かに公平を訪ね、親子の覺悟を述べ、一刻も早く義綱の供をして落ちて呉れと勸める。公平は一旦辭退するが、爲宗親子の決心動かし難く遂に竹若の首を打落す。物音に驚き出で來つた義綱は、話を聞いて感謝の涙にくれるが、やがて公平を供として八幡の方へ落ちる。かくて爲宗は公平の贋首を拵へ、館に火を放ち、馳せ付けた寄手の勢に向つて義綱も公平も和田左衞門が討取つたと呼ばはる。（中）爲宗が頼義の前に罷り出で二つの贋首を示せば、頼義これを賞して二つの首

から竹若の安否を問はれる儘に竹若が身替りに立つた次第を語り、竹若の首を示す。北の方は我が子の首に抱きつき、悲しみの餘り氣も魂も消え果てたやうになると、忽然竹若の靈が現はれ、菩提を弔つて呉れと告げて消える。所へ一人の女が駈け來り夫の敵と呼んで爲宗に斬つてかゝる。爲宗取つて伏せ顏を見れば、柏の前であるので驚くが、理由を聞いて、初めて姫と義綱との關係を知り、巨細に事の眞相を語つて聞かせ、義綱は今八幡に忍んでゐると告ぐれば、姫は感謝の涙にくれながら去る。〔四段〕（序）義家は母御臺所に弟義綱の安否を尋ねられるので已むを得ず、爲宗に討たれた顚末を言へば、御臺所は義家を責め、狂亂の態となつて奥に入る。義家は思案に餘り腹を切らんとする所へ、虚空より一羽の白鳩が筆を啣へて飛び來り、障子の面に時を待てとの八幡の神託を書き記して去る。義家、これを拜して生害を思ひ止まる。（中）「かしはのまへ道行」柏の前は、義綱の跡を慕つて八幡の麓に辿り着く。（切）義綱の留守に公平が義綱の小袖を引被つて寢をしてゐる所へ、柏の前が辿り着き義綱と間違へて種々かき口説く可笑味がある。そこへ義綱が歸り來り姫と會つて嬉し涙にくれ、種々物語る話の末、明日御臺所が六條河原で義綱追善のため滿要上人を頼んで流灌頂を行ふと聞き、公平は緣起が惡いと怒つて都を指して急ぐ。〔五段〕（大切）六條河原の式場へは頼義も來てゐる。やがて儀式が始まると、折から暮れかゝ

つた水の面に公平が亡靈を現はして現れ、滿要上人を愚弄した擧句これを追ひ拂ふ。豫て義綱の首が竹若の身替りなるを見拔いて爲宗の忠義に感じ、義綱の勘當赦免の機を待つてゐた頼義は、この公平の潔い振舞に感じ、義綱の勘當を許すとあつたので、義綱も其處に立ち現はれ、御臺所を初め、上下一度に悅びの聲を揚げる。〔高野（正）〕

【構想】身替りの趣向は謠曲「仲光」（滿仲）から出たもので、上總少掾の「公平法門諍」より層原作に近づいてゐる。（公平法門諍參照）

【參考】近松全集第三卷解題

中殿御會圖卷（ちゆうでんぎよくわいづくわん）

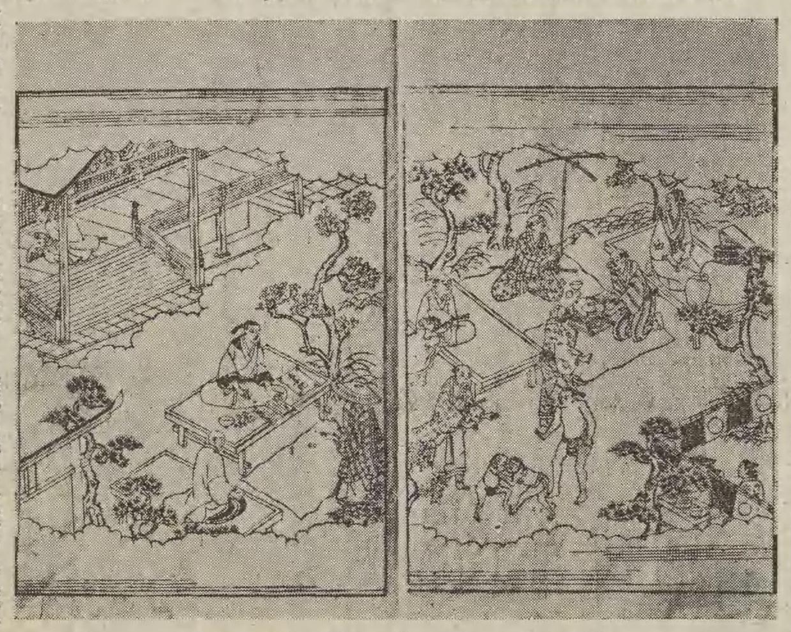
繪卷一卷【解說】順德天皇の建保六年八月十三夜、宮中清涼殿に於て和歌管絃の御會を催された折の光景を圖繪したもので、繪は藤原信實筆、この繪の前後に添へた御會の記事と當夜の和歌とは藤原行能の書と傳へられ、この圖卷はもと九條家に祕藏せられてゐたといふが夙に烏有に歸して了ひ、今は同家に住吉如慶の摸寫したといふ白描一卷を存する。なほ毛利公爵家に住吉具慶の摸本があり、その他にも二三摸本が知られてゐる。順德天皇を初め、右大臣道家以下公卿殿上人三十一人が殿中に列坐奏樂の光景で、この圖の畫者信實、書者行能の姿も一隅に描かれてゐる。藤原信實は鎌倉時代の初め、大和繪の肖像畫卽ち似繪に於て名人と讃へられた人であつて、この圖の如きは、思ふに當時の光景を描いて圖樣も各人の容貌も、蓋し寫實的なも

のであらう。樣本に依つて見ても、その樣相といひ、それ〴〵特徵ある面貌といひ、原本の趣致を想ふに足るべく、當時單に靜的な單獨の肖像畫以外、集合的場面を取扱つて、各人の似顏をその動作に於て表現する似繪の發展方向を窺ふ上にも興味あるもので、そこにまた似繪の代表作家としての信實の特色ある技量の一端をも彷彿することが出來る。〔田中（一）〕

中本（ちゆうにん）「人情本」を見よ。

畫夜用心記（ちうやようじんき）

【作者】北條團水。湖西繁平の序文に「此畫夜用心記全部六册は鳳城團粹居士醉中の戲れに書捨てられしを撮（とりあつ）めて一帙と成せり」とある。鳳城團粹居士は北條團水の別號。【名義】繁平が序の一節に、「大概世間に謀計（かにり）子といふ



畫夜用心記（挿畫）

者、僞をたくみ辯舌もつて人を誑かし、金銀を掠め奪ひし方便、古今の間語り傳へしを、三十六種に書きつらねたり。這裏虛あり、實あるべし。ただ民家用心の爲に記して、眞僞覺悟の種に編める者也」とある。【刊行】寶永四年【諸本】西鶴文集（有朋堂文庫）所收。【解說】「棠陰比事物語」（別項）の刊行されて以來、社會に於ける種々なる惡事を題材とした浮世草子がいろ〳〵出てゐる。「本朝二十不孝」「本朝櫻陰比事」「好色世の晝狐」「鎌倉比事」（各別項）「桃陰比事」などは、その類である。本書も同類に屬すべきもので、各卷六種、都合三十六種の詐僞行爲の類を材とした說話より成る。支那の「杜騙新書」から思ひついたものであらうと言はれてゐる。描出された人情などよりは、とり〴〵樣々の詐僞の手段に興味を覺えるものが多いのは惜しい。但し叙述描寫の間に世相の一面を窺はせるものもないではない。寶永六年刊の「儻偶用心記」（別項）は、本書を摸倣して作られたものである。〔藤村〕

中右記　日記　七卷【著者】中御門右大臣宗忠【名稱】「宗忠公記」「中右抄」ともいつた。中右は家號と官名との一字を取つたものである。又「愚林」ともいつた。宗忠の祖右大臣俊家の日記を「大右記」といひ、宗忠の引用した中に「尊林」といつてゐる所から察すると、愚林は尊林に對した謙稱で、恐らくはこの日記の原名であらう。【諸本】寫本では內閣文庫に舊藏本二十九册、久松家獻本八十册等がある。又宮內省圖書寮には宗忠自筆本一卷がある。天仁二年十月十八日より十二月二十四日に至る熊野詣に關する別記で、卷首が缺失してゐる。「史料通覽」に收められ、大正四年八月以降同五年五月までに刊行された。【解說】寬治元年から、保延四年二月に至る日記でその中間に缺逸して傳はらぬ個所も尠くない。本書は楓山文庫藏本、村上勘兵衞の獻本に、近衞・九條二家所藏本を補寫した百九册本を、更に諸書に據つて增補訂正したもので、卷一は、寬治元・二・三・四・五年、六年夏冬、七年冬、嘉保元・二年、永長元年。卷二は、承德元年春・四・五、二年、康和四年、五年春夏冬、長治元年。卷三は、長治二年、嘉承元・二年、天仁元年、二年冬。卷四は、天永二・三年、永久二年。卷五は、元永元・二年、保安元年、大治二年。卷六は、大治四・五年、長承元年。卷七は長承二年春・夏、三年春・夏、保延元年、二年春・六、秋・冬、三年、四年正の記事を記し、終に佛事部類・脫漏追加・目錄等が添へてある。その佛事部類と目錄とは本文にない所もあつて、恐らく本書の殘缺しない時分に抄出部類して置いたものであらうと思はれる。【價値】宗忠奉公六十年、堀河・鳥羽・崇德三代五十二年に亙る日記で、中間缺佚する所が少くないとはいへ、平安末期に於ける人情・風俗を知らんとするには、必要缺くべからざる資料である。〔石村〕

【參考】歷世記錄考　星野恒（史學叢說第一集）

中庸　經書　一卷【著者】子思。「史記」（卷四十七）孔子世家に、「子思中庸を作る」と云ふ。宋の歐陽脩・陳善、淸の崔述・姚際恆等を初め、これに疑を挾む學者が少くなく、伊藤仁齋も、この書の前半（第一―十五章）を上篇として子思の作とし、後半を下篇として中庸の本文にあらずと主張してゐるが、いづれも肯聽見である。【名義】中・庸の二字は本書の中に見え、全篇の意義を總括する眼目であるから、取つて書名とした。【成立】戰國時代初期【由來】朱子は中庸章句の序に、「中庸は何の爲にして作るや、子思子道學の其の傳の失はんことを憂へて作れるなり」と云ふ。蓋し當時老子の一派が、宇宙の本體から論及して、高遠な哲理を鼓吹し、儒家に對立する有力なる學派であつたので、儒家の立場からこれに對抗して、孔子の常識的敎學に深遠な立脚地を與へるために作られたのがこの書である。これは開卷第一に、「天命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふ」と云つて、儒家の道に形而上學的根據を與へ、又孔子の言を引用して、「隱を索め怪を行ふは後世述ぶるものあらん、吾は之を爲さず」と云つたのに徵しても明かである。子思の著書は、「漢書」藝文志儒家の部に、子思子二十三篇と、禮類に別に中庸說二篇とがあるが、今本はその何れから出たかは明かでないが、恐らく後者であらう。【表章】「大學」と同じく「禮記」中の一篇（第三十一篇）であつたが、劉宋の戴顒が始めてこれを摘出して、「中庸傳」二卷を著し、又梁の武帝は、「中庸疏」二卷、「私記制旨中庸義」五卷を作つたが、唐の李翺に至つて益々これを尊信して、「復性書」三篇を著し、「中庸」の趣旨を敷衍して復性滅情の說を主張し、宋に入つて司馬光が、「大學」と共に廣義を撰び、范仲淹・周茂叔・二程子等、何れもこれを尊重する等。「中庸」は「大學」よりも一層早く諸家の注目を受けたが、朱子が章句を作つて四書に入れ、孔門の根本書として以來、愈々世人の尊敬を受けるに至つた。

【內容】（天道論）本書の冒頭に、「天命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふ」と云ひ、性は卽ち天賦で、これに循へば道である。故に天道は卽ち人道、人道は卽ち天道であるとして、天人合一の眞理を闡明した。換言すれば、天地の法則は卽ち人の本性とするので、子思はこれを誠と名づけた。孔子の仁を忠恕と解した曾子の學系を承けた彼が、己を盡すの忠から一轉して、これを誠と云つたのは、極めて自然な展開であつた。天地の法則たると同時に人の本性である所の誠は、完全自足な本體で、自ら發展すると共に、萬物をして完成せしめ、「誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり」（第二十・二十五章、朱子章句本、下同）天地の間に流行するが、五官によつて知覺することは出來ず（第三十三章）、恰も鬼神の如く（第十六章）、又到るところ遍滿充足し（同上・第十二章）、且つ無始無終、恆久不變である（第二十六章）。誠とは天地の法則であるから、獨り人の本性が誠であるのみならず、同じく誠によつて存在する萬物の本性も亦誠でなければならぬ。卽ち森羅萬象は悉く誠の發現である。要するに誠は天人一貫の契機であるのみならず、また內外物我を結合すべき樞紐である。

〔倫理說〕誠が天地の法則であり、又人の本性であるならば、人は唯々自己の本性に率つて行動すれば自ら道に叶ふべきで、人間の行爲は價値の世界を離れて、修養或は敎育の必要を認めず、自然因果の律法に支配さるべきであらうか。然るに彼は開卷第一に、「道を修むる之を敎と謂ふ」と云ひ、敎育修養を必要としたのは、彼が人の資性の階級を認めたからである。卽ち人の資性を二種に大別し（第二十章）、敎養の必要と可能と效果とを述べ、修養の方法としては、「道性を尊び」「問學に道る」の二綱領に歸し、而も二者の竝行を要求する。これは勿論孔子の博文約禮を祖述したのであるが、尊德性は約禮の客觀的、他力的であるのに比して、著しく主觀的、自力的となり、一

たものである。又「愚林」ともいつた。宗忠の祖右大臣俊家の日記を「大右記」といひ、宗忠の引用した中に「尊林」といつてゐる所から察すると、愚林は尊林に對した謙稱で、恐らくはこの日記の原名であらう。【諸本】寫本では內閣文庫に舊藏本二十九册、久松家獻本八十册等がある。又宮內省圖書寮には宗忠自筆本一卷がある。天仁二年十月十八日より十二月二十四日に至る熊野詣に關する別記で、卷首が缺失してゐる。「史料通覽」に收められ、大正四年八月以降同五年五月までに刊行された。

中庸（ちゆうよう）　經書　一卷　【著者】子思。「史記」（卷四十七）孔子世家に、「子思中庸を作る」と云ふ。宋の歐陽脩・陳善、淸の崔述・姚際恆等を初め、これに疑を挾む學者が少くなく、伊藤仁齋も、この書の前半（第一―十五章）を上篇として子思の作とし、後半を下篇として中庸の本文にあらずと主張してゐるが、いづれも皆臆見である。【名義】中・庸の二字は本書の中に見え、全篇の意義を總括する眼目であるから、取つて書名とした。【成立】戰國時代初期【由來】朱子は中庸章句の序に、「中庸入つて司馬光が、「大學」と共に廣義を撰び、范仲淹・周茂叔・二程子等、何れもこれを尊重する等。「中庸」は「大學」よりも一層早く諸家の注目を受けたが、朱子が章句を作つて四書に入れ、孔門の根本書として以來、愈々世人の尊敬を受けるに至つた。【內容】〔天道論〕本書の冒頭に、「天命之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ふ」と云ひ、性は卽ち天賦で、これに循へば道である。故に天道は卽ち人道、人道は卽ち天道であるとして、天人合一の眞理を闡明した。換言すれば、人道の根本を天道に求めてゐる。更に道問學の細目に就いて、彼は博學・審問・愼思・明辨・篤行の五者を擧げてをる。その云ふ所は先知後行說であり、且つ知識も亦外的知識を先にし、內的知識を後にしてゐる。而して尊德性の方法として、愼獨の工夫を擧げ（第一章）、「大學」が愼獨を以て誠意の工夫とするのと相表裏してゐる。この兩個の修養法に依つて到達せらるべき理想は誠であり、至誠の域を中和と云ふ。「喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ、發して皆節に中る、之を和と謂ふ。中とは天下の大本なり、和とは天下の達道なり。中和を致して天地位し、萬物育す」（第一章）。中は性の體、和はその用であり、體用を兼ねてこれを中和と云ふ。卽ちその形式が中であり、その內容は誠となるが、これは易の思想と頗る類似してゐる。さて「中」とは堯舜以來の敎で（論語堯曰）、且つ舜の四德、皐陶の九德、洪範の皇極及び周易等は、何れも中を重んずるので、卽ち子思は、上古以來の敎を采り、孔子の說によつて自己の學說を組織したものである。中とは「過不及無き德」の謂ひで、その道が平常であり萬世不易であるからこれを庸と云ふ。庸とは常經の意である。或は中和と云ひ、或は中庸と云ふも、皆修養の究極の目的たる誠に外ならぬ。而してこの域に達した者を名づけて聖人（第二十章）と云ふ。【註釋書】（四書の項參照）禮記正義の內中庸篇 鄭玄注唐孔穎達等正義○中庸章句 宋朱熹○中庸 輯略同上○中庸或問同上○中庸直指 明德淸○中庸發揮 伊藤維楨○中庸解 荻生雙松【參考】中庸に對する疑問說を論ず　藤塚鄰（東亞研究三ノ一・二・三・五・八）○先秦學術史上に於ける中庸の地位 武內義雄（支那學二ノ九）○子思子に就いて 同上（卷子原始）〔宇野・木多〕

中陵漫錄（ちゆうりようまんろく）　隨筆　十四卷　寫　【著者】佐藤成裕【解說】物產家佐藤中陵の隨筆で、動植・金石・地理・歷史・風俗・節序・氣候、俗間の傳說等、すべて博物的の考說數百項を收めたもの。蓋し廣覽洽聞の結果をこゝに載集した槪がある。稀に挿畫があり。文政九年中島嘉春の序がある。【著者小傳】佐藤成裕、字は綽通、通稱平三郎、中陵はその號、一に莠蓑堂ともいふ。江戶の人。物產學を以て、島津・上杉の二侯に聘せられ、又水戶德川家に仕へて、天保元年「山海庶品」百卷を著した。〔和田〕

櫧陰雜錄（ちよいんざつろく）　隨筆　二卷一册　寫　【著者】增島固【解說】漢文の隨筆で、上卷に六藝稱經、十三經註疏、易之名不始于文王以下二十二條。下卷に、盥水隨海水盈虛、子程子、扶桑花以下三十五條を載せてゐる。槪ね支那の經籍・典故にかゝる解說である。序跋はない。〔和田〕

牒（ふて）　古文書　【解說】大寶令の公式令の規定に依れば、牒は主典以上の官人が諸司に申牒する文書となつて居り、その樣式は、

牒、云々、謹牒、
年月日　其官位姓名牒

併し實際に於ては寧ろ移（別項）と混同して、互通文書として用ひられ、遂に移は行はれず、牒のみとなつたのであるが、その代表的のものは太政官牒である。これは太政官よりその被管ならざる所へ遣す公文書で、單に官牒ともいふ。恰も太政官符と相並ぶもので、若し八省や諸國等の被管であれば官符で出すが、寺や社の如き直接被管でない所へは官牒で出すのである。例へば、

太政官牒金剛峯寺
應任院廳下文、以備後國大田庄地利宛當寺大綱不斷兩界法用途、免除勅事院事大小國役等事
右、太政官今日下彼國符偈、得彼寺沙門鏗阿今月日解狀偈、謹檢案內、（中略）者、正二位行權中納言兼左兵衞督藤原朝臣頼實宣、奉　勅、依請者、國宜承知、依宣行之者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、
文治二年五月十日
修理左宮城判官正五位下行左大史兼算博士小槻宿禰（花押）牒
修理左宮城使從四位上行左中辨兼阿波介藤原「朝臣」（朝臣は自署）

この種の牒には、官牒の外に、平安朝以後の諸司、諸國、藏人所、留守所、記錄所、雜訴決斷所、門院廳、社寺、諸家等いろ〳〵の牒があるが、樣式は大體官牒に准じたものである。なほ牒は國際文書としても用ひられてゐる。所謂牒文或は牒狀はそれである。〔伊木〕

蝶衣（てふい）　俳人　【姓名】高田千鄕。初め四十平といひ、大正六年千鄕と改む。【生歿】明治十九年一月三十日生れ。昭和五年九月二十二日歿。享年四十五【閱歷】淡路國津名郡山田村草香の人。早稻田大學を病氣のため半途退學、大正六年以後湊川神社の神官であつたが、又病氣のため辭して鄕里草香に幽棲し、そこに歿した。俳句は中學時代から大谷繞石（別項）を師として學び、後、虛子・三允等の知遇を受けて年少夙く俳壇に顯はれ、「アラレ」の同人として角逐し、「中央公論」の俳壇選者であつたこともある。その後「懸葵」「石楠」その他求められるが儘に句を寄せて偏せず黨せず、孤獨を樂しむの風があつた。【著書】蝶衣句集（內題には「蝶衣島舟」とあり、アラレ叢書第二編）【批評】明治四十一年、二十七歲にしてその句集を公刊したことは、當時にあつては驚異すべき事柄であつたが、彼の心事は、一に、「世の識者に垂敎を仰ぎ以後の句作に參考にしたい」ためであつた。その天分の豐かな點に於ては明治より昭和へかけて俳壇屈指の一人といふべく、古語の驅使斡旋に一特色を有してゐた。その句品の高いのは溫藉な人格の反映と見るべく、制作の態度は終始一貫、幾んど時潮に動かされることがなかつた。作としては「弱き身をたよりにされて晝寢かな」などよりも、「牀頭の月に腦冷えて眠りたり」や「群鳥の尾越すあとより時雨懸く」などに、その特色が窺ひ得られる。〔白田〕

潮音（てうおん）　短歌雜誌　【主宰】太田水穗【創刊】大正四年七月【解說】本誌の歌の思潮は水穗の歌風と變遷を共にしてゐる。その一は第一歌選「苅萱集」の時代、その二は第二歌選「初ざくら」の時代、その三は最近の第三歌選「荒海」の時代といふべく、その一、その二は水穗が芭蕉に傾倒してゐた時代で、歌風著しくその影響を受けてゐる。水穗はその一を、「潮音」の歌風を定位せしめたものとなし、その二を既に定位した根本のものの表現に力を致したものとなし、その三卽ち最近の歌風を「前面に凄じい荒海が現はれ、息をつぐ間もなく苦難の浪を浴びなければならなかつた。潮音の流行體或は變相期といふべきものである」と云つてゐる。主なる同人に、四賀光子（水穗夫人）・小田觀螢・大井廣・峯村國一・野澤柿葺等がゐる。從來の「潮音」は久しく歌壇の裏側を行つてゐた觀がある。今俄かに現代意識に轉向して、所謂荒海に乘り出したが、よくその所期を達し得るかどうかは今後の努力に俟たねばならぬ。〔金子〕

長歌（ちやうか）　和歌　【名稱】「ながうた」とも

いふ。【成立】長形式の歌は記紀の歌謠にも多く見られる。併し未だ形式から言ふと確定しないのであつて長短句の連續の偶數形式のものもあれば奇數形式のものもある。又句の音數も一定せず、終りに反歌もそつてゐない。而して次第に奇數句が有力となり、また反歌(別項參照)が生ずるに至つた。反歌の萌芽は既に記紀の歌謠の中にも見られる。それが萬葉集時代になると、音數が五七音に大體一定し、奇數句形式となり、また反歌が獨立して、所謂長歌形式となつたのである。もとより「萬葉集」の中にも反歌のない歌があり、偶數形式の歌さへあるが、それは過渡期にたつ少數の作であつて、大部分は奇數句形式であり、且つ反歌を有する。【解說】この長歌の性質を要素の上から素材・形態・內容に分けて見る時、第一に素材の上では叙景・叙事・抒情・抒思的素材がそれ〴〵用ひられてゐる。たとへば山上憶良の長歌は抒思的素材を多く用ひ、高橋蟲麿は叙事的素材を多く用ひてゐる。これに對して人麿の長歌は抒情的素材であり、赤人の長歌は叙景的素材を多く用ひてゐる。而して素材的な立場からわけて見る時、長歌形式の素材としての感情や形象はやゝもすれば單調に流れ形態にひきずられてゆく感がある。思想的もしくは事件的素材が、漸く長歌形式の單調化を免れてゐるのであり、叙景的素材や感情的素材もこれ等を加へることによつて單調化を免れてゐるのである。かういふ意味で長歌の素材は叙事的もしくは抒思的素材が最も適してゐるのである。然らばかくの如く複雜な素材でなければ單調を免れない長歌の形態は、形態としてどれだけの特質を有するかといふ點を見るに、長歌形式の完成した形は五七七であり、これに反歌が加はつてゐるのである。もとより「萬葉集」の長歌も五七七の形式のみではなく種々の變化は見られる。例へば憶良の令反惑情歌は、長形式の部分が三段落に分れて五七七・五七七・五七七となつて居り、これに反歌が加はつて所謂長歌形式の複合體になつてゐる。かうした複合的な形式は「萬葉集」の中にも種々の意味で見られるが、「萬葉集」に於てはそれ以前の複合體であつた、もしくは未分の狀態であつた形態の中から反歌的要素が獨立し、また長歌形式と旋頭歌形式と短歌形式とが、それ〴〵確然とした區別を生ずるに至つたのであつて、それは純粹なる所謂長歌形式を作出したものではあるが、それだけ「萬葉集」に於ける長歌形式は形態としては單調を免れない。かくて大體に於て五七の連續の形態の中に素材の構成を發展させて行くのであるが、形態としては殆ど何等の變化も見られない。この形態は、「古今集」以後の長歌になると、形の上では同樣であるが、五音から起して、やがて七五音に變化する。これは短歌形式に於て、五七調から七五調へ展開したのと同樣であつて、その萌芽は已に「萬葉集」の長歌の中にも見られる事は、短歌に於ても同樣であるが、かくの如き形態が主要なるものとなつたのは言ふまでもなく「古今集」以後に於てである。併しかくの如き長歌に於ける七五調は、五七七の形式に比して、長歌形式の單調性を和らげる效果は餘り多くなく、却つて素材の自由なる表出を妨げる缺點があり、七五音の連續は下の句が輕いために餘りに優美流麗に過ぎて力がないことは、明治時代の新體詩の形式と同樣である。かゝの如く長歌形式にも多少の變遷はあるがその全體を通じて見られる形態の單調性に變化を與へ、複雜ならしめるために部分的の修辭を必要とするに至つた。その主要なるものは對句であつた。近世の歌格研究家が長歌の根本的な格として對句を論じたのも發生的に於てのみならず、形態の效果の上からも一面の道理はあつた。單調なる長歌の形態の上に於て重年や守部や是香の論じたやうな種々の對句を用ひて變化を與へる事は、やむを得ない必要の事であつたのである。その他序や枕詞の如きも、かくの如き單調なる形態に出來るだけの變化を與へるために用ひられた修辭に外ならない。人麿の長歌の豐富なる修辭技巧は、感情的素材と單調なる形態とから成る彼の長歌に、變化と複雜とを與へるための方法であつたのであり、その點に彼の長歌は效果を擧げる事が出來たのである。而してこの豐富なる修辭技巧を用ひ得なかつた、もしくは用ひ盡してしまつた人麿以後の長歌は、素材的方面に於て新しい展開を見出す事によつて、形態の單調を破らうとした。抒思的素材と叙事的素材とはそれである。憶良と高橋蟲麿とが長歌歌人として成功したのは、內容としての眞實なる感動といふ點とともに、素材的方面が重要なる動機をなしてゐる。而もそれ以後、この點に於て更に進み得なかつた長歌形式は當然衰退してゆくより外なかつた。形態的にも素材的にも新しい開展をなし得なかつた家持の長歌が、如何に慘めな姿を示してゐるか。長歌は「萬葉集」に於て初めて完成したとともに、「萬葉集」の後期に於て既に衰退の兆を示してゐるのである。それは純粹なる長歌形式の形態そのものの有する本質的缺陷であつた。以上の如くして長歌を要素的に分解して考へる時、その內容は短歌と同じく我の眞實なる感動、個性的な抒情的精神であるのであるが、その形態は未定型式から次第に分解されて、純粹の長歌形式となるに從つて、その形態の單調性が生じて來たのであつて、そのために形態の上に種々の修辭技巧を加へ、また素材的方面から種々變化と複雜とを求めて、その生命を持續せしめたが、それが行き詰り、殊に長形式の終りまで緊張性を持續せしめる感動の稀薄になる時、長歌は衰退に傾いたのである。(和歌參照)

【參考】長歌詞珠衣小國重年○長歌撰格福守部○長歌大意福守部○長歌私編八木美穗○長歌規則中村知至○長歌玉琴六人部是香○日本歌學史佐佐木信綱○歌書總覽福井久藏○長歌の本質久松潛一(上代日本文學の研究)○國歌の胎生及び發達 五十嵐力 【久松】

調鶴集(てうかくしふ) 歌文集 三卷 【著者】井上文雄 【刊行】慶應三年 【諸本】明治名家家集上卷(續日本歌學全書)・明治初期諸家集(校註國歌大系)所收。【解說】佐佐木弘綱の慶應二年二月の序文がある。三部に分れ、短歌は四季・戀・雜に部立し、長歌は五篇を載せ、文集は調鶴文草と題す。本書は弘綱が和學を講じた藤堂侯に聞えて、その出資で上木したものである。文雄は中世の撰集よりも同時代の家集の自由にして個性の發揮せられることを喜び、又桂園派の平弱の弊に陷り、千篇一律となつたのを攻擊し、用語の自由を主張し、俳諧的趣味をも鼓吹した。かく歌に一見識を持つてゐたから、集中にも秀逸の歌が少くない。王朝時代の趣味を詠じ、田園の野趣を歌つた歌に佳作が多く、滑稽洒落の歌も亦その得意とする所、時勢を諷誡した作のあるのも

小路實岳に就いて學んだ。桃澤夢宅・西山正・浮(斧)木・小寺清元・木下幸文等多くの門下を輩出した。【閲歴】彼は隱士的生涯を送つてゐたので正傳はない。備前の玉島に生れたらしい。備後福山説もあるがこゝは幼時ゐたことのあるだけの土地らしい。出でて倉敷の一商家綿屋に仕へた。町内錢屋の一老婆に辱められ、出世を思うて玉島の天台派圓乘院に入り、慈照法印に就いた。寺内で常に他の小僧の師範となつてゐたが、十三歳の時更に志を立てて上洛し、叡山に登り教義の研究に志した。信覺上人に認められ七年間奉侍したと云ふ。併し念佛修行に心をよせて、その後は普く念佛行脚に身を託したらしい。遙に江戸にも下り、又紀州の日方浦に止錫した事もあつた。併し彼も似雲(別項)などと等しく、歌道に對し根强い蠱惑を持つてゐた。或る夜、月光の枕邊に射込んでゐた時、郭公の空わたるを見て歌を得、時の堂上歌人武者小路實岳の門を叩いたと云ふが、これは偶然の一挿話だけのものであらう。天台から念佛に出た所にも彼の面目がある。名號を稱へるを詠歌に換へたことにも、彼の詩人的の性格が感ぜられる。彼が正徹(別項)に似て、形式的歌學の弊を指摘してゐる點なども、一路、詩心を味到せんとする純情の顯現に外ならぬ。永い間洛東岡崎の醉夢庵に住してゐた。併し屢々旅も試みたものらしい。安永八年(六十七歳)には、住吉等和歌三神に千首を奉納するために西下してゐる。世人は、時の歌人蘆庵・蒿蹊・慈延(各別項)に澄月を加へて、和歌四天王と敬稱した。寛政五年に「和歌爲隣抄」を書いた。晩年は閑寂を尋ねて、ひたすら大原に隱棲しとほした。垂雲軒は、門下の桃澤夢宅に繼がしめ、大往生を遂げた。

【著作】和歌爲隣抄二卷(別項)○垂雲和歌集(別項)○澄月法師千首二卷(文政五年刊、徹山の序に澄月二十五回忌にあたることが出てゐる。この千首は、和歌三神へ奉納した千首で、既年の作、部立はないが、自ら四季・戀・雜の順序になつてゐる。終に千首和歌奉納紀行が附加されてゐる)○歌枕名寄三十八卷(「澄月歌枕」とも、「澄月名寄」とも呼ぶ。萬治二年刊、消蘊の跋がある。刊本は十九册。初め總目錄に、乞食活計客澄月撰とあるから、生前完成してゐたものと思はれる。大略、畿内部十六卷・東海部五卷・東山部七卷・北陸部一卷・山陰部一卷・山陽部二卷・南海部二卷・西海部二卷・未勘國部二卷と云ふやうに排列され、歌枕を考證した大著である。特にいろは索引まで附屬してゐて便利に出來てゐる)。

【作風】漂泊の中に全身を投じながら、その行歩の中に詠ぜられてゐる諸作は、ともすれば緣語・懸詞を用ひ語戯におちた發想であつた。彼の理想の歌人逍遙院の二百五十年忌にも、「おどろかす今の時雨の音よりも過ぎてあとなき昔をぞ思ふ」と、法樂歌を詠んでゐる。彼はその際、恐らく時雨のすぎ去る佗しい心持の中で、故人を追慕したのであらうに、かうした形式を採るところに、新時代に對し、如何に偏固であつたかを感ぜしめられる。彼が四天王の中に位しながら、遂に蘆庵に及ばぬところは、主としてこの一點に懸つてゐると言つてよい。

こぎかへる棚なし小舟霞む江に梅が香匂ふはるのやまもと(江山春興多)

すまれずはすまでぞあらむ此世にも濁る江ながら蓮さくなり(夏述懷)(以上垂雲集)

けふよりは伊勢路にかゝる鈴鹿山ふるさといづこあとのしらくも

愛ぞとはきゝてもたどるしかすがのとをきわたりに日もくれにける(以上澄月千首)

【參考】歌僧澄月傳木下幸文(さゝやき草紙)○北窓瑣談○近世三十六名歌集略傳○落栗○歌學(三號)○心の花(一ノ一〇)　〔齋藤(清)〕

澄憲(ちようけん)　天台僧　【俗姓】藤原氏　【法號】澄憲　【歿年】建仁三年八月六日寂す。

【學統】澄憲は初め、その家學である儒學を修めたが、後、天台の宗義を研究し、天台座主明雲が伊豆に流さるゝ時、國分寺まで送つて、明雲から一心三觀の相承血脈を受けた。澄憲の第三子聖覺が、その業を繼承した。【閲歴】澄憲の父は、少納言藤原通憲、即ち信西入道であり、母は高階重仲の女である。出家して初め延曆寺の衆に入り、夙に辯才を以て知られ、承安四年五月、最勝講の論義に列して辯論縱横、その右に出づる者がなかつた。この頃、權大僧都に任ぜられ、後、大僧都となつて法印に叙せられた。程なく一條北小路大宮通安居院に退居して、法體ながら妻帶し、説經を以て道俗の教化に力を盡した。後德大寺左大臣實定の息公守、亡母の鏡面に梵字を書して供養する際、導師となりて説經し、九條關白兼實の寫經供養に導師となつて説經したことなど聞えてゐる。奈良の某が五部の大乘經を寫して春日明神の寶前に供養するに方り、澄憲を請じようとして、興福寺の衆徒の憤りを招いたが、春日明神の靈告に依つて、遂に請ぜられることとなつた。時に道俗がその説經を聽いて感動し、彼は數日の間奈良に留まつて、道俗から多くの施物を受けた。法體にして俗家の生活をなし、眞雲・海惠・聖覺・覺位・宗雲・理覺・惠聖・惠敏・覺眞及び一女子の十子を擧げた。皆眞言・天台の名僧である。【著作】源氏表白文○法滅の記等。

【參考】業資王記○尊卑分脈○平家物語○古今著聞集○源平盛衰記○僧綱補任○倭歌作者部類○法然上人行狀繪圖○長西錄○淨土總譜系　〔鷲尾〕

超現實主義(てうげんじつしぎ)　藝術論　〔佛〕　Surréalisme　【解説】超現實的な自由な想像を表現する最近フランスの繪畫並びに詩歌上の運動の名稱。西暦一九二四年フランスのアンドゥレ・ブルトン(André Breton)がシュールレアリスムの宣言書を出し、「精神の最も偉大なる自由」を唱へ、「ただ想像力のみが在り得べきものを敎へる」と言ひ、同年の十二月には、「シュールレアリスト革命」といふ雜誌を出し、アラゴン(L. Aragon)、スーポール(Ph. Soupault)、デノー(R. Desnos)、エリュアール(P. Eluard)等がこれに加はつた。更にブルトンは、一九二八年に「シュールレアリスムと畫家」を出した。かくしてシュールレアリストの詩集が出版せられ、又シュールレアリストの家(La Maison de Surréaliste)といふ彼等の繪畫展覽會が開かれるに至る。畫家としては、この派のエルンスト(M. Ernst)の外、ダダイスト、表現主義者の一部が加はつてゐる。その理論は前述の點以外には一定してゐない。日本では繪畫の方に、古賀春江・東郷青兒等、主として二科會の一部の人々にこの派のものが見られる。

【參考】Breton, A. : *Manifeste du Surréalisme*. 1924. ‖ Breton, A. : *Le Surréalisme et la Peinture*. 1928.　〔渡邊〕

烏向樂(てうからく)　雅樂曲　【名義】船中に於て鷁首に向つて奏する樂の意。【解説】左方樂。新樂(或古樂)、中曲。盤涉調曲に屬する。拍子十八。舞はない。嵯峨天皇南池院に行幸の時、船樂としてこれを作り、鷁首に向つて奏した故にこの名がある。作者未詳。　〔田邊〕

彫刻美(てうこくび)　〔英〕Plastic Beauty　〔獨〕Plastische Schönheit　【解説】三次元的形體の創造が彫刻であるが、立體的形象表現の媒材の相異によつて、塑像及び彫刻に區別される。即ち(一)は粘土・石膏・セメントの如き軟

朝小子(てうし)　「太平樂」を見よ。

調子(てうし)　音樂　【別名】調(でう)　【解説】音樂に用ひる樂音の高さに關係した名稱。この語は相異なつた數種の意義に於て用ひられる。(一)音樂上の音の高さを呼ぶ場合。これは通俗に用ひられる語で、例へば二つの音の調子が合はない。(二)音樂上の音の高さを呼ぶ場合。これは通俗に用ひられる語で、例へば二つの音の調子が合はない。(三)音樂上の音の高さを呼ぶ場合。これは通俗に用ひられる語で、例へば二つの音の調子が合はない。

一本―黃鐘、二本―盤涉、三本―盤涉、四本―神仙、五本―上無、六本―壹越、七本―斷金、八本―平調、九本―勝絕、十本―下無、十一本―双調、十二本―鳧鐘

普通の三味線では八本の調子位までしか用ひない。又本邦に行はれる雅樂に於ては十二調子の全部を用ひず、通常行はれてゐるのは壹越調・平調・双調・黃鐘調・盤涉調・太食調の六取を用ひるが、舞樂又は大合奏にては調子を用ひる。これは雅樂の六調子に依つてそれぞれ特異な曲をなしてゐる。それで例へば、壹越調々子・平調々子・双調々子等と呼ぶ。何れも笙・篳篥・笛・鞨鼓・琵琶・箏の順で追々と參加するのである。　〔田邊〕

調子笛(てうしぶえ)　樂器附屬品の一　【解説】正確なる調子を指示するために用ひられるも

時、船樂としてこれを作り、鑑賞に向つて奏した故にこの名がある。作者未詳。〔田邊〕

彫刻美（ちようこくび）〔英〕Plastic Beauty〔獨〕Plastische Schönheit【解說】三次元的形體の創造が彫刻であるが、立體的形象表現の媒材の相異によつて、塑像及び彫刻に區別される。卽ち(一)は粘土・石膏・セメントの如き軟質を媒材とし、その表現の方法は中核より始め骨組を作り、外部に肉づけを行ふことによつて立體的構成を得るもので、この操作によるものを Plastic art といふ。(二)は石材・金屬・木材の如き硬質の媒材によるもので、素材の塊から始め、その內面に向つて刻み込む方法を採るもので、普通 sculpture といひ、前者と區別し、求心的操作を行ふ。兩者共に呼ぶときには彫塑といふを適當とする。彫塑の美は他藝術と異なつて、立體的形象の實在的な統一を表現するところに存する。このために形象の量的感覺と質的感覺の統一が必要である。彫刻家は製作の動因として、物・人體を選ぶのであるが、決して物や人物そのものの形體を摸作するのではない。三次元的獨自の實在的統一形象を創作するのを目的とする。この創造乃至鑑賞には、立體的深さへの運動表象と觸覺表象とが密接な關係を有するものであるが、全體的形象の統一は視覺の中に求められる。作家であり、理論家であるヒルデブラントは、彫刻製作は視覺に於ける全體形象を素材の第一次元から深化するのであるといひ、彫刻は平面的なところから、素描より出發するといふ。かくして深化の程度の上から浮彫と丸彫との區別も生ずる。(繪畫美參照)

【參考】ヒルデブラント「造形美術に於ける形式の問題」淸水淸譯○ロダンの言葉高村光太郎譯○造形美術概論外山卯三郎〔村田〕

朝小子（てうし）「太平樂」を見よ。

調子（てうし）音樂【別名】調（しらべ）【解說】音樂に用ひる樂音の高さに關係した名稱。この語は相異なつた數種の意義に於て用ひられる。(一)音樂上の音の高さを呼ぶ場合。これは通俗に用ひられる語で、例へば二つの音の調子が合つてゐるとか、聲と三味線と調子が合はないなどといふ場合に用ひられる時は、その音の高さを指して言つてゐるのである。(二)音階を言ふ場合。これも通俗に用ひられる語で、例へば呂の調子、律の調子などといふは、實は呂旋音階・律旋音階のことである。又田舍節の調子などといふのも、これは田舍節音階の事である。又支那の音樂に於て、宮調・商調などといふも、これは宮調音階・商調音階のことである(音階參照)。(三)音階に於てその主音卽ち宮音が如何なる音律になつてゐるかといふことを現す語。今音階の宮音が壹越（いちこつ）の音なれば、これを壹越調といひ、斷金（だんきん）の音なればこれを斷金調といふが如きである。かくの如く宮音を十二律の各音に置けば、十二種の異なつた調が得られる。これを十二調子といふ。これ等の名稱は主として古樂に於て用ひられ、近世の俗樂に於ては一本・二本・三本等の調子と呼ぶ。この名はもと十二律管から來たもので、卽ち壹越の音を一本とし、斷金を二本、平調を三本、勝絕を四本等と呼んだのであるが、三味線音樂が普及するに及び、その本調子に於ては、中央の二の絃が宮音になるので、二の絃に前記の十二調子名を當嵌める代りに、一の絃に當嵌めた方が便利なので、これを四度音程だけ下げて呼ぶことになつた。卽ち一の絃を以て言へば、

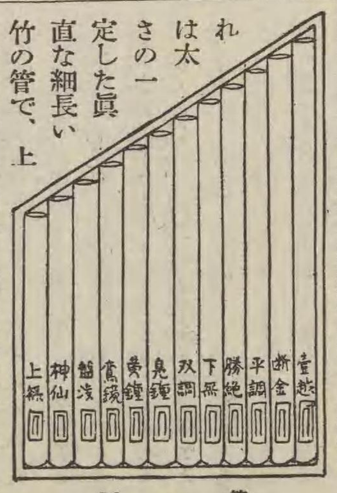
一本―黃鐘、二本―鸞鏡、三本―盤涉、四本―神仙、五本―上無、六本―壹越、七本―斷金、八本―平調、九本―勝絕、十本―下無、十一本―双調、十二本―鳧鐘。

普通の三味線では八本の調子位までしか用ひない。又本邦に行はれる雅樂に於ては十二調子の全部を用ひず、通常行はれてゐるのは壹越調・平調・双調・黃鐘調・盤涉調・太食調（たいしき）の六つであつて、これを雅樂の六調子といふ。太食調とは呂旋音階に於てその宮音が平調であるものをいふ。これに對して律旋音階に於てその宮音の平調なるものはこれを平調と呼んでゐる。その他壹越調及び双調の曲は呂旋音階のものが主となり、黃鐘調及び盤涉調の曲は律旋音階のものが主となつてゐる。卽ち我が國に於て行はれる所の雅樂曲は大體に於て

呂旋｛壹越調／双調／太食調｝
律旋｛平調／黃鐘調／盤涉調｝

となつてゐる。(四)樂器の調律の仕方を呼ぶ場合。例へば三味線の本調子・二上り調子・三下り調子等、又箏（そう）の平調子・雲井調子・古今調子など言ふが如し(三味線・箏參照)。樂器の調律が正しいか否かを驗する場合に、單にその各絃の音を出して見るだけでなく、これを簡單なる旋律化して行ふ場合に、これを「調子しらべ」といふ。箏に於ては爪調べ（つめしらべ）ともいふ。雅樂に於ては呂旋と律旋とはその爪調べを異にしてゐる。又樂琵琶にては、調子しらべに「七つ撥」といふものを用ひる。雅樂の三管は、皆音取（ねとり）の曲を用ひる(音取參照)。(五)雅樂の管絃又は舞樂の演奏に際し、先づ初めに各樂器の調子しらべのために行ふ所の特殊の合奏曲の名。但し管絃に於て略式の場合には、短い音取を用ひるが、舞樂又は大合奏にては調子を用ひる。これは雅樂の六調子に依つてそれぞれ特異な曲をなしてゐる。それで例へば、壹越調々子・平調々子・双調々子等と呼ぶ。何れも笙・篳篥・笛・鞨鼓・琵琶・箏の順で追々と參加するのである。〔田邊〕

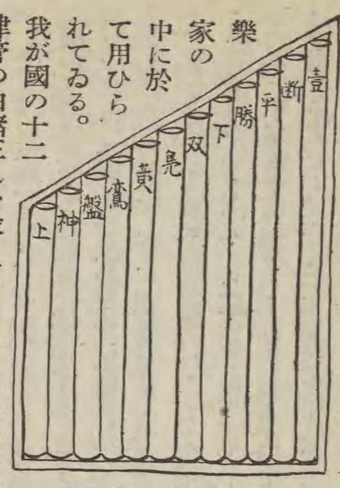
調子笛（てうしぶえ）樂器附屬品の一【解說】正確なる調子を指示するために用ひられるもの。卽ち十二律の音の高さを規定するものである。その形狀及び用法の差によつて律管（りつくわん）・圖竹（づたけ）・一竹（いつちく）(四穴（しいつ）)等の種類がある。〔律管〕これは太さの一定した眞直な細長い竹の管で、上下兩端は直角に切つた儘になつてゐる。この管の下端を指で塞ぎ、その上端を口で横に吹いて鳴らす。それで管の太さとその長さとが定まつてゐると、その出す音の高さが定まつてゐるから、それを律の標準にすることが出來る。通常は十二律の各音に從つてその長さを異にするから、十二本の律管を用ひ、これを一つの箱に納めてあるか(第一圖)、又は第二圖の如くこれを並べて打



第一圖

第二圖

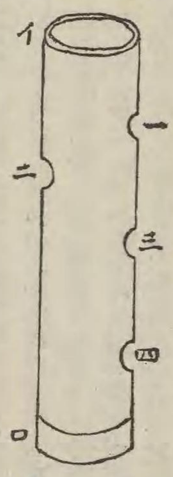
紐を以てこれを綴り合せて用ひる。この律管は支那の古代より使用され、我が國には奈良朝頃から輸入され、今日に至る迄主として雅樂家の中に於て用ひられてゐる。



第三圖　竹

我が國の十二律管の由緒正しい最も古いものは、菅原道眞の自作と稱せられるもので、今は御物となつてゐる。律管は製作は簡單であつて、その物の狂ひは少いが、これを吹く方法によつて多少調子の差違を生ずるから、正確に固定して吹奏することは困難だといふ缺點がある。

〔圖竹〕普通に調子笛と名づけてゐるもので、前記の律管の一端を塞ぎ、その端に近い側面に一定の調子を持つた金屬（響銅）製の簧を挿入し、この管の開端を吹き又は吸へば、直ちにその簧の調子の高さを發する裝置になつてゐる。それで管の長さは、その管中の空氣がこの簧の振動に共鳴するやうに定められてゐる。第三圖に示すものはこの種のものの中で雅樂家に用ひられるものである。管の太さは凡て同じく、正圓形である。この圖竹は大きくて携帶に不便であるから、これを小形に作り、第四圖に示したやうに各管同じ長さで約二寸の細い管を六本並列し、その中央を金屬棒で貫き、各管はこの軸の周に自由に廻り得るやうに作つたものが、近代の俗樂家の間に主として用ひられる。各管の內部に上方と下方とに金屬の舌を二個づつ入れ、何れもその管の一端を吸へばこれに近い舌が鳴るやうに裝置してある。この管の順序は二本づつ調律に都合のよいやうに並べてあつて、十二律の高さには並んでゐない。第四圖に示したものは皇室の御物たる八橋檢校作の調子笛の順序である。なほ民間には、壹越・平調・下無・双調・黃鐘・盤涉の六音だけを三本の管に納めた所の調子笛も多く用ひられる。〔一竹〕俗に四穴（しそう）ともいふ。第五圖の如き一本の短い筒で、象牙又は竹を以て作られ、一端（圖のイ）は開き、他端（圖のロ）は閉ぢてある。即ち象牙の儘で閉ぢるか、又は厚い紙が張つてある。筒の長さ約二寸四分、直徑は內徑四分六厘位である。管側には四つの指孔がある。この四孔を筒の開端に近いものから順に一・二・三・四と名づける。今この器を使用するには、これを左手で持ち、第一孔をその食指、第二孔を拇指、第三孔を中指、第四孔を無名指で開閉するやうにし、右手の指の爪で筒の閉端を彈く時は、筒內の空氣はこれに共鳴して音を發する。その音の高さは開いた孔の位置に依つて定まる。この開閉によつて十二律を出すことが出來る。



第五圖

【參考】三橋檢校の一竹に就て　田邊尙雄（東洋學藝雜誌二七ノ三四四）

長者宣（ちやうじやせん）　古文書

〔田邊〕

【解說】藤原氏の氏長者より氏神氏寺を初め、關係深き社寺並に藤原氏一家の事に關して出す御教書式の文書。〔伊木〕

被　長者宣偈、當寺大原社遷宮事、任例、宜被遂行者、

長者宣如此、悉之、以狀、

享祿二年八月廿六日　　大藏卿光權

多武峯寺檢校三綱御中

長者傳說（ちやうじやでんせつ）　長者屋敷（ちやうじややしき）

「長者屋敷」を見よ。

傳說　【解說】長者の物語は我が國の民間文藝に於て、殊によく發達し、又最も弘く俱通してゐた上に、珍らしくその大部分が傳說と化して今も記憶せられてゐる。府縣の鄕土誌にはこれを歷史の埋もれたる一片として、考察を下す者さへ今日はまだ稀でない。これには記錄を失つた舊社大寺の近代の援引もあれば、又財寶發掘といふやうな實際の利害もあつて、容易に人をしてこれを生活圈外に送り出さしめなかつたのである。日本は天變地異が多く、また社會の條件も幾度か改まり、その上に人口は可なり稠密であつたから、邑里にも山野にも、共に小さな廢墟が澤山に出來たのは當然のことである。さういふ不明の廢墟には、何れの國でも傳說の附着するのが普通であるが、それの殆ど全部を擧げて長者屋敷と名づけ、嘗て絕大の富豪がそこに住み、榮えて後又衰へたといふ風に信じてゐたのは、改めてその理由を究めなければならぬ一つの特色であつた。幸なことには日本では國の隅々まで、この長者の傳說が落ちもなく行き亙り、何れも可なり鮮麗なる色彩を保存してゐる。さうしてその主要な記憶は、完全に一致してゐるので、そのただ一點からでもその傳說の起原が、もとは各地を輸送せられてゐた系統ある一種の說話であつたことが證明し得られるのである。所謂長者が末期に近よつて、朝日さし夕日かがやく木の下に、黃金萬兩を埋めたと傳ふる說話なども、その幾つかある共通挿話の一つであつた。それを史實と信じて苦心して掘りあるく者も亦誤まれる鄕土史家の亞流である。糠塚もしくは「すくも塚」といふ塚、又は地名は、奇妙に長者屋敷の近傍に必ずあり、大昔、長者の家の食糧が莫大で、棄てた籾殼がこの通り山になつたといふのだが、これなども奈良朝の頃から、既に行はれてゐた語り草であつた事は、「播磨風土記」がこれを暗示する。長者榮華の盛りにただ一子無きことを愁ひ悲しみ、靈佛に心願をこめて果して容色珠の如き姫を生むといふ話なども、例の矢作の金高長者以來、最も有りふれた文藝の趣向となつてゐるのだが、各地の長者傳說はそれをさへ永く認めてゐた。そのただ一人の愛娘が成長して類稀れなる高貴の聟を儲け、乃至は水の神に嫁入して土地の信仰の基礎を築いたといふ話なども、些少の變化を以て今なほ多數の長者屋敷に傳へられてゐる。因幡の湖山長者が大田植の日に、西に入る日を招き返した奢りの罪によつて、家は滅びて千町の田が湖になつたといふが如き、珍しく又繪のやうな傳說でも、搜して見ると既に遠近の數箇所に同じ例がある。一つの土地の信仰又は誤れる經驗によつて、そこだけに發生した長者傳說などは、先づは絕無といつてもよからう。元來長者といふ語を以て富人の義に解したのは、佛經には例はあるが、その以外には聞かぬこと

とである。それを近世に入つて長者議員などといふ語があり、東北では現實の富家を、その地の長者と呼ぶに至つたのも、つまりはこの近世の文藝の影響であつた。記錄に出てゐるのは藤氏・源氏の長者、又は僧にも東寺の長者などがあつたが、その普通の意味は、一族一群の首領といふに過ぎなかつた。近江の竹生島の蓮華長者などは、單に年々の祭の頭屋のことであつたが、これも亦家長族長と同じ名の應用と思ふ。それよりも前からよく知られてゐたのは、遊女の長者であつた。多分その仲間の一藹に限つた語だらうが、小相撲をも關取と呼んだ如く、一人行けば彼等は皆長者であつたかも知れぬ。全國の長者屋敷又は長者池等には、かういふ者から名を得た土地がありさうに思はれる。さうして彼等の主たる職分は、この類の物語を語つてあるくことに在つたのだから、二者の混同は一層この名稱の普及を助けたらしいのである。日本が古くからこれほど多くの大金持を、包容し得たと思ふと間違ひのもとである。多かつたのはその第二の「長者」である。小野のお通（別項）なども、恐らくは自身が矢作の長者であつたらうと思はれる。

〔柳田（國）〕

晁樹（てうじゅ） 歌學者【姓名】西原氏、通稱多門【號】川隈舍【生歿】天明元年二月十五日に生れ、安政六年（一八五一）七月二十日歿す。享年七十九【閲歴】筑後柳河藩士、清水濱臣に學ぶ。和漢の學、殊に國史・歌學に通じてゐた。夙に勤王の志厚く、維新の際柳河藩が王事に竭したのは、晁樹の薫陶によるといふ。著書は甚だ多いが、「宇太鷺多理」が最も知られてゐる。大正十三年二月從五位を追贈された。【業績】晁樹の歌學書「宇太鷺多理」は、近藤芳樹の「古風三體考」（別項）に刺戟されて成つたもので、稿の成つたのは、安政五年、晁樹の歿した前年である。草場佩川の序文がある。論は、守部・重年・芳樹等の研究のあとを辿つてゐて、創見に乏しい憾みがあるが、長歌・短歌を論ずるに、記紀・萬葉・神樂・催馬樂等の全般にわたつて證歌を引き、又對句を論ずるにあたつては、長歌・短歌・祝詞・壽詞等を對象にしてゐるばかりではなく、「平家物語」「論語」等をまで研究材料に取り入れてゐるなど、よく晁樹の學識の深博たるを語るものである。

〔窪田〕

聽秋（ちやうしう） 俳人【姓名】上田肇【別號】花の本十一世・不識庵【閲歴】嘉永年中、美濃大垣に生る。維新の勤王家小原鐵心の血族である。初め東京に出て、慶應義塾・大學南校に學んだが、病のために中途退學し、八木芹舍の門に歸して俳道に入り、明治十七年京都に梅黄莊を組織して「鴨東新誌」を發行した。二十三年十一月二條家から推されて花の本の道統を繼ぎ、十一世を稱した。二十六年芭蕉翁頌碑を洛東通天橋畔に建立し、衆僧を招いて翁の二百年忌を執行した。三十五年四月菅公一千年祭に際し、古式を復興して二條公の臨席を仰ぎ、北野神殿に於て俳諧連歌を興行した。爾來健在今日に至つてゐる。【著書】月ケ瀬紀行○聽秋百吟○鶴鳴集等。

〔伊藤〕

長秋詠藻（ちやうしうえいさう） 私家集 三卷【作者】藤原俊成【名義】題名の長秋は「後漢書」に、「有司奏レ立二長秋宮一、その註に、「皇后所レ居也、長者久也、秋者萬物成熟之初也、故以名焉、不二敢指言一、故以レ宮稱レ之」とあつて、皇后の御殿を指す言葉である。俊成は皇太后宮大夫の職にありしに因んで名づけたもので、詠藻は、詠草の意であらうと謂はれてゐる。【諸本】古寫本には、宮内省圖書寮藏本（桂宮舊御藏本）がある。その本には次の如き奥書がある。下卷「右大臣家百首」の前に、

此三局（ママ）治承二年夏依二仁和寺宮召一所レ被二書進一也、件草（自筆）近年依二貴所召一進覽、未二返給一之間、爲レ備二忽忘一更申二清竹園御本一令レ書二留之一、以二件本一又書之、寛喜元年四月廿二日　正二位（花押）

下卷「千五百番之歌合」の前に、

這一冊、京極黄門並嫡女民部卿局兩筆、以レ本不レ違二一字一、亡父卿予交レ筆令レ書二寫之一畢、尤可レ爲二證本一者也、　天和七年小春中旬（花押）

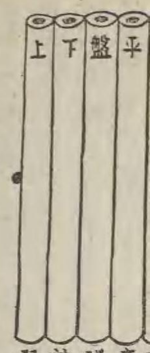
下卷の最末に、

此十秋詠藻今度加二書寫校合一畢、雖レ有二夢菴老人之六家抄一、以二本集一爲二所望一之間、加レ斯殊二於此草一者、雖レ令レ所二持之一、可レ爲二一具一之故、新詞レ之者也、

慶長三年孟冬初三　　丹山隱士玄旨

慶長十九林鐘七一校了

最後の奥書と、同文の奥書を有する寫本（一冊）が神宮文庫にある。刊本には六家集本があり、明治以後、續國歌大觀・國歌大系・古典全集等に所收刊行。【内容】卷上には、久安の頃崇德院に百首歌召しゝ時奉りし歌（短歌百十八首、長歌一首及びその反歌一首）、「堀河院の御時の百首の題を述懷に寄せて詠みける歌、保延六年の頃の事にや」とある二つの百首を載せ、卷中には部類を立て、春歌十九首、夏歌十五首、秋歌二十四首、冬歌十八首（その内、他人の歌を錄せるもの二首）、賀歌三十四首、戀歌四十七首（内八首は贈答による他の人の作歌）を載せ、卷下には、雜歌四十二首（内十八首同上）、釋教の歌六十六首、神祇歌十二首と分類し、更に「右大臣家百首」（治承二年五月晦比給題七月追詠進）、「千五百番歌合之百首」を載せ、次に「崇德院讃州に



がこの簧の振動に共鳴するやうに定められてゐる。第三圖に示すものはこの種のものの中で雅樂家に用ひられるものである。管の太さは凡て同じく、正圓形である。この圖竹は大きくて携帶に不便であるから、これを小形に作り、第四圖に示したやうに各管同じ長さで管の長さは、その管中の空氣を筒の開端に近いものから順に一・二・三・四と名づける。今この器を使用するには、これを左手で持ち、第一孔をその食指、第二孔を拇指、第三孔を中指、第四孔を無名指で開閉するやうにし、右手の指の爪で筒の閉端を彈く時は、筒内の空氣はこれに共鳴して音を發する。その音の高さは開いた孔の位置に依つて定まる。この開閉によつて十二律を出すことが出來る。

【參考】三橋檢校の一竹に就て　田邊尚雄（東洋學

さな廢墟が澤山に出來たのは當然のことである。さういふ不明の廢墟には、何れの國でも傳説の附着するのが普通であるが、それの殆ど全部を擧げて長者屋敷と名づけ、嘗て絶大の富豪がそこに住み、榮えて後又衰へたといふ風に信じてゐたのは、改めてその理由を究めなければならぬ一つの特色であつた。幸なことには日本では國の隅々まで、この長者の傳説が落ちもなく行き亙り、何れも可なり鮮麗なる色彩を保存してゐる。さうしてその主ふ話なども些少の變化を以て今なほ多數の長者屋敷に傳へられてゐる。因幡の湖山長者が大田植の日に、西に入る日を招き返した奢りの罪によつて、家は滅びて千町の田が湖になつたといふが如き、珍しく又繪のやうな傳説でも、搜して見ると既に遠近の數箇所に同じ例がある。一つの土地の信仰又は誤れる經驗によつて、そこだけに發生した長者傳説などは、先づは絶無といつてもよからう。元來長者といふ語を以て富人の義に解したのは、佛經には例はあるが、その以外には聞かぬこ

して崩れさせ給ひて後、御供なりける人の過より傳へられて斯かる事なん有しとて折紙に御宸筆なりける物を傳へ贈られたりしなり」と前書して、崇德天皇の御製なる長歌と反歌一首とを載せ、俊成がそれに奉和して作れる長歌一首反歌一首を記したるを初めとし、兼實・慈圓等との贈答、文治六年女御入内の屏風歌などを載せ、最後に西行の死に就いて記し、「願ひ置きし花の下にて終りけり蓮の上にも違はざらなん」の歌もて卷を終つてゐる。崇德院の長歌以下、小計長歌二首、その反歌各一首、その他五十五首（内八首他人の歌）。通算するに短歌七百二十九首と長歌三首及びその反歌各一首となる。【價値】俊成の所謂幽玄體の歌を見るべきは勿論ながら、長歌を短歌と記した點や、中卷釋教の歌中に引用されてある「極樂六時讃」の斷片が、和讃の歷史の上で注目すべき文獻らしく思はれる點など、注意すべきであらう。

【參考】長秋詠藻備攷　岡本保孝（況齋叢書二所收）○長秋詠藻の成立　兒山信一（國語と國文學昭和四ノ七）

〔松浦〕

鳥獸戲畫（てうじうぎぐわ） 繪卷【解説】栂尾高山寺所藏四卷。外にその斷片が二三諸家に收藏されてゐる。一般に鳥獸戲畫と呼ばれてゐるが、その内容から言へば（甲）、蛙・兎・猿などの擬人的嬉戲の樣を畫いたものが一卷、（乙）鳥獸野生の樣を畫いたものが一卷、（丙）法師等が首引き、褌引き等遊戲の樣を前半に、猿・兎等の擬人的嬉戲の樣を後半に繼合せたものが一卷、（丁）人物の流鏑馬・打毬等の戲畫が一卷であつて、四卷一括して鳥羽僧正覺猷の筆と喧傳されてゐるが、四卷の筆致は必ずしも同一とは言へぬ。甲乙兩卷は蓋し同筆で

描寫最も優れ、鎌倉以前と思はれる筆致の特色が窺はれるが、丁卷はその描寫最も磊落で鎌倉期に入つてからの製作と思はれる。而して丙卷は前半後半同筆とも思はれないが、何れも甲乙卷や丁卷とも同じからず、畫致は正にこの兩者の中間を行くものであつて、前半は丁卷に似て而も一層勝れてをり、後半は甲乙卷に似て而も描寫やゝ劣つてゐて、概してゐる。とにかくその描寫は總じて戯畫的であるから、自ら一種皮肉の感を抱かしむる所もあるのみならず、畫中に僧侶關係のものが多いから、畫僧の筆として寺院生活のつれづれに戯作したものかも知れない。從つて鳥獸描寫などに、佛教思想を反映せしむるのも自然である。筆者に就いては最近鳥羽僧正説を排して、この中甲・乙卷の如きは繪佛師定智の筆と想定する新説も出てゐる。とにかく描寫の秀拔なもので表現の潑剌たる點は、他に多く類例を求め難い。その全く白描に終始してゐる點も、この繪卷の特色で、當時僧侶や繪佛師の間に、佛教圖像の白描抄寫が行はれた事とも密接な關係を辿り得るであらう。因みに後世鳥羽繪といふは、鳥羽僧正の名に由來するもので、その源流を溯れば、この戯畫などにこれを辿る事も出來るであらう。〔田中(一)〕

鳥獸戯畫（高山寺蔵）

言へば丙卷も鎌倉期の製作かと思はれる。かく筆者も一人でなく製作も同時と思はれないから、その主題の意味も製作の由來も那邊に在るか容易に斷じ難い。鳥獸の擬人描寫は、當時の僧侶を諷刺したものかとの説が古く行はれてゐたが、最近に至つては、六道思想を背景とする畜生繪の轉化であらうとの新説も出

鳥獸物の謠曲（てうじうもののえうきよく）

【曲目】鳥獸蟲魚の類を主人公とした謠曲に、「石橋（しやくけう）」「龍虎」「猩々」「大瓶猩々（たいへいしやうじやう）」「合浦（がつほ）」「鷺」「鶴亀」「初雪」「胡蝶」「殺生石」などがある。【諸本】現行諸流謠本。その他、謠曲叢書・國民文庫・日本文學大系・謠曲三百五十番集（日本名著全集）等所收。

【石橋】五番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文）（二百十番謠目錄）ともいふ。〔内容〕寂昭法師（ワキ）が入唐して、清涼寺に參り、石橋を渡らうとすると、樵夫（シテ）が出て、神變佛力がなくては、この橋を渡ることは出來ないと引き留め、後獅子（後ジテ）が現れて舞を舞ふといふ曲。能樂の先進文藝たる風流の「聲聞師詣清涼山事」を本としたものか。劇的夢幻能。五流現行。

【龍虎】五番目〔作者〕觀世小次郎（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕諸國一見の僧（ワキ）が入唐すると、樵夫（前ジテ）と漁夫（前ツレ）が來て、龍虎の勇ましい樣を物語つて歸る。やがて虎（後ジテ）と龍（後ツレ）が現れて相爭つた後、龍は空に上り、虎は竹林に入つたといふ曲。「龍虎相搏」の成語から想を得たもの。劇的夢幻能。觀世現行。

【猩々】五番目〔作者〕不明〔内容〕支那揚子の里のかうふう（ワキ）は孝行の德によつて、潯陽江の猩々（シテ）から無盡藏の酒壺を與へられたといふ曲。出典は見當らない。庭訓往來註市町之興行の條に、同趣の記事がある。一段劇能。五流現行。

【大瓶猩々】〔作者〕不明〔内容〕前ジテ童子、後ジテ猩々として、前曲を複式に脚色したもの。觀世現行。

【合浦】五番目〔作者〕不明〔内容〕支那合浦の者（ワキ）が鮫人といふ魚を助けると、その夜童子の姿（前ジテ）で來て禮を述べ、やがてその精（後ジテ）が現れて壽命長遠息災延命の寶珠を贈るといふ曲。「蒙求」の合浦玉説話と、「述異記」の鮫人説話とを結び合せたものであらう。劇的夢幻能。觀世現行。

【鷺】四番目〔作者〕世阿彌（二百十番謠目錄）〔内容〕帝（ツレ）が神泉苑に行幸の御時、藏人（ワキ）に洲崎の鷺（シテ）を捕へよと仰せられると、鷺は敕をかしこみ、進んで藏人に捕へさせたので、御感の餘り五位の位を賜はつたといふ曲。「平家物語」卷五「朝敵揃への事」に據つた。觀世・寶生・金剛・喜多現行。一段劇能。

【鶴亀】脇能〔作者〕不明〔名稱〕喜多流では「月宮殿」といふ。〔内容〕皇帝（シテ）が新年の佳節に鶴（子方）、亀（子方）の舞を舞はしめ給ふといふ曲。一段劇能。五流現行。

【初雪】四番目〔作者〕金春禪鳳（能本作者註文）〔内容〕姫君（前ジテ）が寵愛してゐた初雪といふ鷄の死を悼んで、友達の上﨟（後ツレ）を集めて佛事をすると、鷄の精（後ジテ）が現れて成佛を喜ぶといふ曲。出典はない。複式夢幻能。金春現行。

【胡蝶】三番目〔作者〕觀世小次郎（能本作者註文・二百十番謠目錄）〔内容〕吉野の僧（ワキ）が都に上つて、一條大宮の梅を見てゐると、胡蝶が女姿（前ジテ）で現れ、梅の花に緣のない恨みを述べて消える。そしてその夜、僧の夢に、胡蝶の精（後ジテ）が現れ、法華の功力によつて梅花に戯れ得た喜びを述べ、舞を舞ふといふ曲。「莊子」の胡蝶夢の故事、「源氏物語」胡蝶の卷の文を主材とした。複式夢幻能。觀世・寶生・金剛現行。

【殺生石】五番目〔作者〕日吉安清（二百十番謠目錄）〔内容〕源翁道人（ワキ）が陸奥から都に上る途次、下野國那須野に來ると、この殺生石は鳥羽院の御時帝を惱まし奉つた玉藻前の化したものであると敎へて石に隱れる。源翁が石に向つて敎化すると、殺生石の石魂が野干の姿（後ジテ）で現れ、三浦介・上總介のためにこの野で射殺された樣を語り、今後は惡事をしないと誓つて消え失せるといふ曲。「下學集」（犬追物）、「臥雲日件錄」（享德二年）等にも記されてゐる傳説で、この原據は、「本朝高僧傳」に記してゐるやうに、「傳燈錄」などの破竈墮の説話の展開したものであらう。劇的夢幻能。五流現行。

【構想】「石橋」以下「鶴亀」に至る七曲は、祝言を主としたもので、戯曲的な内容は乏しい。「胡蝶」は草木精魂物（別項）と同型のもの、「殺生石」は、悽愴な傳説を巧みに脚色したもので

言へば丙卷も鎌倉期の製作かと思はれる。かく筆者も一人でなく製作も同時と思はれないから、その主題の意味も製作の由來も那邊に在るか容易に斷じ難い。鳥獸の擬人描寫は、當時の僧侶を諷刺したものかとの說が古く行はれてゐたが、最近に至つては、六道思想を背景とする畜生繪の轉化であらうとの新說も出

【石橋】五番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文）とも元雅（二百十番謠目錄）ともいふ。〔内容〕寂昭法師（ワキ）が入唐して、清涼寺に參り、石橋を渡らうとすると、樵夫（シテ）が出て、神變佛力がなくては、この橋を渡ることは出來ないと引き留め、後獅子（後ジテ）が現れて舞を舞ふといふ曲。能樂の先進文藝たる風流の「聲聞師詣清涼山事」を本としたものか。劇的夢幻能。五流現行。

【龍虎】五番目〔作者〕觀世小次郎（能本作者註

【鷺】四番目〔作者〕世阿彌（二百十番謠目錄）〔内容〕帝（ツレ）が神泉苑に行幸の御時、藏人（ワキ）に洲崎の鷺（シテ）を捕へよと仰せられると、鷺は敕をかしこみ、進んで藏人に捕へさせたので、御感の餘り五位の位を賜はつたといふ曲。「平家物語」卷五「朝敵揃への事」に據つた。觀世・寶生・金剛・喜多現行。一段劇能。

【鶴龜】脇能〔作者〕不明〔名稱〕喜多流では「月宮殿」といふ。〔内容〕皇帝（シテ）が新年の佳節に鶴（子方）、龜（子方）の舞を舞はしめ給ふといふ曲。一段劇能。五流現行。

ある。「石橋」「猩々」「鶴龜」「殺生石」は後の文藝に大きな影響を與へてゐる。

【參考】謠曲評釋大和田建樹〇謠曲大觀　佐成謙太郎　〔佐成〕

長嘯子（ちやうしせうし）　歌人　〔姓〕木下・豐臣。本姓は平、又、杉原氏〔名〕勝俊字は大藏〔別號〕擧白堂・天哉翁・松洞等と稱し、住地に依つて西山樵翁・東翁等の雅名を用ひてゐる。長嘯の號は隱遁して東山夢翁長嘯と稱したのに始まる。〔生歿〕永祿十三年生れ、慶安三年（一六五〇）六月十五日歿（一說慶安二年）。享年八十一〔諡號〕大成院〔墓所〕京都の西郊小倉山の常照寺。その碑は東山高臺寺にも遺存してゐる。〔家系〕その先祖は伯耆守平（杉原）光平に出づ。父家定は肥後守で紹英と號し、その妹は豐臣秀吉の母である。弟に中納言秀秋がある。但し長嘯の實母松丸殿は一時秀吉の愛妾であり、後に武田元明に嫁し、更に家定に再嫁したので、長嘯實はその元明の子であるとも云ひ、別に京極高吉の息であるとも言ひ傳へられてゐる。〔學統〕細川幽齋門。長嘯の門下には春正・公軌・立易などが出てゐる。〔閱歷〕尾張に生れたが、秀吉の義甥の關係で早く從五位下に叙され、天正十六年には從四位下、侍從の職を授けられた（十九歲）。文祿元年の征明役による名護屋出征、ついで彼は若狹守となり小濱の城に入り、左近衞權少將となつたが、生來文事を愛好した。桃山文化の影響もあつたものであらう。二十三歲の時、彼の錄した「九州の道の記」（群書類從第三三八）は、文辭麗妙なるのみならず、短歌・長歌の詠はその歌人的天賦を證し、歌名所の知識、「萬葉集」の引歌は、歌學者的教養を語つてゐる。その他、彼は蹴鞠の技に通じ、庭園趣味をもその中に叙べてゐる所、若輩の武人とは思はれ難い程である。而も單なる風流好みの享樂歌人でなく、遙かに正徹（別項）の風格に憧憬れてゐた。偶々慶長三年秀吉の薨去と共に、豐臣・德川の間には不安な暗雲が翳してきた。父家定は慶長五年姫路城に封ぜられ德川氏に屬してゐたのであるが、長嘯はその歸趨に迷つた。初め秀賴の命に依つて守つてゐた伏見城は、鳥居元忠の殉死と共に棄てて歸洛したのであるが、若狹の留守兵田邊城を包圍した爲めに、關ヶ原戰後、德川からその封地を奪はれてしまつた。併しこの悲運は、却つて文人長嘯子に剃髮隱栖する好機會を與へる事になり、專ら世俗を超脫して京都東山靈山の擧白堂に隱れた（三十一歲）。歌は幽齋の指導を受け、學は惺窩などと相研鑽するところがあつた。閑居の模樣を叙したものに、「山家記」「朝ぼらけ」「石枕記」等がある。好學の士で、やがてその藏する書、漢籍千五百卷、歌書類二百六十部に及び、惺窩その他その借覽を求めたものも多かつたといふ。晩年は靈山の都近いのをすら煩はしいとして、多く洛北大原野小垣山の麓に潛居した。その際、同じく幽齋門の貞德が、「とにかくに月はうき世にすまじとや山より出でて山に入るらむ」と云ふ歌を送つて來たので、長嘯また「こゝもまたすみこそやらね大原やあこがれ出でしふるさとの山」と返歌してゐる。八十一歲の長壽を保ち得たが、晩年の消息は審かでない。但しその清淡純一の生活のために、世人の注目を惹く點も多く、種々の逸話を遺してゐる。辭世「つゆの身のきえてもきえぬおき所草葉のほかに又もありけり」〔著作〕擧白集（別項）十卷八册〇長嘯子文集一卷（寫。内閣文庫藏、主要な文章を收め輯めたものである）〇若狹少將勝俊朝臣集（續群書類從四四三に收む。歌數四百餘首、選歌集である）〇長嘯歌選（下河邊長流選による抄本で、所謂三家和歌集の一、契沖全集附錄長流全集所收出版）。なほ文集甚だ多く、「扶桑拾葉集」に採られたもののみでも三十六篇に及び、集中、數に於て第一位を占めてゐる。

【作風】保守精神に依つて全く沈淪しきつた歌壇に於て、長嘯こそ唯一人の革新派であつたと言ふに憚らない。彼は幽齋との私交關係上、その誘掖をも受けるには受けてゐたが、彼の理想は寧ろ遠く爲兼とか正徹とかの歌調に存してゐた。第一に取材の清新と自由、第二に漢語調を加味して歌調の勁健、第三に自由濶達な詠み振り、これ等をその特色として擧げ得る。「難擧白集」（慶安三年、尋舊坊著）の如き反駁書が、保守派の中から出たことも如何にもと思はれる。その攻擊に對して、更に「擧白心評」といふ辯護書すら現れた。次には、例歌として山家の歌を數首揭げるに止める。

さびしさを尋ねて入りしおく山にあるじがほなる
　峯の松風
しづかなる庭の木の間にかげおちて夜ふかき花に
　月わたる見ゆ
今朝よりはものあぢきなく心ぼそし人わびさする
　秋や來ぬらむ

又文章は凡て行文流麗で、停滯する所がない。「心戒」の如きに至つては、所謂俳諧文の先驅をなすものとも言へよう。〔史的地位〕過渡的時代にあつて、冷泉派程度の清新さではなほ効驗の乏しい憾があつたが、秀吉の甥に長嘯子のあつた事は、やがて擡頭した文藝復興運動に對して、全然沒交渉のものには考へ難いと思ふ。環境の反映と云ふものを、彼に於ても全然否定する事は許されないであらう。

【參考】翁草〇玉勝間〇鹽尻〇長春隨筆〇假名世說〇續近世崎人傳〇野史　〔齋藤（清）〕

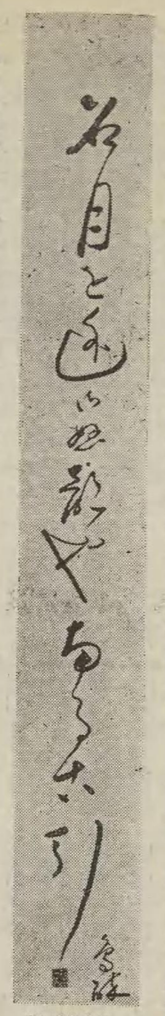
超人主義（てうじんしゆぎ）　〔解說〕超人（Ueber-mensch）とは、ハインリッヒ・ミュラアやヘルデル、ゲエテ等によつて用ひられた語であるが、超人主義を明かに高潮したのは近代のことで、ニイチエがその主張の代表者である。ニイチエは、權力意志を以て實在の本質とし、その最も多く表れた、最高理想の最もよき體現者としての理想的人間を超人と呼ぶのであるが、彼の超人主義に於ては、肉體的にも精神的にも、凡衆を遙に超越して、自分の立てた道德によつて行動する藝術的に優秀な人、或は剛健敢行の意志ある人を天才として、これを稱揚するのである。併し彼はただかゝる天才を稱揚するのみに止まらず、更に人類一般がかくの如き天才となつた狀態を理想とするのである。從つてこの意味に於ける超人主義は、人類の理想鄕、究極地であつて、超人を生產し養成することが、眞に人類の目的であるとするのである。「ツァラトウストラ」はニイチエのこの超人主義を最もよく代表してゐる著作であると言はれてゐる。ニイチエの外に、この超人主義の文學の中に含まれる人にストリンドベルヒがある。その作、「大海のほとり」の如きは、明瞭にこの主義を發揮してゐる作品である。

【日本に於ける超人主義】日本に於ては、明治二十七八年頃から三十七八年頃までの間が、浪漫主義の時代であつて、世界主義の運動が起るにつれて、その反動として日本主義が叫ばれた。高山樗牛は日本主義提唱者の一人であるが、日本主義の現實的傾向に行き詰つて、めにこの野で射殺された樣を語り、今後は惡事をしないと誓つて消え失せるといふ曲。「下學集」（犬追物）、「臥雲日件錄」（享德二年）等にも記されてゐる傳說で、この原據は、「本朝高僧傳」に記してゐるやうに、「傳燈錄」などの破竈墮の說話の展開したものであらう。劇的夢幻能。五流現行。

【構想】「石橋」以下「鶴龜」に至る七曲は、祝言を主としたもので、戲曲的な内容は乏しい。「胡蝶」は草木精魂物（別項）と同型のもの、「殺生石」は、悽慘な傳說を巧みに脚色したもので

自我の權威、個性の尊重を必要とし、個人主義、本能主義と共に天才主義即ち超人主義を提唱したのである。この思想は、ニイチェの哲學に發してゐるのであるが、必ずしもニイチェと同一ではない。併しニイチェが舊道德や舊倫理を呪ひ、凡人主義の思想を憎惡して、君主の道德、强者の道德を主張したやうに、在來の凡俗主義に眞向から反對して、天才を活かし、非凡を主とする超人主義を高唱したのである。〔宮島〕

鳥醉（てうすゐ）　俳人【姓名】白井信興。通稱喜右衞門【別號】牧羊・西奴　百明房　伊賀實錄・夏山伏）・留明・風日・實步坊（以上懷玉抄）・松牛牧士（南甫春）・南壽山人（五七記）・蕗霞窓・露柱庵・松露庵・松原庵・鳴立庵【生歿】明和六年（一二四二九）四月四日歿す。享年六十九【墓所】品川海晏寺【閱歷】上總國埴生郡地引村の人で、長南城主武田豐信の流族武田信景の裔だといふ（露柱庵政二著俳道系譜）。鑛山に關係して家產を失つたので（續俳家奇人談）、少壯にして故園を去り江戸に出た。寶曆十三年に書いた文章に自ら「南總を出て卅年餘り」と言つてゐるのに據れば、それは享保末年の頃であつたらしい。かくて佐久間柳居に從つて俳諧を學び、牧羊人西奴と號した。「俳道系譜」に初號長水とあるが柳居の初號と混じたものか、若しくはその號を與へられたものでもあらうか。なほ寶曆十一年刊乙由追善集「一字題」の中に、鳥醉は自ら麥林先師と言つてゐるから、直接乙由に會つた事があるかも知れぬ。而してこの西奴の名を初めて文獻に見るのは元文二年刊の「夏山伏」と「八居題詠」とであらう。のち幾許もなくして號を鳥醉と改め、延享元年には遠く松島に遊び、同三年には師に從つて京都に赴き風交を汎くした。柳居の歿後その遺廬たる葛飾の三斛庵を去つて、柳原の邊に蕗霞窓の額を掲げたが、更に又日本橋銀町の松露庵に移つた。こゝで門人の來り集まる者が漸く多かつたが、彼は庵を高弟左明に附託して、遠く京阪地方に赴いた。「壬生山家」（寶曆九年）に據れば、寶曆六年九月大阪天王寺の壬生山淨春寺に芭蕉の舊蹟を訪ね、遂にこゝに金龍庵を結ぶに至つた。又同七年三月には吉野に花を見、翌八年三月には伊賀に遊んで、「伊賀實錄」（「冬扇一路」中に收められ、伊賀で聞いた芭蕉に關する逸話を集めたものである）を撰び、九年春には門人烏明を伴ひ、再び吉野に登つた。かくて難波に居を定めて四年の春秋を送つた。大阪には金龍庵の外兄花庵・菅田廬・二葉庵があり、又京都四條にも有明庵があつた。寶曆九年秋東都門人の迎ひに應じて東に歸り、南總の露柱庵に入つた。「五七記」の序に、往し年の秋故郷に歸つて東壽山に隱棲したといふのはこの時の事である。而も故山にもやはり長く心が留らなかつたと見え、諸方に節を曳いてゐたが、品川海晏寺附近の風色を愛でて、此處に松原庵を營んだ。時に寶曆十三年である。かくて久しぶりに定住の地を得たが、その後も明和元年には八王子、二年には常野地方、三年には常總地方と諸所に行脚をつづけ、同年相模鳴立庵を再興してこゝに移り住む事になつた。明和五年四月、故郷の頃から病み、翌年江戸に出て病を養つたが遂に起たず、四月四日歿した。「濃きうすき雲に待ち得て時鳥」といふのがその遺章である（うつきの鳥）。【批評】鳥醉は柳居の門にあつて、伊勢派の平易な句風を固守し、敢て一歩を進めようとしなかつた。「俳懺悔」に見える古池吟の解や附句の說によつても、彼の平明說が能く覗はれる。「三日月のぬけて落ちたる柳哉」「ものもなく動かぬ海や朝霞」「松風の骨になつたる寒さ哉」等の作で、ほぼその句風は察せられよう。併し彼が俳壇の陵夷した時代に出でて、而も甚だしい卑俗に陷らず、且つその門から相當の人材を出した事は、彼の功績として認められねばならない。【編著】伊賀實錄○五七記一册（寶曆十三年刊か。先師柳居の追善のためその歿した當時の五七日間の日記及び實錄を刊行したもの）○俳諧增補提要錄二册（鳥醉の俳論を門人が筆錄したもので、彼の識見を知るのに最もよい。安永二年に一度成つて世に行はれたが、同七年二月燒失したので、更に遺語の殘つたのを補ひ出版したのである）。【門流】主な門人には、左明・烏明・百明・昨烏（白雄）等がある。左明は師から松露庵二世を讓られたが、寶曆十年師に先立つて歿したので、烏明がその三世を繼いだ。烏明は師に隨身する事十有餘年、屢々行脚を共にし、師の歿した時には追善集「うつきの鳥」を撰んだ。又寬政十三年三十三回忌には「懷玉抄」二卷を編して、先師が一生の間各地に遊歷して詠んだ遺草を集めて出すなど、最も能く師のために盡したが、その年六月十八日七十六歲で歿した。昨烏は後白雄（別項）と號し、烏明とは義絕したが、俳人としては最も大成するに至つた。又その門の星布尼は松原庵を、春鴻は露柱庵を、葛三は鳴立庵をそれ〴〵繼承して、鳥醉の衣鉢を後に傳へた。百明は上總東金の人で、葛三の前に鳴立庵二世を繼ぎ、天明四年七月二十二日歿した。〔穎原〕


鳥醉筆蹟

長翠（ちやうすゐ）「奥羽四天王」を見よ。

長頭丸隨筆（ちやうづまるずゐひつ）　隨筆　一卷【著者】松永貞德【成立】卷末に「慶長十とせきのとの巳の天、ふりみふらすみさためなき頃よと川のいほりにて筆をとり畢」とある。【諸本】久しく傳寫本のみであつたが明治二十五年「日本文庫」に收められて刊行された。【解說】歌道の祕傳を細川幽齋より受けた著者の經歷談に交へて、歌道に遊ぶ者の心得などを說き、又俳諧・茶式・神書等の事にも及んだものである。自己が初めて歌書の講義を民間に開いた時の事を叙して、「此頃道春はじめて論語新註をよみ、宗務太平記をよむ。われにも歌書よめと下京の友達どもすゝめしより、何の思案もなく百人一首つれ〴〵草を人の發起も無に群集の中にて大事の名目などをよみちらし侍りけるを、中院入道殿のきこしめしつけさせ給ひて、陰にて御にくみ有けるとかや云々」とある。古典開拓の先驅者として堂上家輩の嫉視を被つた樣子がよく分る。書き終へたのは貞德齡三十三歲の時である。又前記の中院入道は貞德と師を同じうした權中納言通勝の晚年素然と稱したのを指す。〔和田〕

調節（てうせつ）　音聲學〔英〕articulation〔獨〕die Artikulation〔佛〕l'articulation【解說】ズィーヴェルス（Sievers）の所說に從へば、喉頭及び共鳴部（咽頭・口・鼻、及びこれに屬する諸部分）を有意的に働かして氣息流の壓力を加減すること、及び氣息を變化させることが廣義の調節である。狹義には、某音（言語音聲）を作るとき、音聲器官に特殊な構へ方をなすことをいふ。平易に言へば、言葉の音聲を發する喉や口の諸部分の働きである。調節を大別して、（一）音響發生の調節（Schallbilden-

て故園を去り江戸に出た。寶曆十三年に書いた文章に自ら「南總を出て卅年餘り」と言つてゐるのに據れば、それは享保末年の頃であつたらしい。かくて佐久間柳居に從つて俳諧を學び、牧羊人西奴と號した。「俳道系譜」に初號長水とあるが柳居の初號と混じたものか、若しくはその號を與へられたものでもあらうか。なほ寶曆十一年刊乙由追善集「一字題」の中に、鳥醉は自ら麥林先師と言つてゐるから、直接乙由に會つた事があるかも知れぬ。而した。寶曆九年秋東都門人の迎ひに應じて東に歸り、南總の露柱庵に入つた。「五七記」の序に、往し年の秋故郷に歸つて東壽山に隱棲したといふのはこの時の事である。而も故山にもやはり長く心が留らなかつたと見え、諸方に節を曳いてゐたが、品川海晏寺附近の風色を愛でて、此處に松原庵を營んだ。時に寶曆十三年である。かくて久しぶりに定住の地を得たが、その後も明和元年には八王子、二年には常野地方、三年には常總地方と諸所に行

版したのである)。

【門流】主な門人には、左明・烏明・百明・昨烏(白雄)等がある。左明は師から松露庵二世を讓られたが、寶曆十年師に先立つて歿したので、烏明がその三世を繼いだ。烏明は師に隨身する事十有餘年、屢々行脚を共にし、師の歿した時には追善集「うつきの島」を撰んだ。又寬政十三年三十三回忌には「懷玉抄」二卷を編して、先師が一生の間各地に遊歷して詠んだ遺草を集めて出すなど、最も能く師のために盡したが、その年六月十八日七十六歳で歿

る諸部分)を有意的に働かして氣息流の壓力を加減すること、及び氣息を變化させることが廣義の調節である。狹義には、某音(言語音聲)を作るとき、音聲器官に特殊な構へ方をなすことをいふ。平易に言へば、言葉の音聲を發する喉や口の諸部分の働きである。調節を大別して、(一)音響發生の調節(Schallbildende Artikulation)及び、(二)音響修飾の調節(Schallmodifizierende Artikulation)の二種とする。前者は例へば喉頭(聲帶)を働かして、「こゑ」「さゝやき」等を發すること、又舌や唇を働かして諸種の子音を發する事をいひ、後者は例へば聲帶に發した「こゑ」をば、口腔の大さと形との變化によつて修飾して所謂母音の差別を作ることをいふ。音響修飾の調節は母音に於て最も著しい。所謂子音に於ては、例へば∫音(英語等でshを以て表す音)を發しつつ唇の開口を加減する時、∫音に多少の變化を來たす等の外餘り著しく現れない。

【調節基礎】〔獨〕die Artikulationsbasis〔英〕the basis of articulation〔佛〕la base d'articulation 或る國語或は方言について、各々その音聲の調節基礎を異にするをいふ。即ちその國語或は方言に使はれる音聲の多くに通じ、音聲器官の或る特有な調節位置がある時、これをその國語或は方言の調節基礎といふ。例へば、英語に於ては多くの音に通じ、舌全體を奥に引き舌の前部を廣くし、舌端は上齒裏よりも寧ろ上齒龈に多く接し、唇は他の部分の運動に伴つて受動的に動く等の特徴がある(Sievers に據る)。フランス語に於ては、唇が活潑に動き、舌は表面が凸形となり前方に進む傾向がある(Roudet に據る)。〔神保〕

【參考】Sievers: *Grundzüge der Phonetik.* 5. Aufl. 1901. § 291. = Roudet: *Éléments de phonétique générale.* 1910. P. 37.

廳宣(ちやうせん) 古文書 【解說】在京遙任の國守から在國の在廳官人(留守所)或は鄕などに下す文書。平安朝から南北朝頃まで見えてゐる。樣式は官宣旨(別項)式であるが、終りの署判に「守」とあるは國衙の守で、「大介」とあるは領國の守であらう。〔伊木〕

廳宣　留守所

可早任　院宣免除金剛寺四至內田畠山野等所當官物以下臨時雜事兼又禁斷殺生事

副下

院廳御下文一通

右件寺者、密敎繁昌之地、靈驗殊勝之砌也、且爲攘災、且爲招福、最可崇重、誰致輕尒、況乎忝被成下院廳御下文、任其狀、永可免除四至內田畠山野等所當官物已下國役臨時雜事也、就中可禁斷殺生事、勅命殊嚴、若不拘制法者、慥可加懲肅之狀、所宣如件、留守所宜承知、依宣行之、以宣、

建久二年六月　日

守源朝臣(花押)

朝鮮(てうせん) 小說 【著者】高濱虛子 【發表】明治四十四年七月東京日日新聞 【刊行】明治四十五年二月春陽堂。現代日本文學全集所收。

【梗概】著者夫妻は朝鮮に渡つた。大邱では、親戚の家に泊り、又果樹園を經營してゐる友人を訪ねて、旅芝居の一座にゐる青年慶之助とも會つた。京城では何の仕事をしてゐるのか解らない石橋剛三といふ男と、今は金成龍夫人になつてゐる昔馴染のお房さんに迎へられた。石橋の宿である南山樓に行李を解いたが、剛三の宿にはいつも二三人の浪人風の男がたづねて來る。そこにはお筆といふ美人もゐた。お京さんといふ有名な女中もゐた。そこへ慶之助もたづねて來た。慶之助は一座の花形であつた。著者は剛三や、剛三の友人で當年の志士である洪さんの案內で、いろ〳〵のものを見た。素淡といふ妓生と知つて、身の上話も聞いた。或る時は執念く言ひ寄つてくるお筆に當惑したり、お筆や洪さんと淸涼里の月も見た。その中に突然行方をくらましてしまつた剛三をあとにして著者は平壤へ向つた。こゝで又洪さんと落ち合ひ、牡丹臺に登つてお牧の茶屋に休んで好印象を得た。宿に歸るとはからずもお筆が來てゐる。後を追うてつきまとつて來るこの女には益々閉口する。そこへひよつこり石橋剛三が現はれて來て、お筆も剛三も、滿洲へ行く途中であつたことがわかる。慶之助も一緒に滿洲の旅興行に出掛けるといふ。二三日後、平壤に集つたこの人々は、府尹などを加へて大同江に船を浮べ、萬景臺に遊んだ。素淡とお京も京城から呼び寄せられた。お牧の茶屋のお牧も加はつた。素淡は唄ひ、お京は踊つた。翌日滿洲へ赴く剛三・お筆・慶之助等の一行を停車場に見送つた。その後お筆から、いろんな意味を含んだ二通の旅だよりがあつた。

【批評】當時の他の寫生文家は、當面の事象を、いかに忠實に描寫するかの技術に努力するだけで、斷片的であつた。著者は個々の斷片を斷片と見ない。どの斷片も、一つ一つの人生に繫がつた、大きいか小さいかの連鎖だと見る。「朝鮮」はその代表的な作品で、朝鮮の風物や人物を、漫然と寫生しはしない。どこか荒んで自暴自棄な、敗殘的な、新領土的ないろんな人生面を自然の背景の上にかつきりと掬ひ取つて來て、當時の朝鮮の氣分や風土を、具象的に、痛いほど讀者の印象に鮮明に叩き込む。それは、この作者のやうに、一致した態度と技巧とによつて始めて成功する。特色に富んだ力のこもつた長篇だ。鐘路の夜や大同江の夕などは、描寫や情趣の最もすぐれた部分である。〔水原〕

朝鮮語(てうせんご) 世界の言語の一 【名稱】韓國時代には、その國號に因んで韓語と稱せられたが、今日は一般に朝鮮語といふ。又古く朝鮮人は自國を以て支那の延長と考へてゐた結果、自國語を以て鄕言又は方言など稱へ、又支那に對して自國を東國と稱したに因んで自國語を東言などとも稱へた。【範圍】現在朝鮮語の行はれる範圍は、鴨綠・豆滿兩江以南の所謂半島地方及びその所屬島嶼に行はれてゐるが、東間島及び琿春地方には三十萬餘の朝鮮人が移住し、遙かに支那人の人口を凌駕し、朝鮮式の生活を營み朝鮮語を使用するを以て、現在に於ける朝鮮語の勢力は國境を越えて大陸地方にまで進出してゐると見ることが出來よう。【方言】この廣大なる地方に分布せられた言語に、地方的色彩が現はれぬといふことは到底考へられない。故人の遺した隨錄の中には、何々地方の方言として、若干この問題に觸れた資料が發見されぬことはないが、固より朝鮮語全體に對する記述ではない。私は音韻・語法・語彙の各方面より概觀して、朝鮮語の方言を(一)京畿方言(京畿道・黃海道・忠淸南道の全部、忠淸北道の大部分、江原道の東南部を除く大部分、咸鏡南道の定平以南の地)、(二)平安方言(平安南北道の殆ど全部)、(三)咸鏡方言(咸鏡北道の殆ど全部、咸鏡南道の定平以北の地)、(四)慶尙方言(慶尙南北道の全部、江原道の東南部、全羅南道の南海岸)、(五)全羅方言(全羅北道の大部分、全羅南道の南海岸を除く大部分)、(六)濟州

ちらし侍りけるを、中院入道殿のきこしめしつけさせ給ひて、陰にて御にくみ有けるとかや云々」とある。古典開拓の先驅者として堂上家輩の嫉視を被つた樣子がよく分る。書き終へたのは貞德齡三十三歳の時である。又前記の中院入道は貞德と師を同じうした權中納言通勝の晩年素然と稱したのを指す。〔和田〕

調節(てうせつ) 音聲學〔英〕articulation〔獨〕die Artikulation〔佛〕l'articulation 【解說】ズィーヴェルス(Sievers)の所說に從へば、喉頭及び共鳴部(咽頭・口・鼻、及びこれに屬す

島方言の六種に分類するのが適當であると思ふ。

【特質】(イ) 音韻　朝鮮語を表記する基本文字の數は、現在は母音十一字、子音十四字合計二十五字より成つてゐるが(諺文參照)、事實上の音數は決してそれに限られてゐるのではない。例へば ㅓ・ㅡの如きは、京城地方では少くとも各字が二種の音を含み、애・외・에・외等の如きは字形としては二箇の母音字の組合せより成れども、事實上の發音は基本母音以外の一箇の獨立した母音を形成するが如き、又基本子音以外に聲門閉鎖 (glottal stop) の破裂を同時に伴つて發音される ㄱ(ʔk)・ㄷ(ʔt)・ㅂ(ʔp)・ㅆ(ʔs)・ㅉ(ʔtʃ) 等の所謂된사ㅅ(toinsiot)の音現象の如きは何れも二十五種の母子音以外に存し、立派に基本的の單母音・單子音を形成するものである。これを以て觀ても朝鮮語の基本的母音・子音の數が、決して二十五種の文字が示す如き少數且つ簡單なるものでないことを知るに足るであらう。語又は音節を形成する音の結合し方に自らの法則が存する。先づ頭音規則(アンラウトゲゼツ)からいふと、(a)語頭には母音・子音の何れもが立ち得るが、古くは二箇以上の子音群が語頭に立つことを許されたらしい。例、ʔsal (米) ＜ psal, ʔtui-ta (躍) ＜ ptui-ta, (b) 語頭には濁音(有聲音)が來ぬ。但し一語中の第二音節以下の頭音に屢々濁音が現はれることは國語の連濁の場合と似たものがある。(c) ㄱ(ki)・계(kje)等の ㄱ(k) は地方により ㅊ(tʃ) となる。例、tʃil (路) ＜ kil ; tʃe:tʃip, tʃi:tʃip (女) ＜ kje:tʃip. (d) ㄴ(ni) は多くの地方に於て ㅣ(i)と發音されるが、平安南北道の殆ど全部、咸鏡南北道の北邊及び濟州島にありては頭音の n が完全に保存せられる。例、ni(齒)。(e) 댜(tja)・뎌(tjə)・됴(tjo)・듀(tju)等に於ける tj は、半島多くの地方に於て tʃ音に變化するが、平安南北道の全部、又咸鏡北道の北部では、原音を存するか又は j音を脫落して單なる t となる。例、뎜심(點心)＞ tjom-sim, tom-sim; 됴소 (良い)＞ tjos-so, tos-so・디も鮮內各地では殆どすべて tʃi に口蓋音化するが、上記地方にありては ti の原音を存する。例、딥(藁)—tip (f) 半島多くの地方にありては語頭の라(ra)・러(rə)・로(ro)・루(ru)・르(rɨ)は、na・nə・no・nu・nɨ の如く、랴(rja)・려(rjə)・료(rjo)・류(rju)・리(ri)は、ja・jə・jo・ju・i の如く發音される。(例、론어〔論語〕—non-ə 량반〔兩班〕—jaŋ-ban、륙십〔六十〕—juk-sip)但し리は、平安南北道の全部及び咸鏡北道の北邊にては ri の原音を存し、(例、리익〔利益〕—ri-ik)その他の라・랴全部は咸鏡北道の北部ではほぼ r の原音を存し、(例、論語—ron-ə、兩班—jaŋ-ban、六十—juk-sip)、平安南北道にありては n に變ずる(例、論語—non-ə 兩班—naŋ-ban、六十—nuk-sip)。北部國境地方に於て何故に頭音 r の發音が特に可能であるかの理由は別問題として、朝鮮語一般の性質としては頭音に r 音の來るのを好まぬことは事實と言へる。Russia なる語が移入されると、前に母音を添へて「俄羅沙」(A-ra-sa)と稱へるが如きもその一例である。(g)히 (hi)・혜(hje)等の ㅎ(h) は地方により人(s)となる。例、sim (力)＜him, sje-a-ri-da (量る)＜hje-a-ri-da. 次に末音規則(アウスラウトゲゼツ)に就いて述べると、末音としては母音・子音の何れも許されるが、二箇の子音群も可能である。例、talk (鷄)、palp-ta (蹈)。而して puk (大鼓)・put (筆)・tʃip (家) 等の、下に何等の語を伴はぬ場合の -k・-t・-p は破裂を伴はぬ停止音であることは特に注意を要する。朝鮮語は調子のよい言葉であるとは內外人の認めてゐる所であるが、それには確かに理由がある。今その理由の主なるものを述べると、(a)一般的にフランス語流の liaison が行はれる。卽ち一語の末音が子音で終り、次に來る語の頭音が母音である場合には、發音上の連續が行はれるのみならず、その末音の子音が無聲音である場合には、次の母音に同化せられて有聲音となる。例へば im-ɨi (任意)・ta-li (月が)は、i-mɨi, ta-li の如く、tʃip-e (家に)・pat-ə (受けて)は tʃi-be, pa-də と發音せられるが如きこれである。(b)母音間の同化。朝鮮語にはウラルアルタイ諸語に存する如き、母音同化の現象があり、語幹に於ける母音は接尾的語句の母音を自己と同音又は類似の音に引き附けようとする。例へば、動詞中、語幹に o 音を含める po (見る) なる語あり、それが活用して連用形を作る場合には、必ず po-a となつて接尾語に a を要求し、語幹に u 音を含める두(置く)なる動詞の活用するに當つては、tu-ə となつて必ず ə を要求するが如き、又同一語根に出で同一意義を有する語に so:l-so:l と su:l-su:l(何れも細雨の降るさま)との如き對立があるが、その第二音節が o となるか u となるかは、全く第一音節にある母音の支配を受けたものである。これ等の現象を總合して、朝鮮語の母音を分類すると(イ)强母音、아・야・오・요・ㅇ、(ロ)弱母音、어・여・우・유・으、(ハ)中性母音 이・의の三種となすことを得べく、その强母音は强母音相互又は中性母音と弱母音は、弱母音相互又は中性母音と調和する現象が存する。(c)子音間の同化。一語の末音が子音であり、次に來る語の頭音も子音である場合、子音の種類によつては各種の規則正しい同化現象が生ずる。例へば sol-nip (松葉) が sol-lip となれるは n が先行の子音 l に完全に同化したもの、am-ra (森羅)が sam-na となれるは、r が全部 m に變化はせぬが m の影響を受けて同一發音位置の鼻音 n に變化したものであり、何れも順行同化に屬し、sin-ra (又、-la) (新羅)が sil-la となれるは n が後行の子音 l に完全に同化したもの、sip-njən (十年) が simnjən となれるは、p が全部 n に變化はせぬが、n の影響を受けて自己と同一發音位置の鼻音 m に轉じたものであり、何れも逆行同化に屬する。(ロ)語法　名詞には本來の名詞の外、動詞・形容詞の語幹に -m・-ki を附して作られたものがあり(例、ham〔爲ること〕＜ha-, ka-ki〔行くこと〕＜ka-)、代名詞も本來の代名詞の外、名詞より轉成したものが少くない。數詞は一二三などの如く基數を示す場合 (例、ha-na〔一〕・tu:l〔二〕)と、名詞の上に冠せられる場合(例、han-gwən〔一卷〕・tu:-sal〔二歲〕)とにより語形を異にすることがある。動詞と形容詞とは活用形を異にし、人により二種或は三種の基本活用形を設ける。助詞・副詞にも種類が多いが、他の品詞より轉成したものも少くない。措辭法は最初に主語、次に述語が來ること、修飾すべき語句が修飾せらるべき語句の前に置かれることは國語の場合と全く同一である。各語の連結は國語同樣著しく添着的性質を帶び、殊に尊敬又は謙讓の意味をあらはす文の語尾變化は複雜を呈してゐる。例へば ha-ɨɔs-so(爲ましたか)に對して ha-sɔs-sim-ni-ka〔＜(ha-si-ɔt-sip-nai-ka)(爲さいましたか)、ha-o (爲ます)に對して ham-ni-ta (＜ha-op

na-ra-ta)(殺します)などといふ類である。(ハ)語彙　朝鮮語彙の數が全體で何程あるか、又その中純粹の朝鮮語が何程含まれてゐるか等の統計が今日未だ明かにせられて居らぬ。但し朝鮮語成立以來、幾多の外來語が輸入せられ、中には全然朝鮮語化したものも含まれてゐるに相違ない。外來語中最も多數を占むるものは漢語であり、その多くは朝鮮音化して吸收されるけれども、中には pɛ-tʃ'u (白菜)・mu-mɔ̌n (木綿)等の如く、支那語の原音を比較的忠實に傳へてゐるものもある。その他隣接諸民族との交通接觸により古くより蒙古語・女眞語・滿洲語・日本語等の輸入せられたもの少からず、又近時は西洋諸國語を輸入して、日常生活上の語彙を豐富ならしめてゐる。

【系統】從來歐米の言語學界に於ては、朝鮮語は餘り多くの注意を惹かず、その所屬問題の如きも深く論及せられたことなく、ただ漠然と、或はこれをウラルアルタイ語族の一部に配し、或は日本語、又は滿洲語と一族をなすものとし、或はこれを全く孤立の位置に置いた。然るに近時斯學の發達と共にこの問題は漸次科學的に研究せらるゝに至つた。W. G. Aston 及び金澤博士の日鮮語同系論、H. B. Hulbert のドラヴィダ語との比較研究の如きはその例である。元來朝鮮語には印歐語流の冠詞なるものなく、名詞には性・數・格の觀念を缺き、又關係代名詞を有せぬ等の事實以外、なほ朝鮮語の特質の條に述べた如き、頭音としてはラ行音及び濁音を忌み、ki・ti 等の k・t は容易に tʃ に口蓋音化し、末音としては子音が來ることを許され、音結合上よりしては、或る子音間に特殊の同化現象が行はれ、母音調和の現象が極めて顯著であり、措辭法上より觀れば、主語が前に立ち、述語これに次ぎ、修飾すべき語句は修飾せらるべき語句の前に置かれ、而もその連結の狀態は、著しく添着的性質を帶びてゐる等の現象がある。これ等の諸現象中には、國語と共通のものもあり、又ウラルアルタイその他の語族と共通なものもある。朝鮮語の眞の系統はこれ等の科學的研究に基礎を置き、初めて完成せらるべきものであらう。

【沿革】朝鮮には古く固有の文字がなかつた。漢字の輸入を見てより、これを利用してその言語を寫したけれども、固より完全を期する譯には行かなかつた(吏讀參照)。朝鮮語が完全に文字の上に書き表はされるに至つたのは諺文(別項參照)發明以後の事に屬する。隨つて朝鮮語の歷史的變遷を比較的精細に知り得るのは最近五百年足らずの期間に止まり、それ以前は極めて茫漠である。元來今日朝鮮語と簡單に言ひ去れども、その由來する所極めて悠遠で、その歷史は複雜を極めてゐる。即ち最初漢が半島に四郡を置いた頃には、その南部には辰韓・馬韓・辨韓等あり、中部以北には高勾麗を初め濊・貊・沃沮等の諸民族占據し、相互に異つた言語を用ひてゐた。次いで三國時代になると、高勾麗は從前の北方系言語を用ひ、新羅・百濟は韓族固有の言語を用ひてゐたけれども、高勾麗より分出した百濟の言語中には、なほ幾多の高勾麗語の影響があつたらしい。その後新羅が三國を統一し、次いで高麗これに代るに及び、新羅語を祖語とせる朝鮮語は廣く半島の大部分に行はるゝに至つたけれども、北邊にはなほ女眞その他の民族の言語が行はれた。朝鮮語が現在の如く鴨綠・豆滿兩江以南に完全に行はるゝに至つたのは、實に李朝以後の事に屬する。以上の如き歷史を有する現代の朝鮮語が、時代によつて幾多の變化を經來つたことは、蓋し想像するに難くないのであるが、吾人は常にその變遷の跡を辿るべき資料の缺乏を痛歎せざるを得ない。李朝以後の言語資料としては、諺文制定と同時又は直後に公にせられた訓民正音の諺解及び「龍飛御天歌」、世祖の頃に出版せられた佛書類の諺解を初めとし、各時代に亙りやゝ豐富にこれを求めることが出來るが、その以前に至りては完全なる資料極めて少く、新羅時代のものとしては、「三國遺事」「均如傳」等にあらはれた鄕歌、金石文にあらはれた若干の吏讀、漢字を以て記された地名・物名などに於てこれを知るに過ぎず、高麗時代のものとしては、僅かに「鷄林類事」及び金石文・古文書等にあらはれた吏讀に就き、これを窺ひ知ることを得るに止まる。各時代の言語の特質等は、今玆に詳述することを避けるが、李朝時代にありては、成化・弘治の頃既に諺文の古い綴字法に幾分の變化を來し、嘉靖年間に出來た崔世珍の「四聲通解」や「訓蒙字會」等には、殆ど古式の諺文綴字法が失はれ、表音的表記法の約束を規定せるなどを見る時は、朝鮮語はこの時期を以てすべての點に亙り變化を來したと見ることが出來よう。朝鮮語の文體には(一)漢文に吐(吏讀參照)を附して讀む場合の漢文懸吐體、(二)國語「なり」「たり」等に相當する語尾を用ひる文語體、(三)國語の候文に相當する書簡文體、(四)純粹の口語體等の種類があるが、(一)より(三)までは、畢竟するに文語體である。從來の諺文體は主として文語體のみであつたが、近時は新聞・雜誌・小說等に口語體が盛んに用ひられるやうになつて來た。文語體・口語體の分裂した時代に關しては未だ十分な研究が遂げられては居らぬが、恐らくは餘り近代のことではないだらう。

【研究史】我が國に於て朝鮮語學習の必要を認めたのは、かなりに古い事である。即ち「續日本紀」淳仁天皇天平寶字五年正月の條には、美濃・武藏二國の少年每國二十人をして新羅語を習はしむとあり、「日本後紀」嵯峨天皇弘仁六年一月の條には、對馬史生一員を停め、新羅譯語を置くなどの記事が見える。その後朝鮮語の學習は專ら對馬がその任に當つたらしく、壬辰の役などには嚴原よりのみでも六十餘人の通譯を出し、明治の初年に至りては嚴原に語學所なるものさへ設けられた。次に學術的研究の業績に就いて言へば古く「二中曆」が引用する所の譯言曆に、高麗語・貴賀國語等の一より十に至る數詞を列擧せる事などは頗る珍とするに足るが、固より斷片的のものに過ぎぬ。江戸時代に至り、雨森芳洲が「交隣須知」を著はして朝鮮語研究の先鋒をなし、新井白石が「東雅」に於て日鮮兩語の比較研究を試みた事などは、當時の學界を賑はすに足りたるべく、その他大田全齊・黑川春村等が、音韻研究上朝鮮字音をも參取したことは最も注意すべきことである。明治以後に至りては、白鳥・宮崎・中田諸博士により、或は史學或は法制史の立場より、盛んに日鮮兩語の比較研究が行はれたが、特に語學を專攻せらるゝ人としては金澤庄三郎・前間恭作諸氏あり、辭書文法の如きも、追々と優秀なるものが編著せられつつある。次に西洋人の朝鮮語研究を略述すると、古く第十七世紀頃に航海者又は地理學者などにして朝鮮の記述をなしたものがないではないが、深く言語の事に注意したもの

はない。ただ N. Witsen がその著 "Noorden Oost Tatarije"(1692, 2nd ed. 1705)に於て朝鮮語彙百數十を列擧し、それに解釋を施してゐるのは異數とするに足る。第十八世紀後半に至り P. S. Pallas や、L. Hervas の如き言語學者が各種の言語の比較に當り、朝鮮語を引用してゐるが、それ等は Witsen の資料によつたものが多いやうである。又第十九世紀の初頭に當り W. R. Broughton, B. Hall の如き航海家が朝鮮沿岸を訪問して、自ら生ける朝鮮語を蒐集したが、その頃から朝鮮及び日本の書籍を基礎とせる研究が擡頭しかけた。その第一先鞭はヴインの Dr. Hager が、「三國通覽圖說」の諺文を學界に紹介したにあるが、その解說が誤つてゐたので、一八二〇年 Abel-Rémusat がそれを反駁した。その後 J. Klaproth がシベリアの一隅に於て自ら「三國通覽圖說」の一本を得、これを佛語に飜譯した("San Kokf Tsou Ran To Sets." 1832)。彼が前に著はした "Asia polyglotta" (182-, 2nd ed. 1831) と共に、その中に增補挿入せられた朝鮮語には「雞林類事」「和漢三才圖會」等から採つたものが大部分を占めてゐる。その頃また P. F. von Siebold, J. Hoffmann 等は、「千字文」「類合」の獨譯をなし、W. H. Medhurst は、「千字文」「倭語類解」の英譯及びこれ等の書を基礎として鮮英對照の語彙集を作つたが、これ等の事業はついで起り來るべき外國人特に在鮮外國人の潑剌たる語學研究の導火線となつたものである。即ち彼等の著作中の主なるものは、辭書としては Poutzilo の鮮露辭書(1874)、Coste の鮮佛辭書(1880)、佛國宣教師編「韓佛字典」(1880)、Underwood の「韓英字典」及び「英韓字典」(1890)、宣教師編の羅甸語朝鮮語對照辭書(1891)、Scott の英鮮辭書(1891)、Gale の「韓英字典」(1897, 2nd ed, 1911)、Alévêque の「法韓字典」(1901)、Jones の「英韓字典」(1914) 等あり、文法書としては、佛國宣教師編の朝鮮語文法(1881)を初めとし、Underwood の「韓英文法」(1889, 2nd. 1914)、Gale の "Korean Grammatical Forms" (辭課指南)(1893, 2nd ed. 1903)、Eckardt の "Koreanische Konversations-Grammatik" (1923)

【參考】W. G. Aston: *A comparative study of the Japanese and Korean Languages.* 1879. H. B. Hulbert: *A comparative grammar of the Korean Language and the Dravidian dialects of India.* 1905. 二日韓兩國語同系論 金澤庄三郎 ○韓語通前問恭作 ○龍歌古語箋 同上 ○雞林類事麗言攷 同上 ○鄕歌及吏讀の研究 小倉進平 ○日鮮古代地名の研究 金澤庄三郎 ○日本文法新論 同上 ○日鮮同祖論 同上 ○宮崎先生法制史論集 中田薰 編○朝鮮語辭典 朝鮮總督府編 ○朝鮮語學史 小倉進平 ○南部朝鮮の方言 同上 〔小倉〕

調度歌合 てうどうたあはせ　御伽草子　一卷

【成立】遊遙院實隆筆の傳を眞とすれば、少くともそれ以前に成つたものといふことになる。【諸本】群書類從卷五〇四所收。原本奥書に「右一卷三條實隆入道遊遙院堯空亡蹟也、臨于此卷書寫畢公賴」とあり、類從には「右以濱田侯本校合畢」と見える。【內容】異類歌合物。擬人の道具類の十番歌合。彌生の末、高野山の御幸の御供から歸つた後、主人の留守をしながら寢てゐた夜の夢に、諸道具共の物語る聲に驚いて耳を傾けると、炭櫃の主唱に水甕の賛同があつて、戀を題で歌合を初め、一番左燈臺右炭櫃から、十番左大つぼ右おびの臺まで、歌人すべて二十人、判は衆議判で御硯のうの毛の筆が一々記し留めた。夢現に聞いて居るうち夜が明けて、奇異の思をなしたと云ふ筋である。古今序から出て、鶯と蛙の歌の傳說まで生じた歌道尊信の傾向に伴ふ遊戲化の現象で、蟲鳥の歌合と同種のものであると共に、他面「化物草子」(別項)及び「付喪神」(別項)の怪說話とも聯り、後者と併せて近世の馬琴の「昔語質屋庫」の先蹤をなすものとも云へる。〔島津〕

町人物 ちやうにんもの　浮世草子　【名義】町人の生活を取扱つたものの義である。なほ詳しくいへば、町人の本分は勤勉節儉等に由つて富を致すに在つたから、この本分に就いて取扱つたものの義と解すべきである。【性質】すべて端物で、町人が商工業を以て世に立ち、勤勉・節儉・機會・叡智・資本等の要素に由つた致富の諸相を書き、或はこれに關する教訓を含めたものであるが、中には大晦日を背景として、その前に展開された町人の經濟生活の諸相を書いたものなどもある。物慾生活を主題とした文學は世界に稀であるが、町人物は純粹にこれを主題としたものが多い。要するに、人間生活の中から、物慾生活だけを抽出して取扱つたものである。【沿革】井原西鶴の「日本永代藏」「世間胸算用」に始まり、後、門人北條團水が「日本新永代藏」を作つて、「日本永代藏」を摸してより、八文字本作者がこれ等に倣うて數部の町人物を綴つてゐるが、これ等の摸倣は單にその形を摸したに止まらず、內容文章までも摸倣したもので、殆ど西鶴の域を出でないものばかりである。追隨者の自信なき態度もさるものであるが、又西鶴の浮世草子作者としての大きさ、その作品の影響の尋常でなかつたことも、これに由つて知られる。

【作品】今その主なる作品を擧ぐれば、

日本永代藏 (別項) 井原西鶴 (元祿元年)
世間胸算用 (別項) 同 (元祿五年)
西鶴織留 (別項) 同 (元祿七年)
日本新永代藏(別項) 鳳城團水 (正德三年)
手代袖算盤 八文字自笑(正德三年)
商人世帶藥 (別項) 八文字自笑(享保七年)
商人家職訓 (別項) 江島其磧 (享保七年)
善惡身持扇 (別項) 八文字自笑 江島其磧(同十五年)
渡世勘辨 世間手代氣質(別項)江島其磧(同十五年)
立身招福 商人軍配團(別項)江島其磧(享保十八年)
世帶法 渡世身持談義(別項)江島其磧(同二十年)

【時代との關係】階級制度の當時に於て、町人階級に生れて町人として生きるには、その階級に許されてゐた商工業を以て身を立つる外に道はなかつた。工業はその發達が甚だ幼稚であつたから、彼等は活動慾・事功慾・名譽慾等を滿足させるに、主として商業に就くのであつた。商業は畢竟利益を得て、富を積むべきものであるから、町人の苦心して求めたものは、大富の蓄積に在つた。かくて町人たるものは、商業に成功し、大富を積んで、世に分限者・長者と謳はれようと努力した。かくして起つた時代の富崇拜の精神は、やがて貧を忌むの精神ともなり、富の成功者に羨望の目をみはると共に、貧に泣くものには、嫌惡又は憐憫の情を持つた。かくて町人の成功と共に失敗の事實は、彼等の大に關心を惹く所であつたから、これを文學化したものに慰藉を感じて、外國にも類の少く、我が國の前後にも又例なきこの種の文學が、特にこの時代

に生れたものと考へられる。

【參考】西鶴町人物研究 片岡良一（日本文學講座）

長伯（ちやうはく） 歌人 【姓】有賀氏 【號】以敬齋 【生歿】寛文元年京都に生れ、元文二年（一三九七）六月二日歿。享年七十七 【墓所】高津の東の正法寺 【閲歴】醫師の家に生れたが家業を繼ぐことを好まず、和歌の道を學ぶため、父兄の反對を押し切つて、京都を出て住吉の平間長雅の門に入つた。苦學數年、貞享三年（二十六歳）には師の勸めに從つて、「和歌世々の栞」を編んだ。後、難波に移り、一家を構へ、二條派の歌風を弘く世間に傳へた。門下には辻經長・加藤景範・川井立牧・有賀長因がある。長伯の子孫は、長伯—長因—長收—長隣といふやうにその跡をついで難波で和歌の師匠をつづけ、長隣の長男は有名な國際法學者有賀長雄（別項）である。【業績】長伯は、和歌の道についての多くの指導書を著はしたが、通俗的であるのが特色で、弘く行はれ、長い間、この道の初學者達の參考書となつて來た。「和歌世々の栞」「初學和歌式」「濱の眞砂」「和歌八重垣」「歌林雜木抄」「和歌分類」「和歌麓の塵」の七書は、有賀家の七部書といはれ、蕉門の七部書と對立させられてゐる。作歌の道を辿り始めるには、この七部書が、如何に便利な手引書であるかといふことがわかる。その他、「和歌世々のしをり追加」「歌枕秋の寢覺」「歌枕秋の寢覺增補」「和歌麓の塵二葉草」「源氏掌故」「長伯集」「秋葉愚草」「春樹顯祕增抄」等の著書がある。 〔窪田〕

蝶花形戀聟源氏（てふはながたこひむこげんじ） 脚本 五幕十四場 時代物 【作者】木村園夫 【通稱】女貞任 【興行】文化二年十一月一日初日 江戸河原崎座。紋番附には三年とあるが俳優の顔觸れはあはない。疑ひを存して置く。

【役割】安倍宗任・奴鐵平（澤村東藏）、金の八郎・新羅三郎義光（嵐秀之助）、權太夫景成・源頼義（山科四郎十郎）、頤山坊・加藤右馬之丞・石倉角之進（桐山紋次）、傾城逢州實は貞任娘千代童姫・侍女卷篠・妹お袖（小佐川七藏）、勝田次郎成信・大道寺一學・立引五郎（市川荒五郎）、安倍貞任・清原眞人武則（中山來助）、難波のお露實は鴛鴦の精・匡房息女歌綾姫・妹お仲實は淺香姫（中村慶子）、田畑村の八右衞門實は鴛鴦の精・八幡太郎義家・金吾舍人之助惟滿・出羽城之助重成（澤村源之助）、貞任妻雄島・釣舟屋お光實は善知鳥文次妻安方（小佐川常世）。

【題材】義家奥州攻を世界にした顔見世狂言。

【諸本】顔見世狂言集（日本戲曲全集）所收。

【梗概】「一番目」〔序幕〕（男山八幡）須賀川次郎範純の惡事。權の太夫景成と爭ふ。（別當所）小烏丸の名劍紛失、勝田次郎成信の難儀。願山坊主を語つた範純の惡事が露顯。（裏手）範純・成信の立廻り。（男山）金の八郎爲時、惡人の連判を奪ひ取る。〔二幕〕（三韓責）神功皇后・武内宿禰の三韓責。（岩手山）右は貞任の妻雄島の夢。雄島貞任と奇遇。〔三幕〕（武隈明神）大道寺一學と貞任のだんまり。（鳥居先）殺人事件があつて騷ぎの所へ、東西より女飛脚お鷹、男飛脚雲平來かゝり、通行出來ぬまゝ兩人書狀を取替へて引返す。（源義家館）新羅三郎義光、傾城逢州に迷ひ放埒。出羽郡領助定と加藤右馬之丞が家押領の惡事。清原武則、逢州を詮議。お鷹飛脚に來る。右馬之丞等お鷹を公卿に仕立てる。大道寺一學上使に來り義家の本心詰問。源頼義の明答。お鷹、虎熊大臣に扮し、勘合の印の催促。（武則館）お鷹實は雄島、逢州を娘千代童姫と知つて對面。武則、雄島の面前にて逢州を責める。大道寺一學、秩父十郎と僞つて勘合の印を雄島より取戻す。（奥庭）頼義・武則・雄島を見歸し一旦立ち別れる。〔大詰〕（鎌倉花ケ谷）源義家と歌綾姫の色模樣。奴鐵平と腰元卷篠の振り事。鐵平、義家を呪つて鴛鴦の番ひを殺す。植木賣り八右衞門、花賣りお露出て物賣りの所作あつて、兩人は鴛鴦の精と正體を現はし、鐵平實は坂戸九郎則景に仇をする。常磐津淨瑠璃「色逢夜半の思羽」。（奥州外ケ濱）安方、夫文次が宗任に殺されしを知る。城之助重成と安方だんまり。〔二番目〕（釣舟屋）釣舟屋のお光、妹お仲とお袖を使つて、いろ〳〵の男を色仕掛けに騙し、軍用金を集める。お仲實は實方の娘淺香姫、許嫁の夫金吾惟滿が大工となつたのに逢ふ。安倍宗任、一宿を求める。淺香姫・惟滿、宗任を敵と覘ひ、危ふく返り討にならんとして立引五郎に助けられる。城之助重成、お光實は安方と共に宗任に詰め寄せる。

【解説】一座が無人で俳優を多く使用されぬため、顔見世狂言の通弊たる、餘りに複雜に陷ることは免れたが、頭梁が女方なので、女ばかりが活躍する筋は物足りない。無人のため全篇を通じて非常に寂しいが、鴛鴦の所作事は形式完備して立派なものであり、釣舟屋に當時の下級賣笑窟を描寫した、この二幕だけは立派な價値がある。 〔渥美〕

蝶花形名歌島臺（てふはながたいかのしまだい） 淨瑠璃 十一段 時代物 【作者】若竹笛躬・中村魚眼 【角書】（聟君は源家の類葉 嫁君は平家の落人） 【名稱】十段目 に小田春姫が、大内義廣に嫁する件があるところより來た。【興行】寛政五年七月十六日初日、大西芝居豐竹榮次郎座初演。太夫は竹本内匠太夫、豐竹園太夫等。三味線は野澤吉兵衞等。人形は吉田冠藏、吉田磯五郎等所演。その後、操に歌舞伎に屢々上演されてゐる。

【題材】眞柴久吉は羽柴秀吉、小坂部音近は長曾我部元親、大内義廣は島津義弘、兒島元兵衞は後藤又兵衞に當る等、「太閤記」に據つてゐるやうである。【諸本】淨瑠璃名作集（有朋堂文庫）下卷所收。

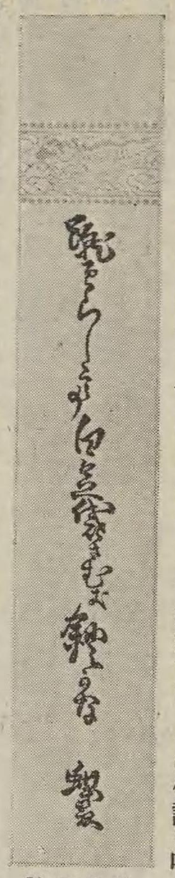
【梗概】〔初段〕天正十四年五月紫宸殿で勅命により眞柴・大内兩家の間に和睦が成立する。〔二段〕宮島で、大友三郎が奸計を企てた爲めに、兩家の和睦が破れる。〔三段・四段〕小坂部利三郎が鍛冶に弟子入して眞柴の軍勢を火藥で鏖殺する。〔五段・六段〕兒島元兵衞が眞柴久吉の幕下に從ふ。〔七段・八段〕日本無双の軍略家小坂部音近は、眞柴・大内の何れにも味方せず領國に引籠つてゐる。音近の聟で眞柴の臣なる加藤正清、同じく聟で大内の臣なる出海左衞門は各々その妻を離別し、一子を使者として音近を味方に付けんと謀る。音近は二人の孫に眞劍勝負をさせ、加藤笹市が出海松太郎に勝つや切腹し、加藤の妻葉末は我が兄の遺兒であるから、松太郎と共に絶命する。〔九段〕大内義廣、加藤正清を謀らんとして却つて謀られる。次に「道行山路の鰐蟲」〔十段〕山間に隱栖する柴田の後家小谷の方を、久吉と義廣が見出した事から、兩家は和睦し、小田春姫は義廣に嫁ぐ。〔十一段〕眞柴・大内兩家合同して大友三郎を擊ち亡す。

【構想】全體の構想は、强ひて複雜を求めたとも見られて、やゝ統一を缺き、部分的に技巧が著しく施されてゐて、傑作とは認め難い。ただ八段目小坂部館は前例も尠からぬ脚色であり、舞臺面の活用と恩愛の切なるものが利用されて注目せられる。そのためか、人形劇に

も歌舞伎劇にも長く生命があり、素淨瑠璃としても知られてゐる。大正九年四月、現大谷友右衛門改名の際、市村座に上場された。(この時の臺本は日本戲曲全集第二十六卷所收)九段目の男一人の道行は珍しい型である。〔守隨・增田〕

調伏曾我（てうぶくそが）「曾我物の謠曲」を見よ。

蝶夢（てふむ）　俳人【別號】五升庵・泊庵【法號】幻阿彌陀佛【生歿】享保十七年、京都に生れ、寛政七年(一七九五)十二月二十四日京都に歿す。享年六十四。【墓所】京都寺町今出川上ル阿彌陀寺【閲歴】京都の人、幼くして洛東法國寺に投じて其阿に師事した。其阿は遊行の徒であるが、蝶夢の穎悟なのを見込んで得度させた。然るに蝶夢は終に吉水の流に歸し、京都中川阿彌陀寺中の歸白院に住することとなつた。併し徒に檀施で衣食する事を喜ばず、明和四年三十六歳にしてその院を法嗣某に附し、洛東岡崎に小庵を結んで閑居し、伊賀の桐雨から、芭蕉の短册「春立つや新年古き米五升」を贈られたのに因んで、五升庵と名づけた(五升庵は後、某年三月七日、蝶夢が嵐山へ花見に行つてゐる留守中に類燒したが、その年八月十五日再興成つて再び入庵した)。かくてこの庵に住む事二十餘年、更にその後の地を卜して泊庵を構へたが、間もなく天明八年春の大火があり、新しい庵はさる寺に寄進してしまつた。又この大火に阿彌陀寺も燒失し、當時の住職は無慚にも燒け殘つた洪鐘を窃かに沽却したので、蝶夢はその買主に諭してこれを寺に還させ、自ら諸州に募緣して困苦數年の後再び本尊を補造し梵聲を聞く事が出來るやうになつた。彼は岡崎に隱棲の後は、靜心念佛に日を送る傍ら俳諧に遊んで、特に蕉翁の高風を慕ひ、風天雨露と雖も必ず忌日毎には義仲寺に詣で、明和七年には芭蕉堂を再建し、同九年には幻住庵の舊址に碑を建てたりした。又常に諸州に山川の名勝を探る癖があり、寶曆十三年には遠く松島に遊んで「松島道の記」を撰び、同八年には桐雨と共に九州太宰府に詣でて「宰府紀行」の著を殘し、天明八年には甲斐に行脚して「裏富士の紀行」があつた。寛政七年九月、病に臥してから復た起たず、同年臘月靜かに一生を終つた。



蝶夢筆蹟

【人物】蝶夢は、俳諧の所謂專門家ではなかつた。彼は徹頭徹尾阿彌陀如來に仕へ奉る信心深い一沙門として振舞つた。その俳諧を嗜んだのも、ただ風雅に遊ぶといふよりは、芭蕉の人格を慕ふ道德的な動機に基いてゐる所があつた。花鳥風月に魂を惱ます詩人的な性格は、彼の中に見出す事は出來ないが、人の世を淸く正しく送らうとする宗教的道德的な情熱には燃えてゐた。これがやがて俳諧に對し芭蕉に對するあの忠實懇篤な態度となつて現はれたのである。凡そ芭蕉の歿後、その遺風を宣揚するために、蝶夢程あらゆる方面に亙つて力を盡した者が外にあるだらうか。芭蕉直指の門人と雖も、か程までに忠實な者はまだなかつた。或は資を募つて影堂を建て文庫を作り、或は各地の遺址を訪ねて建碑の業に携はり、或は幾度か自ら主催して遠忌の追善供養を營み、或は又傳記遺稿の編纂出版に苦心經營を重ねるなど、その芭蕉のため有形無形に彼が盡した事は、測り知る事が出來ない位である。而もそれは決して名聞利養のためにするのではなかつた。又偶像的に芭蕉を盲信し祭り上げるのでもなかつた。常に私意を去り且つ信念を持して事に當つたのである。だから彼の事業の凡てに不朽的な精神と氣魄が籠つてゐた。交遊は頗る廣かつたが、就中伊賀の桐雨とは親しかつた。俳人以外では澄月・慈延・蒿蹊等の歌人、皆川淇園・赤松鴻の詩人と交があつた。【史的地位】作家として、彼が天明俳壇の復興に貢獻した所は、固より蕪村や曉臺と同日に論ずる事は出來ない。彼は藝術家としての天分には必ずしも勝れてゐなかつた。又彼が自ら專門家として立たなかつた關係上、俳壇的勢力とても小さいものであつた。併し彼が純潔な熱情で芭蕉を宣揚し、以て俳壇に廓淸の機運を齎した間接的な功績に至つては、決して輕視する事が出來ない。彼は又、藝術に對して相當の理解を有し、批判の眼を具へてゐた事は、かの「類題發句集」等に徵しても明かであるが、更に彼自身の創作とても、從來評價されてゐた如くに全く二流以下として遇し去るべきではない。蕪村・曉臺などには勿論及ばないとしても、闌更・靑羅等には、聊か比肩するに足るべき作も多く殘してゐる。又五升庵社中としての彼の勢力は大したものでなかつたが、當時の俳人との交渉は各方面に亙つて中々廣かつた。言はば統派を超越した一種の別格宗匠として迎へられてゐた。隨つてその個人的な人格の感化はかなり汎く及んだのであつた。結局蝶夢が天明の俳壇に寄與した點は、その間接的な方面に多く認めなければならないが、俳壇革新の實際に卽して言へば、彼の力は所謂中興の五傑六家等に比して、多く遜色がなかつたと論定すべきであらう。【編著】蕉門俳諧語錄○芭蕉門古人眞蹟○芭蕉堂歌仙圖○名所小鏡○芭蕉翁繪詞傳○類題發句集○新類題發句集○去來丈草發句集○芭蕉翁發句集○芭蕉翁俳諧集○芭蕉翁文集○施主名錄發句集（以上各別項）○松島道の記（寶曆十三年、越の蕉露を俱して、木曾路から松島に遊び東海道を經て歸つた紀行）○宰府紀行（明和九年刊。前年夏桐雨と太宰府に詣でた紀行）○蝶夢和尙文集（一名五升庵文草。五册、寛政十一年正月刊。門人瓦全が師の遺稿を集めたもの）○十論發蒙（明和元年稿。支考の十論を註釋したもの）【門流】五升庵二世を繼いだ柏原瓦全や、追善集「かなしぶみ」（寛政八年）を撰んだ井口菊二等がその高足である。〔顯原〕

【參考】五升庵蝶夢藤井紫影（懸葵昭和五ノ二）

長明（ちやうめい）　歌人【姓名】鴨氏、長明は「ながあきら」と訓讀するのが正しいが（源家長日記）、普通音讀で呼び慣れてゐる。又菊大夫と稱した（大日本史）。【法號】蓮胤（東鑑）【生歿】建保四年（一八七六）歿、享年六十四（系圖）。一說に六十三（方丈記流水抄）【家系】世々鴨社の氏人で、累代禰宜であつた。【閲歴】和歌管絃の道に堪能であり、應保中從五位下に叙せられた。歌學は源俊頼の子、僧俊惠を師とした。自著の「無名抄」によれば、かならず末の世の歌仙となるべき人と思はれる故、たとひ人にゆるされる程になつても、我は顏したる歌よみ給ふなとさとされたといふ。若くして父を失つたが、歌才によつて、後鳥羽上皇に召され、和歌所の寄人となつた。更に「家長日記」によると、河合社の禰宜の補缺を望んだが果さず、後、氏社を官社として長明をその禰宜

にせらるべき御沙汰があつたが、長明はすでに出家して大原に隱遁してしまつてゐたといふ。遁世後も和歌所の寄人たるべき恩命を蒙つたが、「沈みにき今さらわかの浦波によせばやよらんあまの捨舟」と詠じて籠居した（十訓抄）。「東鑑」卷十九（建暦元年十月）に、度々鎌倉に下向、將軍に謁した記事があるが、「大日本史」に記す如く、歌道に熱心な實朝が請じ下したのであらう。その後、日野の外山に入つて、方丈の室を營み、「方丈記」を書いたと傳へる（方丈記參照）。【批評】社家から出て、隱逸となつた點は後の兼好を思はせるが、遁世者としては、ほぼ同時代の西行に似てゐる。長明の本領は和歌にあるであらうが、歌人としての力量は、西行や慈圓よりは餘程劣る。文才に於ても、「方丈記」は姑く措き、「無名抄」や「發心集」によつて見ると、一流の文章家とは稱し難い。【著作】勅撰集に入つてゐる歌は、千載一、新古今十、續古今二、續拾遺一、新後撰二、玉葉一、續後拾遺一、風雅二、新千載一、新拾遺一、新後拾遺一、新續古今二、合計二十五首○鴨長明集○無名抄○發心集○方丈記（各別項）○伊勢記（散佚して、僅かに斷片を夫木和歌抄に止めてゐる）。その他、「瑩玉集」「文字鏁」「四季物語」「長明道之記」（東關紀行參照）等が、長明の著と傳へられるが疑はしい。なほ「發心集」「方丈記」等にも疑ひがある（發心集・方丈記參照）。

【參考】源家長日記○扶桑拾葉集○大日本史（隱逸傳）○東鑑○十訓抄○鎌倉時代文學新論　野村八良　〔野村〕

長明道之記（ちやうめいのみちのき）「東關紀行」を見よ。

長明和歌物語（ちやうめいのかたり）「無名抄」を見よ。

朝野群載（てうやぐんさい）　詩文集　三十卷

【著者】三善爲康　【名稱】朝野の詩文及び雜文を群集し收載した意味を示してゐる。【成立】永久四年（自序）。但し、その後も見るに隨ひ得るに隨つて補充し、元永・大治・永久頃のものも載つてゐる。故に完成した年次は、長承・保延頃であらう。恐らく歿するまでは手を入れたものと思はれる。【諸本】史籍集覽・改定史籍集覽に收む。この書は伴信友の校本を底本とし、別に小杉榲邨の校本及び帝國圖書館藏古寫本を以て對校したといふものである。信友の校本は禁裏本・官本・林本・異本・尾本等各種を搜索し、都合十本を以て校正したものである。寫本としては、帝國圖書館本・內閣文庫本・圖書寮本等がある。又、京都の猪熊信男氏藏本は卷一だけであるが、鎌倉初期の卷子本で、流布本に比較すると內容が多い。この本は最も原本に近いものと思はれる。東京帝大史料編纂掛編の「古簡集影」第六・七に複製されてゐる。【解說】流布本は、卷十・十四・十八・十九・廿三・廿四・廿五・廿九・卅の九卷を缺いてゐる。「群書一覽」卷五には、卷十・十四兩卷を缺卷とせず、現存するもの二十三卷と記してゐる。但し右兩卷の存在は今明かでない。その內容は、

卷一より卷三迄は文筆上中下に分れて、本朝文粹その他の詩集に重複する文もある。卷四・五は、朝儀の上下で、除目・東宮・女御・親王・女官・齋宮等に關するものと、藏人所關係のものを載せて居る。卷六は神祇官と太政官とに關するもので、中臣祭文や龜卜や神社關係の諸事と太政官の論奏・官牒・勸文等。卷七は攝關家に關する內覽宣旨・關白詔・辭攝政表、或は寺院や勸學院に關する下文・送文・仰書と公卿家に關する年給、官の申文その他の書牘文。卷八は別奏と請奏とである。別奏には中務省の日月蝕の奏、主稅寮・大學寮・諸陵寮・式部・民部・治部省等に關するものを載せ、請奏には轉任や請官に關する公文を載せてゐる。卷九は功勞と讓狀とで、功勞には申參議、申大學頭、申式部丞、申少納言等に關するものを載せ、讓狀には以ノ爵讓レ子、辭ニ市令史ニ讓レ男の如き類。卷十は缺け、卷十一は廷尉で、檢非違使や盜人過狀や斷獄、怠狀・過狀等。卷十二は內記の詔や勅符の外、主に宣命を載せてゐる。卷十三は紀傳道關係の公文であり、卷十四は缺け、卷十五は陰陽道・曆道・醫道・天文道に關する勸文・奏請狀等。卷十六・十七は佛事の上下で、東大寺大佛記、石淸水宮緣起等を初め法務・僧綱、修法施入狀等に關する公文。卷十八・十九兩卷は缺けて、卷廿は太宰府並に異國關係の牒狀及び返報等。卷廿一は雜文上で、怪異勸文、異鳥勸文、荷前幣物請文、贈位々記等を載せてゐる。雜文下の見えないのは、現在の卷廿二は或は卷廿三であるかも知れない。さうして卷廿二は雜筆下の缺卷と見るべきかと考へられる。卷廿二は諸國雜事上で臨時奉幣祭文・釋尊祝文・國符・移文・新司廳宣等。卷廿三・廿四・廿五は缺けてゐるが、若し卷廿二缺本とし、諸國雜事上を卷廿三とすれば、卷廿四は諸國雜事下となり、卷廿五は諸國公文上であらう。卷廿六・廿七は諸國公文の中・下で解由以下國解・赦解文・雜掌文書・正稅返却帳・封戶省等の類。卷廿八は諸國の功過で、受領功過申文・覆勸等の類を載せてゐる。

これ等によつて見ると、編輯に關しては周到な用意が注がれた事も知られ、忠實に廣範圍に長年月に亙つて編次せられたことが推察せられる。詩賦・文章を知るには「本朝文粹」「本朝續文粹」（別項）以下の著作が少くない。內外の官符には、「類聚三代格」の如き、又は「類聚符宣抄」や「續左丞抄」（卽ち壬生新寫古文書）等がある。併し攝關・公卿・朝儀・佛事乃至諸道の吏牘や公文をかくの如く類聚し、平安時代に於ける古文書の書式を知る資料となり、又制度事情の材料となる。なほ一般の漢文の外に神祇官の謹奏や中臣の祭文及び宣命の文の存する點も、大に參考となるものである。伴信友はその校本の末に「抑余之注意于此書、頗費日月者、豈愛詩賦文章、制度事情、可就而覽者存矣」と述べてゐる。詩賦は多くは平安後期の文人の作を取つてゐる。卽ち兼平親王・源順・橘在列・大江以言・大江匡衡・藤原敦光等多いが、前期の文人には、都良香・菅原道眞・紀長谷雄等極めて僅少である。〔山岸〕

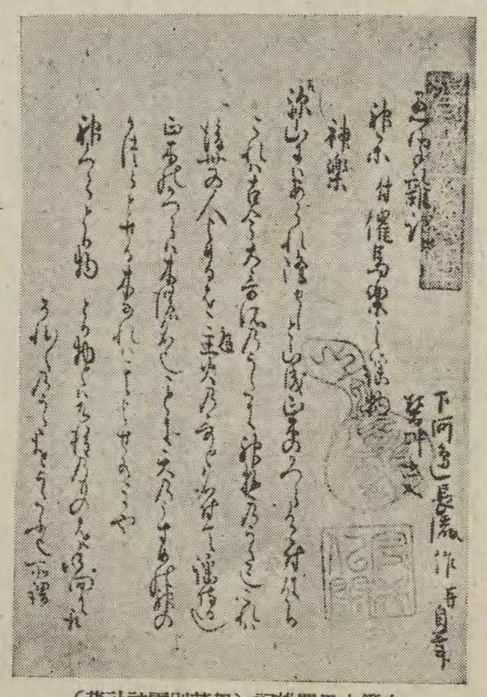
長流（ちやうりう）　歌學者　【姓名】下河邊氏。初め共平（具平とも）、後に長流又長龍。長流を「ながる」と讀んでゐるものもあるが、長龍ともあるから、「ちやうりう」が正しからう。長流と長龍との前後については、長龍を改めて長流としたといふ說もあるが、長龍は延寶の末年以後に見え、長流は寬文から延寶七年頃までのものに見える故、長流が先で、晩年に長龍の字を用ひたのであらう。通稱彥六【生歿】貞享三年（一六八六）六月三日歿す。享年は六十三といふのが從來の說（年山紀聞）。これは細見多助といふ人の記憶で、長流歿後、凡そ三十年頃に記されたもの。然るに長流の自撰歌集「長龍和歌延寶集」に、「延寶九年五月二十日下河邊長龍五十五歲自集」とあるによれば、享年六十一歲で、この方が正しくはあるまいか。また六十二歲といふ說もあるが、圓珠庵の過去帳及び位牌によつたもので、共に後のものであるから信じ難い。【法名】吟叟長流居士【墓所】もと大阪玉造の東、大今里村にあつた由であるが、久しい以前に廢滅。大正十四年に圓珠庵の契沖の墓の隣に新たに作つた。【學統】木下長嘯子（別項）について歌を學んだ。又西山宗因（別項）に連歌の點を乞うた

とも傳へられてゐる。門弟には、今井似閑・野田忠蕭・五井守任（加助）・三浦祐建・志水（清水か）春流・寺田陽仲などがある。【閲歴】長流は大和國宇田に、武士小崎氏の子として生れたが、母の氏を繼いで下河邊を名乘つた（宇田の産とするのは、年山紀聞の說で、長流の家奴の言に基づく。契沖は龍田であると信じてゐた）。父は片桐氏に仕へたといふが、長流は、年少から武士の教育を受け、十八九から「古今集」を讀み、又連歌を作つたが、主君片桐氏の不興を買つたので致仕した。後江戸に赴いて出仕を求めたが、志を得ずして大阪に歸つた。その

下河邊長流

後京に上つて三條西家に仕へ、「萬葉集」の抄物を寫し傳へ、數年にしてこゝを辭し、又江戸に下つたが、再び大阪に歸つて、鰻谷・江戸堀などに住み、一生を隱士として獨身で過した。和歌を好み、歌學に通じ、歌集や枕詞歌語などの註釋書を著し、撰集などをも作り、殊に「萬葉集」には精通してゐた。從學するものが多かつたが、狷介不羈の性で、心の趣かぬ時は富家の招にも應ぜず、人が來てものを言はなかつたと傳へられてゐる。僧契沖とは交り最も深く、契沖が妙法寺や曼陀羅院にゐた頃から絶えず往來し、その和泉に隱棲した後も、歌の贈答相ついだ。德川光圀が長流の名を聞いて、召したけれども應じなかつたので、これに筆紙の料として五十人扶持を送つて「萬葉集」の註釋を作らしめる事としたが、長流は應諾しながら氣のむかない時は筆を執らなかつたので、餘り進捗しないうちに病に罹り、成功が覺束なくなつた爲め、契沖が改めて光圀の囑を受けてその業を繼ぐ事となつたが、長流はその後、病が重つて遂に世を去つた。契沖は長流の歌を集めて「晩花和歌集」と名づけて世に傳へた。

【著作】長流全集二卷新村出等編（契沖全集附卷として昭和二年刊）〔註釋書〕萬葉集管見（別項）二十卷（寛文初年以前の成立か）○萬葉集鈔一卷（年代未詳。但し管見より後。「萬葉集」卷二から卷十四までの中から七十三首を拔萃して註釋を加へたもの。全集上卷所收）○二聖倭歌注一卷（寛文七年八月成。聖德太子と達磨の化身なる飢者との片岡山での贈答の歌を釋したもの。刊本は神佛二聖和歌注と題し、天明八年東嶺圓慈の序がある。自筆本は賀茂別雷神社藏。全集上卷）○歌仙抄二卷（萬治二年頃成。萬治二年刊、自筆版下。三十六歌仙の歌を釋したもの。全集上卷）○百人一首三奥抄二卷（百人一首の詳註。全集上卷）○六々歌人賛一卷（寛政十二年刊。三十六歌仙を贊して契沖が詠んだ歌に註釋を加へたもの。隱士就重の所望による。全集上卷）○愚聞雜記一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。神樂催馬樂の註釋。說は大抵「梁塵愚案抄」に同じい。自筆本には契沖の書入がある。全集上卷）〔歌學書〕枕詞燭明抄三卷（寛文十年刊。百餘の枕詞をあつめて解釋したもの。全集上卷）○萬葉古事並詞一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。「萬葉集」中の詞を風土記等を引いて證し、又解釋したもの。全集上卷）○俤考集一卷（水戸彰考館所藏寫本が唯一の傳本である。難解の歌語を解釋し、これに關する諸說をあげたもの。全集上卷）○古詠並古事一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。古歌を部門別にしたものと、「日本書紀」その他から故事出典たるべき文をあつめたものと、狹衣の歌と名所の歌とをあつめたものと、より成る。研究の資料として抄錄したものであらう。全集上卷）○續歌林良材集二卷（延寶五年刊。貞享元年刊。文政元年刊。文政刊本は表題を「新歌林良材集」と改めた。又表題に一名「和歌祕密抄」とあるものもあるといふ。續々群書類從歌文部所收本。一條兼良の「歌林良材集」の續編として歌に詠まれる故事傳說等を說明したもの。全集上卷）○四季出題抄一卷（大阪殿村家所藏契沖書寫本が唯一の傳本である。四季の歌題をあげて說明し、これをいかに詠むべきかを示したもの。全集上卷）○萬葉集名寄（別項）四卷（萬治二年頃刊。これは著者版下本。寶永七年再刊。この時書名を「萬葉集名所部類抄」と改めた。全集上卷）○材林和歌抄五卷（水戸彰考館と竹内文平氏との所藏の寫本が知られてゐるのみである。「萬葉集」その他の歌集から三千五百餘首を抄出して、その詠ずる品物によつて部類し作歌の資材としたもの。全集上卷）〔歌集〕長龍和歌延寶集一卷（湖海狂士の請によつて、長流自らの歌を選んだもの。延寶九年成。「三家和歌集」の中卷として收められた。文化十年自撰「晩花集」と題して刊行。更に續日本文學全書第一編中に復刻。全集下卷）○晩花和歌集（別項）二卷○林葉累塵集二十卷（寛文十年刊。長流が同時代の武士・農夫・商賈・僧侶等無官無位のものの歌を集めて後世に傳へんために作つたもの。但し木下長嘯子のみは例外。四季・戀・雜等に部類してある。全集下卷）○萍水和歌集二十卷（延寶七年頃成。刊。前項の書と同じ趣旨で撰したもの。但し心敬・宗祇・弄花・藤原惺窩等古人の作をも加へた。全集下卷）○長嘯歌選一卷（延寶九年頃成。湖海狂士の請によつて、木下長嘯子の歌集「羇白集」の中から秀歌を選出したもの。「三家和歌集」の上卷として傳はつてゐる。全集下卷）〔書入本〕土佐日記抄（名古屋關戸氏藏。慶安四年刊。「土佐日記」に長流が書入及び校合を加へたもの。これには契沖が更に書入を加へた。その書入校正を集めて整理し、全集に收めて「土佐日記抄」と名づけた。全集上卷）



自筆本愚聞雜記（賀茂別雷神社藏）

【歌風・學風】長流は江戸時代に新たに興つた古典學、所謂古學の先驅者である。歌は貴賤を問はず老若を論ぜず、わが國民の見るもの聞くものにつけて思を述ぶるものであるとの考から、窮屈な因襲的な堂上家の歌に對抗し、その教權から和歌を解放して、取材の範圍をひろくし、自由な清新な歌を鼓吹した。これは恐らくは、彼が愛讀した「萬葉集」から得來つたものであらう。さうして、曾根好忠・源俊頼・藤原爲兼の如き、各時代の新派歌人の作を

重んじ、殊に木下長嘯子に私淑した。官位ある人は我が儕にあらずとして、位なき武士を初め、田夫・野人・商賈・僧侶の歌をあつめて「林葉累塵」「萍水」の二集を撰んだ如きも、その志を見るべきである。併し實際に於ては、長流の歌は、まだ十分舊來の風を脱しきらないところも見えるが、とにかく特色のあるものであり、又數篇の長歌の作があるのも異とするに足るものである。歌の學問に於ては、長流は歌の註釋、殊に「萬葉集」の註釋を主としてゐるが、これも從來の傳授のつまらないものである事を稱へて、從來の諸説に拘はらず訓法や解釋に新説を出してゐる所が少くない。但し概してその考證精しからず、また獨斷に陷つた所も見える。この點は長流も自覺したとみえて、「萬葉集管見」の如きは老後には愧ぢて、人に示さなかつたといふ。【影響】長流の學問は、契沖に影響するところ甚大であつた。契沖の主著なる「萬葉代匠記」は、長流の「萬葉集管見」を基礎として出來たものであることは、「代匠記」初稿本と「管見」とを比較してみれば明瞭であつて、「代匠記」は「管見」に多くの論證を添へ、且つ契沖の私見をも加へたものといつても過言でない（萬葉集鈔その他長流の説を引いた所も少くない）。契沖の「百人一首改觀抄」と、長流の「百人一首三奥抄」との間にも同樣の關係が見られる。「古今集餘材抄」の如きも亦、程度の差こそあれ、長流の手を着けておいたものを基礎とした事は契沖自ら記せる通りである。かくて契沖は、學問上に於ける長流の後繼者であつて、長流が開いた土地の上に、古學の殿堂を建てたものである。古學の特色は、自由討究の精神と、歸納考證の研究法とにあるが、前者は長流に於て明かに見られるが、後者は長流に於てはまだ十分發達せず、契沖に至つて初めて明瞭になり確立せられたのであつて、ためにその學問を劃期的のものとしたのである。されば長流は契沖の始めた古學の基礎を築いたものであつて、その學説は、契沖の著作に攝取せられて、後の古學者・國學者に影響を與へたのであるが、又「萬葉集管見」の如きは、北村季吟の「萬葉拾穗抄」や荷田春滿の「萬葉集僻案抄」などにも引用せられて、これに直接の影響をも與へてゐる。

【參考】長流傳記資料　橋本進吉（長流全集下卷終りに長流研究論文目錄がある）○新資料に據る下河邊長流傳の研究　森銑三（國語と國文學八四）○契沖阿闍梨　大町桂月○契沖傳　久松潛一（契沖全集九）○國文學研究史　野村八良○國學全史　同上　○日本歌學史　佐佐木信綱　○近世和歌史　同上　〔橋本〕

長龍延寶集（ちやうりゆうえんぱうしふ）「晩花和歌集」を見よ。

張良（ちやうりやう）　幸若舞曲（番外）一卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】内閣文庫藏の古寫節附本が新群書類從第八舞曲部に收められ、又全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを、日本歌謠集成卷五所收。【題材】舞曲中唯一の支那説話。兵法傳授説話。漢の高祖の三傑の一、張子房に關する曲で、「史記」「漢書」等に有名な黄石公傳説を主題としてゐる。謠曲「張良」と同材。但し謠曲よりは委しいが荒唐さを增し、大蛇退治の武勇傳説的要素をも含み、觀音信仰の本地物的時代色と融合してゐる。酒の由來を説くも近古色である。なほ本曲の題材は、特に「鬼一法眼」（別項）の挿話としての説話と近似してゐて兩者の交渉を推測し得る。張良・樊噲は、漢土の謀臣勇士として近古に特に崇拜せられた人物で、彼等に關する文學や傳説も少くない。謠曲「鞍馬天狗」乃至その内容を成す義經の兵法傳授説話の如きも、一面この黄石公傳説の影響である。

【梗概】張良が、天下を平げようと鷲峰山の十一面觀音に一七日の參籠をなし、その示現に任せて御手洗の川について百日下ると、果してしやうみやう國に着き、橋を見出し、八十餘歳の老翁の馬に騎つて來るのに逢つた。摺れ違ふ時、老翁故意（わざ）と沓を橋下に落し、張良が捧げる毎に幾度も落し〳〵した。最後に激流に落下したのを張良は三十餘丈の崖下に飛び下り、襲ひかゝる大蛇を打懲して歸服させ、沓を拾うて奉ると、翁はその剛膽の試に堪へたのを感賞して、虚空に鞭を上げ良を馬の尾に縋らせたまゝ南方淨土へ伴ひ、觀世音の本體を現して兵法の祕書陰陽の卷を授けた。後、仙酒を賜ひ、その由來をも告げられ、なほ與へられた扇と鞭の奇特によつて、良は一瞬に故郷に歸る事が出來た。　〔島津〕

張良（ちやうりやう）**勅書**（ちよくしよ）　古文書　【解説】天皇の綸言を記した公文書。詔書（別項）が臨時の大事に用ひらるゝに對し、勅書は尋常の小事、例へば攝政關白に隨身を賜はり、皇子に源氏の姓を賜はり、内親王を三宮に准ずる場合及び封戸を宛つる場合等に用ひられる。併し後世は詔書勅書使用の場合は劃然としてゐなかつたやうである。その手續は詔書を少し簡略にしたもので、普通は御畫日も御畫可もない（詔書參照）。そして地方へ遣る場合は謄勅符として下す。公式令規定の勅旨式は、

勅旨云々、
年月日

中務輔位姓名
大輔位姓名
少輔位姓名
奉勅旨如右、符到奉行、
年月日　史位姓名
大辨位姓名
中辨位姓名
少辨位姓名

この公式令の勅旨式はその實例は殆ど無く、一般に勅書と稱せらるゝものは、同じく公式令に規定してある飛驛下式即ち勅符式に據つたものである。

勅、諸國所貢調庸支度等物、毎有未納、交關國用、積習稍久、爲弊已深、良由國宰郡司遞相怠慢、遂使物漏民間用乏官庫、又其莅政治民、多乖朝委、廉平稱職、百不聞一、瘠民潤身、十室而九、忝曰官司、豈合如此、宜量其狀迹、隨事貶陟其政績、有聞執掌無廢者、亦當甄錄擢以顯榮、所司宜詳沙汰明作條例奏聞、主者施行、
延曆五年四月十一日

後世、禪師號・國師號等を贈らるゝ場合の徽號勅書もこの式である。これには普通御畫日（日の數字の宸書）があるが、時に全文宸筆のこともある。なほ後世は普通の宸翰をも俗に勅書と稱し、幕末には今日の御沙汰書の式のものも勅書と申してゐた。明治以後は勅旨・勅諭・勅語・御沙汰書の區別がある。　〔伊木〕

勅撰和歌集（ちよくせんわかしふ）　和歌　【名義】宣旨又は院宣によつて撰者がえらんだ歌集をいふ。【解説】勅撰和歌集としては古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・新勅撰和歌集・續後撰和歌集・續古今和歌集・續拾遺和歌集・新後撰和歌集・玉葉和歌集・續千載和歌集・續後拾遺和歌集・風雅和歌

物を寫し傳へ、數年にしてこゝを辭し、又江戸に下つたが、再び大阪に歸つて、鰻谷・江戸堀などに住み、一生を隱士として獨身で過した。和歌を好み、歌學に通じ、歌集や枕詞歌語などの註釋書を著し、撰集などをも作り、殊に「萬葉集」には精通してゐた。從學するものが多かつたが、狷介不羈の性で、心の趣かぬ時は富家の招にも應ぜず、人が來てもものをも言はなかつたと傳へられてゐる。僧契沖とは交り最も深く、契沖が妙法寺や曼陀羅院にゐ

人一首の詳註。全集上卷）○六々歌人替一卷（寛政十二年刊。三十六歌仙を贋して契沖が詠んだ歌に註釋を加へたもの。隱士就重の所望による。全集上卷）○愚聞雜記一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。神樂催馬樂の註釋。説は大抵「梁塵愚案抄」に同じい。自筆本には契沖の書入がある。全集上卷）〔歌學書〕枕詞燭明抄三卷（寛文十年刊。百餘の枕詞をあつめて解釋したもの。全集上卷）○萬葉古事並詞一卷（自筆本賀茂別雷神社藏。「萬葉集」中の詞を風土記等を引いて證し、又解釋したもの。全集上卷）○僻考集一

館と竹内文平氏との所藏の寫本が知られてゐるのみである。「萬葉集」その他の歌集から三千五百餘首を抄出して、その詠ずる品物によつて部類し作歌の資材としたもの。全集上卷）〔歌集〕長龍和歌延寶集一卷（湖海狂士の請によつて、長流自らの歌を選んだもの。延寶九年刊。「三家和歌集」の中卷として收められた。文化十年自撰「晩花集」と題して刊行。更に續日本文學全書第一編中に復刻。全集下卷）○晩花和歌集（別項）二卷○林葉累塵集二十卷（寛文十年刊。長流が同時代の武士・農夫・商賈・僧侶等無官無位のものの歌を集めて後世に傳へんために作つたも

收めて「土佐日記抄」と名づけた。全集上卷）

【歌風・學風】長流は江戸時代に新たに興つた古典學、所謂古學の先驅者である。歌は貴賤を問はず老若を論ぜず、わが國民の見るもの聞くものにつけて思を述ぶるものであるとの考から、窮屈な因襲的な堂上家の歌に對抗し、その教權から和歌を解放して、取材の範圍をひろくし、自由な清新な歌を鼓吹した。これは恐らくは、彼が愛讀した「萬葉集」から得來つたものであらう。さうして、曾根好忠・源俊頼・藤原爲兼の如き、各時代の新派歌人の作を

集・新千載和歌集・新拾遺和歌集・新後拾遺和歌集・新續古今和歌集（以上各別項）をさし、併せて二十一代集といふ。この外、「萬葉集」を勅撰とする説もあるが、「萬葉集」全部にではなく、卷一・二等の小部分に適用され得るのみであり、それも「古今集」以下のやうな嚴正な勅撰集とは言はれないであらう。又清輔の撰した「續詞花集」の如きも宣旨によつて撰したのではあるが、撰上の前に崩御になつたから勅撰集とならなかつた。かくて勅撰集としては二十一代集をさすと見るべきである。なほ古今・後撰・拾遺の三勅撰集を三代集といひ、古今より新古今までの八勅撰集を八代集といふのである。【研究】二十一代集をまとめて書史學的に研究したのは、吉田令世の「歴代和歌勅撰考」である。〔久松〕

勅版（ちよくはん）「刊本」を見よ。

勅筆流（ちよくひつりう）「書道」を見よ。

直喩（ちよくゆ）「比喩」を見よ。

著作權（ちよさくけん）【解説】文書・演述・圖畫・建築・彫刻・模型・寫眞・演奏・歌唱その他文藝・學術若しくは美術の範圍に屬する著作物の著作者が、その精神的勞作の所産たる著作物を、經濟上排他的に利用することを得る權利を謂ふ。この權利は著作權法（明治三十二年法律第三九號、但し明治四十三年・大正九年及び昭和六年にそれぞれ一部改正）の認むるところであり、又所謂ベルヌ條約に依つて國際的にも認められてゐる。著作者は著作物を作成すると同時に當然著作權を與へられ、今日では以前のやうに免許・屆出・登錄・納本等の手續は勿論、著作物の各部册に著作權所有なる字句の表示などを爲すことは必要でなくなつた。著作權は法律に定むる一定の期間内だけ保護せらるる權利である。即ち發行又は興行した著作物の著作權は、著作者の生存間及びその死後三十年間繼續する。著作者の死後發行又は興行した著作物の著作權は、發行又は興行の時から三十年間繼續する。無名または變名著作物の著作權は、發行または興行の時から三十年間繼續する。著作權は上述の如く、著作物を經濟上排他的に利用することを得る權利であるが、その利用方法は、著作物の種類に依つて多種多樣であるから、從つて著作權の内容をなすところの權能も亦多種多樣である。その主なるものを擧ぐれば、出版權、飜譯權、興行權、演奏權、映畫化する權能、戲曲化する權能、放送權等である。著作者は、通常出版や興行の設備と經驗とを有しないから、出版業者又は興行者等と出版契約、映畫化契約、興行契約、上映契約等を締結して著作物の利用をなすのが普通である。出版に就いては出版法その他出版の取締に關する法規の制限を受け、興行に就いては活動寫眞フイルム檢閲規則、その他興行の取締に關する警視廳令、又は各府縣令等の適用を受けねばならぬことは勿論である。又放送は現在では放送局のみこれをなすことができるのであるから、所謂放送權なるものは、現行法制の下では放送局に對する放送許諾權として現はれるのである。僞作者即ち著作權の侵害者に對しては、著作者は侵害の中止並に損害の賠償を請求することができるし、又僞作者を告訴して刑事制裁を受けしむることができる。

【著作者の人格權】著作者は著作物を作成することに因つて、著作權の外に、著作物の作成者としての人格的利益を維持する權利を與へられる。この權利は人格權の一種であつて或る著作物の著作者たることを明示する權利、著作物の全一性を維持する權利の如きがこれに屬する。著作者にこの權利があるため、何人も他人の著作物を發行又は興行する場合には、著作者の生存中は、著作者が現にその著作權を有すると否とに拘はらず、その同意なくして著作者の氏名稱號を變更若しくは隱匿し、又はその著作物に改竄その他の變更を加へ、若しくはその題號を改むることができない。又著作者の死後は著作權の消滅した後と雖も、その著作物に改竄その他の變更を加へて著作者の意を害し、又はその題號を改め若しくは著作者の氏名稱號を變更、若しくは隱匿することができない。著作者の人格權を侵害する者に對しては、著作者は著作者たることを確保し、又は訂正その他その聲望名譽を回復するに適當なる處分を請求し、及び民法の規定に從ひ侵害の中止並に損害の賠償を請求することができる。著作者の死後に於ては著作者の親族がその著作者たることを確保し又は訂正その他、その聲望名譽を回復するに適當なる處分を請求することができる。又著作者の人格權の侵害者に對しては、告訴をなして刑事制裁を受けしめることができる。

【江戸時代に於ける著作物の保護】江戸時代に於ては、法制上概して出版物の取締の方面のみが着眼され、著作者の利益の保護の方面は閑却せられてゐた。併し江戸時代の中期頃から書物の著作・出版が盛んとなるにつれて、他人の出版したものを無斷で重版したり、又は類版を出版して最初の出版者の利益を害する者などが出たので、三都の書物出版業者の間には、重版類版の防止に關する同業者の組合規約が成立するに至り、著作出版の私法的關係は、實質上この組合規約に依つて私的に規律されてゐた。著作者の利益は、これ等の出版業者の組合規約を通して、極めて間接に保護せられてゐたのである。これ等の規約は單に同業者間の私的協定に過ぎなかつたが、實際に於ては法令の如く尊重せられ、當局からもその效力を認められてゐた。その後天保十五年五月、町年寄館市右衞門から書物掛名主へ觸れられた沙汰書が出づるに及んで、始めて著作出版の私法的關係が、公的にやゝ詳細に規律さるゝこととなつた。即ちこの沙汰書が我が國に於ける著作出版に關する私法的法令の最初のものであると普通に云はれてゐる。尤もこの外には、その後江戸時代の終りに至るまで、私法的法令の見るべきものは現れなかつた。

【馬琴と著作權】江戸時代の中頃、著作出版が盛んに行はるゝに至つてから、作品の剽竊や冒瀆や僞版（類版重版）が屢々行はれたに拘らず、作家の間に著作權的思想は容易に發生しなかつたやうである。ただ一人馬琴が永年の著作生活の間に書かれた日記や、書翰や隨筆に於て、度々著作權侵害の問題に就いて訴へてゐるのを見るだけである（馬琴日記・著作堂雜記等）。併し彼の時代には、勿論、著作權と云ふものが確立してゐたわけではないから、救濟を受くる途もなく、恐らくその都度泣き寢入りになつた事であらうと思はれる。〔榛村〕

著作堂一夕話（ちよさくだういつせきわ）　隨筆　三卷　【著者】瀧澤解（馬琴）【刊行】弘化五年【解説】享和三年刊の「蓑笠雨談」（別項）の改題である。やゝ大判になつてゐるのと出版書肆の違ふだけで、板木も同一のものを用ひてゐる。今坊間には本書が最も行はれてゐる。

（蓑笠雨談參照）

千代田歌集第一卷（ちよだかしふ　だいいつくわん）　〔和田〕

歌集　【撰者】佐佐木弘綱【刊行】明治二十三年一月【解説】全國から募集した歌を分類編纂したもの。分類は新年・四季・戀・雜以外に、詠史・新題の部が立てられてある。當時として清新の作が多い。作者には、三條實美・岩

享保七年刊の「北國曲」に擧げられた「池の雪鴨あそべとて明てあり」の一句である。露川が金澤に行つたのは享保六年六月で、この句はその折聞き得て採錄したものと思はれるから、享保五年冬即ち千代女十八歳の時の吟である。次いで支考が大亳に報じた二句「行春の尾や其まゝに杜若」「稻妻の裾をぬらすや水の

よし結婚した事があるにせよ、それは極めて短い間の事であつたらうと思はれる。さて千代女の俳名が高くなると共に、行脚の俳人の來訪する者も多く、享保十一年秋には魯九が來て唱和し（雪の白河）、翌年夏には盧元坊もやつて來た（桃の首途）。爾來美濃派の人々と最も風交多く、剃髮してから後（剃髮したのは享保

に續集「松の聲」が編まれた。生前既に二句集が相次いで出たのに徵しても、その聲望の遍かつた狀が察せられる。かくて晩年に至るまで風雅の名を擅にし、「月も見て我は此世をかしく哉」を辭世として終つた。

【批評】その名聲のみから言へば、千代女は恐らく芭蕉と比肩すべき地位に居るであらう。

ふ。この權利は著作權法（明治三十二年法律第三九號、但し明治四十三年・大正九年及び昭和六年にそれぞれ一部改正）の認むるところであり、又所謂ベルヌ條約に依つて國際的にも認められてゐる。著作者は著作物を作成すると同時に當然著作權を與へられ、今日では以前のやうに免許・屆出・登錄・納本等の手續は勿論、著作物の各部册に著作權所有なる字句の表示などを爲すことは必要でなくなつた。著作權は法律に定むる一定の期間内だけ保護せらるる權利でなるものは、現行法制の下では放送局に對する放送許諾權として現はれるのである。僞作者即ち著作權の侵害者に對しては、著作者は侵害の中止並に損害の賠償を請求することができるし、又僞作者を告訴して刑事制裁を受けしむることができる。

【著作者の人格權】 著作者は著作物を作成することに因つて、著作權の外に、著作物の作成者としての人格的利益を維持する權利を與へられる。この權利は人格權の一種であつて或

【江戸時代に於ける著作物の保護】 江戸時代に於ては、法制上概して出版物の取締の方面のみが着眼され、著作者の利益の保護の方面は閑却せられてゐた。併し江戸時代の中期頃から書物の著作・出版が盛んとなるにつれて、他人の出版したものを無斷で重版したり、又は類版を出版して最初の出版者の利益を害する者などが出たので、三都の書物出版業者の間には、重版類版の防止に關する同業者の組合規約が成立するに至り、著作出版の私法的

（高笠雨談參照）

千代田歌集第一卷 ちよだかしふ だいいつくわん

【和田】

歌集 【撰者】佐佐木弘綱 【刊行】明治二十三年一月 【解説】全國から募集した歌を分類編纂したもの。分類は新年・四季・戀・雜以外に、詠史・新題の部が立てられてある。當時として清新の作が多い。作者には、三條實美・岩倉具視・高崎正風・福羽美靜・東久世通禧・小中村清矩・小出粲・稅所敦子等知名の人もあるが、無名の作者がその多きを占めてゐる。卷首に新六歌仙圖を掲げてある。明治時代の民間歌人の撰集の初めともいふべく、歌道普及の上に大に功があつた。隨つて二・三卷も世に出たのである。 〔佐佐木〕

千代尼 ちよに

俳人 【別號】素園・草風 【生歿】元祿十六年二月加賀松任に生れ、安永四年（一七七五）九月八日同地に歿す。享年七十三（白雄が明和六年尋ねて會つた時の手紙には「六十九」とある。それによれば七十五歳説がよい） 【法名】釋尼素園 【墓所】松任町聖興寺。金澤專光寺にも碑がある。 【閲歷】千代は松任の表具屋福增屋六左衞門（通説六兵衞）の女として生れた。幼時から文藝の趣味があり、十六七歳頃から既に俳諧をよくしたらしい。それは彼女が十二歳の頃奉公した本吉町北潟屋大睡の感化によるなどと言はれてゐるが、大毫に宛てた支考の手紙（城丸氏著「千代尼」所載）に據れば、實は特に學んだ師匠はなかつたと思はれる。「姫の式」（享保十一年）等に據れば、寧ろ金澤の俳人野角の妻紫仙女を先輩としてこれに親炙してゐたらしい。享保六年の夏秋の際、支考・露川が相前後して北越に行脚した折、二人は共に千代に會してその奇才に驚き、支考は特に書を裁してこれを鄕友に報じた程であつた。千代の作が初めて物に見えるのは享保七年刊の「北國曲」に擧げられた「池の雪鴨あそべとて明てあり」の一句である。露川が金澤に行つたのは享保六年六月で、この句はその折聞き得て採錄したものと思はれるから、享保五年冬卽ち千代女十八歳の時の吟である。次いで支考が大毫に報じた二句「行春の尾や其まゝに杜若」「稻妻の裾をぬらすや水の上」及び「鵜坂集」（享保七年夏序）に載せられた「惜めども春は留らで啼く蛙」「それ〴〵に名乘て出る若葉哉」等の作が知られてゐる。この頃から、千代女の名は益々喧傳されたと見え、稻妻の吟の如きは「水の友」（正秀追善、享保九年松瓶撰）、「文月往來」（享保十一年嵐枝撰）等にも採錄され、その名は既に遠くまで聞えてゐた事が分る。かくて享保十年には小松の俳人宇中が「傳ニ千代女一書」（千代尼句集所載）をものして、大に彼女の賞揚に力めた。當時千代は二十三歳であつたが、この書中に「やゝ廿とせの春秋を經て、千代の翠に生先しるし。いまだ高砂の尾上に相生の名もあらずとかや」とあるのに據れば、なほ未婚であつたらしい。然るに傳説によれば、千代は享保五年四月金澤大衆免中組の足輕福岡彌八に嫁ぎ、同六年七月一子彌市を生み、十一年七月良人に死別し、十二年二月彌市も亦夭折したので、その年五月婚家を去つて鄕里松任に歸つたといふ（城丸氏著「千代尼」）。併し文獻的にはこれを證すべき何等の資料もなく、かの「澁かろか知らねど」「起きて見つねて見つ」「蜻蛉釣今日は」「破る子のなくて」等の吟も、彼女の作だといふ確證を得難いのみならず、「起きて見つ」の如きは全く他人の作たる事が明かにされた。それで、近時千代女未婚説も唱へられてゐる（昭和四年五月「月華」所載日置蕉軒氏説）が、兎に角よし結婚した事があるにせよ、それは極めて短い間の事であつたらうと思はれる。さて千代女の俳名が高くなると共に、行脚の俳人の來訪する者も多く、享保十一年秋には魯九が來て唱和し（雪の白河）、翌年夏には盧元坊もやつて來た（桃の首途）。爾來美濃派の人々と最も風交多く、剃髮してから後（剃髮したのは享保十三年といふが、その他の諸説あつて詳かでない）は、特に畫俳に悠遊し、金澤の珈涼女を友としたり、同鄕のする女に風雅を傳へ（破れ笠）たりした。又折々は各地に遊歷して諸好士との交を重ねた。寶曆五年五十三歳の時素園と名を改めたが（寶曆五年春刊「百太郎」に「松任千代女素園」とあるから、既にその前年に改めてゐたかとも思はれる）、彼女の名聲は年と共に高く、遂に寶曆十三年には既白の手によつて「千代尼句集」が撰ばれ、明和八年には更に續集「松の聲」が編まれた。生前既に二句集が相次いで出たのに徵しても、その聲望の遍かつた狀が察せられる。かくて晩年に至るまで風雅の名を擅にし、「月も見て我は此世をかしく哉」を辭世として終つた。

千代尼筆蹟（松字文庫藏）

【批評】その名聲のみから言へば、千代女は恐らく芭蕉と比肩すべき地位に居るであらう。而もその實は、彼女の名に比して餘りに虛しいと言はねばならぬ。元來彼女は特に師によつて風雅の手筋を學んだといふのでもなく、言はば天性の才から自然と他の句を眞似て見たといふに過ぎない。それが偶々支考等の推稱によつて汎く喧傳されるに至つたので、恐らくは彼女の美貌と才氣とが更に人々を惹きつける力を持つてゐたのであらう。勿論この才は正當に導けば眞に大成し得たかも知れない。然るに不幸にして彼女が最初多く影響を受けたのは、既に衰頽に傾いてゐた平俗な美濃派の風調である。加ふるに若い彼女は内面的な深い省察を缺き、ただ淺膚な表面的な風雅觀に捉はれて、それを小器用に纏めようとした。そしてそれが俗受けがすればする程、彼女は益々心を内に向ける事を忘れて、只管所謂風雅臭い趣向のみに才を働かせたので、その作には才氣が露はに出過ぎて、深さと潤ひとがない。細みや寂びに至つては殆ど求められない。かの最も人口に膾炙する「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」の一句によつても、彼女の全面目は十分窺はれよう。これは風雅を理知的に説明したやうな句で、そこにわざとらしい臭味を感ぜずにはゐられない。併しそれ故に又風雅といふ事に深い修養を經てゐない俗人にも、容易に風流心を感じさせる事が出來たので、千代女が世間的に名聲を博した所以

てゐるのを見るだけである（馬琴日記・著作堂雜記等）。併し彼の時代には、勿論、著作權と云ふものが確立してゐたわけではないから、救濟を受くる途もなく、恐らくその都度泣き寢入りになつた事であらうと思はれる。 〔藤村〕

著作堂一夕話 ちよさくだう いつせきわ

隨筆 三卷 【著者】瀧澤解（馬琴） 【刊行】弘化五年 【解説】享和三年刊の「蓑笠雨談」（別項）の改題である。やゝ大判になつてゐるのと出版書肆の違ふだけで、板木も同一のものを用ひてゐる。今坊間には本書が最も行はれてゐる。

は畢竟この點に存する。そしてそれだけ彼女の俳諧は藝術的に低いレベルに止つてゐる。蕪村や闌更や麥水や、固よりそこに氣づかないのではなかつたが、彼等が世俗と共に彼女を尊重したのは、寧ろ女性であるといふ特殊のハンディキャップと、强ひて世間に反して輕視する必要がなかつたのとに因る。決してその作品に價値を認めたからではない。とはいへ彼女も晩年の作には、「思ひ忘れ思ひ出す日ぞ春の鹿」「涼しさやはだかに近き茶の木畑」「蝶は夢の名殘分入る花野かな」の如き、落着いた、深みを持つた心境への推移を見せてゐる。あれだけの才を持ち、靜かな淸い生活をした彼女が、今少し俳壇的環境のよい時代に生れ、よい師匠を得てゐたならばと遺憾にも思へる。ただ彼女が生前既に傳說化され、歿後多くの巷談街說が生れた程名高かつたといふことは、俳諧史上誠に希有の事象である。

【撰著】千代尼句集（別項）○松の聲（千代尼句集參照）【門流】養子白烏がやはり俳諧を嗜んだのと、する女が紫闌と號してやゝ知られてゐた外には、特に門人といふ程の者はない。

【參考】近世奇跡考 山東京傳 ○千代尼城丸花仙○加賀の千代について 鈴鹿野風呂（每日叢書第四篇）○千代尼事蹟雜考 日置薛軒（月華第二號所載）○千代尼の句と人 粟田天靑 ○貞心と千代尼と蓮月 相馬御風　〔鎭原〕

千代尼句集（ちよにくしふ）　句集　二册　【編者】無外庵旣白【刊行】寶曆十四年初春の序があるから、當時の刊行と思はれる。京橋屋治兵衞・江戸山崎金兵衞版　【諸本】大夢編嘉永二年版「增補千代尼句集」がある。女流俳句集（俳諧文庫）・閨秀俳家全集（勝峰晋風編）・中興俳諧名家集（俳書大系）・俳文俳句集（日本名著全集）所收。【解說】加賀の俳人旣白が、千代尼の句の散佚するを惜しんで、自らこれを蒐集し、四季類題別として收めたもので、なほ卷頭に蓮二・麥林から千代に送つた書信や、宇中の「傳千代女書」等を添へて、千代女の聲望を示すことに努めて居り、藤松因の序、半化坊の跋また千代女を激賞してゐる。これは本書がなほ千代女生前に刊行されたものであるから、大に辭令も含まれてゐるであらうが、また當時千代女の名聲が高かつた狀も十分想察される。旣白はなほ本書に次いで明和八年續千代尼句集として「松の聲」を撰び上梓したが、共に千代女生前の編であるから、その內容は最も信憑すべきである。　〔鎭原〕

樗良（ちよら）　俳人【姓名】三浦元克、字冬卿、通稱勘兵衞。後薙髮して玄仲といつた。【別號】榎本庵・無爲庵【生歿】享保十四年志摩鳥羽に生れ、安永九年（二四四〇）十一月十六日伊勢山田に歿す。享年五十二【墓所】山田尾上町壽嚴院【家系】父は志州鳥羽の人で稻垣對馬守の家臣三浦彌惣左衞門に仕へてゐたが、故あつて致仕し、寬保二年勢州山田岡本町に移り住んだ。【閱歷】樗良は寬保二年十四歲の時、父と共に山田に移つて、紙烟草入の繪を書いて生活してゐた。少時から俳諧を善くし、夙く鄕黨の間に名が知られてゐた。その師系については、自ら「白頭鴉集」に、「無敵齋百雄子は紀の長島に住して、風雅の巨擘なりける。そのかみ予も其門に遊んで遂に俳諧の一斑を窺ふ事とはなりぬ」と言つてゐるが、百雄その人の俳歷はなほ明かでない。又その師事した年代も詳かでないが、樗良の句が初めて物に見えたのは、寶曆元年頃山田で作つた「名月や油とらるゝ蚊」（杜十稿本筆のさらへ）であるから、それよりも以前のことであらう。卽ち延享・寬延の際で、まだ彼が弱冠にも達しない頃であつたと思はれる。山田の俳人杜十の稿本「筆のさらへ」に據れば、寶曆初年の頃は山田にあつて、同地の杜十・和鈴等と唱和してゐた事が分る。かくて寶曆九年正月紀州木の下に遊び、同三月山田に歸るに際して、木の下の俳友と應酬唱和した句を初め、豫て書き集めて置いた知友の吟を集めて、自ら「白頭鴉集」二册を撰んだ。玆に初めて、彼は麥林の徒に對して自ら別に一旗幟を揭げたのである。但しその風調はなほ「うしろから淋しがらする紅葉哉」「鉢敲朝顏よりも哀れ也」の類で、まだ決して蕉風の正路に歸したとは言はれないが、ために伊勢の俳壇に漸く支麥以外の境地を拓かうとする機運を作り、又樗良の俳名一時に高くなつた事は爭へない。寶曆十年正月には神風館で涼岱等と唱和を試みて居り、同十一年八月には南紀新鹿の里に遊んで岐川庵にとどまり、「二股川」（ふたまた）を撰んだ。かくて同十二年十月末、市中に無爲庵を結んで、「我が庵は榎ばかりの落葉哉」の吟があり、社友と連句數卷を興行して、「我庵集」が成つた。「樗良發句集」（寬政版）の序に、「曾て俳諧に志深くふたまた川の一集に專ら正風を唱初してより何くれの集の變化に遊び、終に我庵集に風とゝのほり格定りける程に、その國ゆづり他の國迄もゆづるばかりの名なりけらし」と言つてゐる。かくて樗良が無爲庵主となつたのは三十四歲の時で、當時旣に宗居・坡仄・野梅・虎國・蘿父等の有力な門弟を擁し、「山寺や誰も參らぬ涅槃像」「嵐吹く草の中よりけふの月」の如き、彼獨自の風調が定つて來たのが見られる。伊勢一國のみならず全國的に彼の實力が認められて來たのは蓋し實際であつたらう。然るに彼は元來一度は世塵を厭ひ剃髮した程であつたから、やがて無爲庵の喧噪を厭うて（我庵集序）、明和三年十月こゝを去り、北勢大島に假の宿りを定めた（游大島賦）。而もこゝにも長く足を留めず、同五年妻と共に遠く江戸に下つたが、やはり故鄕戀しく翌年歸國した。明和八年には宗居と更科に月を賞し、更に獨り北越を行脚して「石をあるじ」が成つた。安永年中に至つては多く京都に日を送り、蕪村・几董等と頻りに來往して、唱和に寧日がない有樣であつた。安永二年から數年間の几董の日記や、「一夜四歌仙」「月の夜」「秋風六吟歌仙」、さては「新雜談集」に載する逸話等によつて、その風交の密であつた狀は十分察せられる。又播州に靑蘿を訪ねて「骨書」の兩吟を試みたのも安永初年であつたらう。かくて京都にも美角・定雅・玄化・甫尺等の門人が出來、城南寺田の里には、秦夫・雲裡等忠實な社中があつた。又この間、安永四年・七年の兩度北越を廻つて、越後高田の畝波等を初め多くの門人を得、「菊の香」「月の夜」「花七日」「一日行脚」「雪の聲」「まだら鳩」等の諸集が撰ばれた。蓋し樗良一生の俳諧生活中、安永初年はその最も油の乘つた時代で、蕪村一派と相提携して所謂天明中興の一家たるに至つたのであつた。天明八年二月、都の花がなつかしいとて北陸から歸洛し、四月には曉臺等と唱和したりした（反古飄）が、翌年春故鄕に歸つて、その冬歿した。

樗良筆蹟

【人物・俳風】樗良は「性朴直」（中興俳諧六家集）あり、純粹な感激に滿ちてゐて、一見淺薄平板なやうであるが、深く味はへば滾々として自然の眞實さが湧いて來る。「春の雪風吹荒れて日の暮るゝ」「山里や家根へ來て啼く雉子の聲」「櫻ちる日さへ夕となりにけり」「初雁や月のほとりよりあらはるゝ」等、何の他奇もないやうであるが、實は自然の幽情に深く分け入るには、實は樗良自身でなくては到底なし難い所で、畢竟彼の獨自な俳境は彼の獨自な性格の中に存するのであつた。だからその門人と雖も、蕪村の絢爛、曉臺の優艷を學ぶ者のやうに、直に師の風格に化せられにくかつた。彼の歿後遂に無爲庵の名跡を襲ぐ人がなかつた事に依つても、彼が獨り善しとしただけで程の者は出なかつた。

【門流】伊勢に坡仄・宗居・虎國・野梅・蘿父、京都に美角・定雅・玄化・甫尺・秦夫・雲裡、北越に陸史・畝波・凡夫・大器・故菱等がゐて、その門人は決して少いといふのではなく、特に京都の南寺田の里には、樗良の句集・文集等を編した忠實な門人もゐたが、終に彼の衣鉢を襲ぐ

最も油の乘つた時代で、蕪村一派と相提携して所謂天明中興の一家たるに至つたのであつた。天明八年二月、都の花がなつかしいとて北陸から歸洛し、四月には曉臺等と唱和したりした（反古飄）が、翌年春故郷に歸つて、その冬歿した。

【人物・俳風】 樗良は「性朴直」（中興俳諧六家集）と評せられてゐる通り、極めて恬淡素樸な人であつた。少壯の頃はやゝ放縱な生活もしたらしく、伊勢に傳ふる口碑によれば、彼の少時は寧ろ不良少年に類し、「樗良のまねはしてはならぬが俳諧だけは眞似せよ」と言はれたといふ。又彼が女色に溺れる傾があつた事は彼自身の手紙・日記などによつても知られる。一度髪を剃り捨て法の敎を聞きながら、市中に居を構へ、俳諧の點料に生活しなければならなくなつたのも、實は捨て難い妻のためであつた（我庵集序・自筆明和の旅日記）。併し、これは又一面彼が頗る純情の人たる事を物語るものでもあつた。而してかうした性格は凡てその儘彼の作品に反映されてゐる。彼は、蕪村・曉臺等と等しく天明中興の一人として知られてゐるが、併しその風調は決して優艷高雅を主とし、奇警斬新を尊ぶといふのではなかつた。彼は自ら、俳諧の本體は俗談であると言つて（樗良文集序）、伊勢風の平明調を終に捨て得なかつたので、その點に於ては麥水・曉臺等が全く支麥の調から脱したのとは大に趣を異にしてゐる。言はば樗良は麥林の格調をその儘守つて、而も風趣を全く一變したのであつた。隨つて結局平板に終つて失敗した作も少くはないが、それでも似而非風流を振廻す卑俗さは彼には見られなかつた。況や上乘の作に至つては、その中に事象に對する的確な把握があり、純粹な感激に滿ちてゐて、一見淺膚平板なやうであるが、深く味はへば滾々として自然の眞實さが湧いて來る。「春の雪風吹荒れて日の暮るゝ」「山里や家根へ來て啼く雉子の聲」「櫻ちる日さへ夕となりにけり」「初雁や月のほとりよりあらはるゝ」等、何の他奇もないやうであるが、實は自然の幽情に深く分け入つてゐる所があるではないか。これは優艷な言葉や典雅な趣味のみで到り得る境地とは違ふ。樗良の特色は、要するにこの淡々無味の間に自然の眞情を寓する所にあつた。道彦が「無孔笛」に「樗良は淡白に過ぎて上天の如く、音もなく香もなく、さらに只事を言ふに至る」と言つたのは、蓋し適評と言ふべきであらう。

【史的地位】 樗良が天明俳壇革新上の最大功績とすべきは、寶曆の末に逸早くも南勢に自家標榜の一旗幟を飜した事であつた。それは前にも言つた通り、必ずしも麥林の調に積極的反抗の態度を取つたのではないが、梅路・杜菱等の徒以外にあつて一調を成した事は、やがて俳風革新の大きな潛勢力となつたのであつた。几董が、「麥林の一格も今は其地にして信ぜざるの徒多し」（明烏序）と言つたのは、即ち樗良一派の進出を指したのである。又後人が彼を目して伊勢に於ける正風鼓吹の先驅者であるとするのも、この意味に於て誤つてゐない。併し彼は早く地方的に名を成した割に全俳壇に實際働きかけた力は弱かつた。それは彼が後年鄕國を出て各地に轉々した爲め、しつかりした自家の根據地を得なかつたのにも依るであらうが、又恐らく彼の淡々たる俳風が當時の人々を牽き附ける魅力に乏しかつた事も、その大きな一つの原因であつたらう。樗良の如き格調を以て樗良の如き風趣を得るには、實は樗良自身でなくては到底なし難い所で、畢竟彼の獨自な俳境は彼の獨自な性格の中に存するのであつた。だからその門人と雖も、蕪村の絢爛、曉臺の優艷を學ぶ者のやうに、直に師の風格に化せられにくかつた。彼の歿後遂に無爲庵の名跡を襲ぐ人がなかつた事に依つても、彼が獨り善しとしただけで汎く周圍に感化を及ぼさなかつた事が察せられる。だから同じく天明中興の一人と言つても、それは寧ろ當時に於ける勝れた一作家としての地位に重きが置かれてゐて、實際の革新運動に寄與する事は比較的少かつたといふべきであらう。

【編著】 白頭鴉集（二冊、寶曆九年）○二股川（一冊、寶曆十一年）○我庵集○石をあるじ○菊の香○月の夜○時雨笛○花七日○年の尾（以上別項「樗良七部集」參照）○雪の聲（安永九年、加賀小松自生庵凡夫の編となつてゐるが、實は樗良の後援によつて成つたもの）○まだら鳩（安永八年成、天明三年刊。越中井波陸史の撰であるが、實はやはり樗良の力が大に與つてゐるので、「雪の聲」と共に「樗良七書」として經められてゐる）○樗良發句集（別項）○八瀨（樗良發句集參照）○樗良文集（天明六年雲裡編、樗良の遺文を集めたもの）○樗良集（寛政版の樗良發句集、文化二年良水編の樗良附合集、樗良文集の三部を合冊にしたもの）○召波樗良句集（ホトトギス發行所、明治三十三年刊）。なほ樗良は雜俳の點者としても知られてゐたので雜俳の集もある。また嘗て自ら句集編纂の志があつたものと見え、寶曆六年から明和九年に至るまでの作を自選して、山田の書林藤原長兵衞に與へた自筆稿本が殘つてゐる。又妻を携へて江戸から歸つた時の日記、坡仄と共に京都地方に旅行した時の紀行等も、自筆のものが存してゐる。

【門流】 伊勢に坡仄・宗居・虎國・野梅・蘿父、京都に美角・定雅・玄化・甫尺・秦夫・雲裡、北越に陸史・畝波・凡夫・大器・故菱等がゐて、その門人は決して少いといふのではなく、特に京都の南寺田の里には、樗良の句集・文集等を編した忠實な門人もゐたが、終に彼の衣鉢を襲ぐ程の者は出なかつた。

【參考】 道の杖卓朗○樗良雜考藤原拈華（寶舟三ノ六・七・八）○樗良坡仄京地旅行記濱田椿堂（木太刀二〇ノ一〇・一一）○樗良の句集濱田椿堂（木太刀二〇ノ一二）○稿本樗良句集山田菘雨（鹿火屋大正一五ノ一）○樗良旅の日記櫻井青瓢（集古大正一一ノ一）○樗良雜考穎原退藏（にひはり昭和二ノ三・八）

（穎原）

樗良七部集（ちよらしちぶしふ） 俳諸集 小本二冊

【編者】 玄化堂甫尺 【刊年】 寛政五年五月、京菱屋孫兵衞等刊。【諸本】 七部集總覽第三（俳文學大系）所收 【成立・由來】 樗良七書（菊の香・時雨笛・佛之座・花七日・一日行脚・雪の聲・まだら鳩）と言つて世に行はれるものが、その選擇、當を得てゐないといふので、更に書肆が甫尺の意見により、新に七部を選んで、これを小本二冊に飜刻したものである。【內容】 樗良關係の俳書中、代表的なもの七部を收めてゐる。（我庵集）明和四年刊。寶曆十二年樗良が山田に無爲庵を結び、「我が庵は榎ばかりの落葉哉」の吟があり、宗居・坡仄等の門人と歌仙四卷を興行した。これに社中の人々の四季發句を加へ、後に出版したもの。（石をあるじ）明和八年刊。この年仲秋、樗良が宗居と共に姨捨山の月を見て兩吟の歌仙が出來た。それに社中諸家の句を加へたもの。（菊の香）安永五年刊。樗良が安永某年、越後高田の門人畝波を訪ね、直江津の故菱と三人で、金澤

に赴いた折の紀行に、樗良一派の人々の句を添へたもの。〔月の夜〕安永五年刊。樗良が木屋町三條の假寓にゐた頃、月明の夜訪ねて來た人々と唱和した連句を初めとし、諸家の發句を集めたもので、樗良と蕪村一派との交渉が最もよく窺はれる。〔時雨笛〕安永五年冬序。同年畉波が京都三條に旅寓してゐた樗良を訪ひ、同じく附近に滯在中、京都の諸俳士と唱和したり、名所に遊んで得たりした作を集めたもので、畉波の主著である。〔花七日〕安永六年刊。樗良がその門下・知友の櫻花を詠じた句を集めたもの。〔年の尾〕安永年間、樗良が門人と催した連句五卷を上卷とし、一派の人々の四季發句を類題別に集めたものを下卷としてゐる。樗良一派の俳書としては最も代表的なものであらう。【批評】樗良七書に比して、「佛之座」の如き特殊のもの（これは元來畉波の編した父の追善集である）や、小册子に過ぎる「一日行脚」等を省いて二石をあるじ」「年の尾」等を加へた事は、樗良關係の代表書として、選擇當を得たものと言へるであらう。〔薄原〕

樗良發句集（ちよらほつくしふ）　句集　二册　【編者】甫尺【刊行】天明四年春の自序がある。【諸本】本書はその後板木が燒失し、爾來專ら寫本で傳へられ魯魚の誤も多くなつたので、城南寺田の遺弟等が力を合はせて、更に逸句百五十餘章を加へ、寛政四年秋新たに京都の書肆菊舍太兵衞から出版された。又元治元年蘇室久安がこの寛政版を「八瀨（やせ）」と題して飜刻した。板下は改まつてゐるが、內容は全く異同がない。召波樗良句集（ホトトギス發行所編）・天明名家句選（俳書大系）所收【解說】嘗て樗良が京都に寓居してゐた時、門人玄化がその句を集めて刊行しようと乞ひ、僅に百吟を書き附けて與へられた。然るにその後間もなく玄化は病歿し、樗良も亦三年を經て世を去つた。それで玄化の弟甫尺が亡兄の遺志を繼ぎ、同門秦夫の助力を借りて、更に人々の口に殘り耳に留まつた句々をも集め、三百章を選んで刊行したものである。樗良の作品が纏めて後世に傳へられたのは、全く本書が存在したからであつて、甫尺兄弟が師のために盡した功績は大きいと言はねばならぬ。〔薄原〕

千里（ちり）　俳人【通稱】油屋喜左衞門【別號】日損者・損居士【生歿】生年未詳。元祿九年（一三五六）七月歿。享年未詳。【俳系】松尾芭蕉門【閱歷】大和葛下郡竹ノ內村の人、江戸に出て淺草に假寓した。貞享元年八月芭蕉が「野ざらし紀行」（別項）の旅に出るに當り、千里が舊里に歸るので同行し、共に東海道を上つて千里の舊里に到り、芭蕉はこゝに暫く旅の勞を休めた。後再び江戸に歸つた千里は貞享三年の其角の「初懷紙」（別項）に加はつたり、同年の芭蕉庵に於ける仙化の「蛙合（かはうあはせ）」（別項）に加はつたりして居り、芭蕉の歿時には桃隣等の追悼俳筵に加はつて悼んだりしてゐる。かくて元祿九年七月十七日入道偈を作つて李里に與へ、李里は、これを折柄「陸奧衞」（別項）の旅から歸つた桃隣に傳へた。その偈は、「心目由來無二閉關一、本源自性施二塵埃一、損之又損損非レ損、是貧是嗔任二去來一。」「はらへただ我もとゆいの秋の霜かゝれとてしもみずや有劍（ありけん）」「一筋に思ひ入日の影法師あるをありともなきをなきとも」（陸奧衞）といふものであつた。かくてこの月歿したらしい。【人物】「野ざらし紀行」に、「常に莫逆の交ふかく、朋友ニ信有ル哉此人」と芭蕉も云つてゐるから、眞實な人であつたらしい。且つ桃隣が「陸奧衞」に、入道偈を掲げた前書に、「一向此道の話を好で此道にさかしく、此道を翫て大悟を得たり」と記して居り、入道偈と比べ見て、芭蕉の風雅を解して一種悟道的な風格を持つ人であつたらしい。

【參考】野ざらし紀行松尾芭蕉○陸奧衞　天野桃隣○蕉門諸生全傳　遠藤曰人○俳林小傳　中村光久○俳諧人物便覽　（萩原・志田）

塵塚談（ちりづかだん）　隨筆　二卷　【著者】小川顯道【成立】文化十一年【諸本】燕石十種所收【解說】七十八歲の著者が、壯歲以來親しく見聞した江戸市中風俗の變移を追憶し、また自家の所感を交へて記述したもので、上卷には傀儡師の事以下五十二項、下卷には鳥居坂出火落首の事以下七十二項を收めてゐる。劇場・遊所・賣物・物價・社寺・祭禮・服裝等に關する記事が多く、又醫藥の事にも及んでゐる。蓋し著者は醫を業とした人であらう。奧に、「文化十一年甲戌季冬七十八翁小川顯道書」とある。　（和田）

塵ひぢ（ちりひぢ）　歌論書　一卷　【著者】小澤蘆庵【成立】寛政二年九月「蘆かび」（別項）と同時に成つたもの。同十年「蘆かび」や「或問」（別項）とともに、「ふるの中道」と名づけられ、一册の書として刊行された。【諸本】小澤蘆庵翁全集（續日本歌學全書第六編）所收。【內容】歌を詠むには、法なく師なく心のままを詠めばよいものであるが、鈍根愚昧の自分は昔人の詠歌のあとをみて學ぶことをおもふのである。これは第二義であるが、「日本紀」「萬葉集」「八代集」迄を見あきらめる事は容易でなく、特に「古今集」をこそ熟讀すべく、これは第三義である。第二義・第三義と雖も、自己の心を詠ずるといふ第一境に入らうと思つてみれば、第一に變る事はないのであると論じ、古今主義の歌論を展開してゐる。元來歌は心をもととするもので、人に習つてよまず、作例によつてよまず、法なく師なきものである。併し唯ありのままを詠むとは言へ、天地萬有の理を知り、人情に通ずべきである。彼我相通じ、情に達しなければ、如何程詠むとも虛妄のたは言である。この心掛さへあるならば、日夜の見聞によつてその人相應に、自ら彼我相通じ、物の道理や人情は知られる。この見聞覺知によつて思ふ心必ず生ずるので、事々物々、これより新しきものはないのである。かくの如く、歌は自らなる眞情をうたふもので、實情をうたふ故に新鮮であり、そは廣く物を知り正しき認識、同情の念から誘導さるべきものである。かういふ歌の第一義をもとして、前述の第二義・第三義を結びつけたのが本書の要旨である。【價値】「蘆かび」に說かれた所と變らないが、歌の第一義・第二義・第三義とわけて說いた所に、一層明瞭にその說を窺ふことが出來、より整然と首肯せしむることの出來る論陣を張つてゐるといふべきである。なほこの書中、特に說明を要すべきものについて問答體を以て書いた「或問」の書中には、一層彼の見解をくはしく述べてゐるものがある。物には始中末があつて、すべて中がいゝといふ所から「古今集」を盛期の作で最も尊むべきと論じた所にも、又ただごと歌と「古今集」とを結びつけた所にも、理論上突きこむ餘地があると思ふが、當然起るべき反眞淵派の歌論の代表的のものとして、逸すべからざるものの一つである。　（藤川）

塵泥（ちりひぢ）　隨筆　四十二卷十一册　寫【編者】神澤貞幹【解說】編者が八十三歲の頃、京都その他に起つた大事の數々を記錄したもの。卷一に寛政二年皇居の御造營成つて新宮に遷幸の鹵簿。卷二に同上上皇遷幸鹵簿等。卷三に賢聖御障子。卷四に御造營記。卷五に新殿和歌、同御書樣。卷六に柳營詩歌、諸國奇談、異國舟漂流、相撲上覽、東山殿遠忌。卷七に淺草長吏彈左衞門由緒書、蓑殿集

頃、京都その他に起つた大事の數々を記錄したもの。卷一に寛政二年皇居の御造營成つて新宮に遷幸の鹵簿。卷二に同上上皇遷幸鹵簿等。卷三に賢聖御障子。卷四に御造營記。卷五に新殿和歌、同御畫樣。卷六に柳營詩歌、諸國奇談、異國舟漂流、相撲上覽、東山殿遠忌。卷七に淺草長吏彈左衞門由緒書、蒹葭集拔萃。卷八に歷世の咄し、醫者の事、駕嫌ひ、長壽の者、炮術上覽、目藥、火用心。卷九に夕なきの事、人の名、西洞院の古家、儒士西依儀兵衞、伊奈右近將監坐事、禁裡ヨリ御令書、三河國寶鐸、肥前島原變、大坂火。卷十に武術上覽、岡田清助和文、七夕鞠、東照宮御社、肥前島原變、因緣佛等十八條。卷十一に聾の述懷、謠曲の衰、現在七面、祇王寺の尼等八條。卷十二に風俗三石士(銅脈著)、(卷十三脫)。卷十四に殿中日記(天明七年二月ヨリ九月迄)。卷十五に殿中日記 天明七年十月ヨリ十二月迄)。卷十六に殿中日記 天明八年正月ヨリ六月迄)。卷十七に殿中日記(天明八年七月以後)。卷十八に殿中日記(天明九年中)。卷十九に殿中日記(寛政二年正・二月)。卷二十に殿中日記(寛政二年二・三月)。卷二十一至二十五に年山打聞(安藤爲章著)。卷二十六至二十八に城主錄。卷二十九・三十に諸家事略。卷三十一至四十に西山遺事。卷四十一に從駿城御文寫。卷四十二に無題號の隨筆を收め、所々に挿畫がある。　〔和田〕

塵泥（ちりひじ）　隨筆　九卷　寫　【編者】本多忠憲【解說】題目を異にした數十種の隨筆雜纂を集めたもので、寧ろ叢書と謂ふべきものか。卷一に隙行く駒(兒童遊戲の品目)、書圖目六、餞餽品彙、鑪詞、武田家書五十卷目錄、詩藥集筵記、十日之泥、鶯森著書、沖の小島を收め、卷二に風葉和歌集見出、例言、こし水月、梶のなゝ葉、英藤院をいたみ奉る歌、綾然草庫詞、大殿、五日の枝を收め、卷三に初熟麥、不周風、葵柱、貝造、加賀女、撚重、防壁、楊枝、一節截、天兒、拍挾、兎戸考、頭巾、右大將道綱母、鹿笛、卯杖を收め、卷四に塗籠、尿筒、尺八、下鞋考、溫糟粥、集香湯、椿餅、端五餝千甲冑幟事、足利家位署書推考、挾はこの事、挿頭華鬘、軟障、節分夜鷄雀の聲をなすと云事、疏眉、物忌付欅を收め、卷五に甑落、倭嶺、小直衣并狩衣直衣、擊子、非上、五緒車、基手鏤、魚袋、酒呑童子物語構軸副考、編笠、鈴船、手巾、布步障、夾竿を收め、卷六に椶、尾花粥、伊勢祐和事蹟、枝扇、東鑑辨、立砂、糯糕始、透扇、燕尾帽、糟鷄、茶黃囊、扇要、十九布、扇高遺事、御綱葉、垂撥を收め、卷七に入襴袍、步障、十二單問答、菖蒲輿、東折、空柱、粥柱、雨皮、檻子、神無月、釘貫、擂餻、三日月餅事、易貝、茶碗枕を收め、卷八に走馬競馬例目、小烏丸劒、短歌、丸木弓考、平題考、薩摩箙、大角小角副言、劒丸、床几、馬上三物贊、黑塗鞍考、佐々木懸鐙圖、尊氏公冑傳來を收め、卷九に貝裝、劒囊、腹羅柴、伊勢家花押、樽、肩衣を收む。所々に挿畫がある。每編の終りに抄寫の年月及び忠憲の署名がある。卷一、隙行く駒の編首に文化三年回芳主人の序が添つてゐる。回芳は編者の號。　〔和田〕

知連抄（ちれんせう）　連歌書　二卷　寫【著者】二條良基【諸本】京都帝大本一册は、書寫の年代江戸中期を溯らぬらしき新しい書寫であるが、上下二卷より成り、完本と思はれる。東北帝大本一册は、同じく江戸時代の書寫で、その內容京都帝大本上卷に相當し、語句の異同が少くはないが大體相類する。圖書寮本は「知連抄并梵灯連謌」と題する一册で、その「知連抄」の部は京都帝大本の下卷に相當し、內容大體同じいが、語句に大に異なる所がある。併しこの圖書寮本の「知連抄」及び「梵灯連謌」の奥書によると、「知連抄」は良基が應安七年に時の關白(良基の子師長か)の所望によつて著はしたものであることが知られ、圖書寮傳本はそれを良基が嘉慶元年に聖護院門跡(後光嚴院の御子覺增法親王か)に書いて獻じた本から出て、永享十年及び寶德三年の轉寫を經て寶德四年に書寫したものであることが知られる。されば「知連抄」としては下卷のみの傳本であるけれども、三種の傳本中書寫の最も古いもので、從つて轉寫の誤りも少かるべく、最も憑據とするに足るものである。古典保存會によつて、圖書寮本「知連抄并梵灯連謌」が複製されてゐる。【解說】上卷には、連歌の三儀五體、六の句作りを說き、下卷には救濟・周阿(各別項)等の連歌の風體を論じ、上中下の三體、寄合、連歌する心得を說き、大原野千句の時の去嫌の注文を載せ、病の事、五韻連聲・五韻相通の事を說いてある。上卷よりも下卷の方が價値多く、その說く所が當時の連歌道の實際を知らしめる點少からず、特に大原野千句の注文は、應安の「連歌新式」(別項)の應用で、同新式原本の傳はらない今日に於ては、その面目を窺ふべき唯一の資料となるものである。【參考】二條良基を中心としたる連歌道の建立福井久藏(國語と國文學昭和三ノ九)○連歌の史的研究前編後編福井久藏○宮內省圖書寮御藏知連抄并梵灯連謌解說橋本進吉(古典保存會本知連抄并梵灯連謌)　〔志田〕

椿園（ちんゑん）　讀本作者【姓名】浦邊源曹。【閱歷】攝津伊丹（いたみ）の人で、伊丹椿園と稱し、寶曆より明和・安永頃、近路行者(別項)と殆ど時を同じうし、また同じ傾向の小說を書いてゐる。「京攝戲作者考」に博識であつたこと、畫筆の心得のあつたことが傳へられてゐるが、讀書家であつたことは、その小說の序文等にても知られる。【著作】兩劍奇遇五卷(安永七年刊)○今古奇談翁草　○今古小說唐錦○怪異談叢○今古奇談深山草○女水滸傳(以上各別項)【作風】殆ど支那小說の飜案である奇異な短篇を作つてゐるが、何れも近路行者を摸倣した作風で、それよりも支那小說に囚はれ過ぎ、また文藻が劣つてゐる。しかし初期讀本として文學史的意義の深いものである。　〔笹野〕【參考】江戸文學研究藤井乙男○江戸時代戲曲小說通志雙木園主人○京攝戲作者考木村默翁

鎭源（ちんげん）　學僧【生歿】未詳【閱歷】比叡山横川首楞嚴院の沙門である。後朱雀天皇の長久二年の秋、支那の義寂の「法華驗記」に倣ひ、「大日本國法華經驗記」(略して法華驗記)三卷を撰んだ。同書の序文によれば、鎭源は法華經の受持讀誦聽聞書寫の靈益に預るものは古來甚だ多いから、その逸話傳說を集め、これを後世に傳へようとして編纂したものである。「日本記別傳」「靈異記」「三寶繪詞」等を資料とし、聖德太子以下百二十九人の事蹟を錄してゐる。【附記】「扶桑略記」に、叡山智源の「法華驗記」といふものを引いて居り、それは鎭源の「法華驗記」の文とほぼ一致するやうである。若し同一書とすれば、鎭源は一に智源とも稱したものと考へられる(智源の法系は台密血脈譜に見えてゐる)。【參考】類聚名物考第五册(法華驗記の條)○日本佛教文化史の研究橋川正　〔後藤〕

枕山（ちんざん）　漢詩人【姓名】大沼厚。字は士壽、一字は昌卿。幼名は捨吉【別號】熙堂仙史【生歿】文政元年尾張に生れ、明治二十四年十月一日、東京下谷花園町に歿した。享

年七十四【閲歴】初め尾張の名儒鷲津益齋に就いて學んだが、時に森春濤も亦その塾に居り、春濤は十七、枕山は十八、俱に若年を以て詩に巧であつた。後江戸に出で菊池五山・梁川星巖に師事し、詩を以て一時に稱せられ、星巖が玉池吟社を閉ぢて京都に移住するに及び、下谷吟社を起して宋詩を鼓吹した。下谷吟社の名は、その家が下谷御徒士町三枚橋畔（今の上野公園前）に在つたからである。かくて一時詩壇の覇權を握つた。門下にあつては植村蘆洲・溝口桂巖・杉浦梅潭・中根半嶺等はその錚々たる者である。【著作】枕山詩鈔九卷○房山集一卷○江戸名勝詩一卷○日本詠史百律一卷○歴代詠史百律一卷【批評】その詩は陸放翁に私淑し、格律の細を以て勝れてゐる。諸體皆佳ならざるはなく、美句佳章に富み、咏物に至つてはその獨擅場である。〔佐久〕

枕山詩鈔（ちんざんしせう）　九卷九册【著者】大沼枕山【解説】初二三編、各三卷より成り、安政六年から慶應三年までの間に次々に刊行された。又「枕山詩鈔」以後の詩を輯錄したものに「枕山先生遺稿」一卷があり、明治二十六年に刊行された。〔佐久〕

珍術罌粟散國（ちんじゅつけしさんどく）　浮世草子五卷【作者】其鳳【刊行】安永四年【諸本】德川文藝類聚第三編遍歴小説所收【解説】大山志壯太といふ男が廣言を吐き散らしてゐると、異相の神人壽老人が現はれて、その心得違ひを誡め、「廣い世間を見聞して見よ、みじんの虫にも相應にみじんの世界ありて人間界にかゝはらず、それぞれの境涯に入りてみよ」と御託宣あつて、忽ちその神力により、志壯太は罌粟人形程になる。それより蚊の國鳥の國花の國と遊歴し、福の神の述懐を聞き、地藏と庚申との問答を聞かされ、感慨無量の末、びつくり夢の醒めし如く頭をあげて見れば、壽老人の姿現はれ、「慢心を戒めんがため汝の形をみじんとなし有情非情神仙佛界をあらまし見物せしめたり。今後は高卒を以て他を譏ることをやめ我が身分を顧みて不義の邪路に陷るな」と訓戒する。その聲は雲霧にまぎれ、志壯太はありし机の前に呆然としてゐる自分を發見する。思へばそれは夏日一夢の間であつたといふに終る。小さい人間に化して、人生の種々相を見、又經驗するといふ構想は、浮世草子界の一流行であつたともいふべく、本篇も亦その一である。要するに神人の言を借りて當時の村學究の眼界狹く高慢に陷れるを諷刺したものである。〔小泉〕

陳狀（ちやう）「申狀」を見よ。

沈鐘傳説（ちんしようでんせつ）【名義】ハウプトマンの戯曲が紹介せられた頃から、こんな言葉を用ひるやうになつたが、日本では普通に、「鐘が淵の由來」として知られてゐる。最も分布の弘く且つ久しい傳説の一つである。東京のやうな若々しい寄洲の上の都にも、既に又一つ以上の鐘が淵が出來て居り、その他、近世新たに運び移したかと思はれる例は少くない。何かこの類の地名の發生すべき理由が前にあつて、それに所謂沈鐘が附會したのではないかとも想像せられる。全國無數の鐘が淵由來は、分類して見ると存外に簡單なものばかりである。その一種はそこに大きな寺の伽藍があつて、或る時代の地變に陷沒して淵となつたといふもの、これはただ鄕土の古く榮えてゐたことを、説くだけの趣旨としか考へられない。第二にはその鐘に靈あつて盜賊兵火の難を脱し、我から水底に轉げ込んだといふ類の名器傳説、これには女夫鐘などの哀話の織り入れられたものもある。今一つは佛典から筋を引いたかと思ふ龍神の物語で、古い記錄の中には往々にこれを傳へてゐるが、近頃は却つてこれを説く者が稀である。何れにしても水中の靈異と關聯してゐることだけは明かで、或はこの傳説の所在を以て水の神の祭場と解しても誤りではなからうと、私は思ふ。さうでなくては、これほど澤山の釣鐘の、水に沈んでゐると信じられた起因を、想像することが難いからである。但しこの傳説の基礎には、別にやゝ意外なる史實の類推があつた。德川氏の時代に入つてからも、海から梵鐘の漂着した事蹟は所々にあつた。明かにその當時の記錄もあれば、實物も亦現存する。その以前にもこれと同樣に、海から揚つたと稱する朝鮮鐘などの、寺に傳はつてゐるものも少くはない。これほど幾つかの鐘が水中から出てゐるのだから、今なほ水底にありといふ説も本當かも知れない。といふやうな茫漠たる論理が、一段と鐘が淵の口碑を史化してゐたのである。その上に古書の記述もしくは類例の古い存在が、この數多い同種傳説の一つ〳〵を支援してゐることは、考へて見ると面白い協力であつた。その中でも筑前の鐘の岬は、古くは「萬葉集」の歌にも詠ぜられ、それから以後にも數々の不思議を現じ、殊に種彦の「白縫物語」（別項）で、頓に遠國の者にも知られるやうになつた。さうして他の多くの鐘が淵も同樣に、晴れて波靜かなる日に船の上から覗くと、龍頭の岩の間に傾いてゐるのが見えると云つた。大正八・九年の好景氣時代に、或る成金が一代の思ひ出に、十餘萬圓の財を費してこの鐘を陸に持つて來ることに成功し、鐘の岬も鐘のないただの地名になつてしまつた。而もその海底の大梵鐘だと思つて引揚げて見たのが、實は形のよく似てゐるただの岩であつた。諸國の鐘が淵は、このために一つの支柱を失つたわけだが、その代りには、傳説としての眞の意味を、これから追々に發揮することが出來るやうにもなつたのである。〔柳田（國）〕

【參考】日本傳説集 高木敏雄　○沈鐘の傳説 新村出　○沈鐘傳説と大職冠と 志田義秀

珍書大觀（ちんしよたいくわん）　叢書【編者】大阪毎日新聞社【刊行】大正十五年【内容】金平本全集（江戸版）三十册、吉利支丹叢書（別項）、牛若千人切（延寶七年刊本）一册、説經かるかや（寛永八年刊本）一册を合む。各種とも原本そのまゝを複製したものである。〔土井〕

珍説豹之卷（ちんせつへうのまき）　人情本 一編六册【作者】鼻山人（東里山人）【畫工】菱川政信【名稱】豹之卷は虎の卷に擬したもの。洒落本「契情買虎之卷」（別項）が世に歡迎されたので、その書名をもぢつたのである。【刊行】文政十年【諸本】人情本刊行會本所收。【題材】自序にもある如く、田螺金魚の「契情買虎之卷」に摸したものであるが、實は、該書が「當世虎之卷」と改題し、文政九年に發表されたのに刺戟されたのであらう。内容は、「虎之卷」とは何の關係もない。遊女若四季の傳を綴つたものである。果して事實に據つたか事實めかしたのか、俄に斷ずる事は出來ぬが、彼の作には「廓雜談」（別項）の如く事實に取材したものがあるから、實在の人物に據つたと見られる。篇中の瀧野屋紋介は當時の人氣役者市川門之助（瀧野屋）から採つたのである。【梗概】千葉家の藩中に、室山兵左衞門と云ふ

武士があつた。藩貿物奉行下役を勤めてゐたが、或る時瀧野屋紋介と云ふ用達の許から、金五十兩入の狀筥を受取り歸る途中、惡黨に見込まれ喧嘩に事寄せて狀筥を奪はれた。彼は酒好きの事とて、紋介方で十分に酩酊して抵抗する力もなくすご〳〵と歸宅した。妻おそねにこの事を語り、切腹して申譯しようと言ふ。妻は驚き留めたけれども金策すべき當てもない。娘のお四季の身を賣らうかと言ふ。兵左衞門は娘を賣つて迄も生きる甲斐はないと爭つた。これを立ち聞いたお四季は進んで賣つてくれと願つた。そこで父も漸く涙ながら承諾し、吉原に行き庄司甚右衞門に相談すると、その弟若葉屋甚五郎が五十兩で引請ける事になつた。無事五十兩を上へ納め、その場は落着したけれども、娘を遊女に賣つた事が知れ、自分の過失からこんな事になりながら、武士たる身が子を遊女に賣るとは穩當ならずと非難する者が多かつたが、家老大町頼母は彼を憐み、巧に庇護して漸く事なく納まつたが、これを機として大町の政務の執り方が緩漫であると云ふ聲が高くなり、頼母は隱居同樣となり、家老職を免ぜられた。一方お四季は若葉屋甚五郎に抱へられ若四季と呼ばれて全盛を極めた。それと同時にその前身も世間に知られ、室山は上を欺くの罪に陷ち、千葉家を追拂はれた。已むを得ず室山夫婦は瀧野屋紋介を頼み、宮戸川の邊に貧しい長屋住みをしてゐた。前家老の大町の嫡子大町大三郎はふと瀧野屋の案内で若葉屋に赴き、若四季を招いた。最初は避けてゐたが、度重なるにつけ大三郎の情が身に染みて戀するに至り、大三郎も熱心に通うた。室山夫婦もおかげで生活が豐かになり、喜んでゐる間もなく、大三郎は父親母から懲らしめのため片田舎に一時追ひやられた。この通知が若四季から更に室山夫婦へ達した。若四季の悲歎は勿論、室山も大に悲しんだ。大三郎がかくなるのも我等親子のためと思ひつめた兵左衞門は、遂に思ひ詰めて大町頼母に謝罪の書置を殘して切腹して了つた。頼母も初めて大三郎の放蕩の原因を知り、瀧野屋紋介に命じて、密かに若四季を身請けさせた。紋介は身請の證文と共に、通知の手紙を若者菊藏に持たせて大三郎の許へ屆けさせた。菊藏は途中で稻妻光吉と云ふ盜賊に殺されて證文を奪はれた。光吉はこれを見て早速吉原へ赴き、大三郎の使と稱して若四季を誘拐した。室山の妻は夫の切腹、娘の行方不明に歎き死に死し、その亡靈の導きによつて、大三郎は賊の隱家に忍び込み、光吉を捕縛し、彼の盜んだ御家の重寶都鳥の香爐をも取り返した。大三郎はその功に依つて加增仰付けられ、若四季を妻として一家めでたく繁昌した。稻妻光吉は實は室山兵左衞門の五十兩を奪つた賊である事も露見して處刑された。

【構想】初期の人情本の常として、洒落本と合卷本との混淆した形式になつてゐる。卷頭に吉原細見の寫しと、五街春色美景圖と題して、新吉原大門の夜景が掲げてあるなど、全く洒落本に等しい。吉原の描寫にも、「堅い奴と云へば半次も故人になつたさうだの」と實在の男藝者の噂を長々と書いてあるのも、それから來た趣味だ。ただ後期の人情本と比較して武家生活が比較的よく描いてあるのは、作者が武家出身であるからであらうし、主人公が武家である事も、人情本の型から言へば異彩を放つものと言へる。室山兵左衞門が洒落で働きのない下級武士で、而も義理固い點、その妻が愚痴の多い、世間並な習慣によく氣がついて、あせつてゐる平凡な女性である點など、脚色の說明のみに囚はれぬ人情本で、鼻山人の代表作の一とするに足る。〔山崎〕

椿說弓張月（ちんせつゆみはりづき）　讀本　三十卷

【作者】曲亭馬琴　【挿畫】葛飾北齋　【角書】鎭西八郎爲朝外傳とある。【刊行】文化三年より同七年【諸本】東京稗史出版社本・曲亭馬琴翁叢書・四大奇書上卷(帝國文庫)・國民文庫・有朋堂文庫等に所收【題材】「保元物語」「難太平記」等の軍記物にも據つてはゐるが、また自らその序に、「唐山の演義小說に倣ひ、多くは憑空結構の筆に成る」と言つてゐるやうに、支那小說に脚色を藉り、作者の空想に據つて作られたものである。殊に爲朝が大島に死なずして、琉球に渡つて活躍する續編以後は、「神社考」「和漢三才圖會」等の傳ふるところに據り、最も空想を逞うした所で、また最も筆力を揮つたと稱せられる。それは「水滸後傳」に擬したものであるが、「南島志」「中山傳信錄」等は見たとしても、當時に於て琉球の國情生活を、これだけに纒めたのは、この作者の力に據るものでなければならない。これが全篇中特色のある部分をなしてゐて、椿說といひ爲朝外傳といふ謂れがある。なほ卷末に、「爲朝神社并南島地名辨略」といふ考證めいたものを附錄としてゐる。

【梗概】〔前編〕鳥羽上皇と崇德の新院が不和とならせられた頃、俊敏强勇の源爲朝は、少納言信西と爭つて九州に遣られ、八町礫紀平治といふ勇者を家來にし、阿曾三郎平忠國の尊敬を受け、稀代の勇婦白縫姫を妻として忽ち九州を略するに至つた。保元の亂には勇士を從へて上京、父爲義、兄義朝等と新院に味方して大に戰ひ、不幸敗れて伊豆の大島に流されたが、島民を說服し、代官を從へその女鰕江を妻として私に再擧の時を待つた。一方敗戰の難は九州にも及び、忠國は攻められて死し、白縫姫は紀平治と共に四國に遁れたが、爲朝流罪と聞き東上し、これを途に奪はんとして果さず、讃岐に流され給うた新院に謁してその誠忠の志を奏した。〔後編〕大島を從へた爲朝は、又周圍の島々をも併せたが、一日女護ケ島に渡り、女はこの島に、男は鬼ケ島に各別居するといふ迷信を聞き、自ら七郎五郎といふ者の長女を妾として二兒を擧げ、男女同棲の自然を說いて民俗を化し、この島と鬼ケ島を從へて妾と二兒を後繼者に殘し、鬼夜叉と呼ばれた勇士七郎五郎を伴つて大島に歸つた。然るに彼の留守中代官忠重は島民を苦しめてゐたので直にこれを懲したが、忠重は脫れて伊豆に行き、伊豆大介茂光等と京に訴へ、爲朝討伐の勅命を請うて攻め寄せて來た。爲朝は勅命の抗し難きと、新院崩御の報に死なんとしたが、鬼夜叉がこれを諫止して來島に落し、自身は爲朝の身代りとなつて鰕江等と館に籠つて討死した。爲朝は來島でこの報を得て、彼等の義に感じて自殺しようとしたが鰕江の靈に遮られ、扁舟に乘じて讃岐に渡り、新院の陵を拜して御靈に逢ひ、御旨に依つて更に九州に渡つた。そして肥後の木原山に紀平治・高間三郎等と共に兵を集めてゐた白縫姫に會し、此處に棲むこと數年、一子舜天丸をまうけた。かくて擧兵の時機至つて海路東上せんとし、偶々颱風に遭ひ白縫姫は風波を鎭めんとして海に投じ、高間夫妻以下の從卒も死に、爲朝と紀平治・舜天丸とは、別々に琉球に漂着し

珍術罌粟散國（ちんじゆつけしさんごく）　浮世草子

五卷【作者】其鳳【刊行】安永四年【諸本】德川文藝類聚第三編遍歷小說所收【解說】大山志壯太といふ男が廣言を吐き散らしてゐると、異相の神人壽老人が現はれて、その心得違ひを誡め、「廣い世間を見聞して見よ、みじんの虫にも相應にみじんの世界ありて人間界にかゝはらず、それぞれの境涯に入りてみよ」と御託宣あつて、忽ちその神力により、志壯太は罌粟人形程になる。それより蚊の國鳥の國花の國と遊歷し、福の神の述懷を聞き、世新たに運び移したかと思はれる例は少くない。何かこの類の地名の發生すべき理由が前にあつて、それに所謂沈鐘が附會したのではないかとも想像せられる。全國無數の鐘が淵由來は、分類して見ると存外に簡單なものばかりである。その一種はそこに大きな寺の伽藍があつて、或る時代の地變に陷沒して淵となつたといふもの、これはただ鄕土の古く榮えてゐたことを、說くだけの趣旨としか考へられない。第二にはその鐘に靈あつて盜賊兵火の難を脫し、我から水底に轉げ込んだといつ〳〵を支援してゐることは、考へて見ると面白い協力であつた。その中でも筑前の鐘の岬は、古くは「萬葉集」の歌にも詠ぜられ、それから以後にも數々の不思議を現じ、殊に種彥の「白縫物語」(別項)で、頓に遠國の者にも知られるやうになつた。さうして他の多くの鐘が淵も同樣に、晴れて波靜かなる日に船の上から覗くと、龍頭の岩の間に傾いてゐるのが見えると云つた。大正八・九年の好景氣時代に、或る成金が一代の思ひ出に、十餘萬圓の財を費してこの鐘を陸に持つて來ることに成買虎之卷」に摸したものであるが、實は、該書が「當世虎之卷」と改題し、文政九年に發表されたのに刺戟されたのであらう。內容は、「虎之卷」とは何の關係もない。遊女若四季の傳を綴つたものである。果して事實に據つたか事實めかしたのか、俄に斷ずる事は出來ぬが、彼の作には「廓雜談」(別項)の如く事實に取材したものがあるから、實在の人物に據つたと見られる。篇中の瀧野屋紋介は當時の人氣役者市川門之助(瀧野屋)から採つたのである。

【梗概】千葉家の藩中に、室山兵左衞門と云ふ

た。〔續編〕時しも琉球は、尙寧王の治下にあつたが、その暗愚に乘じ、寵妃中婦君は奸臣利勇と結んで國政を紊し、廉夫人の娘寧王女が王の後嗣となるを怠んでこれを除かうと企てた。忠臣毛國鼎・陶松壽等は、常に王女の身邊を護つてゐたが、邪曲の仙士濛雲國師が現はれて王の尊崇を受けるに及び、中婦君・利勇の徒はこれを味方として王を誑り、兵を以て夫人と王女を殺さうとした。この難に國鼎は死し、夫人は殺され、王女のみ辛うじて遁れた。然るに濛雲の妖術に依つて中婦君は殺されたので、利勇は國鼎夫人の腹を割いて得た嬰兒を中婦君の生んだ幼主と僞り、これを奉じて逃げ南風原(はへばる)に據つた。遁れた王女は途中難に遭うたが、國鼎の二子に救けられ、又、白縫姫の靈に宿られて勇婦となり、小琉球に渡つて此處に漂着してゐた爲朝に會した。〔拾遺編〕爲朝は王女に逢うて彼女に妻の靈が乘り移つてゐる事を知り、王女を助けて琉球を平定し、崇德院の御志を體現せんと、先づ南風原に赴いて利勇の軍に投じたが、狹量な利勇は難題を課して爲朝を試みた。爲朝は强勇を現してその一を果し、次を果さんとして偶々一美人を得、これを利勇に薦めて漸く重用されるに至つたが、美人は濛雲が妖術を以て利勇の軍に入れた諜者であつた。これより先、國鼎の二子鶴龜は濛雲に捕へられ、その策に依つて放たれて利勇を討たんとしたが、爲朝はこれを捕へ密かに保護した。この功に依つて爲朝は大里の按司となり、王女を妻として大に治を圖る一方、今は利勇の重臣となつてゐた松壽と共に兵を養つて、先づ利勇を亡ぼし濛雲を討たんと志した。然るに利勇は、爲朝・松壽等が勢を得るを憎んで彼等を殺さうと圖つた。併し松壽の諜者に依つてこれを知つた爲朝等は、直に城中を襲うて妖婦を斬り、鶴龜に利勇を討たせた。爲朝は更に大軍を起して、王女と前後から首里の濛雲を擊ち、連勝忽ち城を拔くと見えたが、濛雲の術中に陷ちて却つて大敗し、鳥袋の峽谷に燒き殺されんとしたが、只一騎駈けつけた王女に救はれ、共に遁れて小琉球に渡つた。〔殘編〕桂呂麻の島長に救はれた爲朝夫妻は巴麻島といふ孤島に行つて仙童に逢ひ、姑巴島に行けと勸められてそこに渡ると、紀平治と共に此處に漂着してゐた舜天丸が武術兵法を修めて成長してゐるのに會うた。玆に四人は濛雲討伐の事を謀つて密かに島を出發し、那覇を過ぎて大榮河畔に上陸し、山路を辿つて松壽・鶴龜等に出會ひ、途々味方の勇士智者を得てやがて浦添の城を拔き、遂に濛雲の軍と會戰した。然るに此度は濛雲の妖術も神童舜天丸の武威に敵せず、彼の桃の矢に射留められた。射留めて見ると、濛雲は虬の化身であつた。かうして琉球は平定し、功臣等はそれぞれ要職に就き、衆望は爲朝等を國王に推したが、爲朝・寧王女・舜天丸は、互にこれを辭した。併し後王女は死し、爲朝は昇天したので、舜天丸は、中山府に王位に卽いて舜天王と稱し、祭祀を敦うし民治を圖つて在位五十年、二世・三世相繼いで島民はその治に浴した。

椿說弓張月 口繪（北齋畫）

【構想】前・後二編は史實に基いて爲朝の武人的英雄的風貌を描いてゐるが、續編以下は作者の空想によつて理想的英雄の面目を描いてゐる。卽ち彼の理想から自然の人生の不完全を補ふといふ趣旨のもとに、史上に於て大島に死んだ爲朝の悲慘な末路を引直し、假構によつて琉球に活躍させ、一代の善行偉業が悉く報いられるめでたいものにしてゐる。それは首尾照應した複雜な大說話を構成し、近世武士道の精神、儒敎の道德思想、因果應報の思想を最も高調して、彼の小說に於ける勸懲主義と娛樂本位との二目的を立派に成し遂げてゐるものである。【價値】馬琴は最初から全篇の構想を十分に得てゐたものではなく、續々と構成して書いて行つたらしい。それ故に因果應報思想の具體化に關して多少構想上の破綻を免れなかつた。殘編に於ける爲朝に就いては殊にその感が深い。併し彼の理想を具體化して、雄大な內容を構成し、而も結構整然、首尾貫通して能く纏まり、又文章が最も絢爛である。夙く馬琴も、「近世物之本江戸作者部類」に、「三七全傳南柯夢」「南總里見八犬傳」(各別項)と共に、その三大奇書なる事を言ひ、又依田學海も「椿說弓張月細評」に推賞してゐるやうに、馬琴の作中最大傑作といふべきものである。【影響】文化五年十月、大阪の淨瑠璃作者佐藤太がこれを「筑紫の白縫 吾妻の鮫江」鎭西八郎譽弓勢」といふ外題の淨瑠璃に作り、また同年冬大阪の歌舞伎座でも、「島巡り月の弓張」といふ名題の狂言に仕組んで興行した。なほこの狂言は天保四年九月、大阪中の芝居嵐三津橘座に於て繰り返され上演したといふ。その他この趣向の、錦繪・合卷等の文藝に影響するところ頗る多い。

【參考】椿說弓張月細評 依田學海(帝國文庫)○馬琴研究 藤村作(日本文學講座)○支那文學の馬琴の作品に及せる影響 麻生磯次(日本文化叢考)

〔笹野〕

枕頭山水(ちんとうさんすい) 紀行 【著者】幸田露伴【刊行】明治二十六年六月、博文館【內容】「易心後語」「地獄溪日記」「まき筆日記」「突貫紀行」「醉興記」の五篇から成る。自序に「草まくら旅にありし日、まのあたり見し山水のながめ、みやこひなの手ぶりのをかしきさまざまを、ますかゞみ床のへさらず今の夢にも見えねかしとてあつめ置きたるふみこそは」と言つてゐる。「易心後語」は、明治二十五年七月から八月にかけ、奥羽・越後・佐渡に遊び、海岸づたひに、越中・越前を通つて丹後に

出で、天の橋立を眺め、大阪の諸文士と交歡した時の紀行。「地獄溪日記」は、二十三年夏、赤城山方面に遊んだ時の事。「まき筆日記」はその年の初夏、太華山人と京都に遊び、有馬に一浴、四國から九州に渡つた時の事。「突貫紀行」は、文壇に出る前、北海道をあとに東上の途、奥羽に旅した折の紀行である。「醉興記」は二十一年「露團々」(別項)の一篇で初めて原稿料を得るや、元氣にまかせて信州・野州を旅した時の紀行である。【批評】どれも、小説のやうに意匠に凝らず、寂びと諦觀が、奔放な筆で書かれて、初期の著者の風骨が隨處ににじみ出てゐる。「地獄溪日記」は赤城で病苦と戰ひつつ書いたもので、詩人としての彼の俤が早くこれに躍動して居り、「醉興記」には、「風流佛」(別項)のお辰のモデルのことなどが出てゐて興味深い。明治文壇における紀行文集として最も傑出したものの一つで、異色あるのみでなく、青年露伴の風格が最も鮮明に出てゐる旅行記である。　〔高須〕

つ

對句(つゐく)　修辭學【異稱】對偶法ともいふ。【解說】連續した二個の句節の語と語とが、平行して互に對偶を成すもので、古來東西の文學者に用ひられた修辭法である。普通は二句の對偶であるが、中には三句もしくは四句の對偶もある。對句は口調を好くし、文姿を飾る效能はあるが、多く用ひれば文章を輕浮にする嫌ひがある。

面白きかな天地の心。山は屹として聳ち、水は汪として流る。鯨鳥大海を渉めて大騒ぐ時なし。昨日人あり其の人兵を鳴らす。今日人あり其の人仁を思ふ。天と地と之を覆ひ之を載せて時と共に轉々す、悠なるかな。(川上眉山「懷硯」)　〔武島〕

對句(つゐく)　漢詩【名義】對偶をなせる句をいふ。【起原】對句の起原は極めて古代に屬する。「詩經」の如き韻文のものは論ずるまでもなく、「書經」「易經」「老子」の如き散文にも隨處に散見される。後漢以後、一般に婉麗を好んで對偶を排列するやうになり、六朝時代に至つて益々盛んになり、詩人は皆好んで對句を作るやうになつた。【種類】對句の種類は甚だ多く、分類も亦區々であるが、「支那文學考」に擧げてゐる十三種の分類が、最も當を得てゐる。即ち隔句對・當句對・回文對・聯綿對・雙擬對・流水對・重字對・雙聲對・疊韻對・虛字對・色對・數對・正名對がそれである。隔句對とは、第一句を以て第三句に對し、第二句を以て第四句に對するものである。例へば、「五月南風興、思レ君下二巴陵一、八月西風起、想レ君發二揚子一」の如きものがそれである。當句對は、一句の中に於て、二箇若しくは三箇の對語を疊用するもので、これは必ずしも上下二句が對偶を成すを要しないものである。例へば、「南陌北堂連二北里一、五劇三條控二三市一」の如きものがそれである。回文對は、上下二句の首尾に於て、相應じて同一の文字を點出したものである。例へば、「今年花似二去年好一、去年人到二今年老一」の如きものがそれである。聯綿對は、一句の中に於て、同一の文字を幾度も繰り返して用ふるものである。例へば、「龍池躍レ龍龍已飛、龍德先レ天天不レ違」の如きものがそれである。雙擬對は、上下の二句が對偶をなし、而も上下二句が、それ〴〵一句中に於て、第一字と第三字とに同一の文字を疊用したものである。例へば、「九月九日望鄕臺、他席他鄕送レ客杯」の如きものがそれである。流水對とは、もと對偶にあらざる事物を、一意を以て、上下二句對偶の形式を以て貫穿したものである。例へば、「海內存二知己一、天涯若二比鄰一」の如きものがそれである。重字對とは、疊字を以て一聯の對偶を成すものである。例へば、「漠々水田飛二白鷺一、陰々夏木囀二黃鸝一」の如きものがそれである。雙聲對は、二字雙聲(韻參照)の熟語を以て對偶をなせるものである。例へば、「流連戲蝶時々舞、自在嬌鶯恰々啼」の如きそれである。流連、自在はそれ〴〵雙聲の熟語である。疊韻對は、二字同韻より成る熟語を以て對偶をなせるものである。例へば、「江山城宛轉、棟宇客徘徊」の如きものがそれである。宛轉、徘徊はそれぞれ同韻の熟語である。虛字對は、虛字を以て對偶を成せるものである。例へば、「去矣英雄事、荒哉割據心」の如きものがそれである。矣、哉は虛字であつて又對偶をなしてゐる。色對は、色を表す文字を以て對をなすものである。例へば、「丹鳳朱城白日暮、青牛紺幰紅塵度」の如きものがそれである。數對は、數字を以て對をなすものである。例へば、「且論三萬六千是、寧知四十九年非」の如きものがそれである。正名對とは、名詞を以て對を成すものである。例へば、「匡衡抗疏功名薄、劉向傳經心事違」の如きものがそれである。

【參考】○詩格集成(長山貫)○詩輯(三浦安貞)○詩律(赤澤一)○文鏡祕府論(僧空海)○文心彫龍(劉勰)　〔西澤〕

追善彼岸櫻(つゐぜんひがんざくら)「中將姫京雛」を見よ。

追善連歌(つゐぜんれんが)【沿革】追善連歌は、名號・或は法華・淨土等の佛敎の要文を冠字として賦するのを習とする。懷紙の書樣は薄墨にて少しかすれるやうにするといふ。後世には文字餘りは嫌ふとか、迷ふ心の句體は避けるとか、輪廻の心ある句は絕對に用ひてはならぬとか、上句は左前に包むとか、水引は一筋を用ひるなど細々と掟を立てるに至つた。【沿革】故人の追憶、若しくはその供養のために連歌を行つたことは、既に鎌倉時代にその例がある。「菟玖波集」には善阿法師の一周忌に追善千句を行つたことが見えてゐる。これ等が最初かと思はれる。現存するものの最も古いものは、「文明十四年眞乘院宮追善名號連歌」であらう。大永八年藤原盛綱のために、宗長が賦した「獨吟名號百韻」がこれに次ぎ、また「天正十年織田右府追善百韻」などがその著名なものである。【類種】追善連歌の一種と見られるものに、懷舊之連歌といふものがある。古人の名句などを冠字とし、その人の有りし昔を忍ぶ意を賦するのが例である。「天正五年太秦最勝院興行懷舊百韻」の如き、その一例である。　〔福井〕

通(つう)　「文學內容」を見よ。

通圓(つうゑん)　能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【格式】中習と云つて「靱猿」(別項)・連歌盜人・米市等と同格(和泉流)【題材】當時上流の間に茶の湯の行はれてゐた事は、風俗史上著しい。狂言には「鬼淸水」の如きそれが反映せられてゐる。この「通圓」は元宇治の百姓で、古川通圓と云つて代々續いた茶屋坊主で、茶を立死にしたと云ふことを材料に使つて、この作が出來てゐる。

定し、崇德院の御志を體現せんと、先づ南風原に赴いて利勇の軍に投じたが、狹量な利勇は難題を課して爲朝を試みた。爲朝は强勇を現してその一を果し、次を果さんとして偶々一美人を得、これを利勇に薦めて漸く重用されるに至つたが、美人は濠雲が妖術を以て利勇の軍に入れた諜者であつた。これより先、國鼎の二子鶴龜は濠雲に捕へられ、その策に依つて放たれて利勇を討たんとしたが、爲朝はこれを捕へ密かに保護した。この

を斬り、鶴龜に利勇を討たせた。爲朝は更に大軍を起して、王女と前後から首里の濠雲を擊ち、連勝忽ち城を拔くと見えたが、濠雲の術中に陷ちて却つて大敗し、島袋の峽谷に燒き殺されんとしたが、只一騎駈けつけた王女に救はれ、共に遁れて小琉球に渡つた。〔殘

を補ふといふ趣旨のもとに、史上に於て大島に死んだ爲朝の悲慘な末路を引直し、假構によつて琉球に活躍させ、一代の善行偉業が悉く報いられるめでたいものにしてゐる。それは首尾照應した複雜な大說話を構成し、近世武士道の精神、儒敎の道德思想、因果應報の思想を最も高調して、彼の小說に於ける勸懲主義と娛樂本位との二目的を立派に成し遂げてゐるものである。【價値】馬琴は最初から全篇の構想を十分に得てゐたものではなく、續々と構成して書いて行つたらしい。それ故

枕頭山水(ちんとうさんすゐ)　紀行【著者】幸田露伴【刊行】明治二十六年六月、博文館【內容】「易心後語」「地獄溪日記」「まき筆日記」「突貫紀行」「醉興記」の五篇から成る。自序に「草まくら旅にありし日、まのあたり見し山水のながめ、みやこひなの手ぶりのをかしきさまざまを、ますかゞみ床のへさらず今の夢にも見えねかしとてあつめ置きたるふみこそは」と言つてゐる。「易心後語」は、明治二十五年七月から八月にかけ、奥羽・越後・佐渡に遊び、海岸づたひに、越中・越前を通つて丹後に　〔笹野〕

【梗概】坂東方の旅僧が宇治の里に到り、通圓と云ふ茶立坊主の幽靈に會ふ。通圓、その最期の有樣を物語つて、旅僧に回向を請ふと云ふのである。

【構想】「祐善」や「蛸」や「樂阿彌」と同じやうに能がかりに仕組んだ作で、幽靈能とか修羅物とかの型を摸してゐる。さうして、これは全く謠曲「賴政」に擬したもので、眞面目な謠曲を茶化してしまつてゐる。だから滑稽味は專ら語戯の上にのみ存して、これと云ふ脚色上の長所はない。狂言としては眞に一變態の觀がある。〔野村〕

通音（つうおん）　國語學　【解說】同じ語と認められる語の或る部分の音が多少違つて、同じ語が二つの違つた形であらはれる時、その相異る音は相通じて用ひられ、場合によつて轉換し得るものとしてこれを通音といふ。これを廣義に解すれば、音便（別項）も活用（別項）の語尾變化も、すべて通音の中に含まれるが、これを狹義に解すれば、（一）五十音圖中にある音節であつて、その上、同行又は同列中での轉換に限る。それ故撥音「ん」や促音の如き、五十音中にない音との轉換や、又「思ひて」が「思うて」となる如き、同行同列中での轉換でないものは、これを通音とは認めない。（二）音の轉換によつて、意味の變化を來さないものに限る。それ故、「戀ふ」「戀ひ」などの如き、活用の語尾變化は通音でない。（三）時代的音變化によつて起つたものは、通音とは認めない。それ故、「かぞふ」（算）と「かずふ」、「いづく」（何處）と「いどこ」の如きは、通音とは認めない。但しその起因は、時代的變化に在つても、その結果、同時代の同一の言語の中で、共に差別なく用ひられるものは、これを通音とする。（四）「ふね」（船）が、「ふなびと」（船人）となり、「たけ」（竹）が、「たかばやし」（竹林）となる如き、複合語を作る際の音轉換も、これを通音と認めない。

【種類】通音は、五十音圖に基づいて說明するのが常である。その種類としては（一）同行中での相通。同じ行の音節が互に轉換するをいふ。これは、音節中の母音が轉換するのである。これを同音相通、同紐相通、五音相通、音相通、又は音通などいつた。その中に、初五相通（初後相通とも。同行中の最初の字と第五の字とが通ずるもの、即ち母音aとoとの轉換）、二四相通（第二字と第四字との相通、即ちiとeとの轉換）、三五相通（第三字と第五字との相通、即ちuとoとの轉換）などを區別したものがある。（二）同列（段）中での相通。同韻相通とも云ひ、同じ列の音節が互に轉換するをいふ。即ち音節の初めの子音が轉換するのである。その中で、五十音圖に於て相隣接する行の、子音の相轉換するところから、親類相通と云ひ、又同じ調音部位の子音が轉換するのを同內相通と稱し、アカヤの諸行（共に喉內の音）、サタラナの諸行（共に舌內の音）及びハマワの諸行（共に唇內の音）の內に於ける相通を、それ〴〵喉內相通、舌內相通及び唇內相通と稱した。【音相通說】同じ語が相異る二つの形で現はれる時、その異る部分の音を相通ずるとする考は、何時から始まつたか明かでないが、古く我が國の悉曇學者の間には在つたのであつて、院政時代の悉曇學者明覺は、その著「悉曇要訣」に梵語に於けるかやうな現象を音の相通とし、これは梵語のみならず漢語及び日本語にも存するものであり、その相通は主として同紐（五十音圖の同行）、同韻（五十音圖の同列）に於て通ずるものであるとし、支那語及び日本語に於ける例を擧げて、梵語の例を證明してゐる。かやうにして多分漢字音の反切のために作られたであらうと考へられる五十音圖が、梵・漢・倭三國語を通じて音相通の原則とせらるゝに至つた。さうして古く朝廷に於ける「日本書紀」の講筵から起つて、鎌倉時代以後の神道家に繼承せられた「日本紀」の註釋に於ても、また平安朝に於ける歌學の中から起つた古語の研究に於ても、院政時代以後には、語義又は語源を說明するに當つて、五十音圖による同音相通、同韻相通を說くやうになつたが、これは恐らくは悉曇學者の說を承けたものであらう。鎌倉時代に於ては、悉曇學者の間に相通說が次第に委しくなり、同音相通の中に初五相通、二四相通、三五相通等を分ち、又同韻相通にも三內の相通を分つやうになつた。さうしてこれ等が韻鏡等の知識と合して、室町時代を經て江戸時代にまでも及んだが、その間、相通說はやはり語義・語源の說明に用ひられたと共に、又假名遣にも應用せられて、互に關係ある語の假名遣を定め又は知る原則の一として用ひられ（假名遣參照）、延いては、動詞の活用にまで及んだ（活用參照）。さうして、初めは種々の種類のものをすべて通音としたのであるが、後には次第にこれを區別して、音便その他の如く、時代的變化によるもの、活用の如く音の違ふに隨つてその意味や用法の異るもの、複合語に於けるが如く、音の變化が、語を複合せしむる手段となるもの、又方言による音の轉換などを通音から除外する傾向が生じて、遂には、意味が全く同じくして音が通ずると見るべきものはないと主張するものさへ出るやうになつた（野之口隆正の通略延約辨など）。明治以後、日本語をローマ字で書くことを學び、又西洋の言語學や音聲學が輸入せられて、國語の音節を單音に分解して觀察し、又各音の性質に關する正確な知識を得るやうになつて、從來の五十音圖に基づく通音の說は、根本的に變化せざるを得なくなつた。

【參考】和字解貝原益軒　○語意考加茂眞淵　○雅言成法鹿持雅澄　○通略延約辨野之口隆正　○音韻啓蒙敷田年治　〔橋本〕

通議（つうぎ）　論策　三卷三册　【著者】賴山陽　【刊行】弘化四年　【解說】我が國古今の形勢、政治の得失、並に官制・民政・法律・兵制等に關する漢文で書いた策論で、凡て二十八篇ある。古賀穀堂の評論が附いてゐる。〔佐久〕

通氣粹語傳（つうきすいごでん）　洒落本　一册　【作者】山東京傳　【畫工】無署名。但し自畫であらう。【名稱】「忠義水滸傳」のもぢり。【刊行】寛政元年　【題材】書名の如く支那小說「水滸傳」を江戸の世界にもぢつたのである。文中、「この頃碑文谷仁王尊はやり給ひ」とあるは、當時荏原郡碑文谷法華寺の仁王尊を信仰する事が流行したことを指す。

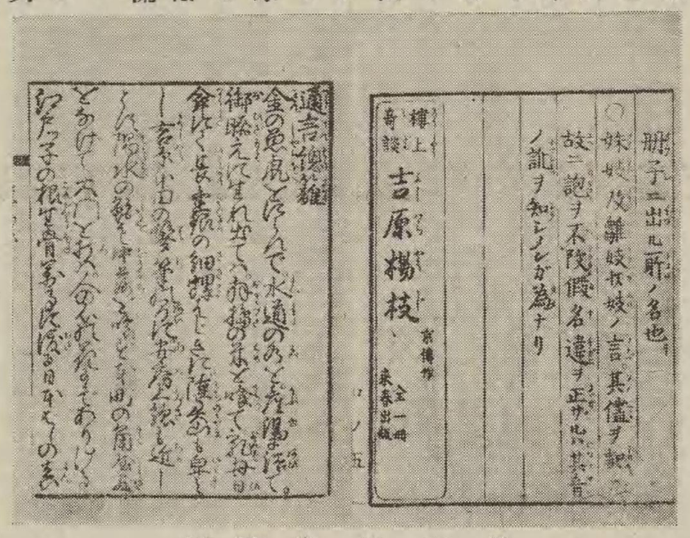
【梗概】或る邸の用人の息子、綽名を林沖と云ふ男、魯智深と云ふ花の師匠で綽名を花和尙と呼ばるゝ者と向島武藏屋松兵衞即ち武松方に飮みに行き、主人と三人で面白く騷ぎ、やがて向ふ岸の宋江の許を訪れる事となり、林沖矢文を放つと、舟宿の息子張順これを讀み、舟を寄せる。林沖・花和尙と二人、宋江の別莊に行く。そこで宋江と又酒宴を催す。又或る日宋江は鼎肩相撲久紋龍進吉、茶屋亭主朱貴を連れて吉原へ行き、長字屋梁山の許へ上るが、

梁山には神田鞠指南の高休がついてゐると云ふので、宋江との間がもめる。高休は宋江と梁山との間を切らせようと企て、弟衙内と共に李忠と云ふ居合抜、時遷小僧と云ふ巾着切の名人に依頼し、久紋龍の預れる梁山から宋江への起請文をすり取らせようとして失敗し時遷小僧はひどい目に逢つた。碑文谷の仁王尊に參詣した花和尚は、茶屋に休んで武松の兄武太郎の嫁の惡計を聞き、武太郎に密告する。高休は折角の計企が失敗したので、今度は醫者瘦皮病身に依頼し、しびれ藥を造らせ鯛丸屋呉服店の手代に飲ませて反物を奪ふ。梁山へ約束の夜具を作つてやるためである。ついでに宋江を毒害する相談をする。

【構想】強ひて水滸傳中の人名をもぢつただけで、京傳特有の例の穿ちに乏しく、黄表紙に類する作である。「水滸傳」が大衆化したのは、「新編水滸畫傳」(文化三年)(別項)の發表以後であるから、折角の趣向も案外「水滸傳」を知らぬ讀者に受けなかつたらしい。本書内題に上編とあり、卷末に中下編を續刊する旨斷つてあるが刊行されなかつた。ただ本書が彼の讀本「忠臣水滸傳」(寛政十一年)(別項)の腹案となつたことは注意すべきである。〔山崎〕

通言總籬(つうげんそうまがき)　洒落本　一册【作者】山東京傳【畫工】山東けいこう畫とある。雞告は京傳の畫號の一つ。【名稱】總籬とは吉原の所謂大店を云ふ。總籬又大籬とも云ふ。總籬については、凡例に「蓋總籬ト題セルハ、流行ニ後(おくれ)タル古句ノ雜(まじり)ナキヲ以テ也」と說いてゐるから、通言の大店(純粹なるもの)の義に用ひたのである。【刊行】天明七年【諸本】こんにやく本第二・京傳傑作集(帝國文庫)・洒落本集(日本名著全集)所收。【題材】凡例にある如く、彼は天明五年、黄表紙「江戸生艷氣樺燒」(別項)を發表し大に歡迎され、篇中の主人公艷次郎の名は已惚男の意に用ひられるやうになつた。本書でもこの艷次郎を主人公とし、彼の書の人物北里喜之介・惡井志菴の兩名をも再び用ひ、「江戸生艷氣樺燒」の續編たる體裁を成してゐる。

【梗概】日本橋伊勢町の新道にある北里喜之介の住宅に、若旦那艷次郎と出入の太鼓醫者惡井志菴の兩人が來た。喜之介は女郎上りの女房おちせと共に歡待する。艷次郎が奢つた二朱の鰻で酒を飲みつつ、話は例の如く遊里の噂である。新宿の話は輕く切り上げて、やがて話題は吉原にうつる。「はやり言葉も味なものだ、ちよつといゝだすと無性にはやるよ」と吉原の流行言葉の話となり、更に進んで、大店の正月の仕着模樣の異なる點、松葉屋で上草履をはかせる遊女に格式のある事、二階ばし子の二つある店、小便所の遠い店など、通は縷々として盡きない。やがて三人は身支度して柳橋の船宿から舟で吉原へ行く。山谷で上つて廓に入り、引手茶屋駿河屋にあがる。そこへ松田屋(松葉屋)の遊女おす川が、店まで艷次郎を迎へに來る。やがて松田屋へ行くが、艷次郎は京町に新造を買ひに行つたのを種に、おす川に冷遇される。喜之介のみは新造買ひと見せて實はわけある女と忍び合ふ。間もなく茶屋の男に迎へられて三人は駕籠で立ち歸る。



通言總籬(初頁)

【構想】友人が相會して遊里の噂をし、やがて遊里に赴く光景は、洒落本の類型であつて、脚色にはちつとも新味が盛られてゐない。作者の重きを置いたのは、當時の吉原大店の通を穿つ事にあつた。松葉屋の細かい穿ちの如きは到底單なる作家に描けるものではない。絶えずこの家を觀察してゐるもの、而もこの家の新造林山と深く馴染んで、内狀を知悉してゐた京傳にして、始めて描けたところなのである。通を生命とした代表的江戸人の、代表的趣味がかゝる穿ちにあつた時代なのであるから、本書が歡迎され、愛讀されたのは當然のことである。實にこの書の生命は、新しい穿ちを見せた點に存したのである。〔山崎〕

通憲入道藏書目錄(つうけんにふだうざうしよもくろく)　書目【名稱】「信西入道藏書目錄」とも云はれる。【成立】撰者及び成立事情については明かでないが、吉村茂樹氏は内容より見て、編者は藏書家自身ではなからうと推定して居り、その時期も、藏書家の生存中か、或は遺書を從人の著錄したものか、はつきりしない。【諸本】群書類從四九五に收められ、新校群書類從では、東京帝國大學附屬圖書館所藏の寫本によつて校合を加へてゐる。寫本の存するもの割合に少いが、「通憲入道信西書物目錄」と題せられる内閣文庫所藏本は類從本とはやゝ趣を異にしてゐる。【内容】主として漢籍・史書・記錄の類三百餘部を、これを收めた書櫃の番號の順に著錄してゐるのであるが、櫃には缺號が多く、最後の番號は百七十に至つて居り、而も番號の無いものが三合あるけれども、こゝに擧げてあるのは凡て八十八合である。同一書が重出してゐる點から見ても、この書が現存書の目錄である事は明かに知られる。この書は從來藤原通憲の藏書の目錄として解せられて居り、學者としての通憲を知る上の好個の資料とされてゐたのであるが、果して通憲のものであるかどうか、吟味の餘地のある事を吉村氏は指摘してゐる。もし通憲のものとすれば、個人の藏書目錄として存するものの中、最古のものと云ふ事が出來る。

【參考】通憲入道藏書目錄についての疑問　吉村茂樹(史學雜誌三九ノ一〇)〔岩淵〕

通仁枕言葉(つうじんまくらことば)　洒落本　一册【作者】蓬萊山人歸橋【畫工】無署名【名稱】通人の常套語の意であらう。【刊行】安永兩手の年と序にある。安永十年即ち天明元年。【題材】作中の人物に一擧(いつこう)・二指(りやん)・三爪(さんぱつ)・四開(すわつぴら)等と出て來るのは明かに當時流行した拳の術語である。噂に上る花柳界の人物、演藝界の人物の動靜は、確かに實在の人々で、作者が消息通を誇るものである。當字は異つてゐるが、山本・梅本・尾花屋は當時門前仲町(現今門前町)に鼎立した青樓の名稱である。「升屋の普請能

く出來た」とあるは、洲崎に明和頃出來た升屋祝阿彌經營の料理屋茶屋で、松平雲州侯の隱居南海が隱れ遊びをしたと云ふ當時有名な家である。

【梗概】一室に集る一擧・二指・三爪の息子株、頻りに生花の話をしてゐるうち四開も來り話は遊里の噂となつた。そこへ四開の許へ手紙が來る。彼の馴染のおたよが病氣で逢へぬと云ふ知らせである。四開は顏色を變へ探りに出かける。彼は山本へ行きおたよを呼ぶ。幾よし屋では、久保井と云ふ客がおたよを上げてゐるが、おたよが無愛想なのでいら〳〵する。ところへ四開、頭巾のまゝでぬつと這入り、乙にからんで來る。おたよ四開を廊下に呼び出して辯解し、「夫程云ふなら久保井さんと切れやせう」と、四開を馴染の茶屋梅元にやり、自分は座敷に戻り、久保井に愛想づかしを云ふ。久保井は口惜しがつてくど〳〵と自惚まじりに並べ立てる。これは作者歸橋が八幡社に通夜した時の夢であつた。

【構想】恐らく全體事實談をその儘描寫したのだらう。脚色は餘り纏まつてゐないが、可なり實在感に富んだ作品である。四開が天晴の深川通の粹客であるに拘らず、眞劍の戀をしては平常の洒落も出ず、一本氣な所、おたよもこれに對して、ためになる客久保井と斷然切れてしまふところなど、洒落本前期の作品が漸く一轉換をする傾向を示してゐる。中に作者自身が現はれるのも、黃表紙にある趣向で、歸橋の作品には、これが可なり多い。「龍虎問答」「愚人贅漢居續借金」（各別項）の如き同樣である。

〔山崎〕

通新戲（つうしんむだ）　洒落本　一冊　【作者】小金あつ丸　【口繪】畫狂人北齋　【名稱】仇手本後編

と角書がある。山旭亭の序及び前編「仇手本」の扉には「通神藏」とあり。本書內題及び小金あつ丸の序には「通新戲」とある。忠臣藏のもぢり。【刊行】享和二年【題材】前編「仇手本」（別項）と共に「假名手本忠臣藏」を擬つたもの。要するに該書の名を前後兩編に分けて命名したもの。本書は第七段目より大切迄に當る。

【梗概】吉原一力屋の二階、由良之助、力彌が持參したわか町かほよの手紙を密かに厠のほとりで讀む。九太夫、遊女かる川、これを怪しみ窺ふ。九太夫の相方は新造ねむ川。あまりに九太夫がしつこいので逃げ出す。平右衞門は出入の鳶の親分、相方いさみは憎からず想ひ、部屋の中では話がはずむ。由良之助、かる川を身請けすると言ひ出す。かる川實はおかる、勘平への義理で自殺しようとするのを、由良之助添はせてやらうと安心させる。深川わか町となせ屋の抱へ小浪、力彌に是非逢はうと、お針のおなせ・男藝者銀六・魚之介と舟で由良之助の向島の別莊へ行く。舟中で、銀・魚の二人、富士から京までの地口を言ひ續けて向島に行く。由良之助の粹な計ひで小浪、力彌に逢ふ。藝者屋天川屋義兵衞、抱への事で女房と喧嘩する。藝者達化粧の最中、飼猫、鼠を捉へて來る。家內中の騷ぎとなり、義兵衞長持の上に乘りおさへてゐる。不意に由良之助現はれ、近日高野やの直をゑぐつてやるつもりであるから、手傳ひを賴むと依賴して去る。師走の中の頃、由良之助、仲間のぬらくら者四十餘人をつれ、高野屋におしかける。直、面倒と見て物置小屋に隱れる。一同發見して祝儀を唱へ、由良之助、夜が明けたら品川へ年忘れにつれて行かうと云ふ。一同賛成して引き上げる。

【構想】前編「仇手本」（別項）のつづきで、毎章「忠臣藏」にもぢつたのであるから、單に同名の人物が現はれるといふだけで、筋は支離滅裂である。

〔山崎〕

通俗漢楚軍談（つうぞくかんそぐんだん）　讀本　十五卷　【作者】夢梅軒章峰（自一卷至七卷）・望京南徽庵（自八卷至十五卷）。【刊行】元祿三年の序と同七年の跋がある。【諸本】帝國文庫・有朋堂文庫所收【題材】秦末の紛亂より漢の興隆に至る支那の史實を材としたもの。

【梗概】呂政は秦の統を嗣いで六國を亡ぼし、始皇帝と號して威を振ひ、東に大海を塡め、西に阿房宮を建て、南は五嶺を修し、北に萬里の長城を築いて守を固めると共に、書を燒き儒者を屠つて苛政を極めたが、遂に沙丘に病んで歿した。この時趙高と李斯は遺詔を受け、僞つて太子扶蘇等を自殺せしめ、太子の弟を二世皇帝とし、專橫を極めたので群盜は諸方に起つた。就中沛の劉邦、吳の項梁等は勢最も强く、劉邦は樊噲と相知り、沛縣の役人蕭何・曹參と共に、縣令を殺して沛公に推され、四方に兵を募つた。又項羽は楚の大將項燕の後で、叔父項梁と久しく會稽に隱れてゐたが、偶々太守の謀叛に乘じて一擧に會稽城を奪ひ、忽ち十萬の兵を領した。次いで淮陽の謀士范增を迎へて軍師とし、その計によつて楚の懷王の後を樹てて義帝と稱し、項梁を武信君とし、以下諸將の官位を定めて江北に出づれば、楚の諸將等續々と來り從ふ。かくて大軍淮河に到つて豐西の兵を率ゐる劉邦と會し、又楚の大將陳嬰と合し、なほ淮陰の韓信を仕へさせた。この報に接した秦の丞相趙高は、急ぎ討伐の兵三十萬を遣はした。大軍は先づ魏を奪つて直に楚に迫つた。項梁は項羽・范增等と迎へ擊ち大捷したが、又急戰に出で項梁殺されて敗戰した。項羽は雍丘にあつてこれを聞き大に歎いたが、敗軍を集めて劉邦と會し、定陶に叔父を葬つて兵を陳留に留めた。時に趙は秦の軍に破られて援を楚に請うたので、義帝は項羽・范增等に兵を與へて趙に遣はした。項羽よく戰ひ、敵の本陣に迫り三日にして悉く破り、兵を澶南に屯した。これより先、趙高は二世皇帝に逸樂を勸め、李斯の一族を滅ぼし恣に政を紊つてゐたので、敗戰の將は兵を率ゐて項羽に歸した。かくて項羽の全軍彭城に都した義帝の許に還れば、劉邦亦南陽の諸郡を平げて凱旋する。この時項羽は百十餘將と兵五十萬を領し、劉邦は五十餘將と兵十萬を有つて、彼は豪壯、これは寬仁、共に下らざる勢にあり、義帝項羽を魯公とし劉邦を沛公とし、その他の諸將に封賞を行つたが、やがて二人に征秦の命を下し、先に咸陽に入つた者を以て王としようと約した。兩者各々兵を整へて東西より征途に上る。西に向つた劉邦は昌邑を取り、韓の賢相張良を抱へ、武關に進み關を攻めた。これを聞いた趙高は誅を免れんと皇帝を弑せしめ、扶蘇の子子嬰を樹てて三世としたが、子嬰は趙高を憎んで彼と一族を誅せしめ、嶢關を死守する。併し劉邦は張良の計を用ひて遂に關を破り、子嬰を降して軍を霸上に留め、法を三章に約して咸陽の民を撫した。一方項羽は沿道の諸城を攻め從へ、河北を平げて咸陽に入らんとし、先に降つた秦兵の異心あるを知つて、その二十萬を屠つた。劉邦はこれを聞いて項羽を怖れ、函谷關を固めさせたが及ばず、項羽關中に入つて鴻門に陣し、夜襲して劉邦を除かんと企てたが、項羽の近親項伯が友情を以て張良に內通して果さず、次いで鴻門の會に失はんとしたが、劉邦は張良・樊噲に護られ、無事に秦の玉璽を項羽に傳へた。かくて項羽は王位に卽いて西楚の覇王と稱し、子嬰の一族と官民併せて五千人を殺し、將士に與へる財を求めて秦王の墓を發き、諸侯を封賞して間もなく韓信は平陽より歸り、また代州を治め進んで趙を敗り更に燕を降した。これを聞いて項羽は范增等と十萬の兵を以て滎陽を圍んだが、反間の計によつて范增は憤死し、劉邦は成皐に遁れ趙に走り、又成皐を恢復して再び滎陽に君臨した。次いで韓信は急に齊を攻め、楚の援軍の將を斬つて齊王を補へ、漢王捕はれて未央宮に斬られ、なほ帝は全く後患を斷つたが、以後戚氏の愛に溺れてその子如意を太子に替へんとしたので、呂后は張良に賴り、商山の四皓を招いて、太子の輔佐とし、如意を趙王に封じて事なきを得た。その後張良は四皓と共に致仕して終南山に隱れ、帝は病んで歿し、太子皇位を嗣いで惠帝となり、劉邦の遺命を奉じて漢王を補へ、漢王が、簡勁で而も委曲をつくしてゐる。本書は七卷まで章峰の手に成り、彼が歿したので弟南徽庵が書き繼いだのであるが、結構・布置・文章まで殆ど變るところがなく、よく前作を生かしてゐる。

【參考】有朋堂文庫解說

〔笹野〕

通俗吳越軍談（つうぞくぐんだん）　讀本　十

て張良に内通して果さず、次いで鴻門の會に失はんとしたが、劉邦は張良・樊噲に護られ、無事に秦の玉璽を項羽に傳へた。かくて項羽は王位に卽いて西楚の覇王と稱し、子嬰の一族と官民併せて五千人を殺し、將士に與へる財を求めて秦王の墓を發き、諸侯を封賞して天下を定めたが、特に沛公を漢中に封じ、秦の三將を巴蜀の地に任じてその外塞とした。併し范增はなほ劉邦を害せんと圖り却つて遠ざけられた。又張良は沛公を漢中に送り獨り關中に戻つて項羽に遷都を勸め、韓信を說いて劉邦に從はしめ、自ら遊說して諸侯を楚に叛かせようと圖つた。項羽は范增が遣した三の計に從はず、强ひて義帝を遷して大江にこれを弑し、自ら彭城に都して覇を唱へた。この時韓信は咸陽を脫れ漢王に仕へて大元帥となり、嚴に軍規を定めて兵馬を調練した。やがて漢の甲兵四十五萬、劉邦を奉じて散關に據り、火攻水攻を以て漢王一路咸陽に入れば、張良來り見え、西魏王・河南王を說いて服さしめ、次いで韓信は殷王を攻めて降した。なほ漢王は韓信・張良の諫止を卻け、兵五十六萬を以て制楚の軍を起し、項羽が齊へ遠征の虛に彭城を衝いたが、大に睢水に敗れて三十萬の兵を失ひ、身を以て滎陽に遁れた。項羽はこの役に諸將を殺し、漢王の一族を捕へ、次いで齊を降して再び彭城に據り頻に滎陽を狙つた（以上第七卷まで）。こゝに於て張良は蕭何と謀つて咸陽にあつた韓信を招く。韓信乃ち項羽に戰書を送り車戰を以て項羽を滎陽城外に破る。そこで范增は平陽の西魏王を誘うて叛かせ、滎陽を挾擊しようと圖れば、韓信・曹參・樊噲等と兵十萬を以て向ひ、忽ち王を虜にし、楚の兵この虛に乘じて滎陽を攻めたが破れた。間もなく韓信は平陽より歸り、また代州を治め進んで趙を敗り更に燕を降した。これを聞いて項羽は范增等と十萬の兵を以て滎陽を圍んだが、反間の計によつて范增は憤死し、劉邦は成皐に遁れ趙に走り、又成皐を恢復して再び滎陽に君臨した。次いで韓信は急に齊を攻め、楚の援軍の將を斬つて齊王を捕へ、漢王に請うて自ら齊王となつた。そこで項羽は韓信を招かんとしたが果さず、大軍を以て滎陽を攻め、弩弓を伏せて劉邦を射たが、韓信が成皐に來援したのを知り退いて廣武に陣した。韓信は滎陽に入つて漢の兵を十隊に分ち、項羽の軍を廣武山の險に誘つて大に破り、項羽等を烹んとしたので、劉邦は張良に從つて項羽と鴻溝の和をなし一族を救つた。併し漢王は直に固陵に據り約に背いたので、項羽は三十萬の精兵を以て一戰に固陵を破れば、劉邦は成皐に遁れ、張良は楚の糧食を燒いて項羽を彭城に退かしめた。次いで張良は韓信等を封賞して迎へ、劉邦は諸侯に檄を飛ばし、帶甲百十二萬、韓信を帥として楚を殲滅しようとする。項羽は急ぎ吳楚の間に兵を募つたが概ね從はず、項伯等の諸將と固く彭城を守つた。然るに項羽は僞られて五十萬の兵を率ゐ沛郡に出で、韓信の九里山十面埋伏の陣を以て破られ、遂に垓下の一戰に潰滅し烏江で自刎した。かくて劉邦は途中魯を鎭めて洛陽に戻り、帝位に卽いて呂氏を皇后、劉盈を太子とし、韓信を楚に改封し、その他諸侯を封賞して天下を統べた。次いで咸陽に都を遷し、楚の降將を索めたので、項伯等は直に來り仕へた。又偶々韓王姬、匈奴の冒頓と結んで亂をなしたので、帝自らこれを伐ち公主を與へて冒頓と和した。その後韓信は謀叛を企てたが呂后に捕はれて未央宮に斬られ、なほ帝は全く後患を斷つたが、以後戚氏の愛に溺れてその子如意を太子に替へんとしたので、呂后は張良に賴り、商山の四皓を招いて、太子の輔佐とし、如意を趙王に封じて事なきを得た。その後張良は四皓と共に致仕して終南山に隱れ、帝は病んで歿し、太子皇位を嗣いで惠帝となり、劉邦を高祖と號した。やがて蕭何歿するや曹參を丞相に擧げ、樊噲等を武將として高祖の遺訓に背かず、永く漢の社稷を保つた。

【構想】當時、「水滸傳」「三國志」等の支那小說の飜譯が流行したが、これは一部の書の飜譯または飜案ではない。秦末より漢初までの時代を、作者が廣く諸史小說を讀んで得た知識と想像をもつて書いたものである。事件を歷史的に發展させ、それに關係ある傳記・逸話・考證・議論等を介在させて、叙述の單調を避けてゐる。殺伐壯快なところや、悲慘哀切なところや、讀物としての波瀾緩急を具備してゐるが、やゝ史實になづみ編年體を固持した點は、創作としての用意が足りなかつた。【史的地位】「通俗三國志」（別項）と並んで古來支那軍談物の雙璧とされた。張良・韓信の奇謀、さては鴻門の會、垓下の別離等、普く人の知るところで、後の讀本・軍談の類に多くの話柄を提供してゐる。殊に曲亭馬琴の「繪本漢楚軍談」（十六卷、文政十二年―天保三年）は最も著名なものである。【價値】主要人物 項羽・劉邦・范增・張良・韓信・項伯等の性格・行爲・劇的境遇がよく現はれ、事態を變轉させるところに興味がある。「順レ天者昌、逆レ天者亡」といふ作者の宿命觀による智と力との爭ひの內に、支那人の性質や習俗等が窺はれて面白い。文章は漢文の讀み下しで、一見他奇なきが如くであるが、簡勁で而も委曲をつくしてゐる。本書は七卷まで章峰の手に成り、彼が歿したので弟南徽庵が書き繼いだのであるが、結構・布置・文章まで殆ど變るところがなく、よく前作を生かしてゐる。

【參考】有朋堂文庫解說　〔笹野〕

通俗吳越軍談（つうぞくごえつぐんだん）　讀本　十八卷　【解說】凡例に「通俗列國志後篇十八卷爲吳越軍談」とあり、各卷首に「通俗列國志吳越軍談」とある。支那の「春秋列國志」を通俗的に書き改めたもの。「春秋列國志」は、その後半を占める。「春秋列國志」が先づ作られ、更にその前半をなす「西周演義」が追加され、而もこの兩者が追加以前の書名で呼ばれたものらしい。「通俗吳越軍談」の作者もこれに倣つて、先づその後半部の「春秋列國志」を譯して、「通俗列國志後篇」として出版し、次いで前半の「西周演義」を譯し、寶永二年序を記して刊行したらしい。後篇凡例に、「前編十九卷號武王軍談後篇十八卷爲吳越軍談」とある。なほこの書を「吳越軍談」といふは、吳越の軍談がその一部に過ぎずして內容に相應しない。作者に就いては、凡例の末に、「元祿癸未（十六）季春望攝陽池田邑士淸地以立（省柏）」とあるが、その何人かを詳かにせず。又刊年も不明である。【諸本】帝國文庫所收。

【梗概】秦の哀公は、闔寶の會に十七諸侯を集め、己が制覇の志を延べんとしたが、楚の麗王の忠臣伍子胥は秦に乘ぜしめず、却つて楚を列國に重からしめた。然るに麗王の後平王立つに及んで、子胥は讒に遭ひ、吳の公子姬光の下に走つた。姬光は子胥を得て更に孫武を郢珈山より迎へ、吳王潦を廢して王位に卽くや、先づ楚を伐ちて子胥の怨を報じ、次いで秦を

壓し齊を降し、忽ち中國に覇を稱した。吳王闔閭がこれである。かくて勢に驕つた闔閭は、間もなく智將范蠡を擁した越王勾踐のために携李の戰に敗北せねばならなかつた。その子夫差、子胥と共に兵を養ふこと三年、夫淑山に大に越を破つて、先王の恥を雪いだが、漸く慢じて姑蘇臺を築き美姫西施を携へて逸樂に耽り、子胥はこれを諫止して聽かれず、却つて佞臣伯嚭に計られて自刄した。勾踐は嚮の敗戰に會稽山に窮して、范蠡と共に囚はれたが、三年の後、遁れ歸つて臥薪嘗膽報復を圖り、吳の亂るゝに及び大擧してこれを擊ち、夫差を殺して會稽の恥を雪いだ。併し業成るや范蠡は勾踐の人と爲りに安んぜず、江湖に扁舟を浮べて去つた。北方晉の智伯は趙無恤を晉陽城に水攻めしたが、韓虎・魏駒の兩人に計られて敗れ、晉は韓・魏・趙によつて三分された。智伯の臣豫讓が趙王を刺さんとした事蹟は、この時の事である。一方齊は、又田和に國を奪はれて田齊となつた。齊の孫臏は初め魏に迎へられたが、魏の龐涓に妬まれて齊に仕へ、後龐涓の軍と太梁に決戰すること三度、遂に馬頭山に龐涓を戰死せしめ、自らは又山に復つた。こゝに秦は漸次强大となり、孝公に至つて商鞅を魏より迎へて强國の術を聽き、法令を改めてより治世十年、制覇の基を定めた。こゝに於て趙の蘇秦は燕・韓・魏・齊・楚を合從して秦に當らしめんと、六龍の會に六國の相印を帶びたが、その友張儀が秦に仕へ、六國に連衡の策を進めたので從約は忽ち解けた。この時に當つて六國に活躍した人材は多かつたが、秦に迎へられて後、讒に遭うて歸つた齊の名相國孟嘗君や、燕・齊の數度の爭に功を成した燕の勇將樂毅、齊の田單、又寶和氏の璧を秦より護つた智勇や、廉頗將軍に許した寛仁等に名を得た趙の藺相如や、さては孟嘗君と俱に四公子と諷はれた趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君等が最も著れた。魏の名臣范睢が丞相須賈に陷れられて秦に逃れ、昭襄王に遠交近攻の策を獻じてからは、秦と六國とは愈々正面衝突となつた。秦王莊襄、趙を討てば、平原君は楚魏に援を求めて大に秦を破り、魏を伐てば、信陵君は楚・趙・齊・韓の聯合軍を以てこれに快捷した。然るに莊襄の子政王位に卽くや、楚の春申君、列國を合從して秦を壽陵城に攻めて大敗し、却つて秦の勢を加へしめた。これに乘じた政は、楚人李斯の丞相となるに及んで、遂に列國を滅し、覇業を遂げて始皇帝と稱したのであつた。

【附記】嘉永六年池田東籬主人、これを補正し、圖繪を挿みて「繪本吳越軍談」と題し、三十卷として刊行した。帝國文庫・有朋堂文庫に收められてゐる。〔笹野〕

通俗三國志（つうぞくさんごくし） 讀本 五十一卷

【作者】文山 【名稱】支那小說「三國志」を通俗化した意である。【刊行】元祿己巳孟夏の序がある。元祿二年から五年に至るものであるが、「日本小說年表」には天明五年とある。

【梗概】後漢末の大亂に際して蜂起した群雄の中、魏の曹操、吳の孫堅、蜀の劉備の三者が最も著れた。初め曹操父子が帝室を擁して權勢を恣にし、孫堅父子が江東に大勢力を扶殖してゐたに對し、劉備は獨り勢運未だ到らざる概があつた。彼がこの二者に抗して建國の大業を遂げ得たのは、實に諸葛孔明の補任に依つてである。曹操は天下平定を志して先づ吳に戰を挑んだ。この時孔明は吳將周瑜に計を授けて、赤壁の一戰に魏の大軍を粉碎せしめ、曹操の雄圖を挫くとともに、吳を牽制して巧に蜀の威力を伸ばしたのであつた。かくて吳と蜀は一時手を握つたが、素より豺狼の二者永く結ばるべくもなく、やがて劉備は僻遠の地西蜀に入つて、魏・吳二强の鋭鋒を避け、孔明は南蠻を征して蜀の發展を邊域に求めた。後孔明は縱橫の奇策に屢々魏軍を惱まし中原恢復を企てたが、未だ志成らざるに魏將司馬仲達と五丈原に會戰して陣中に病歿した。これを期として蜀は次第に衰へて魏に降り、魏も亦仲達の子炎の叛逆に抗し得ず、炎は國を奪つて晉と稱し、遂に吳をも降して天下統一の覇業を成就したのであつた。

【解說】後漢末、支那全土に亙る大亂を舞臺として群雄蜂起の狀況を叙するに、爭鬪の壯烈と策謀の妙を躍動させて壯快な物語を作なしてゐる。もと羅貫中の「三國志演義」に採り、正史たる陳壽の「三國志」を參考として取捨を加へ、片假名交りに作りかへたもの、これが如何に讀者に歡迎されたかといふことは、支那小說飜譯或は飜案の流行と相俟つて、當時の書肆がこの書と關係のない西晉時代の軍談書に「續三國志」「續々三國志」の名を冠し、更に東晉のそれに「續後三國志後篇」と題して恰もこれが續編たることを標榜した事實によつても十分察せられる。又天保七年池田東籬亭は二世載斗の畫を挿んで「繪本通俗三國志」七十四卷を刊行した。〔笹野〕

通俗小說（つうぞくせうせつ） 文學論 【名義】藝術小說に對する語。高級な藝術小說は、多少文學的敎養のあるものでなければ解し得ない點があるが、敎養の低い者にも理解の出來るやうに、通俗的に書いたものが通俗小說である。日本の小說といふ語は、英語の Novel 及び Romance の二語を包括したものであるが、通俗小說は、populer Novel or story に相當するものである。【解說】通俗小說は、內容も主題も難かしい問題を選ぶことなく、思想とか、社會問題とか、性格描寫とかいつたやうなものには何れかといへば力を入れず、寧ろ筋の面白さ、事件の變化などに中心を置くものである。そして殆ど全部が現代物であるといつてよい。從つて家庭小說（別項）の如きは當然この中に含まるべきものである。又今日、一般に新聞小說と通俗小說とは同一のものやうに考へられてゐるが、それは新聞小說の多くが、藝術的價値といふことよりは、讀者の興味を惹くといふ目的の下に書かれるから、大抵の作品が通俗小說でしかあり得ないのであつて、新聞小說必ずしも通俗小說とは言へない。兎に角、通俗小說の根本的な特色は、內容・形式共に平易にして、誰にでも容易に了解されるといふところにある。併し近來所謂大衆文學（別項）の擡頭と共に、漸くその地位を高められて來た。明治期に於ける通俗小說として主なるものは、德富蘆花の「不如歸」（別項）、尾崎紅葉の「金色夜叉」（別項）、菊池幽芳の「己が罪」（別項）などがあり、大正期では、島田淸次郎の「地上」（別項）、賀川豐彥の「死線を越えて」（別項）等が代表的のものである。昭和に入つてからは、中里介山の「大菩薩峠」（別項）及び菊池寬・中村武羅夫・加藤武雄・三上於菟吉の長篇物等が擧げられる。〔宮島〕

通俗巫山夢（つうぞくふざんのゆめ） 讀本 五卷

【作者】十返舍一九 【挿畫】松高齋春亭 【名稱】支那の巫山神女が、雲となり雨となりて、楚の襄王に契つた故事を假り、この夢物語の

孝公に至つて商鞅を魏より迎へて強國の術を聽き、法令を改めてより治世十年、制覇の基を定めた。こゝに於て趙の蘇秦は燕・韓・魏・齊・楚を合從して秦に當らしめんと、六龍の會に六國の相印を帶びたが、その友張儀が秦に仕へ、六國に連衡の策を進めたので從約は忽ち解けた。この時に當つて六國に活躍した人材は多かつたが、秦に迎へられて後、讒に遭うて歸つた齊の名相國孟嘗君や、燕・齊の數度の爭に功を成した燕の勇將樂毅、齊の田單、

るが、「日本小說年表」には天明五年とある。

【梗概】後漢末の大亂に際して蜂起した群雄の中、魏の曹操、吳の孫堅、蜀の劉備の三者が最も著れた。初め曹操父子が帝室を擁して權勢を恣にし、孫堅父子が江東に大勢力を扶殖してゐたに對し、劉備は獨り勢運未だ到らざる概があつた。彼がこの二者に抗して建國の大業を遂げ得たのは、實に諸葛孔明の補任に依つてである。曹操は天下平定を志して先づ吳に戰を挑んだ。この時孔明は吳將周瑜

に續三國志」續々三國志」の名を冠し、更に東晉のそれに「續後三國志後篇」と題して恰もこれが續編たることを標榜した事實によつても十分察せられる。又天保七年池田東籬亭は二世載斗の畫を挿んで「繪本通俗三國志」七十四卷を刊行した。〔笹野〕

通俗小說（つうぞくせうせつ）　文學論　【名義】藝術小說に對する語。高級な藝術小說は、多少文學的教養のあるものでなければ解し得ない點があるが、教養の低い者にも理解の出來るやうに、通俗的に書いたものが通俗小說であ

歸」（別項）、尾崎紅葉の「金色夜叉」（別項）、菊池幽芳の「己が罪」（別項）などがあり、大正期では、島田清次郎の「地上」（別項）、賀川豐彦の「死線を越えて」（別項）等が代表的のものである。昭和に入つてからは、中里介山の「大菩薩峠」（別項）及び菊池寬・中村武羅夫・加藤武雄・三上於菟吉の長篇物等が擧げられる。〔宮島〕

通俗巫山夢（つうぞくふざんのゆめ）　讀本　五卷

【作者】十返舍一九　【挿畫】松高齋春亭　【名稱】支那の巫山神女が、雲となり雨となりて、楚の襄王に契つた故事を假り、この夢物語の

名とした。【刊行】文化十二年　【諸本】一九全集（續帝國文庫）・十返舍一九集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】京の豪商豐島屋陰兵衞の子陽太郎は、島原の遊女桔梗屋若紫に現を抜かし、遂に勘當の身となつたが、家出の折着換へさせられた紙衣が悉く證文となつて五萬兩の大金を得たので、豫て父の信仰する藤の森稻荷明神から夢に誡められた事も忘れて、數人の遊び仲間と共に桔梗屋に赴き、先づ若紫を身請して豪遊を極めた後、物々しい道中よろしく江戸に練り込み、若紫に吉原の張りを持たせんとして年百兩の仕着せ三年の契約でこれを三浦屋に預けた。然るに三年に滿たずして若紫は吉原の張りを會得した樣子なので、陽太郎は京の一行に若紫の兄と稱する甚次郎兵衞と張りで名を賣つてゐた春日野の二人を更に加へて、江戸を後に長崎の衣裳を求めて再び遊行の旅に上つた。かくて長崎に到つた陽太郎は此處でも、桁を外した遊興と痴態の限りを盡し、やがて長崎の衣裳の綺羅を飾つた若紫・春日野を左右の花と携へ、數十人の取卷連を前後にして、大阪新町の揚屋よし田屋に繰り込んで小判の雨を降らしたが、勘定となつて百兩の足を出し、さしも豪華を極めた彼が酒色の歡樂も遂に此處に終つた。若紫は百兩のかたに二度の勤めをし、陽太郎は宿六の身となつて艱苦を嘗め、窮餘の一策を案じたが、これも稻荷明神に懲らされて初めて長い夢を醒まし、前非を悔いて神慮を畏み、後、父に許されて家業を勵んだといふ。

【構想】明和頃の流行唄に、京の娼妓に吉原の張りを持たせ、長崎の衣裳を着せて、大阪の揚屋で遊ぶ夢を見て騷いだといふ事に據り、

八文字自笑に倣つて書いたと、作者自ら言つてゐる。流石に滑稽本の作者だけに、滑稽を專らとし、なほ邪惡の道に奔らざらしめんとする勸善の作意に出づるものである。〔笹野〕

津打九平次（つうちくへいぢ）　脚本作者　【本名】未詳　【生歿】未詳。但し、寬延・寶曆の頃歿したか。【閱歷】初代津打治兵衞（別項）の門に出て、江戸歌舞伎のために活躍し、元祿の末から寬延三年に及ぶ四十年間の長い立作者生活を送つた。晚年に及んで森田座に出たが、それまでは殆ど市村座に關係してゐるので、同座との特殊な交渉があつたかと察せられる。

【作品・作風】寶永元年十一月市村座「女荒岡錦手綱」が彼の初作かと思はれるが、以後、寶永年代に、藤本平左衞門・津打半右衞門等が數次合作者に發見される外、多くは彼の獨作であつた。併し享保年代に入るや、津打治兵衞（二代か）を主な相手として合作期に入つた。當時の江戸脚本の習ひとして、脚色內容よりも、各場面の展開そのものに興味を抱く時代であつただけに、世界の範圍は極く限られてゐた。その方面から分類して見ると、隅田川物で、「早咲隅田川」（寶永二年三月、市村座）や「愛兄隅田川」（寶永五年同座）「姿視隅田川」（元文五年二月市村座、治兵衞・斗文と合作）等が大當りであつた。曾我物は「大屋形世繼曾我」（寶永三年五月、市村座）を初め最も多く、「名山累曾我」（享保二十年正月中村座、治兵衞と合作）は累を加へ、「春曙埖曾我」（寬保三年正月市村座、治兵衞と合作）は鳴神を加へた。「初髮通曾我」（元文四年正月市村座、斗文と合作）は一代の傑作と思はれ、二月に二番目高尾、三月に三番目助六、七月四番目累と加はり、十月迄興行を續けた。外に伊豆源氏の「傾城伊豆日記」（寶永七年市村

座、津打半右衞門と合作）、四天王と浦和の「清和源氏浦島七世孫」（享保十三年正月市村座、治兵衞と合作）、藤戸源氏と累の「大角力藤戸源氏」（享保十六年市村座、治兵衞と合作）などがある。「大鳥毛五十四郡」（延享三年森田座、治兵衞と合作、伊達）や「粟島譜嫁入雛形」（寬延二年森田座、粟島）等もあつたが、要するに世界は、表面を時代で選み、內に世話を含めた作柄である。一場面としての脚色を主とし、刹那的な感情の享樂を目的とした當時の脚色の傾向としては、最も妥當な態度であつたと思はれる。二代津打治兵衞は彼の指導にまつ所が多かつたと察せられる。

【參考】劇代集　櫻田治助　〔守隨〕

津打治兵衞（つうちぢへい）　脚本作者　【初代】〔別名〕津山治兵衞　〔閱歷〕上方役者津山治兵衞として親仁方を勤めた傍ら狂言を作つてゐたものが、專門作者に轉じたと思はれる。かくて元祿初年の頃から作者名は津打を名乘るやうになつた。主として大阪の立者岩井半四郎のために、その一座に書き卸してゐた。元祿十三年冬頃、江戸に下つたらしく、元祿の末年に歿したらしい。享年未詳。〔作品〕「日本阿闍世太子」（元祿七年大阪岩井座）、「七星如意輪觀音開帳」（元祿八年、同座）、「けいせい八丈島」（元祿十二年三月、同座）の如きは著名な作である。概して歌舞伎脚本からと淨瑠璃からとを問はず、改作物が多く、太刀打を好んだ。構想の妙味は乏しいが、筋の運びが比較的單純である事は、却つて大阪歌舞伎には歡迎されたものと思ふ。

【二代】〔別名〕太鼓堂・泥築・鈍通　〔俳號〕英子　〔歿年〕寶曆十年正月二十日歿す。享年七十八（又は八十二）。〔法名〕勇健院英子日雄　〔閱

歷〕初代の子と傳へられる。一說に元祿十六年江戸に下り、翌年名を改めたといふ。元祿末年から寶曆年中に至る五十餘年間、元文三・四年の交、一時大阪に上つた外、殆ど全部を江戸に作者生活を送つたので、江戸歌舞伎脚本の轉向期に當り、脚色を主とすべき態度を指示し、卽ち江戸狂言の完成に努力する所多く、江戸作者中興の開山といはれた。作者として打つて出た頃は、才牛が刺されて二代團十郎が發憤の期に際し、これを擁立する者に生島新五郎、山中平九郎・荻野八重桐等があつた。而して治兵衞が、その識見に於て二代團十郎を抑へた逸話は有名である。晚年に及んで、禪に志し、龜井戸の瑞龜山大海和尙に參じた。「鈍通禪學咄」五卷は、彼の宗教生活の產物である。長い作者生活を送つたがために津打の門葉は頗る多く逸才をも生んだ。津打九平次（別項）・津打半右衞門（助六の狂言、花館愛護櫻の作者）・津打又左衞門等は古參で、初代からの關係もあるらしく、壯年時代の彼を輔佐した人々である。その他、津打菅祈・津打園次・津打三郎次等は寬延・寶曆の頃活躍した。三代治兵衞は、津打傳十郎に讓つた。〔作品〕合作が多い。總數は百有餘篇を算へるが、ここには當り作數種を擧げておく。○けいせい吉長染（寶永二年三月、山村座、丹波國子安地藏に清玄）○賴政五葉松（寶永四年、山村座、賴政）○傾城顧本尊（別項）○一心二河白道（寶永七年三月、中村座、清玄と丹波與作）○式例和曾我（享保元年正月、中村座、助六と曾我）○寶曾我女護島臺（元文三年正月、中村座、女護島とお七）○瑞樹太平記（元文四年十一月、市村座、太平記に暫）○姿視隅田川（元文五年二月、市村座、隅田川）○若木の梅平清盛（寬延三年十一月、中村座、爲朝と清盛）

○淡島榮花聟（寶暦三年五月、市村座、清玄と淡島）○惶弓勢源氏（寶暦五年十一月、中村座、女暫と不動）等。〔作風〕題材を新たに研究する態度を執らなかつた事は、初代の遺風とも見られるが、筋に餘り興味を持たぬ江戸歌舞伎としては、この點はさして問題とはならなかつた。從來の題材を殆ど無批判に活用したことが、寧ろ當年の江戸には歡迎されたかに見受けられた。ために時代と世話の混入等について、後世からは甚だしく非難された。併し彼の脚色の基本的態度の一として、役者を知つて、これにつく配役を案ずべきを主張してゐるので、當り作は多くあつたが、前の如き非難も生れたのだと思ふ。後世「一心二河白道」を以て、從來の五番續を四番續に改めた最初であると傳へる。これを直ちに認める譯にはいかぬが、彼によつて江戸脚本が四番續を定式とするやうになつたのは事實である。併し又、江戸の續狂言が續狂言としての形式を破壞し始めた責も彼にあると思はれる。尤もそれだけに、彼の作風が江戸氣質と一致したとも言ひ得るであらう。

【三代】〔俳號〕英子〔別名〕鉢通與三兵衞。一河齋など。〔歿年〕明和八年四月〔閲歴〕初代津打傳十郎であつて、寶暦十二年市村座の顔見世に治兵衞を繼いだ。二代との關係は詳かでないが、晩年の門弟であらう。明和二年、鉢通與三兵衞と改め、同六年秋退座して作道に筆を斷つた。明和年中は門田候兵衞（別項）の作に、スケとして大分關與してゐるが、兩者の交渉は詳かでない。彼も二代に連れて禪に志し、「心の鬼」五卷などがあるが、或はかゝる生活が、彼をして歌舞伎生活から遠ざからしめたかとも思はれる。〔作品〕津打一流の作風が見えたが、淨瑠璃に於ても名篇を殘して二代瀨川菊之丞はために、大に名を謳はれた。（一）脚本。封文榮曾我（寶暦十三年正月、市村座。曾我とお七）○星合言葉東山榮（寶暦十三年七月、市村座。不破名古屋と忠臣藏）○江戸染曾我雛形（明和元年春、市村座。曾我と淺間と助六）○全盛末廣源氏（明和五年十一月、中村座。暫と熊坂）○曾我紬愛護若松（明和六年正月、中村座。曾我と清玄）○念力楪葉鏡（明和六年七月、中村座。信太と梅川と累）等。（二）淨瑠璃長唄等。常磐津節では、「髮梳千鳥曙」と「帶引胡蝶昏」（寶暦十三年二月、市村座、封文榮曾我に菊之丞と羽左衞門）を初め數多い。明和四・五年の中村座顔見世に菊之丞の業平東下り、田舍娘、菊相撲、石橋の當りは最も評判であつた。めりやすをも屢々書いた。「萩の風」（明和六年七月、中村座、念力楪葉鏡に團十郎の男無間）など著名である。

【四代】〔閲歴〕本名未詳。但し文政十一年十一月、河原崎座「魁源氏騎士」に襲名して、立作者となつてゐる。或は名目のみを繼いだかとも察せられる。天保六年頓通與三兵衞の名が見えるが、この人物の改名か。また同八年以後には、再び津打治兵衞の名が見られる。復名と見るべきか、他に更に襲名者がゐたか詳細は明かでない。

【參考】古今役者大全○役者全書八文字舍自笑○紙屑籠三升屋二三治○戲場年表關根只誠○近世日本演劇史伊原敏郎〔守隨〕

通一聲女暫（つうのひとこゑをんなのしばらく）　黄表紙

三册　十五丁十八圖〔作者〕芝全交〔畫工〕重政〔名稱〕指切の立引をさばく遊女の口上を鶴の一聲の語呂に合せ、女暫と鶴によつて中村座と版元とを暗示する。〔刊行〕天明元年鶴屋版〔諸本〕續帝國文庫第三十四卷・黄表紙傑作集（蘇武利三郎編）・黄表紙名作集（近代日本文學大系）所收〔題材〕江口西行の傳說、茨木童子の傳說。

通一聲女暫

【梗概】うつのみやと云ふ有德な酒屋の息子里次郎は、大磯の富士見屋の遊女江口の許へ通ふが、江口が靡かぬ故、江口は指を切らせて仲の町で受取る事にする。江口は里次郎の要求に困じて戀人西行に相談する。初葉屋の姫の助は、苦境に立つ江口・西行を救ふために、糠粉の指を先方へ渡し、それが僞物だとわかると、自ら女暫まがひの口上で里次郎方をへこます。自分の起請文と手紙を落して行つた客を捕へようとして、江口は腕を斬取られたが、遊女おさんが腕を取戻す。江口は普賢菩薩の化身で、遊女買を濟度するために遊女となつたとわかり、西行は發心して西行法師となる。

【構想】本書は「菊壽草」（別項）が、華やか過ぎて、今少し實の入るやうにありたいと評して、若女形の卷軸に据ゑた作である。茨木傳說を遊里に持ち來つた事は「四天王大通仕立」（天明二年版、是和齋作）の構想に等しく、法師と遊女との關係は、「當世大通佛買帳」（天明元年版、芝全交作）に近い。戀の立引に興味の中心を置いて、洒落本的の色彩を濃厚に盛り、實在の人物を混じ、更に安永九年正月、中村座興行「初紋日曲會我」を暗示してゐる。天明元年、中村座顔見世狂言「四天王宿直着綿」は、本書にヒントを得、「四天王大通仕立」は「四天王宿直着綿」に依つてゐるのではなからうか。【史的地位】黄表紙が從來の黑本の世界から、「金々先生榮花夢」（別項）に依つて、一躍、新世界を打開した內部的要素として、洒落本的精神の挿入が考へられる。この傾向は、安永の終り頃になつて特に明瞭となる。この意味で、「通人怠眞似」（安永七年版）、「通鳥寢子の美女」（安永八年版、窪俊滿作）、「通人三極志」（安永九年版、春旭畫）、「藝者呼子鳥」（安永九年版、松泉堂作）等は、本書に先行し、「當世大通佛買帳」、「吉原傳授仕習鏡」（天明元年版、芝全交作）、「四天王大通仕立」、「遊客古事附太平記」（天明元年版、紫蘭作）等は、本書と同年出版である。更にこの種の黄表紙、「通春歲旦開」（天明三年版、杜芳作）、「廓籠費字盡」（天明三年版、春町作）、「通人いろはたんか」（天明三年版、芝全交作）、「吉原大通會」（天明四年版、春町作）、「間似合嘘言曾我」（天明五年版、歸橋作）、「江戸生鼈氣樺燒」（別項）、「三筋縒容氣植田」（別項）等に於て一層遊里と

接近する。

無用而二分狂言（つかひはたしてにぶきやうげん）　黄表紙

二册　十丁十二圖〔作者〕京傳門人大榮山人（曲亭馬琴）〔畫工〕歌川豐國〔名稱〕廿日餘四十兩（はつかあまりにじふやう）と角書がある。「梅川冥土の飛脚」（近松門左衞門作）の、「二十日餘りに四十兩〔小池〕十郎をたづねまはり、小猿と猪の早太を醉はせる。小猿は炮烙を叩いて碎く。娘道成寺まがひとなり、鷺鷥は鳥の姿、小猿は鵶の形で互に爭ふ。以上は馬琴の口の利き過ぎを惡んで、友人連が一狂言書いたのである。黑衣を着て附髭色をしたのは作者の大榮山人厚皮のせてゐる。京師壬生、寶幢寺の地藏堂で毎年三月に行はれる念佛踊は、鰐口を敲いて拍子を取り、それに合せて無言で色々の所作をする。この踊の稱取の小唄は、寛政の初、京攝の間に流行したと「三養雜記」は記してゐる。かゝる流行物を取り込んだ事と、場所が作者塚原靖、幼名は直太郎〔別號〕蓼州・縱死・しかま〔生歿〕嘉永元年三月一日、江戸市ケ谷合羽坂上（市ケ谷仲町）に生れ、大正六年七月五日歿す。享年七十。〔閲歴〕家は代々幕臣で鐵砲組の與力であつた。元治元年京都に赴き、二條城の定番を勤めたが、間もなく辭して

初代津打傳十郎であつて、寶暦十二年市村座の顔見世に治兵衞を繼いだ。二代との關係は詳かでないが、晩年の門弟であらう。明和二年、鈍通與三兵衞と改め、同六年秋退座して作道に筆を斷つた。明和年中は門田候兵衞（別項）の作に、スケとして大分關與してゐるが、兩者の交渉は詳かでない。彼も二代に連れて禪に志し、「心の鬼」五卷などがあるが、或はかゝる生活が、彼をして歌舞伎生活から遠ざからしめたかとも思はれる。〔作品〕津打一詳細は明かでない。

【參考】古今役者大全○役者全書八文字舍自笑○紙屑籠三升屋二三治○戲場年表關根只誠○近世日本演劇史伊原敏郎　〔守隨〕

通一聲女暫（つうのひとこゑをんなのしばらく）　黃表紙　三册　十五丁十八圖　【作者】芝全交　【畫工】重政　【名稱】指切の立引をさばく遊女の口上を鶴の一聲の語呂に合せ、女暫と鶴によつて中村座と版元とを暗示する。【刊行】天明元年鶴屋版　【諸本】續帝國文庫第三十四卷・

たとわかり、西行は發心して西行法師となる。

【構想】本書は「菊壽草」（別項）が、華やか過ぎて、今少し實の入るやうにありたいと評して、若女形の卷軸に据ゑた作である。茨木傳說を遊里に持ち來つた事は「四天王大通仕立」（天明二年版、是和齋作）の構想に等しく、法師と遊女との關係は、「當世大通佛買帳」（天明元年版、芝全交作）に近い。戀の立引に興味の中心を置い

通仕立」、「遊客古事附太平記」（天明元年版、紫蘭作）等は、本書と同年出版である。更にこの種の黃表紙、「通春歲旦開」（天明三年版、杜芳作）、「廓慧費字盡」（天明三年版、春町作）、「通人いろはたんか」（天明三年版、芝全交作）、「吉原大通會」（天明四年版、春町作）、「間似合嘘言會我」（天明五年版、歸橋作）、「江戸生艷氣樺燒」（別項）、「三筋緯容氣楠田」（別項）等に於て一層遊里と

接近する。

盡用而二分狂言（つかひはたしてにぶきやうげん）　黃表紙　二册　十丁十二圖　【作者】京傳門人大榮山人（岫亭馬琴）　【畫工】歌川豐國　【名稱】廿日餘四十兩（はつかあまりにじふりやう）と角書がある。「忠兵衞梅川冥土の飛脚」（近松門左衞門作）の、「二十日餘りに四十兩遣ひ果して二分殘る」の語呂で、當時流行した壬生狂言を逆に捻つた外題である。【刊行】寛政三年。天保十年歌川國芳の畫にて再版。【諸本】大通世界卷二（幸堂得知編）・黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙名作集（關根默庵編）・黃表紙傑作集（蘇武編）・黃表紙集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】馬琴は、俳道の上達を祈らんと、深川八幡宮の拜殿で通夜する。その夜の丑三つ頃に、堂に掲げた繪馬がぬけて出る。鵺は盜賊壬生の小猿になり、鴛鴦は十六七の女となり、その他思ひ〳〵にぬけ出す。繪馬が脫け出たので物を言はず、黑衣を着た者が側で譯を言ふ。潮汲をする鴛鴦に曾我十郎の繪馬がいちやつく。座頭の繪馬は壬生の小猿に金と酒とを奪はれ、猪の早太は鵺を搜して空鐵砲を擊つ。鴛鴦に小猿が横戀慕して鴛鴦を縛る。信長記の雪姫を思ひ出して足で鼠を畫くと鼠が繩を喰ひ切る。荒獅子男之助が現はれる。鴛鴦は十郎をたづねまはり、小猿と猪の早太を醉はせる。小猿は炮烙を叩いて碎く。娘道成寺まがひとなり、鴛鴦は鳥の姿、小猿は鵺の形で互に爭ふ。以上は馬琴の口の利き過ぎを惡んで、友人連が一狂言書いたのである。黑衣を着て附聲色をしたのは作者の大榮山人厚皮の面人である。馬琴は勸善懲惡の誡を悟り、無用の舌を動かさず俳道に精進した。

盡用而二分狂言

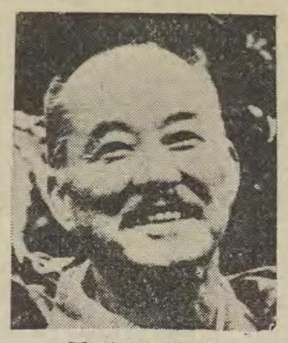
【解說】寛政二年、永代寺で辨財天の開帳の時、見世物に壬生狂言がかゝり、大に喝采を博した。後、兩國の見世物にも出で、幇間は酒席でこれを眞似て興を添へる程であつた。作者はこれに、桶取・座頭の川渡・紅葉狩・炮烙わり、その他の壬生狂言に、歌舞伎の先代萩・曾我・信長記・道成寺等を交ぜて複雜化し、滑稽を加へて前後に俳人馬琴の肖像を揭げて初舞臺名弘めの意味を持たせた趣向である。本書の刊行前年には、滑稽本「壬生狂言啞口舌」（寛政二年版、華の坊作）が出てゐ、本書と同年には「直讀見臺萩」（なほしとよみけんだいはぎ）（寛政三年版、芝全交作）、「名代振袖」（寛政三年版、內新好作）、「壬生踊戲作面目」（寛政三年版、櫻川慈悲成作）等が出版されてゐる。「直讀見臺萩」は面を捨てて、壬生狂言を歌舞伎の世界で筋を通し、「名代振袖」は、壬生狂言の由來に趣向の捻りを見せてゐる。京師壬生、寶幢寺の地藏堂で毎年三月に行はれる念佛踊は、鰐口を敲いて拍子を取り、それに合せて無言で色々の所作をする。この踊の桶取の小唄は、寛政の初、京攝の間に流行したと「三養雜記」は記してゐる。かゝる流行物を取り込んだ事と、場所が作者の出生地であるのに、處女作としての面白味がある。戲作に於ける馬琴の天地はこの時は全く未知數であるが、俳諧方面には多少の自信が持てたらしく、これを誇張して一角（かど）の宗匠に自己を祀り上げ、自己宣傳の根據としてゐる。後、讀本方面で展開した勸懲主義が、本書の末尾に仄かに現れてゐる。地口や洒落を頻に用ひてゐるが拙い。實在の人物に據つてゐると思はれる節も見える。本書の序文に京傳門人大榮山人誌とあるのは、この頃の京傳・馬琴の關係を語るものであらう。繪は、壬生狂言の舞臺面に似せたらしい。肖像は青年馬琴の容貌に似せたものと思はれる。

【備考】〔直讀見臺萩〕大名らしい人が寶物らしい名劍を、高麗藏のやうな色男に預ける。半五郎のやうな撫で附けの男が刀をすりかへる。預つた男は刀の詮議に出掛ける。賴兼公らしい人は吉原通ひをし、傾城をさげ切りにする。評定の幕も例の無言で咳拂ひだけ。高尾の亡魂の場も壬生狂言ゆゑ、だまつて鐘と太鼓ばかりで踊る。〔名代振袖〕嫖客惣太は遊女にふられ、衣をかへして寢て思ふ女に會ひ、親が許さないので心中する。地藏尊は二人を救ひ、二分の金で古着を買ひ、又八幡の境內に小屋を建て、地藏の手作りの面で狂言をして大に當てる。結局は夢。　〔小池〕

番舞（つがひまひ）「舞樂」を見よ。

塚原澁柿園（つかはらじふしゑん）　小說家　【本名】塚原靖、幼名は直太郎　【別號】蓼州・縱死・しかま　【生歿】嘉永元年三月一日、江戸市ケ谷合羽坂上（市ケ谷仲町）に生れ、大正六年七月五日歿す。享年七十。【閱歷】家は代々幕臣で鐵砲組の與力であつた。元治元年京都に赴き、二條城の定番を勤めたが、間もなく辭して下阪、御目附木城安太郎に從うて慶應二年東上、關東地方の河川改修・開墾等の事に當り、十二月江戸に歸つた。翌年奧儒者小林榮太郎に就いて經書を學ぶ傍ら、柔道・劍術等を修めた。明治維新の後、德川家に從つて駿河田中に移り、明治二年、沼津兵學校に入學。こゝで外國語の知識を修得し、靜岡の集學所で武術を修めた。集學所解散後は、地方の小學敎師となつたが、間もなく友人島田三郎の經營する横濱每日新聞に入社、編輯事務を擔當した。時に明治七年。筆禍を得て禁獄十ヶ月（但し自宅監禁）に處せられた。十一年、東京日日新聞に轉じ、曾て朝野新聞の成島柳北に引立てられたと同樣に、こゝでは主筆福地櫻痴の知遇を得、十五年、朝鮮京城に事變起るや、特派せられて「入韓紀實」を執筆した。爾後、東京日日新聞の小說欄を擔當し、初めは櫻痴と共譯のディスレリーあたりの英國小說を、後には彼一流の歷史小說を連載した。彼は幕臣なので夙くから諸家の舊記に通じ、特に深く戰國時代から江戸時代にかけて研究した。當時、東京日日新聞は政府の機關紙なので、讀者は官吏・敎員等の知識階級が多かつたので、彼の多少むづかしい歷史小說も愛讀されてゐた。彼の處女作として同紙上に出た歷史物は、「丸と釘貫」で、次に「長篠合戰」。何れも二十六年の作である。爾來、主として東京日日新聞を本據とし、傍ら「文藝倶樂部」「太陽」等に作品

を掲げた。二十七年、毎日電報（大阪毎日經營）の創刊と共に入つて社員となり、四十年「碧玉盆」を大阪毎日新聞に寄せ、以後晩年まで、時々同紙のために歴史小説を書いた。四十四年、新に東京日日新聞社員となり、大正六年二月まで勤續した。この年四月、大阪毎日に「新説雁金五人男」を連載し、翌年、小説「烈女さつ」を執筆中卒去した。澁柿園は、最初蓼州の號を用ひたが、明治二十二年、出世作「條約改正」を出版するとき、時事を題材としたので筆禍に逢ふを恐れ、澁柿園の別號を用ひた。この作が大に受けて蓼州の名は自ら忘れられた。【作品】數はなか〳〵多いが、代表作と云はれるのは、「由比正雪」（別項）、「天草一揆」「北條早雲」「俠足袋」「島左近」「伊達正宗」「金忠輔」「印幡沼」「幡隨院長兵衛」など主に元龜・天正から幕末を舞臺にした。又劇化上演せられたものは、「振武軍」「天下茶屋」「黄金十枚」「幡隨院長兵衛」など。短篇も少からず、中には「不老術」の如き佳作もあり、外に少數の現代物の作もある。彼は晩年に至つても意氣衰へず、圓熟老巧であつた。


塚原澁柿園

【批評】澁柿園の歴史小説に就いての見解は、晩年人に語つたところによると、「古文書・歴史などは必ずしも信憑するに足らぬ。歴史小説家は自己の批評眼、自己の見識によつて自由に歴史を解釋し活用し、且つ創造の世界を開拓すべきだ」と云ふにある。彼は無論史實を或る程度までは尊重するが、それ以上は自由に史材を創造する。そして人物を主觀的に解釋するのが彼の特色で、例へば由井正雪を勤王家に、北條早雲を情味ある人物に、淀君の生涯に極端な同情を注いだ如きその一例。そして德川幕府側を、萬事ひいき目に見たのも彼が幕臣であつた爲めである。彼の作物の結構は、確かに巧妙で、どの小説も劇的に仕組まれ得るし、作中の人物にも一種の熱がある。殊に武士氣質を描寫する上に於て獨自の妙味があり、面白く讀ませるが、ただそれだけで、そこに時代的・思想的の、新しい考察を加へた點が乏しく、さればとて、彼自身の社會理想を、作物に打ち込むといふ行き方の歴史物でもないから、自然奥行が淺いのは已むを得ぬ。〔高須〕

通鑑綱目（つがんかうもく）　史書　五十九卷【撰者】朱熹【名稱】正しくは「資治通鑑綱目」、又「綱目通鑑」とも略稱す。【體裁】史實の提要即ち綱を大書し、史實の説明即ち目を小書し、綱のみは朱子自ら筆を執つて微意を寓し、目の部分は門弟の趙師淵をして書かしめた。朱子は私かに本書を以て春秋に繼がしめんとしたので、即ち綱を春秋經に、目を左傳の體に倣つたものである。【解説】司馬光の「資治通鑑」（別項）が、卷帙が餘りにも浩瀚で、讀者の通覽に不便であるから、その提要を闡明してその失を補はんとしたことも、確に一の重要なる動機であつたが、更に一層根本的には、彼が司馬光の書の史實の相違、紀年の方法等に對する不滿及び史實に對して褒貶の微意を寓する史評に就いて、慊らざるものがあつたがためである。而して史評の中心とするところは、常に必ず名分大義の問題であつて、朱子が通鑑に對して慊焉たるものがあつたのは、主としてこの點に係つてゐる。兩家の名分論の相違の特に顯著なものは、三國の魏・蜀の間に於ける正統論である。「通鑑」は魏が明かに漢帝の禪を受けたものとして、魏を正統として蜀を賊とし、遂に諸葛亮の來攻を入寇と書してゐる（魏紀）。これに對して、「綱目」は蜀漢を以て正統とし、魏を以て簒立と書してゐる（漢獻帝紀・昭烈紀）。併しかくの如く兩家の論が背馳したに就いては、司馬光の生地涑水が魏に近く、朱熹の生地新安が蜀に近い事實を看過することは出來ない。上述の如く朱子は光の「通鑑」の後を承けて、訂正を加へた所が少くないが、而もまた光の修史の志が君國のために正名を期するにあつたことに對しては、常に推服して措かなかつたのである。我が國に於ては僧玄惠が初めてこれを讀み、北畠入道准后はその蘊奥を得たと云ふ（尺素往來）。德川時代に入つて、鵜飼錬齋がこれに校點を加へて刊行（慶安四年）して以來弘く行はれ、學者必讀の書とせられた。〔宇野・太多〕

【註釋書】御批通鑑綱目五十九卷 清康熙敕撰 ○通鑑綱目考異 宋江克寛 ○通鑑綱目考證 徐照文 ○通鑑綱目集覽 王幼學 ○通鑑綱目集覽正誤 陳濟 ○通鑑綱目質實 馮智舒 ○通鑑綱目書法 劉友益 ○通鑑綱目發明 尹起莘（以上の七書は、今本通鑑綱目に附載す）○綱目訂誤四卷 陳景雲 ○綱目釋地糾繆六卷 張庚 ○綱目釋地補注六卷 同上

月かげ（つきかげ）　物語　六卷【作者】不明【成立】室町末期か【諸本】住吉文庫藏寫本六卷あるのみ。

【梗概】豐前國ひたの莊にひたの大夫と云ふ者娘二人を持ち、姉のにほひ御前は豐後の目代に盗まれ、妹月かげ御前一人を如何にもして女院后の位にもつけんと思ひ賴んでゐた。安藝國あまの莊七郷を領する人は、都に時めいた大臣のこの地に流された者の末である。その子藏人は未だ妻なく、嚴島明神に月毎に七日詣でてゐたが、月かげも同じく詣でたのを見染めて、以來戀の病となる。その父これをめのと三郎左衞門から聞いて、大夫に娘を請ふが、流人の末と聞いて許さない。父怒つて兵を以て奪はうとするので漸く承知する。やがて父は死ぬ。藏人夫妻は嚴島明神に祈つて一男一女を儲ける。若君四歳、姫君三歳の時、何の故もなく所領は沒收され、俄に困窮の身となる。ひたの大夫僞つて病と稱し、歸つて來た月かげと二子を監禁する。藏人これを聞いて自殺しようとするが三郎左衞門に止められ、その奬めによつて京に上る。月かげは周防國の地頭五二郎の許に嫁がせられるが、そのまゝ病となる。大夫の許に殘された二人の子は母を慕ひて涙絶えず、大夫兄を五月雨、妹を村雨と名づけて虐待する。二人は逃れて父の館に到り自殺せんとする。大夫は益々怒つて二人を海に沈める。嚴島明神、大蛇となつてこれを救ふ。二人は故郷に歸り、空館に泣いてゐるのを或る翁が奬めて京に上らす。上る途中藝備の境の山で遂に道に迷つて餓死する。明神また山伏となつて救ふ。京に上つたが尋ねるあてもなく、二人が清水に祈請する所を叡山の大納言の阿闍梨が見つけて伴ひ歸り、村雨は阪本に預け、五月雨は手許に置く。この子才學優れ、その名一山に聞えるやうになる。或る時清水に參詣し父と逢ふ事を祈ると、會々藏人も詣で來てめぐり逢ふ。時の帝五月雨を召して今樣を聞かせ給ひ、叡感あつて素性を問はれ、藏人に九州の代官七代まで安堵の狀を賜はる。月かげは夫と別れて以來

篇も少からず、中には「不老術」の如き佳作もあり、外に少數の現代物の作もある。彼は晩年に至つても意氣衰へず、圓熟老巧であつた。【批評】澁柿園の歴史小説に就いての見解は、晩年人に語つたところによると、「古文書・歴史などは必ずしも信憑するに足らぬ。歴史小説家は自己の批評眼、自己の見識によつて自由に歴史を解釋し活用し、且つ創造の世界を開拓すべきだ」と云ふにある。彼は無論史實を或る程度までは尊重するが、それ以上は自通鑑」(別項)が、卷帙が餘りにも浩瀚で、讀者の通覽に不便であるから、その提要を闡明してその失を補はんとしたことも、確に一の重要なる動機であつたが、更に一層根本的には、彼が司馬光の書の史實の相違、紀年の方法等に對する不滿及び史實に對して褒貶の微意を寓する史評に就いて、慊らざるものがあつたがためである。而して史評の中心とするところは、常に必ず名分大義の問題であつて、朱子が通鑑に對して慊焉たるものがあつたのは、

○通鑑綱目發明ヲ起幸(以上の七書は、今本通鑑綱目に附載す)○綱目訂誤四卷陳景雲 ○綱目釋地糾繆六卷張庚○綱目釋地補注六卷同上

月かげ（つきかげ）　物語　六卷【作者】不明【成立】室町末期か【諸本】住吉文庫藏寫本六卷あるのみ。

【梗概】豐前國ひたの莊にひたの大夫と云ふ者娘二人を持ち、姉のにほひ御前は豐後の目代に盜まれ、妹月かげ御前一人を如何にもして女院后の位にもつけんと思ひ賴んでゐた。

八年病の床に沈んで、一度も契を交さず、二子の殺された事を聞き乳母侍從と共に逃れ、あまの莊の舊館に到り自殺しようとするが、乳母に勸められて京に上る。併し艱難に堪へず二人共に備前の和氣の渡に身を投ずる。折しも藏人、所領入せんとして來り、二人を助けあげる。かくて漸く父子夫婦相逢ひ喜び勇む。藏人は九州に到りひたの大夫に復仇せんとする。五二郎はこれを聞いて大夫の許に來る。戰となるや五二郎は藏人に討たれ、大夫夫妻は捕へられる。五月雨斬るに忍びずこれを追放す。かくて一家は益々繁榮した。〔大野木〕

月暈日暈（つきがさ　ひがさ）　小説【作者】島村抱月【發表】明治三十一年一月、「新著月刊」【刊行】明治三十九年、小説集「亂雲集」。抱月全集第一卷所收。

【梗概】某省の會計課長代理正木馨は、恩人である課長深澤某の官金費消の形跡を隱蔽するために官印を盜用した。これが同僚の宇川半次の知るところになるので、その口を緘するために、自分の戀人であり、やがて自分の妻となるべき深澤の娘清子を好餌として、同女に心を寄せてゐる彼に結婚をすゝめる。が、彼はそれを卻けるばかりか、意地わるくもその罪を發かうとするので、憤りの餘り彼を九段牛ケ淵に突き落して殺し、やがて清子と結婚をするが、日を經るまゝに殺人罪の苦惱がかうじ、つひに一切を清子に打ちあけ、牛ケ淵で夫婦心中をする。

【批評】壓卷は殺人後の煩悶の描寫で、ドストエフスキーの「罪と罰」を連想させるものがある。文章の典雅な雅俗折衷體である事と、人物事件の布置配合の善く整つてゐる事とは、この作の大きな特色である。【附記】抱月は一時、作家たらんとして明治三十年四月創刊の「新著月刊」に「白あらし」の一篇を寄せて以來、四・五年の間に、「新著月刊」を初め「太陽」「新小説」「國民之友」等に約十四・五篇の小説を公けにしてゐる。「亂雲集」の自序にも、これ等の作を以て、作者は「能く現實以上の境に暝通」しようとしたものだと云つてゐるが、「月暈日暈」も、無論作者のかう云ふ意圖の現はれである。〔本間〕

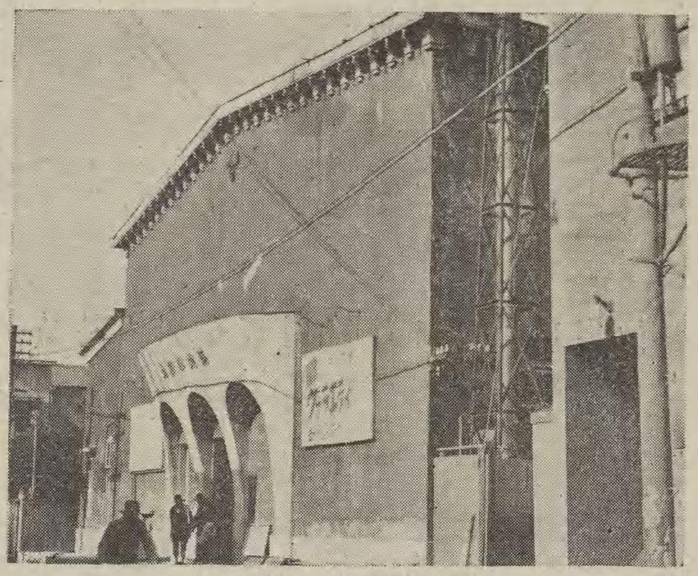
月草（つきくさ）　論文集【著者】森鷗外【刊行】明治二十九年十二月、春陽堂。【内容】菊判千頁にあまる尨大なる論文集で、殆ど全部が明治二十二年から二十七年まで「しがらみ草紙」(別項)に據つて、論陣を敷いたその所産である。美術論・繪畫偶評・文章論等がある。更に「山房放言」「山房拊掌談」、また新刊雜評、自作に對する批評への解嘲、最後に演劇に關する論議と、弟三木竹二の手に成る「觀劇偶評」を收めてゐる。併しこの書の眼目は卷頭に掲げた六篇の「山房論文」にある。これは、「早稻田文學」の坪内逍遙と、「理想沒理想」に就いて應酬したもので、明治文壇始まつて以來の大論爭の記錄であると共に、單に論駁の文たるのみでなく文學上の重要な論策である。【批評】この書は當時の批評壇に怪しげな印象批評のみ横行してゐるのを見て、決然立つて批評の規準を審美學の上に置くべきことを敎へた、批評の批評がその多くを占めてゐる。有名な「理想沒理想」の論爭とは、逍遙が「批評は著作の本旨の所在を發揮するを專とし、歸納的沒理想たれ」と主張するに對して、彼は「著作を批評せんとせば先づ觀察し探究すべく、これ科學的手段であり歸納的批評である。併しこれを畢つて判斷を下さんとする曉は「理想」標準を要する。理想とは審美的觀念であり、標準とは審美學上に古今の美術品を見て歸納し得たる經驗則だ」と論難してゐる。その後進んで逍遙が沒理想的宇宙觀を述べたのに對して、彼は「世界はひとり實なるのみならず又想のみち〳〵たるなり」とし、「理性界を觀、無意識界を觀て、美の理想ありといひ、又これに適へる極致あり」と云ふ説を支持し、また藝術家に於ける神來を擧げ、「眞の美術家の製作は無意識の邊より來る。これ製作性の上の理想にあらずや」と駁し、かくてこの大綱から派生して論爭は、諸種の問題に亙つてゐる。これは逍遙に全然勝ちみがなかつたが、しかしそれ等の山房論文は相手を説服せしむる以上に、當時の文壇を益するに役立つた。ハルトマンの審美學を知り、眞正の批評の如何なるものかを敎へられ、ゾラの自然主義に對する縱横の論議を聞き、歐羅巴文學の消息を傳へられたのである。この論爭以外にも、應酬の文字が夥しく收載されてゐるが、これは彼が好戰の士たることを語るものではない。專ら論難の體を借りて所期の啓蒙運動を行つたものであることは、就いてこれを讀めば直に明かにすることが出來る。かくの如くして「月草」一卷の諸論文がわが文壇を覺醒し刺戟し、敎へ高め深めた功績は甚だ大きい。なほ三木竹二の手に成る精到なる劇評も、所謂見巧者流の評判記の域を脱した最初の批評として永く尊重に値するものである。〔小島〕

築地小劇場（つきぢせうげきぢやう）　劇團【解説】新しき國劇樹立を目的として結成された演劇團體。大震災の凶報に大正十二年末演劇研究のための歐洲留學から急遽歸朝した土方與志は、東京の劇場が殆ど全部壞滅せるを見、且つは當時バラック劇場の建造を許されるを機會に、一の研究劇場を興すべきことを小山内薫(別項)に提議した。既に既成劇壇の一切に絶望して、私かに俳優學校に依る根本的革新を策しつつあつた小山内は、即座に同意し、協力して創立の事に當つた。半歲にして京橋區築地二丁目二十五番地に建坪八十、客席五百八を有する劇場が成つた。これが建設は土方與志が私財を投じた。演出者として小山内薫・土方與志・和田精、俳優として汐見洋・友田恭助、經營係として淺利鶴雄の六人の同人が、劇場の運用並に經營維持に當つた。かくて大正十三年六月十三日、「築地小劇場」は記念すべき開幕の銅鑼を打ち鳴らした。【沿革】第一回公演にはチェホフの「白鳥の歌」、マゾオの「休みの日」、及びゲエリンクの「海戰」を上場したが、特に「海戰」は世界大戰後の新聲たる獨逸表現派の戲曲に屬し、その砲丸の如くに飛ぶ臺詞と力强き集團的演技とが、效果的な舞臺設備と相俟つて劇壇に新しき驚異を齎すに至つた。爾來約二年間、最初の宣言通り飜譯劇のみを以て上演曲目を編成して一部戲曲家の誤解と反感から非難の聲を浴びたが、これは新しき國劇の樹立を目ざし、歌舞伎劇でも新派劇でもない劇術を創成するために、演技者の訓練上必須の手段として執つた方針でもあつた。この間上演された主なるものは、カイゼルの「朝から夜中まで」、ゴリキイの「夜の宿」、イブセンの「幽靈」「ペールギント」、チェホフの「櫻の園」「三人姉妹」、ゴーゴリの「檢察官」、エデキントの「春の目ざめ」、メエテルリンクの「青い鳥」、チヤペックの「蟲の生活」、沙翁の「ヴェニスの商人」、ロマショフの「空氣饅頭」、創作物では、坪内逍遙の「役の行者」、武者小

る。明神また山伏となつて救ふ。京に上つたが尋ねるあてもなく、二人が清水に祈請する所を叡山の大納言の阿闍梨が見つけて伴ひ歸り、村雨は阪本に預け、五月雨は手許に置く。この子才學優れ、その名一山に聞えるやうになる。或る時清水に參詣し父と逢ふ事を祈ると、會々藏人も詣で來てめぐり逢ふ。時の帝五月雨を召して今樣を聞かせ給ひ、叡感あつて素性を問はれ、藏人に九州の代官七代まで安堵の狀を賜はる。月かげは夫と別れて以來

路實篤の「愛慾」、久保田万太郎の「大寺學校」等であつた。この間、時には地方興行や、帝劇にも出演した。かくて四周年を迎へた劇場は、折柄區劃整理のため築地二丁目二番地への移轉と改築を行つた。これより先、劇場の同人制度を全劇場員の代表委員組織に代へて來たが、更にこの機に土方與志を主事とする劇場部と小山内薫を主事とする劇團部となしてその責任を區分し、十月の改築記念公演に臨んだ。然るにこの年十二月、小山内薫の急死に逢ひ、劇場は大なる困難に直面した。即ち盟主小山内死後の劇團組織に種々の紛糾を生じ、感情の確執に加ふるに思想的對立の激化を見、三月二十四日、遂に一部の人々は連袂脱退の擧に出で、やがて劇場部主事土方與志を擁して新に「新築地劇團」を興すに至つた。殘留組は青山杉作を主腦に「劇團築地小劇場」として進み、光輝ある「築地小劇場」の名は、今や空しく建物の上に留めるのみとなつた。「劇團築地小劇場」は更に分裂して「劇團新東京」を生んだが、後何れも解散され、友田によつて築地座が興された。

【批評】「演劇の實驗室、芝居の定設館、民衆の見世物小屋」の標語の下に、滿五箇年に亙り、絶えざる活動を續けた築地小劇場の存在そのものが、まづ劇壇に對する大なる貢獻であつた。即ち從來の浮動常ならぬ劇團と異つて、これは自らの劇場と財政上の支援と更に豫定曲目とを用意し、或る程度の損失を顧慮することなく計畫的に一流の作品を定打ちし、歌舞伎劇・新派劇に對峙して新劇（別項）を根强く舞臺に植ゑ付けたからである。またこの定小屋を有して不斷の興行を續け、八十四回の公演を重ね百十七種の戯曲を上場したことは、技術者の舞臺的修練に役立ち、本來の目的とする新しき劇術の創成を促進せしめたことは言ふまでもない。而もそれ等の演出には近代劇の古典を小山内、新傾向のものを土方、その中間を青山とほぼ分擔してこれに當り、各自の特色ある良心的な舞臺は、築地をわが新劇壇の大本山として仰がしむるに十分であつた。かくて築地小劇場はその質と量とに於てわが新劇運動始まつて以來の偉大な足跡を印し、所期の任務を完全に果した。而して上演曲目に多くの進歩的傾向戯曲を加へてあるとは云へ、演劇的效果の發揮を主にした藝術劇場の態度に終始したので、思想的よりは技術的方面に殘した功績が遙に顯著なことは爭へない事實である。舞臺設備の點ではあらゆる近代的機能を取り入れ、わが國最初のクッペル・ホリゾオントを設けたのみならず、脚光及びボオダアを廢してサスペンション、スポットに依る照明や、舞臺構造、音響器具等にも新機軸を出し、これが自在な的確な驅使に俟つて見事な效果を現じて、幾多の名演出を可能ならしめたが、その手法の如き、爾來一般營業劇場の舞臺に於ても踏襲されてゐる有樣である。各樣式の戯曲の研究的上演は必然的に舞臺裝置の領域を擴め、構成舞臺も試みられ、また世界の劇壇に誇るべき創案丸太式舞臺も屢々採用された。演技に就いては言ふまでもなく、先覺小山内が企圖した新しき劇術の創成は不斷の舞臺的鍛錬に俟つて、次第にその成就の歩を進め、幾多優秀の技術者を生み、現に彼等は「新築地劇團」「左翼劇場」等にあつて活躍しつつあるが、更に今後の新劇運動の中樞となつて活躍するであらう。（新劇參照）



築地小劇場

【參考】月刊築地小劇場（築地小劇場發行）○築地小劇場水品春樹○小山内薫全集第六卷（水木）

築島（つきしま）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷　【作者】不詳　【別名】兵庫【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。新群書第類從八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。又御伽草子として、新編御伽草子下卷にも收む。

【題材】准平曲物。本地物。經ヶ島人柱傳說。人柱の代りに一切經を寫した石を以て築かせた清盛の功德を語る「平家物語」（卷六）の叙述とは異り、清盛の專横と人柱に選ばれた國春父子の恩愛及び健兒（けんぢ）松王の俠氣を主題とし、これを說法の方便に結びつけたもの。

【概概】福原に遷都の後、清盛は平大納言時忠の議を納れて、輪田泊を築かんと五條大納言邦綱を奉行とし、大和・山城等七箇國の人夫に命じて始めたが、浪荒くして工事成らず、安倍安氏の卜による人柱三十人の數に充てるため往來の人を捕へる事二十九人に及んだ。最後に捕へられた修行者はもと難波入江みつまつの刑部左衞門國春といひ、鞍馬の多聞天に申子した名月女を丹波國をがはの莊能勢なる藤兵衞家兼に奪はれ、妻にも死なれて高野に遁世、女の行方を搜して兵庫に來掛つたもので

築島（古板本）

ある。父の難を聞いた名月女は夫の留守中馳せ附けて代らうとし、跡を追ひ來つた家兼も共にと請うたが、許されない。人柱供養の當日二人は更に輪田岬の觀音堂に見物してゐた清盛に愁訴したので、漸く國春一人が許されると、偶々清盛の童松王健兒（けんぢ）は自ら進んで二人柱の代りに一切經を寫した石を以て築かせた清盛の功德を語る「平家物語」（卷六）の叙述とは異り、清盛の專横と人柱に選ばれた國春父子の恩愛及び健兒松王の俠氣を主題とし、これを說法の方便に結びつけたもの。

【概概】福原に遷都の後、清盛は平大納言時忠の議を納れて、輪田泊を築かんと五條大納言邦綱を奉行とし、大和・山城等七箇國の人夫に命じて始めたが、浪荒くして工事成らず、安倍安氏の卜による人柱三十人の數に充てるため往來の人を捕へる事二十九人に及んだ。最後に捕へられた修行者はもと難波入江みつまつの刑部左衞門國春といひ、鞍馬の多聞天に申子した名月女を丹波國をがはの莊能勢なる藤兵衞家兼に奪はれ、妻にも死なれて高野に遁世、女の行方を搜して兵庫に來掛つたもので

ある。父の難を聞いた名月女は夫の留守中馳せ附けて代らうとし、跡を追ひ來つた家兼も共にと請うたが、許されない。人柱供養の當日二人は更に輪田岬の觀音堂に見物してゐた清盛に愁訴したので、漸く國春一人が許されると、偶々清盛の童松王健兒は自ら進んで二

嫋曲を主とす」などとあり、子規より見れば、その主唱する新派俳句以外の當時世間に流行せる俳句は、凡て「月並風」と見なしたので、かく對者を酷評することに依つて、その文藝的の立場を鮮明ならしめたのである。子規の新派は、反對派より書生俳句といふ名を酬いら

の御食（みけ）といふことなるべし」と。かくて月次祭が月毎に奉らるべき幣帛を二度に奉らるゝやうに、月次祭の夜行はるゝ神今食も、「天皇の月毎に新嘗（にいなめ）の御食（みけ）を聞食（きこしめ）すよしにて、其度ごとに行ひ給ふべきを、合せて二度に行ひ給ふよしにて、そは新穀にはあらざれども新嘗（にいなめ）

本】東京帝大圖書館藏の原本と思はれるものが、大正震災に燒失し、その轉寫本のみが傳はつてゐる。「近世萬葉調短歌集成」に依つて公刊されたものがそれである。外に刊本を見ない。【內容】短歌百九十三首、長歌二十六首、文章六篇。四季・戀・雜・挽歌・文部と云ふ

【批評】「演劇の實驗室、芝居の定設館、民衆の見世物小屋」の標語の下に、滿五箇年に亘り、絶えざる活動を續けた築地小劇場の存在そのものが、まづ劇壇に對する大なる貢獻であつた。即ち從來の浮動常ならぬ劇團と異つて、これは自らの劇場と財政上の支援と更に豫定曲目とを用意し、或る程度の損失を顧慮することなく計畫的に一流の作品を定打ちし、歌舞伎劇・新派劇に對峙して新劇（別項）を根强く舞臺に植ゑ付けたからである。またこわが新劇壇の大本山として仰がしむるに十分であつた。かくて築地小劇場はその質と量とに於てわが新劇運動始まつて以來の偉大な足跡を印し、所期の任務を完全に果した。而して上演曲目に多くの進歩的傾向戯曲を加へてあるとは云へ、演劇的效果の發揮を主にした藝術劇場の態度に終始したので、思想的よりは技術的方面に殘した功績が遙に顯著なことは爭へない事實である。舞臺設備の點ではある。父の難を聞いた名月女は夫の留守中馳せ附けて代らうとし、跡を追ひ來つた家兼も共にと請うたが、許されない。人柱供養の當日二人は更に輪田岬の觀音堂に見物してゐた清盛に愁訴したので、漸く國春一人が許されると、偶々清盛の童松王健兒（こんでい）は自ら進んで二十九人の命に代り、一萬部の法華經と共に海に沈められた。工事はめでたく成就。これが經ケ島である。名月女は吉祥天女、松王は大日王、清盛は地藏菩薩の化身で、すべては築島成就の方便であつた。

【影響】本作に據つたものに、榎本虎彦作の脚本「經島娘生贄」（明治四十二年十月歌舞伎座初演）がある。〔島津〕

月並（つきなみ）　俳諧【名義】月並俳句の略稱。子規（別項）の新派運動より見たる舊派、即ち純傳統派の俳句を指す。又、それより轉化して、何事にても守舊的なるもの、卑俗なるもの、低級なるものに對してかく呼ばるゝ場合もある。【沿革】月並とは月次（つきなみ）で、例月の發句會を月次會と稱する。文政末期より、俳壇一般に卑俗なる趣味が行はれ、その俳諧の月次例會は所謂點取の興に陷り、或は賞をのみ目的として一種の文藝賭博たる觀をなすまでに墮落した。天保より明治の初年にかけては殊に著しく、蒼虬・梅室（各別項）の如き、所謂宗匠として富を積む程に、俳諧の文學的內容を茶毒すること甚だしいものであつた。子規が俳壇革新の大旆を建てたのは、先づかくの如き俗流に對する指彈であづて、子規はこれを一掃的に「月並流」「月並俳人」などと云つた所から、この語が輕蔑の意を以て套襲せらるゝ事になつたのである。子規の「俳諧大要」に、「月並風に學ぶ人は、多く初めより巧者を求め婉曲を主とす」などとあり、子規より見れば、その主唱する新派俳句以外の當時世間に流行せる俳句は、凡て「月並風」と見なしたので、かく對者を酷評することに依つて、その文藝的の立場を鮮明ならしめたのである。子規の新派は、反對派より書生俳句といふ名を酬いられたほどに、自由であり名を成し易かつたが、舊派にては宗匠より立机を許されて、傳統の名を繼ぐといふ風習を守つてゐるので、何々庵何世などといふ名の下に集まる人々を、月並といふ風に當今は考へられてゐる。けれども、本來は、文藝的なる俳句に對する非藝術的なる俳句を「月並」となすことが眞意であるから、子規流の新派の中にも、非藝術的に低迷した作品は、これを月並風と名づけて差支ない。

【參考】獺祭書屋俳話正岡子規○俳諧大要同上○月並研究高濱虛子〔荻原〕

月次祭（つきなみのまつり）　神道【名義】月次は月並で、月毎に祭るの義であるが、その幣帛を六月・十二月の二回に諸社に奉りて神事を行ひ、國運の發展、皇室の福祉を祈る祭儀である。【祭神・祭儀】「延喜式」卷一、四時祭上、六月祭の下に、「月次祭、奠幣案上神三百四座並大、社一百九十八所」とある。即ち新年祭の案上幣に與かる神で、新嘗の祭神と同じである。從つて祭儀も新年祭（別項）と大體に於て同じである。【由來】この祭も、古く行はれたるものと思はれるが、その史に現はれたのは、「續日本紀」文武天皇の大寶二年七月である。【神今食】宣長の「玉勝間」に曰く、「神今食はジンゴンジキと字音にのみ唱へ來り云々、加牟伊麻氣（かむいまけ）と唱ふべきなり。そは神（かむ）は神嘗祭（かんなめまつり）などの神に同じく、今（いま）は新の意なり云々。新嘗（にへなめ）の御食（みけ）といふことなるべし」と。かくて月次祭が月毎に奉らるべき幣帛を二度に奉らるゝやうに、月次祭の夜行はるゝ神今食も、「天皇の月毎に新嘗（にへなめ）の御食（みけ）を聞食（きこしめ）すよしにて、其度ごとに行ひ給ふべきを、合せて二度に行ひ給ふよしにて、そは新穀にはあらざれども新嘗（にへなめ）を聞食始（きこしめはじ）むるをさへに、重く嚴に齋（いつき）み給ふにて、先づ神に奉り給ひて、さて天皇のきこしめすこと、もはら新嘗大嘗のこゝろばへに同じ」と宣長は說いてゐる。現今月次祭は、六月・十二月の十七日に太神宮に大祭として行はれ、一般の神社に於ても亦行はれる。〔田中（義）〕

【參考】令義解○三代實錄○延喜式○江家次第○禁祕鈔○祝詞考○神道名目類聚抄○祝詞講義○古事類苑○祝詞新講○神祇辭典等

繼根振（つぎねぶり）　上代歌謠【名稱】歌の冒頭の句を以て名づけたのである。【出典】「琴歌譜」に一首出づ。【歌詞】譜を附した歌詞を分り易く記せば次の如くである。

つぎねふ、山城川に、秋っ花開（ふ）く（一說に、蛹蛉（ヒ）嘆（アキツハ）く花ふとも、吾（あは）が愛し者に、逢はずは止まじ、逢はずは止まじ。

純然たる旋頭歌形式の歌で、二段より成る。なほ記紀の仁德の條には、「つぎねふ山城」と云ふ起句を持つ歌が四首見えて、それには、志都（しづ）歌の返歌（かへし）（又は歌返）と云ふ名が附いてゐる。これ等の歌は、何れも繼根振に歌はれたもので、且つこの「琴歌譜」の歌の曲は志都歌の返歌と關係があるのであらう。〔藤田〕

槻の落葉（つきのおちば）　歌文集　一卷【著者】荒木田久老【名稱】本書の名は、正しくは、「槻の落葉詠草」とあるべきものかと思ふ。久老には、外に「槻の落葉信濃漫錄」（別項）「槻の落葉名古屋餞別集」（文政二年刊）など同名の書がある。【諸本】東京帝大圖書館藏の原本と思はれるものが、大正震災に燒失し、その轉寫本のみが傳はつてゐる。「近世萬葉調短歌集成」に依つて公刊されたものがそれである。外に刊本を見ない。【內容】短歌百九十三首、長歌二十六首、文章六篇。四季・戀・雜・挽歌・文部と云ふ類別に從つてゐるが、原本の戀部の終りが落丁になつてゐたと云ふ。從つて長歌の實際は二十五首を遺すのみである。なほ前記刊本に遺憾なことは、文章が六篇の中二篇とられてゐるに過ぎない。【歌風】久老には別に「五十槻園集」がある。併せ見るべきものである。その歌才は眞淵門の駿足たるを失はない。一般には眞淵の萬葉調を繼承した門下として、田安宗武・加藤宇萬伎が擧げられるけれど、素朴さと自由さとの點には、却つて久老の方に特色が多い。恰もその學が、同門本居宣長の風に比し全然別途の方向を示し、時に師說をすら超えて憚らない豪宕不羈の趣を見せてゐるに似てゐる。彼は又好んで諸地を遊歷し、時に靑樓に登り酒色に身を浸さしめるやうな生活をすらも辭しなかつた。「吾妹子が玉手の枕六月の暑き夕もあへて纏寢（まろね）ん」とか、「酒宴（さかもり）わがするごとに君が目を欲（ほ）りつゝ待たん逢はん日遠み」と云ふやうな、赤裸な愛慾の歌も見られる。次の二三の例によるも、詠出の自在と、萬葉調の追隨とが見られる。

初春の初日かゞよふ神國の神のみかげを仰げもっもろ

やよや鳴け山ほとゝぎすやまずわが通はむ宿に聲な惜しみそ

さ丹塗の小舟うけよせてをとめ子が引ける水草の色もなつかし

なほ、「白露を玉にぬきたる三輪山のさぬはぎ

築島（つきしま）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷【作者】不詳【別名】兵庫【成立】室町期【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）。新群書第類從八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。又御伽草子として、新編御伽草子下卷にも收む。【題材】准平曲物。本地物。經ケ島人柱傳說。人柱の代りに一切經を寫した石を以て築かせの刑部左衞門國春といひ、鞍馬の多聞天に申子した名月女を丹波國をがはの莊能勢なる藤兵衞家兼に奪はれ、妻にも死なれて高野に遁世、女の行方を搜して兵庫に來掛つたもので

が枝髻華に挿せこの子」の如く、「古事記」中の歌より脱化した類の遺作もある。長歌に就いても語格は同様である。形式や雅味に捉はれず、自在濶達に表現した點に、彼獨自の個性が見えて面白い。ともあれ近世の長歌中逸色多いものとして推賞すべきである。〔齋藤(清)〕

槻の落葉信濃漫錄 つきのおちば しなのまんろく　隨筆　一卷【著者】荒木田久老【名稱】一名「病床漫筆」といふ。【刊行】文政四年【解說】卷頭に、「享和元年九月、信濃の國に下りけるに、神無月善光寺にていたく煩ひけるをりしも云云」とある折、病間、土地の學徒の問に對して答へた事を記したもので「病床漫筆」とも云ふのはそのためである。主として「萬葉集」の歌詞の難解なのを說いたもので、莫鬱圓隣の歌の訓以下四十二條を收めてゐる。本居宣長の說を斥非する所が多い。所々著者の男久守の頭註がある。文化元年秦鼎、文政四年大堀正輔の序及び文政元年久守の跋がある。〔和田〕

繼信忠信記 つぎのぶただのぶき　「八島」を見よ。

月舍遺抄 つきのやゐせう　隨筆　一卷【編者】横山由清【諸本】本書は由清の自抄本をその歿後友人小中村清矩博士に贈られたもので、他に傳寫本はあるまい。隨筆文學選集第六卷所收。【解說】月舍横山由清が抄寫して一卷に綴つたもので、加納諸平の「山多豆考」、黑川春村の「同追記」、木村正辭の「同附尾」と、諸平の「兎寸河考」、春村の「同附記」とから成る。一二の挿圖がある。「月舍遺抄」の題名は小中村清矩の命じたものである。〔和田〕

月山發句合 つきのやまの はつくあはせ　俳諧【編者】齋部路通【刊行】元祿四年【名義】羽前羽黑三山の一、月山での發句合であるから、かく題したので最後の判詞に「左右十八番、名を月のやまの發句合といふ」とあるから、これを本名とすべきであらう。【諸本】原本は路通の「俳諧勸進牒」(別項)上之卷の附錄となつてゐる。俳諧句合集(俳諧文庫)には單獨に收められ、蕉門俳諧前集(俳書大系)には「俳諧勸進牒」と共に收められてゐる。【內容】左右十八番の句合で、羽黑山の別當代會覺阿闍梨發起、圖司呂丸撰、路通判である。元祿三年六月路通、芭蕉の曾遊を慕つて月山に登り、この句合の判を書いたのである。路通の序があり、羽黑の呂丸の賀詞が跋になつてゐる。作者は會覺・枳風・不玉・文鱗・會良・釣雪・宵花・越人・立圃・蝶々子・路通・呂丸等二十七人である。〔萩原〕

月の行方 つきのゆくへ　歷史物語　二卷三册【著者】荒木田麗女【名義】八月十五日に脫稿したので、紫式部が八月十五夜に、「源氏物語」を書き始めたといふ古傳を連想し、「あくがるゝ心のはては千さととともかぎらぬ月の行方とぞ思ふ」と歌を詠んでかく題した(自跋)。【成立】明和八年八月七日起稿、同十五日完成(著者四十歲)。【諸本】原本は荒木田興正(麗女實家の甥)妻直女筆で、神宮文庫藏。自筆本は所在不明である。史籍集覽・國文叢書・女流文學全集第二卷・日本文學大系第十三卷等所收。【內容】鏡類の結構を摸倣し、片田舍に世を避けてゐる老翁の物語に假託して、高倉(卷一上・下)・安德(卷二)二代の事を記してゐる。この兩朝の歷史は、「彌世繼」(別項)に記されたのであるが、散逸した爲め、その缺を補つたのである。資料は主として、「平家物語」「源平盛衰記」によつてゐるが、優婉華麗の情趣を現はして「榮花物語」「大鏡」の遺風を發揮しようとつとめ、戰爭記事の如きは極めて簡單に記し、風流情事に關する說話に力を注ぎ、和漢の故事・詩歌等を巧みに利用して、「平家」「盛衰記」に重複せざるやう、別種の表現を以て精細に描いてゐる所に特色がある。(池の藻屑參照)【參考】國學者傳記集成　○荒木田麗女著書考　廣瀨敏子(國語と國文學一九)〔沼澤〕

月日の御本地 つきひのごほんぢ　「つきみつの草子」を見よ。

つきみつの草子 物語　二卷【作者】不明【別名】月日の御本地【成立】室町末期か【諸本】寛永頃の丹綠の古活字本がある。寛文の刊本は「月日の御本地」と題し、寛文七丁未年林鐘吉日、松會開板とある。【梗概】天竺摩迦陀國に、やうこく長者といふ富者があつた。未だ子のないのを嘆いて夫人に相談すると普陀落世界の千手觀音に祈り給へといふ。長者は祈るが一向に示現がない。そこで自宅に壯麗な堂塔を築いて觀音を勸請し、七日祈ると觀音老僧と現じ、汝は前生に於て仙人であつたが山鳥の子を食した爲めに、今富貴を極めながら子がないのであると告げる。長者後世を弔はれんがために是非にとなほ七日祈念する。觀音さらば子を與へん、されど母はその子四五歲の頃死すべしと告げる。かくて一子が生れた。ほう王の君と名づく。翌年又一子が生れ、さんそうの君と名づける。この子四歲の時果して母は死んだ。長者若君嘆く。後或る小名の娘を容れて室とする(原文、この女をきりうの局と云ふとあるが、その後の文にみだいときりうの局と二人出て來る事から見ると乳母か老女らしい)。繼母先妻腹の兩子を憎んで毒殺しようとするが、觀音これを救ふ。こゝに假病を作り、長者、にひふら山に到つて不死の藥を求めんことを願ふ。長者の出でし後兩子の保育を託せられたしゆん王の呼妻を

んで寶を與へ、兩子を害さん事を夫に奬めさせる。しゆん王、怒つて妻を追ひ、百騎を率ゐて若君を迎へようとする。繼母これを聞きさかいのはまのむくみのてうを召し、若君を海に沈めんことを命ずる。てう已むを得ず兩子を伴つて出たが汐水島に棄てて歸る。此處に二子の飢に迫るを母は悲しみ、閻魔王に暫しの暇を乞ひ、極樂の大鳥に魂を宿して島に來り、二子に逢つて母なる由を告げる。さて長者が不死の藥を祈る供物を取り來つて兩子を養ふ。長者は七十五日祈つて得ず、歸つて見れば若君がゐない。しゆん王、てうを召して仔細を知り、自ら三十艘の船を具して島に到る。供物を奪つた大鳥を見、二子は食はれたかと案じたが、羽の下に無事な我が子を見、且つこの大鳥が亡妻なることを知る。かくて長者は繼母を鬼ヶ島に追ひやり、二子は佛弟子となつて苦行の末、兄は日、弟は月と現じ、長者は菩薩となり、しゆん王、てうは四さう八の星と現じ、島へ迎ひに行つた人々は、皆星となつて日月を守り、母は明星となつて子に附き添つた。〔大野木〕

月詣集 つきまうでしふ　私撰和歌集　十二卷四册【撰者】賀茂神社の神主賀茂重保。その知人祐盛法師が助力し、假名序の如きは同法師が淸書したといはれてゐる。【名稱】賀茂神社に月詣をする人々の歌を主として集めたものの命名、「月詣和歌集」ともいふ。【成立】本集は奉納の意味で撰せられたものであり、眞名序の末に、壽永元年十一月とある。「千載集」は翌二年二月撰修の詔が下つてゐるが、兩者の關係は不明である。但し本集と「千載集」とに共通な歌は濱臣の調査に依ると九十八首程ある。序文には單なる私の備忘とあるけれども、私に祕しておくといふ程ではなく、世間に流布して選の不公平や拙劣を非難される場合を豫想したからこそ、祐盛法師に助力させて豫め備へたのである。隨つて撰修の動機は單なる奉納ではなく、當時の流行に倣ひ、賀茂社に對する文人の信仰を中心として、一個の權威ある私撰集を撰しようとしたものでは十二律に法つたものと考へられる。歌の數は序に千二百首とあるが、現存本は千七十六首ある。脫落の主なる原因は寫本の磨滅である。作者の總數は二百八十九人、內僧八十一人、女四十五人、歌の多い作者は、俊成(二十七首)、俊惠(二十五首)であるが、この二人は、當時の歌壇に對立した二歌仙である。次に撰むべきである。筑波會に屬した前後の人々には、國府犀東・桐生悠々・田岡嶺雲・久保天隨・大町桂月・沼波瓊音・宮島五丈原・若月紫蘭・中內蝶二・戶張竹風・小島無角・小日向是因・須賀茄村・唐澤光德等がある。〔伊藤〕

月讀命 つくよみのみこと　「天照大御神」を見よ。

筑紫系神話 つくしけいしんわ　神話【解說】九州、殊にその南部に占據した諸族が有した說話群を意味する。それ等の諸族のうちで、隼人族が最も著しく活動した。從つて筑紫系神話は、その蕃族の神話を一つの中心となしてゐる。筑紫系神話は、海洋神の崇拜及びこれ

筑波子家集 つくばこかしふ　歌文集　一卷【作者】近藤茂子【編者】淸水濱臣【刊本】

ども、私に祕しておくといふ程ではなく、世間に流布して選の不公平や拙劣を非難される場合を豫想したからこそ、祐盛法師に助力させて豫め備へたのである。隨つて撰修の動機は單なる奉納ではなく、當時の流行に倣ひ、賀茂社に對する文人の信仰を中心として、一個の權威ある私撰集を撰しようとしたものである。【諸本】刊本には清水濱臣の校本（四冊、大、文化五年刊）、續群書類從卷三六六所載本がある。濱臣は享和元年より文化五年に亙り、數本を以て校合したけれども、雜下・十月・哀傷等に於て、なほ多くの脫落歌があり、八月・雜中・神祇の如きは、全部缺落してゐたのである。然るに横山由清の「月詣和歌集補」（一冊、大、安政五年刊）は、山川正份の藏した「月詣和歌集增補」（尾崎雅嘉自筆）及び清水光房の校本によつて、濱臣の校本に缺けてゐた歌を雜下・十月・哀傷等に於て、百三十二首補つたものである。光房の校本は、初め文化十四年井辻尙監が賀茂季鷹本に依つて校合し、文政二年校本を賀茂の松田直兄に送り、賀茂清茂藏本に依つて校合せしめ、天保八年山田市郎右衞門は、尙監本を得て校合を試み、天保十年北山儀兵永隆は、この本に更に前記清茂校本にて再校を加へ、最後に天保十二年清水光房が永隆本にて校合したものである。類從本は前記井辻尙監本に依つてゐるが、濱臣の校本と由清の補遺とを加へたものに等しい。【內容】假名序・眞名序があり、全卷を正月より十二月までに分ち、これに賀・別・離・旅・戀（上・中・下）・雜（上・中・下）・哀傷・神祇・釋敎の十二を配し、卷一は正月附賀、卷二は二月附別の如くなつてゐる。十二月に分けたのは月詣に因んだものであらうし、賀以下十二部を分つたのは十二律に法つたものと考へられる。歌の數は序に千二百首とあるが、現存本は千七十六首ある。脫落の主なる原因は寫本の磨滅である。作者の總數は二百八十九人、內僧八十一人、女四十五人、歌の多い作者は、俊成（二十七首）、俊惠（二十五首）であるが、この二人は、當時の歌壇に對立した二歌仙である。次に撰者重保（二十一首）が多いが、祐盛法師（九首）は少い。西行（十七首）・實定・顯昭・賴輔（各十六首）がこれに次ぐ。女流は振はず、小侍從（十一首）・大輔（十首）が主なるものである。作者の大部分は現存の人々で、前時代の人を少數加へ、別雷社歌合の作者六十人は大部分加へられてゐる。賀茂氏の歌人が十八人あるのは目につく。【批評】「千載集」と前後して成立してゐるけれども、「千載集」の如く藝術的傾向は認められない。歌は概して平凡で月並である點に、「詞花集」や「後葉集」（各別項）に近いところがある。選に於ては公平を期したであらうが、全體的な統一や主張を出すことには力が及ばなかつたであらう。重保は和歌を以て神に結びつく有力な手段と考へ、歌に依つて神冥に感應することができると考へたのであるが、併しそれは單に行事的な考へであつて、未だ文學と信仰との合一とまでは行かなかつたと考へられる。隨つて本集が當時の思潮の中心に觸れてゐなかつたことが考へられる。濱臣は本集の平明な點を喜んだらしく、「此集と續詞花千載の二集とは大方似たる調べながら、中に此集のすぐれたるやうに覺ゆるは我心を入れて朝夕ものしたる心の引く方にやあらむ」といつてゐる。　〔西下〕

【參考】校註月詣集附考清水濱臣（校本の附錄）

憑き物（つきもの）「放浪」を見よ。

月讀命（つくよみのみこと）「天照大御神」を見よ。

筑紫系神話（つくしけいしんわ）　神話　【解說】九州、殊にその南部に占據した諸族が有した說話群を意味する。それ等の諸族のうちで、隼人族が最も著しく活動した。從つて筑紫系神話は、その蕃族の神話を一つの中心となしてゐる。筑紫系神話は、海洋神の崇拜及びこれに關する說話が重心をなしてゐることを、その特色の第一とする。山幸彥・海幸彥の物語、豐玉姬の物語等は、明かにこれを證示する。更に南支那・印度支那・南洋方面の土俗・信仰・說話と密接な關係を有してゐることを、その特色の第二とする。隼人族は九州に於ける一の海邊部族であり、そして人種的には南方的であるらしい。筑紫系神話が、海洋的要素と南方的要素に富む主因は、そこに存するらしい。そして後代文化期に於て、高天原系神話（別項）に包攝せられるに及んでも、這般の要素を殘留して、我が國の神話系體を多彩ならしめてゐる。　〔松村〕

筑紫箏（つくしごと）「箏」を見よ。

筑波會（つくばくわい）　俳團　【解說】明治二十七年佐々醒雪・大野洒竹・水野醉香・笹川臨風等の東京帝國大學一派の人々に依つて組織された俳團で、この一派を筑波會派或は大學派と稱する。當時一方に日本派・秋聲會派（各別項）があつたが、日本派の如く專門的に俳句道に精進するといふ風ではなく、言はば俳諧の研究或は學問の餘技として樂しむといふ風で、後、洒竹逝き、醒雪逝き、又最も熱心で俳誌「俳味」（別項）を發行したりした瓊音が、晚年社會風敎方面に趨つてから、俳團も自然消滅の形となつた。從つて同派の存在は、作句の方面よりも寧ろ學的方面に於ける貢獻に意義を求むべきである。筑波會に屬した前後の人々には、國府犀東・桐生悠々・田岡嶺雲・久保天隨・大町桂月・沼波瓊音・宮島五丈原・若月紫蘭・中內蝶二・戶張竹風・小島無角・小日向是因・須賀茄村・唐澤光德等がある。　〔伊藤〕

筑波子家集（つくばこかしふ）　歌文集　一卷

【作者】近藤茂子（しげこ）【編者】清水濱臣　【刊本】古刊本はない。縣居遺稿第三集中に採擇されたものが傳はつてゐる。江戶文學（東京帝大圖書館藏）・續日本歌學全書・國文講義（同文社）・婦人文庫・女流文學全集・國歌大系等に收載【內容】短歌百六十八首を四季・戀・雜・物名に分類し、その他に二首の長歌と、「東麿うしの祭を賀茂の翁の家にてし給ふをり」と題された一文を添ふ。【歌風】作者は眞淵門三才女（外に餘野子、倭文子）の一人で、進藤家から土岐家に嫁したけれど、やがて夫に死別した。眞淵に愛されて、「筑波山は山しげ山」の古歌にちなみ、しげい子の外に筑波子と云ふ名を貰つたのだと云ふ。濱臣の序によれば、眞淵は彼女の歌調を天曆の女房の口つきであると推賞した由で、今本書に傳へられた作も、その意味から眞淵が合點したものだけであるらしい。從つてすべて變化に乏しいと云ふ嫌ひがある。謂はゆる天曆調とも云ふべき實の歌が甚だ多い。

何となく心ぞ春になりにける霞みもあへぬ空を見つゝも

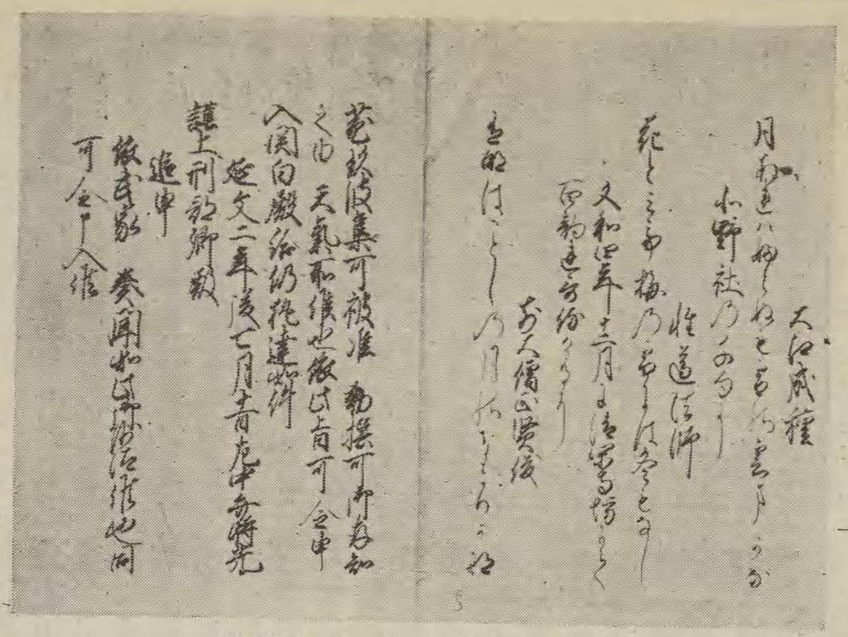
しぐれつゝ淺ぢ色づく鳥の葛飾野べに冬は來にけり

次の諸例の如く、淡泊無味の中に趣あるのがその特色の一つとなつてゐる。

見わたせば涼しかりけり浦風にゆくへをまかす海士の釣舟

のどかなる都の程ぞ知られぬる行きかふ人の袖のさまにも　〔齋藤（清）〕

菟玖波集（つくばしふ）　連歌集（准勅撰集）二十卷【撰者】二條良基が救濟（ぐさい）法師と共に撰集したものであるが、救濟が主として事に當つたのであらう。【成立】文和五年三月【諸本】長く寫本として傳へられた關係で諸本がつて和漢の兩序があつて、假名序は二條良基、眞名序は近衞右府（近衞道嗣と傳へられる）である。部立を四季・神祇・釋敎・戀・雜・羇旅・賀・雜題・發句に分ち、上代より發代に至るまでの附句發句二千百七十九句を收めてある。併し發句は第二十卷一卷のみで、他はすべて附句である。作者は五百三十人に上り、古くは日本武尊からあるが、鎌倉期以前の人は四十人許で、その作の數も少い。作の最も多いのは救濟の百十八句で、次いでは良基の七十九句である。【價値】武家の奏聞によつて延文二年勅撰集に准ぜられた。古來の連歌を菟集してあるからその變遷を窺ひ得る。採つてあるものは、附句は初めからの二句連歌（短連歌）と長連歌中の一節を二句拔いたものとであるが、その詞書によつて百韻・千句・萬句等、或は種種の賦物（ふしもの）（別項）、連歌の一節であることの知られるものも少くないので、これ等によつて、いつの頃如何なる人によつて、如何なる連歌が行はれたかといふことを窺ふことが出來る。また本集によつて連歌の地位の高められたことは甚だ大で、新しい作家のこれによつて勵まされたことも少くはなく、又本集が第一撰集となつて、第二撰集「新撰菟玖波集」（別項）が撰集されるにも至つてゐる。本集の序文によつて良基等の連歌觀も窺ひ得る。

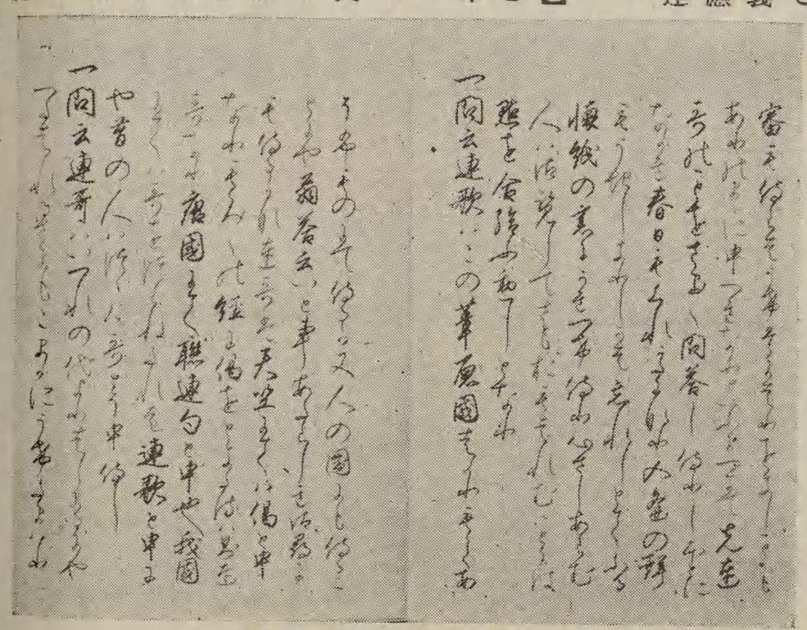


菟玖波集（圖書寮藏）

菟玖波之栞（つくばのしをり）　連歌書　一卷　〔福井・志田〕

【著者】渡邊章　【成立】文化十三年　【解說】連歌の次第、歌と連歌、附樣の八體、賦物（ふしもの）・發句・十八の切字、面（おもて）八句の立樣、三種の脇附、會席の法度等を說いたもので、自跋がある。【著者小傳】章は上野東照宮の社家、掃部來君の子である。安永七年家督を繼ぎ、出雲守と稱し、合歡園といひ、樂山と號した。夙く病氣のため隱居したが、後癒えてから再勸し、文政八年再び隱居した。　〔福井〕

筑波問答（つくばもんだふ）　連歌書　一卷　【著者】二條良基　【名義】連歌は日本武尊の新治（にひはり）筑波の問答歌に起るといふ說によつて、古くからこれを筑波の道と云ひ來つてゐるので、連歌に關する問答の義で名づけたのである。【成立】應安年間か。【諸本】圖書寮には「連歌問答」と題した古寫本があり、神宮文庫にも古寫の一本がある。群書類從連歌部にも收む。【內容】初めに序說に當る文があつて、これに常陸の筑波あたりから出て來た老翁が良基の館を訪ねたので、連歌について問答することになつた由が述べられてゐて、問者は良基、答者は老翁といふ形になつてゐる。かくてその問答に於て連歌の名義・起原・沿革、その效果、百韻・千句の運び方、發句・脇句の仕樣、稽古の要諦、斯道に對する學書、上古體・中古體・近來體の三體（作例も擧ぐ）、その他の諸體、式目撰定の由來、賦物・連歌の性質、會席・執筆（しゅひつ）の作方等が十七項に分つて述べられてゐる。【價値】連歌の學書として組織立て



連歌問答（圖書寮藏）

て說いてあり、儒敎・佛敎の思想によつて連歌の效果を述べ、當時の他の藝術と同じく幽玄の境を理想とし、社會的には連歌を和歌と對等又はそれ以上の地位に引上げ、百韻について序・破・急のうつり方を說き、作句の要旨を示し、會衆・會席の撰を定めるなど、良基の連歌に對する史觀及び連歌觀、その連歌觀の根柢をなす思想、連歌の當時の社會に於ける地位及び連歌作法の要諦とされたもの等を窺ふ事が出來る。概括して云へば、本書は史論的連歌論書と云ふべきものであると共に、纏まつた連歌論書の嚆矢と云ふべきものであり、その論の透徹してゐる點に於てすぐれたもので、後世の連歌論の準據となり、連歌道の建設に與つて力あつたものである。〔福井・志田〕

付喪神（つくもがみ）　繪詞　二卷　【別名】「付喪神記」、又は「付喪神緣起繪」。原名（？）「非情草木成佛」。「近古小說解題」には、「三條西實隆公記」明應六年十月十五日の條の、「內外萬物緣起」と云ふのも、この繪卷の事かと疑つてある。なほ、「今鏡」の一名を「つくもがみの云ふべきものであるが（泣不動緣起に、安倍晴明が付喪神を祭つて僧知空の病を證空に移して癒す事があり、「化物草子」（別項）にも器怪說話が含まれてゐる）、「付喪神」の名だけは「伊勢物語」の「百年に一年足らぬ九十九髮」の歌詞から來てゐる事は、本文からも疑なく推定される。又、本文中尊勝陀羅尼の功德で化昔なりけり」といふ片句に、「岩戸あけしけしきぞ見する今日の春」、又「誰がひきし小松や高くなりぬらむ」、又「藥子と我なめそめし春もありて」、又「古里もかはらぬ色に梅咲きて」の如く百句附けを試みてゐる。これを一句百句附といふ。俳諧に於ても「犬筑波」（別項）に一句に多數附けたものがあり、貞門（別項）の非果を得た。

【附記】曲亭馬琴作「昔語質屋庫」（別項）の構想は、本書に多少の示唆を得てゐるのではないかと思はれる節がある。同書の見臺先生も本書の古文先生の變身ではなからうか。

【參考】好古小錄上藤貞幹（書書）○訂正增補考古書譜卷八・九○近古小說解題○室町時代果果果

設に與つて力あつたものである。〔福井・志田〕

付喪神（つくもがみ）　繪詞　二卷　【別名】「付喪神記」、又は「付喪神緣起繪」。原名(?)「非情草木成佛」。「近古小說解題」には、「三條西實隆公記」明應六年十月十五日の條の、「內外萬物緣起」と云ふのも、この繪卷の事かと疑つてある。なほ、「今鏡」の一名を「つくもがみの物語」と呼ばれてゐるが、それとは全然別種のものである。【成立】土佐光信筆に似てゐるから、畫風からすれば室町時代。平出氏は原本の成立年代を、院政時代乃至鎌倉時代の初期と觀ようとしてゐる。鳥羽僧正畫、僧成賢詞の繪卷「非情草木成佛」に似て、畫も詞も少いとは「好古小錄」の云ふ所であるが、古川躬行・黑川眞賴は一物二名と云ひ、平出氏は「非情草木成佛」の增補が、「付喪神」であらうと推測してゐる。作者は不明であるが、密敎の人の手に成つてゐる事だけは確かである。【諸本】美濃國岐阜崇福寺藏本は、標題東寺交輪院傳來「非情草木成佛」（大倭繪名卷競には付喪神記）、卷尾に「左大史小槻宿禰書畫」（一說には眞言宗東大寺傳燈大法師任賢）とある。室町時代小說集所收のものは、詞書僧儀拙の二卷本を寬文六年に寫したものである。刊本としては、右の外、日本文學大系第十九卷にも收めてある。【題材】寓話、異類物、緣起物。百鬼夜行圖等にも描かれてゐるやうな、器物の妖怪に關する說話であるが、謠曲等に强調されてゐる草木國土悉皆成佛の旨趣を說かうとした宗敎色の濃厚なものである。本書卷頭に「陰陽雜記云、器物百年を經て化して精靈を得てより人の心を誑かす。これを付喪神と號すといへり」とあるので、付喪神の意味は明かであり、後世の百物語式妖怪の古い形とも云ふべきものであるが（泣不動緣起に、安倍晴明が付喪神を祭つて僧知空の病を證空に移して癒す事があり、「化物草子」（別項）にも器怪說話が含まれてゐる）、「付喪神」の名だけは「伊勢物語」の「百年に一年足らぬ九十九髮」の歌詞から來てゐる事は、本文からも疑なく推定される。又、本文中尊勝陀羅尼の功德で化物が退散するのは、「大鏡」の九條師輔が百鬼夜行に逢ふ條が本據であらう。【梗概】康保の頃、煤拂で洛中洛外の家々から路傍に捨てられた不用の古道具類が、舊主の人間を恨み集合して各々妖怪となり仇を報じようと議した。數珠の入道一連は因果の理を說いて、仇を恩で報ぜよと勸めたが、手棒の箸太郎が怒つて打擲して追立てた。殘つた者共は古文先生の意見に從ひ、節分の夜各々身を虛無にして造化神の手に從ひ、忽ち千種萬樣の妖物となり、舟岡山のうしろ長坂の奧を根據とし、京白河へ出ては人間に仇をして歡樂に耽つた。或る時妖物等は造化神を氏神に祭る事を思ひ立ち、變化大明神と號して祭典を行ひ神輿を作り、卯月五日山車や鉾の行列を立てて一條通を東へ練つて行くと、臨時の除目のため參內の途の關白殿下に出逢つた。供人の驚いて昏倒する中に、關白は騷がず化生を呪むと懷の御守から火炎を發して覆ひ掛つたので、妖物等は度を失つて逃げ散つた。これはその守が某僧正の書いた尊勝陀羅尼だつた爲めと云ふ事が分つて、主上はその僧正を召して、淸涼殿で如法尊勝大法を行はしめられると、護法童子が現れ化生の城へ飛び移つて、これを降伏した。悔悟した怪物等は、去年の冬から山深く隱遁してゐる一連上人の柴の庵を叩いて弟子となり、精進修行して皆佛果を得た。

【附記】曲亭馬琴作「昔語質屋庫」（別項）の構想は、本書に多少の示唆を得てゐるのではないかと思はれる節がある。同書の見臺先生も本書の古文先生の變身ではなからうか。

【參考】好古小錄上藤貞幹（書畫）○訂正增補考古畫譜卷八・九○近古小說解題　○室町時代小說集解題　（島津）

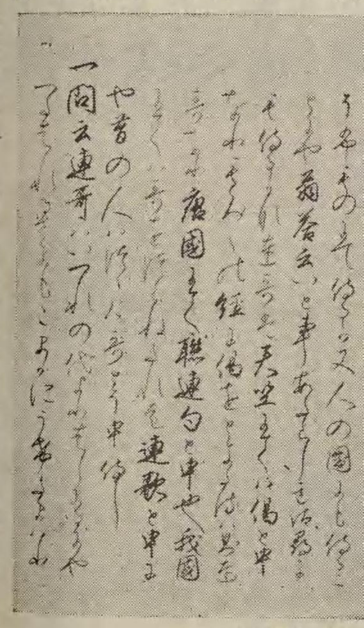
附合（つけあひ）　連歌・俳諧　【解說】連歌・俳諧に於て句を附け合ふことをいふ。この場合先に出される句を前句（まへく）といひ、これに附ける句を附句（つけく）といふ。前句は五七五の長句、七七の短句いづれでも先に出された句が前句で、前句が長句なれば附句は短句を附け、前句が短句なれば附句は長句を附ける。然るに附句は連歌以來、和歌の上句下句とは異なつて、前句に不卽不離のさまに附けるを要とする（比況集）。これに二つの場合がある。（一）は二句連歌（短連歌）の場合で（俳諧に於ても同樣）、この場合は、その一句を片句（長短何れの方でも）といひ、その片句に附ける場合であり、（二）は長連歌（長篇俳諧に於ても同樣）中に於て前句に附ける場合である。片句に附ける場合は、指合（さしあひ）（別項）・去嫌（さりきらひ）等の關係がないから、前句の心も詞もいたはつて、その前句の意を引き起し、或は引きかへなどして附ける。例へば、「いづくの山にかくれ住むらむ」といふ前句に、「卯の花の散れども鳴かぬ郭公」と附けたのは、人の事を鳥に引きかへた類である。この場合、附句を一句以上附け試みることも出來る。宗祇が既に「人の心のかはる世の中」といふ片句に、百句附けを試み、これが「宗祇法師前句附」（別項）といふ名で殘つてゐる。又里村昌純の「老の周諄」の如きも、「思ひ出づるは昔なりけり」といふ片句に、「岩戸あけしけしきぞ見する今日の春」、又「誰がひきし小松や高くなりぬらむ」、又「藥子と我なめそめし春もありて」、又「古里もかはらぬ色に梅咲きて」の如く百句附けを試みてゐる。これを一句百句附といふ。俳諧に於ても「犬筑波」（別項）に一句に多數附けたものがあり、貞門（別項）の俳諧に於ても一句に多數の句を附けた例がいくらもある。長連歌・長篇俳諧中の前句に附ける場合は、式目（別項）の規定上その前句許りでなく、その前々句を顧慮する必要があつて、片句に附ける場合とは異なつた注意を要する。式目に於ける句數の規定上、春・秋・戀の句は三句までは連接せしめねばならず、又前々句との打越（うちこし）・輪廻（りんね）等の指合（さしあひ）（別項）・去嫌を考慮して附ける必要がある。隨つて前の場合よりは前句に對する關係が複雜になつて來る。

【種類】附合には、前句に附ける附方とか方法とかによつて種々の種類がある。前句の意を取つて附ける附方を「心附（こころつけ）」といふ。例へば「海山の心にうかぶ寢覺して」に「はぐくみ立てし父母のあと」と附けた如きは心附であつて、旅路の寢覺に過ぎて來た海山が心頭に映ずると共に、海嶽も及ばない兩親の高恩を思ひ寄せたものである。又前句の中の詞とか物とかに緣を持つものを寄合（よりあひ）といひ、この寄合を以て附ける附方を「寄合附」といひ、後には專ら「物附（ものづけ）」、又は「詞附（ことばづけ）」といふ。例へば、「きさらぎの別の鶴の林にて」に、「よるなく淚月ぞかすめる」と附けた如きは、釋尊入滅の鶴林の鶴といふ詞に、夜なくといふ寄合、別といふに淚、林といふに月霞むといふ寄合を以てしたものである。この「寄合附」には、前句に於けるすべてのものの寄合を附句に盛り込むことが不

多く、內閣文庫本・圖書寮本・學習院本・岩瀨文庫本・北野本・神宮文庫本等があり、その他個人傳來のものが少くない。この中、學習院本は連歌師阪昌文の寫で、里村家等の諸本を以てよく校合してある。古俳書文庫第一・二篇に收む。【內容】「古今集」に兩序のあるに倣家のこれによつて勵まされたことも少くはなく、又本集が第一撰集となつて、第二撰集「新撰菟玖波集」（別項）が撰集されるにも至つてゐる。本集の序文によつて良基等の連歌觀も窺ひ得る。〔福井・志田〕

菟玖波之栞（つくばのしをり）　連歌書　一卷

の頃如何なる人によつて如何なる連歌が行はれたかといふことを窺ふことが出來る。また本集によつて連歌の地位の高められたことは甚だ大で、新しい作



た由が述べられてゐて、問者は良基、答者は老翁といふ形になつてゐる。かくてその問答に於て連歌の名義・起原・沿革、その效果、百韻・千句の運び方、發句・脇句の仕樣、稽古の要諦、斯道に對する學書、上古體・中古體・近來體の三體（作例も擧ぐ）、その他の諸體、式目撰定の由來、賦物（ふしもの）・連歌の性質、會席・執筆（しゆひつ）の作方等が十七項に分つて述べられてゐる。【價値】連歌の學書として組織立てその論の透徹してゐる點に於てすぐれたもので、後世の連歌論の準據となり、連歌道の建

（圖書寮藏）

可能なこともあるので、その場合は前句中の肝要なものに對する寄合を以て附ける。例へば、「柴の戸のあけぼのは猶かすみにて」に「ほどなき夢に捨つる世の中」を附けた如きは、曙に程なき夢と附け、柴の戸に捨つる世の中と附けて、霞には別にあしらひがない。これは曙、柴の戸の二つを肝要とし據り所としたもので、これを寄所（よりどころ）と名づける。かくて結ぶといふ詞には草枕・夢・紐・霜・氷等の詞を附け、繞るといふ詞には車・月日・時雨と附けるが如き附所詞といふものも自ら制約されて出來てゐる。又眼前の景物を取つて附けるのがあつて、例へば「草の庵柴の戸ぼそも住わびぬ」に、「松風ふきて花の散る頃」と附けた如きは景附であり、又古歌や本説（故事）などを以て附けるのがあつて、例へば、「秋風寒み夜の長きころ」に、「ひとりねは姨捨山の月なれや」と附けた如きは、「古今集」の「我が心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」の本歌によつたものであり、「問はれしは後の思出で」に「塚のこる生田の小野の草の原」と附けた如きは、「大和物語」の生田川に身を投げた故事によつたもので、かゝる類を本歌本説の附句と云ふ。この本歌本説は和歌の本歌取に倣つたもので、短い句に複雜な意義を包含させることを目的としたものである。但しこれに用ひる本歌本説は、人口に膾炙し多數の人々に了解せられてゐるものを用ひるのが效力が多く、且つ本歌を取り用ひるに、その詞句によることがあり、その俤によることがあり、本歌に言つてあることを反對に云ふことがあり、前句に本歌の心詞を幾分匂はせてゐる場合は、附句に至つてこれを表はすなど種々の方法がある。又材料の上から附方に種々の方法がある。景氣を本とする句にも、山類に水邊を附けることがあり、これに反して水邊に山類を附けることがある。例へば、「煙たつ麓の里は木がくれて」に、「小舟すておく江こそ暮れぬれ」と附けた如きは前の例で、「柳かれたつ遠の川つら」に「山里にさし入淺く門ふりて」と附けた如きは後の例である。又草木に於て總名と種名との附方に於て、前句に總名があつて附句に種名を用ひるのは宜しく、これに反する場合は多くは不可とした。例へば、「咲きぬる花も色かはりゆく」に、「冬枯の小野の萩が枝霜ふりて」と附けた如きは、前句の花が附句の萩の花に取りはやされて面白く、これを「木に名木」を附け、「草に名草」を附けると言つてゐる。鳥獸に於てもこれと同じく總名に種名を附けるは宜しく、種名に總名を附けるを嫌つた。例へば「いかなる鳥ぞ雨に鳴く聲」に「夜な夜なの月につれなき時鳥」と附けた如きは、鳥に名鳥を附けた例で宜しく、これを反對にしたのは不可であるとした。

【體附・用附】物の用（作用）を述べた前句に、その用を起す體（本體）を附句としたのを體附といひ、これに反し體を述べた前句にその用たるべき詞句を附句としたのを用附といふ。例へば弓といふのは體で、引くとか返すとかはその用であるが、體に用を附けるのは唯説明の形であつて和歌に於けると異なる所がなく、これに反し用に體を附けるのは變化があつて面白いので、いつの頃よりか體附を喜んで用附を重んじないやうになつた。例へば、「殘る櫻にわかる夏山」に、「花さそふ嵐の道は絶えやらで」。「そことも知らず匂ふ薫物」に、「契おく人に心をこがし來て」の如きは、櫻に別れるといふので嵐の花を誘ふといひ、薫物とあるので焦し來てといふの用附で、これ等は元來は面白い句であるに拘はらず、物足らぬといふやうになつたのである。【附樣諸體】和歌に於て歌體を分つてゐることに影響されて、連歌の附合を風體に分つて組織立てることが早くから行はれてゐる。「筑波問答」（別項）には十五體に分つてあり、その後、或は四十體、四十八體、八十體に分ち、宗牧の「胸中抄」（別項）には、地連歌・作骨連歌・景氣連歌・取成連歌・本歌を取連歌の五種に分つてゐる。俳諧に於ても德元の「誹諧初學抄」（別項）には體附・とりなし附・心附の三體を擧げ、季吟の「埋木」（別項）には「三五記」の歌體の分類を取つて、大きく十體に分ち、これを細かく三十體に分つ分類を擧げ、やゝ降つて支考の「古今抄」には其人・其場・時分・時節・時宜・天相・感想・面影の八體を定めた。かくて又江戸中期の連歌の方面に於て「菟玖波之栞」には、平附・四手附・風情附・詞附・違附・心附・對附・埋附の八體に分けてゐる（この中、平附・四手附・對附以外の五つは既に室町期の「白髮集」に見え、四手附は「白髮集」以前から見えるものである）。【附樣三變】連歌時代に於ける附樣（附肌とも附味ともいふ）を時代的に見ると、大體から云つて、吉野朝時代以前は詞附であり、吉野朝時代に心附の傾向となり、室町期中期宗祇（別項）頃には、心附ながらに不卽不離の傾向が著しくなつた。俳諧時代に入つては、貞門までは詞附で、談林（別項）に至つて心附の傾向となり、蕉風に於ては不卽不離の匂附となり（蕉風參照）、爾來匂附を理想としつつ十分匂附たることを得ない如き狀態で進んだ。以上の如く、連歌・俳諧に於て頗る相似た三變の變遷が見られる。〔福井・志田〕

附合小鏡（つけあひこかがみ）　俳諧作法書　小本一册【著者】雪中庵蓼太（卷頭に「雪中庵蓼太編、門人牛家著」とあるが、それはただ牛家が筆記したといふにとどまる）【本名】俳諧附合小鏡【刊行】安永四年、江戸西村源六板。【諸本】蓼太全集（俳諧文庫）・付合作法全集（俳諧文庫）・俳論作法集（俳諧叢書）所收。【內容】附合の作法を、初心者のために成るべく平易明快に敎へようとしたもので、或は煙草盆の句によつて附句の變化を説き、或は戀の上中下の例を出して曉らせ、或は執中の法を示して案じ方を諭すなど、凡て具體的通俗的に説明してある。かくて極めて巧妙に附合の神髓を會得させるやうに出來てゐて、蓼太がかうした方面に勝れた手腕をもつてゐた事が分る。これはやがて彼が多くの門人を擁し得た一原因でもあつたらう。なほ卷末に社中及び諸名家の連句發句が附載してある。〔潁原〕

附合てびき蔓（つけあひてびきづる）　俳論書　小本一册【著者】高井几董【刊行】天明六年十一月の跋がある。京、汲古堂【諸本】附合作法全集（俳諧文庫）・中興俳話文集（俳書大系）所收【解説】附句の作法心得を説いたもので、先づ附合に關する古來の名目を擧げて私説を附し、脇・第三の附け方から、一般に附句の案じ方を、一々實例によつて丁寧懇切に説いてある。而してその實例として擧げたものは、著者と蕪村との兩吟「桃李」（別項）から抄出したので、以て几董の俳論を窺ふだけでなく、蕪村一派の連句の傾向をも知ることが出來る。言はば「桃李」の評註とも見らるべきもので、特にその説明に、必ず三句のうつりを顧慮してゐる如きは、几董の着目の凡でない事が窺はれる。〔潁原〕

辻淨瑠璃（つじじやうるり）　小説　【作者】幸田露伴【發表】明治二十四年の春から夏へかけて國會新聞に連載【刊行】明治二十四年十月「新葉末集」（春陽堂。露伴全集第一卷・現代日本文學全集（幸田露伴集）所收。

【梗概】德川の中期末、西村虎吉といふ京都の釜師の家は、累代の名家だが、虎吉は父の歿後母の手一つで育てられ、その美貌と才氣とに意氣を失はぬ。さうした彼の面目がよく描かれてゐる。それにしては結末が餘りに平凡で、且つ彼の周圍の人物のあまりに朦朧として傀儡同樣であるのが慊らぬ。この續編として書かれた作品に、「寢耳鐵砲」（明治二十四年夏）がある。これと合せ讀むと、「辻淨瑠璃」の平凡な結末が、必ずしも平凡でない展開をなすた

の本歌又は本歌取に倣つたもので短い句に複雜な意義を包含させることを目的としたものである。但しこれに用ひる本歌本説は、人口に膾炙し多數の人々に了解せられてゐるものを用ひるのが效力が多く、且つ本歌を取り用ひるに、その詞句によることがあり、その俤によることがあり、本歌に言つてあることを反對に云ふことがあり、前句に本歌の心詞を幾分匂はせてゐる場合は、附句に至つてこれを表はすなど種々の方法がある。又材料の上から附方に種々の方法がある。景氣たるべき詞句を附句としたのを用附といふ。例へば弓といふのは體で、引くとか返すとかはその用であるが、體に用を附けるのは唯説明の形であつて和歌に於けると異なる所がなく、これに反し用に體を附けるのは變化があつて面白いので、いつの頃よりか體附を喜んで用附を重んじないやうになつた。例へば、「殘る櫻にわかる夏山」に、「花さそふ嵐の道は絶えやらで」。「そことも知らず匂ふ薫物」に、「契おく人に心をこがし來て」の如きは、櫻に別れるといふので嵐の花を誘ふといひ、薫物

代的に見ると、大體から云つて、吉野朝時代以前は詞附であり、吉野朝時代に心附の傾向となり、室町期中期宗祇(別項)頃には、心附ながらに不即不離の傾向が著しくなつた。俳諧時代に入つては、貞門までは詞附で、談林(別項)に至つて心附の傾向となり、蕉風に於ては不即不離の匂附(にほひつけ)となり(蕉風參照)、爾來匂附を理想としつつ十分匂附たることを得ない如き狀態で進んだ。以上の如く、連歌・俳諧に於て頗る相似た三變の變遷が見られる。〔福井・志田〕

附合小鏡(つけあひこかがみ) 俳諧作法書 小本一附し、脇・第三の附け方から、一般に附句の案じ方を、一々實例によつて丁寧懇切に説いてある。而してその實例として擧げたものは、著者と蕪村との兩吟「桃李」(別項)から抄出したので、以て几董の俳論を窺ふだけでなく、蕪村一派の連句の傾向をも知ることが出來る。言はば「桃李」の評註とも見らるべきもので、特にその説明に、必ず三句のうつりを顧慮してゐる如きは、几董の着目の凡でない事が窺はれる。〔潁原〕

辻淨瑠璃(つじじやうるり) 小説 【作者】幸田露伴【發表】明治二十四年の春から夏へかけて國會新聞に連載【刊行】明治二十四年十月「新葉末集」(春陽堂。露伴全集第一卷・現代日本文學全集(幸田露伴集)所收。

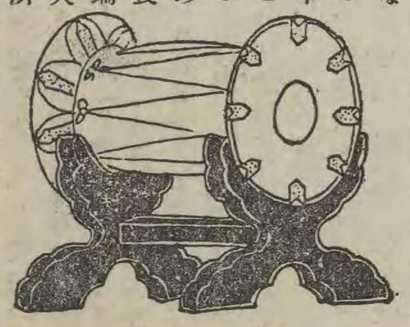
【梗概】德川の中期末、西村虎吉といふ京都の釜師の家は、累代の名家だが、虎吉は父の歿後母の手一つで育てられ、その美貌と才氣とに心傲つて遊蕩に耽り、自慢の淨瑠璃が女に持てはやさるゝので愈々興を覺え、遊びが過ぎると共に、名代の釜師の家業も次第に衰へて行つた。母は心配してお道といふ嫁を取らせ子まで出來たが、それにも飽きて以前の遊蕩生活に歸つた。妻はこれを苦にして到頭世を去り、後に殘つた老母は孫を抱へて途方に暮れた。流石の虎吉も少し目が醒めかけたが、「若い時は短い、思ふ存分遊べ」と放埒を盡くした果ては、京にゐたたまらなくなり、老母と愛兒を殘して江戸へ出かけた。途中淨瑠璃を唸つて僅かの金を貰ひ、辛くも江戸に着いたが、廣い都に一人の知己もないので、久保町の原へ出て、毎日辻淨瑠璃を語つてその日を送つてゐるうち、毛利讃岐守の隱居にその藝を見出され、座右に侍する事となつた。かうして生活の安定を得た彼は、京都から老母と愛兒とを迎へ、初めて一家團欒の樂しみを味つた。爾來虎吉はその藝と才氣とを以て諸侯に愛せられ、安樂な日を送る身となつた。

【批評】虎吉は、露伴が好んで書く人物の一人で、我執の强い、人を人とも思はぬ面魂を持つてゐた。放蕩を始めたら最後、人がなんと言はうが徹底しなくては承知しない。旅中乞食同樣になり下つて、淨瑠璃で僅かに口を糊してさへも、「靑天井に土席(むしろ)、戸障子なしの大世界、御見物は天下の人々」と豪語して昔の意氣を失はぬ。さうした彼の面目がよく描かれてゐる。それにしては結末が餘りに平凡で、且つ彼の周圍の人物のあまりに朦朧として傀儡同樣であるのが慊らぬ。この續編として書かれた作品に、「寢耳鐵砲」(明治二十四年夏)がある。これと合せ讀むと、「辻淨瑠璃」の平凡な結末が、必ずしも平凡でない展開をなすための前提だつたことがわかる。「寢耳鐵砲」は虎吉改め道也が、島津公から鐵砲鑄造を賴まれ、これに成功してその用達となり、相當の富を作る。やがて花柳の巷に踏み入つて遊女お萬と戀に落ち、朱座の佐藤の娘お柳とも愛し合つて結婚した上、故郷に錦を飾る。その際、昔彼を惡口した釜師たちが、ひとしく彼に媚びる中に、唯ひとり、大西の淨珠のみ藝術家氣質を守つて道也に屈服しなかつた。といふところで終つてゐる。これまで理想主義であつた露伴が、玆に至ると、漸く寫實的傾向を帶び、「五重塔」(別項)を生むに至つた徑路がほぼわかる。ただ道也とお萬及びお柳の關係が、紅葉ほど巧みに描かれてゐないのは物足らぬ。〔高須〕

對馬音(つまおん)「字音」を見よ。

續の原(つづきのはら) 俳諧集 一册【編者】岡村不卜【名義】編者自身の「向の岡」(延寶八年刊)の續集として企てたものであるので、かく題したのである。【刊行】貞享五年。同年三月の不卜の自序がある。【諸本】古來原本は稀で多くは寫本で傳はつて來た。文政二年九月の再版本は、米澤の人、山崎麗岑の祕藏した原本を、碓嶺・柳々の出版したもので、曉花の跋にその旨が述べられてゐる。この再版本には別に「新つゞきの原」二册が附された。文政十年の「俳諧新七部集」には、「新つゞきの原」及び跋を除いて收め、「談林俳諧集」(俳書大系)には、「新つゞきの原」を除き跋を附して收めてある。又本集から芭蕉判の、冬の句合の部分だけを拔出して收めたものには、闌更の「俳諧落葉考」(明和八年刊)を初め、蕉門七書・芭蕉翁七部餘錄・芭蕉翁俳諧四部錄・俳諧一葉集・俳諧袖珍鈔及び諸種の芭蕉全集に收められてあり、又四季の句合の部分全部は俳諧文庫・俳諧句合集に收められてゐる。【內容】不卜が貞享四年の冬に四季各十二番の句合を四卷それぞれ別の判者に判させたもので、春は素堂、夏は調和、秋は湖春、冬は桃靑が判者となつてゐる(秋の句合のみは十一番ある)。作者には不卜も加はつてゐて貞門談林の人もないではないが、多くは蕉門の人々である。これに歌仙五卷(調和・不卜等六吟一、才麿・舉白等五吟一、蚊山・不角等七吟一、其角・峽水等六吟一、追加として不卜・琴風・其角三吟一)と四季の發句百五十八句とを添へて、貞享五年に出版したのである。なほ五歌仙に於て注意を惹くのは、五卷の發句が順に柳・櫻・柳・櫻と來て五卷目の發句が櫻と柳とを詠み込んだものになつてゐることである。發句の部の作者も、句合に於ける如く蕉門の人々が多く、芭蕉の句も四句加はつてゐる。【價値】談林調であつた「向の岡」の續集であり、作者に貞門談林の人もあるに拘はらず、本集全體の調子は蕉風調になつてゐる。貞門談林が時代的に變化し、或る人々は特に蕉風化してゐる推移を窺はしめる。本集はこの點に於て先づ注意せらるべきものである。從つて又本集は蕉風を究めるにも除外し難く、特に冬の句合の芭蕉の判は、芭蕉を知るに見逃し難いものである。判そのものが芭蕉の正風眼が如何に高くなつたかを知らしめ、判詞の中の「細くからびて」は芭蕉の所謂細みに通じ、「滑稽の誠」は俳諧の誠の義である如き、その俳諧觀の愈々確立し來るを見る。又その跋(貞享四年冬)に於て、不卜のことを云つて「風雅の奴」と云つてゐるのも、翌年執筆の「吉野紀行」に云ひ出す風雅觀の前提をなす語である。かく本集は時代的に重要な意義を持つ一集である。〔志田〕

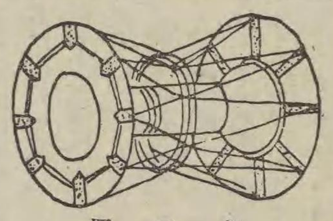
鼓(つづみ) 樂器【名稱】都々美・都豆美・豆々美・都曇等とも書す。一說に梵語 Dudubhi, Dundubhi から來たとも稱せられる。【解說】胴の兩面に革を當て、これを手又は他のもので打つて鳴らす打樂器の種類の總名。【種類】その形狀及び用法の如何により多くの種類がある。卽ち鞨鼓・壹ノ鼓・二ノ鼓・三ノ鼓・四ノ鼓・腰鼓・揩鼓・鷄婁鼓・鼗(ふりつづみ)・大鼓(おほつづみ)・小鼓(こつづみ)・田鼓(たつづみ)等。〔鞨鼓〕鞨鼓は雅樂の左方樂(唐樂・林邑樂等)にて主として用ひられるが、その變形したものが伎樂や田樂に於て用ひられ、それを胸に帶びて踊るものに鞨鼓踊と稱するものがある。雅樂で用ひる鞨鼓は第一圖に示す如く、少しく中の太くなつた圓筒形の筒の兩面に革面を當て、これを臺上にのせたものであつて、筒の長さ約一尺、端徑五寸、中央の膨らんだ所で徑五寸六七分。樫又は櫻或は唐木(最上とす)で作り、金地又は他の色で彩色を施し、時として蒔繪などをする。革面の徑凡そ七寸七八



第一圖

分、周圍は鐵輪を心としてあり、これに革を纏うて張り、糊で附け、これに孔をあけ紐を通す。その部分に韋を以て作つた所の劔形の錦皮を張る。その數八個ある。凡て臺は黑漆で塗り、その隅に朱塗の隈を施す。桴は二本を用ひ、その長さ一尺二寸、太さ下方にて圓周一寸三分許ある。鞨鼓は、雅樂に於ては太鼓・鉦鼓（別項）と合はせて用ひ、これを三鼓と呼ぶ。三鼓中で鞨鼓を最も重きものとして、通常最長者がこれを司る。御遊舞樂には必ず一老の役として上座に置く。但し左方の樂のみに用ひ、右方樂にはこれを用ひない。その打ち方は、左右の手に桴を持ち、その革面を撫でるやうに打つ。鞨鼓はもと羯に起り、古く支那に入つたと稱せられる。兩手に杖を持つて打つから兩杖鼓とも稱せられた。唐に至つて大に盛行し、玄宗皇帝はこれを能くせられ、汝南王璡に自らこれを傳授されたといふ。我が國へ傳はつたのは奈良朝の頃と思しく、西大寺資財帳には、その名が載つてゐるが、光仁天皇の寶龜九年には、壬生驛麻呂が、鞨鼓八聲（阿禮聲・阿禮短聲・大揭聲・璫聲・沙聲・織錦聲・泉郎聲・小揭聲）を定めたと言はれてゐる。平安朝に入つては、多くの樂家がその譜を著はして用法を論じてゐる。

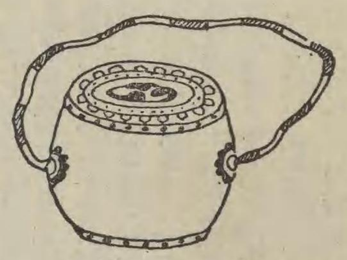
〔壹ノ鼓・二ノ鼓・三ノ鼓・四ノ鼓〕 この四つは總稱して細腰鼓といひ、皆大體同じやうな制になつてゐて、その大さを異にし、壹ノ鼓が最も小さく、漸次大きくなつて、四ノ鼓が最も大きい。併しその中で、二ノ鼓と四ノ鼓とは古くその傳を失して、今はただ壹ノ鼓と三ノ鼓とだけが殘つてゐる。共に雅樂に於て用ひられるが、壹ノ鼓は極めて稀で、三ノ鼓は主として高麗樂、即ち右方樂に用ひられる。壹ノ鼓は第二圖に示す如く、中部の細くなつた木の筒の兩端に革面を當てたもので、革面の徑八寸許、筒長一尺二寸、筒口徑五寸三分許、革の表裏に白粉を施し、鞨鼓に似て調穴八個あり、韋劔形を以て飾り、調緒を用ひて兩革面を緊めてある。桴は長さ一尺許の棒を用ひ、黑漆が塗つてある。林邑樂に用ひられるが、又「壹ノ鼓」と稱する舞樂がある。



第二圖

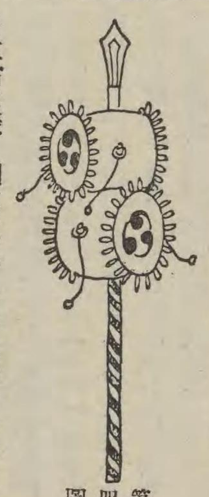
これは左舞で、平調に屬し、裏頭樂を吹いて、舞者は首から壹ノ鼓を懸け、他の一人の舞者は首から二ノ鼓を懸けて互にこれを打ちながら舞ふ。二ノ鼓は壹ノ鼓とその制同じく、少しく大であつて、革面の徑九寸八分許、筒長一尺四寸許、筒口徑七寸二分許であるといふ。三ノ鼓は一に吳鼓といひ、その制壹ノ鼓と同じく、革面徑一尺四寸許、筒長一尺五寸、筒口徑七寸二分許、調緒は黃糸を用ひ、桴は白木である。これは主として右方樂に用ひ、鞨鼓の代用とする。三ノ鼓の譜には帝の字を用ひ、これをテイと稱へる。これ等は極めて古く胡國より支那及び朝鮮に入り、我が國へも既に上世に傳はつたものと思はれる。樂家錄には「本邦樂書に曰く、壹鼓は本と胡國の器なり。彼國天子祭神の時之を擊ち、以て太平を唱ふ。故に今古禮參音聲等に之を用ふ。古樂の具となす。云々」とある。三ノ鼓は推古天皇二十年に、百濟人味摩之が歸化して伎樂を傳へた時に、これを傳へたものと稱されてゐる。

〔鷄婁鼓〕 その制は太鼓に似てゐて、第三圖に示す如く、筒長六寸許、その口徑六寸、中央は少しく膨らんで徑七寸許、兩端面に革を張り、鐵釘をもつて胴に固く着けてある。革面には銀地に黑彩を施し、筒面は金地に彩色を施してある。筒の左右に環を施し、黃緒の紐が附いてゐて、これを頸に懸けて打つ。桴は鞨鼓の桴と同じもの一本を用ひる。「河南浦」には舞者の一人がこれを打つて出る。支那の唐代新樂の器であると稱せられる。一說には唐朝に曉を報ずるために用ひたので鷄婁といふとある。



第三圖

〔鼗〕 俗に田々太鼓といふ。支那に於て、古く周の頃より存すると稱せられる。その雅樂に用ひられるものは、第四圖に示す如く小さな鼓二個の革面を互に直角の向に重ねて、その筒を長い一本の棒で貫き、兩鼓の筒の側面に各々耳環を二個附け、それより細長い糸を垂れ、その端に小さな珠を附け、棒を以てこれを左右に振り廻はせば、その糸端の小珠が革面に當つてガラ〳〵と音を發する如くになしたものである。支那及び朝鮮には大きなものが行はれ、特に朝鮮李王家の雅樂にては、その長さ人身に比すべきものがあるが、我が國雅樂に用ひるものは小さく、革面徑二寸五分許、筒長三寸五分許、柄長一尺八寸許、その鼓上に出づること三寸許、その柄頭は尖つて八角になり、金を以てこれを包む。筒の左右に垂れた糸の長さ二寸許。革面は銀地に黑彩を施し、筒も柄も唐木を以て作る。普通に鼗は鷄婁と共に、一人でこれを用ひることになつてゐる。支那及び朝鮮では別に一人があつてこれを用ひる。鼗は太鼓の左桴に合はせてこれを振り、また太鼓の右桴に合はせて鷄婁鼓を打つ。これは舞人が行列參向の時にこれを行ひ、又「一曲」を奏する時に用ひるのである。この「一曲」は、道樂の中に於て舞ふのであつて諸大寺の勅會などに主として行はれる。



第四圖

〔揩鼓〕 扁平な鼓で、第五圖に示す如く、革面徑一尺二寸許、筒長六寸許、筒口徑九寸許、革の表裏に白粉を施し、調穴八つあり、これに韋劔形を着けることは鞨鼓に同じい。これは桴を用ひず、左肩に載せ、指を以てこれを打つ。その打方に亭と摺との二つがある。亭とは中指を以て革を打つのであつて、摺とは三指を以てこれを摺り撫でるのである。摺を一にムといふ。「書經」蔡傳通考に曰く「答臘鼓、制廣二鞨鼓一而短、以レ指揩レ之、其聲甚震、俗謂二之揩鼓一云々」と。これは西域より支那に入つたものらしい。

第五圖

〔腰鼓〕 三ノ鼓と同制のものを、紐を以て頸より懸け、腰の邊に吊して兩手を以てその革面を打つて鳴らす。第六圖はその古圖で（信西入道古樂圖）、或は三ノ鼓が推古天皇の頃に伎樂として傳へられた當時は、專ら腰鼓として用ひられたものかも知れぬ。今も伎樂及び田樂の打つ前に先づ革を火で焙つてかち〳〵にして後、調緒でかがつて強く締め上げ、更に小締で締めつける。

第六

〔小鼓〕 前記の大鼓と共に、能樂囃子及び長唄囃子に用ひられる外に、單獨にも囃子樂器として用ひられる。これは雅樂の壹ノ鼓から轉じ百之助の名を代々襲名する家柄が古く、明治になつて柏扇之助一派が興つた。

【參考】樂家錄安倍季尙○羯鼓錄 唐南卓（唐代叢書四ノ二）○猿樂傳記下卷著者未詳○雜誌「能樂」（一〇ノ一）○鼓筒之鑑定一卷 生田耕一・山崎樂堂○日本音樂講話田邊尙雄○日本音樂概

我よりも貧しき人の世にもあれは茨からたちひまくぐるなり

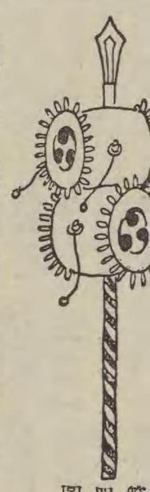
杉が枝を雲は走りて吉野なるかしの尾上にはだれ雪降る

【附記】秋成の歌は、この外に、「每月集」「十雨餘言」「歌島稻荷獻詠和歌」などに見え、また

はして用法を論じてゐる。

〔壹ノ鼓・二ノ鼓・三ノ鼓・四ノ鼓〕この四つは總稱して細腰鼓といひ、皆大體同じやうな制になつてゐて、その大さを異にし、壹ノ鼓が最も小さく、漸次大きくなつて、四ノ鼓が最も大きい。併しその中で、二ノ鼓と四ノ鼓とは古くその傳を失して、今はただ壹ノ鼓と三ノ鼓とだけが殘つてゐる。共に雅樂に於て用ひられるが、壹ノ鼓は極めて稀で、三ノ鼓は主として高麗樂、即ち右方樂に用ひられる。壹ノ鼓は第二國より支那及び朝鮮に入り、我が國へも既に上世に傳はつたものと思はれる。樂家錄には「本邦樂書に曰く、壹鼓は本と胡國の器なり。彼國天子祭神の時之を擊ち、以て太平を唱ふ。故に今古禮參音聲等に之を用ふ。古樂の具となす。云々」とある。三ノ鼓は推古天皇二十年に、百濟人味摩之が歸化して伎樂を傳へた時に、これを傳へたものと稱されてゐる。

〔鷄婁鼓〕その制は太鼓に似てゐて、第三圖に示す如く、筒長六寸許、その口徑六寸、中央を左右に振り廻はせば、その糸端の小珠が革面に當つてガラ〳〵と音を發する如くになしたものである。支那及び朝鮮には大きなものが行はれ、特に朝鮮李王家の雅樂にては、その長さ人身に比すべきものがあるが、我が國雅樂に用ひるものは小さく、革面徑二寸五分許、筒長三寸五分許、柄長一尺八寸許、その鼓上つ。その打方に亭と摺との二つがある。亭とは中指を以て革を打つのであつて、摺とは三指を以てこれを摺り撫でるのである。摺を一にムといふ。「書經」祭傳通考に曰く「答鼗鼓、制廣二鞨鼓一而短、以レ指揩レ之、其聲甚震、俗謂二之揩鼓一云々」と。これは西域より支那に入つたものらしい。



第四圖

〔腰鼓〕三ノ鼓と同制のものを、紐を以て頸より懸け、腰の邊に吊して兩手を以てその革面を打つて鳴らす。第六圖はその古圖で（信西入道古樂圖）、或は三ノ鼓が推古天皇の頃に伎樂として傳へられた當時は、專ら腰鼓として用ひられたものかも知れぬ。今も伎樂及び田樂の中には用ひられてゐる。

第六圖

〔大鼓〕普通「オホカハ」と呼んでゐる。能樂囃子及び長唄囃子に用ひられる。雅樂の三ノ鼓から轉じて來たと稱される。その形も三ノ鼓と大同小異である。筒の形は第七圖に示す如く、兩端の膨らんだ部分を乳袋といひ、乳袋の端面で革に當る所を皮口といひ、その内部の凹所を海といひ、筒の中央部の細い所を巣合といひ、その部に楕圓形の巣といふものがある。筒の長さ九寸三分乃至九寸五分、乳袋の長さ三寸乃至三寸一分、巣の長さ三寸一分乃至三寸三分位、乳袋の直徑三寸九分位、その内徑三寸乃至三寸一分、隨つて皮口の厚いのと薄いのとある。筒の木質は櫻を普通とし、花櫚これに次ぐ。變り物としては栗・柿・桐などもある。革は牛皮を用ひる。革面直徑七寸四分位。革面には繪模樣及び化粧輪などなく、中央の乳袋の當る所を「ブン廻し」といふ。調緒は麻紐を朱紅色に染めたもので、これを革面の緣にある六個の孔（調穴）に通して兩革を結び、胴を挾んで締め上げる。これを打つ前に先づ革を火で焙つてから〳〵にして後、調緒でかがつて強く締め上げ、更に小締で締めつける。

第七圖

〔小鼓〕前記の大鼓と共に、能樂囃子及び長唄囃子に用ひられる外に、單獨にも囃子樂器として用ひられる。これは雅樂の壹ノ鼓から轉じて來たと稱され、或は大鼓が變化したものだとも稱せられる（恐らく前說か）。一說に奈良の樂人美濃權頭が工夫し、これを能樂の宮增彌左衞門に傳へたのが初めであるといふ。その各部の名稱は大鼓と同じであるが、筒の形は少しく異なり（第八圖）、又革面も白色となし周緣並びにブン廻しに黑色の化粧輪を畫き、調穴の所に同じく黑色の花瓣模樣がある。革面直徑六寸六分位、化粧輪直徑三寸九分位、化粧輪の太さ一分五厘乃至三分。筒の全長八寸三分、乳袋の長さ二寸六分位、乳袋直徑三寸三分五厘位、その内徑二寸七分位、巣の長さ三寸一分位。筒の木質は大鼓と同じ。革は鹿の背皮を用ひる。調緒も大鼓と同樣であるが、大鼓の如くに强く締めないで、幾分弛くなつてゐる。大鼓と同じく朱色の麻緒であるが、茶色・紫色などを用ひることがある。特に紫色のものは紫調と云つて最上とし、格式を以て他に許さないことが多い。

第八圖

〔鼓の流派〕能樂の大鼓には高安流・葛野流・大藏流の三流及び石井流、小鼓には幸流・觀世流・大倉流の三流がある。これ等の系統に就いては「猿樂傳記」に詳しい。長唄囃子鼓には田中傳右衞門・六郷新三郎・望月太左衞門・福原百之助の名を代々襲名する家柄が古く、明治になつて柏扇之助一派が興つた。

【參考】樂家錄安倍季尙○羯鼓錄 唐南卓（唐代叢書四ノ一）○猿樂傳記下卷著者未詳○雜誌「能樂」（一〇ノ一）○鼓筒之鑑定一卷 生田耕一・山崎樂堂○日本音樂講話田邊尙雄○日本音樂概論伊庭孝○長唄稽古手引草 町田博三○大日本人名辭書附錄系圖 〔田邊〕

藤簍冊子（つづらぶみ） 歌文集 六卷 【著者】上田秋成【成立】享和二年【刊行】文化三年【諸本】上田秋成全集第一所收。また卷一・二の歌集の部は、小澤蘆庵翁全集（續日本歌學全書）・近代諸家集第三（國歌大系）等に收む。

【解說】享和二年秋の生島の叟の序文、同年の自序、文化元年三月の門人釋昇道の附言、同年十一月の大田覃（南畝）の後序があり、文化三年秋、三都書林合梓にて刊行。卷一の卷頭には、屏風に記せる歌以下を錄し、次に春・夏・秋の歌があり、卷二は冬・雜の歌、終りに「源氏物語」五十四帖を載せてゐる。卷三は紀行、卷四以下は文集で、卷六の附錄に瑚璉尼（秋成妻）の遺作を加へた。集中にはこの外、花洛の四季を歌つた四十三首、七十二候を詠じた七十二首の歌などもある。歌の部分は、長歌・短歌が入り交ぜてあつて、中に長歌が多い。

【歌風】萬葉風と古今風との中間を行つたもので、奇才縱橫、頗る個性味に富んだ歌が多く、その面目が躍如としてゐる。所々に記した詞書にも、味多く、彼の面目を見るに足るものが少くない。又連作風の歌もあり、長歌にも獨特の風格があつて、一位置を占めるに足る歌風である。

いほりに、ある夜ぬす人入りて、いささかある物をかつぎていにけり、あした思ふ
我よりも貧しき人の世にもあれば茨からたちひまくぐるなり
杉が枝を雲は走りて吉野なるかしの尾上にはだれ雪降る

【附記】秋成の歌は、この外に、「毎月集」「十雨餘言」「歌島稻荷獻詠和歌」などに見え、また「毎月集」より自讚の歌を拔いて註記を加へた「秋の雲」一卷がある。 〔佐佐木〕

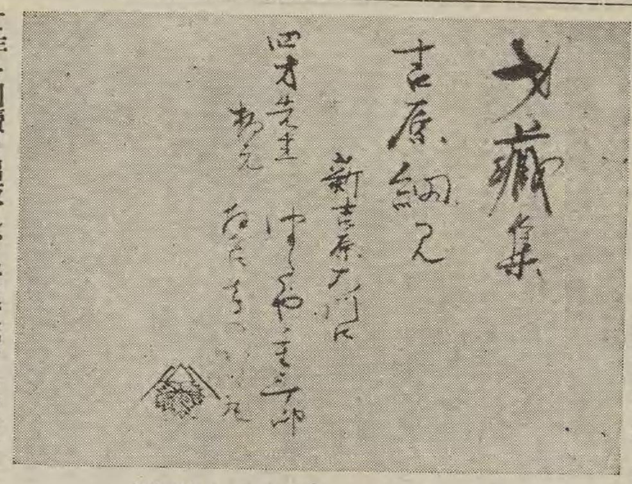
蔦蔓戀之花菱（つたかづらこひのはなびし） 人情本 一卷三册 【作者】平亭銀雞 【畫工】無署名 【名稱】主人公の號、蔦齋から附けたものである。【刊行】文久元年 【諸本】人情本傑作集（帝國文庫）下卷所收 【題材】蔦齋喜石といへる實在の人物を採つて人情本化したものであつて、兩國萬八樓に於ける書畫會に參集せる人物は、皆實在の人二百餘名が列記してあり、書肆弘文堂の人名錄の不遜な事の非難、作者畑銀雞の雜俳の宣傳など、皆事實を採つてゐる。最後に、三圍稻荷の神託が用ひてあるのは、讀本その他の作品に多く散見する稻荷說話である。

【梗概】本所北割下水邊に、畑石伊十郎と云へる浪人があつた。茶道・花道に通じ、特に大和繪に巧で、蔦齋喜石と號した。美男の譽高く、近所の娘達が皆騷いだが、當年二十四歲になるまで浮いた噂もない人物である。三月の中旬兩國萬八樓で盛大な書畫會が催され、當時江戸で知名の文士・畫人皆集まつた。喜石も亦その一人に加はつた。酒宴に興を催す折柄、十五許りの美しい娘、喜石の側へ寄り、扇子四五本の揮毫を依賴する。ふと喜石の美男なるを見、思はず顏を赤めた。やがて又十八九の藝者が來て、ふくさに雀躍の畫をかいて下さいと依賴する。この女は嘗て喜石が下谷の發

會に招かれた時、喜石を見染め、喜石も心動き、戀歌を書いて與へたお鈴であつた事を想ひ起したのである。二人は人目を憚りつつ互に戀を打明け行末を堅く約束した。お鈴はもと武家の娘であつたが、安政の大地震で兩親を失ひ、叔父の許に引取られ、種々の艱難を經て、今は遊藝に秀でてゐるまゝ諸方より賴まれ、町藝者同樣の身分になつたのである。折柄お鈴を連れて來た客が呼ぶので、お鈴は名殘惜しげにその場を去り、喜石は獨り思ひがけぬ再會を心に考へてゐる。彼の友人白齋が大醉して來り食事に誘ふので、二人で立ち出でた。食事終つて夕暮の向島を散策し、夜櫻を賞しながら土手を行くと、老夫婦と娘一人が三人の惡漢に取圍まれ、所持の品を盜まれようとする樣子、白齋・喜石、馳せつけて惡漢を懲らし、老夫婦を救うた。が、娘の姿が見えないので夫婦は驚き騷ぐ。そこで二人は、朧月を賴りに何處までもと追ひ行くと、白髮の老翁が土手の上に立ち、「二人の者必ず驚く勿れ。彼の娘の兩親は、日頃我を信ずる者なれば、そのまゝ捨て置きがたく、神通力を以て娘を取返し、兩親へ引渡したり。喜石は四五年の內には、必ず彼の娘に廻り逢ふ事あるべし。かく言ふ我は三圍稻荷大明神なり」と告げて姿は消えた。二人は奇異の思をなし、社に參拜して我が家に歸つた。

【構想】序にも、事實談を人情本風に書き和らげたと斷つてあるが、實は讀本風に堅く、評判もよくなかつたのであらう。主人公喜石に十五の娘と藝者お鈴と戀を爭ふ趣向であつたらしいが、其處まで行かず續編が刊行されなかつたものらしい。構想はさほどのものではないが、當時の書畫會の樣子は比較的精細に描かれて居り、文士等の對話の主材なども分る點に興味がある。〔山崎〕

蔦唐丸（つたのからまる）　狂歌師　【本名】喜多川柯理。通稱は蔦屋重三郎　【別號】烟羅館・耕書堂　【生歿】寛延元年正月七日生れ、寛政九年（一七九七）五月六日歿。享年四十八　【法名】幽玄院義山日盛居士　【墓所】淺草吉野町正法寺　【閱歷】本姓は丸山氏で、安永の初め吉原五十間道に書店を開き、吉原細見の株を買うて年々引續き出版し、又當時流行の黃表紙・洒落本等を刊行して奇利を博したので、天明三年には日本橋通油町の店藏を買ひ取つてこゝに移轉し、益々繁昌して終に江戸屈指の地本問屋となつた。曲亭馬琴は唐丸の狂歌は皆代作だと云つてゐるが、自筆の狂歌短册を往々見受けるから、やはり狂歌師の一人であつたに相違ない。併し唐丸の功勞は狂歌集の出版に力を盡した點にあつて、天明・寛政年間の名ある狂歌集及び「蟲えらみ」「潮干のつと」の如き狂歌入繪本は、多くこの蔦屋が發行したので、つまり狂歌と浮世繪を結び付けてこれを世に紹介したのは唐丸の功績である。〔野崎〕



蔦唐丸筆蹟（蜀山人判取帳）

蔦紅葉宇都谷峠（つたもみぢうつのやたうげ）　脚本　五幕　世話物　【作者】二代河竹新七（河竹默阿彌）　【名稱】通稱「文彌殺し」。東海道宇都谷峠蔦の細道を事件の中心地としたので、かく標題を据ゑた。　【別名題】「宇都谷峠噂怪談」（うつのやたにけうはさのくわいだん）「小夜砧宇都谷峠」（さよぎぬたうつのやたにけ）「花薄宇都谷家話」（はなすすきうつのやはなし）等。　【諸本】默阿彌全集第一卷・日本戲曲全集第三十卷所收　【初演】安政三年九月江戸市村座。

〔役割〕文彌・仁三（市川小團次）、伊丹屋重兵衞（坂東龜藏）、文彌姉お菊後に古今・重兵衞女房おしづ（尾上菊五郎）、佐々木桂之助・彦三（坂東彦三郎）、尾花才三郎（河原崎權十郎）、文彌妹おいち（市村羽左衞門）等。

【題材】元祖金原亭馬生の座頭殺しの話を仕組んだもの。

【梗概】〔序幕〕御納戸金を遣ひ込み、佐々木家を追放となつた筑田喜藏は、豫て遺恨ある尾花六郎左衞門が預つてゐた家の重寶花形の茶入を盜み出す。佐々木桂之助は六郎左衞門の伜才三郎の僅かな落度を言ひ立て、表面追放として密かに寶の詮議を言ひつける。才三郎の姉しづは幼い時拐かされて苦界にあつたを、昔の若黨十兵衞に身請けされ、今は酒屋伊丹屋の內儀となつてゐる。そこへ身を寄せた才三郎は、身請けの殘金のため苦しむのを見兼ねて、寶詮議の用意金百兩を用立てる。十兵衞はその金を調達のため上方へ旅立つ。〔二幕〕喜藏の中間小兵衞は、座頭文彌の義理の父であるが、茶入を質入れしてそれを包んであつた袱紗を佛壇の打敷にしてゐる。そこへ町髮結と姿を替へた才三が來て、それに目をつける。白木屋へ養子に遣られた十兵衞の弟彦三は、通りがかりに文彌の難儀を救ひ、文彌の姉きくに想ひを寄せられる。きくは文彌を幼い時緣側から落し盲目とした詫に、座頭の官金を調へるため百兩で苦界へ身を沈めるが、その官金にはなほ五十兩足りないので、不足分を京の師匠に借りることとする。が、溜めた金を小兵衞に騙り取られ、京へ行く路銀に窮してゐる文彌に、才三は袱紗を抵當に金を貸してやる。〔三幕〕當てにした人に死なれて金の調達も出來ずに歸つて來た十兵衞と、百兩を携へて京へ上る文彌と、それをつけて來た胡麻の蠅提婆の仁三とが、鞠子の宿で一つに泊り合はせる。夜半に文彌の包を狙つた仁三は、十兵衞に取押へられるが改心を誓つて赦され、十兵衞は文彌の賴みで宇都谷峠だけ送る事となるが、峠へ來て文彌が百兩持つてゐると聞いて急にそれが欲しくなり、貸して呉れと賴むが斷わられるので、遂に文彌を殺してその金を奪ふ。そこへ仁三が現はれてその金を爭ひ、十兵衞は仁三に腰の提煙草入を取られる。〔四幕〕白木屋の娘お駒は小さい時からの屋敷奉公で、彦三と許嫁なのを知らず、才三と深い仲になる。それと知つた彦三は、心にもない愛想づかしをして白木屋と緣を切り、吉原の古今（文彌の姉）と深い仲になる。一方お駒を手籠めにしようとした喜藏と小兵衞とは才三に斬られ、茶入の質入切手は才三の手に入るが、お駒は故主の喜藏を殺し自害する。十兵衞の妻おしづは文彌の死靈に祟られて苦しむ。〔五幕〕伊丹屋へ雇女として來たりくは、小紋の財布から十兵衞を我が子文彌の敵と知り、古今の許へ駈けつける。古今と彦三とは品川宿で文彌の亡靈に心

中を留められ、更にその導きでりくに逢ふ。十兵衞は煙草入を證據に强請る仁三を鈴ケ森で殺し、歸らうとする時、古今と彦三に出會ふので、總てを打ちあけて、文彌から取つた百兩を返せないのは殘念だが、二人に討たれたいと言ふ。そこへ歸參の叶つた才三も來合せ、てそのねらひ方の露骨でないところに不易の性があり、その後次第に價値を見出さるゝに至り、自然主義的作品の衰微した今日でも、この作は依然として鑑賞に堪へ得るものである。小說としては、虛子の諸作などと共に、明治文學史中に於て、特殊な地位を占むるも思惟せられたが、一面彼は又「星と花」や「はるのよ」の優雅體をも奏したので、畢竟晩翠の詩調の重んずべき點は、愛憐情痴を主とする短曲と史詩譚歌の類と抽象思念に基く「瞑想體」との三種のうち、第二種のものがその本領で、雄勁なれど單純な詩調詩念に最もよく適して が絕對になかつた。外遊後公刊した「東海遊子吟」は、彼の缺點のみを擴大し、如何に新天地を打開するかといふ評家の待望を裏切つた。彼が詩は青年學生の愛誦するもの多く、これがため校歌・寮歌等は、一時晩翠調に風靡された感があつた。〔日夏〕

中を留められ、更にその導きでりくに逢ふ。十兵衞は煙草入を證據に强請る仁三を鈴ケ森で殺し、歸らうとする時、古今と彦三に出會ふので、總てを打ちあけて、文彌から取つた百兩を返せないのは殘念だが、二人に討たれたいと言ふ。そこへ歸參の叶つた才三も來合せ、十兵衞へ百兩を返してやると云つて古今の年季證文を渡す。十兵衞は喜んで自害する。

【脚色】全篇を通じて哀愁に富み、陰慘の氣の横溢してゐる作で、世話物中の代表的作品である。殊に鞠子の宿から殺しに至る一幕、五幕目の仁三の强請場は、劇的興味に富んでゐる。作者が、小團次と結託した市村座時代の最初の作である點から、記憶さるべき價値を持つものであり、小團次の寫實的劇術に據つて、幕末の頽廢的劇壇に一味の革新的氣勢を示した初期の作としても、重要視すべき作品である。〔河竹〕

【參考】河竹默阿彌河竹繁俊○續歌舞伎年代記

土（つち）　小說　【著者】長塚節【發表】明治四十三年六月東京朝日新聞に連載【刊行】大正元年五月、春陽堂。夏目漱石の序がある。

【解說】作者唯一の長篇小說である。內容は、著者の鄕里の貧しい農民の生活を細かく描寫したものであつて、筋で運んで行くといふ手法でもなく、哲學を露骨に出すといふ種類のものでもないが、その正直で執拗な描寫が、自から作者の人生觀を浮き出させてゐる。鄕土色藝術、農民小說の一つと看做すべきである。全體を蔽ふイデオロギーといふやうなものは見られない。謂はば一つの忠實な寫生ともいふべきもので、當時の主潮流であつた自然主義的作品のねらひ方とも違ふために、餘り有名にならずにしまつた。けれども、却つてそのねらひ方の露骨でないところに不易の性があり、その後次第に價値を見出さるゝに至り、自然主義的作品の衰微した今日でも、この作は依然として鑑賞に堪へ得るものである。小說としては、虛子の諸作などと共に、明治文學史中に於て、特殊な地位を占むるものである。〔齋藤（茂）〕

土井晚翠（つちゐばんすゐ）　詩人　【本名】林吉

【閱歷】明治四年十月二十三日仙臺に生れた。家は土地の豪家であつた。第二高等學校を經て、同三十年、東京帝國大學文科大學英文科卒業。突如詩壇に出でて獨自の詩風を拓き、その詩情漸く衰へた頃海外に遊び、歸來久しく第二高等學校教授に任じた。「天地有情」はその處女詩集である。【著作】天地有情（明治三十二年）○曉鐘（三十四年）○東海遊子吟（三十九年）（以上別項）○衣裳哲學（カアライル原著）○曙光○晚翠詩集○チャイルド・ハロウドの巡禮（バイロン原著）○天馬の道等。【批評】明治二十七八年戰役後、國民詩人出でよとか、雄渾剛健の理想を謳ふ詩家出でよとかいふ詩壇の提唱盛んであつた折柄、恰もその要求に應じた如くに出でた晚翠の詩は、漢語成語を中心として放吟に適する七五正調のバラッド體・サニング體で、主として英雄を詠じ、東亞の風雲を歌ひ、「理想」を高吟し、「人生觀」を直叙したので、鐵幹のいはゆる「男兒の歌」が、志士的抱負を吐露して快哉を叫んだとひとしく、その方面の要求を滿たした如く思惟せられたが、一面彼は又「星と花」や「はるのよ」の優雅體をも奏したので、畢竟晚翠の詩調の重んずべき點は、愛憐情痴を主とする短曲と史詩譚歌の類と抽象思念に基く「瞑想體」との三種のうち、第二種のものがその本領で、雄勁なれど單純な詩調詩念に最もよく適してゐたものであつた。第三種のものを粗荒な觀察で見て、晚翠を哲學詩人・瞑想詩人と言つた評家があつたのは批評家の盲斷で、元來晚翠は哲學的思惟に耐へ得る詩人ではなかつたに拘らず、表面の抽象詩語を捉へて直ちにその本質と斷じ去つたにすぎない。が、晚翠の譚歌史詩の格調の淸新性は、當時の驚異であつた事は事實であり、先人何人にも多く感化せられざる晚翠獨自の創造に俟つところのものである事も事實である。出づべくして出でた詩人であり、當時一部の要求に正しく應じて生れ出た詩人である。併し當時の世評に照應するだけの本來的藝術價はなく、後出の詩人に何等特記すべき影響を與へなかつたこともまた事實である。ただ藤村になく、透谷になく、抒情詩派にも早稻田派にもない蒼古雄勁の詩調が、沈痛なる單純、素樸極まる悲調を以て、彼のみによつて完成せられた一事は、文學史上特記するを要する一現象である。藤村の詩調は、明かに「於母影」や新國文提唱の感化を引いてゐるが、晚翠の先達には、ただ晚翠あるのみで、一人の先聲と認むべきものがない。漢詩を碎いたにすぎぬといふ罵評は、全篇を通讀したものには、通用せぬ無辭である。彼は恐らく藤村よりも詩論と詩學とについて研究したかも知れないが、そのあとは詩篇そのものの上には明かに現はれてをらぬ。「天地有情」「曉鐘」の二書以後、彼にも新展開が絕對になかつた。外遊後公刊した「東海遊子吟」は、彼の缺點のみを擴大し、如何に新天地を打開するかといふ評家の待望を裏切つた。彼が詩は青年學生の愛誦するもの多く、これがため校歌・寮歌等は、一時晚翠調に風靡された感があつた。〔日夏〕

土井晚翠

【參考】明治文學史岩城準太郎○樗牛全集第二

土蜘蛛（つちぐも）　「賴光物の謠曲」を見よ。

土蜘蛛（つちぐも）　所作事　【解說】「太平記」「源平盛衰記」、或は謠曲などに見えてゐる土蜘蛛の傳說が、近世に入つて古淨瑠璃に現はれてから、歌舞伎・淨瑠璃に盛んに仕組まれて來たが、そのうち、近松の「關八州繫馬」（別項）で、小蝶の怨念が土蜘蛛に化して活動することに脚色されて以來、この脚色が後のものに大きな影響を與へ、所作事の中に於ても一系統をなすに至つた。次に各種所作事の主なものを列擧する。

【蜘蛛絲梓弦（ゆみはり）】變化物〔通稱〕「蜘蛛の絲」又は「仙臺淨瑠璃」「仙臺座頭」〔初演〕明和二年十一月朔日初日江戸市村座。作詞金井三笑、作曲佐々木市藏、太夫常磐津文字太夫、振附二代西川扇藏〔內容〕四天王の世界に、謠曲「賴光」をはめ、土蜘蛛の變化の切禿・仙臺座頭・山伏・梓・巫女等が現はれる。この作は、非常に後世に影響した。

【我春子戀（せこうこ）の合槌】拍子舞物〔通稱〕蜘蛛の拍子舞〔初演〕天明元年十一月朔日初日江戸中村座。作詞櫻田治助、作曲杵屋佐吉、曲節長唄と大薩摩との掛合、太夫二代大薩摩主膳太夫、立唄富士田音藏、振附二代藤間勘兵衞。〔內容〕土蜘蛛に「女暫」の形を添へ、拍子舞を主としたもの。

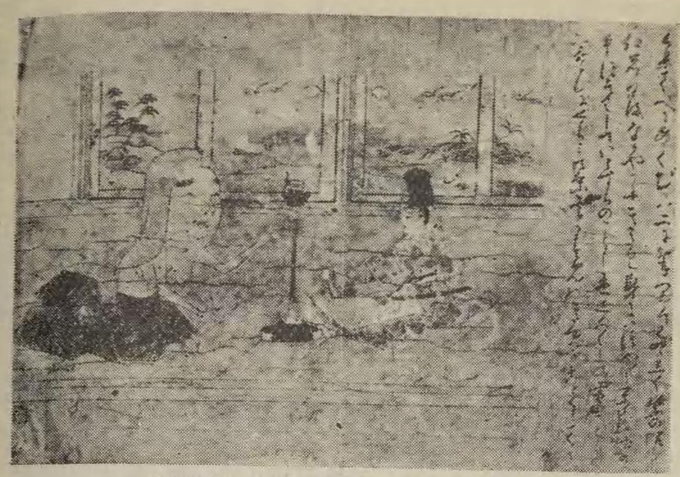
【魏峨宿直嘶（やまにおまつめはなし）】時代物〔通稱〕宿直嘶〔初

演〕文政元年十一月朔日初日江戸玉川座。作詞二代瀬川如皐、作曲二代鳥羽屋里長、太夫二代富本豐前太夫、振附市山七十郎、曲は廢滅、振は傾城の一部殘存。〔內容〕土蜘蛛に山姥を持込み、傾城の趣向を取入れたもの。

【土蜘蛛】松羽目物〔通稱〕大土蜘蛛〔初演〕明治十四年六月二十九日初日、東京新富座中幕。作詞默阿彌、作曲三代杵屋正次郎、曲節長唄、立唄二代松島左五郎、振附花柳壽輔、曲・振とも傳存。〔內容〕謠曲「土蜘蛛」を所作化したものである。新古演劇十種の一。明治期の代表的舞踊の一つといつていゝ。

【參考】江戸近世舞踊史九重左近〇歌舞伎狂言往來渥美清太郎〇江戸時代音樂通解町田博三〇歌舞伎細見飯塚友一郎〔秋葉〕

土蜘蛛草紙（つちぐものさうし）　繪卷　一卷　【解說】帝室博物館所藏。源頼光が渡邊綱を從へて京都神樂岡のあやしげなあばら家を探訪して、數々の妖怪變化に遭ひ、これを斬りつけた際、劍の切尖を折つたが、滴る血潮の痕を辿つて遂に土蜘蛛の所在を探り、人形を造つて切尖の難を免れ、やがてこれを退治するといふ話の筋である。繪土佐長隆筆、詞兼好法師筆と傳へる。この傳は信ずべき限りでないが、その描寫は土佐派の樣式を存して內容の通俗な割合に品致を逸してゐないが、總じては次第にお伽草子の卑近な趣味に遷り行かんとする傾向の見られるもので、先づ南北朝か遲くも足利初葉を下らぬ製作と思はれる。頼光の土蜘蛛退治は著名な物語であるが、この繪卷の筋は世に知られてゐる話とやゝ系統を異にし、その點に於ても注目される。〔田中（一）〕



土蜘蛛草紙（帝室博物館藏）

土車（つちぐるま）「男物狂（をとこものぐるひ）の謠曲」を見よ。

土田杏村（つちだきやうそん）　評論家　【本名】茂　【閱歷】明治二十四年一月、新潟縣佐渡郡新穗村に生れた。東京高等師範學校博物學部を卒へた後、京都帝國大學文學部に學び、大正七年卒業すると同時に、更に六年間大學院で研修を重ねた。早く思想家として新鋭の才を示し、高等師範時代には、田中王堂の哲人主義に共鳴し、深く私淑するところがあつた。當時、雜誌「新評論」に、每號文明批評の一欄を擔當したことがあり、次いで「文明思潮と新哲學」「文壇への公開狀」等を上梓した。その專攻は生物學及び哲學で、生物學では丘淺次郎、哲學では西田幾多郎の指導を受けた。大正八九年頃、文化主義を提唱し、次いで國文學の哲學的研究に從事、時々文藝評論の筆を執る事もあつた。昭和四年マルクス批判に鋭意して河上肇と烈しく論戰した。現在は專ら著述生活を送りつつある。【著書】國文學の哲學的研究三卷〇文化主義原論〇社會哲學原論〇マルキシズム批判〇文學論等。〔高須〕

土御門院御集（つちみかどのゐんぎよしふ）　歌集　一卷　【著者】土御門院【成立・由來】三本ある內の（一）は、承久三年に、院が土佐・阿波に遷らせ給うて後の御製を、京都にゐた藤原家隆におくり給ひ、家隆がこれに評點を附し奉つたものの由である。（二）は、以上の外に增補したもので、「右土御門院御集、以冷泉大納言爲富卿本書寫之於奧書者以准后本書加之者也。」の奧書があり、國歌大系第十卷に收む。（三）は、院の御歌五十七首を錄したもので、年代等不明である。【內容】各本によつて、內容を異にする。（一）は、承久三年から元仁元年まで四年間の御歌を集めたもので、詠述懷十首和歌・詠百首和歌（承久三年）・詠二十首和歌（承久四年四月二十五日）・詠五十首・詠三首和歌（承久四年八月十五日）・詠二十首和歌（貞應二年十二月二日）等を收め、卷末に前記の如き奧書がある。「述懷十首」の中の「寄風述懷」の「吹風の目に見ぬかたを都とてしのぶもくるし夕暮の空」に、家隆は、「先うち見候より已落淚かきくらし候畢。善惡すべて不覺候へども、心詞無申限歟」と評し奉つてゐる。（二）は、承久・元仁間の御製に、春夏秋冬各五首・雜十首・月前三首・草木十首・木蟲鳥獸各十首・月三首・名所の春夏秋冬戀各十首・戀二十五首・韻字六首・朝鶯三首を增補したもので、群書類從第二二八に收めてある。その奧書に、「此御集、以勅本令比校畢。尤可爲正本者也。永祿八年乙丑仲秋念三、正二位藤原爲益」とある。爲益は、前記奧書の爲富の子である。この增補の部分のはじめ、「春五首」の題に、「此以下以他本書加之」と旁註があり、またこの部分の歌には評點がないが、歌の用語には、「住み棄てし花の都の」「七歲の秋の今宵を」などあり、懷古追憶の御作の多きことなどから見て、御遷幸後の御作かと推定される。御歌は後鳥羽院のそれの如き、きはやかさはないが流麗な、情味の豐かな歌ぶりである。「詠五十首」の「流れくむ袖さへ花になりにけり梅散る山の谷川の水」の如き、新古今調の歌も見える。（三）は、部立も歌題もなきもので、他に類本がない。なほ「後法興院政家公記」に、「文明十三年二月十六日辛酉、晴。自大樹、土御門院御集可書進之由有其命。可書進之由、令返答了。同廿一日丙寅、土御門院御集書寫進大樹。使行長」と見えてゐる。文明十三年は、前記奧書の永祿八年より八十五年前であつて、この本が如何なるものか明かではないが、和田英松氏は、群書類從所收本であらうと推定してゐる。【價値】院の御歌は、「新古今集」には一首も見えず、「千五百番歌合」と「土御門院御百首」（續類從所收）と、「續拾遺集」に一首、「續古今集」に、千五百番歌合の歌一首、「新續古今集」に一首、「承久記」に一首存する位で、本集は、今に傳ふる土御門院の御歌の大部分を收めたものであり、又當時の歌壇の主流とは、やゝはなれてましました傾向の見られる歌集である。また「後鳥羽院御集」（別項）が、承久以前の御歌で編次されてゐるのに對して、本集が承久亂後の御作より成つてゐると思はるゝのも、對照的興味がある。

【參考】列聖全集御撰解題和田英松〇國歌大系第十卷解題〔松浦〕

土御門中納言（つちみかどのちうなごん）「朝忠（あさただ）」を見よ。

土屋文明（つちやぶんめい）　歌人　【別號】蛇床子・井出說太郎・榛南生　【閱歷】明治二十四年一月二十一日（實際は二十三年九月十八日）、群馬縣群馬郡上郊村大字保渡田（かなさとむら　ほとだ）に生れた。保渡田の小學校、高崎中學校卒業後、村上成之の紹介で上京して伊藤左千夫方に寄寓し、牛舍に勞働しつつ左千夫の敎を受けた。これより先き、中學校在學中三井甲之の編輯してゐた初めに書寫せられてゐる解說）となし、（二）萩野由之・小中村義象・落合直文は永承以後となし（日本文學全書解題）、（三）長谷川福平氏は赤染衞門以後卽ち道長の時代以後となし（古代小說史）、（四）藤岡作太郎は鳥羽天皇又は近衞天皇以後となし（國文學全史平安朝篇）、（五）藤田德治氏藏本一部）。（二）飛鳥井本、又はその系統の本及びそれを校合に用ひたもの（宮內省圖書寮藏本二部、帝國圖書館藏本一部、京都帝國大學國文研究室本一部、前田家藏本二部、久原文庫藏本二部、靜嘉堂文庫藏本一部、東京高等師範學校附屬圖書を校合に用ひたもの（內閣文庫藏本一部、松井簡慕ふあまり、或る時連れて出て行かうとする。その時、「子だにかくあくがれ出でば蕭物のひとりやいとゝ思ひこがれむ」と、心苦しげな女の口吟を聞いて、そのまゝ女の所にゐるやうになつた」。次に女房の中納言の君が話す。「淸水參籠も明日は滿願といふ日の夕方、風に

一月二十一日（實際は二十三年九月十八日）、群馬縣群馬郡上郊村大字保渡田に生れた。保渡田の小學校、高崎中學校卒業後、村上成之の紹介で上京して伊藤左千夫方に寄寓し、牛舍に勞働しつつ左千夫の教を受けた。これより先き、中學校在學中三井甲之の編輯してゐた「アカネ」に、短歌・新體詩・小品文等を投稿した。四十二年九月、第一高等學校に入學し、大正五年七月東京帝國大學文科大學哲學科卒業。在學中、芥川・菊池・久米等の第三次「新思潮」同人に加はつた。四十二年以後專ら「アララギ」（別項）同人となり、現在に及んでゐる。その間、長野縣諏訪高等女學校長、松本高等女學校長、木曾中學校長等に歷任し、ついで法政大學教授・日本醫科大學教授となつた。

【著作】ふゆくさ○往還集（以上歌集）○萬葉集私見○萬葉集年表等。〔齋藤（茂）〕

堤中納言（つつみちゆうなごん）「兼輔」「朝忠」を見よ。

堤中納言物語（つつみちゆうなごんものがたり）　物語十卷【作者】未詳。從來堤中納言藤原兼輔が作者に擬せられて來たが、內省的研究の結果、この物語は兼輔とは著しく時代的に隔りがある。【名稱】この物語は、「風葉和歌集」の中に出るのが最も古いが、それには、「堤中納言物語」の名は揭げず、個々の卷名が擧げてある。これより見れば、初めは「堤中納言物語」の名はなく、個々の卷名で呼ばれてゐたものであらう。それが、飛鳥井本・天王寺明靜院本等、比較的古い系統の本には何れも「堤中納言」のみある。この名からして、更に「堤中納言物語」となつたのであらう。併しこの題號は、その內容をなす十種の短篇とは、毫も關係のないものである。【成立】（一）入江昌喜は、醍醐天皇時代のもの（無窮會藏本の清水濱臣舊藏本の初めに書寫せられてゐる解說）となし、（二）萩野由之・小中村義象・落合直文は永承以後となし（日本文學全書解題）、（三）長谷川福平氏は赤染衞門以後卽ち道長の時代以後となし（古代小說史）、（四）藤岡作太郎は鳥羽天皇又は近衞天皇以後となし（國文學全史平安朝篇）、（五）藤田德太郎氏は平安朝末期の作とする說を捨て兼ねると言ひ（日本文學講座）、（六）清水泰は鎌倉時代の嘉禎より文永に至る約三十五年間の作としてゐる（堤中納言物語詳解附錄）。

【體裁組織】諸種の本によつて、一册に綴ぢられたもの、二册に綴ぢられたもの及び十册に分綴せられたもの等があるが、どれが元の型であるか不明。神宮文庫藏本、久原文庫の一本、或は前田家の元祿本の如く、その各帖の題名を小さく書き入れて普通の卷名の記し方とは全くその趣を異にしてゐることから見れば、もと十册本で內題なく、表紙に各帖の名が記されてあつたのを、後に合綴する時に本文の初めに、その表題を書き加へたからで、題名を小さく書き入れたのは、卽ちその面目を有せしめる用意からではなかつたらうか。各册は、ばら〳〵でその間順序を示す記號もない。これが異本によつてその卷々の順序に異るもののある原因となつたのであらう。併し現今の流布本は、大體四季を追つて列べられてゐる。或はこれが製作の順序を暗示するものであるかも知れない。【諸本】江戶時代には版本なく、一般に流布してゐるのは、明治になつて始めて發刊された十卷一册のものであつて、その卷々の順序は前に示した通りである。現存の寫本中注意すべきものの中、系統の分明なものを內容から分類してみると、（一）元中二年古寫卷物の系統の本、又はそれを校合に用ひたもの（內閣文庫藏本一部、松井簡治氏藏本一部）。（二）飛鳥井本、又はその系統の本及びそれを校合に用ひたもの（宮內省圖書寮藏本二部、帝國圖書館藏本一部、京都帝國大學國文研究室本一部、前田家藏本二部、久原文庫藏本二部、靜嘉堂文庫藏本一部、東京高等師範學校附屬圖書館藏本一部、松井簡治氏藏本三部）。（三）天王寺明靜院本によつて校合してゐるもの（內閣文庫藏本一部（旣出）、三手文庫藏本一部、京都帝大圖書館藏伴信友校本一部）。（四）清水濱臣本、又はその系統のもの（圖書寮藏本一部、無窮會神習文庫藏本二部、帝國圖書館藏榊原本一部、松井簡治氏藏本嘉永書寫本一部、南葵文庫藏本一部）。又明治以後の刊本としては、日本文學全書・國文大觀・續群書類從・校註國文叢書・日本文學大系等の所收本がある。

【梗概】〔花櫻折る少將〕照る月影にはかられて、少將は明けきらぬ中に女の許を立ち出でた。道すがら櫻の花は隈なき月に霞かと見まがふ程である。その四邊の築地などは崩れて荒れはてた家には、故源中納言の姫君が住んでゐた。この姫君は小柄ではあるが、おとなしく、言葉づかひなども可愛くて、而も犯し難い所があつた。姫君の叔父の大將は、やがて內裏に奉らうとしてゐた。少將は下僕からこの話を聞いて、或る夜更に忍び入り、母屋に「いとちひさやかにてうち臥し給へる」をかき抱いて、車に乘せて歸つて來た。それは、若く美しい姫君とは似もつかぬ、年も老い法師頭となつてゐた姫君の伯母であつた。〔このついで〕中宮のお前で宰相中將は薰物を試みさせながら、「この御火取の序にあはれと思ひて」人の語つた話を語り出す。「ある君達、本妻を憚つて訪れは絕間がちな女の許で、子供が慕ふあまり、或る時連れて出て行かうとする。その時、「子だにかくあくがれ出でば薰物のひとりやいとゝ思ひこがれむ」と、心苦しげな女の口吟を聞いて、そのまゝ女の所にゐるやうになつた」。次に女房の中納言の君が話す。「清水參籠も明日は滿願といふ日の夕方、風に散り敷く紅葉を眺めてゐますと、香の薰も床しい隣の局で勤行の間も泣いてゐたらしい人が、「いとふ身はつれなきものをうきことも嵐に散れる木の葉なりけり」と忍びやかに口吟んで、「風の前なる」と微に言つたのが耳に入り、まことに哀愁に堪へませんでした」といふ。最後に、少將の君が、「東山邊の寺で大層美しい姫君が御髮おろしをしようとしてゐました。氣の毒に思はれて、その妹君らしい方に歌を差上げたが、返歌の樣の趣があつて、その巧みさに自分の無作法が後悔されました」と話してゐる時、主上が中宮の處へお出になるので、少將の君も座を立つてしまはれた。〔蟲めづる姫君〕蝶めづる姫君の隣に住んでゐた姫君は、「人は實あり本地尋ねたるこそ心ばへをかしけれ」と、いろ〳〵怖ろしい蟲、特に鳥毛蟲を可愛がる。朝夕、髮を耳に挾んだまゝ眉も拔かずお齒黑もつけず白い齒をあらはして、蟲を可愛がる。親達が世間體を慮り、諫めても應じない。更に螳蜋・蝸牛など集めさせ、童達にも、螻蛄男・ひきまろ・いなかだちなど名づけて召使ふのであつた。こんな話が世間に洩れて評判となつた。或る上達部の聟君右馬助が、いたづら心から立派な帶の端を蛇の形に作り、動くやうに仕掛けて懸袋に入れて送つて來た。姫君からはごは〳〵の何の趣もない紙に片假名の返歌がある。ある時右馬助が、賤しい女に姿をやつして覗き見し

紙（帝室博物館藏）

說】帝室博物館所藏。源頼光が渡邊綱を從へ

當時、雜誌「新評論」に、每號文明批評の一欄を擔當したことがあり、次いで「文明思潮と新哲學」「文壇への公開狀」等を上梓した。その專攻は生物學及び哲學で、生物學では丘淺次郎、哲學では西田幾多郎の指導を受けた。大正八九年頃、文化主義を提唱し、次いで國文學の哲學的研究に從事、時々文藝評論の筆を執る事もあつた。昭和四年マルクス批判に鋭意して河上肇と烈しく論戰した。現在は專ら著述生活を送りつつある。【著書】國文學承久・元仁間の御製に、春夏秋冬各五首・雜十首・月前三首・草木十首・木蟲鳥獸名各十首・月三首・名所の春夏秋冬戀各十首・戀二十五首・韻字六首・朝鶯三首を增補したもので、群書類從第二二八に收めてある。その奧書に、「此御集、以勅本令比校畢。尤可爲正本者也。永祿八年乙丑仲秋念三、正二位藤原爲益」とある。爲益は、前記奧書の爲富の子である。この增補の部分のはじめ、「春五首」の題に、「此以下以他本書加之」と旁註があり、またこの部は、やゝはなれてましました傾向の見られる歌集である。また「後鳥羽院御集」（別項）が、承久以前の御歌で編次されてゐるのに對して、本集が承久亂後の御作より成つてゐると思はるゝのも、對照的興味がある。

【參考】列聖全集御撰解題和田英松○國歌大系第十卷解題〔松浦〕

土御門中納言（つちみかどのちゅうなごん）「朝忠」（あさただ）を見よ。

土屋文明（つちやぶんめい）　歌人【別號】蛇床子・井出說太郎・榛南生【閱歷】明治二十四年

てゐると、姫君は童の聲に誘はれて歩きざまもあら〳〵しく出て來られる。童が、右馬助があなたのお顔を見てゐますよと告げても澄ましてゐられるので、侍女が姫君に代つて右馬助へ返歌をした。すると、男は「鳥毛蟲にまぎるゝ眉の毛の末にあたるばかりの人はなきかな」と言つて、笑ひながら立ち去つた。〔ほど〳〵の懸想〕賀茂の祭の頃は、都大路を行き交ふ人々の間にも戀が目覺める。頭中將に仕へてゐる小舍人童は、この大路でゆくりなく會つた身の丈、ものごし、實に美しい一人の童女に思を懸けて、澤山實のついた梅の枝に葵を附け、それに戀歌を添へて送つた。併し女は、「しめの中に葵にかゝるゆふかづらくれどねがたきものと知らなむ」と、そつけなくつつ放す。男は追ひ縋りざまに笏で打てば、「それ〳〵、さうしたあなたのお心が」と、ほどほどに心を痛めてゐるらしい。これが緣で二人の仲が結ばれる。この女は、孤獨な故式部卿の姫君に仕へてゐた。女は小舍人童と二人で、姫と頭中將とを一緒にさせようと心を碎く。時にこの頭中將に仕へてゐる年若い男が、小舍人童の戀を羨んで、これを責めて八條の宮の女房に手紙を屆けて貰ふ。「ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつゝさぞみだるらむ」と返歌がある。男はその才氣に心を奪はれてゐると、中將がその文を奪ひ取り、「同じことなら熱心に口說くがよい。自分もなにかの序に行つて見よう」などと言ふ。そして中將は、落魄して賴りなげな姫君の有樣を聞いて「世の常に」など、ひとりごたれ、またどうした心の亂れに、かうした關係を結んだのであらうと後悔しながらも、これが動機で、絕えず八條の宮の姫君に通ふのであつた。

〔逢坂越えぬ權中納言〕前日の名殘としてであらう、中納言は菖蒲の紙を幾枚も重ねて歌を送つたが、宮からは例の如く返事もなかつた。片思に堪へかねて五月五日の節句も過ぎた十日の晩、中納言は澄み切つた宵月の風情に浮かれて密に宮を訪れた。併し姫宮は會はた中納言は、宰相と入違ひに姫宮の處に入つた。そして涙をはら〳〵と流しながら、「身のほど知らず、なめげにはよも御覽ぜられじ唯一言」と言ひ寄るのであつた。姫宮は、流石に理なく思ふものの心强くて許さうとはされない。夜は次第に更けて行く。中納言は心弱くも、「怨むべき方こそなけれ夏衣うすきへだてのつれなきやなぞ」と詠み置いて、歸つて行くのであつた。〔かひあはせ〕少將はふと通りすがりの少女から、その仕へてゐる姫君と大夫の姫君とが貝合をする事を聞かされる。よい貝が不足で困じてゐる姫君の方を勝たせてやる約束で、少女に姫君達の姿の見える處に隱れ場を作つて貰ふ。家の中では少女達が手毎に貝を小筥に入れたり、物の蓋に入れたりして騷いでゐる。時に几帳の裾を上げて出て來た女の子があるが、その子はこの世の人とも思はれない程の美しさである。そこへ十位の男の子が來て、「心あたりはみな廻り、承香殿でこれを戴きました。大夫の君は藤壺の君から澤山戴いたさうです」と申上げるので、姫は一層心細がる。其處へ相手の東の姫君が得意顏で樣子を見に來たりする。みなは心配して姫君の勝利を觀音に祈る。その時、少將が、「かなしとてなに歎くらむしら浪も君がかたには心よせてむ」と口吟むと、少女達は「觀音樣の御示現です」などと姫君に告げる。姫君も「まことかはとよ、恐ろしきまでこそおぼゆれ」と喜ばれる。少將はやつと立ち歸り、立派な洲濱の三まがりなのに小箱を嵌め、美しい色々の貝を入れ、歌一首をつけてそつと座敷に置かせ、前日の處からぢつと覗つてゐた。少女達は二十人許り奇麗に着飾つて格子を上げてゐたが、やがてその貝を見つけて、みなが嬉しさに騷いでゐる面白い有樣を、少將は靜かに眺めてゐたとかいふ事である。〔思はぬ方にとまりする少將〕兩親に先立たれ、佗しい生活を送つてゐる美しい姉妹があつた。男のあながちな心は終に姉の許へは右大將の子の少將が、妹へは權少將が通ふことになつた。或る時右大臣の北の方が病氣された。北の方は權少將の妹であつたから、權少將も右大臣の邸に見舞に行き、そこから權少將は妹君を迎へにやつた。然るに、使の間違から姉君が來る。後で別人と知つた姫君は死ぬほど辛く思つたが、權少將はかねてから懸想してゐたものの如く裝つて、いろ〳〵話をしたことであらう。片方、右大將の子の少將も母が病んでゐた爲め、其處から姉君を迎へさすと、今度は妹君が來てしまつた。それと知つた妹君は、「唯わなゝかれて」身動きさへもなさらない。少將は、「今は唯さるべきに思しなせ、世に人のためあしき心は侍らじ」と言つて、几帳を押し隔ててしまはれた。かくて二人の少將は、思はぬ方に泊つてしまつたのである。〔はなだの女御〕好者（すきもの）と自他共に許した男が、思ひかはした女の里へ密かに訪れて、皆の者が色々物語をするのを覗つてゐた。女達は花をそれ〴〵の方に譬へて、命婦といふ小女は「あの蓮は女院樣に似てゐます」といふ。一番上の姉が「龍膽は一品の宮樣」といへば、次の妹が「五籟花は帝王樣」、三の妹が「紫苑は皇后樣」など、また「中宮樣は桔梗」「四條の宮の女御樣は露草」などと話は止まる所を知らない。「はちす葉の心ひろさのおもひにはいづれとわかず露ばかりかも」の如く、歌が次々に詠まれる。夜も更けて、女達も寢靜まつた樣子なので、男は歌を口吟むと、鳥の聲と間違へたり、男の聲を聞き知つてゐて笑つてゐる者もある。夜が明けさうなので、男は「百かさね濡れなれにたる袖なれど今宵やまさりひぢて歸らむ」と歎ちながら歸つて行く。この男は、女郎花の方に仕へてゐる女にも、瞿麥の方に仕へてゐる女にも、その外それ〴〵の女に關係があつた。併し、女郎花の方の仄かに聞えた聲が實にゆかしく、いま一度どうかして、「よそ人」としてでも話して見たいと、絕えず浮かれ心地で歩くのであつた。〔はいずみ〕下京邊に淋しく暮してゐる女を憎からず思つて、年頃同棲してゐる男があつた。懇意な家へ出入する中、男はそこの娘とも戀に落ちて人知れず通ふやうになつた。この女の父親は權勢もあり、無理押のきく人であつた。男はこの親から娘との同棲を迫られて、前の女には氣兼ねをしながらも、遂にそれを承諾してしまふ。新しい女を迎へる日が近づいたので心苦しく思ひながらも因果を含めると、すなほな女は心では泣きながら出て行つた。女の行つた先の餘りの佗しさに、供の童は、その物哀れな有樣に同情して、女の歌つた「いづこにかおくりはせしと人問はば心はゆかぬ涙川まで」を男に示した。涙脆い男は、女の心を氣の毒に思ひ、夜の明けない中に大急ぎで女を連れ戻してきた。そして新しい女の親へは日延を乞うた。そして男は急に思ひ立つて新しい女を訪れた。遽かの事とて女は驚きあわてて、白粉と取違へて掃墨の入つた疊紙を取出し、鏡も見ないで化粧した。羞かんで口に手を當てたまゝ、目ばかりきよろ〳〵光つてゐる異樣な女の姿に、男は膽をつぶして歸つてしまふ。男の不實に穩かでない兩親も、そ

もので、それ〴〵が含む趣向は、其處に笑や皮肉やを釀し、又耽美的な幻想的な世界を描き出してゐる。十種の短篇は、終始の顚末を持つ物語ではなくて、種々な斷片的の人生の經驗を取扱つたものである。而もその構想と筆法とは、全篇を通じて、神韻縹渺たる情緒を

吉田病院に移つたが、この時代に種々內部生活に於て得るところが多かつた。その後三十年に至り、ほぼ快癒して歸京し、再び「早稻田文學」の編輯に與つた。同年十月、故鄕から母を迎へて牛込原町に一家を構へ、翌年更に余丁町に移つた。その頃、逍遙・樗牛の間に歷史

體驗を談ずる方面では、特にいみじき業績を示し、時人に向つて有力な啓示を與へた。【著書】前記の外に、「西洋倫理學史」「快樂派倫理學說」等があり、大正十年、梁川全集十卷、別集一卷（春秋社）が刊行された。

【參考】綱島梁川追悼號（新人增刊）　〔高須〕

るらむ」と返歌がある。男はその才氣に心を奪はれてゐると、中將がその文を奪ひ取り、「同じことなら熱心に口説くがよい。自分もなにかの序に行つて見よう」などと言ふ。そして中將は、落魄して賴りなげな姫君の有樣を聞いて「世の常に」など、ひとりごたれ、またどうした心の亂れに、かうした關係を結んだのであらうと後悔しながらも、これが動機で、絶えず八條の宮の姫君に通ふのであつた。

も思はれない程の美しさである。そこへ十位の男の子が來て、「心あたりはみな廻り、承香殿でこれを戴きました。大夫の君は藤壺の君から澤山戴いたさうです」と申上げるので、姫は一層心細がる。其處へ相手の東の姫君が得意顏で樣子を見に來たりする。みなは心配して姫君の勝利を觀音に祈る。その時、少將が、「かなしとてなに歎くらむしら浪も君がかたには心よせてむ」と口吟むと、少女達は「觀音樣の御示現です」などと姫君に告げる。姫

ない。少將は、「今は唯さるべきに思しなせ、世に人のためあしき心は侍らじ」と言つて、几帳を押し隔ててしまはれた。かくて二人の少將は、思はぬ方に泊つてしまつたのである。〔はなだの女御〕好者と自他共に許した男が、思ひかはした女の里へ密かに訪れて、皆の者が色々物語をするのを覗つてゐた。女達は花をそれ〴〵の方に譬へて、命婦といふ小女は「あの蓮は女院樣に似てゐます」といふ。一番上の姉が「龍膽は一品の宮樣」といへば、次の

しまふ。新しい女を迎へる日が近づいたので心苦しく思ひながらも因果を含めると、すなほな女は心では泣きながら出て行つた。女の行つた先の餘りの佗しさに、供の童は、その物哀れな有樣に同情して、女の歌つた「いづこにかおくりはせしと人問はば心はゆかぬ涙川まで」を男に示した。涙脆い男は、女の心を氣の毒に思ひ、夜の明けない中に大急ぎで女を連れ戻してきた。そして新しい女の親へは日延を乞うた。そして男は急に思ひ立つて新

しい女を訪れた。遽かの事とて女は驚きあわてて、白粉と取違へて掃墨の入つた疊紙を取出し、鏡も見ないで化粧した。羞かんで口に手を當てたまゝ、目ばかりきよろ〳〵光つてゐる異樣な女の姿に、男は膽をつぶして歸つてしまふ。男の不實に穩かでない兩親も、その姿を見て、そこに倒れ伏してしまふ。女も鏡を見て喫驚し、わつとばかりに泣き出してしまつた。〔よしなしごと〕或る家で大切にしてゐる娘を「ゆゑだつ」僧が隱し妻にしてゐたが、或る年の暮に山寺に參籠するために、色々入用な品を女から貰つた。その女の師の僧は、自分も何か貰ひたいと手紙を書いた。その寫しは、「この世の中が嫌になつたから、浮世を離れてどこかへお籠りしようと思ふ。唐天竺も地に近いから月日の中に交り霞の中にでも飛び住みたい。それには、天の羽衣が入用だからそれを下さい。若しなかつたら破れ着物でもいゝ。又廊下・寢殿・車宿などの整つた屋形も入用だが、逢ふ事の交野の原の菅菰一枚で結構です。さもしいことだが食物も欲しい。妙香八子の信濃梨、天の橋立の丹後和布、いやこれ等がなければ、やもめの邊の熬豆でも、書きたてて見ると仲々澤山だが、皆でなければ、せめて足鍋一つ、長筵一枚、盥一つで十分です。併しお貸し下さる時は、私の召使の大空の陽炎、海の水の泡にお願ひいたします。そしてきつと天の川の鵲の橋の袂へ寄こして下さい。これがないと昇天が出來ませんから。御返事は天へ下さい。徒然なのに任せて、よしなしごとを書きました」とあつた。

【解說】本書は、我が國短篇小說の鼻祖である。各々獨立した十種の短篇を一緒に集めたもので、それ〴〵が含む趣向は、其處に笑や皮肉やを釀し、又耽美的な幻想的な世界を描き出してゐる。十種の短篇は、終始の顚末を持つ物語ではなくて、種々な斷片的の人生の經驗を取扱つたものである。而もその構想と筆法とは、全篇を通じて、神韻縹渺たる情緒を漂らし、端的に人生の實相を觀んとする態度は、近代文藝的な神經の鋭さをもつてゐると云へよう。この物語は、平安朝長篇小說の沈滯した空氣を衝いて誕生した。恐らく世界最古のショートストリズとして特異の地位を占むべき作品である。

【參考】校註堤中納言物語久松潛一○堤中納言物語評釋清水泰○新註堤中納言物語吉田九郎○頭註定本堤中納言物語（立命館大學出版部）○堤中納言物語創解　金子元臣（わか竹二ノ一二・三ノ一）○堤中納言物語鑑賞木村庄三郎（三田文學三ノ一○）○異本堤中納言と小夜ごろも後藤丹次（國語と國文學昭和三ノ五）○堤中納言物語研究藤田德太郎（日本文學講座）○堤中納言物語私考清水泰（國語國文の研究三八）○堤中納言物語雜觀玉井幸助（國語教育昭和四ノ一二）　〔池田〕

綱（なつ）「賴光物の謠曲」を見よ。

綱島梁川（つなしまりやうせん）　思想家　【本名】榮一郎　【生歿】明治六年、岡山縣上房郡有漢村に生れ、明治四十年九月十四日歿す。享年三十五　【閱歷】十九歳の頃上京、それから二年ばかり後に坪內逍遙の家に寄寓して東京專門學校文學部に入つた。同校卒業後も坪內家に留まり、金子筑水・島村抱月・後藤宙外等と共に「早稻田文學」の編輯に從事した。かくて二十九年に及んだが、その年四月、肺疾を得たので、相州逗子に靜養した。後、神戸諏訪山の吉田病院に移つたが、この時代に種々內部生活に於て得るところが多かつた。その後三十年に至り、ほぼ快癒して歸京し、再び「早稻田文學」の編輯に與つた。同年十月、故鄕から母を迎へて牛込原町に一家を構へ、翌年更に余丁町に移つた。その頃、逍遙・樗牛の間に歷史畫についての論爭起るや、彼も亦その渦中に入り、雜誌「大帝國」に於て樗牛を難じ、樗牛また答ふるところがあつた。この頃から三十四年にかけて、主として美術上の所說の發表に努めたが、その後は一轉して主力を倫理研究に傾け、當面の問題その他について種々所見を公にし、傍、小說「月前狂」を作る餘裕を見せた。當時、彼は逍遙の外に大西操山に師事し、哲學上に於ける教養は主として操山より得たもので、殊に論究の態度の上に操山を學んだあとが明かに見えた。操山歿後（三十三年）、「大西博士全集」の編纂に參與して盡すところあつた。三十三・四年の頃、再び病蓐の人となつてからは、專ら思を靈界の事に潛め、その見神の實驗は、幽玄、詩の如き名文章に叙せられて、讀む者に深い印象を與へ、宗教界に多大の衝動を起した。それ等の文章を集めた「病閒錄」（別項）及び「回光錄」は盛んに迎へられ、彼は新ロマンチシズムの先驅者として、青年の間に多くの隨喜者を生ずるに至つた。かくて彼は靈に充實した生活を送りつつ、明治四十年に世を去つた。文學評論に於てはさほどでもなかつたが、宗教上の體驗を談ずる方面では、特にいみじき業績を示し、時人に向つて有力な啓示を與へた。【著書】前記の外に、「西洋倫理學史」「快樂派倫理學說」等があり、大正十年、梁川全集十卷、別集一卷（春秋社）が刊行された。

綱島梁川

【參考】綱島梁川追悼號（新人增刊）　〔高須〕

經亮（つねあきら）　有職家　【姓】橋本　【號】橘窓・梅窓・香圃・香果・慕香園　【生歿】寶曆十年生れ、文化三年（一八〇六）四月十日歿。享年四十七　【閱歷】山城葛野郡梅津村の梅宮神社の祠官で、兼ねて非藏人を務め又肥後守に任じた。小澤蘆庵・伴蒿蹊等と交り、和歌を善くして超凡の譽が高く、その門に入つて學ぶ者も少くなかつた。人と爲り豪放不羈で、頗る奇行に富んでゐた。又高橋圖南の門に入り、有職故實を學び、圖南の寶石類書等の校正に力を盡した。服飾・故實等の考證も數多くあつたが、早く歿して稿を脫したものが少かつた。【著書】梅窓筆記○橘窓自語（各別項）○校正年山紀聞等。　〔石村〕

中庸姿（つねのすがた）　俳諧集　一冊　【編者】菅谷高政　【本名】惣本寺諧中庸姿　【名義】題號は、儒道の所謂中庸の道といふ義に取つて、自己の俳風の中正なる事を示したものであらう。隨流の「誹諧破邪顯正」（別項）に「中庸姿とは古風當風の中風といふ事か。但し文字同じければ四書の中庸にや心得がたしと云。されば惣本寺と自身名乘るからして放埒ものなれば、定而儒道の中庸と云事ならん云々」とある。【刊行】延寶七年（誹諧書籍目錄には、同年九月とする）【諸本】半紙本・中本・橫本の三種があり、半紙本には、卷頭の高政の獨吟百韻の揚句が「珍重々々珍重の」とあつて、句末に「春」の字がない。「誹諧破邪顯正」にこれを難じた

ので、「ふたつ盃」に、「新刊して春といふ字を後に入れたるとなん」とある如く、中本・横本には「春」の字を補つてある。集中の卷の順序も半紙本と横本とは同じく、中本は聊か異なつてゐる。中本は貞門俳諧集（俳書大系）に收む。【内容】高政一派の連句集で、中本によつて卷の順序をいふと作者名を「誹諧物本寺」と記した高政の獨吟百韻一卷、高政・如風兩吟歌仙一卷、高政・春澄兩吟百韻一卷、春惠・正長・政定・定之・一方・清風各獨吟歌仙一卷づつ都合六卷、鸚一・高政兩吟歌仙一卷、高政・信德・如泉・仙庵・定之五吟歌仙一卷である。【價値】談林風の三都に於ける中心勢力者は、大阪では阿蘭陀西鶴（別項）、江戸では談林軒松意（別項）、京では半傳連社物本寺高政である。その高政が、「誹諧物本寺中庸參」と題して發表した點から考へて、本集は高政が自信と抱負とを示したものであつた事が窺はれる。それだけ又貞門の方ではこれを問題にして攻撃の矛を向けたのである。併し兎に角談林全盛時の高政及び京談林の作風が、どんなものであるかを知るには見逃し難いものである。又談林の連句の多くが百韻であつた中に於て、本集が歌仙を多く見せてゐることも注目すべきである。【影響】貞門の方から、本集卷頭の高政の獨吟百韻に對して攻撃が開始され、遂に論爭の渦を捲き起した。即ち西武門の中島隨流が延寶七年十二月「誹諧破邪顯正」（別項）を著はして、高政の獨吟百韻を攻撃し、それに對して翌八年二月岡西惟中が「誹諧破邪顯正返答」を著して宗因を辯護した。これより論爭が愈々白熱化し、この一年の中に論爭書が相踵いで出で、或は隨流に加擔し或は惟中に與みし、或は中立の地位に立つて論評する等、空前の論戰が展開された。（誹諧破邪顯正參照）〔萩原・志田〕

經信（つねのぶ）　歌人・詩人　【姓】源　【號】桂大納言ともいふ（桂の里に別墅あり）。また帥大納言【生歿】長和五年に生れ、承德元年（一七五七）正月六日、太宰府に薨じた。享年八十二【家系】民部卿道方の第六子で母は歌人、その子基綱は琵琶に秀で、俊頼は有名な歌人である。【閲歴】後一條天皇より堀河天皇に至る六朝に歴仕し、官は大納言、位は正二位に陞つた。嘉保二年（一七五五）太宰權帥を兼ねて七月下向したが、間もなく任地に薨じ、ために俊頼は九州に下つた。承暦二年、通俊が白河天皇の勅を奉じて「後拾遺集」を撰するや、經信はこれに對し不滿を感じて「難後拾遺」を撰し、通俊と論爭もしてゐるやうである。和歌には夙くから熱心で、長元七年の歌合の時（十八歳）、兄の經長が批評を乞ふため、公任を長谷に訪れたので、同行を乞ひ、具に公任の批評を聞いたといふ（袋草紙三）。同じく「袋草紙」三に、彼は公任にも劣らぬ諸道の達人で、頼通が大井川の三船の逍遙を催した時、彼は管絃の船に乘つて詩歌を獻じようといつた旨記してゐる（「古今著聞集」には白河天皇の西河の行幸とある）。「古今著聞集」卷六には永保三年七月十三日、白河天皇の仰せにより御琵琶牧馬を彈じたとあり、音樂にも堪能であつた。永承六年の侍臣詩合、天喜四年の殿上詩合その他に作品が見え、詩文にも長じてゐた。【著作】難後拾遺（別項）一卷（一說には俊頼著）○後拾遺問答○家集「大納言經信卿集」（別項）○經信卿記（師記とも）七卷　○勅撰集に入る歌は後拾遺集六、金葉二十七、詞花・千載各一、新古今十九、續古今集以下凡そ三十三首、合計凡そ八十七首、私撰集に入るものは續詞花集七首がある。なほ「伊勢物語知顯抄」は經信撰ではあるまい。その他、「寛治三年皇后宮十五番扇合」「寛治八年高陽院七番歌合」等の判詞がある。【人物】博學多能は自他共に許してゐた。事に當つては決斷が明快で、例へば承暦四年（一七四〇）、高麗王が使者を遣はして我が名醫丹波雅忠を請うた時も、公卿の會議が容易に決定しないのに遲參して、「高麗王の病我に於て何ぞ關せんや」と言つて、遂に丹波雅忠を遣はすことを中止した。資質穎敏、詩歌・管絃就中、和歌には甚だ自負するところが多かつた。當時の歌合には殆ど判者として活動し、天下判者とすら稱せられてゐる。【歌風】彼の歌は和歌そのものとしての特殊性に比較的乏しいが、併し自然を對象として清新な感覺を表現した歌も多く認められる。公任にも同樣な立場が見え、兩者を比較すると、公任は無雜作に起つてくる感興を樂に詠んでゐるのに對し、經信は苦心を重ねて詠んでゐる跡が見え、公任は生活に卽した感興を直接的に詠んでゐるに對し、經信は專ら力を表現や修辭の上に用ひてゐる。經信・俊頼の父子を比較するならば、俊頼の歌には鑑賞者をして心境を攝ませるやうな集中性があるが、經信の歌は力が表現の全面に行き亙つてゐて作者の姿が直接見えない。「八雲御抄」に、經信は「詞をさらず、ふつ〳〵といひたるがよきなり」と記させ給ひ、「古來風體抄」には、「かの大納言の風體は又ことに歌のたけを好み、古き姿を好める人と見えたれば、後拾遺の風體をいかに相違して見侍りけむかし」とあるが如く、經信は規範を傳統の中に求めて姿の美を重んじ、その中に清新な趣が見られる。

【參考】勅撰作者部類○三十五文集○本朝續文粹○朝野群載○本朝無題詩○公卿補任○尊卑分脈○大日本史一四一○百人一首一夕話○國文學全史平安朝篇○日本歌學史○國文學研究史○源經信の歌論　久松潛一（心の花　昭和四ノ一・二・四）

〔山岸・西下〕

經信卿集（つねのぶきやうしふ）　歌集　一卷【作者】源經信【諸本】（一）丹鶴叢書本、（二）圖書寮所藏本、（三）同寮所藏の一本等がある。（一）は「大納言經信卿集」とあり、（二）は外題に「帥大納言集」、内題に「經信卿家集」とあり、（三）は外題に「大納言經信集」、内題に「大納言經信丸が腰折共」とある。而して（三）の奥書は三つの年號をもつてゐる。その一によつて本集は經信の薨去より僅か十年後の嘉承元年に書寫された事がわかる。又他の一に平治元年、或る本にて校合した結果十二首を書き入れた旨を記し、次に後日校合した本は歌の順序が相違してゐたが、その儘にした旨を記してゐる。この或る本は嘉承の奥書を有するものである場合と、然らざる場合とが考へられるが、嘉承の奥書に二百六十三首とあり、これに十二首を加へた二百七十五首は現存本の二百七十七首に近いから、現存本は嘉承本を底本として、或る本を以て十二首を書き加へたのであらう。【解説】（一）は歌數百三十一首、内一首は重出、（二）は二百三十一首、（三）は二百七十七首、三本共に同じ長歌が二首づつあり、（三）には連歌が一首ある。（一）の歌は十九首の外は凡て（三）にあり、（二）は一首の外は全部（三）にある。（一）は部類を春・夏・秋・冬・戀・雜に分け、（二）（三）は判然と部類の名目を掲げてゐないが、（一）と同樣の部類がある。隨つて三本ともに歌の排列が大體に於て一致し、順序の相違、部屬の相違は多少ある

が、順序の全く一致した部分もある。(一)は歌の數が少く誤傳と思はれる箇所が多く、詞書は簡單である。(二)と(三)とは歌の數がほぼ接近し、(二)の殆ど全部が(三)に含まれてゐる。(二)は同一の詞書を數箇所に掲げてゐるのが、(三)は一箇所に纏めて載せてゐるものがある。(三)には奥書があるが(二)にはない。本集に載せられた歌は歌合の歌、逍遙の歌、贈答の歌等であるが、切實な感情や境遇を詠んだものはなく、すべての經驗を趣味化してゐる所が見える。詞書の中には眞名で記したものがある。例へば安樂寺の聖廟に詣でた事、慶應元年四月十八日宮中に召された事、治曆二年十月殿上の侍臣が大井河に船を浮べた事、修行の次に龍門に詣でた事等は眞名で記して歌の序としてゐる。眞名の詞書では和歌を倭語といひ、作歌衝動を情感といつてゐる。集中に出る一族は基綱・時俊・基綱女・通時・通時女・俊頼等である。安樂寺參詣を記した眞名文には、「往年參安樂寺聖廟、望砌下梅花云々」とあるから、筑紫から一度歸つたことになるが、「公卿補任」に太宰府に薨じたとあるのと一致しない。代表作「ゆふされば門田のいなばおとづれて」は、三本とも載せてゐるが、(二)は第三句を「なみよりて」とし、傍らに「おとつれて」としてゐる。〔西下〕

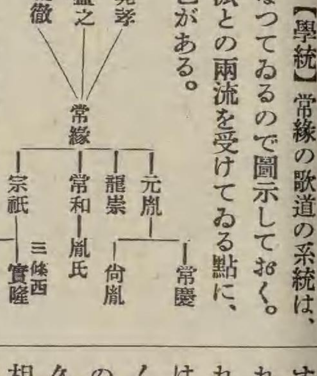
常久（つねひさ）　國學者【姓】もと大神（おほわ）、後に殿村（とのむら）。通稱、萬藏【生歿】未詳。但し文化・文政・天保頃の人。【閲歴】明かでない。伊勢の松坂に住んでゐて、宣長に敎を受けた人で、國語・國文に關する數種の著作がある。【著述】かたばみ草一鋪（文政十一年成。同十三年刊、てにをは紐鏡・詞の玉緒・詞八衢の三書に依つて、用言の活用と手爾波の係結を圖に表はしたもの）○皇語うひまなび（嘉永四年刊、かたばみ草の改題）○宇津保物語年立二卷（寫）（宇津保物語の梗概）○千草の根ざし一册（なでしこ・をみなへし・ききやう等二十種の說明で、後の方に圖解がしてある）○夜舟物語一卷（文政九年成。日本文庫第三編に收めて明治二十四年刊。夜船の中で二人の客が論爭した物語の風にして、佛敎の起原・沿革、各宗派の得失・是非を論辨したもの）。外に「但馬日記」と題する旅日記がある。〔龜田〕

經衡（つねひら）「六人黨」を見よ。

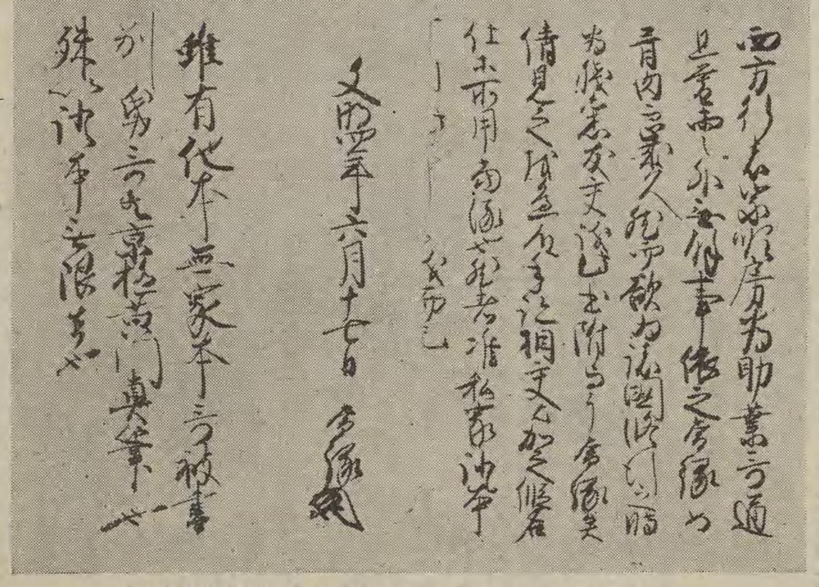
經平（つねひら）　故實家【姓名】土肥氏。通稱典膳【號】富山【閲歴】安永年代の人。岡山藩士で六千石を領した。故實に精しいので世に知られた人。【著書】本朝細馬集二卷（古よりの駿馬の著名なものゝ名を擧げ、これに出所及びその事實を記したもの。溫知叢書第九編所收）○湯土問答二卷（湯淺常山との有職故實に關した問答を記したもの。日本文庫第六編所收）○甲冑威毛色目○春湊浪話（別項）○本朝軍器考補正○鎧直垂考○大鏡今鏡增鏡系圖目錄○備前國志等。〔石村〕

經政（つねまさ）「平家物（へいけもの）の謠曲」を見よ。

常緣（つねより）　歌人【姓】東氏。本姓平氏【別稱】東野州【法號】素傳【生歿】應永八年美濃に生れ、明應三年（二一五四）寂。享年九十四。【家系】千葉介平常胤の後で、東の氏は常胤の子胤頼が下總國香取郡東ノ莊を領したに由る。胤頼は定家門で詠歌に巧であつたと云ふが、その孫胤行も二條爲家の女を娶り、その關係で爲家の門下となり、以下常緣の時世に至るまで、行氏・時常・氏村・常顯・師氏盡く勅撰集中の作者で、父益之の如き、了俊・正徹・飛鳥井雅世などと文人的私交を保つてゐる。武家とは云へ、當に文事に緣の深い家柄と言ふべきである。【學統】常緣の歌道の系統は、かなり繁雜になつてゐるので圖示しておく。二條派と冷泉派との兩流を受けてゐる點に、彼の學統的特色がある。



【閲歴】父益之は胤綱とも云ひ、左衞門尉下野守であつた。常緣が二十二歳の年、家督を長子に讓り、素明と稱し、文事に親しんでゐたが、結城の亂に讒にあつて周防に流され、常緣は父が正徹と私交があつた關係から、その後正徹に親しみ、その說をきくことを得てゐた。文安時代（四十餘歳）から、その影響頗る顯著のものがあつたらしい。併し彼は正統派の關係で、堯孝の方に重きをおき、その門下と云ふ事になつてゐた（寶德二年）。家嫡をついだ兄氏敎（氏敦とも）には嗣子がなかつた。ために常緣は寶德三年（五十一歳）、東氏をついで下野守となつたが、間もなく、千葉氏二流の內爭のため、幕命を受け東下して康胤と戰ひ（康正元年）、下總の東莊に留まることになつた。文人の彼は家のため暫く山東の塵に塗れざるを得なかつたのであるが、その後の十ケ年間は、彼の歌道圓熟時代と見てよい。門弟宗祇に與へた「東野州消息」はこの時代書かれたものらしい。堯孝（常光院）や、正徹の歌談を錄し得るにすぎなかつた「東野州聞書」（康正元年）の書かれた時代に比し、一段の自信と進歩とが見られる。下總の地は長祿元年再び亂れんとしたけれど、常緣の威風に壓せられてそれも程なく平定した。常緣六十七歳の年、やがて應仁の亂が勃發した。常緣は當時、先祖胤行が承久二年拜領した美濃の國山田の莊（那上城）を相續してゐたが、戰亂の紛れに、將軍の近臣齋藤妙椿なるものにより應仁二年九月奪取されてしまつた。山東に孤栖する常緣は、祖先以來傳承の地を奪はれた事を甚だ悲しみ、亡父の冥福を祈りつつ悲憤の歌一首を詠んだ。この歌が同席してゐた濱春利の口からその兄康慶へ、康慶から更に妙椿へと傳へられ、その



東常緣自筆「古今和歌集」奥書（伊達伯爵藏）

同情を得て返却を受け得たといふ。ともあれ常縁は家嘗を子に讓り、上洛したのが四月、翌月完全に舊領を授けられたのであるが、同時に薙髮の志を遂げた。以後法號素傳を以て呼ばれてゐる。歸洛後、宗祇との師弟關係は一層濃厚になつた。彼は「古今和歌集」に立脚すべきを說いてその研究を始め、文明三年に俊成女筆の古寫本などを入手するを得た。こゝに「古今集」解釋上の口傳を宗祇に施した。世にいふ「古今傳授」（別項）は、これを初めとするのである。その後、近衞政家・三條公敦・將軍義尙等の邸にも出入し、歌道の指導に任じてゐたが九十四歳の高齡を以て寂した。【著作】東野州聞書（堯孝歌話とも）（別項）○東野州消息一卷（門弟宗祇の疑問に對し、解答した書簡。群書類從一四三所收）○東野州家集一卷（平常縁集の書名にて群書類從二六〇所收）○東常縁詠一卷（寫）（歌の排列に部立は無い。且つ後半は門下並に關係者の詠を收む）。その他、彼の著述と稱されてゐる註解書には、「十口抄」（古今集に關す）、「東家三部祕錄」（三代集に關す）、「新古今集聞書」（新古今集新抄或は四卷抄とも稱す）、「東野州拾唾」（拾遺愚草抄聞書とも）等がある。何れも簡單な語釋類に過ぎない。なほ「東野州墳記」と稱する小册が圖書寮にあるが、東氏の由來及び父益之の傳を錄したものである。【作風】彼の詠の傳はるところ殆ど題詠であり、二條派の正路以外に脫する力を缺いてゐた。但し特殊の格調を自在に驅使してゐるところ、如何にも老練の感を抱かせる點もある。

あふぎみるこゝろを花にさきだてて今日もやあめにながめくらさむ（春雨）

いづくにか花は咲くらむはるの夜のねざめの床にほふやまかぜ（夜花）

ひとこゑにおどろかされてあかつきの枕にまとふ山ほとゝぎす（郭公）　〔齋藤（清）〕

【參考】野史○鎌倉大双紙○安齋隨筆○長春隨筆○卯花園漫錄○白石紳書○一話一言○閑室漫錄○其昔がたり○蘿月庵國書漫抄

椿姫（つばきひめ）　飜譯小說　【譯者】長田秋濤　【原作】小デュマ、卽ちアレキサンドル・デュマ・フィス作「ダアム・オウ・カメリア」　【刊行】明治三十六年五月。初め同二十九年五月から雜誌「白百合」に發表されたが、廢刊のため完結に及ばなかつた。

【梗概】有馬壽太郎（アルマン・デュヴァル）といふ純眞熱情的な青年が、後藤露子（マルグリット・ゴオチエ）といふ娼婦と戀に陷るのが發端である。露子はその美貌と豪奢とで巴里中一二と指を折られるほどのそれ者だのに、最初は有馬青年の純情に絆（ほだし）されて、有馬に許してゐるうち、却つて自ら狂ほしい程有馬を愛するやうになる。さうしていろ〳〵複雜な出來事や障碍やを押しのけて、二人は世間の噂を外に、巴里に近い田舍に同棲する。有馬の父は世間の噂に心配して巴里に出て來、息子にあつて、女を思ひ切らせようとする。有馬は父の言葉に動かされるが、愛の力は、父の言葉をきかぬ。父は密かに露子に逢つて息子を思ひきつてくれと賴む。露子は心ならずも賴みの切ないのに動かされ、有馬には緣切の手紙をやつて又元の泥水稼業に還る。有馬は父と共に田舍に歸るが、露子の樣子を見に巴里に戻る。さうして露子の眞情を誤解して、他に情婦を作つて露子を窘める。露子も餘りの苦しさから有馬の父との約束に背いて一度有馬と元々にならうとしかけるが、思ひ切つて英國に渡る。有馬は露子の仕打に、憤恨と懊惱を抱いたまゝ東方漫遊に出る。有馬の留守中に英國から歸つた露子は、心の苦惱から持病の肺病を嵩じさせて、有馬の名を呼びつつ寂しく死ぬ。急を聞いて歸つて來た有馬の手には、形見として病床日記が殘る。

【解說】譯者秋濤は、この小說を紹介する理由四ケ條を擧げてゐる。（一）十九世紀に於て五指に屈せられる傑作の一なること、（二）近世の寫實主義の先驅となつたこと、（三）不幸者に對する作者の洪大な同情、社會に對する不平及び一種異彩ある道義の念、云々。「椿姫」が日本に紹介されたのは、明治六年五月、郵便報知新聞に出た「成島柳北滯歐書簡」が最初である。同十八年の「新編黃昏日記」は飜案ではあるが、この小說を最初に日本に傳へたもの、ただ末段がめでたく終つてゐる。飜案者は小宮山桂介（昭和五年三月歿）、これに署名してある天香道人・醒々居士は、共にその號である。最初の完譯は加藤紫芳の譯であらう（明治二十二年刊、二十年頃、讀賣新聞所載といふ）。秋濤の譯は第二の完譯である。そして、やゝ日本臭くし過ぎたと思はれるところはあるが、簡淨で緊密で、實に練熟した名譯文であり、この後數種出た「椿姫」の譯は、皆これに據らぬものはない。今日多少是正すべき所があつても明治飜譯文學界の古典的名譯の一たる聲價は落ちない。　〔柳田（泉）〕

坪內逍遙（つぼうち せうえう）　小說家・劇作家・評論家　【本名】雄藏。幼名は勇藏　【別號】小羊子　【閱歷】安政六年五月、美濃國加茂郡太田村（當時尾張藩代官所在地）に生れた。父は坪內平之進、母はミチ。長兄金次郎（後に信益）、次兄寅三郎（後に義衞）がある。明治二年、十一歳の時、父が代官をやめて歸農し、名古屋郊外、笹島村に移住するに及び、寺子屋に入學、次いで明治五年、十四歳の折、私立白水學校に通學して漢籍を學んだ。同年八月、次兄と共に、更に愛知洋學校に於て英語を修め、翌六年、縣立成美學校（翌年、官立愛知英語學校と改稱）に移つた。その頃の同窓に八代六郎・三宅雪嶺がある。當時外人講師の一人、マックレランから「ハムレット」の一節を聞いたのが、沙翁を知つた最初である。九年八月、縣の選拔生となり、加藤高明等と共に上京、上六番町の長兄信益の家に寄寓した。その年九月、開成學校に入り、翌十年四月、同校が東京大學と改まつてから、その寄宿舍に起臥し、十二年、文學部本科（政治經濟科）に入つたが、嗜好・趣味が文學にあるので、前年來、英國小說を貪るやうに讀み、スコットの「ランマムーアの新婦」の一部を意譯した。十三年、前記スコットの作を「春風情話」（別項）と題して刊行した。この頃、同學の高田半峰（早苗）も文學に興味を持つたので、各自分擔してスコットの「レデー・オブ・ザ・レーキ」を譯し、且つ本鄕元町の進文學社で英語を敎へたりした。十五年（二十四歳）父を失ひ、大學の卒業試驗に當つて、不得手な政治・哲學の二科が不成績のため落第したが、翌十六年七月、大學を卒業して、文學士の稱號を得た。これより先、逍遙は依然進文學社に關係する傍ら、本鄕元町に寓居して、年少學生七八名を監督した。その頃、「該撒奇談」を譯了して、一層沙翁の

坪內逍遙

作品に親しみを加へた。同年九月、高田早苗の勸誘により、私立東京專門學校講師となつたのが、今日の早稻田大學との因緣を結ぶ端緒である。當時は、まだ文學科がなかつたので、西洋歷史及び憲法論などを講じた。翌十七年、リットンの「リエンジー」譯を起し、「春窓綺話」及び「自由の太刀餘波鋭鋒」（各別項）を公刊した。明治十八年は、逍遙に取つても文

て、文學上の人材養成に努むると共に、他面、演劇改良に力を注ぎ、この年九月、芝離宮で開かれた演劇協會委員會にも列席した。翌二十三年、親しく學生のため、自宅でシェークスピヤを講じ、なほ一二の私立學校で敎鞭を執つたが、間もなくやめて專ら早稻田の專門學校のために努めることに決した。二十五年

年、文化事業研究會を解散、十四年、「逍遙選集」全十二卷、別册三卷を出した。昭和三年に至り、明治四十年以來、刊行を繼續し來つた「沙翁全集」を悉く譯了して、日本第一の飜譯事業の完成を告げた。なほ昭和四年、その古稀祝賀の意味にて演劇專物館（別項）が設立された。

領域は廣汎であり、批判の態度は親切と嚴肅と和氣を兼ねそなへてゐたので、黎明期の明治文壇が、逍遙の提唱と價値づけによつて、どれほど啓蒙され、感化されたか知れなかつた。この點だけでも逍遙は明治文壇に偉大な功績を殘してゐる。中期の演劇改良時代には脚本「桐一葉」「牧の方」「菊と桐」その他の創作

る小册が圖書寮にあるが、東氏の由來及び父益之の傳を錄したものである。【作風】彼の詠の傳はるところ殆ど題詠であり、二條派の正路以外に脫する力を缺いてゐた。但し特殊の格調を自在に驅使してゐるところ、如何にも老練の感を抱かせる點もある。

あふぎみるこゝろを花にさきだてて今日もやあめにながめくらさむ（春雨）

いづくにか花は咲くらむはるの夜のねざめの床にほふやまかぜ（夜花）

つま　つまがさ

つまがさねかねてきくづき　脚本　五幕十

作品に親しみを加へた。同年九月、高田早苗の勸誘により、私立東京專門學校講師となつたのが、今日の早稻田大學との因緣を結ぶ端緒である。當時は、まだ文學科がなかつたので、西洋歷史及び憲法論などを講じた。翌十七年、リットンの「リエンジー」譯を起し、「春窓綺話」及び「自由の太刀餘波鋭鋒」（各別項）を公刊した。明治十八年は、逍遙に取つても文壇に取つても意義ある年だつた。この年、新文學論とも云ふべき「小說神髓」（別項）を公にし、且つ小說「書生氣質」（別項）をパンフレットの形で續々世に出した。「書生氣質」の公刊と共に逍遙は文壇の流行兒となり、明治の寫實小說の先驅者となつた。十九年一月に出した「妹と脊鏡」（別項）も、やはりパンフレットとして出したのである。この前後、頗る著作に力め、「慨世士傳」（別項）「內地雜居未來の夢」「朗蘭夫人」などを出版し、且つ齋藤綠雨・長谷川二葉亭・饗庭篁村・矢崎嵯峨の舍・關根正直等と相知るに至つた。二十年、讀賣新聞の客員となり、翌二十一年、小說「外務大臣」を同紙のため執筆したが、二ヶ月餘で中絕した。この年「國民之友」に、短篇小說「細君」（別項）を書いた頃から、漸く自省し、藝術上の苦悶を深く經驗すると共に、斷然小說に筆を絕つことに決した。それは文學生涯に於ける一轉機で、小說から演劇へ步みを移し、先づ行き詰つてゐる劇界及び劇文學のために、改善の方途を講じようと志した。翌二十二年九月、東京專門學校が文學科を設立するについてその主腦者となり、和漢英三文學の調和を目的として學科の配置等に頗る注意した。その最初の入學者中に金子馬治（筑水）があり、第二期には島村抱月等がゐた。かうして一方において、文學上の人材養成に努むると共に、他面、演劇改良に力を注ぎ、この年九月、芝離宮で開かれた演劇協會委員會にも列席した。翌二十三年、親しく學生のため、自宅でシェークスピヤを講じ、なほ一二の私立學校で教鞭を執つたが、間もなくやめて專ら早稻田の專門學校のために努めることに決した。二十五年「都新聞」の依賴で、飜案物「二心」「電小僧」の小說などを書いたが、三ヶ月ほどで筆をとめた。これより先、二十四年十月、その主宰のもとに「早稻田文學」（別項）を發刊し、二十六年、同誌上に「美辭論稿」を揭げ、二十七年には學生の戶外劇を催し、別に近松研究會を起したり、自宅で朗讀會を開いたりした。かくて二十九年、早稻田中學創立に與つた關係から同校教頭となり、多忙のため「早稻田文學」を休刊した。この年から翌年にかけて「桐一葉」（別項）「牧の方」「文學その折々」（別項）「梨園の落葉」（別項）等を刊行し、それと前後して文學博士の學位を授けられた。三十五年、早稻田中學校の校長に就任したが、この間、「英文學史」を刊行して日本に於ける英文學界を稗益する所大きく、且つ新舞踊劇の創作に志すに至つたのである。同年、高山樗牛がニイチェを熱心に鼓吹して、青年を誤らんとすることを憂ひ、「馬骨人言」（別項）を讀賣新聞に匿名で揭げ、大にこれを論難した。翌三十六年、一身上の事情で、早稻田中學校長を辭すると共に、新文藝運動の準備を始め、三十八年、文藝協會（別項）を設立した。大正二年夏、協會を解散する迄種々協會の事に盡力した。同四年、早大教授を辭し、主として沙翁劇その他の著譯に努めた。同九年、文化事業研究會を起し、次いでペーヂェントの創始に熱中した。十二年、文化事業研究會を解散、十四年、「逍遙選集」全十二卷、別册三卷を出した。昭和三年に至り、明治四十年以來、刊行を繼續し來つた「沙翁全集」を悉く譯了して、日本第一の飜譯事業の完成を告げた。なほ昭和四年、その古稀祝賀の意味にて演劇博物館（別項）が設立された。

【著作】逍遙選集十二卷、別册三卷○沙翁全集四十卷（早稻田大學出版部）。〔小說〕當世書生氣質○妹と脊鏡○細君○一圓紙幣の履歷ばなし（以上各別項）。〔戲曲〕桐一葉○沓手鳥孤城落月○役の行者○新曲浦島（以上各別項）○新曲かぐや姫○名殘の星月夜○義時の最期等。〔飜譯〕春窓綺話○自由の太刀餘波鋭鋒○慨世士傳○人肉質入裁判（以上各別項）。〔評論書〕小說神髓○文學その折々○馬骨人言○小羊漫言（以上各別項）。〔其他〕わがページェント劇○劇と劇文學○家庭兒童劇等。なほ西洋史に關する著作が數種ある。

【批評】四十餘年間に亙る文學生涯を手短かに批評することは容易でない。唯それを前期・中期・後期に區分して考へると、前期は小說及び文藝評論を主とした時代、中期は演劇改良に專心すると共に新文藝開拓に努め、傍ら倫理研究に力を割いた時代、後期は演劇改良上の抱負を實地に試み、且つ劇文學の創作・飜譯に主力を集中した時代といふことが出來よう。その前期に於ける小說家時代は永く續かなかつたが、文藝評論方面は、穩健中正を旨として「早稻田文學」創刊より休刊頃に至る前後まで、殊に油の乘つた樣子を示した。實際逍遙は鷗外の理想派に對し、現實派の立場から、現實の上に立つて時代の文學現象を具體的に記錄し、批判するを旨とし、その批判の領域は廣汎であり、批判の態度は親切と嚴肅と和氣を兼ねそなへてゐたので、黎明期の明治文壇が、逍遙の提唱と價値づけによつて、どれほど啓蒙され、感化されたか知れなかつた。この點だけでも逍遙は明治文壇に偉大な功績を殘してゐる。中期の演劇改良時代には脚本「桐一葉」「牧の方」「菊と桐」その他の創作を續々公けにし、新しい立場から演劇評論を行うて時代に先驅した。この時期に「演劇は教化の一種である」といふ思想が既に現はれ、そこに一つの重要意義を示した。後期は文藝協會の創立と活動、ペーヂェント劇の創始、沙翁全集の完成などに精力を傾け、戲曲「名殘の星月夜」「役の行者」「新曲浦島」（別項）「義時の最期」「沓手鳥孤城落月」（別項）等、作るところ多かつた。この間、總じて演劇上に於ける諸々の主張を率先して實地に行つた趣が見える。云へば必ず行ひ、主張すれば必ず實現するといふこと、及び絕えず反省しつつ新しい時代を劇界に作つて行かうとする傾向が、過去に於ける文藝活動を特色付けてゐるやうに思ふ。その仕事は多方面に分岐してゐるが、これを大觀すると、やはり、劇文學の開拓、演劇の革新が、その中樞をなしてゐる。その他、逍遙が教育家としての一面にも少からぬ功績があつて、多くの人材を養ひ、その門下から、故人としては島村抱月・綱島梁川・中島半次郎・土肥春曙・東儀鐵笛等を出した。且つ倫理研究に於ても亦、在來見ざる新境地を開拓し、文學と教育との接近に貢獻する所があつた。即ち文藝教育家として卓越せることを示してゐる。

〔高須〕

妻（つま）「生」を見よ。

褄重噂菊月（つまがさねかねてきくづき）　脚本　五幕十

の後數種出た「椿姫」の譯は皆これに據らぬものはない。今日多少是正すべき所があつても明治飜譯文學界の古典的名譯の一たる聲價は落ちない。

〔柳田（泉）〕

坪內逍遙（つぼうちせうえう）　小說家・劇作家・評論家

【本名】雄藏。幼名は勇藏【別號】小羊子

【閱歷】安政六年五月、美濃國加茂郡太田村（當時尾張藩代官所在地）に生れた。父は坪內平之進、母はミチ。長兄金次郎（後に信益）、次兄寅三郎（後に義衞）がある。明治二年、十一歲の時、父が代官をやめて歸農し、名古屋郊外、題して刊行した。この頃、同學の高田半峰（早苗）も文學に興味を持つたので、各自分擔してスコットの「レデー・オブ・ザ・レーキ」を譯し、且つ本鄕元町の進文學社で英語を敎へたりした。十五年（二十四歲）父を失ひ、大學の卒業試驗に當つて、不得手な政治・哲學の二科が不成績のため落第したが、翌十六年七月、大學を卒業して、文學士の稱號を得た。これより先、逍遙は依然進文學社に關係する傍ら、本鄕元町に寓居して、年少學生七八名を監督した。その頃、「該撒奇談」を譯了して、一層沙翁の

二場　世話物　【作者】本屋宗七　【通稱】おさん茂兵衛、磔刑のお駒　【名稱】題材の事實を響かせた上に、上演の月を利かせた名題。

【諸本】歌舞伎脚本傑作集第八卷・日本戲曲全集第四十一卷に所收　【興行】文化十三年九月十二日初日、江戸中村座上演。

〔役割〕佃屋喜藏・魚賣り腕の喜三郎（三代坂東三津五郎）、大經師茂兵衛・城木屋娘お駒・尾花六郎右衛門（三代尾上菊五郎）、髮結ひ才三郎（五代松本幸四郎）、茂兵衛女房お玉（中村松江）、藝者額のおさん（二代澤村田之助）、城木屋番頭丈八（七代市川團十郎）、按摩赤松梅柳（坂東熊平）、城木屋庄兵衛（市川友藏）、秋月角太郎（中村傳九郎）。

【題材】文化十三年六月三十日の拂曉、靈岸島東湊町の家主武兵衛を、女房おひめが殺した。その罪を長八といふ者に塗りつけようとして發覺し、七月二十五日、品川で磔刑に處せられた。又同じ年の春、お玉ヶ池の福島屋清右衛門といふ魚屋の猫が、主人の貧窮を思つて、兩替屋から小判を咬へ出したといふ珍らしい事件があつた。この二件を組み合せ、おさん茂兵衛と昔八丈の世界に作り込んだので、亭主殺しをお駒に嵌めたのは、原作の「戀娘昔八丈」（別項）が亭主殺しの狂言だからである。

【梗概】〔序幕〕（神田料理茶屋）お駒と才三が密會。才三、香箱を隱し持つてゐる。〔二幕〕（隅田川鞠塢）秋月角太郎は、尾花六郎右衛門が預つてゐる姫百合の香箱を才三に盜ませたが、才三は城木屋庄兵衛に預ける。庄兵衛は梅柳に毒藥を調合さす。大經師茂兵衛は笹田勇藏より修覆に預かつた眞筆の曼陀羅を才三に奪はれる。（同亭座敷）茂兵衛は深い仲の藝者額のおさんを使つて、番頭丈八から、巧く二百兩捲き上げる。と思つたは却つて丈八の計略で、おさんは角太郎に取られてしまふ。曼陀羅の紛失。女房お玉の心配。（白髭内堀）茂兵衛は角太郎を追つて來て、誤つて中間鳶助を殺す。〔三幕〕（城木屋）丈八、お駒を口説く。佃屋喜藏、お駒の許へ二百兩の持參で聟入り、才三の嫉妬。喜藏は弟喜三郎へ茂兵衛の二百兩償ひの金を遣りたいため、庄兵衛から材木代金として勇藏へ納める二百兩を借りる筈だつたが、双方とも胴脈なので失敗。梅柳はそのため惡事が顯はれて勇藏に縛られる。丈八は、實意を明かして庄兵衛を諫言。才三・庄兵衛は喜藏を毒殺する相談、お駒立ち聞く。喜藏毒酒を飲まんとするを茂兵衛が助ける。（才三郎内）喜藏忍び込んで、才三が庄兵衛から受取つた香箱を盜んだが、お駒が才三に飲ませようとした毒を呑んで苦しむ。お駒は才三と思ひ殺す。お駒の妹お常の飼つてゐた猫が香箱を咬へ出す。〔四幕〕（鈴ヶ森）亭主殺しで磔刑になつたお駒の靈が、お玉を害せんとする才三郎を妨げる。（お玉ヶ池魚屋）腕の喜三郎と妹お玉が見た夢。匿まつてあるおさんへお玉の恨み。おさんの伯父尾花六郎右衛門が來て許嫁の角太郎を嫌ひ、家出したおさんの首を打たうとする所へ、猫が香箱を咬へて駈け込む。才三は贋の曼陀羅を喜三郎に渡して、おさんを捲き上げる。（裏手）お駒の亡靈現はれる。（喜三郎内）お玉は、身を賣つて二百兩屆ける。お駒の亡靈、香箱の鑑定書を喜三郎に渡す。〔大切〕（櫻の馬場）おさん茂兵衛の道行。清元「由緣の暦歌」。（明神坂）茂兵衛は才三を捕へて曼陀羅を取返す。

【解說】お駒とおさん茂兵衛の二派に本筋が分れてゐるが、これは當時の作者の常套で、菊五郎に男女二役を勤めさせたいためである。

三面記事をうまく取込んだ手際は巧である。全體としては散漫に流れてゐるが、お駒を淫奔な女のやうに書いたのは面白い。香箱を取るためといふのは、俳優への言ひ譯である。序幕の料理茶屋も、當時のスケッチとしての興味がある。〔渥美〕

妻木（つまき）　句集　四册　【著者】松瀨青々

【本稱】青々句集　妻木　【刊行】明治三十七年十一月より三十九年一月に至る。【解說】明治期に於て作者が生前に自選句集を發表した先驅といふべく、古來可なり問題とされたことだけに、この句集の刊行は當時の俳壇に物議の種とすらなつた。著者自らもそれを豫期してゐることを自序に告白し、更に「我それ般の事は遮莫。唯我句を一册に集めて我見たき計り。數星霜の拾り捨をこゝに搔き集めたる爪木云々」といつてゐる。春夏秋冬それ〴〵乾坤・草木・生類・衣食・祭祀に分類し、秋之部の卷末には、同巢句の辯、題註等を附載してある。生前句集發表のことなどは兎に角、青々の句作旺盛の時代の作風の全容を窺ひ得る點に於て、本集の價値は大である。〔白田〕

裙模樣沖津白浪（つまもやうおきつしらなみ）　合卷四編　【作者】鶴屋南北　【畫工】五渡亭國貞

【名稱】女性の盜賊をほめかしたのである。

【刊行】文政十一年　【諸本】大南北全集第十七卷所收。【題材】因幡小僧新助、日本左衛門（濱島庄兵衛）と云ふ江戸巷說で有名な二盜を題材にしたもの、神劍曉丸が酉年の人の血に染まれば、忽ち鷄聲を發し、眼病が治すると云ふ小說話は、脚本草雙紙に散見する趣向であるが、既に同形式の說話が京傳作「敵討兩輛車」（文化三年）、馬琴作「墨田川梅柳新書」（文化四年）、栗杖亭鬼卵作「今昔庚申譚」（文化九年）等に見えてゐる。

【梗概】全篇芝居の臺帳に擬せるもので、四幕六場より成つてゐる。東山義政の時、遠州月本藩の家中に濱島幸兵衛と云ふ侍があつた。大阪藏屋敷勤番の折、島の内の藝子小萬と深く契り、懷姙するに至つた。然るに主命で主家の重寶峰藥師の尊像、曉丸の劍を東山殿へ獻上のため二品を守護して遠州から京都へ急ぐ道中、荒井宿で盜まれた。一時切腹せんとしたが許嫁菊川の兄中村左膳の忠告に由り、日延べを願ひ父逸當の身の上を依賴し、小萬にこの事を通知し、寶物探索に出かけた。小萬は大に驚き奉公の暇を貰ひ遠州さして來る途中、伊勢路で因幡幸藏と云ふ賊に捉へられた。子を產むまで許してくれと同棲するうち男兒が產れた。約束通り妻になれと迫る幸藏を或る夜殺害し、子分等に仔細を語り、遂に賊の首領となつた。或る日月本家の侍篠原一學、遠州犀ヶ崖念佛寺に來り、住職鐵砲和尙に無銘の刀の一杯入つた長持を預けた。これは百姓所持の刀から重寶曉丸をさがすためである。實はかの重寶は一學が法印今辨慶天狗坊に盜ましめ、武藝の仕合に怨みある幸兵衛を失敗せしめんとしたのである。併し天狗坊は褒美が少いので寶劍のみ渡し、藥師の尊像は渡さない。そこで五十兩を與へ改めてこの二品を揃へ、和尙へ預けた。小萬、女形姫之助と名乘り、旅役者の拵へで寺に泊らして貰ふ。和尙、その美しさに迷ひ酒宴を催す。餘興に繩ぬけを敎へると言ひて和尙等を縛り、小萬は因幡幸藏と名乘り子分の面々も來て寶物を搜し、僞物を攫まされる。盲目になつた幸兵衛も來合せたが、目が見えぬので眞僞を調べる事も出來ず、而も小萬と出會つた事も双方

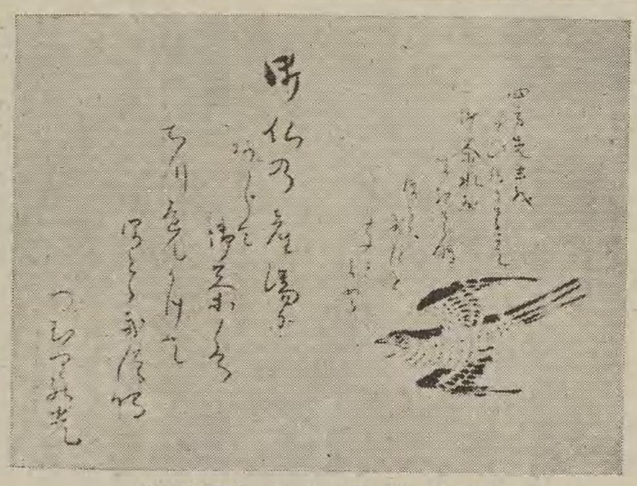
心づかぬ。その後、琴三味線の師匠となつてゐる小萬の處に幸兵衛は盲目の浪人體で來て門口に袖乞をする。小萬見つけて再會の歡びをなす所へ、許嫁菊川、下郎軍平も來り會し、兩婦幸兵衛を中に爭うたが和解した。菊川は金で尊像が買へると聞き、欺かるゝとは知らず、身を賣る決心をして連れ行かれたが、實は法印の惡計であるとわかり、天龍川に投身して死んだ。その夜希望も失せて切腹せんとする幸兵衛の側にその幽靈が現はれて留める。菊川の懷にあつた尊像は眞物であり、寶劍は小萬が偶然持つて居り、父逸當はその寶劍で小萬の子を斬れば百年產れの血に染みて眼病治すとの傳說通り、幸兵衛の兩眼が癒え、その刀が寶劍なる事明瞭となる。一學の姦計も密書により露見して囚はれる。因幡幸藏の姿で斬られた小萬も、女姿を現はし、子と共に幸兵衛父子に名殘を惜しみつつ絕え入る。

【解說】南北が劇作の傍ら、草雙紙を發表し始めたのは文政五年頃からで、多くは脚本に似通ふものである。本書も全く臺帳になつてゐるが、この形式は烏亭焉馬・柳亭種彥に依りて既に試みられてゐる。書中、幽靈の現はれる構想は、南北としては寧ろ平凡な方で、その陰慘怪奇なものとしては、同じ草雙紙の「怪談磐倉萬之丞」（文政十一年—天保二年）をあげねばならぬ。本書の趣向の一部は、既に文政九年秋、中村座書卸し「曾我中村稚取込」に發表したものであり、三代櫻田治助作「新板越百浪」（鬼神のお松）は、この書の人名を變更したに過ぎない。なほ本書は毎丁必ずしも挿繪を入れず、本文の多い點は草雙紙の型を脫してゐる。蓬萊山人校合とあるのは、二世烏亭焉馬であらう。

〔山崎〕

頭光（つむりひかる）　狂歌師【本名】岸識之。通稱宇右衛門【別號】文笑・桑楊庵・巴人亭【生歿】寶曆三年江戸に生れ、寬政八年（一七九六）四月十二日歿す。享年四十三【法名】恕眞齋德譽素光居士【墓所】駒込瑞泰寺【閱歷】父は豐岡侯に仕へてゐた。光は龜井町の町代を勤め、傍ら一筆齋文調に就いて浮世繪を習ひ、畫名を文笑と號した。世間流布の浮世繪師傳に、光を七十歲で歿したとしてあるのは、この師文調の享年と混同した誤りである。天明初年よりまた狂歌に遊んで、狂歌四天王の一人と呼ばれ、その社中を伯樂側と稱し、初めは宿屋飯盛・淺草市人・尙左堂後滿・酒月米人等も皆この社中に屬してゐた程に勢力があつた。名吟も少からぬ中に、「時鳥自由自在に聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里」の一首が殊に人口に膾炙してゐる。この歌は門人等が石に刻し、その碑を日暮里の妙隆寺に建てて置いたが、同寺域が一市人の有に歸すると共に、碑石は他に移されて所在不明となつた。寬政五年には蜀山人（牛門先生）より巴人亭の號を讓られ、享和二年には桑楊庵の號を門人眞砂庵干則に授與し、後、專ら巴人亭と號してゐたが、その歿後巴人亭は淺草市人が受け繼いだ。辭世は、「ひと聲は丸では聞かぬほとゝぎす半分夢の曉のころ」といふので、瑞泰寺地內の八角形の碑面に、この歌が刻してある。【著書】繪本譬喩節一册（寬政元年刊）○狂歌桑の弓一册（寬政四年刊）○狂歌上段集二册（寬政五年刊）○狂歌太郎殿犬百首二册（同上刊）○狂歌春の色一册（寬政六年刊）○晴天闘歌集二册（寬政八年刊）○蒐道園（隨筆）五册（寬政年間刊）

〔野崎〕



頭光筆蹟（蜀山人判取帳）

積戀雪の關の扉（つもるこひゆきのせきのとびら）　小說【作者】泉鏡花【發表】明治三十一年九月大阪每日新聞連載【刊行】明治三十四年四月、春陽堂。鏡花全集三卷・明治大正文學全集（泉鏡花篇）所收。

【梗概】畫師玉川淸は、從妹のお澄と互に末は一緖になるものと心に許してゐたが、お澄が兩親に强ひられて、心弱くも陸軍大佐篠山六平太夫人となつてからは、身を持崩して吉原のおいらん丁山と痩所帶を張る。お澄の親久世友房の家は茶の湯の師匠で、名家に出入してゐる事を、この上もない誇りとしてゐるのであるから、素寒貧の淸を一族の恥として罵つて止まない。恰も淸を可愛がつてくれた伯父の死に際し、駈け附けた淸と丁山を、友房は座に堪へられぬまでに侮辱したので、淸はその時の事を言ひがかりにして、丁山と連立つて友房の家に强請に行く。お澄が居合せて淸を宥める。その間に不在の友房は歸宅したが急死したと云つて奧に隱れ、俄に通夜の趣向をして伯母や六平太、家僕の者共が寄つて酒盛を始める。この意外な計畫に折角仕組んだ芝居のうらをかゝれ、一言もなくなつた二人を散々に愚弄した擧句、六平太は立ちかゝる淸の左腕を挫折せしめたので、堪へ兼ねた丁山は、隱し持つた出刄庖丁で六平太の脇腹を抉る。丁山は淸に畫を描く事をすゝめて、自ら乳房の下を搔き切つた。淸はその襦袢の片袖を引きちぎり、血潮に浸して一氣に襖一杯に丁山の姿を描いた。隻腕の畫家玉川淸の名は有名になつた。

【解說】作者の女性讃美の最も露骨に現れた作品の一つである。鏡花の世界では必ず美しい女が主要な人物となつて活躍する。作者理想の女は思ふ男のためには一切を擧げて達引き、命を捨てて惜しまない。浪漫派の思想は常に自由を欲し、束縛を嫌ふ心持が强い。從つて血の通はぬ道德は潔く踏み躙る。强權や地位や名譽や一切の形式主義に對しては、極力反撥し蔑視する。淸は丁山の意氣によつて更生する事が出來た。「辰巳巷談」（別項）が纖細な線で鋭く描かれてゐる作品とすれば、これは寧ろ初期に見る感情の太い線で熾烈な熱情に燃え上つてゐる作品である。〔水上・平松〕

【上演】この作は、夙く大阪で岩崎彝花脚色で上演され、東京でも上演されたが、明治四十年一月東京新富座で、伊井・河合の一座で演じたのが、やゝ整つた形のものであつた（七幕十一場）。伊井の淸、河合の丁山、井上の六平太、福島の友房、木村のお澄の配役であつた。この劇はその後再三上演され、常に河合の丁山、伊井の淸であつた。然るに昭和四年三月喜多村の丁山初役で市村座で上演された時には、原作者補筆で小村雪岱が厚い信頼の下に、舞臺

裝置は勿論、隅々の小道具まで指導して初めて原作らしい味と趣を見せた。〔以上久保田〕

露がはなし（つゆがはなし）噺本　五册【作者】露五郎兵衞【名稱】角書に御存知の輕口とあり、題側に「さしあひなし」とある。輕口は當時用ひられた笑話の義、「さしあひなし」は連歌の術語で、轉じて當り障りのない義。【刊行】元祿四年【諸本】近世文藝叢書第六笑話・落語滑稽本集（近代日本文學大系）所收【內容】露五郎兵衞は專門の落語家であつて、落語の作家としては必ずしも勝れた才能を持たなかつたらしい。本書中「醒睡笑」（別項）より材料を取つたもの約二十篇、「昨日は今日の物語」（別項）より取つたもの二篇がある。大體他書より取材したものは、表現を平易にし、當時の風俗に適するやう改作してある。その他の自作と覺ゆるものは、興行地たりし京都を中心とし、當時の見聞から材を取つたらしく見える。「涙は人も尋ぬるたね」（卷一第九）に、「あれあれあそこに衣を著て、あみ笠めしたる人は、都にかくれなき歌念佛說經ときの林淸といふ人なり」と云つてゐるのは、當時四條河原で歌念佛を語つて、露五郎兵衞と竝び稱せられた人氣者林淸である。「大盡と太鼓の謂れの事」（卷一第七）、「藤の丸がかうやく」（卷二第三）、「野郎の金剛念佛講」（卷四第二）で金剛（役者の男衆）を說明してゐる等、皆當時の流行物を取材して聽衆に場當りしたものと考へられる。本書八十八項の笑話中、三十項が言語の遊戲に興味の中心を置いた滑稽であり、他の五十五項は內容が滑稽となつてゐる。辻咄として京都の聽衆を對照とした落語であるから、多くは京都に背景を置いて居り、當時の世相流行に銳敏な感覺が働いてゐる。例へば、「物のあはれは人の行末」（卷四第六）や、「始めてよばれし祇園會の客」（卷四第一）は當に浮世草子中に見出さるべき談柄人物である。【影響】本書は當時有名な落語家露五郎兵衞（別項）の發表した噺本の嚆矢であるだけ、永く後世にまでその材料が影響してゐる。前述の「物のあはれは人の行末」は、「輕口浮瓢簞」（寶曆元年）卷二に「非人の借上」として出て居り、本書卷二第十六「ひけふ者の喧嘩」は、「新話笑眉」（正德二年）に「かはつた相撲」、「今ゝ歲花時」（安永二年）に「立あひ」と題して飜案してある。本書卷一第二「京の何がし丹波へ壻入する事」は、「壽々葉羅井」（安永八年）に「干鯛」と題して飜案してある。卷五第六「此碁は手みせ禁」は、現今でも行はるゝ落語「碁どろ」の枕に用ひてある。〔山崎〕

梅雨小袖昔八丈（つゆこそでむかしはちぢやう）脚本　四幕　世話物【作者】二代河竹新七（黙阿彌）【別名題】「二度曠着昔八丈」（にどのはぎぎむかしはちぢやう）【通稱】髮結新三（かみゆひしんざ）「昔縞織本場八丈」（むかしじまおりほんばはちぢやう）「曠小袖昔八丈」（はれこそでむかしはちぢやう）【諸本】默阿彌全集第十一卷所收【初演】明治六年六月、東京中村座。

〔役割〕髮結新三（五代尾上菊五郎）、白子屋お熊（岩井半四郎）、彌太五郎源七・家主長兵衞（中村仲藏）、手代忠七（坂東家橘）等。

【題材】噺家の春錦亭柳橋が得意とした白子屋政談を脚色したもの。

【序幕】白子屋の後家お常は、主人の死後、立ち行き難くなつた家運を立て直さうと、車力の善八の橋渡しで娘のお熊に五百兩の持參金附きの聟を迎へようとし、お熊の心も聞かずに結納まで取交して決める。處がお熊は手代の忠七と深い仲になつてゐたので、忠七に連れて逃げて呉れと賴むが、忠七は幼少から恩を受けた主家への義理立てから逃げ兼ねる。それを立ち聞きした髮結の新三は、親切ごかしに忠七を唆かしてお熊を連れ出させ、途中で忠七を蹴倒してお熊を奪ふ。忠七は申譯に命を捨てようとするが、そこへ來合せた博徒の親分彌太五郎源七に留められる。

〔二幕〕彌太五郎源七は、善八に無理に賴まれて新三の家へお熊を取戻しに出掛けるが、もともと大金を取らうといふ下心があつてやつた事なので、新三は源七の出した十兩を叩き返して恥をかゝせる。けれどもその後で家主の長兵衞に訴へると脅されるので、三十兩の金で承知し、お熊を返してやる。〔三幕〕お熊は聟の又四郎を嫌つてゐたが、お常は又四郎の持參金五百兩をせつぱ詰つた催促で借財返濟へ廻してしまつた爲め、お熊にその譯を言ひ聞かせて得心させようとする。そこでお熊は覺悟を決めて死なうとし、それを又四郎に留められるが、白刃を爭ふはずみに誤つて又四郎の脇腹へ突き差す。永の年月恩顧を蒙つた下女のお菊は、これを見て主に代つて命を捨て、お熊の科をその身に引受ける。一方彌太五郎源七は新三に意氣地なしと言ひ觸らされ、而も子分の者まで恥しめられたので、深川閻魔堂橋に待伏せて新三を殺し、遺恨を晴らす。〔四幕〕彌太五郎源七は、大岡越前守の吟味を受け、後に殘る妻子の難儀を案じて覺えがないと言ひ張る。源七の世話になつてゐた忠七は一目なりと源七に逢はうと、奉行所の前まで來て善八に逢ひ、源七の妻子の哀れな有樣やお熊が亭主殺しの仕置を受けるかも知れないと聞き、源七の罪を背負はうと御番所へ駈け込むが、越前守のために直ちに看破される。お熊はお菊を憐れんで白狀するが、越前守の寬仁な裁きで無事に濟む。源七はお熊の健氣な態度に恥ぢ入つて總てを白狀し、お常はその跡々を引受けると云つて、源七を安心させる。

【解說】大詰に、大岡越前守の裁決を附したのは、書卸しの時髮結新三に扮した五代菊五郎が、閻魔堂橋で殺されたきりでは心持が惡いといふので、加へられたものであるといふ。新三內の場に於けるすつきりとした江戶情調とも謂ふべき場面は、この作に於ける特色であつて、世話物中出色の情景と稱されてゐる。五代菊五郎の扮した新三が好評であつたことは言ふまでもないが、仲藏の扮した家主長兵衞が至藝を發揮し、新三の買つた初鰹の片身を貫つたのと、お熊の身の代金三十兩の半額十五兩を貫ふのとを掛けて、新三を鼻であしらふ件の如きは好劇家の間に稱揚され、そのためこの狂言が時として劇場內部の人によつて、「鰹片身」と呼ばれることさへある。

【參考】尾上菊五郎自傳○河竹默阿彌○續々歌舞伎年代記〔河竹〕

露子姫（つゆこひめ）小說【作者】石橋忍月【刊行】明治二十二年十一月、春陽堂。

【梗概】柳川男爵の愛孃露子は、小村井の摘草で學友達が岸村といふ俊秀美貌の青年紳士の噂するのを聞き、何となく懷しく思ふ。その歸途、露子の馬車が奇禍に遭つて水中に落ちたのを通り掛つた若い紳士が助ける。落していつた卷烟草入の中の名刺によつてその紳士が岸村だと分り、露子は岸村に戀心を覺える。或る日、新聞を見ると岸村錦三といふ美貌の大學生が、何者かに慘殺されて金品を奪はれたといふ記事がある。紳士の名は錦藏であつたが、だが戀に迷つた露子は、この學生を意中の人だと思ひ誤り、堪へ難い悲しみに泣く。

さうして根岸の別莊に籠つて有髮の尼のやうな生活に入る。或る日餘りの遣瀨なさに岸村を想ふ歌を吟みつつ琴を彈じてゐると、散步歸りの乘馬の紳士が馬を駐めて、その爪音に聞き惚れる。露子がふと二階から見下すと、門外の紳士が岸村そつくりなので、思はず岸村樣と叫ぶ。だが死んだ筈の岸村樣がと躊躇してゐるのと全く同じ筋であり、既に「露がはなし」卷一「小僧が利口で却つてめいわくといふ事」にも取られてゐる。又本書と同年刊行の「初音草噺大鑑」（別項）にも、卷一に「九分十分目の欲」と題して出てゐる。本書卷一「八百屋のぐはんだて」と卷四「字の書やう」とは、全く同じ話である。卷五「かたきうちの仕出しは六年」（一三六三）の秋に歿した。享年六十一。又柳亭種彥は「足薪翁記」に、「露の五郎兵衞新ばなし」の享年六十九歲說を否定し、寶永四年の印本「輕口置土產」の序、「都の名物入道露休、過にし元祿の末の秋、閻浮を去りし追善に云々」の句を證とし、元祿の末の秋、卽ち元祿十六年を歿年とした。なほ近世文藝叢書傳（別項）は、座興として笑話を語つたものであるが、五郎兵衞は純然たる落語家として語つたのである。從つて彼の落語は可笑味で一貫してゐる。言語的洒落や動作的滑稽もあり、彼の話稿がかなりの數に上つてゐるのを見れば、彼も落語史上、重要なる地步を占めたも

さうして根岸の別莊に籠つて有髮の尼のやうな生活に入る。或る日餘りの遣瀨なさに岸村を想ふ歌を吟みつつ琴を彈じてゐると、散歩歸りの乘馬の紳士が馬を駐めて、その爪音に聞き惚れる。露子がふと二階から見下すと、門外の紳士が岸村そつくりなので、思はず岸村樣と叫ぶ。だが死んだ筈の岸村樣がと躊躇してゐるうち紳士は去つてしまふ。去る時に戀歌を二首殘して行く。岸村も人知れず露子を思つてゐたのである。岸村は鬱晴しに妹をつれて日暮園に躑躅見に行き、露子と逢つたが、人目があるので名乘りあふ機會がないばかりか、露子の方で、誤解して妹を細君だと思ひ込む。だが露子の母の機轉から岸村の身許も人となりもよく分り、露子の誤解もとけて、浮木某とか氣取某とかいふ自稱戀人連の妨害も效なく、二人は結婚する。

【批評】忍月の代表作とされてゐるものだが、ありふれた型の才子佳人小說で、新人の作とは思へぬ程古いプロットであり、性格も描かれてゐず、心理解剖も淺薄、會話も生硬である。ただ行文に幾分の新味はある。この頃の世相の一端を見せるものとして讀めば領けるが、有名な割に成功した作でない。〔柳田(泉)〕

露新輕口ばなし（つゆしんかるぐちばなし）　噺本五册【作者】露五郎兵衞【名稱】「露がはなし」（別項）の續編の意である。【刊行】元祿十一年【諸本】近世文藝叢書第六笑話所收【內容】八十七篇の笑話から成つてゐる。卷二の「入ぼくろの事」は、當時人氣のあつた所作事の名手若女方水木辰之助に取材し、卷五の「犬のまじなひ」は、「醒睡笑」（別項）卷一「鈍副子」中に出てゐる。卷四「利口すぎた話」は、「昨日は今日の物語」に大阪浪人の子の話として出てゐるのと全く同じ筋であり、既に「露がはなし」卷一「小僧が利口で却つてめいわくといふ事」にも取られてゐる。又本書と同年刊行の「初音草噺大鑑」（別項）にも、卷一に「九分十分目の欲」と題して出てゐる。本書卷一「八百屋のぐはんだて」と卷四「字の書やう」とは、全く同じ話である。卷五「かたきうちの仕出し」は「露がはなし」卷四の「物のあはれは人の行末」と類似の話である。一體に「露がはなし」より可笑味が足らず、材料が落ちるやうに思はれる。併し流石に落語の實際家であるから活きた材料を用ひて場當りに注意したらしく、卷二「一息に備前へついた」に「當六月暑氣の頃」と書いてあるなど、實話を取扱つたものらしい。「入ぼくろの事」の話も京人には周知の事として興味を惹いたに違ひない。【影響】卷一「八百屋のぐはんだて」及び卷四「字の書やう」は、更に「聞上手」（別項）、第二編に「音の字」と題して出て、式亭三馬の「浮世床」（別項）、初編卷中に聖吉賢藏の對話となつて用ひられてゐる。卷二「上戸のこたつ」は、現存の落語「あんまの炬燵」に採られてゐる。卷二「たなつるやどがへ」は、「鳥の町」（安永五年）に「釣棚」と題して、そのまゝ用ひてある。卷三「繪心ある人」は、「高笑」（安永五年）に「繪師」と題して取つてある。卷四「夜食のめしばち」を「鱠案して、「鹿の子餅」（別項）に「野等息子」と題し出してある。卷四「主にかゝりの事」は、「輕口福藏主」卷三に「親がかり」と題して出てゐる。諸曲を上がかりか下がかりかと尋ねられ、「主にかかり」と答へたのを、「親がかり」と直してある。〔山崎〕

露五郎兵衞（つゆのごろべゑ）　落語家【號】露休・雨洛【生歿】寶永二十年に生れ、元祿十六年（一三六三）の秋に歿した。享年六十一。又柳亭種彥は「足薪翁記」に、「露の五郎兵衞新ばなし」の享年六十九歲說を否定し、寶永四年の印本「輕口置土產」の序、「都の名物入道露休、過にし元祿の末の秋、閻浮を去りし追善に云々」の句を證とし、元祿の末の秋、卽ち元祿十六年を歿年とした。なほ近世文藝叢書第六の解題に五月九日歿とある。【閱歷】幼年時代や靑年時代のことは知る由もないが、「近世奇跡考」には、延寶・天和の頃より既に辻ばなしの祖として落語を語つたことを記してあれば、三十歲臺から有名になつたと思はれる。延寶五年板本「かくれ笠」に、「尼かゝが耳におちくる初嵐重高」、「眞葛の露や質におくらん似船」の俳諧から見ても、うなづかれる。卽ち祇園眞葛が原や北野に出でて辻ばなしをしたのである。北野に出てゐたことも、享保十三年刊の「黴雨の梅」に、人を集めて落語を語つてゐる圖を入れ、「人草や來た野は露の五郎兵衞」の句を記してあるによつても知られる。「產毛」に四條河原のことを記し、「林淸が歌念佛、肩を裾よとむすびたる能芝居、太平記よみ、諸の講釋、露の五郎兵衞が夜談義、大的小的楊弓の射場、からくり的に鬼の出るところ云々」とあり、かうしたことから見れば、五郎兵衞の生活も放下師の仲間であり、閱歷も純然たる町人の出であつたと思はれる。併し數萬の聽衆に腹筋をよらす都の名物入道露休と稱せられ、支考の「本朝文鑑」や、芭蕉をして露の一字に新古の別ありと言はしめ、其角の句にも、「命にかゝる五郎兵衞の露」と吟ぜしめたことを思へば、如何に當時京洛に於て有名であつたかが窺はれる。彼は落語をして街頭に進出せしめた祖である。安樂庵策傳（別項）は、座興として笑話を語つたものであるが、五郎兵衞は純然たる落語家として語つたのである。從つて彼の落語は可笑味で一貫してゐる。言語的洒落や動作的滑稽もあり、彼の話稿がかなりの數に上つてゐるのを見れば、彼も落語史上、重要なる地步を占めたものと言はねばならぬ。【著作】露がはなし○露新輕口ばなし○露の五郎兵衞新ばなし○露休ばなし○露休置土產（各別項）〔山崎〕

貫之（つらゆき）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】紀氏【歿年】天慶九年（一六〇六）【閱歷】寬平の頃既に宮中の歌合の作者であつたが、延喜五年、勅撰集撰進の詔を受け、友則・躬恒・忠岑等と共に編纂に從事し、友則歿後は專ら棟梁として經營し、「古今集」二十卷を撰し、自ら彼の有名なる序をも附して奏上した。彼等は微官の身を以てこの大任を成就したのみでなく、撰者の歌を加へることも多く、貫之の如きは百首の多きに及び、大にその自信と意氣とを示した。次いで彼は延喜七年九月十日宇多法皇の大井河行幸に供奉して九題九首の歌を上り、その序を書いた。歌は散佚したが、歌人が七人で六十三首であつたことが分る。序は現存し、署名に內膳典膳正六位上紀朝臣貫之上とある。彼が當時歌人として認められ

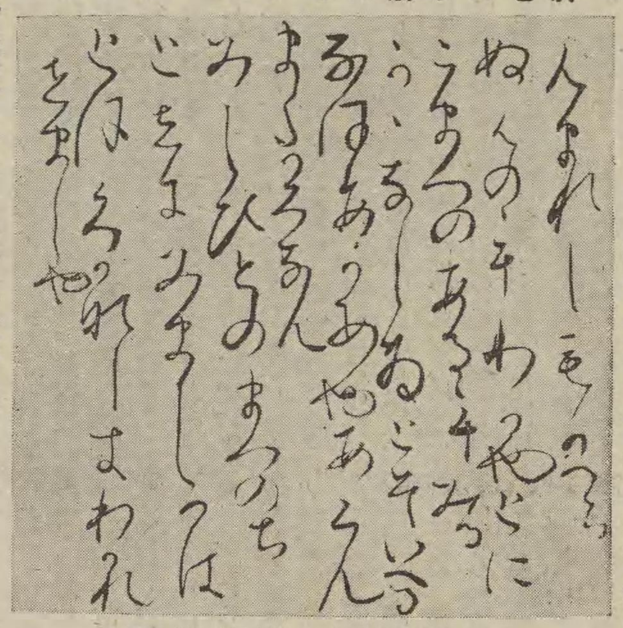
武內宿禰…梶長―興道―本道―望行―貫之―時文
　　―名虎―有常―有友―友則―女

延喜五年	古今集撰進。御書所預
同　七年	內膳典膳。大井河行幸歌
同　十年	少內記
同十三年	大內記。亭子院歌合
同十七年	從五位下。加賀介（家集）
同十八年	美濃介
延長元年	大監物

延長七年	右京亮
同　八年	土佐守。新撰和歌
承平五年	土佐日記
天慶三年	玄蕃頭
同　六年	從五位上。師輔の代作
同　八年	木工權頭

てゐたことは、天慶六年師輔が忠平から借りた魚袋を返す時の歌を、わざ〳〵貫之の家に赴いて賴んだといふのによつても分る（大鏡・貫之集）。先に撰した「古今集」から特に秀作を拔き出し、これを別の組織によつて編纂すべき勅は、兼輔を通して下されたが、偶々土佐守に任じたので任地に於て編纂した。即ち「新撰和歌」四卷である。任が果てて承平五年都に歸る時の日記が、「土佐日記」である。京では既に天皇・法皇、共に崩御せられ、兼輔も亦薨去してゐたので、「新撰和歌」は奏上する由もなかつた。兼輔は初め躬恒と交りがあり、貫之は躬恒の紹介に依つて兼輔を知るに至つた（後撰集）。「貫之集」には宮廷並びに權門のために讀み奉つた屏風歌や賀の歌が多く、交際上の贈答歌も多く、身の不遇を歎いて要路の大官に訴へたものもある。歿する直前には源公忠朝臣の許に、「手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にぞ有りける」と詠んで贈つたが、間もなく歿した。嘗て紀伊國に下り蟻通の神前にて、馬が「死ぬべくわづらう」たので、一首の歌を手向けて無事に通る事ができたといふ傳へもある。代表作「櫻ちる木の下かげは寒からで空にしられぬ雪ぞふりける」は「古今」にも「後撰」にも入集せず、「拾遺集」に於て始めて入集したのは梨壺五人の失策であるといはれてゐる（袋草紙）。「結ぶ手の雫に濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな」は、存命中既に有名であつたことが家集に見える。

【著作】勅撰集に入る歌は、古今集短歌九十九首、長歌一首、旋頭歌一首（異本は多少の相違あり）、合計百一首にて集中最も多い。後撰集七十七首（最多）、拾遺集百三首（人丸と共に最多）、新古今集三十二首、新勅撰集以下凡そ百二十九首、總計凡そ四百四十二首。多少の重出は



定家撰寫貫之筆蹟（前田家本土佐日記）

あらうが貫之集七百餘首の過半である。私撰集に入るものは新撰和歌四十五首、金玉集八首。○土佐日記（別項）○古今集序○新撰和歌（別項）四卷○大井河行幸和歌序○家集「貫之集」（別項）十卷。その他「萬葉集抄」五卷（八雲御抄）、貫之自筆の「古今集」と稱するものが平安朝中期以後傳來されてゐたが現存しない。今日なほ高野切が傳貫之筆といはれてゐる。

【批評】彼は情熱的でなくて、學者的である。奔放でなくて穩健である。感覺的でなくて思索的である。友則・忠岑に比較すれば、藝術に對する理解をもつてゐたが、敏行の如き强調的な表現を用ひず、躬恒の如き彈力のある表現を用ひず、遍昭の如き客觀描寫を行はず、業平の如き力强い表現を用ひず、兼輔の如き餘裕ある態度をもつてゐない。如何なる特色もなく中庸を歩いた。後人は貫之の態度を如何やうにも解釋する事ができ、何人も或る程度の共通點を見出すことができる。「古今集」に於ける貫之の歌には、理性と意志とに鼓舞されながら合理的な表現によつて押し通さうとする傾向が見え、「後撰集」に採られた貫之の歌は主觀的傾向を加へ、內省と精進とによつて境地を深めようとした態度が見える。「拾遺集」中の貫之の歌は、大部分が屏風歌であるので人格の反映を見ることができない。「土佐日記」を通して見る彼は、現實生活に對して冷淡である。愛兒の死を悲しみながらその態度は觀念的であつて悲しみに對する實感の描寫を試みようとしてゐない。或は悲しみを色に示さない「たしなみ」であつたとも、感情の直接的な表現を以て文學とする小說意識が時代的に生れてゐなかつたとも考へられるが、彼は寧ろ死を不可抗力として諦めの內に悲しんでゐるかの如く見える。彼はただ殼に包まれた堅い心で現實を眺めるのみで、決して生活そのものの再現を試みようなどとは考へてゐなかつたと思はれる。

【和歌觀】彼は古今集序に於て「大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける」と言つてゐる。この言は文學發生の心理的過程を說明したものと考へられるが、その態度には唯心的なものがある。彼は行爲又は現象の直接的表現を以て文學と見ないのみならず、文學に感覺的要素を加味する事をも考へなかつたであらう。即ち彼は統一精神の論理的發現を以て文學とし、思惟の世界から和歌の世界を導き出さうとしたやうである。かくて彼は「世中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふものを見るもの聞くものにつけていひ出せるなり」と言つて、現象又は個物に對する精神の發動を說いてゐる。次に彼は和歌の效果を說き、唯心的な感動は天地に遍在するが故に、相互に感應するものと考へたやうである。「新撰和歌」の序に於ては歌の成立要素を文と義（又は花と實）の二元とし、上代の歌は義は幽であるが文は質であり、近代の歌は文は巧であるが、義は疎であるとし、兩者の適當なる調和を以て理想としてゐる。蓋し文は詞を意味し、義は心の發動を意味するやうであるから、古今集序に於て心と詞とを立てた考と一致し、ただ古今集序に於ては文學の發生的な見方から唯心論を立て、新撰和歌序に於ては文學の論理的な見方から二元論を立てたものである。この種の文學觀は菅家萬葉集序に於ても同樣なものを見出すことができるから、かゝる思想は貫之の獨創ではなくて一般的風潮であつたと考へられ、或は貫之が道眞から影響された場合も想像される。併し貫之がこれに依つて新興國文學に理論的根據を附與しようとしたとも思はれ、その功績は偉大であり、たとひ文學觀は平凡で初步的であらうとも恕さるべきものである。而して貫之がどの程度に於て漢詩の詩學の影響を受けてゐるかは、甚だ興味ある問題である。

【影響】「後撰集」の撰者は貫之・伊勢を宗とし

て撰修の方針を進めてゐるやうである。當時既に「貫之集」は成立してゐたのみならず流布愛讀せられてをり、時文の如きは貫之の子といふのみで梨壺五人に加へられたのである。公任は貫之の崇拜者であり、能因は「新撰和歌」に倣つて「玄々集」（別項）を撰した。俊賴は貫之・躬恒の優劣論に於て「躬恒を侮るな」と

久松潛一（國語教育大正一五ノ一）○文學論としての古今和歌集序荒木良雄（國語と國文學昭和三ノ四）○貫之の文學論大井廣（國語國文の研究昭和三ノ四）○貫之の考へてゐた和歌の本質について吉澤義則（改造昭和四ノ一）〔西下〕

貫之集（つらゆきしふ）　歌集　十卷二册

【作者】紀貫之【成立】「後拾遺集」卷十九に、「貫之が以て底本とし一古寫本を得て校合すとある。歌仙歌集本は上册の終りに「以相傳之本書寫校合了、消字等如本也、建長元年八月日、藤原朝臣在判」とあり、單獨出版したものもある。この二本は卷の順序に小異があり、字句にも相違があるが、根本に於て同系統のものであらう。會入本は上下二册を更に二册づつ

やがて殿も冠者も女を釣り、冠者は一足先に喜んで歸り、殿は女の被衣を無理に取らせて對面すると、これはしたり稀代の醜婦。殿は、太郎冠者、おかつさまが違つた。そちのを返せと呼ぶ。上蔦、やるまいぞ〳〵で殿を追込む。

【解說】曲中の挿話としての「えびす」「きび

多く、交際上の贈答歌も多く、身の不遇を歎いて要路の大官に訴へたものもある。歿する直前には源公忠朝臣の許に、「手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にぞ有りける」と詠んで贈つたが、間もなく歿した。嘗て紀伊國に下り蟻通の神前にて、馬が「死ぬべくわづらう」たので、一首の歌を手向けて無事に通る事ができたといふ傳へもある。代表作「櫻ちる木の下かげは寒からで空にしられぬ雪ぞふりける」は「古今」にあらうが貫之集七百餘首の過半である。私撰集に入るものは新撰和歌四十五首、金玉集八首。○土佐日記(別項)○古今集序○新撰和歌(別項)四卷○大井河行幸和歌序○家集「貫之集」(別項)十卷。その他「萬葉集抄」五卷、八雲御抄)、貫之自筆の「古今集」と稱するものが平安朝中期以後傳來されてゐたが現存しない。今日なほ高野切が傳貫之筆といはれてゐる。

的に生れてゐなかつたとも考へられるが、彼は寧ろ死を不可抗力として諦めの内に悲しんでゐるかの如く見える。彼はただ殼に包まれた堅い心で現實を眺めるのみで、決して生活そのものの再現を試みようなどとは考へてゐなかつたと思はれる。

【和歌觀】彼は古今集序に於て「大和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける」と言つてゐる。この言は文學發生の心理的過程を説明したものと考へられるが、その態度から、かゝる思想は貫之の獨創ではなくて一般的風潮であつたと考へられ、或は貫之が道眞から影響された場合も想像される。併し貫之がこれに依つて新興國文學に理論的根據を附與しようとしたとも思はれ、その功績は偉大であり、たとひ文學觀は平凡で初歩的であらうとも恕さるべきものである。而して貫之がどの程度に於て漢詩の詩學の影響を受けてゐるかは、甚だ興味ある問題である。

【影響】「後撰集」の撰者は貫之・伊勢を宗として撰修の方針を遵めてゐるやうである。當時既に「貫之集」は成立してゐたのみならず流布愛讀せられてをり、時文の如きは貫之の子といふのみで梨壺五人に加へられたのである。公任は貫之の崇拜者であり、能因は「新撰和歌」に倣つて「玄々集」(別項)を撰した。俊頼は貫之・躬恒の優劣論に於て「躬恒を侮るな」と言つた。この言は單に躬恒の歌には人々の看過してゐる表現上の特色がある事を指摘したものとも、遙に貫之以上の躬恒を貫之と比較するのは躬恒を輕蔑したものであるとの意とも解釋されるが、偶像の如く崇拜されてゐた貫之と、歌そのものに藝術的天分を十分に發揮してゐると理解された躬恒との比較論は興味が多い。俊成は復古主義の立場から貫之の歌に觀念的な深みを見出したものの如く、業平の「月やあらぬ」と共に、貫之の「結ぶ手の」を以て幽玄體の説明の標準としてゐる。併し彼は貫之の歌を「千載集」に入れる事はしなかつた。定家は復古の標準を貫之以前の六歌仙におき、歌を作る實際上の標準は經信以下に求めた。「八雲御抄」に、「貫之さしもなしなどいふ事少々聞ゆ。歌の魔の第一也」と記させ給うてゐるのは、新時代の精神を自覺した當時の人々が貫之の歌の藝術的價値を認めなくなつた爲めであらう。而して崇拜の中心が定家に移動した後の貫之は單なる歴史的な存在に過ぎなくなり、たとひ景樹が貫之を祖述したとしても、時代の大勢は萬葉復古の精神にあつた。

【參考】古今集目錄○歌仙傳○紀氏系圖○大日本史卷二一九○百人一首一夕話○國文學全史平安朝篇○日本歌學史○大井河行幸和歌考證井上文雄○歌論家としての紀貫之久松潜一(國語教育大正一五ノ一一)○文學論としての古今和歌集序荒木良雄(國語と國文學昭和三ノ四)○貫之の文學論大井廣(國語國文の研究昭和三ノ四)○貫之の考へてゐた和歌の本質について吉澤義則(改造昭和四ノ一)〔西下〕

貫之集(つらゆきしふ)　歌集　十卷二册【作者】紀貫之【成立】「後拾遺集」卷十九に、「貫之が集を借りて返すとてよみ侍りける、惠慶法師、一卷にちゞの黄金をこめたれば人こそなけれ聲は殘れり、かへし、紀時文、古のちゞの黄金は限りあるをあふ許りなき君が玉章」とあり、その次に「紀時文が許につかはしける、清原元輔、かへしけん昔の人の玉章を聞きてぞそゝぐ老の涙は」とある。元輔の歌は「元輔集」に「貫之集を人の借りて返し侍るにつかはしゝ」(類從本)、「貫之が集を人の借りて返し侍りけるをりにときふ(時文か)がもとにつかはしゝ」(歌仙歌集本)とある。これ等に依つて惠慶が時文から「貫之集」を借りた事、元輔も「貫之集」をもつてゐた事がわかり、「貫之集」は既に「後撰集」撰修の頃、即ち貫之歿後間もなく成立してゐた事になる。「拾遺集」は既に纏まつてゐる「貫之集」から歌を採つたと考へられる點が多く、卷二十に貫之臨終の歌「手に結ぶ水に宿れる」を載せて「この歌よみ侍りて程なくなくなりにけるとなむ家の集にかきて侍る」と左註のあるのは、その加筆年代は不明であるが現存本「貫之集」にも見える註の文を要約したものであらう。【諸本】(一)群書類從二四八所載本(二)、歌仙歌集本とがある。「繪入本紀貫之集」(四册、元祿十三年刊)は歌仙歌集本に依つたもの、日本歌學全書所載本、增田于信編の「紀貫之歌集」(二册、明治三十七年刊)は類從本に依つたものである。類從本は肥後守經亮本を以て底本とし一古寫本を得て校合すとある。歌仙歌集本は上册の終りに「以相傳之本書寫校合了、消字等如本也、建長元年八月日、藤原朝臣在判」とあり、單獨出版したものもある。この二本は卷の順序に小異があり、字句にも相違があるが、根本に於て同系統のものであらう。繪入本は上下二册を更に二册づつに分つたもので、上册の終りにある奥書を最後にも掲げてゐる。半紙判にて卷頭に系圖を載せ、四册に亙つて九葉十八面の繪がある。歌學全書本は、勅撰集から拾つた補遺を附してゐる。【解説】十卷の内卷五までは部類がなくて屏風歌を載せ、卷六以下は戀・賀・別・哀傷・雜に分けてゐる。歌仙歌集本は全體を九卷に分ち、類從本に比較して卷の順序を異にしてゐるのみならず、卷四の歌は類從本に全くなく、天慶年中の屏風歌を收めてゐる。歌數は類從本七二六首にて内二三首は歌仙歌集本になく、歌仙歌集本は八九一首にて内一八八首は類從本になく、更にその内一六七首は卷四の歌である。なほ本集の詞書中注目すべきものは、天慶六年正月師輔が忠平に借りた魚袋を返す時のもの、紀の國蟻通の神前を通る時のもの、延喜五年四月六日承香殿の東にて「古今集」を撰する時のもの等である。〔西下〕

釣女(つりをんな)　能狂言【別名】釣針【格式】小習(和泉流)。

【梗概】殿が冠者を伴つて、西の宮の福の神えびす三郎殿に妻乞ひの祈禱をこめ、御通夜をする。暫くあつて殿は、汝の妻になる者が西門の一の階にゐようから、連れて歸れと告げられたと語れば、冠者も自分の御告も寸分違はぬと答へて共にそこへ行く。途中に釣針を拾ひ、神慮であらうと冠者をして釣らせる。やがて殿も冠者も女を釣り、冠者は一足先に喜んで歸り、殿は女の被衣を無理に取らせて對面すると、これはしたり稀代の醜婦。殿は、太郎冠者、おかつさまが違つた。そちのを返せと呼ぶ。上臈、やるまいぞ〳〵で殿を追込む。

【解説】曲中の挿話としての「えびす」「きびす」の辨は、元來民間童話であつて、狂言に採られたのであらうが、安樂庵策傳の「醒睡笑」(別項)の笑話にも見える。又明治三年杵屋勘五郎がこれを「戎詣戀釣針」(明治三十四年七月東京座初演)といふ長唄に作り、常磐津林中も「釣女」(明治十六年初演)として常磐津物にした。なほ明治二十九年六月歌舞伎座で上演した福地櫻痴作の「吹取妻」は釣女と殆ど同じ型の物である。〔野村〕

釣狐(つりぎつね)　狂言「吼噦」(こうくわい)を見よ。

釣狐(つりぎつね)　所作事　曾我物【別名】「朝比奈の釣狐」(おかめ)【本名題】蝶と衝の名にし負ふ虎少將が今樣姿寄罠娼釣髭【初演】文政八年正月十三日初日江戸市村座「皐富士曾我初夢」第一番目大詰〔曲節〕常磐津〔作詞〕二代櫻田治助〔作曲〕岸澤仲助(後の五代式佐)〔太夫〕三代常磐津小文字太夫(後の四代文字太夫)〔振附〕松本五郎市【傳來】曲・振とも傳存。【諸本】正本の外、日本歌謠集成卷十・歌謠音曲集(日本名著全集)・日本音曲全集第八卷等所收。【題材】間狂言の「釣狐」(こんくわい)に據つたものであるが、謠曲の「望月」と太神樂のおかめとを取入れてある。【沿革】「釣狐」の趣向は、山本土佐掾の淨瑠璃「信田妻」(別項)以來、淨瑠璃にも歌舞伎にも攝取せられて、屢々演じられたが、所作事としては一中節の「寒菊釣香燈」(享保二十年十一月江戸中村座)などが古く、長唄では「今樣こんくわい信田妻」(寛保二年十一月市

村座）が古い。ついで「後面」（別項）の流行もこれに伴つて遂に曾我物にも取入れられ、長唄の「釣狐よろひの亂曲」（延享二年五月市村座）や「釣狐春亂菊」（通稱釣狐・工藤の釣狐・釣狐の對面。明和七年正月中村座）等が生れ、殊に「工藤の釣狐」は名高く、後世まで幾度か反復せられると共に、その改作も出來、釣狐物に影響を與へたことは甚大で、本曲もこれを參酌したかに思はれる。爾來明治に至るまで、曾我物以外にも多種多樣の釣狐物が生れ、歌曲も諸流に亙り、各々その特色を有つことになつたが、今日に傳存するのは極めて僅少で、本曲の外に長唄の「今樣釣狐」（新歌舞伎十八番の釣狐。狂言の釣狐をその艶脚色したもの。古河默阿彌作。明治十五年三月春木座）や、常磐津の「釣狐廓掛（さとの）罠」（廓の釣狐。作詞右田寅彦で三代河竹新七加筆。同二十五年十月歌舞伎座）等、數種に過ぎない。【內容】工藤祐經の館へ頼朝の息女の大姫君が來るので、その御馳走の餘興に踊る趣向で、朝比奈（三代坂東三津五郎）と虎（五代瀨川菊之丞）と少將（岩井紫若）と共にせり出して、釣狐の今樣の踊りから、禿千鳥（坂東玉三郎）を加へて望月の羯鼓をやらせ、朝比奈がおかめの面を附けて可笑味の振りがあつて、終に獅子の狂ひになる。滑稽で賑やかな廓氣分を漂はしたもので、現に行はれてゐる。

【參考】劇代集二代櫻田左交〇近世邦樂年表〇今樣釣狐（歌舞伎新報二〇六以下）〇釣狐廓懸罠（同上一四二三以下）〔秋葉〕

鶴岡矢筈大紋（つるがおかやはずのおほもん）「繪本鎌倉新話」を見よ。

鶴賀新內（つるがしんない）「新內節」を見よ。

鶴龜（つるかめ）「鳥獸物の謠曲」を見よ。

鶴賀若狹掾（つるがわかさのじよう）　新內節の元祖

【本名】高井氏。通稱庄兵衞【別號】大木戶黑牛（狂名）・鶴翁【生歿】正德二年越前敦賀に生れ、天明六年（一七八六）三月二十二日江戶に病歿、享年七十五（一說七十）。【法名】實相院眞月日如信士【墓所】淺草田甫幸龍寺【閱歷】幼時江戶に出で、宮古路加賀太夫の門に入り、敦賀太夫といつたが、師が富士松薩摩掾（別項）と改名と同時に、富士松に改姓。寬延三年故あつて師と斷ち、一派を成して朝日若狹掾と名乘り、主に森田座に出勤したが、朝日の苗字を公より差止められ、寶曆八年鶴賀と改稱した。かくて相弟子の逸才鶴賀加賀八太夫事鶴賀新內（新內節參照）を自派に迎へて協力するに及び、大に世に持て囃された。併し彼と新內との關係は初代限りで、各々二代以後殆ど絕たれて互ひに別行動をとつて活躍し、明治に至つて再度接近した觀がある。彼は文才に長じ、「語る所の淨瑠璃みな自作なり」（續遊笑覽）といはれた如く、「明烏」「蘭蝶」以下傳存する名曲の大部分は自作自曲といつてよい。また狂歌を濱邊黑人の門に學んで、その名聞え、當時芝高輪に住んでゐた。その狂歌集には、「腰かけ猿」（猿の腰かけ）などがある。なほその妻は鶴老といひ、斯流を能くしたといふ。【門系】〔初代鶴吉〕本名おこん。若狹掾の長女。文政十年四月二十六日歿。享年七十一。父の歿後二代を相續。後に和國と改む。女ながらも名人の聲譽を得たといふ。〔二代鶴吉〕本名おつぢ。初代鶴吉の娘（一說に初代鶴吉の妹おぎん二代鶴吉を繼ぐといふ）、母存生中三代家元を繼承したと傳へる。「二枚續吾妻錦繪」（文化十年刊式亭三馬著）の鶴賀系圖には、初代鶴吉の跡を鶴賀鶴藏が繼承したものの如く揭げてゐる。〔鶴賀若狹太夫〕今日の新內系譜によれば、四代の家元を繼いだとしてゐるが、もし初代の若狹太夫（若狹掾の門下）とすれば、年代に疑はしい所があるが、他に明確な傳統の記錄がないので、今はこの說に從ひ四代としておく。傳二代鶴吉門下。初名貞之助。芝居番附・正本等に見える若狹太夫はこの人を指すや否や明確でない。〔二代若狹太夫〕傳初代若狹太夫の長男。初名貞次郎。父の歿後五代家元を相續したと傳へる。〔祖元〕本名鈴木重次郎。俗稱築地の三熊。明治四十年歿。京橋南小田原町の魚屋の親方。鶴賀若祖賀の門下。明治三十年中絕した鶴賀派の家元を再興して六代を相續し、鶴賀新內（五代）から祖元と改めた。〔三代鶴吉〕祖元の妻女。大正九年十二月一日に歿す。良人の歿後七代家元を繼いだ。〔二代若狹掾〕本名鈴木壽。幼名榮次郎。明治三十八年三月東京に生る。祖元の長男。初め鶴賀新內（六代）を襲いで、母及び鶴賀齋に就き修業し、大正六年二代若狹掾を襲名して八代家元となり今日に至る。（新內節參照）〔秋葉〕

【參考】聲曲類纂卷之三〇狂歌人物誌（繪馬屋額輔編（江戶文學類從）〇江戶時代音樂通解（町田博三）〇新內節の歷史（日本音曲全集第九）

劔讃歎（つるぎさんだん）　幸若舞曲（三十六番の一廣益書籍目錄には數へず）一卷【成立】室町期【作者】不詳【諸本】古板本は寬永十二年板（十行本）。新群書類從第八舞曲部所收。【題材】曾我物。「曾我物語」（卷八前半）と同材。寶劔說話。「太平記」（或は平家物語）の劔の卷と同種異傳。承應二年刊「劔の卷」（三卷）もある。この寶劔傳說に於ける劔の精靈奇蹟の本據は、恐らく干將莫耶の傳說などであらう。名刀工小鍛冶は謠曲「小鍛冶」にも取材されてゐる。

【梗概】富士野に向ふ曾我兄弟が、箱根別當の御房に參ると、別當は祐成に黑鞘卷の刀、時致に兵庫鎖の太刀を贈り、且つ後者の由來を說いた。それは、天竺のしやりふんがよたうさんのれううんの瀧の鐵で作つた八尺の薙刀をかううんが盜み、唐土を經て日本に渡したのを、平城帝の時おくのまうふさ、三條小鍛冶兩人に太刀に打たせると、まうふさは三尺に打つて、枕上と名付けて一段上に立てられ、小鍛冶は二尺七寸に打つて、寸なしと呼ばれ、而も鐵を盜んだ疑を受けて土牢に入れられたので、鍛冶の神九萬八千に寃罪を晴らすべく祈誓を籠めた。神明の納受あつてか、寸なしは鞘を外れて枕上に立ち向ひ、切尖三寸を斬り落したので、帝は友切と改稱させられた。後にこの二刀は多田滿仲・賴光・義家を經、爲義から一は嫡子義朝に一は女婿熊野別當けうしゆん（敎眞か）房に傳はり、後者を受けた義經が兄弟和合を祈つて箱根權現に寄進したのが、今時致に授けられたものであつた。曾我兄弟は暇乞して出で、麓の宿で垢離を取り、やしはの宮に七番づつの笠懸をして本望成就を願ひ、相澤の原に出た。〔島津〕

鶴澤淸七（つるざはせいしち）　淨瑠璃三味線方【本名】松谷淸七。幼名淸二郎。通稱は松屋淸七【生歿】大阪に生れ、文政九年（一八二六）七月二十二日、高麗橋二丁目自宅に歿す。享年七十歲を越えたとの傳がある。【法名】德譽敎淸禪定門【墓所】大阪中寺町地藏坂附近と傳へる。【系統】義太夫節の最初の三味線竹澤權右衞門の門弟で、貞享の初めから竹本座の脇座を彈いた盲人鶴澤三二は三二檢校とも呼ばれ、「鶴澤」を氏とした一派の元祖である。竹本筑後掾歿後、權右衞門は立三味線を三二に讓つて引退したが、その後三二は益々名聲

を揚げて、享保五年「國姓爺合戰」九仙山の時、元祖鶴澤友二郎を名乘つた。この弟子の鶴澤文藏（兒島屋）が初代文藏で、明和元年五月三味線惣立者となる。「妹脊山」は文藏の名作曲である。別に初代の高弟三二が豐竹座で友二郎をついだが、鶴澤派ではこれを認めない。【閲歴】初代文藏の高弟で明和五年（？）初代鶴澤清七を名乘り、後、師匠二代友二郎の遺言によつて三代鶴澤友二郎を相續した。蒲柳の質なので、文化八・九年の頃舞臺を引いて、專ら子弟を養成した。大正十四年七月百年忌に際し、日本因會の手で、大阪天王寺西門布袋堂裏へ「三絃符章創始者初代鶴澤清七一百年忌之塚」を建立した。【業績】淨瑠璃三味線の不世出の天才で、前にこの清七あり、後に豐澤團平（別項）がある。この二者が義太夫節界の三味線彈として嶄然群を拔いてゐる。清七の功績は傑れた作曲を殘したとか、立派な技倆であつたとかよりも三絃の符章の發明にある。清七は「いろは」の記號を以て三味線の手數節廻しを記錄に殘した。この記號を清七が創始工夫したのが十三歳の時であると傳へる。この記號を「符章」或は斯道の仲間では朱章といつてゐる。この朱章の發明は、師弟傳統の備忘記錄となると共に、貞享の竹本座、元祿の豐竹座の櫓揚當時から殘つてゐる作曲の殆ど全部の記錄を保存する事が出來た。今日古曲の複雜なる三味線の手がなほ正しく傳承さるゝのは、全く清七の符章の恩澤によるものである。〔石割〕

鶴芝（つるしば）　俳諧紀行　半紙本五册　【編者】第一册道彥、第二册信州上田の成澤雲帶、第三・四册信州諏訪の久保島若人、第五册信州飯田の櫻井蕉雨。【刊行】第一册は江戸で、第二册は善光寺、第三册は松本、第四册は諏訪、第五册は飯田で、いづれも享和元年に刊行。【諸本】當時五ケ所で別々に刊行したものを、後に名古屋の永樂堂東四郎が一つに纏めて原本通り半紙本五册のものとして刊行したのが今行はるゝところのものである。また第一册は「鶴芝」として「道彥七部集」に編入されてゐる。【内容】享和元年二月、士朗（別項）が門人松兄・卓池の二人を伴つて旅立つた。富士の鶴芝を見物するといふのが旅行の名義であつた。鶴芝とは陽春二・三月の交、駿州龍華寺方面から見る富士の半腹に、消え殘る雪の間に青々と萌えでた若芝が、鶴の舞ふ姿をなして見ゆるのをいふのである（今は、殖林等の關係で見られなくなつた。その繪は丹鶴叢書に出てゐる）。故にこの紀行の書名とした。第一册から第五册まで士朗の行程に從つてある。第一册は、士朗等が東海道を下り、鶴芝を見て江戸に入り、道彥の金令舍の客となつて、道彥を初め成美・巢兆（各別項）などと交つた記錄で、道彥が士朗の心になつて記したものである。第二册は、士朗一行が江戸を立つて中仙道に出で、本庄に長翠を訪ひ、碓氷峠を越えて上田に入り、雲帶・如毛等と會し、矢代を經て善光寺に詣で柳莊等と交つた記錄である。第三册は、姨捨山・猿が馬場などを經て松本平を越え、淺間・松本にて素檗・嵐外等と會した記錄に、諸國俳人の發句を附載したものである。第四册は、諏訪に入つて、素檗・若人等及び甲斐の可都里が士朗の旅寢を慰むべく來訪せしめた蟬守などとの風交記錄である。第五册は、八巢・蕉雨をあるじとした飯田風交の記錄で、折柄そこに滯在してゐた巢兆、名古屋からその師一行を迎へに來た岳輅なども加はつてゐる。巢兆の筆に成る飯田人が簞食壺漿して士朗一行を驩迎する二枚續きの圖は、この書に掉尾の精彩を加へるものである。〔贄川〕

鶴の歩（つるのあゆみ）　「初懷紙」を見よ。

鶴の草子（つるのさうし）　御伽草子　二卷【成立】室町期。「倭錦」「古書目錄」等に土佐光信の筆と見えてゐる（考古畫譚卷八）のを信ずれば、ほぼ同時、若しくはそれ以前の作とすべきであらう。【諸本】古板本は寛文二年板（三條通菱屋町ふ屋仁兵衞）、後、鱗形屋より再板した中本がある。御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷に收む。

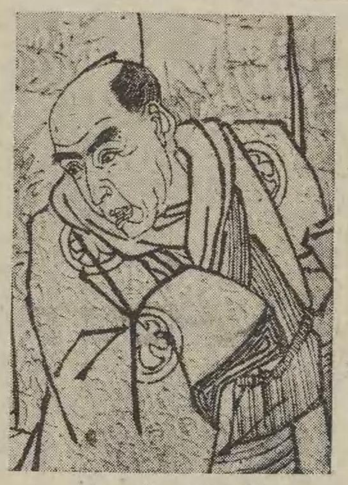
【梗概】中頃、宰相で右兵衞督を兼ねてゐた人があつた。父の左大將むねまさは世に時めいてゐたが、この宰相は殊更慈悲の心深く、それがため遂には自らその日の糧にも困り、人との交も薄らぎ、親しい者も遠ざかつたので、隱家を求めて靜かな餘生を送らうと、あてもなく さまよひ出で、或る山蔭に草の庵を見付けて一夜の宿とした。翌朝來た里人に一度は咎められたが、漸く賴んで、夜晝來ては田畑を荒す鳥や獸を追ふ事を役にして養はれる事になり、勤める念佛の功德によつて作物は何の被害も無いので、里人は非常に喜んでゐた。或る日宰相は散歩の歸途、澤邊の小田に雛鶴を見出したが、折しも一人の獵師に捕へられたのを見るに忍びず、肌身離さず持つてゐた重代の黃金作の刀を與へ、請ひ受けて放つたところ、翌日召使を伴つた美しい女房が一夜の宿を求め、その請ふに任せて契りを結び、差出された千金を家主の里人に渡して宏大な邸宅を建て、召使を揃へ、俄に大長者となつた。次の春、その國の守護宮崎左衞門督は、鷹狩に出て俄雨に逢ひ、この宰相の屋形を見付け、何心なく差覗いた折柄、人ありとも知らず夫と共に廣緣に出てゐた北の方の美しさに魅せられて病となり、家來の田邊七良の緣故を賴つて文を遣はしたが容れられず、遂に軍勢を整へ宮崎自ら先に立つて押寄せた。北の方は夫を勵ましつつ皆紅の扇で虛空を仰ぐと、俄に山風烈しく吹き來つて黑雲館を覆ひ、雲の中から異類異形のもの數多現れて敵に向つた。七良の勸めで讀んだ經文により空は晴れ、變化は退散したが宮崎はこれを結緣に出家した。不思議に難を逃れた宰相に、素性を問はれた北の方は、夫を父母の家へと案内した。深山の奥洞穴の中の別

鶴の草子（寛文板）

世界、宮殿樓閣、月卿雲客、歎待の限りを盡した一夜が明ける頃、二人は虚空を翔ける車に引出物を山と添へて送り歸された。後、北の方は父母の許へ歸るべき時が來たと言ふ。驚き悲しむ宰相に、生を變へての再會を約し、形見の一筆を乞ひ、自分はかの助命の恩を受けた雛鶴なる由を打明けて大空高く飛び去つた。その頃、君の御伯父として權勢比なき三條の内大臣は、天の申子に美しい姫を得られ、玉鶴姫と名付けて册づいて居られたが、左の腕が肘まで身に着いた儘離れず、長じてなほ養生の甲斐もないので、女御にもと將來を樂しんでゐた父母の失望は一通りでなかつた。數多の求婚者をも退けて十四の春を迎へた或る日、櫻の枝に短册を結び付けようとした刹那、姫の手が延び、腋に「僞らぬ言葉の末を頼みにて」と記した玉章があつた。内大臣奏問すれば、それは宰相の手蹟なるを知る者あり、日本六十餘州に宣旨が下つて、漸くかの宰相を尋ね出された。御言葉を頂いて總てを申上げた宰相が、「再び生れあはんとぞ思ふ」と書いた肌の守を取出されると、紙も同じ紙。君を始め奉り御前の人々は驚嘆措く所を知らなかつた。その後、玉鶴姫の御輿入あり、御子も多く、一家は富貴繁昌した。

【解説】怪(鳥)婚説話、動物報恩談。葛葉傳説の女狐に當るのがこの雌鶴であるが、子別れの悲劇はなくて、人間に再生して契を全うする喜びがある。且つ普通の異類との戀愛だけでなく、戰爭談や佛教思想、支那神仙譚の影響と見るべき仙境物語が織り込まれてある。なほ御伽草子中の怪婚説話並びに類話としては「狐の草子」「鼠の草子」「化物草子」「かざしの姫君」「玉水物語」(各別項)等がある。〔鳥津〕

鶴屋南北(四代)つるやなんぼく　脚本作者・合卷作者【本名】伊之助。幼名源藏【別號】姥尉輔【生歿】寶暦五年生れ、文政十二年(一八二九)十一月二十七日、深川黑船稻荷地内自宅で歿す。享年七十五【墓所】本所押上春慶寺【閲歴】初め父伊三郎と共に、江戸乘物町で紺屋職をしてゐたが、生來の芝居好きと文筆の才は、彼を驅つて當時の名作者金井三笑(別項)に入門せしめ、安永四年十一月、二十一歳の時に中村座へ出勤、翌五年の顔見世から勝俵藏の名を以て番附に載せられ、見習ひの雜役から五枚目・四枚目の末班に十餘年を過したが、その間にも、下級作者の受持ちたる「序開き」



鶴屋南北

「二建目」の新作に奇才を認められはした。安永九年頃、三代鶴屋南北(道化方役者)の娘お吉を妻に迎へた。享和元年四十七歳の折、初めて二枚目(次席)作者の位置は得たが、初代櫻田治助初め、先輩に隨つて受持ちの一幕を書くうちにも、生世話物に妙を得てゐる事が知れ渡つた。文化元年七月、河原崎座の夏興行に、はじめて初代尾上松助に懇望されて執筆した「天竺德兵衛韓噺」(別項)が未曾有の當りを得、しかも宣傳術に特殊の技倆ある事すら劇場人に知られたので、同年十一月河原崎座「四天王楓江戸粧」に初めて立作者(主席)の位置を得たのが丁度五十歳であつた。この時座頭の市川男女藏は、南北を忌避して自分のために立川焉馬・木村園夫の兩名を招聘した事から、彼の位置は再び危く、度々客座等に廻されたが、初代櫻田治助、初代並木五瓶が相次いで歿するに及び、文化五年以後名實備はつた立作者たる事を得た。後援者の松助は間もなく死去したが、次代の中堅俳優が盛んに活躍を始めたので、彼はその手腕を認められ、文化八年十一月の市村座「嚴島雪官帶」に俵藏改め四代鶴屋南北となり、以後本所龜戸村植木屋清五郎の隣地に居を卜し、六十餘歳まで住んで龜戸の師匠と稱されたが、後に駕籠屋新道へ、また黑船稻荷へ轉じたのである。文政末年に歿するまでは、江戸劇壇は殆ど彼の獨擅場で、傑作も夥しく、長老と敬はれた。晩年草双紙執筆などで多少の餘裕を得た外、生涯を貧困で終つた。その中にも、質屋の庫へ蚊帳を運ぶ事すら、「謎帶一寸德兵衛」(別項)へ利用して舞臺效果を擧げるだけの用意は忘れなかつた。文政十二年中村座顔見世興行の番附に、一世一代の名を署して間もなく歿した。

【著作】現存のもの百數十篇に及ぶ。大南北全集十七卷(春陽堂)がある。〔脚本〕天竺德兵衛韓噺(別項)○彩入御伽草(文化五年六月市村座)○時桔梗出世請狀(別項)○阿國御前化粧鏡(別項)○心謎解色絲(別項)○勝相撲浮名花觸(別項)○繪本合法衢(別項)○當穐八幡祭(別項)○謎帶一寸德兵衛(別項)○於染久松色讀販(別項)○隅田川花御所染(別項)○杜若艷色紫(別項)○櫻姫東文章(別項)○四天王産湯玉川○梅柳若葉加賀染○三箇莊曾我島臺○玉藻前御園公服○靈驗龜山鉾○浮世柄比翼稻妻(別項)○東海道四谷怪談(別項)○盟三五大切○獨道中五十三驛(別項)○金幣猿島都〔草双紙〕敵討乘合噺(文化五年金毘羅利生記)○敵討爰高沙(文化六年)○戀女房雙蝶雙六(文化九年)○勝角力橋場庵崎(文政九年)○四十七手本裏張(文政九年)○女扇忠臣要(文政九年)○いろは演義(文政十年)○裙模樣沖津白浪(別項)(文政十一年)○怪談岩倉萬之丞(文政十一年)○昔同今物語(文政十二年)○小町紅牡丹隈取(天保二年)

【作風】學識はなかつたが、偉大な戲曲作家であつた。初代櫻田治助から初代並木五瓶(各別項)に傳はつた寫實劇は、彼に至つて全く完成された。市井風俗の描寫に於ては前後に敵なしと稱してよい。それを纏める大膽奇拔な趣向、化政度特有の茶番趣味、いづれも彼の長所である。怪談狂言の鼻祖といはれる事も見遁してはならない。それ等が餘りに進んだ結果、變化本位、洒落中心に陷つたのは、同時に短所ともいへよう。複雜な構想を弄した事も一面には當年の流行と見られる。時代物に佳作は少いが、特殊な顔見世狂言には妙作もある。

【合卷作者として】高砂町に住んだところから、初め姥尉輔と號したが、文政五年以後、狂言作者名鶴屋南北を併用してゐる。尤も文化五・六・七・八年の作には鶴屋南北口授、門人龜東筆錄といふことになつてゐる。自作としての署名は同九年以後天保元年に至り、同二年には、遺稿の出版があつた。姥尉輔以來十數部の作であるが、作風はすべて一貫してゐる。妖怪の事件に凄慘の氣分を盛つたもの、大體その狂言と同一傾向を有つてゐる。勿論筋の運びその他に、歌舞伎がかれるものが多く、殊に文政十一年の「裙模樣沖津白浪」(別項)の如き、南北自作の脚本を草雙紙化したと

も多く、一家は富貴繁昌した。

【解説】怪(鳥)婚説話、動物報恩談。葛葉傳説の女狐に當るのがこの雌鶴であるが、子別れの悲劇はなくて、人間に再生して契を全うする喜びがある。且つ普通の異類との戀愛だけでなく、戰爭談や佛教思想、支那神仙譚の影響と見るべき仙境物語が織り込まれてある。なほ御伽草子中の怪婚説話並びに類話としては「狐の草子」「鼠の草子」「化物草子」「かざしの姫君」「玉水物語」(各別項)等がある。〔島津〕

を妻に迎へた。享和元年四十七歳の折　初めて二枚目(次席)作者の位置は得たが、初代櫻田治助初め、先輩に隨つて受持ちの一幕を書くうちにも、生世話物に妙を得てゐる事が知れ渡つた。文化元年七月、河原崎座の夏興行に、はじめて初代尾上松助に懇望されて執筆した「天竺徳兵衛韓噺」(別項)が未曾有の當りを得、しかも宣傳術に特殊の技倆ある事すら劇場人に知られたので、同年十一月河原崎座「四天王楓江戸粧」に初めて立作者(主席)の位置を得た

はいふものの、すべて正本仕立であり、毎丁に繪があるといふ原則を破つた變態的のものをさへ生じた。更に又これ等の作が後人によつて直に脚本化されたものもあつた。又遺稿の「怪談鳴見絞」はその前編「怪談繋倉萬之丞」と共に古俳優に因める事件を扱ひ、彼の好尚を見る事が出來る。〔この項山口補〕

【參考】鶴屋南北傳坪内逍遙(大南北全集第一卷)○歌舞伎研究(二五・六)○南北研究(渥美清太郎(日本文學講座)○南北と默阿彌(早稻田文學昭和二ノ七)○近世日本演劇史伊原敏郎○戲曲小説通志雙木園主人○狂言作者概略○作者店おろし三桝屋二三治○名人忌辰錄〔渥美〕

鶴屋南北(五代)　脚本作者【別號】可祐【生歿】寛政九年、江戸に生れ、嘉永五年(一八五二)正月二十一日、江戸で死んだ。享年五十七【墓所】深川寺町信行寺【閲歴】二代勝俵藏(別項)の子で、四代鶴屋南北の孫に當る。初め鶴屋孫太郎。天保七年、五代南北を襲ひ、同九年正月、河原崎座で初めて立作者に昇進した。彼の作に有名な物はないが、門下に三代瀬川如皐及び古河默阿彌(各別項)の二名作家を出してゐる。【著作】筆書始交張會我○惠聞雨鉢木○一世一代功力妙法字○鶴ケ岡根元會我○東鑑怪談噺○優平家劇場軍配○飾海老會我門松○其三味線饗高調○世善知鳥東内裡(以上脚本)○睦月深仲町○當麻八幡祭○東海道五十三驛○姥池因縁物語○神靈旗仲黑(以上合卷)〔渥美〕

徒然時勢粧　浮世草子　七册【作者】錦文流【刊行】享保六年【名義】兼好の「徒然草」に倣つた隨筆の義。序に「徒然なるまゝに日終頭陀袋のほこりをはらひ、もてる調度の置所もそこ〳〵に入直しぬるに、

つるやな　つれずれ

爰かしこにて聞きはつりぬる覺え書とて、反古の片裏紙のはしくれにかき置ける物あり。取りひろげて見けるに、貴とげ成る事、をかしき事、あはれ成る事、心地よき事、無用なる事、尤も成る事共取り集むるに、凡そ二百四十三品、おのづと徒然の文段に通ぜり、よつてこの題號にすがつて、徒然時勢粧と爾云」とある。【諸本】浮世草紙第四卷(浮世草紙刊行會)所收。

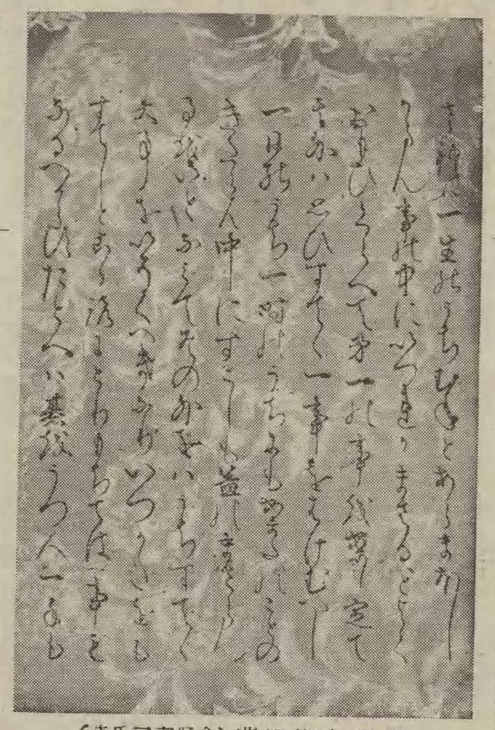
【梗概】卷一は、隨筆風の當世習俗に關する短文六章より成る。卷二は、「茶湯根元記」「數寄屋付け圍の紙形」の二章は、茶の湯に關する諸事を、「聞書重寶記」は、雜事十五・六條を記してある。中に「江都著聞集」にも記せる或る妻女の上厠の度に、愛猫が伴うて行くのを、邪婬の心と祭して首を擊つて殺した所が、その首飛んで厠の向側に行き、そこに潜んでゐた蛇を食ひ殺した話がある。卷三・四は、續き物語で、島の内の白人お紋、自前で勤めてゐたが、八兵衛といふ男と謀り、富有の客長七を或る夜今宮邊の野邊に誘ひ出し、心中のための誘拐と騒がせた。長七の番頭欺僞の手段とは知りつつ百兩出して内濟にし、詐狀一札取つて置いた。その後お紋は長堀邊の富重といふ粹自慢の男に圍はれて、半歳ばかりの後、亡父がしば〳〵夢枕に立つて、地獄に墮ちた苦を訴ふると言ひ出し、遂に病となり、出家の希望を申出た。富重もその請を容れて、祠堂銀三貫目、庵の普請料三十兩を與へて、京の親許に歸らせた。然るに供の者、お紋が親里には祝言の準備のあるを見て怪しみ、身を乞食に窶して婚禮の樣子を見屆け、且つお紋は大阪で豫て萬太夫座の俳優花右衛門と馴染みをり、今夜百兩の持參金を持つて嫁したといふ話をも聽いて歸つて主人に報告した。富重、人を京に遣はして所司に訴へたので、二人は銀を返した上、町追放に處せられた。その上お紋は惡疾に罹つて腰立たずになり、終に餓死した。近所の者の惠みで、花右衛門はその骸を葬り、彼も翌年死んだといふ。卷五の「九條織延島」は、大阪城外九條島の長作といへる蜆賣が死に、天滿に奉公に出でし姉娘が漸く葬式を濟ました。その後、近所の助九郎といふ者の娘織延べの女おつたに、その死靈がつきて、生前二重底の枡を用ひて惡事を働きたるため、今地獄の苦を受くることを訴へた。姉娘即ち衣裳を賣つて布施となし、作善供養をしたので、おつたは回癒し、つたの母の夢に長作は佛果を得たことを告げた。「十界胸中記」は、京の吳服屋が白雨に逢うて八坂の塔に雨宿りしてゐると、向ふの茶妙林の宅で病人の死んだ樣子であつたが、くぐり戸の明いた所から白い玉が飛び出した。すると前にゐた犬がそれを食つた。白雨晴れて立ち寄つた家の禪門にその話をすると、禪門はそれは妙林は大惡人であつたから、死んで畜生になつたのだと話して聞かせた。卷六の「書寫性空俗姓傳」は性空が遙に大唐金山寺の火事を感じ、手水鉢の水を灌ぎてこれを消した話。「筆跡根なしかづら」は、聖海上人が子供の惡戯に神前の獅子狛犬を後向きにしたのを見て、徒に感ぜし話。爪を火に入るまじきこと。子供に月を指さして見せぬこと、犬蚯のこと等。隨筆風に書いてある。「男色百物がたり」町人の子に優れた美少年があつた。言ひ寄るもの多い中から縣屋小八を選んで、親より兄分に頼み込み、宿老も口きいて天下晴れての兄弟分となつた。この少年の名殘りの宴をしようと友人多く集り、百物語に擬して料理の百物語して灯を消すと、挾箱に入れた料理が出たので、一同食ひ散した。するとこれは惡者が百物語を立ち聞いて屆けさせたもので、その代金として大金を取られた。卷七は文殊の順平四人の子供を夫々に片付けて樂に暮してゐた。隣町の富有なる町人、美人の女中に關係して姙ませ男子を産ませたので、金錢を與へ、後のために證文を書かせて家へ返した。主人はやがて死んだので、寡婦は亡夫の甥とわが姪を迎へ夫婦として家を嗣がせた。すると下女の親は、順平の智慧を借りて訴訟を起した。役人は寡婦の處置に誤りはないが、實子を全く顧みないのは善くない、實子でないといふ證文のあるのが實子たる證據であるから、財産の半分を實子の方へゆづれと申渡した。「御所模樣香取の衣」或る中納言の後妻、先妻の子に戀慕して文を度々贈つたが顧みないので憎み出し、これを亡き者にせんと思ひ、戸根川といふ臣と謀り、花野遊びの折、己が衣に蜜を塗り集まる蝶を若君の寄りて拂ふを夫君に見せて、戀慕と誤認させ怒らせた。これを老臣幣之丞が知つて、中納言を諫めてこと無きを得させた。〔藤村〕

徒然草　隨筆【作者】兼好法師【名稱】卷頭の「つれづれなるまゝに、日ぐらし硯にむかひて云々」とあるによる。【卷數】季吟の「文段抄」には、上下卷二百四十四段としてゐる。【成立】土肥經平の「春湊浪話」に、上卷は建武三年以前に吉田並びに雙の岡で執筆し、下卷は同年夏以後に伊賀で書いたものとあるが、藤岡作太郎は大約元德二年以後、建武三年以前の數年間に亙つて出來たものとした。「類聚名物考」書籍部第七に、「第一段よ

衞韓噺(別項)○彩入御伽草(文化五年六月市村座)○時桔梗出世請狀(別項)○阿國御前化粧鏡(別項)○心謎解色絲(別項)○勝相撲浮名花觸(別項)○繪本合法衢(別項)○當麻八幡祭(別項)○謎帶一寸德兵衞(別項)○於染久松色讀販(別項)○隅田川花御所染(別項)○杜若艶色紫(別項)○櫻姫東文章(別項)○四天王産湯玉川○梅柳若葉加賀染○三箇莊會我鳥臺○玉藻前御園公服○靈驗龜山鉾○浮世柄比翼稲妻(別項)○東海道四谷怪談(別項)○盟三五

五・六・七・八年の作には鶴屋南北口授、門人龜東筆錄といふことになつてゐる。自作としての署名は同九年以後天保元年に至り、同二年には、遺稿の出版があつた。姥尉輔以來十數部の作であるが、作風はすべて一貫してゐる。妖怪の事件に凄慘の氣分を盛つたもの、大體その狂言と同一傾向を有つてゐる。勿論筋の運びその他に、歌舞伎がかれるものが多く、殊に文政十一年の「裙模樣沖津白浪」(別項)の如き、南北自作の脚本を草雙紙化したと

り二百餘段までつらねて書る物とは見えず。夫につきて、崑玉集の説とて、吉田の草庵の壁張おきし反古をとりあつめしと云ふ。是は左もやと思はる。次第は後に人の見計らひて次たるもの成べし」と。今見る如くに編んだのは、後人だと云ふのである。【諸本】壽命院の抄に、數本を以て校合したが、條段の多少・次第が同じくないと云つてあるが、實は格別異本と見るべき物は無いやうである。多く季吟の「徒然草文段抄」の本文を底本としたものである。「文段抄」に、「本書は逍遊軒の本をもととし、且つ壽抄・野槌の本をもまじへ合せて用捨する所也」とあるから、貞德の本が流布本の原據となつてゐるわけである。寫本には、桂宮本（圖書寮藏）・靜嘉堂文庫本・屋代弘賢校本があり、刊本には嵯峨本・慶長本・正德本等數種がある。有朋堂文庫・國文大觀・國民文庫・日本文學全書・日本文學大系・日本古典全集（御物本）等に所收。



嵯峨本徒然草（倉野憲司氏藏）

【解説】前後連絡もないやうな種々の文章が相次いでゐるのが、「枕草子」を初めこの種の文學の本來の面目であるが、一つ〳〵吟味すると形態・樣式に於て必ずしも同樣ではない。單にエッセイと見ることも適切ではない。その各段を文體から考へると、記事文があり、叙事文があり、若しくは説明文があり、議論文がある。一體この書は古來名文として嘆稱せられるが、それは作者の記述・描寫・論理の上に、非凡な手腕が存したからである。その全體の文章を整理してみると大體二つのスタイルが認められる。一は擬古體で他は當時の新文體（卽ち、方丈記に於て見るやうな近古時代新發展の文體）である。この二樣のスタイルがこの一書中に兩立してゐる事は、文章史上閑却してはならぬ。これは作者の思想に、古代憧憬と時代的又世間的と兩方の影が認められるのと同樣の現象である。又作者兼好は、我が中古文學に通じてゐたと共に、支那文學では、儒書を窺ひ老莊をも繹ねて居り、又更に佛典にも通曉してゐたと想はれ、博覽多識の結果、その記述は多岐に亙つてゐる。人物も才子であり通人であり、一般の人と反リの合はぬ一種の出世間家でもあり、實に多面的な氣質の人と思はれる。本書に現れてゐる思想は、先づ古代憧憬がその一である。而もそれは風俗の優雅な平安朝である。九重の神さびたのを尙び野宮を優しいと興じたのも、皆この結果である。次にこの古代憧憬が基となつた風雅思想は、或は自然觀となり、人事觀となり、文學觀となつて示されてゐる。四季の評や花月の評の如き、作者獨得の主觀が著しく働いてゐるが、要するに古典的趣味が根柢を成してゐる。又一面には甚しく實際的な世間的な人生觀照をしてゐるのが第三に注目すべき點である。説く所の教訓も、著しく實踐道德に固着し、儉約を説き（第十八段）、慈悲を勸め（第百二十一段）てゐる類、皆それである。而してその行き方は、積極的と云ふよりも消極的である。鎌倉時代文學には、「十訓抄」や「沙石集」（各別項）のやうに、談義風の作品が少からず存するが、この書も一面には、さういふ系統を引いてゐる。この談義式の條々が、譬喩・寓話を拉し來つて、談理に肉を附けるのも亦、常套手段であるが、作者は、どうも無住法師（沙石集の著者）の筆法に倣つてゐるものの如く、例話の出し方が巧妙で、著しく滑稽味さへ加へてゐる。詮ずる所、作者の理想鄕は、簡素・孤獨・閑寂・風雅（物のあはれ）の境地で、念頭常に有爲轉變、無常迅速を忘れないと云ふのにある。併しそれは作者の個性の著しい顯現であるけれども、近古時代の有識階級一般の通有性でもある。【價値】古來名文の一として定評がある。その然る所以は前述の如く各體の文章が交錯してゐるが、殊に記事・叙事の手腕が勝れ、議論に條理の整然たるを見、修辭の妙を得たものがあるに因る。加ふるに從前の文學には、思索的のものが洵に乏しいが、本書に於て思想家の文章として卓立するに至つた。されば江戸時代の初頭からこの書の研究が頻出し、又一方には、戯作者流がこの書や「方丈記」の如きを耽讀して、創作の資としたので、何々つれ〴〵草などと題する書がいろ〳〵出來た。

【研究史】正徹の「清巖茶話」に、「つれ〳〵草は枕草子をつぎて書たる物なり云々」と云ふやうな斷片的な言が早くも見えてゐるが、「徒然草」に對する眞の研究は、江戸初期からである。今註釋書成立の過程を辿れば、先づ壽命院立安法印の「徒然草抄」二卷（古活字本四册）を最初とする。立安（一二一〇九―一二六七）は秦宗巴といふ醫者で（安齋隨筆・京都名家墳墓錄）、松永貞德の言（慰草の跋）によると、壽命院が要法寺の本地院などに訝しい事を尋ねて書いたものだとある。兼好の思想を儒釋道の兼備と考へたり、文體を「枕草子」の摸倣と見たり、殊に作意を、「老佛を本として無常を觀じ、名聞を離れ、專ら無爲を樂しまん事を勸め、傍、節序の風景を翫び、物の情を知らしむるもの」としてゐるが、その見解たるや概ね妥當で、後人の註疏の根據となつてゐる。抄する所は要語の摘註である。次に林羅山の「徒然草野槌」二卷十四册（刊本）が出た。元和七年の著作で、卷頭に卜部系圖を載せ、諸集に入つてゐる兼好の歌を出し、又兼好の略歷をも記してゐるが、「徒然草」の總評に至つては、壽命院の抄の説を承けてゐる。語句の註解をすると共に、各段の要旨を述べ、感想を附加し、又批評にも及んでゐる。言ふ所著しくその博覽多識が認められ、隨つて趣味の津々たるを覺える。この書を踏襲したものに、青木宗胡の「鐵槌」四卷（慶安二年刊）がある。「野槌」の要領をそのまゝ頭註としたのである。また松永貞德も「徒然草」を研究してゐる。その説を傳へたものが「南倶左見草」（慰草）八卷（繪入刊本）である。本文を二百四十四段に分ち、頭註を加へ、每段の後に大意を叙してゐる。この大意に貞德の意見が認められる。「群書一覽」には、なほ「つれ〴〵長頭丸抄」二卷を擧げて、これを貞德自身の註釋であるとしてゐる。なほ撰者未詳の「徒然草古今大意」二卷四册（萬治元年刊）は、立安・道春・貞德三家の論評を拔萃したものである。又西道智の「徒然草金槌」といふものもある。又貞德の門下の加藤磐齋の「徒然草抄」（別項）と北村季吟の「徒然草文段抄」（別項）とがある。この「文段抄」が、壽命院抄以來の諸註を一先づ集成したのであるが、その後もてゐる。その主な物を擧げると、一九一一年（明治四十四年）の Transactions of the Asiatic society of Japan. (Vol. XXXIX) に收められてゐる G. B. Sansom の英譯 "The Tsurezure Gusa of Yoshida no Kaneyoshi." はその一である。全文を譯し、ノートを附け、挿繪を入れ、首に序説を加へ、終に附錄として

一（東亞の光二二ノ九）○徒然草の思想を論ず　齋藤勇（同上一ノ六）○日本古典全集本解説　正宗敦夫

つれづれ草

【作者】「聲曲類纂」に近松作とあるが確かな根據はない。宇治加賀掾正本。【諸本】八行四十一丁本（延寶九年五月、山本九兵衛刊）を

【野村】

淨瑠璃　五段　時代物

て宮の御床に入り、宮を苦しめる。兼好は笑つて某が御平癒なさしめんと、その場を立つと、間も無く御褥の内より小蛇這ひ出でて、宮の御惱は去る。そこへ隨身近友が遽しく參上し、兼好の出家を告げるので、院を初め皆これを惜しむ。宮は兼好を忘れかね、乳母裏

【解説】前後連絡もないやうな種々の文章が相次いでゐるのが、「枕草子」を初めこの種の文學の本來の面目であるが、一つ〳〵吟味すると形態・樣式に於て必ずしも同樣ではない。單にエッセイと見ることも適切ではない。その各段を文體から考へると、記事文があり、叙事文があり、若しくは說明文があり、議論文がある。一體この書は古來名文として嘆稱せられるが、それは作者の記述・描寫・論理の上に、非凡な手腕が存したからである。その全詳の「徒然草古今大意」二卷四册（萬治元年刊）は、立安・道春・貞德三家の論評を拔萃したものである。又西道智の「徒然草金槌」といふものもある。又貞德の門下の加藤盤齋の「徒然草抄」（別項）と北村季吟の「徒然草文段抄」（別項）とがある。この「文段抄」が、壽命院抄以來の諸註を一先づ集成したのであるが、その後も續々諸抄が現れてゐる。高階楊順の「徒然草句解」七卷（寛文五年刊）は「野槌」と「慰草」とに負ふ所が多く、著者が漢學の素養を有する人である事が特色である。南部草壽（元祿二年歿）の「徒然草諺解」五卷（延寶五年刊）も、儒者たる著者の俤の反映せられてゐるもので、亦出色の註書である。高田宗賢の「徒然草大全」十三卷七册（延寶五年刊）は、細川幽齋の說を紹介してゐるのが注目せられる。又、僧惠空の「徒然草參考」八卷（延寶六年刊）は、釋家の見に偏した點はあるが、最も見るべきものである。岡西惟中の「徒然草直解」十卷五册（貞享三年刊）は中院通勝の傳本によつて居り、無用の引證が少く簡便な抄である。末卷に書中の人物百九十八人の系譜と器物圖とを收めてゐる。それから加賀の淺香久敬（山井と號する）も「徒然草諸抄大成」（別項）二十卷（貞享五年刊）を出した。これに由つてその名の如く諸註が集大成せられた。明治以後では、「校註徒然草」（佐佐木信綱）、「徒然草講義」（井上頴文註）、「訂正增補文段抄」（鈴木弘恭）などがあるが、評釋の體を得たものは、內海弘藏氏の「徒然草評釋」と「徒然草詳解」からである。又沼波瓊音の「徒然草講話」はその文學批評の優れてゐることを以て有名である。その他知名の諸家の類書が尠くない。

【歐文譯】本書は、國文學の一名著であるだけに、外人間に喧傳し、ために飜譯が企てられてゐる。その主な物を擧げると、一九一一年（明治四十四年）の Transactions of the Asiatic society of Japan. (Vol. XXXIX) に收められてゐる G. B. Sansom の英譯 "The Tsurezure Gusa of Yoshida no Kaneyoshi." はその一である。全文を譯し、ノートを附け、挿繪を入れ、首に序說を加へ、終に附錄として姉崎正治氏の "Religious conditions of Japan in the fourteenth century." と題する一篇が添へてある。次に一九一四年倫敦版の W. N. Porter. の英譯 "The miscellany of a Japanese priest being a translation of Tsure-Zure Gusa." はその二である。これも全文を譯し、卷末にノートを一括して載せ、文段の事實によつて分類した索引を附し、更に挿繪を入れた書である。又卷首の序說は、折から滯英中であつた市河三喜氏が執筆せられたものである。

【附記】江戸時代の初期、古今傳授に倣つて「徒然草」の三祕事を立てた。一、布のもかう。二、白うるり。三、祭の日の放免。「盤齋抄」に「布のもかうの事、予聞きし比までは左樣にはあらざりしが、後に三ケの大事とて祕事の說とやらん貞德の定め給ひしとて祕する事になれば記さず云々」とある。松永貞德の定めたものと見える。「一條家祕抄」「歌道心霞集」「古今集傳」等に載せて一條禪閤の說の如く云つてあるのは假託である。（歌道傳授參照）

【參考】徒然草研究 中村直勝（日本文學講座）○徒然草鑑賞 生田春月（同上）○徒然草研究史 重松信弘（國語と國文學六ノ六・七）○徒然草に訊く 齋藤清衛（同七ノ一〇）○兼好素描 筑土鈴寛（同九ノ八）○道念を中心として見た徒然草 西尾實（國文教育昭和三ノ一一）○徒然草の論 兒山信一（東亞の光二二ノ九）○徒然草の思想を論ず 齋藤勇（同上一ノ六）○日本古典全集本解說正 宗敦夫

【野村】

つれ〴〵草（つれづれぐさ）

【作者】「聲曲類纂」に近松作とあるが確かな根據はない。宇治加賀掾正本。【諸本】八行四十一丁本（延寶九年五月、山本九兵衞刊）。近松門左衞門全集第一卷・近松全集第一卷・巢林子評釋（藤井乙男）に收む。【題材】兼好の「徒然草」中の文章や說話を點綴し、謠曲の「鐵輪」や「葵上」の趣向を取入れたもの。

【梗概】〔一段〕後宇多院の皇女菅の宮の徒然を慰めまゐらせるため、北面の侍卜部兼好が吉田山に案內し奉る。御出發に際し、御車の牛が濱床に上り（にれ）鬪打嚙んで臥した爲め、淺原判官爲賴が牛飼齋王丸を責めるが、兼好が宥める。途中賀茂山が遠く見える邊で初時鳥の音を聞き、兼好が名歌を詠むと、そのために宮の心が動くが、豫て兼好に心を寄せてゐた侍從の局は心中穩かでない。やがて吉田の社では、禰宜覡達が花賣の賤の女に身をしつらへて、花盡しの神樂を奏してお目にかける。〔二段〕宮は兼好への文の媒を侍從に賴むが、嫉妬に燃える侍從は、御文を破つて棄てる。かくて侍從は竊かに兼好の許に到り、我が戀を打明けてかき口說く所を宮に發見され、勘當をうける。侍從は宮を呪つて貴船の宮に丑の時詣をするが、滿願の夜遂に蛇身となり、雷電風雨の中に消え失せる。〔三段〕宮は每夜怨靈に惱まされるので、爲賴の弟具覺坊を召して祈らせると、吉田の御社參が赤舌日に當つた爲めと言ふ。兼好がそれを反駁すると、具覺坊は怒つて、然らば己が加持の奇特を見せんと數珠を揉めば、忽ち數珠が小蛇となつて宮の御床に入り、宮を苦しめる。兼好は笑つて某が御平癒なさしめんと、その場を立つと、間も無く御褥の內より小蛇這ひ出でて、宮の御惱は去る。そこへ隨身近友が遽（あわただ）しく參上し、兼好の出家を告げるので、院を初め皆これを惜しむ。宮は兼好を忘れかね、乳母裏葉を連れて忍び出て道行。〔四段〕宮は雙の岡に兼好の庵を訪ね、弟子とならんと請ひ、兼好より「徒然草」の傳授を受け、初めて夢から覺めたやうに悟る。そこへ突然侍從が姿を現し、自らは應長の頃伊勢國より現れたる鬼女なるが、只今の示にて悟開けたりと告げ、慈悲忍辱の姿となつて雲居に上る。そこで兼好は宮に女の執着の罪深き事を說く。所へ爲賴兄弟が先度の意趣を晴さんため、奈良法師を數多催して押寄せるが、何處よりともなく現れた二人の武者に斬り立てられて逃げてしまふ。この二人の武者は、かの筑紫の土大根の精であるが、文に書かれし恩に報いるため馳付けたのであつた。そこへ堀川の內府が勅使として宮のお迎に來り、また兼好にも院參あるべしと告げる。〔五段〕宮は四季折々の民の業を見度しと院に御訴へあれば、院はさらば龜山の池に大井の水をまかせ、泉を湛へ、木草を植ゑ四季を作らせ申すべしと、卽ち兼好が指圖で四季の景色を移される。これより龜山池四季揃。

【構想】「徒然草」中の文章や說話を、强ひて織り込まうとした爲め、木に竹をついだやうな箇所が隨所に見受けられ、又場面も劇的に纏められてゐるのが尠い。【影響】近松作「兼好法師物見車」（別項）は、その文章や趣向に於て、本作と共通の點が多い。

【參考】聲曲類纂 ○近世邦樂年表（義太夫節之修辭の妙を得たものがあるに因る。加ふるに從前の文學には、思索的のものが洵に乏しいが、本書に於て思想家の文章として卓立するに至つた。されば江戸時代の初頭からこの書の研究が頻出し、又一方には、戲作者流がこの書や「方丈記」の如きを耽讀して、創作の資としたので、何々つれ〴〵草などと題する書がいろ〳〵出來た。

【研究史】正徹の「清巖茶話」に、「つれ〴〵草は枕草子をつぎて書たる物なり云々」と云ふこの書を踏襲したものに、青木宗胡の「鐵槌」四卷（慶安二年刊）がある。「野槌」の要領をそのまゝ頭註としたのである。また松永貞德も「徒然草」を研究してゐる。その說を傳へたものが「南倶左見草」（慰草）八卷（繪入刊本）である。本文を二百四十四段に分ち、頭註を加へ、每段の後に大意を叙してゐる。この大意に貞德の意見が認められる。「群書一覽」には、なほ「つれ〴〵長頭丸抄」二卷を擧げて、これを貞德自身の註釋であるとしてゐる。なほ撰者未才子であり通人であり、一般の人と反りの合はぬ一種の出世間家でもあり、實に多面的な氣質の人と思はれる。本書に現れてゐる思想は、先づ古代憧憬がその一である。而もそれは風俗の優雅な平安朝である。九重の神さびたのを尙び野宮を優しいと興じたのも、皆この結果である。次にこの古代憧憬が基となつた風雅思想は、或は自然觀となり、人事觀となり、文學觀となつて示されてゐる。四季の評や花月の評の如き、作者獨得の主觀が著しく

部〇近松全集解題　藤井乙男　〔高野(正)〕

徒然草抄（つれづれぐさしやう）　註釋書十二卷（「群書一覽」等に十三卷とある。首卷を別冊としたものか）【著者】加藤盤齋【刊行】寛文元年【解說】內容は、第一兼好の傳記、第二その時代、第三徒然草の題號、第四その大略、第五本文の五部から成つてゐる。卽ち第四までが總說であつて、第五が各段の釋義である。第四大略は、これを十條に分つて說いてゐるが、その第一なる一部趣向の條は、盤齋の見解を明示したもので、「一に一部の趣向とは、兼好がつれ〴〵草をかける心のおもむきむかふ事也。天台摩訶止觀をやはらげてかける也。止觀といふも、心要といふも、妙法と云も名別義通也。今はつれ〴〵草といふも、名別義通也。日本國の人の止觀のみちをしり、よきやうにこの草子にかけると見るべし」とて、佛敎的解釋が濃厚である。本文の釋義に於ては、先づ一段々々の大綱を提示してゐる。而して元來隨筆ではあるが、盤齋の考では、各段に脈絡相通ずる所のあるのを看取して、後段を前段の續編若しくは餘論として取扱つてゐるところが中々多い。併しそれには穿鑿に過ぎた說もあつて、悉くは從ひ難い。語句の註釋には、所謂文法に注目して、或は眼字を認め、或は抑揚を言ひ、或は決前生後の詞を註し、或は問答體を吟味してゐる。前註としては、最も多く道春の「野槌」を出してゐる。一體に佛典の引證が夥しくあつて、ために註の量が著しく嵩んでゐるのは、長所であると同時に、短所である。古來兩說に亙つた所には、流石に自見を明言してゐるものがあつて、態度は曖昧でない。〔野村〕

徒然草諸抄大成（つれづれぐさしよせうたいせい）　註釋書二十卷【著者】淺香久敬（山井と號す。加賀の人）【刊行】貞享五年【諸本】國文註釋全書所收【解說】これはその題名の如く、壽命院の「徒然草抄」以下、「徒然草大全」「徒然草參考」に至る數抄を總括して、以て一覽に便しようとするところから編せられたものである。その體裁は、正說を以て本文に次ぎ、更に異說及び引文等を「頭書云」として出し、「山案」として著者の自見を交へ、段末に、「一段之統論」と標して、大意を叙べてゐるのである。量としては、「徒然草」に關する空前の大著ではあるが、併しそれだけにまた雜駁の嫌ひがある。〔野村〕

徒然草文段抄（つれづれぐさもんだんせう）　註釋書七卷十四册【著者】北村季吟【刊行】寛文七年【諸本】鈴木弘恭の訂正增補に成るものが、寧ろ世に行はれてゐる。【解說】卷頭先づ兼好の傳歷を述べ「徒然草」の題號及び一部の體に就いて說く所があり、次にこの抄の出來た次第を記す。而して本文及び段數（二百四十四段とする）は、師貞德の說に據つたこと、諸說の後に自見を示したのは、「季吟云」と特記したこと、舊抄の兩說に跨つてゐるのは、自問自答して自說を述べたこと、並に各段を更に數節に小分けして、その本意を明めたことを斷つてゐる。この最後の一條は、特色の一つであつて、抄名の由つて出た所である。さて註釋の部を見ると、先づ段落を區分した狀は、例へば第二十一段の「よろづの事は云々」の條は、これを三節に分ち、各節の大意を摘んで、第一節は發端で、月を提示し、第二節は月から露、風、水のあはれに及んでゐるとし、第三節は閑に山水をもてあそぶことを述べて、一段を決してゐるとした類である。なほ第十九段の「折ふしのうつりかはるこそ云々」は五節とし、第百三十七段の「花はさかりに云々」は八節としてゐる。併し何れもかく一律の方法によるのではなく、第百三十九段の「家にありたき木は」の條の如きは、かやうに分けてゐない。語釋は、前註としては、最も多く壽命院の「徒然草抄」と「野槌」とを採用し、往々師說をも加へて居り、又時に踏雪（盤齋）のにも及んでゐる。古語を解くのに、「源氏物語」の抄物たる「花鳥餘情」や「孟津抄」の如きから引いてゐるのは、當時の一大註釋家たる彼として、さもあるべき事と想はせる。彼の私按を特記してゐる個所を見るに、前人の註疏に一步を進めてゐる點は確に肯かれる。又一體に事實の考證が委しくなつて居り、有職故實に關するものも詳細であつて、洵に他抄の闕を補ふに足るものが存する。概して妥當な註であつて、衒奇の所もない。古來普及した所以も、それ等の點に基ゐしてゐる。〔野村〕

兵根元曾我（つはものこんげんそが）　脚本　四幕九場　曾我物【作者】中村清三郎・初代市川團十郎【名稱】角書の「淺黃綿、黑小袖」は、三幕目曾我の里の場で、虎が貧にやつれた十郎の黑小袖を脫がせて、わが身の淺黃綿を着せる所からついたもの。本名題はそれから續いて兄弟を兵の根元と記した。【諸本】狂言本として、二卷二册本が元祿十年五月、堺町かいふ屋から刊行されたものが現在傳はり、複刻されて元祿歌舞伎傑作集上卷に收められてゐる。挿繪畫家は鳥居清信か。團十郎と傳九郎との草摺引の場面は、特に凄じく躍動するかの感がある。二卷二册本にした事は上本と稱するものの案と思ふ。【興行】元祿十年五月、江戸中村座上演、四番續。

〔役割〕和田義盛（あふら勘六）、北條時政（大熊宇太右衞門）、江馬の小四郎（生島大吉）、梶原平三（田村平八）、梶原源太（中島勘左衞門）、工藤祐經（山中平九郎）、をとめの前（桐山政之介）、八幡（杉山勘右衞門）、近江（山本源左衞門）、御所の五郎丸（中村清五郎）、大磯虎（袖岡政之介）、化粧坂少將（藤本門之丞）、鬼王（中村勘三郎）、團三郎（市川團之丞）、二の宮姉（荻野澤之丞）、曾我十郎（村山四郎次）、曾我五郎（市川團十郎）等。なほ山伏通力坊役の九藏（後の二代目團十郎）は初舞臺。

【梗概】〔序幕〕（頼朝館）頼朝が北條四郎を招き相撲を催す。席上、五郎丸と祇王、命ぜられて曾我兄弟の討手に向つたが、朝比奈に引立てられて歸り、朝比奈の威勢によつて、討手は赦免せられる。（明神社前）敵討祈願の十郎は豫て戀する江馬小四郎にあひ、衆道の契を交す事ができた。偶々詣でた少女前も小四郎と夫婦の契約を交したが、梶原の弟景季が來て、小四郎に戀を求めたが斷られた所から、一族を率ゐて攻め寄せる。小四郎は女中達を下知し、躑躅をさして戰ひ、敵を逐ひ散らす。〔二幕〕（幡多村）曾我から箱王のもとへ急ぐ途中、團三郎は祐經の眼に觸れて危く見えたが、鬼王が來て言ひ繕つたので、無事なるを得た。（箱根別當館）箱王は北條が烏帽子親となつて元服せしめ、介五郎時致と名乘らせたが、折しも頼朝から權現造營の上使として祐經が來た。祐經から見參の證として小太刀を與へられた時致は、その肩を掴みながら、祐成のゐぬため敵を討てぬ無念さに泣く。祐經の歸つた後、時致は不動を念じつつ泣寢入りに臥した間に顏色は赤く變つた。（權現）時致は大童となつて荒行を積み、初七日に新鍬七挺を裂き、二七日に大竹を拔き、三七日に五輪を碎いた。（相模川）朝比奈が樊噲黑を引かせて酒を飲むところに、時致が下つて垢離物を汚す所業を難じ、互に爭ふ。時に不動が現はれて兩人を鎭める（以上上卷）。〔三幕〕（曾我の里）端午の節句を祝ひに虎が十郎を訪ね、髮を梳き、わが帷子を男に着せる。五郎の許には少將が來た。母が北條の館に行くと聞いて、兄

歌舞伎の演出史上、忽せにならぬものがある。〔守隨〕

て

定家（ていか）　歌人・歌學者【姓名】藤原氏。定家はサダイへとも讀む。幼名を光季、後にしても、簡明に事件を知るためには便利である。且つ今日では本書のみに傳へられる記事、例へば宇治橋碑銘文の如きも、まゝ見出される。〔坂本〕

養和元	二〇	「初學百首」〇高倉上皇崩御〇清盛薨去〇親鸞出家。
壽永元	二一	「堀川百首」、俊成勅撰集撰定の命をうく。〇顯昭「古今集序注」
文治元	二四	殿上に雅行と爭ひ勅勘さる。〇平家壇浦に滅亡。〇後鳥羽院卽位。
同　四	二七	四月「千載集」を奏覽あり、定家の歌八首入選。
同　五		宜秋門院入內、御屏風歌作者に加

を飲むところに、時致が下つて垢離物を汚す所業を難じ、互に爭ふ。時に不動が現はれて兩人を鎭める（以上上卷）。〔三幕〕（曾我の里）端午の節句を祝ひに虎が十郎を訪ね、髮を梳き、わが帷子を男に着せる。五郎の許には少將が來た。母が北條の館に行くと聞いて、兄は弟の勘當の詫にと連れ立つ。（北條館）十郎は祝儀の品とて五郎に鎧を着せて石山源太の人形を見せ、操の仕掛があるとて、母の前を歎かせた。十郎は小四郎へ、小四郎の姉まんよ姫は團三郎に濡れる。この時、北條が兄弟を隱まふためとて秩父本田の勢が寄せた。十郎が危くなつて、遂に五郎の勘當が許り、五郎の奮戰で敵は退いた。これ等は母への策であつた。〔四幕〕（山下宿河原長者屋敷）和田一門九十三騎の酒宴に、義盛に呼ばれた虎は泣く〳〵座を勸める。やがて十郎も呼ばれて虎の思ひざしがある。こゝに朝比奈の招きに應じて障子を破つて現はれた五郎は、碁盤に乘り、朝比奈がその草摺を曳いて遂に引切り、武勇を示した。その武勇を稱へ、皆々鎌倉に引上げる（以上下卷）。

【脚色】古く流行する曾我の狂言であるが、團十郎の五郎が中心になつてゐるので、荒事の見せ場が相當多い。中に三幕目の初めの場は世話場であり、濡れ場でもあつて、荒事の間に挾まつてゐるだけ、頗る效果的である。「參會名護屋」（別項）等と同じく後世へ繼承させた荒事の型は中々多い。二幕目から「對面の五郎」（五郎參照）「不動」（別項）「竹拔五郎」（五郎參照）「五輪碎」、四幕目から「草摺曳」（別項）等が算へられる。「髮梳」「をとめ踊」「馬爭ひ踊」等も注目すべきである。特に三幕目に入れられた五郎の人形振りは、南京操との關係もあり、歌舞伎の演出史上、忽せにならぬものがある。（中村清三郎・三升屋兵庫參照）〔守隨〕

て

帝王編年記（ていわうへんねんき）　歴史書　二十七卷

【編者】釋永祐と傳へる。【名稱】「歴代編年集成」「帝王編年集成」等色々の異稱がある。【諸本】寫本は多いが、特に有名なるものは知られてゐない。井上頼圀が吹上文庫本及び柳原家藏本を以て校訂し、存採叢書の中に收めて刊行。別に新訂國史大系本もある。【內容】神代の昔より後伏見天皇に至るまでの編年體の歴史である。その體裁、御歴代毎に先づ即位前の記を掲げ、御宇年數と都とを記し、次いで御在位中の主なる事件に及び、崩御後のことを終つてから、その御代の上皇・皇子・皇女・後宮等の御名より、大納言以上の公卿、主なる僧官、將軍・執權等の補任を詳叙してゐる。而もその前半にあつては佛敎及び支那に關する記事頗る多く、第一卷より第二卷の全部にかけては、三皇・五帝より周歴代の事蹟を載せ、釋迦降誕の時に關聯しては、釋迦在世經行處を示す如き熱心さである。この傾向は大體奈良朝頃まで持續され、記事の少い上代にあつては、獨り支那に於ける譯經目錄や、支那・印度との年代の對照などが、多くの場所を占めてゐる。後半は當時の記錄の抄錄らしく、一言にして言へば、本書前半は、「扶桑略記」（別項）の範に倣ひ、後半は「百錬抄」（別項）に類してゐるのである。【價値】古書・記錄の抄錄であるから、根本の史料にはなしがたいにしても、簡明に事件を知るためには便利である。且つ今日では本書のみに傳へられる記事、例へば宇治橋碑銘文の如きも、まゝ見出される。〔坂本〕

定家（ていか）

歌人・歌學者【姓名】藤原氏。定家はサダイへとも讀む。幼名を光季、後に季光と改めた。長じてその第（だい）、二條北京極西にあつた爲め、京極中納言・京極黃門等と稱され、その役名民部卿であつた關係上、戶部尙書などとも呼ばれた。【法號】明靜【生歿】應保二年生れ、仁治二年（一九〇一）八月二十日歿。享年八十。【墓所】京都妙覺寺（相國寺塔頭）。なほ寺町歡喜寺、嵯峨中院等にも墓碑の存せること諸書に見えてゐる。

- 養子 定長（寂蓮）
- 爲家
- 清家
- 光家
- 覺源
- 定圓
- 女
- 女
- 成家（母親忠女）
- 定家（母同右）
- 覺禪（母爲忠女）
- 覺長（母同右）
- 女（後白河院女房）
- 女（大納言宗家室）
- 女（右衞門佐家通室）
- 女（源通具室）
- 俊忠—俊成—
- 靜快

【學統・門弟】基俊に學んだ父俊成（別項）に、その家學を受け、子爲家に授けた。門下には養子定長（寂蓮）・東重胤・源實朝などがある。

年號	年齡	事項（○の標あるは關係事項）
仁安元	五	幼名光季を季光と改める。
同　二	六	季光を定家に改める。○清盛、太政大臣となる。
安元元	一四	俊成、右京大夫を辭して定家を侍從に推す。
治承二	一七	三月十五日「加茂別雷社歌合」に自歌三首入る。
同　三	一八	「明月記」の筆を執り始む（嘉禎元年に及ぶ。この頃三代集秘傳をうくと云ふ。）○重盛薨去。
養和元	二〇	薨去○親鸞出家。
壽永元	二一	「堀川百首」、俊成勅撰集撰定の命をうく。○顯昭「古今集序注」
文治元	二四	殿上に雅行と爭ひ勅勘さる。○平家壇浦に滅亡。○後鳥羽院卽位。
同　四	二七	四月「千載集」を奏覽あり、定家の歌八首入選。
同　五	二八	宜秋門院入內、御屛風歌作者に加はる。
建久元	二九	「花月百首」○西行寂○頼朝鎌倉より上洛。
同　二	三〇	左大將家（良經）十題百首、良經と交あり。
同　四	三二	母逝去○顯昭「六百番陳狀」奉進す
同　六	三三	民部卿家歌合出會。
正治二	三九	初度後鳥羽院百首、大臣殿撰歌合、仙洞十人歌合等に加入（仙洞殿上許可）。
建仁元	四〇	院五十首和歌、千五百番歌合（此頃より歌合張行の度毎に殆ど出會す）。和歌所寄人、勅撰集撰定の命をうく。影供歌合講師となる。
同　二	四一	この頃より漸次父の後繼として歌壇の領袖となる。○寂蓮・通親死。
同　三	四二	父俊成「九十賀屛風歌」成る。○實朝將軍となる。
元久元	四三	十一月俊成歿（九十一歲）、勅撰集の撰集行き惱む。
同　二	四四	四月「新古今集」竟宴、兼實に召され「源氏物語」を講じた。
建永元	四五	院宣にて城南寺に連歌判をする。○良經薨去。
承元元	四六	最勝四天王院障子歌、小倉山莊を營む。
同　三	四八	「近代秀歌」成る。次子爲家侍從となる。實朝の歌に合點す。
同　四	四九	左近衞中將を辭し爲家を少將に推す。
建曆元	五〇	この頃より連歌を好んで多く詠む（從三位侍從）
建保元	五二	家傳の「萬葉集」を實朝に獻ず。仙洞歌合を判ず。○道元出家。
同　二	五三	「七十五番歌合判詞」成る。この頃禁裏歌合多く定家の判の傳はるも多い。參議に任ず。
同　三	五四	禁裏御連歌並に狂歌合に出會。
同　四	五五	「拾遺愚草」を編し自作の總勘定を示した。○長明寂（？）獨吟詩歌、この頃より詠歌に對する興味が減退したらしい。
同　五	五六	八月中殿御會、民部卿に任ぜらる。
同　六	五七	

註釋には、所謂文法に注目して、或は眼字を認め、或は抑揚を言ひ、或は決前生後の詞を註し、或は問答體を吟味してゐる。前註としては、最も多く道春の「野槌」を出してゐる。一體に佛典の引證が夥しくあつて、ために註の量が著しく嵩んでゐるのは、長所であると同時に、短所である。古來兩說に亙つた所には、流石に自見を明言してゐるものがあつて、態度は曖昧でない。〔野村〕

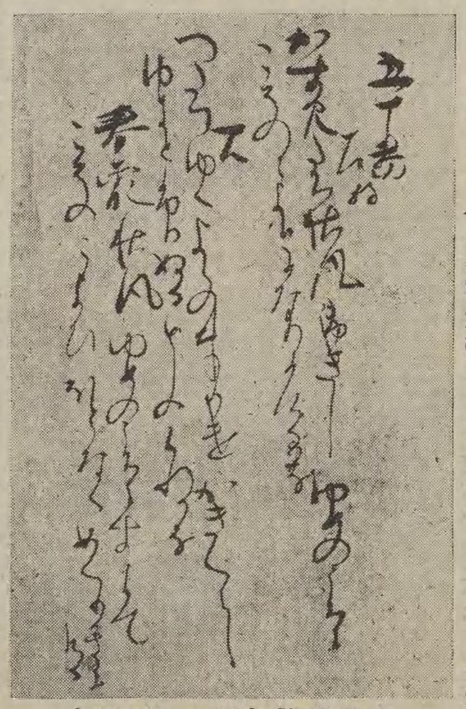
徒然草諸抄大成（つれづれぐさしよせうたいせい）

註釋節に小分けして、その本意を明めたことを斷つてゐる。この最後の一條は、特色の一つであつて、抄名の由つて出た所である。さて註釋の部を見ると、先づ段落を區分した狀は、例へば第二十一段の「よろづの事は云々」の條は、これを三節に分ち、各節の大意を摘んで、第一節は發端で、月を提示し、第二節は月から露、風、水のあはれに及んでゐるとし、第三節は閑に山水をもてあそぶことを述べて、一段を決してゐるとした類である。なほ第十九段からついたもの。本名題はそれから續いて兄弟を兵の根元と記した。【諸本】狂言本として、二卷二册本が元祿十年五月、堺町かいふ屋から刊行されたものが現在傳はり、複刻されて元祿歌舞伎傑作集上卷に收められてゐる。挿繪畫家は鳥居清信か。團十郎と傳九郎との草摺引の場面は、特に凄じく躍動するかの感がある。二卷二册本にした事は上本と稱するものの案と思ふ。【興行】元祿十年五月、江戶中村座上演、四番續。

つて元服せしめ、介五郎時致と名乘らせたが、折しも頼朝から權現造營の上使として祐經が來た。祐經から見參の證として小太刀を與へられた時致は、その肩を摑みながら、祐成のゐぬため敵を討てぬ無念さに泣く。祐經の歸つた後、時致は不動を念じつつ泣寢入りに臥した間に顏色は赤く變つた。（權現）時致は大童となつて荒行を積み、初七日に新鍬七挺を裂き、二七日に大竹を拔き、三七日に五輪を碎いた。（相模川）朝比奈が焚嗜黑を引かせて酒

承久元	五八	「毎月抄」成る。○實朝弑さる。
同　二	五九	この頃より好學的趣味的性情顯著となる。○慈圓の「愚管抄」成る。
同　三	六〇	「顯註密勘」成る。○承久の役、後鳥羽院二上皇還御。○雅經薨。
貞應元	六一	「古今集定本」「三代集間事」成る。○參議を辭す。
同　二	六二	「二條家傳」を書いたと云ふ。○古今集書寫○道元入宋。
嘉祿元	六四	この頃より公の歌合に爲家を出會せしむ。○慈圓寂。
同　二	六五	「僻案抄」成る。
寛喜元	六八	女御入内、屏風歌に七首入選。
同　三	七〇	伊勢物語筆寫。○爲家叙正三位。
貞永元	七一	關白左大臣家百首。光明峯寺攝政家歌合。「長歌短歌古今相違之事」を著す。勅撰集撰進の命を受く。權中納言に任ぜらる。
天福元	七二	出家（法號明覺）。特に園藝趣味現はる。致仕。
文曆元	七三	新勅撰集内々奏覽、後堀河院の崩御のためその原稿を燒却。
嘉禎元	七四	中風を病む。明月記絶筆。小倉色紙百枚をかくと云ふ。
同　三	七六	「順德院御百首判」○家隆薨去。
仁治二	八〇	八月二十日薨去。
建治三		定家卿追福この年より始めらる。

【閲歷・人物】母は初め美福門院女房加賀と呼ばれ、若狭守藤原親忠の女である。初め寂超の許に嫁し、後、俊成に再嫁した。俊成は先妻に男子がなかつたので、弟の俊海の子定長を養子としてゐたのであるが、成家・定家相ついで出生のため、定長は家を出て僧となり、寂蓮と稱した。定家長ずるに及び、父の寵愛を集め、十四歳にして侍從となり、禁裏に出入する身となつたのも、父がその兼官であつた右京大夫を辭し、定家に侍從を申請した爲めであつた。當時、宮中には文人雅客が多かつた。俊成を父としてこの環境に生ひ立つた彼は、他面、地下に於ける賴政や忠度、西行や俊惠などの風藻に動かさるゝことも多かつた。彼は天性多才多能で、恒にその立場を失はず、行くところに自家の世界を拓いたものやうに思はれる。歌道は彼がその一生を委ねたところでもあつたが、先づ養和元年「初學百首」、壽永元年「堀川百首」を發表するに及び、一躍大家の列に伍し得（拾遺愚草の詞書）、父の撰定によるとは云へ新集の「千載集」に八首の入選を見た。西行が、自歌合「宮河歌合」を以て定家の判を乞うたことは、單に俊成の子であつたがためのみでなく、「千載集」の詠に、未だ二十幾歳の青年ながら、非凡の歌才あることを見透したからであつたらう。而も當時の世態は三百年間の基礎を有する王朝文化の總崩れとなる一大轉機に際會してゐる。この時代の波風に、よくその進路を失はなかつたのは、自らの聰明によるとは云へ、忍苦の跡は深いのであつた。歌道に於て彼の詠み口が新しすぎるとか、達磨歌であるとか云ふ非難は良經とか家隆とか云ふ新人の理解を得て、安んずるところあつたとしても、藤氏の中でも血統の關係上低い官職で甘んじなければならない宿命の如き、彼を深く惱ましめたやうである。彼は弓道や馬術に於てすら、なほ能く人並以上の技を發揮し得たと云ふ。而もこの絢爛たる才幹が却つて彼から純なるものを奪ひとつたやうにも思へる。彼が殊更武家並に武家親善の公家と關係多い事實の如きも一つの懸案となるであらう。榮達を希うて與へられない彼は、「位山麓の雪に埋れて」などと負け嫌ひな反逆性を事毎に示してゐる。併し歌壇の大元老としての父の地位を繼承してゆくものは、當時、彼を措いて他になかつた。正治二年、彼は既に三十九歳であつたが、仙洞の殿上を許され、「院百首」と云ひ、「仙洞十人歌合」と云ひ、すべて重要な歌合に加名する榮譽を得た。その翌年和歌所が再興され、藤原通具等四人と共に上皇の大抱負であつた次代勅撰集撰定の大命を蒙ることになつたのである。その撰定半ばに父俊成は九十一歳で歿した。寂蓮や攝政良經、また俊成の死と相前後して他界した。定家がその後の十ケ年は、小倉山に山莊を營むとか、長子爲家を少將に推擧するとか、諸方の歌合の判詞を書くとか、自作の整理をするとか、すべて專ら内面的活動に當てられることが多くなつた。連歌に興味を有して來たのも五十歳時代からであるが、彼には天性的に連歌愛好の傾向が存してゐたと云つてよい。彼はそこに機智と洒脫の性格を思ふ存分活かすことを得たやうである。その後七十一歳致仕に至る十數年間は、歌人と云ふより、寧ろ著述家とか擧究とか云ふ名にふさはしい餘生であつた。彼の著として傳へられてゐる大部の歌學書が、その間に編まれたばかりでなく、古典の校合と云ふ如き大事業をすら多く遺してゐる。而も貞永元年、新に勅撰集撰進の大命をうけたことは、古稀の齡を越えた彼として、その最後を飾るに足る大任であつた。「新古今集」奏覽に際しての不滿は、玆に充足さるべき絶好の機會を得たのである。文曆元年内々の奏覽のみでその最後の御裁可を受けない前に、後堀河院の崩御に際會し、定家の遺憾やるかたなく、所持の原稿を庭上で燒却したと云ふ「明月記」の記事もその心中を想像するに足るのである。定家は神經痛性の持病があつたやうである。日記中に屢々「心神殊惱」と云ふ類の句を書き遺してゐる如く、彼の體力は餘り强健でなく、胃腸も弱い方であつた。七十二歳に法體になつてからは、多く小倉山莊に住まつてゐたものらしい。かくて詠歌と云ふ興味からすらも漸次離れていつた。そして家隆卿や後鳥羽上皇の御他界をも耳にして、仁治二年八十歳で薨去した。



定家筆蹟（日々らしら帖に據る）

【著作】〔一、歌學に關したもの〕近代秀歌（「和歌式」「定家卿和歌式」「愚見抄」等の別稱がある）○毎月抄（「和歌庭訓」「定家卿消息」の別稱がある）○詠歌大概（別稱被進梶井宮抄）（以上各別項）○明月記和歌部類一卷（定家の漢文體日記「明月記」の中から、歌道に關した主要な部分を抄錄したもの。文治四年より建保四年に亘り、和歌所や和歌御會場の圖なども採られてゐる。一條兼良の抄出と云ふ。（續類從第四七〇）○歌道事類二卷（兼良の抄錄を源貞憶が更に文化七年增補したもの）○定家卿長歌短歌說一卷（續類從第四五〇に收載す。貞永元年の述作で、當時、長歌短歌の意義混亂して不明であつたのを考證して原義に返した論書。「長歌短歌之式」とも別名される。古寫本。帝國圖書館藏）○顯註密勘三卷（別項）○僻案抄三卷（別項）○三代集間事一卷（別項）○三部抄四卷（定家の編著の中、「詠歌大概」「秀歌之體大略」「百人一首」の三書を總括した名で、二條派ではこの三書を殊更尙び、註釋書なども色々出されてゐる。附錄として「未來記」と「雨中吟」の二書のついてゐるのが多い）○定家物語一卷（寫本が圖書寮に傳はつてゐるが、內容は安積沼事、古今興風事、埋木と云ふ類の項目十四種に亘り、「萬

○建保五年歌合（作者は順德院初め十六人、類從第一九七、もと衆議判であつたのを、更に定家の判詞を乞うて出來上つたもの）○寛喜石淸水若宮歌合（作者は、定家外家隆・爲家等三十四人、寛喜四年、類從第一九八、判詞あり）○貞永攝政家歌合（作者は基家・爲家等二十二人、貞永元年、類從第一九八、判

のために、自詠四十八首（彌陀の本願に准へて）を選び、二十四番の歌合としたもの。梅松の如き題にちなんだ圖も描かれて左右に分けてある。類從第二三○）○定家卿百番自歌合（建保四年撰したものを、後些か改訂し、同七年勅判を申請したもの。續類從第四一三）○定家卿獨吟詩歌（建保五年、和歌六十四

派の建設者として申分ない歌人は他に稀れであらう。その作風は、態度の上より見て、（一）新情趣美本位のもの（有心的）と、（二）古典美特に風雅的觀念美を本位とするもの（染心於古風）と、（三）輕妙洒脫の趣を愛し達吟的のもの（百句五時詠之）とがある。（一）のうち、

いで出生のため、定長は家を出て僧となり、寂蓮と稱した。定家長ずるに及び、父の寵愛を集め、十四歳にして侍從となり、禁裏に出入する身となつたのも、父がその兼官であつた右京大夫を辭し、定家に侍從を申請した爲めであつた。當時、宮中には文人雅客が多かつた。俊成を父としてこの環境に生ひ立つた彼は、他面、地下に於ける賴政や忠度、西行や俊惠などの風藻に動かさるゝことも多かつた。彼は天性多才多能で、恒にその立場を失はず、行くところに自家の世界を拓いたものひとつたやうにも思へる。彼が殊更武家並に武家親善の公家と關係多い事實の如きも一つの懸案となるであらう。榮達を希うて與へられない彼は、「位山麓の雪に埋れて」などと負け嫌ひな反逆性を事毎に示してゐる。併し歌壇の大元老としての父の地位を繼承してゆくものは、當時、彼を措いて他になかつた。正治二年、彼は既に三十九歳であつたが、仙洞の殿上を許され、「院百首」と云ひ、「仙洞十人歌合」と云ひ、すべて重要な歌合に加名する榮譽を得た。その翌年和歌所が再興され、藤原而も貞永元年、新に勅撰集撰進の大命をうけたことは、古稀の齡を越えた彼として、その最後を飾るに足る大任であつた。「新古今集」奏覽に際しての不滿は、玆に充足さるべき絶好の機會を得たのである。文曆元年内々の奏覽のみでその最後の御裁可を受けない前に、後堀河院の崩御に際會し、定家の遺憾やるかたなく、所持の原稿を庭上で燒却したと云ふ「明月記」の記事もその心中を想像するに足るのである。定家は神經痛性の持病があつたやうである。日記中に屢々「心神殊惱」と云ふ類

大概』『秀歌之體大略』『百人一首』の三書を總括した名で、二條派ではこの三書を殊更尙び、註釋書なども色々出されてゐる。附錄として「未來記」と「雨中吟」の二書のついてゐるのが多い。〇定家物語一卷（寫本が圖書寮に傳はつてゐるが、内容は安積沼事、古今興風事、埋木と云ふ類の項目十四種に亙り、「萬葉集」その他を引いて考證解說したもので、自らのことを明靜と書いてゐるのに據れば、出家後、さる機會に講じたものを門下の某が手記しておいたものかと察せられる）〇和歌書樣定家卿相語〇和歌書樣並會之次第（以上の二書は、何れも定家の著として傳へられた寫本であるが、斷片的のものである。なほ定家の著に假託されたものと論ぜられてゐる書の主なるものの名を附しておく。これ等の中に定家の說の混じてゐることは否み難い。その推定される製作時代もすべて中世に屬する。〇桐火桶二卷（寬永板、類從第三〇〇所收）〇三五記二卷（寫の本末とも。承應板、類從第三〇二所收。神宮文庫に永正六年の寫本あり）〇愚祕抄二卷（鵜の本末とも。類從第三〇一に收載された以外、年代不明の古板本あり）〇未來記一卷（慶安板の外、圖書寮に慶長二年の寫本がある）〇雨中吟一卷（同上）〇和歌伊呂波寫本一卷〇古今六義定家注辨寫本一卷（「桐火桶」以下の諸書は二條家としては重視され、中には抄本や解註などの出てゐるものすら存する）。

〔二、判者となつた主なる歌合〕宮河歌合（西行自歌合、文治年間のもの）〇正治仙洞十人歌合（作者は後鳥羽院その他、定家も加はる。正治二年。類從第一九〇）〇建曆仙洞歌合（作者順德院等十二人。建曆三年。類從第一九四、判詞あり）〇建保歌合（作者は順德院等十人。建保二年。秋十五題亂歌合とも。判詞あり）〇建保百番歌合（作者は順德院等十八人。建保四年。類從第一九六、衆議判ともいふ）〇建保五年歌合（作者は順德院初め十六人。類從第一九七、もと衆議判であつたのを、更に定家の判詞を乞うて出來上つたもの）〇寬喜石清水若宮歌合（作者は、定家外家隆・爲家等三十四人、寬喜四年、類從第一九八、判詞あり）〇貞永攝政家歌合（作者は基家・爲家等二十二人、貞永元年、類從第一九八、判詞あり）〇貞永名所月歌合（作者は後堀河院・定家・家隆等二十二人、貞永元年、類從第一九八、判詞あり）〇知家卿廿一番自歌合（日吉社法樂歌合、嘉禎元年、類從第二一八、判詞あり）

〔三、選歌の主なるもの〕新古今和歌集〇新勅撰和歌集〇小倉百人一首（各別項）〇秀歌之體大略寫本二卷（歌學文庫第三に收む。選歌の集、範圍は上古より當時に至る全部に亙り、歌數は百四首。手ごろである爲めに、二條派の範歌集の如く重視され、多種の註釋書が出てゐる）。

〔四、家集、百首、自歌合等〕拾遺愚草（別項）〇定家百首寫本一卷（養和元年の初學百首より貞永元年の關白左大臣家百首に至る五十年間中の百首歌十五ヶ度分を含む）〇正治院百首（後鳥羽院外二十三人がそれ〴〵正治二年百首を作り、合してこれを正治百首と呼んでゐるのであるが、定家もその一人に加へられた。三卷、續類從第三八二）〇建保名所百首（順德院外十二人のものが、百ヶ所の名所を四季・戀・雜に配し、百首として詠出したもの。定家その一人に加はる。類從第一七一。「建保名所三百首」は、その中より院・定家・家隆の詠のみ抄出したもので、寬文十年の板本も出てゐる）〇爲家卿藤河題百首（難題百首とも四文字題百首とも云ふ。定家が内大臣基家のために、特に四文字題の歌を百首輯めたもの。藤河と云ふ名は卷頭の歌詞にちなんで附せられたものであり、寬文七年及び天和三年の板本がある。續類從第三九〇）〇定家卿鷹三百首（類從第三五七に收載、但し作者を定家に假託した說も行はれてゐる）〇定家卿自歌合（序によれば、減罪生善のために、自詠四十八首（彌陀の本願に准へて）を選び、二十四番の歌合としたもの。梅松の如き題にちなんだ圖も描かれて左右に分けてある。類從第二二〇）〇定家卿百番自歌合（建保四年撰したものを、後些か改訂し、同七年勅判を申請したもの。續類從第四一三）〇定家卿獨吟詩歌（建保五年、和歌六十四首詩三十二首を收む。續類從第四二一）。

〔五、歌道以外の編著〕定家小倉問答寫本一卷（鷹の故實に關した書で、定家と爲家との問答を錄したもの）〇定家卿御筆諫口訣一卷（筆道に關した定家の說を錄した書。續類從第九一四）〇次將裝束抄（定家裝束抄、夜鶴裝束抄とも）〇釋奠次第（何れも有職書で、前者は類從第一一七、後者は類從第八九）〇後鳥羽院熊野御幸記一卷（建仁元年十月の記で「明月記」の一部である。類從第三二九）〇明月記（別項）

【作風】「甲子夜話」（六）に、定家の二十歳の時の詠「苔の下に埋れぬ名を殘すともはかなの事や敷島の道」をあげて、和歌は初め一生の志でなかつたことを指摘してゐる。如何にも彼には、父俊成の志を繼ぐがため、或は六條派歌學に對抗するがため、殊更志を曲げて歌人となつた一面がないではない。彼は幼時、「菅笠を着たる男が馬に乘り川の向ふを通るなりけり」と卽詠したほど、天才的だとも讃へられてゐるが、「初學百首」などで臆測される如く、その歌道への進出は、決して早熟的天才的ではない。彼の成功が企畫的組織的である點より見ても、多くは明敏な卓識と眞摯な精進とに俟つてゐた。古來「定家家隆優劣辨」など存するやうに、抒情的純眞とか自然的發想とか云ふ方面から見れば、定家は必ずしも推賞され難い。而も中正を得、雅趣を失はない態度に於て、かれ程師範として、はた二條派の建設者として申分ない歌人は他に稀れであらう。その作風は、態度の上より見て、（一）新情趣美本位のもの（有心的）と、（二）古典美特に風雅的觀念美を本位とするもの（染心於古風）と、（三）輕妙洒脫の趣を愛し達吟的のもの（百句五時詠之）とがある。（一）のうち、（イ）寫實的發想（麗樣・濃樣等）の作に、「霜まよふ空にしをれし雁がねの歸るつばさに春雨ぞふる」「ゆふだちの雲間の日かげ霽れそめて山のこなたをわたる白鷺」などがあり、（ロ）象徵的發想（幽玄樣）の作に、「春の夜の夢のうきはしとだえして嶺に分るゝ横雲の空」「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」などがある。又、（二）の作例には、「時こそあれさらではかゝる句かは櫻も如何に春を待ちけむ」「いかにしていかに知らせんともかくも言はばなべての言のはぞうき」などが擧げられる。なほ又、表現の上より見れば、（一）古語の活用優れ（習詞於先達）、特に韻律的配意の凝らされてあるもの（續け柄）に、「袖に吹け さぞな旅寢の夢もみじ思ふ方よりかよふ浦風」「面かげのひかふる方にかへりみる都の山は月纖くして」などがあり、（二）本歌取、秀句的技巧に於て特に優れたものに、「駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」「とればけぬわくればこぼる枝ながらよしみやぎ野の萩の下露」など、又（三）技巧瑣末にすぎ、却つて意味晦澁の嫌あるものに、「秋風よそよや萩の葉こたふとも忘れぬ心わが身やすめて」の如きがある。以上の諸特色に亙つて最も尊重さるべき點は、氣分の象徵的表現歌である。彼が歌を詠むに際し、衣紋をつくろひ、家の南面を開放し、室の中央に坐して遙かの空を眺めつつ案じたと云ふ

月記和歌部類一卷（定家の漢文體日記「明月記」の中から、歌道に關した主要な部分を抄錄したもの。文治四年より建保四年に亙り、和歌所や和歌御會場の圖なども採られてゐる。一條兼良の抄出と云ふ。（續類從第四七〇）〇歌道事類二卷（兼良の抄錄を源貞憶が更に文化七年增補したもの）〇定家卿長歌短歌說一卷（續類從第四五〇に收載す。貞永元年の述作で、當時、長歌短歌の意義混亂して不明であつたのを考證して原義に返した論書。「長歌短歌之式」とも別名される。古寫本。帝國圖書館藏）〇顯註密勘三卷（別項）〇僻案抄三卷（別項）〇三代集問事一卷（別項）〇三部抄四卷（定家の編著の中、「詠歌

が如き送詩は、よくこの消息を語るものである。象徴歌人としてのみ彼の理念が完全に創造化されてゐるさまを認め得るのである。

【業績】〔歌學者として〕歌學に就いては、貫之が歌論家として秀でてゐた以上に、定家が單なる歌人の域に止まらず、評論史上に一つの體系を建設したと云ふ功績は、特筆すべきである。勿論、その古語尊重に發する規式が黄金律視され、果ては制詞禁句を生み來すに至つたことも事實である。「定家をなみせん輩は冥加もあるべからず」(徴書記物語)とか、「定家の説を離れては頗る傍若無人なり」(童蒙抄)と云ふ類の保守偏見性を子孫後輩に抱かしめるに至つたにつき、多少の責が彼にないとは云へない。しかし、これ等も、芭蕉と蕉風との關係に於けるが如く、寧ろ末流の黨派的心理による勝手の解釋である場合が多く、制禁に就いても、定家自ら「天性病に侵されぬほどの歌になりぬれば何れの病もいたづら事なり」と論じてゐる如く、別に强制的範疇を設けた譯ではない。「その人の詠めらむ歌をよく認めて後に風體を授くべき」と云つてゐるが如きに至つては、始祖としての面目躍如たるものがある。なほその歌は西行の吟詠の如く、個性的の深さには物足らないとしても、象徴的歌風(所謂幽玄體)を劃立した點に功績の歸すべきものがあり、近世に於て反動的復古運動の興つた後と雖も、よく歌壇の一角を占め續け得た魅力は、沒すべからざるものが多い。

〔連歌史に於ける遺績〕「筑波問答」に、近來體の連歌を、家隆・定家時代に起る如く述べてゐるが、定家の功績は特に大きい。等しく歌人にあつても、連歌歌人としての傾向あるもの前者の典型と云つてよい。「菟玖波集」中、同時代の人々の中、定家の句最も多く二十三句に亙つてゐるのは必ずしも偶然でない。一例

むすぶ契りのさきの世も憂し
夕顔の花なき宿の露のまに

彼は若く文治二年(二十五歳)の頃より、連歌の座に列なる經驗をかさねた。文治四年秋には、雞鳴まで連歌に耽つたと云ふ類の記事をも留めてゐる。但し深い興味を感じ初めたのは、後鳥羽院の仰せで、有心無心(別項)の連歌の遊ばれ始めた建永時代からで、建暦・建保にかけ連歌の張行日に增し多く、定家の加はる席も多くなつた。

〔古典書寫並に校勘に於ける業績〕定家の眞蹟は甚だ珍重されてゐるが、彼が所謂能書家でなかつたことは、「海人藻芥」や「甲子夜話」の説を俟つまでもない。しかし正確であることが、校合と云ふ仕事から見て第一の强味と云つてよい。而も速筆でもあつたらしい。この點、青表紙本等と珍重されるのは當然で、諸種の古典につき定本を作つた功績は、歌道の業績に匹敵するといふも過賞ではない。今「明月記」に記された主なる筆寫本の名を列擧すると、「資房卿記」「官廳御即位指圖」「新古今御點取」「狹衣物語和歌」「古今集」「漢書」「伊勢物語」「源氏物語」「大和物語」「部類萬葉集」「和漢朗詠集」「源氏物語和歌」「拾遺集」「千載集」「土佐日記」「更級日記」「みつの濱松」「夜半のねざめ」「小倉百人一首」等、その他、經文の書寫の記事は特に多い。この中には、「土佐日記」の如く、眞蹟の前田侯爵家にその儘保存されてゐる物もあり、特にその奥に「不讀得所々多只任本書也」といふ類の眞摯な態度の現はれた記事あるを見れば、一層敬服せしめられる。その他眞蹟の現傳されてゐるものに「明月記」(一部)「近代秀歌」「西行歌集」(一部分)「更級日記」(御物)等がある。文暦二年四月七日の日記に「今日以中風手書終草子二帖」ともある。

【參考】源平盛衰記○古今著聞集○十訓抄○東野州聞書○戴恩記○本朝通鑑○玉かつま(公卿家傳)○扶桑名書傳○百人一首一夕話○藤原定家歌集(岩波文庫)附錄○大日本史○類聚名物考○甲子夜話○遠碧軒記○北窓瑣談○海人藻芥○卯花園漫錄○理齋隨筆○鹽尻

〔齋藤(清)〕

定家(ていか) 「夫婦物の謠曲」を見よ。

鼎峨(ていが) 黄表紙作者 【姓】米山氏 【別號】文溪堂 【生歿】未詳 【閲歴】江戸の人で筆耕を業とした古い作者である。署名のある作品は安永五年の物が最も古いが、それ以前から創作してゐたらしい。天明四年以後の作は見當らないが、恐らくその頃に歿したであらう。【作品】奥州古戰物語(鳥居清經畫安永五年刊)○浮世風便女敵討(鳥居清滿畫安永五年刊)○萬福長者玉(鳥居清經畫安永五年刊)○後三年松島八景(鳥居清經畫安永五年刊)○三寶利生初竹(鳥居清經畫安永六年刊)○後三年信夫染(鳥居清經畫安永七年刊)○二人義經堀川合戰(鳥居清經畫安永七年刊)○彈的東風俗(鳥居清經畫安永八年刊)○怪談豆人形(鳥居清經畫安永八年刊)○毬唄雉御山(鳥居清經畫安永八年刊)○敵討瞰天狗(鳥居清經畫安永八年刊)○曲輪雀大通先生(鳥居清經畫安永八年刊)○大中黑名香勝凱(鳥居清經畫安永八年刊)○七福人親方(女、秋花作。文溪堂筆添。鳥居清經畫。安永八年刊)○鎌倉山紅葉浮名(鳥居清長畫安永九年版)○十二支鼠桃太郎(北尾三二郎畫安永九年刊)○野暮大臣南郭遊(鳥

【批評】作者はその生活環境から、興味あり、社會に强い印象を與へた事柄を拉し來り、それに過去の作品・傳説等を混じて、一篇を構成する。謠曲なども屢々取り入れてゐる。初期の作品は對手を子供とし、説明もくどいが穩かな物で、「萬福長者玉」の如きは「金々先生榮花夢」(別項)から奪胎してゐるらしい。安永八年頃は、作者として最も脂が乘つて來た時で、市場通笑(別項)について創作の數は第二位である。主に大人を讀者に豫想した作品で、「彈的東風俗」「曲輪雀大通先生」のやうな洒落本に接近した作品を出し、最も變化に富んだ時である。而も洒落本的傾向は、進んで「野暮大臣南郭遊」となり、洒落本「婦美車紫鹿子」の剽竊と非難さるべき作品をも殘してゐる。他方には「鎌倉山紅葉浮名」「十二支鼠桃太郎」の如き子供向の作品もあり、これ等の中に却つて良いものがある。作柄も文章も中位である。對話は巧であるが極めて僅かの作品を除いては、地の文中に區切らずに挿入してあつて、紛らはしい。一般に物語的で洒落がなく、重い感じのする作品である。

〔小池〕

低徊趣味(ていくわいしゅみ) 文學的術語 【解説】夏目漱石が高濱虚子の小説の作風を論ずるに當つて創始した言葉で、當時の文壇を風靡した自然主義作家の趣味と正反對な趣味を意味する。即ち虚子の小説「鷄頭」の漱石の序文に於て、小説を二種に區別して餘裕のある文學と餘裕のない文學とし、その餘裕のある文學の持つものを低徊趣味と名づけ、且つ

先づ一と口に云ふと一事を卽し一物を卽して、獨特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な趣味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも、依々趣味・戀々趣味と云つてもよい。所が此趣味は、名前のあらはす如く出來る丈長く一つ所に佇立する趣味であるから、一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば餘裕がある人でなければ出來ない趣味である。(中略)そこで低徊趣味も、客觀的とか主觀的とか區別すれば色々に

國學考古の道に深く、考證に長じ、往々奇矯の言をなして人を驚かしたが、奇矯中また人を啓發せしむるものがあつた。

【著書】衝口發○好古小錄○好古日錄(各別項)○好古雜錄○古瓦譜○逸號年表等。

〔石村〕

低級感覺(ていきふかんかく) 美學 【解説】視覺・嗅覺・味覺。共に刺戟に對する肉體的反應が著しく將來されるが、對象が情趣的に印象される場合、これ等の官能的要素が美的印象を成立せしめるに役立つ。特に自然の情趣的受用に於て。東洋の詩歌について見れば、嗅覺的要素を拒否し得ない場合が多い。(二)嗅覺・味覺

書狀では出陣に關する手配りと武具名とを擧げて戰陣關係のことを説き、九月・十月の所で佛事僧官のことを叙し、十一月には病氣と醫藥、十二月には地方行政の狀態について述べてゐる。指導階級の地位に立つ當年の上流武士が、心得て置かねばならなかつた一通りの

味を指すのである。だから低徊趣味と云はないでも、依々趣味・戀々趣味と云つてもよい。所が此趣味は、名前のあらはす如く出來る丈長く一つ所に佇立する趣味であるから、一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば餘裕がある人でなければ出來ない趣味である。（中略）そこで低徊趣味も、客觀的とか主觀的とか區別すれば色々になるが、虚子の小說には此餘裕から生ずる低徊趣味が多いかと思ふ。

とある。この趣味は實は虚子に限らずホトトギス一派の人々の作風に共通するものでもあつたので、漱石は虚子に就いて語ると共に、又自らに就いて語つたものでもあつた。故に世間からは虚子及び漱石初め、兩人に關係を持つホトトギス關係の小說作家の作風として認め、これを餘裕派又は俳諧派と稱した。〔志田〕

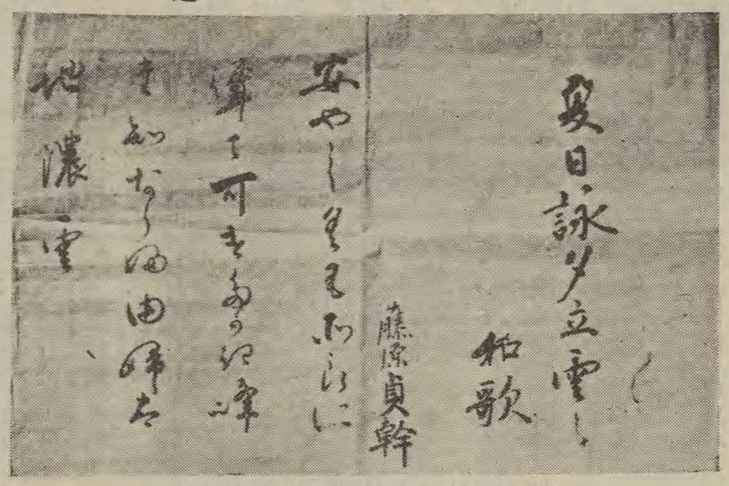
定家假名遣（ていかかなづかひ）「假名遣」を見よ。

定家卿消息（ていかきやうせうそく）「毎月抄」を見よ。

定家卿和歌式（ていかきやうわかしき）「近代秀歌」を見よ。

定家流（ていかりう）「書道」を見よ。

貞幹（ていかん）國學者【姓名】藤氏、本姓藤原。藤井と稱するは誤。通稱は叔藏、字は子冬【號】無佛齋・好古【生歿】享保七年京都佛光寺中の久遠院に生れ、寛政元年（一七四九）八月十九日歿す。享年六十八【墓所】京都眞如堂【閲歴】壯年放蕩三昧をなし、後、寺を出て遍歴して世を送つた。



藤貞幹懷紙（黑川慶之助氏藏）

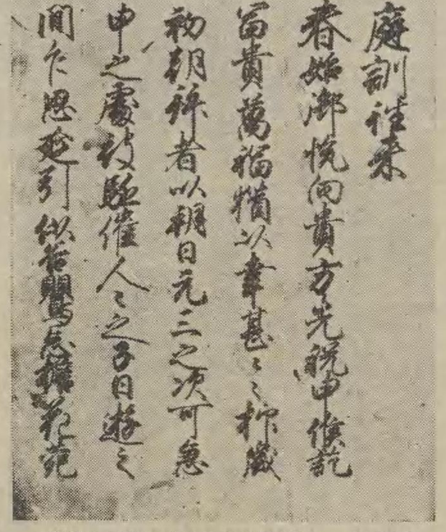
國學考古の道に深く、考證に長じ、往々奇矯の言をなして人を驚かしたが、奇矯中また人を啓發せしむるものがあつた。

【著書】衝口發○好古小錄○好古日錄、各別項）○好古雜錄○古瓦譜○逸號年表等。〔石村〕

低級感覺（ていきかんかく）美學【解說】視覺・聽覺を高級とするに對し、觸覺・嗅覺・味覺・運動感覺等を低級と稱して一般に美的意義を拒まれ易い傾きがあるが、藝術美との關係に於てはなほ考慮すべき點がある。その主なるものについて見れば

（一）觸覺。皮膚面が外物と觸れることから生ずる感覺を總稱するが、外物の粗滑硬軟等の物質性の感覺に關する限りは、その外物との順應分化の程度に於て視聽覺に劣る。しかし空間的形體を知覺する際に視覺と融合してより精確な空間知覺を可能ならしめるのみでなく、獨立に物質性を知覺せしめるから、この感覺の再現的要素は空間藝術の理解をより具體的ならしめるといふ點で美的意義があたへられる。特に彫塑の本質理解に就いて著しい。觸覺が異常に發達し、順應作用の分化が著しく高まり、且つ純化するならば、この官能の美的意義は益々加へられることとなる。（二）嗅覺・味覺。共に刺戟に對する肉體的反應が著しく將來されるが、對象が情趣的に印象される場合、これ等の官能的要素が美的印象を成立せしめるに役立つ。特に自然の情趣的受用に於て。東洋の詩歌について見れば、嗅覺的要素を拒否し得ない場合が多い。（三）運動感覺。視覺的順應に伴うて吾々の身體の運動がそれに順應して起る。このことは聽覺に就いて著しいが、要するに律動的感覺が美的形式を知覺する場合の要素となつてゐることの多いのは明かである。〔村田〕

庭訓往來（ていきんわうらい）往來物　一卷【作者・成立】古くから僧玄惠の作と傳へられてゐる（山鹿素行の語類、寛永八年板庭訓往來の序など）。併し記載の內容が玄惠歿後の事に及び、足利義滿の驕奢を語るところがあるので、この說は成立し難い。永井如瓶は、その義滿將軍以後のものなることを主張し（元祿十五年版庭訓往來諺解大成）、近年に至つては四代義持の頃のものとする說や、八代義政の頃とする說なども出た。要するに足利時代前期の作と見てよからう。【內容】進狀・返狀の一對づつを一ケ年の各月に配し、その上に閏八月の進狀一篇を添へ、凡て二十五通から成つてゐる。その記載內容は上流武家の階級を標準とする社會生活上の雜事である。一月と二月との書狀で、射御のことから詩歌連俳に至るまでの遊藝上の敎養について述べ、三・四月の書狀で農工商に關する知識を集め、五月と七月との所で家財諸器具、諸料理のことから衣服調度の名を揭げて衣食住に關する一通りの文字を集め、六月の書狀では出陣に關する手配りと武具名とを擧げて戰陣關係のことを說き、九月・十月の所で佛事僧官のことを叙し、十一月には病氣と醫藥、十二月には地方行政の狀態について述べてゐる。指導階級の地位に立つ當年の上流武士が、心得て置かねばならなかつた一通りの知識が網羅されてゐる。【解說】この書は往來物發達史上に高き地位を占めるものであるが、それは、その記載內容よりも寧ろ文體の上から來てゐる。以前の往來物に於て全く統一のない雜多な形式をとつてゐた文體が、庭訓往來によつて初めて統一の傾向を生じた。正月狀だけについても、鎌倉時代までの古往來には、書き出しについて一定の型なく、「三春迎ノ節、一天多ノ樂」「韶光報後、善色多端」「年光云改、春景漸閑」など、思ひのまゝに書き出してゐる。强ひて言へば、新春の長閑さに自他共に陶醉するの喜びを叙して、特に相手方を祝福するの風なき點が一致してゐる。室町に入つて、正月狀の冒頭言は統一の曙光を洩らし始めた。庭訓往來の出現が、古往來の混沌たる樣式を纏めて、統一した鑄型を示したのである。書き出しに於ても、「春始御悅、向」



天正十一年寫庭訓往來（橋本進吉氏藏）

貴方「先祝申候畢。富貴萬福猶以幸甚々々」とか、「祝言於二于今一雖二事舊候一、猶以珍重々々。慶賀追レ日重疊、家門迎レ年繁昌、自他不レ可レ有二際限一」とか、相手方の祝福に心を籠めた書き方は、庭訓往來を以て初めとし、それ以後の往來には、多少の變形を以て常に襲用せられ、自ら一種の型となつたものである。かくて庭訓往來を基點として往來文體の劃一的傾向が發展したのである。而して本書の流布は室町前期から江戸末期に至る四百年間に亙つてゐる。「下學集」の序（文安元年）にも往來物の代表として掲げられ、朝鮮の「經國大典」（我が文明元年成）にも、初步教科書の一として數へられてゐる。天文年間の書寫本が幾通りも現存してゐる事は、室町後期に於けるこの書の流布を語るものであるが、天正八年には、早くも手習手本として出板せられた。江戸時代に入ると慶長九年板、寛永五年板などを先驅として續々刊行せられ、異板實に百數十種に及んだ。以てこの書の流布の如何に大であつたかを知ることが出來よう。

【註釋書】所說の系統に從つて分類して擧げる。（一）庭訓往來鈔 著者未詳（寫）（漢文で註したもの、室町中期以前の著作であらう）○庭訓往來諺解大成 永井如瓶子（元祿十五年刊。「庭訓往來諸抄大成」とも云ふ。主として前者に據つてゐる）○庭訓往來諸抄大成扶翼 伊勢貞丈（寫）（諺解大成に更に註を加へたもの）○庭訓往來證註大成 永井如瓶子著・山崎美成補（諺解大成と殆ど同一。體裁を多少變へてゐる）○庭訓往來諸抄大成 松井簡治校訂（明治三十六年刊、諺解大成と扶翼とを一つに收めて覆刻したもの）。（二）庭訓往來註 著者未詳（寛永八年刊、片假名交り。本書には諸本が多い。貞享五年刊本は本文なく註のみである）○庭訓往來鈔 著者未詳（承應二年刊、平假名交り。多少體裁を異にするのみで、內容は前の「庭訓往來註」と同一）。（三）前記二系統の註釋に據つて作られたと思はれるもの○庭訓往來捷註 平丘（寛政十二年刊）○庭訓往來具註鈔 蔀關牛（天保五年刊）○庭訓往來精註鈔 黑田子謹（天保十四年刊、具註鈔と殆ど同一）○庭訓往來諺解 山崎美成（嘉永五年刊、同上）○頭書講釋庭訓往來 高井蘭山（刊本）（四）理解を助けるために、本文のほかに繪を加へたもの。（一）及び（二）の類にも註の外に、上欄に繪を挿んだものがある）○繪人庭訓往來 著者未詳（貞享五年刊、庭訓往來圖讃とも云ふ。この類の最初のもの）○庭訓往來圖抄 著者未詳（數田板）○字注繪入庭訓往來 下河邊拾水（明和九年刊）。この外に、繪抄・繪抄解など名付けられたものも甚だ多いが、大體に於て上記の書を襲つたものである。なほ註釋書ではないが、北齋の畫いた「繪本庭訓往來」がある。

【參考】中世に於ける社寺と社會との關係 平泉澄 ○消息科往來物より見たる教科書觀念の發達 石川謙（教育思潮研究三ノ二）

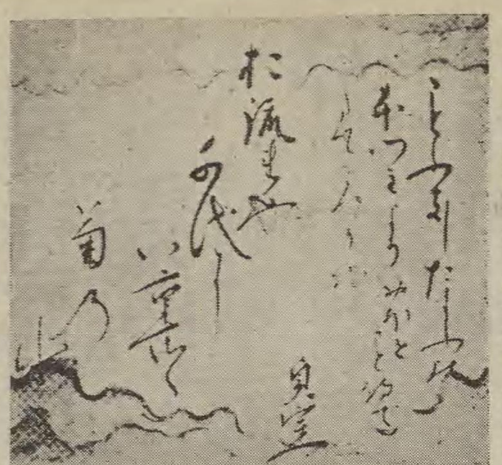
【石川（謙）・岩淵】

帝國文學（ていこくぶんがく） 雜誌 【刊行】明治二十八年一月創刊、連綿として二十餘年の歷史を築いたが、大正六・七年の交、蘇武綠郎の編輯時代に及んで、蘇武の不德義問題から本誌も何時か有耶無耶に廢刊して了つた。【解說】帝大文科關係の機關誌である。帝國文學會の發起人は、文學博士井上哲次郎、文學士上田萬年・三上參次・高津鍬三郎・芳賀矢一、文科大學學生鹽井正男・高山林次郎・姉崎正治・島文次郎・岡田正美・內海弘藏・上田敏の十二名で、編輯委員は何れも文科大學々生の鹽井正男・狩野直喜・高山林次郎・島文次郎・岡田正美・內海弘藏・上田敏の七人から成り、會員は當時の文科大學關係の教職員、學生の殆ど總てを網羅してゐた。會則の第十六條には、「雜誌に掲載すべき事項を定限すること左の如し」として、論說（文學・語學・美學上の議論、古今文學者の評論、古今詩歌・文章・小說・戲曲の評論等）・詞藻（詩歌・文章・小說等）・雜錄（內外文學論の敍述・飜譯等）・文學史料（本邦文學者の傳記・逸話、文學史上の考證、古書の解題）・雜報（內外文學上の彙報、並に新著の批評）の順序を以て編輯發表してゐた。本誌が內容的に文壇との最も交涉の在つたのは、高山樗牛の編輯時代であつたが、樗牛は間もなく「太陽」（別項）に去つた。土井晚翠の新體詩、夏目漱石の「倫敦塔」その他の作品も本誌上を飾つた一部であつた。

帝國文學（創刊號）

貞室（ていしつ） 俳人 【姓名】安原氏。名は正章（まさあきら）。通稱鎰屋彥左衞門 【號】一囊子・一囊軒・貞室（剃髮後の號）・腐誹子（この號を重賴（しげより）の號とするものあるは誤である。「貞德終焉記」「氷室守」その他によつて貞室の號であることは確かである）。【墓所】京都上鳥羽實相寺。墓面には一囊軒貞室。【生歿】慶長十五年生れ、延寶元年（一六七三）二月七日歿（「御傘抄」に據る「花見車」に寛文十一年、「誹諧家譜」に延寶二年とするは共に誤であらう）。享年六十四（「辭世」）今までは目見えせねども主人公八八といひし年もあきけり 【師傳】松永貞德門 【閱歷】京都の人で、紙商であつた（副紗物序）。貞室の家は彼の幼時から貞德と知合ひで、彼は十六歲の時から貞德に就いて學び、十九歲から俳諧を始めた。その門人としては若輩の方であつたにも拘らず、その俳才を認められてか貞德に愛せられ、これ等の關係から故參の同門から忌まれる傾きがあつた。寛永十九年二月二十日、貞室が母妙喜禪尼の二十五回忌に當るので追善の獨吟百韻を賦し、これに自註を施して出版したのが「俳諧之註」（別項）であり、豫て不和の間柄であつた重賴（しげより）（別項）が、これを傲慢であるとして非難書を出版し、貞室亦その返答書を出版して反駁した（この二書は現存しないやうであるが、重賴の非難書は或は後に引く「獨言」であるかも知れぬ）。これが俳諧史上に於ける論戰の嚆矢である。然るに重賴が正保二年二月、「毛吹草」（別項）を出版するや、當時貞室の門人であつた大和郡山の池田正式（まさのり）が、重賴が同書に句を採るに約に違ふ所があつたので、翌三年春、「郡山」を出版して同書を非難し、貞室亦直にこれに續いて「氷室守」を出版して同書を難じた。これは貞室が重賴の前の非難に含む所があつて、正式と共同作戰に出でたものらしい。又貞室は貞德に判詞を乞うた「正章千句（まさあきら）」（別項）を慶安元年に出版したが、貞德歿後の寛文三年八月に至つて、同門の故參の一人椋梨一雪が、「誹諧茶杓竹」を出版してこれを非難し、貞室の方は門人貞恕（別項）の名で、翌四年六月「蠅打」を出版して反駁した。慶安四年八月、貞德は貞室に點業を許し、その翌々年に歿したのであるが、貞室はその翌年の歲旦三ツ物で、これを俳統相續者とされたものの如く吹聽してゐるけれども、「馬鹿集追加」（明暦二年刊）に引く「獨言」にも、これを「誠にゆるされもなきを僞て申せへは（奧の細道）、俳歷に合はないので何か誤りがあるらしい。或る年の秋、女院から召された時、探幽筆の曙の山水の畫を拜領し來り、忝さの餘り「曙の叡慮しづけし秋の山」を發句に獨吟百韻を賦したが、この事實及び發句共に後世に喧傳されてゐる。狂歌をも詠み、又平紀行中屢々彼に關心すると共に「これは〳〵」の句を推重し「曠野」に「これは〳〵」の句外三句採られ、其角・去來・許六・支考いづれも先達視し、「正風論」の如きは、貞門中「貞室一人正風體を探り當てて、姿情の二つに心付けるにや」と云ひ、「古選」も亦ほぼ同樣の見解に立つて行く。熊谷に行つてゐる源次からの葉書が來る。お鉢を質から出し、酒と油揚を買つてお絲は戻つて來るが、久し振りに二人で酒を飲み合ひながら、お絲は三・四月家をあけて一文も送金しない亭主の惡口を始める。三吉も戲談半分に、ぢやあおれとでも一緒になるか

して反駁した。慶安四年八月、貞德は貞室に點業を許し、その翌々年に歿したのであるが、貞室はその翌年の歳旦三ツ物で、これを俳統相續者とされたものの如く吹聽してゐるけれども、「馬鹿集追加」（明暦二年刊）に引く「獨言」にも、これを「誠にゆるされもなきを僞て申せし事なれば」と云つてゐるが如く、貞室の虚構らしく、又貞德が花の本（別項）を許され、貞室がその二世を繼いだ如く傳へられるが、二人共に花の本となつた確證がない。貞室は慶安三年に、幼時から貞德に學び得た所によつて、



貞室筆蹟（黄檜所藏）

一子元次の片言を矯正する意味で「かた言」を著し、貞德の歿時には終焉記を記し、貞德歿後その遺書「玉海集」（別項）を追補出版した。屢々旅行し、一とせ吉野に遊んでの吟「これはこれはとばかり花のよしの山」は、後世に喧稱され、東に下つては所々に吟詠があり、隅田川では「いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥」の吟を遺し、又須磨に遊んでは、行平の月見の松で「松にすめ月も三五夜中納言」の吟があつた。但し若輩の昔、加賀山中溫泉に下り、風雅に辱しめられて、歸洛後貞德の門に入つたとの傳へは（奥の細道）、俳歴に合はないので何か誤りがあるらしい。或る年の秋、女院から召された時、探幽筆の曙の山水の畫を拜領し來り、忝さの餘り「曙の叡慮しづけし秋の山」を發句に獨吟百韻を賦したが、この事實及び發句共に後世に喧傳されてゐる。狂歌をも詠み、又平家琵琶はその好む所であつた。晩年その筆蹟を燒き捨てたとも傳へられる。【著作】俳諧之註（別項）（註記に「俳諧百韻之抄」。別名「百韻自註」）○氷室守四册（正保三年刊）○正章千句（別項）○かた言五册（慶安三年刊）○貞德終焉記一册（承應二年成）○玉海集（別項）○同追加（別項）○附合大全（池田是誰の「玉くしゆ」に見える）○五條百句一册（寛文三年刊、貞室の著と傳へるが不詳）。

【人物・作風】「貞德永代記」に「生れ付一物有て、諸道に器量風流を好めり。文才も達者にて、古事來歴をよく覺て、誹諧一方ノ大將といはれし」と云つてゐるが、一種の才物であつたらしく、早くから貞德に學んだので、學識も博かつたことは、その作や、特に「かた言」によつて窺はれる。「かた言」の如きは方言訛音の研究書として嚆矢と云ふべきものであらう。併し又故蓼の同門と合はず、重頼との間に前述の論爭の外、揶揄の句の應答された事實も傳へられ（貞德永代記）、貞德の歿した翌年の歳旦に三ツ物を出して憚らず、而もそれは俳統相續者となつたと虚構するためのものであつたらしく、もと門人であつた季吟（別項）と後に不和となつた點などから見て、不遜又不信の性癖もあつたかに思はれる。文學的素質は優れてゐたらしく、その作は、貞門中でも出色のもので、蕉風に近い一面さへある。それ故蕉風では頗る重んぜられ、芭蕉がその紀行中屢々彼に關心すると共に「これは〳〵」の句を推重し「曠野」に「これは〳〵」の句外三句採られ、其角・去來・許六・支考いづれも先達視し、「正風論」の如きは、貞門中「貞室一人正風體を探り當てて、姿情の二つに心付けるにや」と云ひ、「古選」も亦ほぼ同樣の見解に立つなど、依然高く評價されてゐる。〔志田〕

【參考】貞德永代記中島隨流○句兄弟寶井其角○類柑子同上○花實集向井去來○歴代滑稽傳森川許六○俳諧十論各務支考○滑稽太平記北藤浮生○綾錦菊岡沾涼○正風論加藤原松○俳諧家譜早川丈石○靱隨筆岡田米仲○俳諧古選三宅嘯山○俳諧水滸傳空阿○俳諧袋大伴大江丸○俳家奇人談竹内玄々一○誹家大系圖生川春明○俳人百家撰水谷川柳○俳林小傳中村光久○聽蛙亭雜筆水落京二編○俳諧論戰史潤原退藏（國語國文の研究昭和四ノ八・一〇・一一）○花の本と貞室及び宮廷膳峰晋風（黄檜昭和六ノ一〇）○馬鹿集藤井紫影（蠶葵昭和七ノ七・八）

亭主（ていしゅ）　脚本　一幕

【作者】小山内薫

【發表】大正十四年五月「新小説」臨時增刊「天才泉鏡花」號。【刊行】小山内薫全集第三卷・日本戯曲全集第四十卷に所收【初演】大正十四年九月、新橋演舞場。

〔役割〕三吉（尾上菊五郎）、源次（坂東彦三郎）、源次の女房お絲（尾上多智之丞）等。

【梗概】舞臺は震災後の吉原附近のバラック、初夏の夕暮から夜。三四疊ほどの狹い小屋に汚い薄緣が二枚だけ敷いてある。お絲がマニラ麻をつないでゐる傍で娘のお君が算術の復習をしてゐたが、電燈が點ると共に辻占賣に出かける。同居人の自由勞働者三吉が、今日の稼ぎを持つて歸つて來て屋根代と賄料と一合の酒代を渡すので、お絲はすぐ用達しに出て行く。熊谷に行つてゐる源次からの葉書が來る。お鉢を質から出し、酒と油揚を買つてお絲は戻つて來るが、久し振りに二人で酒を飲み合ひながら、お絲は三・四月家をあけて一文も送金しない亭主の惡口を始める。三吉も戯談半分に、ぢやあおれとでも一緒になるかと云つたが、だがそれはおれの方でお斷りだと笑ふ。そこへ、仕事にあぶれた源次が突然歸つて來て、いきなり二人の間の膳を蹴返して、ふざけた眞似をするなと怒鳴り出す。三吉が抗辯して組打ちになると、お絲は三吉に加勢して源次をなぐつた擧句、たうとう源次を表へ引きずり出して了ふ。その後で、改めて三吉に亭主になつてくれと云ふと、三吉は俺だつて何時仕事がなくなるかわからないからいやだと斷る。これから源次を追つかけて明日區役所の仕事に一緒に連れて行つてやらうと荷物を纏めて行きかける。お絲が男つて變なものだねえといふのに、變なものだよと答へて出て行つて了ふ。お絲が暫くぼんやり考へこんでゐるところへお君が歸つて來て飯を食ひ初める。その樣子を見てゐるうちにお絲は次第に頼りなさに襲はれて、遂にわつと泣き出す。

【批評】夫婦といふ關係に唯物史觀的な鋭いメスを入れた戯曲である。而も概念に墮することがないと同時に、徒らな感傷をも交へず、寫實的な手法と簡潔な臺詞とでぐい〳〵生活の底を抉つて見せてゐる。震災後のバラック生活を捉へて來て、夫婦間の經濟關係を端的に描いて強い感銘を與へてゐる。彼の遺作中屈指の佳作に數へらるべき作である。〔水木〕

程朱學派（ていしゅがくは）　「漢學」を見よ。

貞恕（ていじょ）　俳人　【姓名】犬井（乾とも）重

もの、室町中期以前の著作であらう）○庭訓往來諺解大成　永井如瓶子（元祿十五年刊。「庭訓往來諸抄大成」とも云ふ。主として前者に據つてゐる）○庭訓往來諸抄大成扶翼　伊勢貞丈（寫）（諺解大成に更に註を加へたもの）○庭訓往來證註大成　永井如瓶子著・山崎美成補（諺解大成と殆ど同一。體裁を多少變へてゐる）○庭訓往來諸抄大成　松井簡治校訂（明治三十六年刊、諺解大成と扶翼とを一つに收めて覆刻したもの）。（二）庭訓往來註　著者未詳（寛永八年刊、片假名交り。本書には諸本が多い。貞享五年刊本は本文なく註のみである）○庭訓往來鈔　著

を築いたが、大正六・七年の交、蘇武綠郎の編輯時代に及んで、蘇武の不德義問題から本誌も何時か有耶無耶に廢刊して了つた。【解説】帝大文科關係の機關誌である。帝國文學會の發起人は、文學博士井上哲次郎、文學士上田萬年・三上參次・高津鍬三郎・芳賀矢一、文科大學學生鹽井正男・高山林次郎・姉崎正治・島文次郎・岡田正美・内海弘藏・上田敏の十二名で、編輯委員は何れも文科大學々生の鹽井正男・狩野直喜・高山林次郎・島文次郎・岡田正美・内海弘藏・上田敏の七人から成り、會員は當時の夏目漱石の「倫敦塔」その他の作品も本誌上を飾つた一部であつた。〔齋藤（昌）〕

貞室（ていしつ）　俳人　【姓名】安原氏。名は正章（まさあきら）。通稱鎰屋彦左衞門　【號】一囊子・一囊軒・貞室（剃髪後の號）・腐誹子（この號を重頼（しげより）の號とするものあるは誤である。「貞德終焉記」「氷室守」その他によつて貞室の號であることは確かである）。【墓所】京都上鳥羽實相寺。墓面には一囊軒貞室。【生歿】慶長十五年生れ、延寶元年（一六七三）二月七日歿（「御傘抄」に據る。「花見車」に寛文十一年、「誹諧家譜」に延寶二年とするは共に誤であらう）。正式が、重頼が同書に句を採るに約に違ふ所があつたので、翌三年春、「郡山」を出版して同書を非難し、貞室亦直にこれに續いて「氷室守」を出版して同書を難じた。これは貞室が重頼の前の非難に含む所があつて、正式と共同作戰に出でたものらしい。又貞室は貞德に判詞を乞うた「正章千句」（別項）を慶安元年に出版したが、貞德歿後の寛文三年八月に至つて、同門の故蓼の一人椋梨一雪が、「誹諧茶杓竹」を出版してこれを非難し、貞室の方は門人貞恕（別項）の名で、翌四年六月「蠅打」を出版

次。通稱二郎兵衛（寬山集）【號】一嚢軒・貞恕（剃髪後）【生歿】元和六年生れ、元祿十五年（二三六二）三月四日歿（「誹諧家譜」に寶永二年とあれど、「誹家大系圖」に元祿十五年と正してゐるのに從ふ）。享年八十三（「誹諧家譜」以來七十歳とするものあれど「貞德永代記」に「七十の老俳」とあり、貞恕自身の書簡に「八十に候故」とあるものがあるから、元祿十五年の「花見車」の說に從ふ）。【墓所】京都上鳥羽實相寺、墓面に一嚢軒貞恕居士【師傳】安原貞室門【閱歷】京都東洞院通四條上ル町に住した（誹諧京羽二重）。もと越前敦賀の人であるが（玉海集）、明曆二年以後、近江大津に寓居し、寛文三年椋梨一雪が「誹諧茶杓竹」を出版して貞室の「正章千句」を非難するや、翌年「蠅打」を出版してこれを反駁した。大凡その頃、「いまだ遠くはのびじ落人」といふ前句に「道ばたにいきりこそたて馬の糞」といふ句を附けたので、大津の馬の糞といふ異名を取るに至つた。しかし貞室の門人中では勝れた方であつたので、その俳統相續者とされた（貞德永代記）。これを貞德・貞室に繼いで、花の本三世を嗣いだ如く傳へるが、花の本を允された事實が貞德になく、從つて花の本繼承とする事は誤傳らしい。貞恕は學識も相當にあつて俳書の外に「謠曲拾葉抄」を著作した。完成に至らず、死に臨んで門人忍鎧に遺囑し、忍鎧によつて完成されたけれども、その如何に努力したかは、同抄の凡例及び木畑定直宛書簡（江戸文學叢說）によつて窺はれる。【著作】蠅打五册（寛文四年刊）○阿太知千句一册○新玉海集七册（延寶七年刊）○謠曲拾葉抄二十卷（寛保元年成）。

【作風】「貞德永代記」に、「誹諧京羽二重」に擧げられた「水草にいきた花とぶ螢かな」の句を評して、「古風の石部金吉也。それ故一句はよくきこへたり。然れども生た花とぶの誹諧わかわかしく位なし。いはば老て二度兒に成たるがごとし」と云つてゐる。頴原退藏氏紹介の同時頃の書簡で見ても、この評は大體當つてゐる。「花見車」に擧げてゐる代表句も、「にくからぬ人の正月こと葉哉」といふ句である。才分に於て師貞室に劣り、蕉風の全盛期を過ぎながら遂に古風を脫しなかつた人らしい。

【參考】貞德永代記 中島隨流○歷代滑稽傳 森川許六○誹諧家譜 早川丈石○續俳家奇人談 竹内玄々一○誹家大系圖 生川春明○俳人百家撰 水谷川柳○俳林小傳 中村光久○江戸文學叢說 藤井乙男○貞直と貞恕 頴原退藏（唐辛子昭和六ノ二）

【志田】

庭鐘（ていしよう）「近路行者」を見よ。

貞丈（ていじよう）「さだたけ」を見よ。

貞丈雜記（ていじやうざつき）

有職故實　十六卷三十二册【著者】伊勢貞丈【刊行】天保十四年【成立・由來】寶曆十三年正月十一日より書き起し、その死に至るまで二十二年間書き續けたもので、爾來草稿のまゝ保存され、時に門人間に傳寫される位のことに過ぎなかつたが、歿後六十年を經て、岡田光大（みつひろ）が千賀春城よりこの書を傳へ、貞丈の玄孫貞友の許可を得て貞丈親寫本と校合し、天保十四年伊勢貞友、門人千賀春城・岡田光大の三人が、同校として刊行した。同年六月の貞友の序及び光大の序がよくその間の事情を盡してゐる。その光大の序の中に引いてある貞丈の奥書に、「此雜記は子孫が家傳の古書を見る便にもなれかし、又人に故實問はれたらん時に返答のたすけにもなれかしと書あつめ置なり」とあつて、この雜記を書き續けた一つの目的がこゝにあつたことを知ることが出來る。【諸本】天保十四年板の外に弘化三年板があるが、版式その他全然同じものである。故實叢書所收。

【內容】本書は、武家故實を明かにする事を主目的として一般の有職故實に關する事を網羅し、部類を分つて記したもので、

〔卷一〕禮法之部・祝儀之部。〔卷二〕人品之部・人物之部・人名之部。〔卷三〕小袖之部・烏帽子之部。〔卷四〕役名之部・官位之部。〔卷五〕裝束之部。〔卷六〕飯食之部。〔卷七〕膳部之部・酒盃之部・輿之部。〔卷八〕調度之部。〔卷九〕書札之部・進物之部。〔卷十〕弓矢之部。〔卷十一〕武具之部。〔卷十二〕刀劒之部・武藝之部。〔卷十三〕馬之部・馬具之部。〔卷十四〕家作之部・座敷飾之部・紙類之部・皮類之部。〔卷十五〕鳥目之部・鷹之部・物數之部・言語之部。〔卷十六〕神佛之部・諸結之部・凶事之部・雜事之部・書籍之部。

以上通計十六卷三十六部二千三百五十項から成り、一々考證解說を爲し、時には圖解をも施してある。岡田光大の序に引いてある貞丈の奥書の中に、「所々に頭書を加へたるはあとより追々に書入し也。子孫もし淸書しうつし改めば、頭書をも本文の中にかき入るべし」又、「一事を所々に記置く事多し。其類をよせあつめて、一所にかきつらぬべし」とあるが、光大の序の中には、「一事を所々に記され、又は種々に書入どもありて見るに便ならず。故に部類をあつめ、少しく補正をもくはへて書改ぬ。頭書に至りては悉く本文に直し入ることあたはず。いかにとなれば追考の說なる故、其まゝ頭書にあるかた解し安きが故なり」とあつて、現在の雜記は貞丈生前の志のまゝでもなく、又遺稿のまゝでもなく、多少の改削を加へなどして校訂者岡田光大の意志がかなり多く加はつてゐる。卽ち小袖之部赤鳥の條には榊原長俊の赤鳥考を、武具之部鞆の條には貞丈の鞆考を拔萃補入し、裝束之部行縢の條には犬追物圖說の圖を挿入し、馬具之部五六掛鐙の條では、この雜記に載せてある考は貞丈がまだ正說を得なかつた以前の推量說であるからとて、これを削つて、貞丈著「五六掛鐙考」の全文を揭げ、弓矢之部蟇目の條では、その圖が縮圖で解し難いからとて更に二圖を挿入し、武具之部母衣の條では、貞丈の家に傳はつた保侶の制を書いたものを引いたりして、中にも武具之部いか物作りの太刀の條などでは、頭書に貞丈の說を否定して自說を述べさへもし、馬之部では庭乘之事、四本懸りの乘り樣の事の二項を挿入してゐる。尤もこれ等の條々には、「光大曰」「光大補入」とあり、又その旨が特別に記してある。又貞丈の祖先が代々室町幕府に仕へて殿中の禮儀作法を掌つてゐたので、假令その家の記錄が應仁以降の戰亂に多く失はれたとしても、なほその後の記錄を傳へてゐたので、この雜記に載する所は、主として貞丈の家の流である伊勢流の禮法を祖述したものだといつても差支あるまい。【價値】貞丈の考說は、その數夥しい上にその取扱つた範圍が廣く、その記述も多端で自ら重複出入して、これが一般を知るのは困難であるが、本書はこれ等考說の大要を網羅し分類し系統を立てて、貞丈の學說を窺ふには最も便利で且つ十分なものがある。その專門とする武家故實に關するものは勿論、その他有職故實に關する一般的知識に於ても一應は皆記されてあつて、單に初學者に益あるばかりでなく、更に深く進まうとする人にも、頗る暗示的な點があり、苟も有職故實に就いて考へる人は、必ず先づ第一にこの書を繙いて見るの要がある程のものである。【史的地位】有職故實を說く書が、そのいづれも官職とか甲冑とか、多くその一局部に止まつてゐた際に、一切を網羅し部類を立てて斯學の範圍を指示したといふ點に於て、この書は前後兩代に明白に一線を劃したもので、後人が一般にこの書を權威として、有職故實の疑義を江戸開府以來の、武士・文人の嘉言善行や奇事異聞、さては見聞談等、その他何くれとなく書き集めた興味本位の漫錄である。中には怪談鬼話も交つてゐる。佐竹永海筆の挿繪が興を添へてゐる。嘉永三年關弘道（雪江）の序がある。

【和田】

の改姓はそれに關聯するものらしく、又政重の姉妹の誰かが下冷泉爲豐の妻であるので、爲豐の子の爲純と永種とは從昆弟に當り、久秀の松永家及び下冷泉家（爲純の子は惺窩である）と貞德の松永家とはかゝる關係を持つてゐる。【學統】貞德自身その「戴恩記」に「師の作者・俳人でもあつたのである。家は、父の永種以來、三條衣の棚に住んでゐたが、正保三年（貞德七十六歳）五條稻荷町の花咲の宿へ移つた。彼が衣の棚の家で「徒然草」を講じてゐた時、その聽講者の一人の或る富豪が謝禮として花咲の地を提供したと云ふが、この地に稻

位】有職故實を說く書が、そのいづれも官職とか甲冑とか、多くその一局部に止まつてゐた際に、一切を網羅し部類を立てて斯學の範圍を指示したといふ點に於て、この書は前後兩代に明白に一線を劃したもので、後人が一般にこの書を權威として、有職故實の疑義をこれに依つて定めんとするのも理由のあることである。

【參考】貞丈雜記辨齋藤彥麿（故實叢書貞丈雜記後附）　〔石村〕

貞信公記（ていしんこうき）　日記　十一册　【著者】藤原忠平（貞信公）　【諸本】原本は九條家に所藏せられ、これを謄寫した修史局本、又內閣文庫本がある。續々群書類從（第五）本は、內閣本を底本として、修史局本で校訂したものである。【解說】本記は殘闕で、今なほ存するものは、卷一延喜七年から十年まで、卷二延喜十一年から十四年まで、卷三延喜十八年から二十年まで、卷四延長二・三年、卷五延長四・五年、卷六延長九年から承平二年まで、卷七承平八年、卷八天慶二・三年、卷九天慶八年、卷十天慶九年、卷十一天慶十年・天曆二年の日錄で、前後凡そ二十四年に亙つてゐる。唯その記事が簡單な上に、文字の誤脫も多いので、頗る讀み難いが、他書に載せてない記事があるので重んぜられてゐる。星野恒博士は、「扶桑略記」「日本紀略」等は、皆この書を以て藍本としたもので、「略記」の方は直に原文を引用してゐるので誤がなく、「紀略」の方はやゝ修飾が加へてあるために、却つて錯誤に陷つてゐる所がある事を指摘されてゐる。　〔石村〕

【參考】歷世記錄考星野恒（史學叢說第一集）

提醒紀談（ていせいきだん）　隨筆　五卷　【著者】山崎美成　【刊行】嘉永三年　【解說】主として江戸開府以來の、武士・文人の嘉言善行や奇事異聞、さては見聞談等、その他何くれとなく書き集めた興味本位の漫錄である。中には怪談鬼話も交つてゐる。佐竹永海筆の挿繪が興を添へてゐる。嘉永三年關弘道（雪江）の序がある。　〔和田〕

貞德（ていとく）　俳人・和學者　【姓名】松永氏。幼名、勝熊（かつくま）。【號】逍遙軒・長頭丸・延陀丸・保童坊・松友・明心居士（居士號）。また五條の翁・花咲の翁とも云はれるが、これは晩年五條稻荷町の花咲の宿と稱せられる家に住んだからである。【生歿】元龜二年京に生れ、承應二年（一六五三）十一月十五日歿。享年八十三。〔辭世〕露の命きゆる衣の玉くしげふたゝびうけぬ御法ならなむ　〔墓所〕洛南上鳥羽實相寺。墓面に逍遙軒貞德居士とある。【家系】曾祖父入江九郎盛重は攝州高槻城主で、その先は駿州入江郡の住であつたといふ。祖父は入江五郎（九郎兵衞）政重、父は永種。永種が姓を松永と改めた。永種は幼にして聰穎、七歲の時東福寺の喝食となり、二十日にして法華經一部を讀み覺え、文殊喝食と稱せられた。併し後に還俗した。連歌を宗養（別項）に學び、紹巴（別項）とは詞友であり、安法法師等連歌の門人もあつた。又由己（ゆうこ）法橋とは相國寺仁如和尙の下で同學した親友であり、九條玖山公等の知遇も得てゐた。貞德の生れる時、「をのこ子の塵かき流すあくた川」といふ夢想の句を得、貞德が十二歲の時、玖山公から「源氏物語」の祕事を皆傳した時、永種が上京妙蓮寺でその竟宴を催し、玖山公の「花に猶道分けそへん行衞哉」を發句、勝熊の「春は霞にひかれぬる袖」を脇とする連歌があつた。松永彈正久秀の姉妹の誰かが政重の妻であるので、永種の改姓はそれに關聯するものらしく、又政重の姉妹の誰かが下冷泉爲豐の妻であるので、爲豐の子の爲純と永種とは從昆弟に當り、久秀の松永家及び下冷泉家（爲純の子は惺窩である）と貞德の松永家とはかゝる關係を持つてゐる。【學統】貞德自身その「戴恩記」に「師の數五十餘人」と云つてゐるが、これは所謂一字の師をも數へてである。特に師承の深い關係は、玖山公九條植通・玄旨細川幽齋から和學・和歌を學び、里村紹巴から連歌を學んだことである。この外、彼の擧げてゐる人に、中院通勝・菊亭晴季・飛鳥井雅綱・同雅敦・清水宗我・古田城勝・安法法師等がある。【閱歷】幼時から永種の庭訓を受けた譯であるが、天正十年十二歲の時玖山公から源氏の祕事を皆傳したなどから見ると、やはり父に似て早熟聰穎の人であつたらしい。かくて、玖山公に和學・和歌を學び、同公薨後（文祿三年）は主として幽齋に就き、幽齋の行く先々までも附いて歩いたりして學び、最も知遇を得た。又紹巴からは頗る愛せられ、月次の連歌會に連れられ、一かどある晴れの會には、必ず連衆に加へられ、執筆（しゅひつ）などもさせられたりした。その他、彼此の堂上家その他から和學・和歌・連歌を學んだので、廣く和學者たる風格を持つてゐるが、就中、貞門（別項）の俳諧の鼻祖としてより多く知られてゐる。即ち和學・和歌の研究家・註釋家でもあれば、歌人・狂歌作者でもあり、連歌作者・俳人でもあつたのである。家は、父の永種以來、三條衣の棚に住んでゐたが、正保三年（貞德七十六歲）五條稻荷町の花咲の宿へ移つた。彼が衣の棚の家で「徒然草」を講じてゐた時、その聽講者の一人の或る富豪が謝禮として花咲の地を提供したと云ふが、この地に稻荷社の跡があり、その神託によつてこの地が昔花咲と云つたらしい事を知り、地內に稻荷祠を建てて花咲の稻荷と云ひ、家をも花咲の宿と云ふに至つたのである、又大凡この頃かやゝ後かに、貞德は大佛殿の南の地に柿園（かきぞの）といふ別莊地を持つに至つた。これは歌道の御弟子の妙法院堯然法親王から賜はつたのであるが園內に法華經千部を刷つて納めた報恩藏や、人麿・定家・幽齋の忌日の和歌會の會所に當てた蘆の丸屋や、藏と丸屋とを繫ぐ吟花廊などを建てたのである。なほ年時は判然せぬが、貞德は晩年に眼病を煩ひ祈禱の和歌會が催されたりしてゐるが、眼病は平癒してゐる（遊逍集）。貞德の老後、失明を傳へる說は誤傳らしい。兎に角貞德は、老年に至るほど相當富裕な生活をし、幾人かの小姓をも使つてゐた。さて貞德は初めは和學・和歌・連歌等の方が主で、その俳諧上の活動は比較的後れてゐる。貞門の作に關する年時の知られる最も早い時が貞德の四十歲頃である。貞德五十九歲の寬永六

松永貞德（俳家大系圖所載）